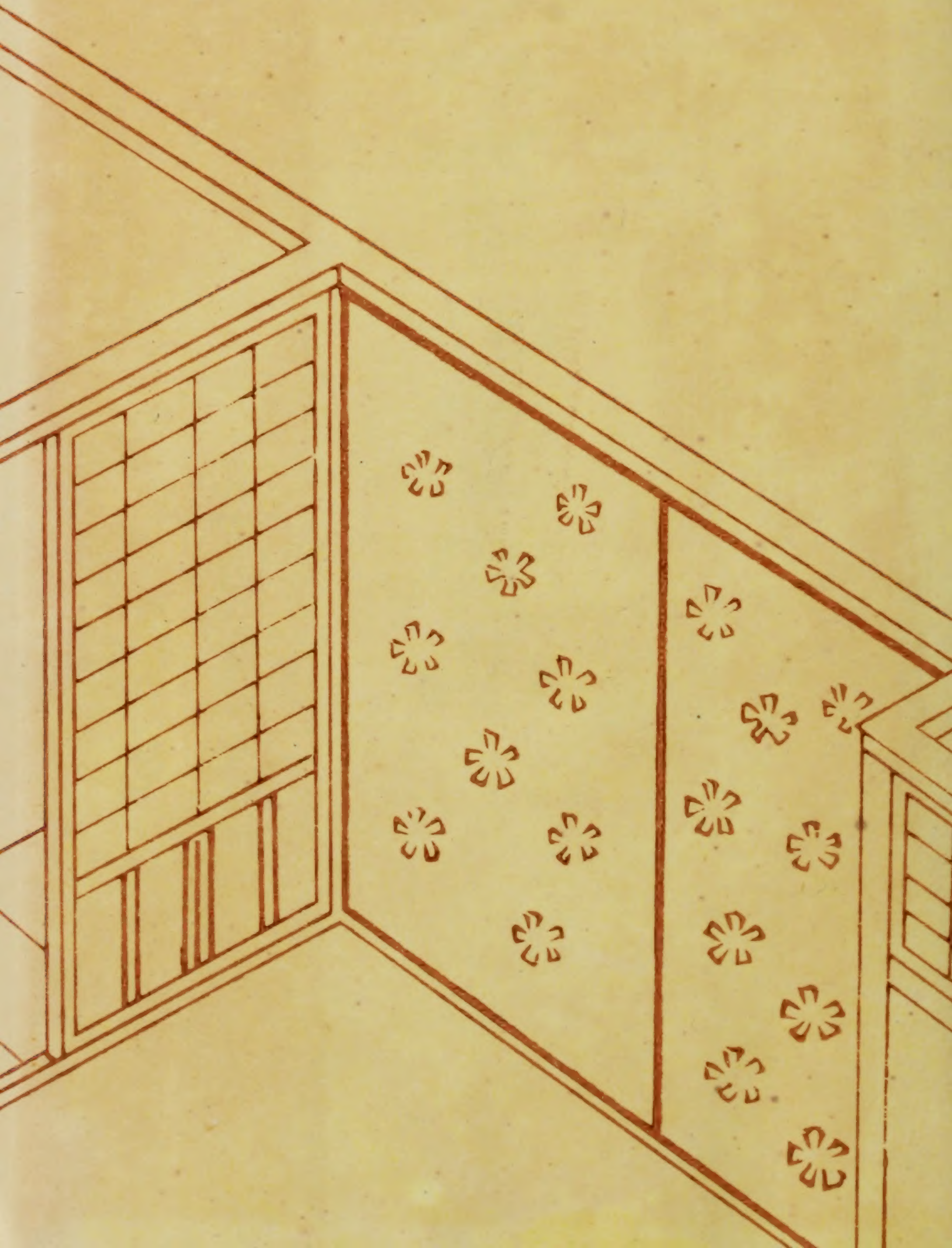




大南北全集

第十二巻

大南北全集第十二卷

文學博士坪内逍遙
渥美清太郎 共編

東京 春陽堂刊行

大南北全集　第十二卷目次

挿繪目次

挿繪解說

■本卷には、木版を挿入する筈であつたが、適當な錦繪が見當らなかつたので、次卷に讓る事とした。

■卷頭に入れた三枚續きの錦繪は、「東海道四谷怪談」の三幕目、隱亡堀の場の幕切れ、だんまり模樣の場である。どういふ譯か、「四谷怪談」の錦繪は、初演のものが少ない。この三枚續きは、菊五郎が三度目に演じた時のそれである。

■「御國入曾我中村」のうち、六浦飛石寺の二面對照の錦繪は初演のものである。實は眞中にもう一枚、八重梅の粂三郎がゐるのであるが、見當らなかつたのだ。同じく寺西閑心宅の場の一枚物で、閑心が毒をのんでゐる繪は初演のもの、また權八が鴨を料理してゐる方は、再演の折ので、俳優は市川小團次である。同じく三浦屋別莊の場も、同じく再演の折のである。權三は八代目團十郎。例の國芳の筆で、描き方が一風變つてゐる。

■「東海道四谷怪談」伊右衞門内の場の錦繪を、二枚對照して御覽を願ひたい。幸四郎の伊右衞門の方は、再演の際に發兌されたもので、三十郎の伊右衞門の方は、三度目の上演の時のものであるが、全く同じである。只、伊右衞門の顏が變り、三度目の方へ文句が入つてゐるだけの事で、外は寸分違はない。正直な昔の出版界にも、斯うした事もあつたのだ。即ち同じ木版へ、僅かに手を加へて、新らしいものとして賣出したのである。御參考のために、對照にして入れて置いた。

■「東海道四谷怪談」三角屋敷の場は三度目の所演のもの。蛇山の提灯拔けは、五度目の上演の舞臺である。

■「盟三五大切」の錦繪は見當らなかつたので、初演當時の櫓下番附を挿入して置いた。一番目は馬盥の光秀である。「御國入曾我中村」と「東海道四谷怪談」とは共に初演の繪本があつたので、全部凸版にして、その頁々へ挿入して置いた。




尾上菊五郎

解說及年表

御國入會我中村

今日での菊五郎吉右衛門、一しきり前の鴈治郎仁左衛門、等の如く、いつの時代の劇界でも、人氣と實力に富んだ、そしてそれが双方互角であるといふ二人の俳優は居たものである。大南北の時代にしても、文化の初めには、江戸で三世中村歌右衛門と三世坂東三津五郎、大阪で同じく三世中村歌右衛門と嵐吉三郎、いづれも鎬を削つて競爭したものである。少し下つて、文化の末から文政へかけての江戸劇壇は、七世市川團十郎と三世尾上菊五郎との壇場であつた。事實に於て、菊五郎の方が年長でもあり、實力も最初は優れてゐたらしいが、團十郎は何にしても江戸の根生ひ、江戸役者の元締めと尊敬される家柄だけに最屓が強く、人氣は伯仲の間にあつた。それだけに、この兩優はよく喧嘩をした。喧嘩をして暫く別れてゐては、また興行政策から合同した。合同した時は芝居の附け目である。盛んに宣傳をして、和解を意味する面白い新狂言を上場して、人氣を煽り立てゝ大入りを占めたのである。第八卷に收錄した「蝶鵆山崎踊」も同じ意味での合同劇であるが、この「御國入會我中村」も、同じく團十郎菊五郎の和解狂言

である。文政八年一月、中村座に上場したもので、南北が七十一歳の時の作である。團十郎を笹野權三、菊五郎を白井權八の双子の兄弟にして、全幕中二人に喧嘩をさせて、見物をハラ〳〵思はせて置いて、最後に和解させるといふ行き方である。されば、この二役とも、互ひに甲乙なきやう、均當に儲かるやう書いてある。そして菊五郎には半七、團十郎には長九郎の二役を兼ねさせ、この方でしんみりした實事の技藝を發揮させてゐる。そして、春狂言だけに、吉例通り曾我の世界とし、兩優に曾我兄弟を勤めさせてゐる。祐經は鼻の高い幸四郎が老巧振りを見せたのである。「近年こんな顏揃ひの對面があらうか」と南北もセリフの中で自慢をしてゐる位である。この狂言は見事に當つた。その年の春芝居は、中村座が人氣の獨り占めをしてしまつたのであつた。

尤も大當りに當つたのは、俳優や脚本の爲ばかりでもなく、一つは南北の宣傳が巧みだからでもあつた。前年の十二月十七日以降、歳の市の人出を見込んで、商家の引札のやうなチラシを拵へて、通行の人々に配るといふ、當時としては記錄破りの事をやつた。一枚摺りの紙の中央には、白裝束の兄弟が、仇を討つ繪が描いてあつて、左の記事が添へてあつた。

建久年中双子の兄弟養父敵討の次第

さても養安の頃、河津の三郎京在番の砌り、風折といへる白拍子になじみ、女懐姙して男子二人の子を産む、即ち京の次郎、一人を三郎と呼ぶ、世の人の口の端にかゝるを嘆き、双子二人を他家へ養子にやりけるに、一人は鎌倉の武士、本庄助太夫へ遣はし、成人の後は笹野權三と呼び、今一人は、白井兵左衛門といへる、同家中へ遣はし、いま白井權八と呼ぶ、然るに兩家の養父侫姦の者にして、殿を失はんと計るを、双子の兄弟これを知つて、兩家の親々を兄弟にて討ち、お家の禍ひを除くと雖も、養父を討たれ兩人の者、義に依つて敵同士となる、然るにその頃、十內といへる侍ひ、心よからぬ者にて、助太夫兵左衛門へ惡事を勸めしもこの十內なり、その上双子の母、風折を討つて立退き、養父二人も、金毘羅大權現の利生によつて、存命にありければ、双子の兄弟、敵討の疑念は晴れたれども、母の敵十內、東海道藤澤の間、四ツ谷村に、石井屋といへる家に、萱切りとなりゐたりしを、兄弟の者、足袋の職人となつて、敵十內を首尾よく討つ事、まつた金毘羅の御利益、曾我兄弟にも劣らぬ權三權八が、孝心の敵討、殊には神の告げ、御利益の程有り難く、古今珍らしき象頭山御利生敵討の次第評判々々。

これが來春の中村座の狂言だと、斷つてない所が巧みなものである。この引札を讀んだ人々が、中村座の狂言發表を見て初めて合點すれば、その頃の江戸人、どうしても見にゆかねば承知しなかつたであ

らう。續歌舞伎年代記にも「南北の新手殊にこの類なり、或ひは顔見世の趣向を、九月の節納めに、富に突いて見物に見せ、春狂言の大旨を吹聴する類、毎年この如く、その妙手奇作数ふるに暇あらず」と褒めてゐる。

初演の役割は左の通りであつた。

曾我十郎祐成。白井權八後ニ傾城小紫。野晒し半七（三ヤク尾上菊五郎）本庄下部、助市後ニ絹屋彌市。曾我の團三郎（二ヤク三桝源之助）曾我の禪司坊。二葉屋扇吉（二ヤク尾上松助）八幡三郎行氏。平左衛門女房、おかや（二ヤク市川男女藏）河津後家、風折。三浦屋女房、お賤（二ヤク吾妻藤藏）白井兵左衛門。丑島宅兵衛（二ヤク市川宗三郎）梶原源太景季。今市屋善右衛門（二ヤク大谷門藏）鬼王新左衛門。判人、さぼてん善六（二ヤク坂東善次）赤羽根伴作。若い者、甚兵衛（二ヤク市川染五郎）大江志摩五郎。櫻川善孝（二ヤク坂東好藏）月小夜。岩淵久内（二ヤク松本小次郎）腰元、お勝。女髮結ひ、お六（二ヤク市川おの江）美濃屋お倉（尾上蟹十郎）團三郎女房、十六夜。權八妹、お才後ニ三浦屋勝山（二ヤク尾上菊次郎）大藤内後ニ近江小藤太成家。本庄助太夫。茜足袋屋平左衛門（三ヤク澤村しやばく）禿、千鳥實ハ御所五郎丸冬保（市川高麗藏）助太夫娘、八重梅。三日月お小夜後ニ美濃屋三勝。茜足袋屋女房、お園。和田の舞鶴（四ヤク岩井粂三郎）工藤左衛門祐經。幡隨長兵衛。非人、狩野の仁助實ハ有竹丹助後ニ唐犬權兵衛。赤澤十内後ニ寺西閑心假名伊豆次郎左衛門祐兼（四ヤク松本幸四郎）曾我五郎時宗。笹野權三。

茜足袋の長九郎（三ヤク市川團十郎）小林の朝比奈。中の郷のぼろ貰ひ、助八（二ヤク中村傳九郎）

二度目の所演は、嘉永二年一月の河原崎座で、この時は八代目團十郎と小團次とを、この二役に振り當てた。名題は「初元結曾我鏡臺」で、初演通りへ曾我兄弟の件を少しく増補して演じた。役割は

權八（市川小團次）お才。お賤（二ヤク市川新車）團三郎。助市（二ヤク中村芝雀）宅兵衞。久内（關歌助）仁助。十内。長兵衞。長九郎（四ヤク坂東彦三郎）お勝。おかや（二ヤク市川團之助）兵左衞門。助八（二ヤク淺尾爲十郎）助太夫。善右衞門。平左衞門（三ヤク大谷友右衞門）八重梅。三勝。お園（三ヤク尾上菊次郎）權三。牛七（二ヤク八世市川團十郎）

三度目の上演は、文久三年一月の中村座で、名題は「寶九字曙曾我」といつた。この時は、中洲の三勝殺しまでしか演じなかつたらしい。

權三。牛七（二ヤク河原崎權十郎）お才。お賤（二ヤク市川新車）助市。團三郎（二ヤク市川八百藏）お倉（中村相藏）兵左衞門（市川米十郎）宅兵衞（中村雁八）善六（嵐冠五郎）善右衞門（中村鯱太郎）長兵衞、十内（二ヤク關二十郎）助太夫。助八。仁助（三ヤク中村鶴藏）八重梅。三勝（二ヤク澤村田之助）權八（坂東彦三郎）

明治になつてから、八年十月の中島座に「蝶衢孖復讐」といふ名題で演じたのが最初であつた。以後小劇場で演じた事はあり、また關西地方の舞臺にも上つたが、詳細は不明である。この中島座の役割

は左の通りであつた。
權三（中村重藏）權八（山崎國三郎）長兵衛。仁助（ニヤク吉川路島）八重梅（澤村巴枝）助市（尾上半藏）お才（嵐德之丞）十内（坂東太郎）

東海道四谷怪談

文政八年五月、中村座は『初冠曾我皐月富士根』といふ名題で、夜討曾我の狂言を演じて大入りを占めた。この興行が終ると、中村座の櫓には女の生首が振り袖を咬へてゐる繪の大きな凧が掲げられた。前のチラシ同樣南北獨得の宣傳である。江戸人はこれに依つて、夏狂言に新作の怪談劇が演じられるのを知つて、みな樂しみに待つてゐた。その年、中村座には怪談狂言の家元、尾上菊五郎がゐたからである。やがて七月のはじめに配られた櫓下番附は、いつもと變り、二枚あつて、初日後日と分れてゐた。二番目の怪談狂言は、初日の部に、戸板に打ちつけられた男の亡靈を描いてあつた。後日の部に、女の幽靈に引上げられる美女を描いてあつた。芝居好きの江戸の民衆は、この繪を見ては胸を躍らさざるを得ない。老功の四世鶴屋南北、怪談狂言の名作者が、どんな面白い、そして凄い狂言を創り出すか、お化の家元菊五郎が、どんなに怖い幽靈振りを見せるのだらうか。——評判は評判を産んで、芝居の開場

は待ちに待たれた。番附のカタリには斯う書いてあつた。

御最屓のお好みに任せ、古き世界の民谷何某、妻のお岩は子の年度、妹の袖が祝言の、銚子にまとふ嫉妬の蛇、それも巳歳の男の縁切り、しかも媒人に直助が、三下り半の去り狀は、女の筆のいろは假名、今も專ら流行の、出雲が作へ不躾にも、お指圖ゆゑに書き添へし、新狂言は歌舞伎の　。

番附のカタリは、狂言の內容を暗示的に說明するものであるが、このカタリでは筋がまるで違つてゐる。昔は、宣傳のために早く櫓下番附を出してしまふので、その頃にはまだ脚本が出來上がらぬ事が多い。この時もそんな譯だつたのであらう。が兎に角物凄さうな書きぶりで、興味をそゝるには十分である。

番附には左の通りな口上書が附いてゐた。

御町中樣益御機嫌能被遊御座恐悅至極に奉存候而私芝居之儀打續大入大繁昌仕候段寔加至極難有仕合に奉存候依之盆狂言之儀種々及相談候所尾上菊五郎儀兼々天滿宮信仰にて此度心願之旨有之悴松助同道仕筑紫太宰府へ參詣仕度由暫御當地をもはなれ候儀故御暇乞之口上申上度段相賴候に付打寄相談仕候所先年私座にて元祖尾上菊五郎太宰府へ參詣之砌御名殘と仕忠臣藏の狂言由良之助とならせ之役儀相勤御評判に預り候先例も候へば右之役儀相勤口上申上候樣申聞候所菊五郎申候は右大役

にて不及儀と辭退仕候故團十郎始め粂三郎源之助幸四郎其外之者共端役をも不厭相勤遣ろ可申段深切に申呉候に付打寄相勤め漸々得心仕右の役相勤申候右に付菊五郎兼而工夫仕置候四ッ谷宿お岩物語男女の怪談新狂言六幕御座候間右狂言三幕宛分け忠臣藏大序より六段目迄を初日の一番目と仕第二番目世話物相添且又後日七段目より敵討迄怪談三幕右一番目二番目二日がはり御名殘狂言と仕り總座中罷出奉入御覽候尤も大星之儀は名人共仕置候大役にて候へども元祖菊五郎と被思召賑々敷御出の程偏奉希上候

座元　中村　勘三郎

斯うして「東海道四谷怪談」（初演の番附にはあづま海道とある）が發表された。一狂言を前後二日に分けて演出するといふのも、特異な新例で、この時が最初である。初日は七月二十七日。

この興行は割れ返るやうな大當りだつた。菊五郎のお名殘といふ所爲もあるが、大部分は「四谷怪談」が利いたのである「お岩樣」の狂言は、菊五郎の當り役になつた。菊五郎は生涯にこの狂言を九度も勤めた。「四谷怪談」は尾上家の藝といふ鑑定書が附られた。そして百餘年經つた今日でも、猶歌舞伎座に上演されて大入りを占めてゐるのである。

これ程有名な「四谷怪談」は、どういふ順序にして作られたか？

お岩の實錄だといふ傳說は殘つてゐる。これに據ると、寬文の頃、四谷左門町に住んでゐた田宮又左衞門といふ、お先手組下同心の娘お岩が、嫉妬の爲に身を果し、その怨靈が夫に仇をしたといふのである。事實の眞僞は擱いて、傳說は慥かに有つたのだらうと思ふ。何かの理由で當時喧傳されたのを、南北が材料に使つたのであらうと思ふ。なぜかといへば、お岩とか伊右衞門とかいふ役名は、この狂言以前には見當らない。何か新らしい筋を仕組むとか、當時の三面記事を脚色するとかいふ場合には、南北は必ず「書替へ狂言」といふ形式を採るのである。怪談の思ひつきなれば、差詰め「累」の世界なぞを借りて來るのであるが、それで無くて、新らしい役名が現はれた所を見ると、慥かに傳說を脚色して、しかもお岩とか伊右衞門とかいふ傳說通りの役名を使つた方が、效果があると信じてやつた仕事に違ひない。

それでも、全然新らしい世界で押通すのは南北も不安であつたと見えて、背景には、この時の一番目に因んで、見物には馴染の多い忠臣藏の世界を使ふ事にした。そこでワキ役に、佐藤與茂七、直助權兵衞、小汐田又之丞、近藤源四郎などといふ、忠臣藏に關係のある役名が現出したのである。今の目で見れば、なんの忠臣藏と結びつけずともと思はれるが、斯ういつた形式は、いはゞ當時の劇作法の內規であつて、最も觀客に歡迎され、且安全な方法であつたのである。

佐藤與茂七といふのは、赤穗義士の矢頭衞門七の事で、義士銘々傳劇にはいつも色男として扱はれて

ゐる。それをこの狂言へ引張つて來て、立役の代表者に据ゑたのである。與茂七が序幕で小間物屋になつてゐるのは、大阪狂言の「忠臣連理廼鉢植」の形式を借りたものである。

實惡に使つた直助權兵衞は、赤穗義士の聯盟から脱走した小山田庄左衞門の、下男權兵衞か、庄左衞門を殺して金を奪ひ、のち捕へられて磔刑に處せられた、その事實を脚色したのである。序幕で權兵衞が、與茂七と間違へて、舊主たる奥田庄三郎を殺してしまふ筋は、その實話を應用したので、奥田庄三郎といふのは小山田庄左衞門の事である。この權兵衞が、最初、藤八五文の藥賣りになつてゐるのは、初演當時江戶市中を行商した藥賣りの風俗を當込んだので、また後に鰻搔きになるのは、その頃砂村の鰻搔きが、川の中から櫛をかきあげて持つて歸つたところが、その夜病氣になつたといふ巷說を、筋にまで借りて來たのである。

この外に、小佛小平といふ役がある。これは、お岩の傳說ともまた忠臣藏とも關係はない、小幡小平次を取込んだのである。小平次は講談などに據ると大變古いが、普通は、菊五郎の父、尾上松助の弟子だといふ事になつてゐる。松助の弟子の小幡小平次は、奥州安積郡の生れであるが、舞臺の小佛小平と同じやうに、ひどく陰氣な質で、幽靈といふ仇名を附けられてゐた。間もなく旅役者に落ちて奥州へ歸ると、その女房が密夫を語らつて小平次を殺してしまつたといふ事が、菊五郎作の草双紙「尾上松緑百

物語」に出てゐる。この小平次の事を題材にしたかどうかは知らぬが、山東京傳は、享和三年に出版した「復讐奇談安積沼」といふ讀本の中に、小幡小平次の事を仕組んでゐる。この讀本が行はれた爲か、また小平次の事實を聞いた爲か、どちらかは知らぬが、大南北は文化五年六月の市村座に「彩入御伽草」(第一巻に收錄)といふ名題で、小平次の事を脚色し、初代尾上松助が小平次に扮して成功した。この小平次を再び「四谷怪談」へ應用したのである。「彩入御伽草」の小平次は侍ひの出で、百姓に姿を扮してゐるといふ筋。役名なぞから考へて見ても、これはどうしても「安積沼」に緣が近いらしく、また「四谷怪談」の小平は、役柄から云つても、幽靈と仇名をされる「百物語」の小平次そのまゝである。「四谷怪談」の初演と「百物語」の出版とが同じ文政八年であるのも、兩者の關係が深い證據である。

これ等の材料を纏めて、南北が「東海道四谷怪談」を作るに就いては、その以前自分が書いた二三の脚本の、一部をソックリ流用したのである。流用といふよりも、寧ろ「四谷怪談」の原本だといつてもいゝのは、第四巻に收錄した「謎帶一寸德兵衞」である。これは文化八年七月の市村座へ、南北が書き卸したもので、種は當時の三面記事なので、例の流儀によつて「夏祭」の世界に書替へてある。大島團七といふ御家人の惡黨が、玉島兵太夫といふ侍ひを殺しておきながら、仇討の助太刀すると僞つて、兵太夫の娘のお梶を女房にし、後にお梶まで殺してしまふといふ筋である。「四谷怪談」も、ソックリこの

筋を辿つてゐるではないか。即ち筋の根本である、伊右衛門が四谷左門を殺しておきながらその娘のお岩を女房にし、後にこれを憤死させてしまふといふのは、團七お梶の筋と、只手を下ろして殺すと殺さぬだけの相違である。斯うした筋ばかりでなく、「四谷怪談」の特色になつてゐる御家人が傘貼りを内職にしてゐる當時の下層武家階級のスケッチや、病人の床から蚊帳を奪つてゆく慘酷な仕打ちやは、いづれも「一寸德兵衛」で既に使つてゐた技巧である。秋山長兵衛と關口官藏に似た浪人の友達も「一寸德兵衛」の方へ出てくる。さうして、大島團七と民谷伊右衛門とは、全然同一の性格を持つた惡黨である。

「四谷怪談」の初演から三年前、即ち文政六年の六月、木挽町の森田座へ、南北は「法懸松成田利劍」を書き卸した。この頃折々出る清元の「累」は、この狂言の一部であるが、これも「四谷怪談」の一部の粉本となつてゐる。主人公の累は、三代目尾上菊五郎、與右衛門は七代目團十郎、丁度「四谷怪談」と同じ役割である。この狂言の與右衛門は、累の父親を殺しておきながら、累と通じ、父親の怨念で累の顔が醜く變ると、これを木下川堤で殺してしまふ。累の亡靈は、與右衛門が嫁をもらふ場へ現はれて、與右衛門と嫁とを散々に苦しめる、といふ筋である。與右衛門は、性格も仕事も伊右衛門と殆ど同じで、また女主人公の相好が變るといふ點も酷似してゐる。與右衛門内の場で、累の亡靈が佛壇から現はれ、百萬遍の念佛に恐れて、行きつ戻りつする所などは「四谷怪談」の蛇山庵室と少しも違はない。

南北は、斯うして、從來の自作脚本二篇を混じ合せ、これへ小平の件と、直助權兵衞の因果譚とを加へて「東海道四谷怪談」を完成したのである。

與右衞門の事が出たから次手に云つて置くが、「四谷怪談」の初演より二年後、文政十年三月の市村座に、二代目櫻田治助が「萬歳阿國歌舞伎」といふ伊達騷動の狂言を書いてゐるが、この中に、伊右衞門役者の七代目市川團十郎が、田宮與右衞門といふ役をやつてゐる。自分の出世の妨げになるといふので、云ひ交した遊女高尾を殺してしまふ。跡で高尾の亡靈が出るといつた筋で、與右衞門は伊右衞門と同じ役所を行つてゐる。これにも田宮といふ苗字を被らせたのを見ても、何かの理由でお岩の傳説が、當時よほど噴傳されてゐたのだと想像される。「四谷怪談」の初演後ではあるが、まだ他の狂言へ影響を及ぼす程に行はれてゐたのではないから「阿國歌舞伎」の田宮與右衞門は、慥かにお岩の傳説から「四谷怪談」に併行して脚色された役なのである。併しこの方の與右衞門は一回ぎりで絶えてしまつた。只その狂言の一部「毒茶の丹助」だけが殘つてゐる。

「東海道四谷怪談」の初演脚本は、左の通りの場割になつてゐる。

序　幕。　淺草觀世音額堂の場
　　　　　按摩宅悅住居の場

淺草裏田圃の場

二幕目。　雜司ヶ谷四谷町の場

伊藤喜兵衛屋敷の場

三幕目。　砂村隱亡堀の場

（以上初日）

四幕目。　深川三角屋敷の場

寺町孫兵衛內の場

五幕目。　伊右衛門夢の場

蛇山庵室の場

（以上後日）

後日の折には、この五幕目のあとへ、忠臣藏討入の場を一幕附けて完備させたのである。夏狂言であるのに、庵室の場を雪降りにしたのは、討入と季節を合さねば、筋に無理が出來るからである。「忠臣藏」と「四谷怪談」を二日替りに演じたのも、長いばかりでなく、筋の連絡を考慮した結果である。

役割は左の通りであつた。

民谷伊右衛門（七世市川團十郎）小汐田又之丞（三桝源之助）伊東喜兵衛、伊右衛門母、お熊（二ャク市川宗三郎）按摩、宅悦。近藤源四郎（二ャク大谷門藏）奥田庄三郎（尾上松助）お弓娘、お梅（岩井春次）佛孫兵衛（澤村しやばく）小平女房、お花（尾上菊次郎）喜兵衛娘、お弓（吾妻藤藏）乳母、お槇（市川おの江）直助權兵衛（松本幸四郎）與茂七女房、お袖（岩井粂三郎）伊右衛門女房、お岩。小佛小平。佐藤與茂七（三ャク尾上菊五郎）赤垣傳藏（中村傳九郎）

菊五郎は、この「四谷怪談」を打あげてから、更に河原崎座でお名殘狂言を勤め、それから京阪へ上り、翌文政九年四月の大阪角座では、「いろは假名四谷怪談」といふ名題で、この狂言を出して、大阪人を驚かした。尤も、江戸のまゝの脚本では、大阪の人に向かないので、角座の作者が、すつかり上方式に改作した。それが根本となつて、今に大阪式の脚本が傳はつてゐる。

江戸へ歸つて、文政十年九月、中村座で、又ぞろこの狂言を出した。わづか三年目に、同一の狂言を繰返して上演するといふ事は、この時代には滅多に無かつた事である。餘程菊五郎に自信があつたと見える。この時は、全五幕を通して、初演通り演じたのである。名題は同じく「東海道四谷怪談」で、役割は左の通りであつた。

伊右衛門、直助（二ャク松本幸四郎）又之丞（中山富三郎）喜兵衛、お熊（大谷紋治）お梅、お花（二ャク中村大

吉）お袖（岩井半四郎）宅悦（大谷門蔵）庄三郎、傳藏（二ヤク尾上松助）お岩、小平、與茂七（三ヤク尾上菊五郎）で、

この時は、田宮家から故障が出たとかで、伊右衛門の役名は神谷仁右衛門と改まつた。そして、役者無人のため、幸四郎が直助權兵衛をも兼勤したので、二役の顔合せの場は、鰻掻きん助吉といふ役を作つて、直助の代りをさせた。これは幸四郎の子の市川高麗藏が勤めた。

江戸での三度目は、天保二年八月の市村座で、名題は「東海道四谷怪談」であつた。この時は、蛇山庵室の場は雪をやめて盂蘭盆の季節とし、今までお岩の亡靈は、流れ灌頂から船幽靈の姿で出たのを改めて、盆提灯から現はれる事にした。尤も、盆提灯から出るといふ事は、この時が初めてゞはなく、文化十二年七月、河原崎座で、「慙紅葉汗顔見勢」といふ伊達の狂言を出したとき、與右衛門内の場へ累の亡靈が現はれる趣向に、この盆提灯を既に使つてゐたのである。また伊右衛門の夢の場で、南瓜に目鼻を附くのも、この「汗顔見勢」の型を取つたのである。またこの時は、蛇山庵室の次へ「大川端の場」の附けて愛で仇を討つ筋に直し、猶序幕に「戸塚境木」の場を加へて、大星由良之助の東下りを見せた。

お岩、小平、與茂七（三ヤク尾上菊五郎）伊右衛門（關三十郎）お弓（小佐川常世）お花（尾上梅之丞）お袖（坂東かてう）宅悦（坂東傳三郎）喜兵衛、お熊（二ヤク山本京四郎）お梅（岩井多喜惠）庄三郎、傳藏（二ヤク尾上松助）お袖（尾上榮三郎）直助（片岡市藏）又之丞（市村羽左衛門）

次は天保五年六月の中村座で、名題は前に同じ。この時は、若手の市川八百藏（後の關三十郎）がお岩を勤め、伊右衛門夢の場へは「二世の縁願色絲」といふ名題で、初めて富本の淨瑠璃を使つた。これまでは伊右衛門とお岩の色模様も、長唄の獨吟で濟ましてゐたのである。

お岩　小平、與茂七（三ヤク市川八百藏）お花（中村芝鶴）宅悦（市川染五郎）伊右衛門、又之丞（二ヤク市川高麗藏）お梅（岩井粂次郎）お弓（尾上梅之丞）お袖（坂東玉三郎）直助（松本幸四郎）

尤もこの以前、市川八百藏は、文政十三年の六月、中村座で、變態の四谷怪談を勤めた事があつた。「南備前來妙法經」といふ妙な名題で、世界は日蓮記であるが、中に四ツ谷宿のお岩が、嫉妬で死ぬ件があり、また小幡小平次が惡人に殺され、この二つの死骸が流れ寄る、隱亡堀じみた場面もあり、樋の口から出るのは與茂七の代りに、日親太郎といふ役名であつた。この三役を八百藏が勤め、伊右衛門は四條金吾といふ名で、女形の中村歌六が演つてゐた。

次は天保七年七月の森田座で、名題は矢張り「東海道四谷怪談」菊五郎は四度目である。

お岩、小平、與茂七（三ヤク尾上菊五郎）傳藏（尾上松助）お花（尾上菊次郎）又之丞（坂東三津五郎）お弓（關三之丞）お熊（大谷宇呂平）宅悦、源四郎（二ヤク尾上菊四郎）お梅（岩井松之助）權兵衛（松本幸四郎）お袖（岩井半四郎）直助、伊右衛門（二ヤク市川海老藏）

この時は直助役者の幸四郎が、既に老衰してしまつたので、役を權兵衞と二つ割りにして、大部分は海老藏が勤め、權兵衞は淺草田圃と隱亡堀だけへ出るといふ、妙な事をやつたのである。

弘化元年七月の中村座では、「昔尾岩怪談」で、菊五郎が五度目の所演。大切へ義士の討入を附けた。夢の場は「菊嬉閨睦言」といふ名題で、初めて清元を地に使つた。

お岩、小平、與茂七（三ヤク尾上菊五郎）喜兵衞、又之丞（二ヤク市川九藏）左門、孫兵衞（二ヤク嵐猪三郎）お弓（岩井松之助）宅悦（中山現十郎）直助（六世松本幸四郎）お花（岩井杜若）お槇（岩井辰之助）庄三郎、傳藏（二ヤク尾上松助）お袖（岩井半四郎）伊右衞門（八世市川團十郎）

嘉永元年九月の市村座では「當三升四谷聞書」で、小團次がお岩を勤めた。

お岩、小平、與茂七（三ヤク市川小團次）又之丞、左門（二ヤク澤村源之助）お弓（小佐川常世）宅悦（關歌助）直助（坂東三津五郎）お袖（坂東しうか）伊右衞門（市川團十郎）

嘉永三年六月の市村座では「增補四谷怪談」といふので、關三十郎の獨り舞臺、四谷怪談の間へ義士銘々傳を入れてやつてゐる。これでは三十郎が、伊右衞門、お岩、小平、直助、お槇、孫兵衞、の六役を早變りで演じた。三役早替りを一層擴張した譯だ。どういふ方法にしてこの六役を替つたか、脚本が無いので解らないが、定めて代役澤山の吹替へ澤山で、無理な仕事をやつたのであらう。その他の役割は、

お弓（嵐小六）宅悦（中村翫太郎）喜兵衞（中村翫右衞門）與茂七（大谷友松）お梅（市川りとう）お袖（藤川花友）

嘉永五年五月、河原崎座では「東海道四谷怪談」で、三世尾上菊五郎三回忌追善狂言として出した。伊右衞門、直助（ニヤク市川海老藏）左門（關三十郎）小平（尾上松助）お弓、お花（ニヤク市川團之助）庄三郎、又之丞（ニヤク尾上新七）喜兵衞（市川男女藏）お槇（尾上菊太郎）お梅（坂東佳調）宅悦（淺尾奥山）お岩、お袖（ニヤク尾上梅幸）與茂七（澤村長十郎）

菊五郎の追善といふので、海老藏は伊右衞門と直助の二役を勤め、菊五郎の養子梅幸は女形だからお岩にお袖、菊五郎の實子松助には小平、座頭の長十郎に與茂七を振つたのである。松助は、菊五郎がお岩の時は、いつも庄三郎に傳藏ときまつてゐたが、この人は元來大根役者で、菊五郎生前には親の威光で役も附いたが、死後は全く顧られなくなつてゐた。それが、追善といふので小平を振られた。本來なら三役兼ねるべきだが、小平だけ割られたのは、可成り侮辱された譯である。それに發奮した結果かどうかは知らぬが、この小平は非常な成功で、これなら松助も親父の衣鉢を繼げるといふ評判が立つた。評判が立つと間もなく、松助は死んでしまつた。森田勘彌は狂歌を手向けた。

小佛の噂のよきが峠にて役者になりし甲斐ぞありける。

文久元年七月、中村座の「東海道四谷怪談」では、

お岩、小平、與茂七（三ヤク坂東彦三郎）又之丞、庄三郎（二ヤク片岡我當）お梅（坂東玉三郎）喜兵衛、お熊（二ヤク坂東村右衛門）宅悦（大谷徳次）直助（關三十郎）お弓、お花（二ヤク市川團之助）お袖（岩井粂三郎）伊右衛門（片岡仁左衛門）

夢の場へは「勝思螢夜言」といふ常磐津を使ひ、船頭姿で、小平の亡靈まで出して、大分所作事化させてゐた。

明治五年七月の中村座「於岩稻荷瑞玉櫛」で、五代目菊五郎は初役でお岩を勤めた。

お岩、小平、與茂七（三ヤク尾上菊五郎）直助（中村仲藏）お梅、お花（二ヤク岩井紫若）宅悦（中村翫太郎）左門、喜兵衛、お熊（三ヤク中村仲太郎）お弓（坂東喜助）お袖（坂東三津五郎）伊右衛門（中村芝翫）

明治十七年十月の市村座では「形見草四谷怪談」菊五郎が二度目のお岩である。これまでは所演の度、必ず脚本通り全部を演じてゐたが、この時は時間の都合で、初めて省略法を行つた。即ち序幕を全然カットして、髪梳から始まり、夢の場を拔いてしまつたのである。

お岩、小平、與茂七（三ヤク尾上菊五郎）直助（市川九藏）伊右衛門（片岡我童）喜兵衛、お熊（二ヤク關三十郎）お梅、お袖（二ヤク岩井松之助）お槇（尾上登美松）宅悦（尾上松助）お弓（河原崎國太郎）

明治二十九年七月の歌舞伎座では「形見草四谷怪談」菊五郎が三度目のお岩である。この時は三世河竹新七が脚本に手を入れ、菊五郎の役を大分樂にした。

お岩、小平・直助（三ヤク尾上菊五郎）伊右衛門（市川八百藏）與茂七（尾上菊之助）宅悅（尾上松助）喜兵衛（片岡市藏）お袖（尾上榮三郎）お梅（尾上菊次）お槇、お花（二ヤク尾上菊三郎）お弓、又之丞（二ヤク中村歌仙）

明治四十二年十月の東京座では「形見草四谷怪談」尾上梅幸初役のお岩で、髪梳、隱亡堀、蛇山の、三幕を出した。

お岩、小平（二ヤク尾上梅幸）與茂七（市村羽左衛門）直助（市川團藏）伊右衛門（市川高麗藏）喜兵衛、お熊（二ヤク尾上蟹十郎）お弓（市川紅若）お梅（市川九藏）宅悅（尾上松助）

大正五年六月の帝國劇場「形見草四谷怪談」では、前の三幕の外に、夢の場を長唄の地で添へた。

お岩、小平、與茂七（三ヤク尾上梅幸）伊右衛門（松本幸四郎）宅悅（尾上松助）直助（市川中車）お梅（市川八百藏）お槇（澤村宗之助）

大正十二年五月の市村座「形見草四谷怪談」では、以上の三幕の外に、珍らしく三角屋敷の場を出した。

お岩、小平（二ヤク尾上梅幸）與茂七（大谷友右衛門）宅悅、直助（二ヤク尾上菊五郎）お袖（市川男女藏）お熊（尾上菊三郎）伊右衛門（市村羽左衛門）

大正十四年七月の歌舞伎座では、原作の「東海道四谷怪談」にして、松居松翁氏が舞臺監督をされ、すべて初演當時の古風さを髣髴させた。髪梳、隠亡堀、三角屋敷、蛇山、の四幕であつた。

お岩、小平（ニャク尾上梅幸）與茂七（市川壽美藏）直助（市川左團次）宅悦（片岡市藏）喜兵衛（市川寛次郎）

お袖（市川松蔦）お熊（市川左升）お槇（尾上梅三郎）お梅（中村芝鶴）お弓（坂東家太郎）伊右衛門（市村羽左衛門）

四谷怪談の初演が大當りだつたので、翌文政九年の春には、その正本へちよつと手を入れた草双紙合巻が、芝神明町の若狭屋から出版されてゐる。繪は全部似顔で、舞臺面なぞ初演の模様を窺ひ知る事が出來る。尾上梅幸著とあるが、南北あたりが代筆をしたものであらう。繪は一筆庵英泉である。

文久元年、彦三郎がお岩を演じた時も、合巻が發行され、それが明治五年に至つて、再版になつてゐる。

「雨夜鐘四谷雜談」といふ五編續きの草双紙が安政年間に出てゐる。お岩様の祟りとかで筆者が度々變り、默阿彌なぞも筆を執つてゐるが、芝居とは關係はない。お岩と小幡小平次とを兄弟にした小説である。

講談にも「お岩稻荷」があるが。これは芝居の流行に刺戟されて、後に出來たものであらう。それを種に勝諺藏が脚色した「四谷評判娘怪談」實錄お岩の七幕物の脚本は、初演は大阪らしいが、東京では明治二十五年九月の春木座で初めて上演してゐる。お岩が伊右衛門に欺かれて辻君に賣られ、夜鷹宿で責められる所から、仲間角助に事實を聞いて伊藤の屋敷へ駈けつけ、伊右衛門に殺されるまでが中心で、幽靈はアッサリしたものである。小平の代りとしては仲間伊助、直助の穴には風車の長兵衛といふ役がある。

義太夫にも四谷怪談があるが、いつ出來たものか解らない。

盟三五大切（かみかけてさんごたいせつ）

同じく文政八年の九月、中村座で上演した二番目狂言である。前興行の「四谷怪談」が大當りだつたので、その後日狂言といふ觸れこみであつたが、「近年になき面白き作なれども入りなく、十月十四日に舞ひ納めけり」と記錄にある。人氣者の菊五郎が居なくなつた所爲であらう。作としては上乘の出來である。

役割は左の通りであつた。

薩摩源五兵衞實ハ不破數右衞門、家主、くり廻しの彌助實ハ神谷下部土手平（ニヤク松本幸四郎）藝者、菊野（市女藤藏）富森助右衞門、德右衞門同心了心（ニヤク市川宗三郎）判人實ハごろつき五平（坂東善次）鷺ケ谷平右衞門（市川染五郎）里親、おくろ（鎌倉平九郎）ます〱坊主（成田屋銀兵衞）夜番、太郎七（中村千代飛助）嶽分、お弓（岩井粂次）廻し男、幸八（市川牛十郎）慾張り内びん虎藏（松本虎藏）出石宅兵衞（松本小次郎）若黨、六七八右衞門（三桝源之助）藝者、妲妃の小萬實ハ神谷召仕ひお六（岩井粂三郎）船頭、笹野屋三五郎實ハ了心倅千太郎（市川團十郎）船頭、お先の伊之助（中村傳九郎）

續歌舞伎年代記を見ると、斯う書いてある。

大切夜討の場、四十七人の義士、高野家來と入り亂れ、大タテあつて道具廻ると、向う一面海にて波幕、浮畫にて佃島等を遠く見せ、すべて高繩濱のけしき、前に苫をかけたる船あり、大薩摩にて苫を切つて落すと團十郎、義士のなり、大高源吾にて、師直の首を抱へる見得よく、せりふあつて上の方より義士大勢、提灯を持ち出で來り、見得よく居並び、まづ今日はこれぎりといふ趣向。

併し、本卷に收錄した脚本には、この場が缺けてゐる。挿入した櫓下番附には、それらしい役が見える。どちらが本當だか解らない。前狂言の「四谷怪談」のキリに、旣に忠臣藏の討入を見せてゐるのに。

またこの狂言で見せるといふのも可笑しい。恐らくは脚本にありながら、實演しなかつたのではなからうか。いづれにしても、本筋と連絡は無いのだから、その一幕が無くとも事は缺かぬ。

この狂言の二度目の上場は、天保十一年五月の河原崎座で、「騎飾忠臣鞍」と名題を置き、一番目に大星由良之助が、四幕も續けて夢を見るといふ趣向の狂言を立て、二番目にこの「五大力」を持込んだのであつたが、この時も好評でありながら不入りであつた。不思議な事には初演の時と同じく、この時も前興行に、海老藏と共演をしてゐた菊五郎が、去つたのであつた。前興行といふのは「勸進帳」の初演で、これは大入りであつたが、菊五郎がその興行ぎりで退座した跡狂言のこの「五大力」が、初演同樣不成功に終つたのは、よく／＼團十郎にとつては緣の無かつた狂言と見える。

この時の役割は左の通りであつた。

三五郎　市川九藏　助右衞門　市川團三郎　菊野（中村大吉）了心（大谷萬作）作右衞門（市川三次郎）源五兵衞。彌助（二ヤク市川海老藏）八右衞門（市の川市藏）伊之助（大谷音次郎）小萬（尾上榮三郎）

渥美清太郎識

御國入曾我中村

おくにいりそがなかむら

御國入曾我中村

第一番目

瀬戸明神の場
福壽湯の場

役名――白井權八。野晒し半七。曾我の團三郎。曾我の禪司坊。白井兵左衛門。梶原平次景高。鬼王新左衛門。赤羽根伴作。番場の忠太。流しの又六。いさみ、出羽吉。竹下孫八左衛門。安西彌七郎。稻毛の三郎。新貝荒次郎。湯屋番頭、三六。源賴家公。女髪結ひ、お六。お厩の德竹。大江志摩五郎。合ひ長家、おてふ。大江千鳥之助。月小夜婆ァ。腰元、お勝。北條四郎時政。團三郎女房、十六夜。本庄助太夫。三日月おさよ。笹野權三。小林朝比奈。

本舞臺、三間の間二重の石垣、正面石の玉垣、笹龍膽の紋付いたる幕を打ち、下の方梅の立ち樹、同じく吊り枝、この前に高札。下の方に駒寄せしたる三本杉、同じく高札を立て、よき所に三組みの番手桶。幕の中より二重の上に賴家公、立ち身。この脇に梶原平次景高、白髮の鬘。稻毛の三郎、出島鬘、安西彌七郎、新貝荒次郎、立て烏帽子、素袍。舞臺上の方にお厩の德竹、半素袍、掛け烏帽子、鷹な

据ゑ、北條四郎時政、烏帽子大紋。下の方に赤羽根伴作、麻上下、三寶に載せ、刃引きの刀を二腰置い、
神主ゐならび、すべて金澤瀨戸明神社内の體。通り神樂、天王立ちにて幕明く。

神主　恐れながら、賴家公へ申し上げまする。御父君の御代參として、今日の御參詣、供奉の方々にも御苦勞に存じまする。

景高　其方は當社の神職。今日の心配、大儀。

彌七　我が君には、彼れにお詞を下されませう。

賴家　父君のお指圖に等しく、萬事の饗應、滿足いたす。

伴作　實に栴檀は二葉より芳ばしくと、御幼少なれども、武將の血脈、末賴もしき鎌倉御所。戸ささぬ御代とは申せども、治世に亂を忘れずと

稻毛　油斷ならざる今この時。木曾、平家の殘黨ばら、やゝともすれば蜂起なすとの訴へ。

彌七　關東關西津々浦々、猶山深く分け入つて

荒次　逆賊餘類の詮議最中、あるが中にも平家に名を得し

德行　惡七兵衞景清、一門の仇を報はんと、君を窺ふえせ者あれば

伴作　もし山林に引籠り、蜂起の企てあらんかと、皐月下旬の御狩の催ふし。

時政　それゆゑにこそ、鎌倉の諸大名、御譜代、外様は申すに及ばず、陪臣に至るまで、武術手練の御内見。さるによつて、身不肖なれども、北條四郎時政も、出仕いたしてござりまする。

景高　この平次景高は、今日出仕の姓名、一々君へ言上なすワ。

ト硯箱を出し、帳へ附ける思ひ入れ。

彌七　その添へ役は安西の彌七郎

荒次　同じく新貝荒次郎

景高　皆々出仕

皆々　致してござる。

賴家　諸侯の面々、出仕大儀。あれに扣へしは何者なるぞ。

伴作　恐れながら、梶原樣へ申し上げまする。大江の廣元が二人の子息、今日武術の儀御内見を幸ひに賴家公にお目見得仰せ附けられ下さりませうなれば、有り難く存じ奉りまする。

景高　かねて聞き及ぶ二人の悴。折よく今日の御參籠。早速呼び出し、君にお目見得。

伴作　有り難う存じまする。

ト揚げ幕へ向ひ

お次に扣へし御主人方、急いで御前へ。

兩人　畏つてござりまする。

ト鼓の合ひ方になり、向うより大江千島之助、上下衣裳。あとより大江志摩五郎、同じく上下衣裳にて、三寶に太刀二振りを載せ、持つて出てくる。稻毛の三郎見て

稻毛　只今出仕の若者は。

千島　ハツ。いまだ部屋住みの私しゆゑ、お見知りないは御尤も。拙者儀は、因幡之助大江の廣元が悴同苗千島之助と申す者。

志摩　同じく二男志摩五郎。武術御内見を幸ひに

作作　景高樣へお願ひ申し、二人の主人を君へお目見得。斯く申す某は、廣元が家來、赤羽根作作と申す者。何卒主人もろともに

三人　お見知りおかれ下さりませう。

ト右の合ひ方にて兩人舞臺へ來る。

稻毛　流石は大家の悴ほどあつて、よくこそ召された。今日の立合ひには、木太刀、竹刀を用ふる筈を見れば二男の志摩五郎が、持參なしたは、眞劍の刀の樣子。

千島　御尤ものお尋ね。拙者家來に、本庄助太夫と申す者の倅、笹野權三
志摩　白井兵左衛門が一子、同苗權八と申す者、劍術の心得ござるゆゑ
伴作　御前に於て眞劍の立合ひ、御内覽に供へんと存ずれど、眞劍にては君への恐れ。それゆゑ主人志
摩五郎、刃引きの二腰を、持參してござりまする。
景高　その笹野權三、白井權八は、若輩者に似合はぬ、武藝の噂は聞いたれども
稻毛　劍術手練とあれば、昵近、陪臣の差別なく
千島　この程近邊なる飛石寺は、無住となりし荒れ寺ゆゑ、夜な／＼妖怪出づるとの噂なれば
景高　斯樣な事あつては、君の不德と世の嘲り。武術のはげみある者を選み、急ぎ退治を仰せ付けられ
て、然るべう存じまする。
志摩　その儀は誰れ彼れと申さんより、父廣元へ御下知あらば、家中を選んでその變化を
稻毛　すりや、お手前方の一手を以て。
志摩　いかにも。
景高　ハテ、廣元どのには、よい家來を持たれたなア。
時政　その廣元にも、最早老年ゆゑ、跡目相續のお願ひ。その儀に附いて賴朝公へ、差上げねばならぬ

天國の劍、まった家の繼ぎ目に、無くて叶はぬ陰陽二つの御判。これを以て家督を定めらるゝが
ようござらう。

志摩　いかにも、その品が無ければ、大江の家に係はる大事。

伴作　さほど大切な寶なれども、天國の劍も、二つの御判も、とくより紛失。

皆々　なんと。

千島　それゆゑ、國元より本庄助太夫、白井兵左衛門を呼び下し、内々にての寶の詮議。

伴作　千島之助樣、そりや何仰しやる。内々にての寶の詮議とは、御未練千萬。斯うぶちまければ長向き。

志摩　寶が無ければ、家に係はる一大事を、家來任せにして置かれませうか。一男なれども某が、二品の行くへを尋ね、頼朝公へ差上げなば

景高　差詰め跡目は志摩五郎。

時政　アイヤ、そりや憚りながら、いづれものお詞が相違かと、この時政などは存じまする。

景高　そりや又、何ゆゑ。

時政　ハテ、寶の紛失は、時節とは申しながら、自然行くへの知れざるうち、萬一廣元逝去あらば、何

を以て大江の家を繼ぎ召さるな。

景高　ヤア。

時政　サア、只今のお詞には、寶詮議をし出し、二男なれども跡目相續と仰しやるが、いづれもには、寶の行くへ、御存じでござるかな。……お家の浮沈を幸ひに、親兄の禮を失ひ、世を窺ふは國家の亂れ。この儀を鎌倉へ訴へ、屹度詮議を致さうか。

景高　サア、それは

時政　寶の行くへに、お心當りがござるかな。

景高　サア、それは

時政　鎌倉御所へ訴へませうか。

景高　サア、それは

時政　寶の行くへ御存じか。

景高　サア

皆々　サア〳〵〳〵

時政　御返答が承りたい。

ト思ひ入れ。

景高　流石は時政どの、味に掴んだこの場の穿索。

稲毛　イヤハヤ、感心いたした。

トこの時向うにて

よび　曾我の太郎祐信出仕。

景高　ナニ、祐信の出仕とや。

よび　祐信出仕。

ト三味線入り大拍子になり、向うより禪司坊、剃り立て、庵りに木瓜の紋附いたる上下、衣裳。三寶に竹刀を載せ、あとより鬼王新左衛門・麻上下にて、禪司坊の刀を持ち、出て來り

禪司　げにや青陽のなかば、春知り顔に梅へ來て、經よむ鳥もわれからと。それに引きかへ某は、菩提に入りし法の道、いつかは破り是非なくも、影さへ踏まぬ師の坊へ、暇を乞うて下山なし、三衣にあらぬ武門のいでたち。名も其まゝに禪司坊。

鬼王　お供にかッつく某は、名におふ曾我の世界には、重い役目の御家老職、今年はどうしたはずみやら、合羽姿にひきかへて、麻上下の定紋は、それとは云はねど庵りに木瓜。一夜明けての番附に

とんだ築地が役廻りも、世の豊年に隨つて、曾我の家臣の鬼王も、やすくなつたではござりませぬか。

禪司　イヤモウ、そりや此方とても同じ事。舊冬元服して、男の內へは入れども、相も變らぬ不調法者お取立てを以て、曾我の名跡を相續いたすやう、其方も共々、いづれも樣へ、お願ひ申してくりやれ。

鬼王　御最屓あつき曾我の御子息、何しにお見捨てござりませう。片時も早く御前へ出仕を

禪司　然らば鬼王。

鬼王　まづ、お越しあられませう。

ト兩人舞臺へ來る。千島之助見て

千島　これは〳〵禪司坊どのには、只今出仕でござりまするか。

景高　待て〳〵。曾我の禪司坊とやらは、久上寺にて、くり〳〵坊主と聞いたが、出家にあらぬ

皆々　この體は。

禪司　成る程、御不審は御尤も。私しことは、河津の三郞が末子。兄々達もござるゆゑ、私し一人は、父の菩提を弔らはんと、久上寺にて出家の願ひ。それも佛緣ござらぬやら、養父祐信樣出家をと

どめ、この如く、男なりして今日のお目見得。

鬼王　それゆゑにこそ鬼王が、附添ひ參つたその仔細は、曾我の太郎祐信樣の、養子となりし祐成樣、柔弱の上大磯通ひ。弟の時致樣は氣儘者ゆゑ、お二人ともに御勘當。曾我の家を繼ぐべき者こそらねば、禪司坊樣に元服させ、跡目の願ひを近々に、三老方へお屆け申す筈でござりまする。

志摩　一旦養子となしたる祐成、時致を勘當なし

景高　禪司坊を跡目と定めたる、祐信どのゝ胸中。

千島　すりや、禪司坊どのには、出家をとゞめて、曾我へ歸宅召されしゆゑ、武術手練を内覽に入れ召さるゝか。

景高　ハヽヽヽヽ。武術手練もすさまじい。今までのやうに久上寺で、弔ひの強飯を食つて、穴掘り男たちと狂ふとは違ふ。忝くも、賴家公の御前だぞ。

稻毛　百萬遍や、オニアボキャアは知つてもゐようが、劍術なぞとは思ひもよらぬ。

彌七　青二才の分として、われ／＼と立合ひもすさまじい。鎌倉武士には骨があるわえ。

荒次　芋や牛蒡ばかり食つて、精進物で育つたゆゑ、なりも形も其まゝに

伴作　貧乏じみた曾我殿原。預けおかれし逆澤瀉の鎧も、祐成が放埓ゆゑ、質屋の庫に縛り繩。

徳行　それゆゑ福信、滿江まで、鎧がなければ二人が身の上。

稻毛　科人同然の身を以て、名代も片腹痛い。同席するも穢らはしい。キリキリそこを

皆々　下がれ、エヽ。

鬼王　たとへ如何やうに御意なさるとも、元は河津が胤なれば

禪司　武を忘れざる父が血脈。木太刀、竹刀の長短も、相手きらはぬ、お望み次第。腕骨、脊骨の用心じて、キリキリ拙者と立合ひ召され。

景高　ヤア、推參なその一言。誰れかある、彼奴めを、合點か。

志摩　心得ました。

ト有りあふ竹刀にて志摩五郎打つてかゝる。禪司坊しさり、同じく木太刀にて受けとめ、ちよつと立廻り、志摩五郎が木太刀を打ち落す。伴作この體を見て、志摩五郎もろとも、一腰を拔き、切りかけるを、鬼王これを見て禪司坊を圍ひ、兩人をさゝへる。立廻りのうち、時政、ツカツカと出て、皆々を突き退け、志摩五郎をとめて

時政　コレ、お詞下らぬ其うちに、眞劍にては君への恐れ。殊には部屋住みの禪司坊、片時も早くお次へ扣へい。

禪司　でも、私しは

時政　御前へ恐れ。

禪司　ハツ。

　　ト平伏して花道へ行きかける。

伴志　試合ひの勝負を

　ト行きにかゝるを、時政、鬼王支へるを振り切り、禪司坊に打つてかゝる。禪司坊是非なく兩人をあしらひながら、花道へかゝる。神樂になり、向うより團三郎、麻上下、大小にて出て來り、この體を見て、伴作志摩五郎を突き退け、禪司坊をかこひ、キツと思ひ入れ。禪司坊は團三郎を見て

禪司　そちや家來の團三郎。

伴志　何故あつて、われ〳〵を

團三　支へまするも拙者が寸志、あなた方のお爲を存じて。

伴志　ヤヽ、なんと。

團三　見受けますれば御前の出御。たとへ武術の立合ひたりとも、貴人の方へ切尖を、向けざる事は武の作法。まして白刃は猶の事。こりやお心得違ひかと存じまする。

伴志 サア、それは

團三 陪臣者の私しが、斯樣申すも猿が人眞似。面を赤めて大晦日、やうやう越した玉の春。身貧な曾我に遣はるゝ、團三を人と思し召さば、年玉心にお歷々、マアマアお下にござらつせい。

伴志 でも、この場に於て。

團三 ハテ、まづまづあれへ。

ト皆々を押し戻し、舞臺へ來る。

景高 わりやア曾我の團三郎、わいらがやうな貧乏人の來る所でない。キリキリそこを下がれエゝ。

敵役 下がれエゝ。

鬼王 やかましいわえ、大名めら。無性矢鱈に、下がれ下がれとぬかすが、下がつてよければ、うぬらが下がりやアがれ。いつもの鬼王のやうに、凹んぢやアゐるねえ。惡くふざけると、寒さ橋から築地の海へ叩きこむぞ。

時政 コリヤコリヤ、御前へ恐れ。扣へぬか。

敵役 イヤア。

鬼王 ハツ。

トまじめになり、扣へる。

團三　イカサマ、兄貴の云はれる通り、今日の試合ひは、直参、陪臣の差別なく、武藝に達したる者は御前へ出仕とござるゆゑ、御免を受けてこの團三郎も、何卒武藝の立合ひを

千島　イヤ、それには及ばぬ、今の手の内。

時政　勝負わかりし上からは、御狩の供奉は追つての御沙汰

徳竹　まづそれまでは、若君樣。

志摩　最前より何かと御氣欝。

時政　こゝは端近。設けの席にて。

賴家　然らば、方々。

皆々　まづ、入らせられませう。

ト管絃になり、賴家先きに、皆々下座へ入る。あと合ひ方。禪司坊、團三郎、鬼王殘る。

團三　さて〳〵、只今は、ひやいな事でござつた。

禪司　イヤモウ、無理といはうか。横しまといはうか。いかに劍術の試しぢやとて、眞劍を以て立合ひとは

鬼王　あなた様に木太刀を打ち落され、面目なさの劍の舞ひ。まだしもお怪我がなくて、おめでたう存じまする。

團三　めでたいと申せば、世間は新玉の春に向へど、此方の屋敷は、いまだ節季同様。何かの工面も、我れ／＼二人が青息吐息。

禪司　それに引きかへ祐成様、晝夜を分たず大磯通ひ。

團三　その御放埒ゆゑ大切なる、逆澤瀉の鎧まで、人手に渡し、請け戻さぬ其うちは、曾我へかゝはる御身の御難儀。

鬼王　かゝりや繫がる時致様、氣儘氣隨のお生れゆゑ、遂には箱根を下山なし、同じ血筋でありながら

團三　河津様京都御在番の折から、風折様の腹に宿せし主人のお胤。十月も滿ちて産み悩み、産み落せしは玉のやうなる男の双子。數へて見れば十八年以前、時致様と同じ年。

禪司　ほのかに聞けば、その双子の御兄弟、藁の上から鎌倉方の、武家へ御養子と、常々滿江様のお物語り。いづれにお育ちなさるやら

鬼王　腹は變れどたゞ人のお胤、それと知れなば名乗り合ひ、あなたの爲には現在兄御、お行くへ尋ねる手だてには、母御風折様には、關東へお下りなされてござれば、その時こそ御兄弟衆の、お行く

へも知れるでござりませう。

團三　まだこの上に、いろ／＼申し上げねばならぬ儀もござりますれど、こゝは端近、別當方にて

禪司　然らば左樣いたさう。……何につけても、便り少ない禪司坊、この上賴むは其方達兄弟。

團三　それにつけても鎧の一埒、日限までに手に入れねば

禪司　母上樣や、義理ある御養父

鬼王　祐信樣のお身の上。相手變らぬ曾我殿原

團三　貧すりやどんな憂き事も

禪司　苦にせでつくす、鬼王、團三

鬼王　忠義は誰れに劣らねど

團三　力づくにも、腕づくにも

鬼王　廻りかねたる錢車

禪司　糸も細けき身の成行さ。

團三　思へば思ひ廻すほど、せまじきものは

鬼王　ヤ。

園二　お社へ參詣なされませ。

ト大拍子になり、三人思ひ入れあつて下座へ入る。時の鐘、合ひ方になり、上の方より志摩五郎、下の方より赤羽根伴作、あたりを窺ひ、出て來り

志摩　伴作、かねての手段は。

伴作　お氣遣ひなされまするな。本庄助太夫、白井兵左衛門は、あなたへ荷擔の印しなりとて、お家の重寶、天國の劍、陰陽の御判、ひそかに盜み取つて、志摩五郎樣へ差上げくれよと、則ちこれに。

ト天國の劍と、二つの判を出して見せる。

志摩　出かした／＼。その天國の劍は、燒刃に血をあやす時は、雨を催ほす稀代の名作。迂濶に守護は

伴作　畏りました。……二品の寶は、拙者が慥かに預かりました。

ト拔きかける。雷鳴の音。

成る程、稀代の名劍。

志摩　まだこの上に、何かの相談

伴作　萬事は後刻。

志摩　赤羽根伴作。

伴作　志摩五郎樣。

志摩　コレ。

ト大拍子になり、伴作は天國と判を持ち、下の方へ入る、志摩五郎はちよつと上の方を窺ふ、右の思入れ、鳴り物にて、向うより本庄助太夫、老けたる拵へ、野袴、ぶツさき羽織、あとより旅形の若黨、中間附添ひ、次にお勝、千ヶ寺參りの葛籠を背負ひたる女順禮にて、附いて出る、あとより白井兵左衛門、麻上下、大小にて、同じく老けたる拵へにて、中間を連れ出て來り、花道にて

中間　見苦しい。下がらぬか〳〵。

かつ　ハイ〳〵、御免なされませ。私しは、ちとお願ひがござりまして、それゆゑお側へ。

助太　ヤ、其方は先年召使ひし、腰元の勝ではないか。

かつ　左樣でござります る。

助太　ハテ、變つた姿で

ト兵左衛門を見て

これは白井兵左衛門どの。まづは御健勝にて、悅ばしう存じまする。

兵左　本庄助太夫どのには、今日御到着いたされたか。

助太　左樣でござります。道にて承りますれば、若殿お二方とも、當社へと承り、直ぐさまこれへ。

兵左　然らば御同道仕らう。

ト鳴り物の切れにて、皆々舞臺へ來る。

ハツ、志摩五郎樣には、これにお渡り遊ばされましたか。

志摩　兵左衞門か。して、助太夫も歸國いたしたか。

助太　ハツ、御分內益々豐作、おめでたい儀でござりまする。拙者も歸國の砌り、象頭山へ參詣仕り、兵左衞門どのよりお賴みありし、金毘羅の札守り、イザ、頂戴めされい。

ト札守りを渡す。

兵左　これは／＼、忝う存ずる。これと申すも、家の安泰、悴めが武運を祈りの爲でござるて。

助太　イヤモウ、子を持ちまする親どもは、皆その通り。身共も悴へ遣はさんと、札守りを頂戴いたして參つたて。

ト札守りを見せて、懷中する。

兵左　イヤ、助太夫どの、あの順禮の女はな。

助太　あの者は、身が召使ひの腰元、勝と申した女でござる。

かつ　憚りながら、私し事は、まだ年若なその砌り、本庄様に御奉公。朋輩同士の不義いたづら、この身は懐胎仕り、殊に男は私しを、捨ておきまして行くへ無う

助太　憎くいは相手の下郎め、女が腹に胤を残し、駈落ち致すその砌り、身が秘蔵せし、百足丸といふ手槍を奪ひ、逐電いたせし小者丹助。……コリヤ、今以て在所は知れぬか。

かつ　左様でござりまする。御主人様の大恩にて、やす／＼と産み落し、則ち娘を御寵愛、只今にては御實子同前の養女となされ、その名も八重梅様と申しまする。

兵左　エヽ、八重梅どのは、不忠の丹助、これなる女、二人が仲の

かつ　その娘をば有り難い、御主人様のいつくしみ、御恩送りは丹助どのゝ在所を尋ね、百足丸の手槍をと、斯様な姿になりまして、尋ねますれど、今に行くへも

助太　イヤ、容易には、知れまい／＼。ア、それにつけても實の娘、あの小夜めは、曾我の團三郎と云ひ號け、それを嫌うて我が儘氣儘。

兵左　たしか身共が若黨あがり、いま町人にて足袋屋商賣、平左衛門が悴なる、身持ち惰弱な半七と

かつ　すりやアノ、お小夜様は

助太　それゆゑ小夜めは勘當いたした。今では其方が娘の八重梅、身共が實子も同然に……其方も捨て

られた丹助が、在所知れたら知らせいよ。命は取らぬが、あの槍ばかりは取返す。

かつ　私しとてもこの姿、在所を尋ね、旦那樣、お知らせ申すでござりませう。

ト思ひ入れ。大拍子になり、禪司坊、鬼王出で來り、志摩五郎を見て

禪司　貴殿は志摩五郎どの、いまだ歸邸いたされぬか。

志摩　禪司坊どの、最前の試合ひ、勝負いたさん爲にお來やつたか。

禪司　イヤ、某は義時どの〻御內意にて、逆澤瀉の詮議につき、鬼王召連れ、これより直ぐさま。

助太　すりや、曾我樣の御養子たる

兵左　久上へ登山なされたる

鬼王　あなたが卽ち禪司坊樣。梶原樣のお指圖にて、鎧の儀に付き、過急に曾我へ拙者がお供。

禪司　失禮ながらお先きへ參る。御前よしなに、志摩五郎どの。

志摩　然らばこれにて

かつ　折を伺ひ、又ぞろお目見得いたしませう。

助太　八重梅ことは、氣遣ひ致すな。

かつ　エヽ、有り難う存じまする。

禪司　いづれもこれに。鬼王、參れ。

ト大拍子になり、禪司坊と鬼王にお勝附き、向うへ入る。二人殘る。

志摩　存ぜぬ事とて、あの八重梅は

トあたりを見廻し

兩人の者に內談あれば

兩人　ハア。

兵左　下部ども。若殿の御內意。次へ立て。

家來　ハツ。

ト家來下座へ入る。

助太　して、若殿の

兵左　御內意とは。

志摩　かねて其方ども存じの通り、親廣元を初め、兄千島之助をおッ片付け、手も濡らさずに家國を

助太　さてこそ知れし其お望み。それゆゑ、我れ／＼兩人、あなたへ一味の印しに、お家の重寶天國の劍、陰陽の御判も、とくより盜み取り、赤羽根伴作へ密かに手渡し。

兵左　これと申すも、私しども兩人は、老先き知れし身の上。何卒あなたの御代とならば、忰どもを入緣に、お取立て下さらば

兩人　何しに違背いたしませう。

ト思ひ入れ。トヒョになり、日覆ひより鷹一羽飛び來り、黄金の札附いたる鶴を取らんと舞うてゐる。

下座より徳竹駈けて出で、空を見て

徳竹　徳竹が預りのあの鷹が、鶴を取つては、賴朝公へ申し譯がない。いづれも、大變でござる〳〵。

ト舞臺を駈け廻る。管絃になり、うしろへ賴家公、梶原、稻毛、安西、新貝、千島之助出で來り

皆々　徳竹のあわたゞしい。何事だ。

徳竹　賴朝公の放したまひしあの鶴を、お拳のあの鷹が、アレ〳〵〳〵。

千島　ヤア、あの鶴に過まちあつては

皆々　君のお怒り、一大事。

兵左　溜りに扣へし諸士の面々。

助太　誰れかある。射術を以て、あの鷹を

皆々　射落しめされい。

トこの時東西の揚げ幕の中にて

權三 御下知なくとも笹野權三

權八 白井權八、仰せを蒙むり

兩人 射落しまするでござりませう。

ト小鼓の合ひ方になり、花道より笹野權三、前髪鬘、袴、着流し、大小、弓小手をかけ、弓を持ち、東の揚げ幕より白井權八、同じく振り袖衣裳、同じ姿にて、弓矢を持ち、出で來り、鷹を見上げて吃度思ひ入れ。

稻毛 白井權八。笹野權三。只今出仕

皆々 致したか。

權三 陪臣の某、推して出仕も如何と存じ

權八 お次の溜りに扣へしところ、お召に應じて出仕の折から

權三 見上ぐる雲は水や空、霞流るゝ大鳥の、駈くるを追うて拳の逸物。

權八 若輩ながら上意を蒙り

權三 武家に傳はる

兩人　射術を以て。

ト双方矢頃よきところにて、弓に矢を番ひ、切つて放つ。この矢誤たず、鷹にあたるゆゑ、鷹は舞臺先きへ落ちる。兩人この體を見て、ツカ〳〵と舞臺へ來り、權三は件の鷹へ手を掛ける。權八ちよつと支へ、立廻りあつて、キツと見得。

權八　こりや笹野氏、拙者が射留めし得物を、何とおしやる。
權三　身共が直ぐさま御前へ御覽に
權八　イヽヤ、身共が
權三　イヽヤ、拙者が
兩人　何を。
賴家　兩人の者、爭ひ無用。射術の譽れ、感心いたした。
千島　君の上意、お受け致せ。
兩人　ハヽア。

ト左右へ分れて平伏する。この時、兵左衞門助太夫、ツカ〳〵と立つて、助太夫は權三を、兵左衞門は權八を引附け、兩人一度に扇にて打ち据ゑる。權三、權八こなしあつて

權三　思ひがけない御折檻。
權八　何故あつて
兩人　我れ〳〵を。
助太　何故とは不所存者め。今日賴家公の御參詣、不淨を淸むる神の庭。
兵左　鳥類たりとも社內に於て、血をあやさば神への恐れ、その身の冥罰。
兩人　そこへ心が付かぬとは、大だはけめ。
平次　イカサマ、老臣だけあつて、よいところへ心が付いた。其方どもの悴ゆゑ
安西　ぬかりはあるまいと思ひの外
新貝　血汐を以て社內を穢す大だはけ。
稻毛　あれでも武士か、侍ひか。いづれも、あのざまを見て、笑はつしやい。
皆々　ハヽヽヽヽ。
助太　お歷々のおさけすみ。親にまで恥辱を與へる不孝者。
權二　其お咎めもあらんかと、射留めし鷹の死命を斷たず
權八　羽搔を縫ひし射術の奧儀。

兩人　しるしは目前。まッこの通り。

ト兩人立ち寄つて、鷹に立つたる二筋の矢を左右へ拔いて取る。これにて鷹は羽叩きして德竹の拳へ戻る。皆々見て

皆々　これは。

千島　天晴れ手練、兩人の者へ御狩の供奉、仰せ付けられ下さりませう。

志摩　イヤ、罷りならぬ。弓矢はそれで事濟めど、打ち物業は心許ない。

千島　その儀はかねて御內覽。

德竹　イカサマ、お館へ召し呼ばれ、お庭先きでは又一しほ。

平次　賴家公には一まづ御歸館。

助兵　われ〳〵路次までお見送り。

賴家　兩人、大儀。

權三
權八　君の御歸館。

皆々　ハヽア。

ト下り葉になり、賴家公先きに、皆々向うへ入る。志摩五郎は下手へ入る。あと合ひ方。權三、權八

殘り、こなしあつて

權八　有り難き弓矢の威徳。今日御前に於て、武藝の試み、如何と存じ罷りあつたが、首尾よく相濟み、斯樣に喜ばしい儀はござりませぬ。

權三　これと申すも、幼少より武術の勵みも、七尺去つて影さへ踏まぬ師の大恩、又一つには親どもが恩義は高き須彌大海。

權八　それにつけ、いつぞやお尋ね申さんと存じましたれど、折を得ませねばお尋ね申さぬが、其許樣には、本庄助太夫樣の御養子でありながら、何故本庄を名乘らず、笹野權三とは申されまする。

權三　成る程、御尤ものお尋ね。こりや斯樣でござる。拙者が養母、至つて私しをいつくしみ、今際の遺言に、其方は本庄の跡目なれど、われが死したる後にても、魂ひは此土にとゞまり、御身が成人の守りともなるべき間、七回忌追善濟すまでは、母の養育忘れぬ爲、母の名の笹野を氏となし笹野權三と名けよ、七回忌も經つなれば、本庄の名跡を名乘れと、末期の遺言。それゆゑ笹野を氏と致します。

權八　それにておてまへの御家名、相わかりましてござりまする。イヤモウ、拙者とてもその如く、白井兵左衞門方へ、藁の上より養子となり、白井權八とは名乘りますが、實の親どもは、いづくの誰

れやら

權三　知れぬで持つた憂き世の中。もし、町人百姓の胤でござらうなら、親は勿論、殿のお恥辱と申す者サ。

權八　其許は、異な事を御意なさるゝが、すりや、拙者を町人百姓の胤とお云やるのか。

權三　イヤ、全く左樣ではござらぬが

權八　たとへ町人百姓の胤なりとも、一心を以て君に仕へ、高位高官に上りしは、和漢の例し、いくらもござる。それに何ぞや、僅かの射術を鼻にかけて、人をさみなす下品な侍ひ。

權三　ヤア、默れ、權八、武士に向つて慮外な一言。僅かの射術とお云やるが、弓矢の外にも武の嗜み、打ち物取つては、誰れにか劣らん、流儀の一手をお目にかけん。サア、立ち寄つて勝負さつしやい。

權八　ハテ、お急きなさるな。急いては事を仕損じて、赤恥をかくが何とも氣の毒。

權三　大分こなたは落着くが、その落着き顏が氣にくはぬ。只今までは、面ぶせにて申さぬが、斯うなる上は何もかも、ぶちまけてしまふワ。常から氣の合はぬ白井氏、おてまへの妹御を、婦妻に申し請けんと存じたが、今日までもそれゆゑ延引。

權八　そりや此方とても同じ事。貴殿の妹、八重梅と、三々九度の婚禮も、一寸延ばしは、おてまへと、
重縁組みが氣にくはぬ。

權三　そんなら互ひに

權八　心と、心が

兩人　合ひませぬ。

權三　然らばこの上

權八　疎遠のしるしは

兩人　ハテ、何をがな。

ト合ひ方。積み上げし番手桶を取つて出す。手桶崩れて、中より水こぼるゝ。

權三　覆水再び盆に返らず。

權八　近しき仲も、碎けてしまへば

ト桶を落す。桶崩るゝ。

權三　赤の他人。

權八　他人となつて

權三　武士の意地づく。
權八　笹野權三。
權三　白井權八。
權八　この場に於て
權三　武藝の試み。

ト兩人立ちかゝらうとする。この時團三郎出て、ツカ〱と前へ出で、この中へ入り、兩人をキツと留める。三人思ひ入れあつて

團三　御兩所、待つた。
兩人　ヤヽ、團三郎どの。
權三　妹が儀に付き、おてまへに逢うては、何とも以て。
團三　コレ。……その儀を爰にて
權八　緣者の模樣取りおいて、何故二人を
團三　おとゞめ申したその仔細は、元を糺せば緣者の團三、お二人樣は主親ある身、私し事に身を果さばどの、命を以て主人へ忠義、親への孝を立てさつしやります。

兩人　ヤヽ、なんと。
團三　不忠の汚名を取らせまいと、團三が留めに出ましたが、まんざら無理ではござりますまいがな。
兩人　サア、その儀は
團三　花も實もあるお二人樣・隨分その身を全うして、これから仲よく、以前の通り、結び合せる拙者がお願ひ。
權八　イカサマ、主人持つ身の一命は、わが物ならぬ、君の賜物。
權三　引くに引かれぬこの場の意氣地。
團三　そこを和らぐ
兩人　文武兩道。
團三　然らば互ひに
兩人　遺恨はござらぬ。
　　　ト別れて、思ひ入れ。
權三　とはいへ武士の
兩人　五道のためしに

ト思ひ入れ。

團三　魂ひ定めとあるなれば、彼の渡邊は羅生門にて、金札の例しにまさつて、その身の譽れ。近き噂を御存じあらん、六浦金澤の飛石寺こそ、無住となつたる荒れ寺へ、妖怪棲むとの訴へあれば、時にとつてのよき幸ひ。

トこの時上手に北條時政伺ひ出る。尤も上下の侍ひ附添ひ出る。

時政　先刻よりの樣子、殘らず立聞く。いづれ劣らぬ健氣な若者。

權三　ヤヽ、思ひがけなき

權八　時政公。

時政　兩人の武勇に付き、思ひ當りし仔細あり。近き頃より世上の噂、六浦金澤の飛石寺に、夜な〳〵妖怪出づると訴へあれど、表立つて討手を向けんは、お膝元の程近きに、君の御武德薄きに似たりと、等閑の折に幸ひ二人の者、彼の地に赴き、ひそかに虚實を糺し來れよ。彼の古への渡邊が羅生門にて金札の、例しにまさつてその身の譽れ。心得たるか。

團三　直ぐさま彼の地に赴き、妖怪退治が肝要ならん。

權八　時政公の御教訓、渡邊の魂ひに、準へし上からは

權三　變化退治は面白い。イデ、一攫みに某が

權八　ヤレ待たれよ。綱は印の金札あれど

團三　證據無くては相濟みますまい。

時政　印しを呉れん。兩人暫く。

ト時政は上手の高札を取つて忠の一字、團三郎は下手の高札を取つて、孝の一字を書き

忠孝二つは、武士の表。印しの高札、首尾よう立て置け。

團三　變化退治て、めでたく歸邸を

權三　云ふにや及ぶ。

兩人　これより直ぐさま。

ト高札を取つて行きにかゝる。時政留めて

時政　勇ましき二人の若者、血氣に逸らば過失あらん。その心を和らぐは、兩人の魂ひ、身共に預けよ。

兩人　その魂ひと仰しやるは

時政　二腰ともに、暫時身共へ

兩人　して、我れ／＼が帶刀は

時政　障化を避くる覺えの業物、餞別いたさう。
兩人　ハ、ッ。

トめい〳〵の刀を時政の前へ置く。時政は刃引きの二腰を兩人に渡す。

團三　手づから賜はる、その賜物。
時政　門出を祝す、この場の寸志。
權八　エ、、有り難き御賜物。
權三　忠孝二つはまがひなき
權八　彼の地へ赴く二筋道。
時政　妖怪退治て歸邸せば
團三　その夜の話しを、我れ〳〵も
時政　時刻移さず、いさふれ兩人。
兩人　心得ました。

ト權三は東へ、權八は花道へかゝる。この時、中間二人出て

二人　二人をやつては

トかゝるを、傳三、權八、中間を振り切り、又かゝらうとするを團三郎引分ける。

權三
權八 合點だ。

トきつと見得。カケリになり、權三權八は兩花道へ入る。此まゝ道具廻る。

本舞臺三間の間、正面注連を張りし錢湯の柘榴口、上の方階子、押入れ、門口に男湯のしるし、下の方女湯の入り口。暖簾を掛け、舞臺には大八軒を吊し、よき所に法度書、上り湯の口、水溜め、羽目通りへ落し咄し、淨瑠璃、講釋の札張つてあり。高臺の上に三六、番頭の拵へにて、祝儀の三方を扣へ、板の間には梶原景季、出島鬘、丸裸のこしらへ、白木綿の湯卷きにて、桶に腰を掛けゐる。小林の朝比奈、半纏にて、股引きを引揚げ、流しの三助にて、背中を洗ひゐる。又六同じく流しにて、小桶を集めてゐる。番湯の忠太、丸裸、湯卷きにて、洗つてゐる。仕出し三人、帶を締めてゐる。すべて朝比奈切通しの福壽湯の體。通り神樂、鳥追ひ唄にて道具納まる。

ト風呂の中には、淨瑠璃、念佛、木遣り、ひやかし唄の聲する。町人○、△、裸身湯卷きをして風呂の中より出て、背中を流し合ふ。仕出しは捨ぜりふにて向うへ入る。三六挨拶する事。この鳴り物にて向うより、お仙、お長、世話女にて、湯入りの體、あとより月小代ばゝア、浴衣を抱へ、出て來り。花道にて

月小　お仙さん。お長さん。お早いの。
せん　オヤ、月小夜をばさんか。まだ年が明けてお目にかゝらないの。
てう　をばさん、いゝ春だね。
月小　アイ、大概な春サ。モシ、お仙さん、お前方の近所に、人の世話にならうといふのは無えかえ。
せん　アイ、お前のお頼みゆゑ、聞き合したが、いゝのは無えの。
てう　コレ、おばさん、わッちはどうだえ。
月小　オヤ、お前が月囲ひになるのか。
てう　左様サ。月囲ひの世話をしなさるなら、お前は月小夜、まだ外にお小夜といふ子があるね。
せん　ほんに、そのお小夜さんといふは、美しいといふ評判だよ。
月小　そりやア矢ッ張り、わたしが娘であらうよ。ホヽヽヽ。
ト三人ながら女湯の口へ入る。
又六　暮れるに間もねえから、かんてらの拵へをしよう。
ト八軒の掃除にかゝる、
○　番頭、糠袋を貸しねえ。

△　おれにも貸さッし。

三六　これで袋を三つ使ひなさる。

ト投げてやる。

○　オヽ寒い。どりや、溫たまらうか。

ト二人は風呂の中へ入る。女湯の方より、以前の三人出て

仙長　番頭さん、いゝ春だね。これはわざと

ト二百包みの祝儀を出す。

三六　これは御祝儀を有り難うござります。……イヤ、月小夜樣、お前、御祝儀に

月小　祝儀は此方へ貰ひたいわな。この間も滿江樣から、お貰ひ申した紋付きの小袖を直して、質に隱しにしようとして、直してすぐに伊勢太へ持つて行く道で、頰冠りをした男が、わツちの面をくらはして、ツイと持つて走つたわな。その時の痛みが、まだ直らぬよ。カウ、番頭さん、白龍香でもおくれ。

三六　角力膏藥はどうだえ。

月小　顏へ角力膏を貼つて見ねえ、色氣がねえわな。

又六　色氣もすさまじい。
月小　なんだ、この三助め。
又六　をばさん、油ッ手だよ。

ト手を出して見せる。

月小　ア、、御免だ〳〵。

ト女三人、女湯の方へ逃げて入る。又六は八間を吊し、追ひかけて入る。

忠太　御前、忠太が代つて、お背中を流しませうか。
景秀　イヤ〳〵、この三助は至つて上手ぢや。コレ、よく洗やれ。その代りこの梶原が、親義盛へは、詫び言をしてやるワ。
朝比　そいつは源公、奇特だの。知る通り勘當されて、つまらねえ身分だから、この湯屋へ來てのごろつき。これが誠に和田が三助、風呂焚きの朝比奈だもサと、お定まりの臺詞も云ふやうに、コレ、よしみだけに、源公、賴むワ〳〵。
景季　承知々々。
忠太　モシ、朝比奈さん、いつ頃お屋敷へお歸りなされます。

朝比　サア、早く歸らうとは思ふが、この十六日の、貰ひ湯を集めてから歸らうと思ふ。それでないと、今まで辛抱した甲斐がない。

忠太　成る程、お名の高いお大名の若殿樣が、初湯賣日の御祝儀をお貰ひなされずば、これまでの御辛抱も、水の泡でござります。

朝比　コレ、水の泡より、水蟲で素的に困るの。

忠太　實に御苦勞なされます。

景季　イヤ、また朝比奈も勘當されたが、曾我兄弟の奴等も、祐信からの勘當、彼奴等も湯屋で流しでもさせるがよい。時致は力があるから、薪を割る、水を汲んでも勤めようが、祐成は何がなららうかな。

忠太　祐成は男がよいから、女湯の番頭がようござりませう。

景季　イヤ〳〵、彼奴女好きゆゑ、番頭にしたら、一日あの臺から落ちてばかりゐるであらう。どうで彼奴は、お菰がものはある。

朝比　ナニ、十郎はお菰だ。この、げぢ〳〵め、とんだ熱を吐くな。

景季　コレ、朝坊々々、曾我贔屓もよしにしやれ。てまへも勘當の身ではないか。コレ、この源太は、

おぬしが詫び言を致すワ。コレ、腹を立てずに、流してくれ〳〵。

朝比　さう云つても、この髭はナ、どういふ事か曾我贔屓だから、わるく云はれると小胸がわるいワ。

ト思はずそこにある輕石を取つて、景季が背中をむやみに擦る。

景季　アヽ、痛い〳〵。コレ〳〵、なぜ其やうに、ひどく洗ふのだ。

朝比　ナニ、ひどくはしねえ、垢すりで流したばかりだ。

景季　それでも背中が、ひり〳〵するワ。

ト朝比奈の持つた輕石を見て

イヤア、コレ〳〵、てまへ、身共を輕石で擦つたな。

忠太　それは定めしお痛みなされませう。コレ、小林どの、なぜ御前樣を、輕石でお背中を流したのぢや。濟まぬぞ〳〵。

朝比　ナニ、濟まねえ。コレエヽ、輕石で洗つたがどうした。踵を洗ふ輕石だから、けち〳〵の背中を擦つたワ。これから又、その赤い面を輕石で磨いてやるワ。

ト立ちかゝる。

景季　コリヤ〳〵、朝比奈、なんの意趣があつて身共の顏を

朝比　意趣は無いが、この輕石があるから、それでその面を

景季　滅法界な。輕石で面は、御免だ〳〵。

朝比　イヽヤ、洗はにやア流しが立たない。何でもかでも、流すワ〳〵。

　　トまた輕石を持つて立ちかゝるゆゑ、景季、忠太恐れて、風呂口へ逃げて入る。又六駈け來り

又六　コレ、棒組〳〵、滅法界な事しやんな。來やれ〳〵。

朝比　イヽヤ、洗はにや男が立たぬ。輕石で面を、洗はせろ〳〵。

又六　ハテ、來やれな〳〵。

　　ト通り神樂になり、朝比奈を又六連れて、湯汲み場の方へ入る。

三六　イヤモウ、ぬしの氣の短いのには困り果てるの。

ト通り神樂、鳥追ひ唄、向うより三日月お小夜、山形木綿の紋附き、半襟のかゝりし女小袖、下には剝身絞りの浴衣を着込み、平括け帶、前垂れにて、垢すり附きの手拭を持ち、塗り下駄にて出てくる。あとより出羽吉、いさみの形。竹の下孫八、立烏帽子、半素袍の下ばかりにて、中間一人浴衣を持ち、大名の湯入りにて出て來る。花道にて

出羽　コレ〳〵、姐さん、待ちなさい。錢湯なら、わつちと一緒にお出でな。送つて上げようわな。

小夜　そりやアおかたじけ。お前方に送られるより、狼に送られるが、氣がきいてゐるわな。

出羽　愛想づかしだね。

小夜　また歸りに送つておくれ。

ト鳴り物にて、女湯の口へ入る。出羽吉と竹の下孫八は男湯の口へ入る。此うち景季、風呂より上り、門口のお小夜に見惚れて、そろ〳〵番頭の目を忍び、女湯の方へ窺ひ行く。

孫八　コレ〳〵、町人、今の女は何者だ。

出羽　ありやアふしよく者（不職者）の嚊アでござります。

孫八　ハテ、美しい女ナ。……こりや家來、てまへ、又迎ひに參れ。

中間　ハイ〳〵。

ト浴衣を孫八に渡し、赤合羽を入り口へ忘れ、引返して向うへ入る。

出羽　どうだ、番頭、堀の内へでも行かうか。

三六　アイ、お供いたしませう。……これは御前、いらつしやりませ。

孫八　オヽ、よい春ぢやての。コリヤ、湯代十二銅拂ふぞ。二錢の釣錢を返せ。

三六　ヘイ〳〵、畏りました。

ト釣錢を出す。此うち出羽吉、孫八、丸裸になり、白の湯卷きばかりにて、出羽吉風呂へ入る、孫八は烏帽子を忘れて風呂へ行く、

モシ〳〵、御前樣、お烏帽子が殘りました〳〵。

孫八　これは不調法。足袋を穿きかへました。

ト烏帽子を取つて掛け棒へ吊し、風呂へ入る。此うち上り口に、装束の衣裳、忠太の小袖を置いて、大小ともあり。始終通り神樂、鳥追ひ唄、向うより鬼王、木綿羽織、大小にて出て來り、男湯へ入り

鬼王　さて、よい春でござるの。

三六　お出でなされまし、おめでたうござります。

ト鬼王、十二銅のおひねりを出し

鬼王　わざと祝儀を

三六　これは有り難うござります。

鬼王　時に番頭、身共ちと折入つて頼みがある。

三六　ヘイ〳〵、何御用でござります。

鬼王　イヤ、別儀でもないが、身共心願の儀があつて、武士たる者が申し出して、聞済みなき時は、身も侍ひた。なんと番頭、承知ならば誓言が見たい。

三六　この番頭に誓言とは。……ハテ、何をがな。

ト思ひ入れあつて、杖の間より毛切りの石を二つ持ち來り

モシ、お侍ひ様、あなた方ならば、金打といふところ、金打がはりはコレ、この石、これを打つのが卽ち……きん、ナ……玉といはねど毛切り石、斯樣に爰で……ちよん〳〵、ちよん。

ト三つ打ち

これが番頭の卽ち金打。サア、其お頼みを一通り、仰しやりませぬか。

鬼王　成る程、湯屋の番頭だけ、金打と打つたる石は面白い。心底見えた、お話し申さう。侍ひの大事口外いたすは外ならず、何をか包まん、身共が貴公へ頼みといふは

三六　其お頼みは

鬼王　これなる女湯。

三六　この、女湯の、エヽ、お侍ひ様が

鬼王　湯屋の奉公仕り、女の白き肌の垢、流しにお使ひ下さらば、武士たる者の身の大望。番頭どの、あはれ身共を三助に、お使ひなされ下さらば

ト思ひ入れ。

三六　エヽ、そんならあなたが、女の肌がお好きゆゑ、この湯で働くお心か。併し、貰ひ湯前は、男どもが皆不承知。まだしも私しが下役に、番頭の飯がはりではどうでござります。

鬼王　イヤモウ、女湯を一目に見渡すこの高臺、何しに御辭退仕らう。左樣なら、下番頭の見習ひに使うて下され。

三六　御承知ならば、サア、爰へお上がりなさりませ。

鬼王　これは忝い。願うてもない儀でござる。

ト三六下りて、鬼王、高臺へ上がる。

三六　モシ〳〵、うつかりとは出來ませぬ。怪しい者が來たら、隨分目を離さずに、よしかえ。女湯ばかり見ずと、男湯が肝心でござります。

鬼王　承知いたしました。

三六　そんならもう暮れ方前、灯しの支度もせねばならぬ。ちよつと夜食をかッこんでくる間、爰に番

をしてござりませ。ドリヤ、夜食を

ト通り神樂。風呂の中にて、いろ〳〵の淨瑠璃、三六勝手の方へ入る。矢張り此鳴り物にて、女湯の方よりお長、裸にて背中を押へ、お仙、浴衣なりにて、介抱して出る。

せん　コレ〳〵、番頭さん、お長さんが拓榴口ですべりなすつたよ。背中へ治丹坊があらば貼つてあげな。

てう　流しは洗はぬかして、素敵にすべるの。番頭さん、ちつと云ひ附けて洗はせなさいな。

ト鬼王を見て

オヤ、番頭さんが變つたの。

鬼王　イヤ、身共は俄かはりでござりますが、膏藥を探して進ぜませう。

ト高座の小箪笥の中より膏藥を尋ねる。時の鐘。二階の階子より野晒し半七、十呂盤絞りの手拭を頭へ卷き、横帯を締め、樣子を窺ふ。風呂の中にては、羽目を叩き「熱い〳〵」といふ聲する。半七うそ〳〵見廻り、歸らうとして、景季の着物を踏みかけ、フツと思ひ入れあつて、梶原の着物を着てじろ〳〵鬼王の方を見る。鬼王心附かず、捨ぜりふにて女形に膏藥をやつてゐる。半七、うそ〳〵出かゝり自分の雪駄を取つて穿き、上り口にある赤合羽を取つて着物隱しに着る。この時朝比奈、灯り

を持ち來り

朝比 エヽ、暗くなつて來た。マア、番頭は何をしてゐるやら。

ト八軒を下し、灯りを附けるとて、半七が門口へ出んとするをちよつと見る。半七門口に一思ひ入れ、通り神樂にて悠々と向うへ入る。朝比奈八軒を引き揚げる。

鬼王 サア〳〵、これでようござりませう。

てう こりやアお前、おかたじけ。

せん お前のお庇で、オヽ寒。

てう もう一風呂入りませうわな。

ト兩人女湯へ入る。

朝比 婆アぢやねえが番頭、祝儀の貰はずと、ちつと灯りの世話でもしねえか。

ト鬼王見て

鬼王 ヤア、朝比奈樣か。

朝比 番頭だと思つたら、おぬしは鬼王か。どうして爰に

鬼王 面目次第もござりませぬ。


二立目

ト此時女湯の方、バタ〳〵と足音して、湯氣に上がりし景季を、又六、お仙、お長、捨ぜりふにて引摺つてくる。この音を聞き、風呂の中より忠太、出羽吉、孫八、〇、△、奥より三六驅けて出る。

皆々 コレ〳〵、何を騒ぐ〳〵。

忠太 イヤア、お旦那はどうなされた。

又六 モシ〳〵、御家老様、この若い殿様が、いつの間にやら隣りの女湯に忍び込んで、風呂の中に浮いてござりました。

せん 男の癖に女湯へ忍び込むとは、闇穢りだよ。

てう イケ馬鹿々々しい、とんだ間抜けだ。

ト騒ぐ。

皆々 いつの間に忍び込んだか。

朝比 この稚顔めは女好きの鳥、女湯へ這ひ込んだか。どうでも、ほか〳〵の女湯を嗅はぬわえ。

忠太 さういつまでも、湯氣に上がつたまゝでは置かれぬ。コレ、番頭、氣附けは無いか。

鬼王 氣附けはござりませぬ。幽齋と齋藥ばかり。

皆々 齋藥でも、のませろ〳〵。

鬼王　エヽ、埒もない、それでは口がひッ附きませう。

又六　なんでも、水がよいノヽ。

ト小袖にて水をすくひ、景季の顔へ吹き附け

忠太　旦那樣やアイノヽ。

朝比　げぢノヽやアイ、げぢノヽやアイ。

ト忠太はじめ皆々は着物を着る。景季、やうノヽ心附き、息吹き返す。

忠太　お旦那、お心が附きましたか。

景季　忠太か、氣遣ひ致すな。先き程、あまり美しい女が、隣りの風呂へ入りしゆゑ、其方にも知らさず、女湯へ忍び込み、今は出ようと思ふうち、ツイ長湯いたして、湯氣に上がつたと見える。

てう　イケ馬鹿々々しい。男の癖に、なぜ女湯へ入つて、惡い事をしたのだえ。

せん　ハテ、お前は默つておいで。外聞が惡いわな。

てう　ナニ、あんな奴は、面の皮を剝くがよいわな。

皆々　剝けたら白くならう。ハヽヽヽヽ。

忠太　お心が附きましたら、お小袖をお召しなされませ。

景季　アヽ、寒い〳〵。早く着せい〳〵。

忠太　ハイ〳〵。

トそこらを尋ね、小袖無きゆゑ

モシ〳〵、お召し物が、見えませぬ〳〵。

皆々　イヤア、そりや板の間が來たであらうぞよ。

景季　そんなら爰の湯で、梶原を湯屋泥坊にあはせをつたな。ヤイ、番頭、大名が裸で登城がなるものか。たはけ面め。

鬼王　ハイ〳〵。これは珍事ちうよう。悪事災難。

忠太　無くては濟まぬ。探せ〳〵。

てう　あんまり長い湯をしたから、湯氣に上がつて裸になるとは、いゝ氣味だね。

景季　どうしたと。

せん　これはしたり、外聞が悪い。

ト通り神樂になり、お仙はお長を引ッ張り、門口へ出る。お長は着物を抱へたまゝ、裸にて、悪たいつきながら向うへ入る。忠太、鬼王、三六、そこらを尋ね

三六　モシ〳〵、斯様な物がござりました。

ト絹の胴巻を出す。この中からみだけ小判と、切手二枚出る。

忠太　それは旦那のお手許金ぢや。ドレ〳〵。

ト中を改め

よし〳〵、金子にも、切手にも、別條はござらぬ。

ト鬼王切手に目を附け

鬼王　モシ〳〵、それは狩り場の切手ではござりませぬか。

忠太　成る程、左様。……ヤア、おてまへは曾我の鬼王だな。

景季　ナニ、鬼王だ。アヽ、それで讀めた。うぬらがやうな貧乏神がうせるので、身共の小袖を盗んだも、わいらだな〳〵。

鬼王　アヽ、もし〳〵、どうして左様な。

朝比　コレエ、げぢ〳〵め、うぬらの温袍を、ナニ鬼王か知るものか。さういへば、八軒を灯しに來た時に、なかしな奴が、うそ〳〵歸つて行つたが、もしや彼奴が働きか。コレ、遠くは行くまい、番頭、とらまへて來ないか。

三六　合點だ。さういへば、先刻二階へ上がつた若い男が

朝比　それだ〳〵。二階から、下りて來た〳〵。

又六　つらまへて來ふう。番頭、來さッし〳〵。

ト通り神樂になり、又六、三六、一散に向うへ入る。

景季　さういつても、この鬼王が怪しいぞよ。

朝比　默りやアがれ、赤蛙め。髭が睨んだ板の間稼ぎ、こりやア外に盗人があるワ。

鬼王　なんぼ身貧な鬼王でも、板の間を稼いでは、今日向築地へ歸られぬ。

景季　イヤ〳〵、うぬが怪しい。その疑ぐりは、いつも合羽で來る奴が、羽織を着たのが合點が行かねえ。

朝比　成る程、おぬしは合羽を着ぬと似合はねえ。

ト通り神樂になり、向より三六、又六、赤合羽を引つかけてゐる半七を捕へて出てくる。

又六　何も云ふ事はねえ、向うの人に逢つて應對するがいゝ。

半七　イヽエ、何にもわしは湯屋へ引ッ返される譯がねえわな。

三六　無くばいゝが、ちよつと來て譯を附けるがよい。

半七　何も連れて行くほどの事ぢやァあるまいわな。放しなさい〳〵。

兩人　マア、默つて、步ばッし〳〵。

ト連れて來て

この男であらう〳〵。

孫八　ソレ〳〵、身共が家來の合羽を、着てゐるわえ〳〵。

朝比　その男だ〳〵。マア、合羽を脫がッし〳〵。

鬼王　盜人が出ないと、おれまでが疑はれる。

ト立ちかゝつて合羽を脫がさうとする。

半七　ア、モシ、寒いからら引ッかけてゐるに、どうするのだ。

朝比　合羽に目印しがあるからの事だ。マア〳〵、おとなしく脫がつしやい。

ト紙合羽を脫がせ、景季の着類を見て

景季　そりやこそな〳〵、梶原が紋附きの、小袖だワ〳〵。

皆々　そんならこの男が、稼ぎ手か〳〵。

朝比　コレ、こりやァこなたの着物か。

半七　エヽ……こりやァ、

トうぢ／＼する。

景季　うぬ、イケ盗人め、よくマァうぬは

ト半七をくらはし、そこへ引附け

エヽ、盗人野郎め、うぬはよく大名の着物を、盗んだな／＼。

ト捻ぢつける。忠太も立ちかゝり．

忠太　ヤイ、野郎め、旦那のお召し物を、ようマァ、着てうせたな／＼。

ト引附けて、くらはす。

又六　モシ、それに違ひなくば、引ッ剥ぐがようござります。

忠太　サア／＼、脱げ／＼、脱ぎをらぬか。

ト景季小袖を引剥ぐ時、半七の上着の布子一つに脱げる。半七浴衣一つになる。景季これを知らず

景季　少しの間も寒い目をさせるがいゝ。

ト何心なく半七の布子を下に重ねたまゝ、自分の小袖を着て帯を締める。

コレ／＼、湯入りの手合ひ、この野郎をぶちのめさつしやいな。

又六　エヽ、この野郎はイケ太い奴だ。重ねての見せしめに

　ト半七をくらはす。その外皆々捨ぜりふにてくらはす。この前より仕出し大勢出て來り、門口に立つて

大勢　湯屋泥坊か。こゝへ出せ。締めてやらう〳〵。

　ト騒ぐ。

朝比　コレ〳〵、何もお前達の知つた事ぢやァねえ。通らつしやい〳〵。

　ト手桶を下げて出て、水を打つ。

大勢　泥坊だといつたから、締めようといつたのだ。間拔け三助め。

朝比　ナニ、間拔けだ。うぬら、片ッ端から食つてしまふぞ。

　ト立ちかゝる。仕出し、これにて向うへ逃げて入る。

　こんな時には女湯が氣遣ひだ。……どなたも着物に氣を附けませう。

　ト云ひながら、女湯の門口へ入る。

皆々　見せしめに、ぶちのめすがいゝ、締めろ〳〵。

　ト立ちかゝる。半七ひれ伏して大勢に縋り

半七　御免なされませ〳〵。成る程、私はあなたの着物を盗みましたが、まことに惡氣ばかりで致し

た事でもございませぬ。モシ、あちらの旦那様・湯屋のお方も、皆様も、お聞きなされて下さりませ。

ト詫びることよろしく。これより合ひ方。

何を隠しませう、私しは職人でございますが、一人のお袋が、去年からの大病、その上に餓鬼が一人、重い疱瘡に取りつかれ、女房と私しが稼いだところが、はした錢、その病人に追ひ倒され、貧乏世帶。先き程こゝの湯へ入つて、歸りがけに思はず知らず、悪い心が起りまして、ツイ斷様な板の間稼ぎを致しましたは、全くはお袋と餓鬼が、病氣の小遣ひにと、致した事でございます。お慈悲でございます、どうぞお見逃しなされて下さりませ。ハイ、御勘辨なされて、お助けなされて下さりませ。

トひれ伏して詫びる。鬼王見て

鬼王　成る程、若い男があの位ゐに云ふから、誠に嘘も吐きますまい。

景季　ナニ、此奴は空泣きと見える。忠太、ぶちのめせ／＼。

忠太　心得ました。イケ太い野郎だ。

トくらはす。

半七　ハイ〱、お小袖を返しましたから、逃がして下さりませ〱。
三六　知れた事だワ。いつまで置くものか。併し、面へ灰墨を塗つて追ひ放すがいゝ。コレ〱、實にある。
ト鉢を出す。
半七　そこを何分お願ひ申します。
皆々　あれ程ぶつたらいゝぢやァねえか。
鬼王　イエ〱、逃がすがよいが、表には大勢、彌次馬がゐますよ。
皆々　そんなら裏から逃がすがよい。
三六　それにしても、今度からうせねえやうに、よく云ひ聞かせて
又六　それがよい。泥坊め、來やァがれ〱。
半七　モシ〱、さう云ひなすつても、わつちが布子も
ト云はうとする。
皆々　サア、來やァがれ〱。
ト引つ立てるゆゑ、自分の布子を景季が着込みしを屹度目を附け、鬼王も附き、ソヤ〱云うて、勝

手口の方へ引摺られ入る。引違へて女湯の方より、月小夜婆ア、お小夜と爭ひながら出て來り

さよ　モシ、おかみさん、わたしが着物が、どうしたと云ひなさるえ。

月小　その始末は、お前のお胸にお聞き。お前はどこのお方かは知らぬが

ト云はれ、お小夜は「もしや團三郎が事か」と思ふ思ひ入れ。

お前の着てゐなさるのは、滿江樣から戴き申した其お小袖、それだによつて、山形に木瓜の定紋附き。お恥かしい事だが、去年の暮れ、七つ屋へまげに行つた道で、わたしやア引ツたくられたよ。その着物をお前が着てゐなさるから、その道行きを受取るのサ。そりやアお前、どういふ筋で着てゐなさるのだえ。

ト云はれて、お小夜「さてはそれか」といふ思ひ入れ。

さよ　そんなら、わたしが着てゐるこの着物は、お前が盜まれなさんした着物に似てゐるゆゑ、疑ぐつて其やうに云ひなさんすも、聞えてはあれど、こりやアわたしが、きつとした所から、古着で買うたのぢやわいな。

月小　エヽ、左樣かえ。そりやアマア、どこの古着屋だえ。

さよ　サア、それは……アヽ、どこやらでござんした。……オヽ、それ〳〵、賣りに來たのおやわい

なア。それで所は

　　トつかへる。此うち景季、お小夜に心ある思ひ入れ。

月小　その先きは云はれぬのかえ。さうでござんせうよ。どうで向うは盗み物、ナニ賣先きで云はれるものか。こなたは顔は美しいが、盗人の同類だよ。アイ、荒稼ぎの同類だ。この女が泥坊だ〳〵。

さよ　コレイナア、お前、盗人ぢやと云はしやんすが、同じやうな紋所は、いくらも有らうわ。外にお前の代物といふ、證據でもあるかえ。

月小　オヽ、あるの〳〵。さうして又、お前の着物だといふ證據があるかえ。

さよ　サア、その證據というては

月小　ソレ見なさい、ナニあるものか。わたしが又證據といふのは、半襟の下に焼焦げがあつたから、繼ぎをあてゝ置きやしたが、論より證據、御免なさい、この半襟の下に

　　ト立ちかゝつて、お小夜が着てゐる小袖の半襟へ手をかける。お小夜押へるを振り切り、半襟の先きを抜く。下には押冠せ繼ぎがあてゝある。

さよ　ヤヽヽ、云はんす通りに

月小　半襟の下の、この繼ぎは、これが證據になるまいかえ。

さよ　サア、それは

月小　エヽ、いけ太い。サア、脱がつしやい〱。エヽ、太い女だ。

　　　トお小夜を捕へ、件の小袖を引ッ剝ぐ。鬼王何心なく出て來り

鬼王　何だ〱、女湯にもごたつきが出來たか。

月小　イヤア、こなさんは鬼王どのだの。

鬼王　月小夜か。ハテ、惡い所で

　　　ト逃げんとする。月小夜捕へる。お小夜「さては」と思ひ入れ。

月小　コレ、鬼王どの、お前も知る通り、この小袖は滿江樣の召しおろし、この間中盜まれて、探してゐる最中、見附けたから引ッ剝いだよ。それにお前は、この湯屋に、アヽ、聞えた、流しになりたい〱と、そんならお前は、曾我の難儀を見捨てゝ、湯屋の流しを勤める氣か。エヽ、見下げ果てた男だの。

鬼王　サア、尤もだ〱が、おれも名におふ曾我の家老、忠義に二つはなけれども、どうやら變つてゐるかして、四百四病と云はせぬは、全く作者が見繕つたか。それゆゑ曾我を見放して、女湯奉公するつもりよ。

月小　エヽ、おかつしやいな。わたしやァ又この女、盗人だによつて、この儘評定に連れて行き、小袖の出どころを

ト　お小夜にかゝるを

鬼王　アヽ、さうか。そんなら鬼王もかゝり合ひ。女房の腰を押すのは亭主の當り前。この女なら、おいらが寄つて

ト　月小夜は小袖を抱へ、鬼王は大小さしたまゝ、お小夜へかゝる。景季見兼ねて、月小夜を投げのけ、お小夜を圍ふ。

月小　オヽ、痛い〳〵。月小夜ともいはるゝ女子を、なぜこゝへ……梶原さんかえ。

鬼王　モシ〳〵、源太樣々々々。曾我の忠臣鬼王夫婦、借錢乞ひではあるまいし、なんで拋つた、投げさつしやつたのだ。

景季　まだ吐かすか。毎年あるが、鬼王、月小夜、曾我の爲には苦勞をするぞよ。それにわいらは二人とも、女を捕へていぢめるが、どうやら夫婦二人とも、敵役の仕込みだな。そこで今年は梶原が引ツくり返つて實事師、惡名うけたその女、この梶原が身に引受けて……ツレ

ト　胴卷きより金五兩出し、月小夜に打ちつける。兩人取上げ

月小　ヤア、こりやお金。
鬼王　これをわしらに
景季　やるからは、女、浮氣は口外いたすな。
さよ　そんならあなたが、わたしの悪い噂を、おとゞめなさる爲
景季　彼奴等二人へ遣はす金子。
忠太　旦那へこの上、お禮申せ。
さよ　エヽ、有り難うござります。
景季　わいら夫婦は云ひ分ないか。
月小　お金貰へば云ひ分ないのサ。
景季　わいらに云ひ分ないならば、この梶原が、ソレ、忠太。
忠太　心得ました。

ト割り木を取つて二人をぶちのめし、門口へ突き出す。兩人顏をしかめ、思ひ入れあつて

鬼王　おきやアがれ。鬼王といふものは　人をぶつたり、投げたりするものだと思つたら
月小　わたしら夫婦は此やうに、ぶち叩かるゝも、役廻りと思へども、ぶち手が悪いに、ぶたれやうが

安いから、鬼王夫婦と見えればよいが。

鬼王　どうして〳〵。殊に近所の月小夜に、似ても似つかぬ色氣の無さ。

忠太　忠太は會所へ、旦那の御用で送つてやらう、サア〳〵、うせろ。

鬼王　併し、鬼王月小夜が、狂歌をよんでも入られまい。なんぞ仕様が……あるぞ〳〵。

ト湯屋の羽目に貼つたる、八人藝落し話しの張出しをめくり來て

月小　サア〳〵、お前もこれを斷うあて、

ト兩人前垂れのやうにして、月小夜は小袖を肩に掛け、先に立ち

サア、こちの人、早うござんせ。

ト節季候の三味線になり、兩人とも手拭をかむり、竹光の大小を叩き立て

鬼王　サツサとお行きやれ、月小夜。ホウ〳〵。

月小　鬼王ござんせ、お前も今年は、大役ながらも、ぶたれて入るは

忠太　毎年毎年、吉例變らず

鬼王　矢ッ張り本役、はふ〳〵な目にあふ。

月小　せまじきものはお宮仕へなんぞで、何ぼううるさい。

忠太　サッサと歩きやれ。

鬼王　ござれや女房。

忠太　キリ／＼うせをれ。

月小　鬼王ござんせ。

トこれにて兩人踊りながら、忠太附いて向うへ入る。お小夜と景季殘る。合ひ方。

景季　まことに憎い奴等だ。其方の着物を取りおつて、さぞマアこの冷るのに

さよ　イエ／＼、寒うは

景季　ソレ／＼、これなと着やれ。

ト着てゐる小袖を脱いで、お小夜に着せる。この時半七の布子は、何心なう景季が方に殘り、景季これを知らぬ思ひ入れ。この時、胴巻きの金と、切手落ちる。お小夜取つて

さよ　モシ、こりや何でござんす。

景季　それは狩り場の切手といふもの、女の持つて役に立たぬ物ぢやが、コレ、わが身は獨り身か、誰れぞの世話にでもなつてゐるといふやうな事か。さうか／＼。

トしなだれかゝる。

さよ　なんのマア、わたしがやうな者を、誰れさんがお前、世話して下さんせうぞいな。

景季　世話の仕手が無くば、われら致すの。イヤモウ、色事にかけては知つてもゐよう、ソレ、梅ヶ枝といふ女郎に、無間の鐘を撞かせ、枕の下へ手までやらせた源太ぢやわいの。

さよ　そりやァお前、いゝ加減な嘘を云ひなさるのだ。今のやうな間違ひを聞きなすつちやァ、猶々色氣が無くなつて

景季　イヤ／＼、コレ、そもじを見てから、あの女湯へ忍び込み、出るにも出られず、湯氣に上がつたではないか。即ちあれを心中と思つて、ちよつと／＼。

ト抱き附く。

さよ　そんならお前、眞にわたしを世話しなさる氣か。嘘ではござんすまいね。

景季　眞の事／＼。

ト抱きしめながら

コレ／＼、圍ひ者が否なら、すぐにお部屋とするワ。其うちには奥樣と云はせるが、どうだ／＼

さよ　其やうに云つてくんなさるなら／＼、嘘でもありやすめえから、成る程わたしはお前と寢やんせう、違ひはねえね。

景季　イヤ〳〵、違ひはせぬ〳〵。

ト又抱きしめる。

さよ　そんならわたしは、今日向お前のお世話になつて

景季　圍はれる心か。

さよ　アイ。それも亭主と相談して。

景季　ヤ、亭主があるか。

さよ　一人ござんす。しかも死ね、死なうといふ人。その男が縁切つて、お前にやらうと云ふならよし、さもない時は間男同然、わたしもお前も命づく、胸を定めて貰つておくれよ。

景季　イヤア、亭主があつては、ちつと氣障だわえ。

ト思ひ入れ。この時勝手の方、わや〳〵して、三六、又六、出羽吉、○、△、孫六。半七を引つ立て、出て來り

皆々　もう〳〵、逃がしてやれ〳〵。

三六　逃がしてやるから、今度から働きに來るな。

又六　エヽ、太い野郎だ。

ト突き放す。半七はお小夜の側へこけかゝり、兩人顔を見合せて

半七　ヤア、わりやア嗅アぢやアねえか。

さよ　アイ、お前、どうして爰へ。

半七　おらアこゝの内で

皆々　其奴は、板の間稼ぎだ〳〵。

さよ　待ちな〳〵、お前方も靜かにしなさいな。板の間稼ぎとは、この人の事かえ。

皆々　其奴は泥坊だ〳〵。

さよ　アレ〳〵、お前の事を泥坊だといふよ。

半七　さうサ、板の間稼ぎやア泥坊サ。てめえ、をかしな形をしてゐるが、そりやア誰れが着物だ。てめえ又、板の間でも働きはしねえか。

さよ　イエ、こりやアあのお方が、お寒からうが着てゐて、女房にでも、奥様にでもしてやるから、今のうちに、その相談を極めろと、これを着せなすつたのだ。

半七　アノ、人の嗅アを。お前は先刻わしをぶたした旦那だね。モシ、そりやア有り難うござります。お禮から申しやせうが、この女はわしが女房でござりやす。どこからお指圖があつて、人の女房

をお部屋にしようと極めなさるえ。

景季　イヤ〳〵、身共は極めようとは云はぬ。そりやァ女の云ふのが、嘘だ〳〵。

さよ　モシ〳〵、そりやァお前さんお情けない。たつた今、得心もせぬわたしを、あの板の間へ押しこかして、をどりかけての悪いたづら。それぢやァわたしは亭主の前へ立ちやせぬ。この譯をつけてくんなさい、くんなさい。

半七　やかましいわえ、靜かに云へ。ナニ嗅ア、この人が強淫でもしたのか。

さよ　マア、そんなものサ。

景季　コレ〳〵、身は知らぬぞ〳〵。いつ左樣な事を

半七　モシ〳〵、知らねえ者が、何のよしみにわしが女房に、お前の着物を着せて置くのだ。

景季　着せたがどうした。あの女も今こゝで剝がれて、不便なと存じて着せたのだ。それがどうした。こゝな湯屋泥坊め。

半七　ナニ、湯屋泥坊だ。さうぬかす汝は、亭主のある女房を、強淫するわりやァ間男。まだその上に、湯屋泥坊とはわれが事だ。

景季　ナニ、身が湯屋泥坊だ。

半七　着てゐる着物は誰れがのだ。

景季　ヤア。

ト着物を見て、恟りして

これは誠に見馴れぬ着物。

半七　その褞袍はおれがのだ、斷りなしになぜ着てゐる。

景季　サア、それは

半七　それでもおれが板の間か。

景季　サア、それは

半七　間男する氣か。

景季　サア、それは

半七　湯屋泥坊か。

兩人　サア〳〵〳〵

半七　湯屋泥坊の、間拔け野郎め。

ト景季がそつぽうをくらはし、したゝか踏みつけ、キツとなつて

おれが布子だ。脱いで返すか、返事をしろ。

又六　さういふ事なら、サア〳〵、脱ぎなさい〳〵。

ト景季が着物を脱がせ、半七へ渡す。これにて、景季裸になり、半七は自分の布子を着る。

景季　其方の物なら、返したら云ひ分はあるめえ。サア、女、脱いで返せ〳〵。

さよ　これを脱がせるのかえ。

半七　イヤ嚊ア、脱ぐな。われがその褞袍を着てゐねえぢやア、間男仕掛けた證據が無い。矢ツ張り着てゐろ。

ト此うち帯など締めてゐるうち、懐や袂を探し、思ひ入れあつて

オヤ、サア〳〵、無えワ〳〵。大變だ〳〵。

トうろたへて探す。皆々立ち寄つて

皆々　モシ、何が見えませぬえ。

半七　アイサ、よそで借りて來た金を十兩ばかり、紙にひねつて、ちよつと袂へ入れておいたが、それが見えやせん。……オイ〳〵、こんたが取つたに違えねえ、出さつし〳〵。

景季　コリヤ〳〵、滅法界な。其方の金が袂にあつたやら、身共がナニそれを……知らぬワ〳〵。

半七　知らねえと云はせるものか。なぜおれが着物を着てゐたのだ。この泥坊め、出しやァがれ。出しやァがらねえと、うぬが懐を改めて見るぞ。

景季　ア丶、コレ〳〵、身共が懐には、成る程金はあるが、こりやァおれの金ぢや。

ト胴巻きより小判を出して見せる。

半七　おれが金の、人の金のと、印しでもあるか。

景季　随分印しがある。おれが小判はいびつになつて、桐が附いてゐる。

半七　黙りやァがれ。盗人猛々しい。おらァその金をみんな寄越せといふぢやァねえ。取られた金を十両返しさへすればよいのだ。サア、返せ。うぬァ大名だの、燈明だのと、味噌を上げやァがつて、貧乏人の金を、ぬく〳〵と十両取つて、猫婆も押しが強い。キリ〳〵こゝへ出しやァがれ。

景季　無理な事を云ふ男だ。見す〳〵この金をば

半七　出さゞア、取る所で取つて見せる。サア、一緒に歩べ。

ト胸ぐらを取る。

景季　ア丶、コレ〳〵、仕方がない。出すよ〳〵。ア丶、とんだ災難だ。……其方の金は十両だな。

ト小判を算へて、十両出す。半七、残りの金を、ジロ〳〵見る。

ソレ、十兩返したぞ。

ト渡す。半七取つて

半七　太え奴だ。すんでの事に、十兩玉なしにするところだ。

ト懐へ入れる。

景季　それで、もう云ひ分はあるまいな。

半七　まだあるわえ。

景季　何がある。

半七　間男の扱ひ金を寄越せ。

景季　エ、、十兩取つたその上に

半七　今の十兩は、おれが金だから取返したのだ。うぬが泥坊しやアがつて、代物を取返して、無難に濟ましてやつたのは、此方の懐といふものだ。これからは間男の詮議、野郎め、首を寄越すとも金を寄越すとも、返事をしろ。

景季　どうも首をやつては、少し不自由だから、金の方にしよう。ソレ、お定まりの七兩二分。

半七　うぬが首は七兩二分でも、大事な嬶アも、一緒に切らにやアならねえワ。嬶アの首代も一緒に寄

越せ。

景季　これは又、珍らしい扱ひだな。二人前の首代を出せか。そんなら、女房の方が七兩二分、おれが首は二朱位ゐのものだから、兩方で七兩二分二朱にまけて下さい。

半七　白癡が古着を買ふやうに、べら坊に刻みやァがる。いゝワ、金もいらねえ、矢ッ張り首の方にしよう。

ト景季の脇差しを引ッたくり、振り廻す。

さよ　サア〳〵、どうせ間男の惡名うけたわたし。お前の男の立つやうに、切りなせえ〳〵。

半七　金を出さずア、間男の明りを立てる。うぬがいけッ首を

ト又拔き身を振り上げる。景季は胴卷きの中より又二分出す。この時、最前の切手出るを、お小夜目を附ける。

景季　サア〳〵、濟ましてもらはう。

半七　イヤ〳〵、料簡ならねえ〳〵。

ト通り神樂になり、向うより忠太出て來り、あとより團三郎、布子羽織、大小にて、山形に木瓜の紋附いたる小田原を灯し、出て來り、何心なう内へ入り、大勢立ち騷ぐゆゑ、提灯を消して、履き物を持

つて上の方へ行き、二階梯子を上がりかけ、振り返つて窺ふ。忠太この體を見て

忠太　ヤア、お前樣、また裸におなりなされてか。どういふ始末でござる。

景季　コリヤノ〱、忠太、今の女は亭主があるワ。今間男の相場最中。

忠太　ハテ、それは大變でござります。

景季　コレ〱、女の亭主、今更云ひ譯ではないが、あの女を妾に致さうと申したは、誠に間違ひ。そこへ間男の惡名、是非なく七兩二分、まだ料簡ならんぬといふ事ゆゑ、二分を張つた都合八兩。これにてどうぞ、濟ましてくりやれ。

ト無理に金を半七へ押附けるを、半七思ひ入れあつて

半七　コレ〱、よく物を積つても見ろ。七兩や八兩で、人の大事な女房を、なぐさまれて濟むものか物を云はずと、女と男の二つ首だよ。貴樣の首はいくらに附く。そんな安い首は、二朱か三朱に買つておかう。コレ、おれも江戸ッ子だワ。花川戸の長兵衞ともごろつき友達、茜足袋屋の息子株、嚊アを連れて旅稼ぎ、今ぢやアぶしよくの野晒し半七。こなたに女房を取られては、面が立たねえ。出合ひ場所は、この湯屋に、內の奴等も得心で、人の女房の抱き寢をさせるか。返事次第でこの屋體骨、連尺附けて背負つて行くぞよ。

皆々　イヤア。

さよ　もう／＼、この上間男と、浮き名の立つたこのお小夜、サア、切りなさい／＼。

ト覺悟の體。團三郎うしろにてこれを聞き、さてはと二人へ目を附ける思ひ入れ。

景季　コレ／＼、町人、八兩金で不足なら、して、いかほど出せば濟ませるのだ。

半七　サア、ざつと百兩サ。

ト景季膽をつぶし

景季　イヤア、百兩出せとか。

半七　出さぬとうぬら、首をもぐぞよ。

景季　アヽ、出します／＼。コレ／＼、忠太、金というてはもう僅か。この上は、てまへもおれも、着類大小皆差出し、それで扱ふより外はあるまい。

忠太　成る程／＼。いづれ主人のお爲、いかやうとも仕りませう。

ト忠太は襦袢一つになり、小袖大小を出す。景季、胴巻きの金を殘らず出し、切手を持つて

景季　何分これで、命乞ひをお願ひ申します。

半七　そんならこれで、濟ましてくれと吐かすのか。

兩人　お願ひでござります。
半七　どうするものか、仕方がない。嗅ア、濟ましてやらうか。
さよ　さうもしなせえ。
半七　エヽ、命冥加な赤貝め。もう何も無えか。
景季　有りは有つても、切手ばかりぢや。
半七　それも寄越せ。
景季　ナニ、狩り場の切手だ。其方の役には
半七　役に立たうが、立つまいが、置いて行かぬと、ぶつた切るぞ。
景季　アヽ、然らば差上げます。
　　ト切手を半七に渡す。
忠太　時にお旦那、お寒からう。マアノヽ、これでも召して
　　ト赤合羽を着せる。
景季　サアノヽ、忠太、首のあるうち、屋敷へ歸らう。
皆々　おいらも道まで送つて進ぜませう。

半七　板の間稼がぬ半七を、稼ぎと吐かした番頭や、流しの野郎も褞袍脱げ。否だと吐かすと、ぶつた切るぞ。

三六
又六　アヽ、脱ぎます〳〵、濟み口ならば

ト裸になり、着物を出して

これでよろしう。

半七　濟ましてやつたといふ印形、うぬら一々面へ墨だぞ。

景季　イヤ、樣々な

ト立ちかゝるを、ありあふ油墨の鉢を取つて四人をくらはす。これにて墨は散亂して、四人の顏は黑くなる。

皆々　イヤア、あなたのお顏が

景季　くろいども、供をせい。

ト通り神樂になり、景季忠太に皆々附いて向うへ入る。又六女湯の方へ入る。半七、雜物を集めて

半七　嗅ア、道で輕子を賴まうか。それまでてめえも

さよ　さう云つても、どうして女が、この雜物を

團三 持てずばわしが、持つて行つて進ぜませうか。

ト合ひ方。

半七 こなさんは誰れだ。

團三 ハイ〳〵、わしは小揚げ輕子でございます。

半七 丁度幸ひ、この雜物を持つてもらはう。駄賃はいくらだ。

團三 ハイ、目方をひいたその上で、賃錢の高は云ひませうが、高の知れたその雜物、いくらかくらと極めずとも、あれから聞いてゐましたが、こゝでドサクサ間男の、相場の立つた定値段、それを定木にいか程でも、其方でよいほど拂つて下さい。

半七 その間男の相場なら、こゝで極めたは百兩と

さよ ぬしの口から出次第に、相場を極めた首代を、二本差したる小揚げさん、お前もこの荷を間男の、命の相場で持たうとは、どういふ事で

團三 どういふものか存ぜぬが、夫婦二人が間男の、命の相場を聞くばかり。それで極りの定直段、紛れもござらぬ駄賃附き、問屋場からの極めより、二人の衆の極めたが慥か。送り荷物の繪符ならば、これを印しに

ト以前の小提灯を出す。兩人思ひ入れあつて、この時朝比奈出かゝり、窺ふ。

さよ　山形庵りに木瓜は、わたしが今まで着てゐた着物ゝ話しの様子が曾我様の

半七　その定紋の庵に木瓜。

さよ　そんならもしや契約の、曾我の御家來

團三　アヽコレ。今更それを申しては、助け置かれぬ刀の手前。併し我れらも今の身は、後妻を持しは今更に、かけ構ひなき上からは、夫婦の縁もスッパリ切つた。サ、切手もらはう町人夫婦。

半七　すりや、アノ、女の縁切つて

朝比　切手といふは、慥かに今の

團三　二枚の切手。

半七　ヤ。

團三　以前の男の縁までも、幸ひこゝで、切手もらはう。

朝比　成る程、素人の手にあつて、益なき切手。……サア、スッパリ男の縁切りに

半七　無事に濟ますが間男の、相場を極めた身の不肖、首の細つた茜足袋、その野晒しの半七に

さよ　ころび合つたるいたづらは、お小夜もいはゞ命づく。


尾上菊五郎
国芳画


市川
團十郎

朝比　逆澤瀉の鎧ゆゑ、金の工面の曾我一家。

半七　せめて足にも不埒の首代。

ト胴巻きの金を出す。

さよ　そんならお前の縁切つて

ト件の切手を取つて投げてやる。團三郎取つて

團三　こればつかりは

ト取つて戴く。又六窺ひゐて

又六　それを。

トかゝるを、投げのける。朝比奈は又六を引敷く。その間にお小夜、半七は、件の雜物を持つて門口へ出かゝり

さよ　首尾の好いうち

半七　切手をしほに

又六　ムウ。

ト又かゝるを、朝比奈見事に投げる。團三郎切手を懷中する。途端に木の頭

半七　お暇申します。

ト　お小夜の手を取り、行きかゝる。これをキザミ、双方見合つて、よろしく拍子　幕
通り神樂のツナギにて引返す。

第一番目後の三立目

飛石山古寺の場
同　裏手の場

役名――笹野權三。幡随長兵衞。本庄助太夫。白井兵左衞門。梶原源太景季。同宿、殘月。番場の忠太。下男、久助。白井權八。權三妹、八重梅。權八妹、お才。友達娘、龜鶴。同、手越。同、龜菊。

本舞臺、三間の間、飛石山古寺の客殿、正面、碎けたる阿彌陀、須彌壇、左右の見切り誂への通り飾り附け、風の音、捨て鐘、かすめたる禪のツトメにて幕明く。

ト矢張り右の鳴り物にて、向うより景季、忠太、前幕の赤合羽、襦袢の形にて、慄へながら出て來り

忠太　モシ〳〵旦那、あなたお寒うはござりませぬか。

景季　コリヤヤイ、この冷るのに合羽一つだもの、寒うなうて何と致さう。今宵はさて、怪しからぬ目にあうた。

忠太　お旦那は色事ゆゑの筒もたせ、お首のあるのがお仕合せでござります。その上の俄雨、爰らでやめて參りませうか。

景季　幸ひ向うは、六浦の飛石寺、名代の古寺、妖怪出づると專ら申すが、それぞ幸ひ、化け物を見屆けながら、雨宿り致さうかえ。

忠太　モシ〳〵お旦那、それは惡い思ひ附き。此やうなまんのわるい晩は、御無事になされませ〳〵、

景季　此奴は臆病な奴の。身共が先祖は、鎌倉の權五郎景政、その末子たる梶原の家柄、何程の事やあらん。變化が出ると手捕りに致すワ。この景季が武勇の程を、見物いたせ〳〵。

忠太　へイ〳〵、それは近頃迷惑な儀でござりまする。

ト二人とも、わな〳〵慄へながら、よき所へ來て、捨ぜりふ云ひながら擬勢してゐる。この時風の音烈しく、忠太「ワッ」といふを、景季叱り附けて

景季　おのれ、變化め、捻り殺すぞ〳〵。

ト思ひ入れ。寐鳥、凄き合ひ方、風の音になり、上手の物蔭より、殘月、同宿坊主の形の上へ、大鍋

の夜具を着て、高足駄、入道の大頭を冠り、棒を突いて出る。下の方より珍齋、茶道の形の上へ、木綿模様の布子、背を縮めて、はつてう笠を冠り、酒の通ひとちろりを提げて出てくるを、兩人見附け、わな／＼慄ふ。ちり／＼の合ひ方になり、變化は兩人を招いで嚇す。これに恐れて

兩人　南無阿彌陀佛々々々々々々。

ト蹲る。風の音、寢鳥、ドロ／＼。變化二人は浮かれて、振りあつて奥へ入る。

景季　コリヤ／＼番場、もう爰には、居られぬ／＼。

忠太　ソレ御覽じませ。サア、お立ちなされませ／＼。

ト兩人、慄へ／＼花道へかゝると、この時風の音烈しく、向う。バタ／＼と人音するゆゑ、兩人うろたへ

兩人　ヤア、又向うから

ト引ツ返して東の方へ入る。矢張り風の音、一つ鉦、時の鐘を打ち込む。向うより權八、股立ちにて俵を冠り、件の高札をかい込み、走り出て來り、舞臺を窺ひ見て

權八　棲み荒れたりしあの飛石寺、まさに妖怪出づるの魔所、胴試しには屈竟の場所。さるにても、笹野氏は、我れより先きへ參りしか。但しは未だ見えざるか。

ト思ひ入れあつて、舞臺へ來り

東西わかぬ眞の闇、せめて焚き火の用意して

ト探り寄つて、落ちてある木の葉を集めて、その中に小石あるを探り見て、鐵を以てこれを打つ。石火出て、木の葉に移り、燃え立つ事。一つ鉦、時の鐘、凄き合ひ方、風の音、火にあたる思ひ入れあつて、件の高札を立てんとして、權三の高札の立つてあるを見附け

ヤヽヽヽ。こりや笹野氏が持參の高札、立ちあるからは、さては權三に先越されしか。

トあたりを窺ひ、よき所に住ふ。ドロ〳〵になり、上の方に烟硝火立つて、差し金の心火燃える。權八身構へして

さてこそ變化、ござんなれ。間近く寄つたら、手取りにするぞ。

ト刀構へてきつとなる。これにて凄き合ひ方、ドロ〳〵、寢鳥。上の方より、丸綿を冠り、白無垢、娘のなり、腰高の茶碗に茶を汲んで出て來り、恥かしき思ひ入れ。權八見て

姿形も白いでだち。さてこそおのれ、逆意の者か。

ト太刀取つて詰め寄る。件の變化飛びのいて、遠くより茶を出す。權八思ひ入れあつて

エヽ、此奴は、この權八が怖いのか。恐ろしいか。

ト近く寄る。女は遠ざかる。

おのれ、それほど怖いか。併し、好いところへ茶を持つてうせたは、氣のきいた化け物め。どりや、その茶を

ト茶碗を取らんとして、片手に變化の手をしかと押へる。これにて變化は、愕りして慄ふ。

正しくおのれは狐狸の業。サア、正體を現はせろ。狐狸ならば、たしかに尻尾が

ト尋れる思ひ入れ。女は恥かしき樣子を見て

なんだ、此奴は慄へるか。この權八が恐ろしいか。その筈〳〵。ヤイ、變化め、ナニこれしきに侍ひが恐るゝもので。同役の權三に逢ふまで待ち遠だ。その間に、身共が肩を揉め。サア、後へ廻つて肩を揉めよ。

ト云はれて、女は嬉しき思ひ入れ。これより權八の肩を揉む。一つ鉦、風の音、凄き合ひ方。

コレ、變化め、この權八はな、いまだ部屋住み、殊に獨身。われも大方、夜ならでは出て來まいが、即ち女は陰にして、男は陽なり。女房といふものは夜の伽。コリヤ、身共が屋敷へ夜ばかり出て、權八が女房にならぬか。

ト云はれて、女は肩揉みながら、嬉しきこなしあつて、後より、いろ〳〵と戯むるゝ事。

權八も、化け物を女房に持つたと沙汰あらば、武士の名聞、朋友の手前この上やあるべき。承知か、承知か。權八が屋敷に通ひ、女房に迷つて出るか。

ト云はれ、猶々嬉しげに抱き附かうとする思ひ入れ。

承知の上なら變化の女、こゝで手附けに、其方を身共が

ト騙し寄つて生捕らんと、刀の提げ緒をたぐつて、繩さばきして、縛しめんと引寄せる。女はうろたへ逃げんとするを、追ひ廻して、立廻りよろしく

おのれ變化め、引ッ縛つて

ト引附ける。此うち後よりお才、振り袖娘にて走り出て、これを留めて

さい　聊爾なさるな。モシ、兄さん。

ト縋つて留める。權八見て

權八　ヤア、そちや妹、どうして爰に。……そんならおのれも變化よな。

さい　イヽエ、わたしは誠のお才。お前は日頃の願ひが叶うて

トこの時綾鶴、手越、綾菊、いづれも振り袖娘にて、手燭を持ち出て

綾鶴　さぞ喜んでござんせう。お世話申して此やうな

手越　わたしらまでが安堵の思ひ。
龜菊　ほんに重荷を下ろしたわいなア。
權八　ヤヽ、さ云ふは家中の娘御達、いとも怪しきこの場所へ
龜鶴　怖さいとはず友達の、岩城右内が娘の龜鶴
年越　安成隼人が妹の手越。
龜菊　磯村軍次が妹の龜菊。
さい　みな御家中の娘御さん。
權八　して、捕へたる、これなる變化は
八重　本庄氏の卽ち娘、權三が妹のこの八重梅。お前が今の、仰せ嬉しき今宵の首尾。
ト丸綿を捨てる。
權八　さてはこなたは八重梅どの
八重　權八樣、變化のわたしを、必ず可愛がつて下さんせ。
ト權八に抱き附く。
權八　さはさりながら合ひ役たる

ト思ひ入れ。この時奥にて

権三 権三は即ちこれに居る。お騒ぎあるな白井氏。

権八 ヤア、あの聲は

権三 千秋萬歲の千箱の玉を奉る。

ト、風の音、合ひ方にて、権三、三寶に熨斗昆布、土器、長柄の銚子を持ち、謠ひながら出てくる。

権八見て

権八 すりや、権三にも疾くより承知か。

権三 妹が願ひの戀ひ男、権八どのに八重梅を、兄の身として執り持つも、どうやら異な仲人ゆゑ、貴殿の妹御お才どのへ、此よし詳しく物語り、かねて噂のこの古寺に、妖怪出つると評判も、ありやうは妹に、推しての祝言させたい爲の白でたら、幽靈ならぬ嫁御寮。

さい 八重梅さんを兄さんに、執り持つ爲のわたしが働き。友達衆に譯いうて

雛鶴 笛や太鼓や三味線で、嚇しかけたる囃し方。

千越 常からあの子と仲のよい、わたしは寺鉦、どろ〳〵の、太鼓打つたる下方を

雛初 拍間に合はずも日頃から、惚れてござんす様の爲

　　　　トこの時殘月と珍齋出かゝりゐて

殘月　この同宿の殘月が、煙硝、魂ひ、燒酎火、芝居でするのを見習うて

珍齋　その上茶道の珍齋は、河童のお化けが大笠で、酒の通ひのお定まり。その棒組みは殘月どの、衣着を冠つた大頭。

殘月　古手な見越し入道も

珍齋　八重梅樣のお世話して

權八　そんなら怪しく見せたるも

龜鶴　お前を執り持つ

皆々　拵へごと。

權八　さうとは知らず、忠孝の、高札立て置き手柄をと、思ひし事も今更に……併し斯樣に僞つて、權三をはじめ殘りの衆。矢ッ張り白井をたぶらかすのか。油斷はならぬ。

　　　　ト思ひ入れ。

權三　何しに僞り云ふものぞ。疑がはしくばこの場にて、兄が執り持つこの八重梅。殊にこの八重梅は、義理ある妹、親助太夫の胤ならず。

八重　わたしが誠の父さんは、わづかな小者の娘ぞと、噂ござればそれゆゑに、もしや跡にて嫌はれなば、友達衆へも顔立たず。どうぞ女夫の杯を、お氣に入らずと權八樣、願ひを叶へて、下さりませ。

權八　すりや、助太夫どのゝ實子ならざる八重梅どの、何しにそれを某が、忌み嫌はんや。我れも親々知らぬ身の、この身につまされ猶更に、サヽ、願ひに任せて祝言を

八重　そんなら杯なされて下さりまするか。もし、兄さん、わたしが願ひは叶ひました。エヽ、嬉しうござんすわいなア。

ト恥かしきこなし。

權三　その一言に滿足いたす。元は拙者も養子の兄、親助太夫の實子には、お小夜といへる中娘、不所存者にて、町人づれとその日暮らし。八重梅とても、元は家來の胤なれど、御不便厚き者なれば、權八どのゝ承知を幸ひ、少しも早う杯を。サヽ、妹、早う始めて

ト土器を差附ける。八重梅こなしあつて

八重　すりや、わたしが方から

權三　聟、權八へ。

八重　エヽ、嬉しうござんす。

權三　相に相生の松こそ、めでたかりける。

ト酌をする。八重梅は土器を干して、三方へ置く。

權八　成る程、お受け申さうが、その前方に權三どの、拙者も一つの願ひがござる。この杯は權八どの、妹と固めの

權三　この權三に願ひとは

權八　別儀でござらぬ。權八が妹とても、胤腹は變りましたる、義理ある同胞。かねて貴公に、心ある樣子と見えしゆゑ、某もこの祝言のめでたい折から、お才は何卒其許へ、進上いたしたい。笹野氏、お氣に入らずと、某に免じ、末長う彼れめと、添うてもらひたい。

さい　エヽ、アノ、わたしをお前が

權八　心を通じてゐようがな。

權三　すりや權三めに、妹御の、お才どのを添はせんとは

權八　お氣には入るまいが、拙者の賴み。

權三　拔差しならぬ妹御。身共が妹を進ぜる上は、また此方も權八どのゝ、義理ある妹と緣組みは、い

かにも承知いたした。

さい　日頃の願ひも叶うたわたし。

八重　さすれば願ひはお互ひに、女夫々々の今宵の固め。

權八　承知の上は、固めの杯。

權三　小舅互ひに妹の聟どの。サヽ、お酌いたさう。

權八　然らば固めの

ト土器を取上げる。權三酌をする。

女三　三國一ぢや、聟取り濟ました。しやん〳〵のしやん。

權八　めでたい〳〵。

權三　これに附けても中娘、不所存者のお小夜めが、連れ添ふ男といふは、白井の若黨平左衛門が、悴の半七。

權八　すりや其許の妹御、曾我の團三へ契約の

權三　父の肉身分けられし、妹なれども惰弱の女め。

權八　その妹御も折を窺ひ……マア〳〵、めでたう今宵の杯。權三どの、重ね〴〵の貴公の祝言。

ト三方土器をお才の前へやる、權三しよげたる思ひ入れにて

權三　然らば貴公が

權八　聟が仲人。

八重　嫂のわたしは待ち女郎。お才さん。

さい　八重梅さん。

殘月　エヽ、おめでたうござります。

權三　これは迷惑。

權八　千秋萬歳の千箱の玉を奉る。

ト謠ひの見得、よき程に合ひ方、時の鐘にて、この道具鷹揚に廻る。

本舞臺、中足の土手、前通り浪板、枯れ蘆しげり、正面卒塔婆のまさき垣、うしろは幕にて見切り、この道具前に押出し、好みの通りよろしく納まる。

ト禪のツトメ、時の鐘。下座より兵左衛門、塗り陣笠、加賀簑、足駄にて出て來り、赤合羽の中間、四つ手網の張つたるを擔ぎ、箱提灯を持ち、出て來り、兵左衛門川の面を見て

兵左　コリヤ〳〵、こゝらが魚の宿りさうな場所ぢや。こゝへ下ろせ〳〵。

中間　畏りました。

ト提灯を置き、件の網を川中へ下ろす。兵左衛門手傳ひ、よろしく、矢張り禪のツトメ、雨車、向うより助太夫、以前のなりにて、足駄、蛇の目傘。供の中間、箱提灯を持ち、先きに立ち、桐油袋に入れたる弓矢を擔ぎ出て來り

助太　コリヤ〳〵、可內、其方に雨具がなうて、さぞ難儀であらう。

中間　イエ〳〵、小降りになりました。どうやら晴れさうでござります。

ト此せりふ云ひながら舞臺へ來る。兵左衛門を見て

助太　それにござるは、白井氏ではござらぬか。

兵左　これは〳〵、助太夫どの。御覽なされい。拙者はかねて好みの道ゆゑ、この入江へ夜網を掛け、小魚なりと引揚げうと存じて

助太　これはよろしきお慰み。身共は又、弓矢を持參いたせしは、塒の水鳥射とめんと、蘆間を尋ね參つてござるが、幸ひと貴殿にお目にかゝる上は、身共かしかと口談いたす、彼の若殿の御大望

ト云はんとするを、思ひ入れあつて

兵左　アイヤ、その儀でござらば

　　トあたりを見廻し

コリヤ〳〵家來、身共は助太夫どのと內談致す用事もあれば、其方は提灯を殘し、暫くこゝを遠ざかつてくれい。サヽ、參れ〳〵。

助太　成る程、身共も內々申さにやならぬ儀もあれば、其方もあの小屋の軒へなりと參つて、よい時分に迎ひに參れ。併し持參の弓矢、提灯は、矢張り差置いて行きやれ。

中間　へイ〳〵、畏りました。

同　サア、連れだちませう。

　　ト時の鐘、提灯と弓矢をよき所へ殘し、中間二人下座へ入る。兵左衞門跡を見送り

兵左　家來を遠ざけしは、兼ねての內談、あの大殿を失ふ手配り。

助太　コリヤ。

　　ト思ひ入れ。この時うしろの生垣を押分け、權八、權三、件の高札を持ち、窺ひゐる。

今宵塒の小鳥をと、弓矢を持たせ參つたも、承れば大殿には、瀬戸明神へ武運の祈り、夜陰に至る御參詣。道にて殿を射て落さんと、さてこそ持參いたしてござる。

兵左　天晴れ妙計。拙者も今夜は夜網と申し、屋敷を出たも、ありやうは、殿を待受け一討ちと、さてこそ用意の飛び道具。

ト魚籃の中より種ケ島を出して見せる。

助太　出來ました。これと申すも、御子息志摩五郎どのを世に立て、拙者が養子のあの權三、大祿取りに致さん望み。

兵左　イヤモウ、此方もその通り、藁の上から養子の權八、彼れめに榮華がさせたい願ひ。お家の重寶天國の劍、まツた陰陽の御判、貴殿と某兩家の預かり、わざと我れ〳〵失ひしと云ひ立て、誠のところは、その二品、志摩五郎どのが密かに隱し置くからは

助太　それを越度に大殿はじめ、志摩五郎もおツ方附け、あとは我れ〳〵、心の儘。併し互ひに、コレ固めの神文いたして

兵左　心得ました。幸ひ用意の

ト懷中より矢立てと紙を兩人とも取出す。此うち後の兩人、窺ひ〳〵垣間より出て來て

助太　雨の晴れ間に

兵左　どりや、神文を

ト提灯のあかりにて書かんとする。この時兩人走り寄つて、双方の袖を捉へる。

權八　親仁樣。

權三　あまりと申せば

兵左　ヤ、われは權八。

助太　權三もこゝへ

兩人　何しに參つた。

權三　この高札の二字の文字は

權八　忠孝二つ。

兩人　それがどうした。

權三
權八　御異見の爲。

兩人　ヤア。

權三
權八　エヽ、あなたはなう。

ト思ひ入れ。禪のツトメ。兩人思ひ入れあつて

權八　何暗からぬ身を以て、殿を失ひ、その上に、御惣領たる千島之助樣、あなたまでをも闇討ちに

權三　殊に今宵は大殿もろとも、お二方にて明神へ、御參詣とは表向き、三老の方々へ、跡目願ひの今日今宵。飛び道具にて失はんとは、世にも稀れなる大惡人。御企てあればとて、天道無くばいざ知らず

權八　成就なさんは存じも寄らず。とく／＼惡念發起あれ。悴が御異見

權三
權八　父上樣

ト諫むる思ひ入れ。兩人思ひ入れあつて

助太　又しても／＼、親の心を無にする悴め。かゝる惡事に組みするも、おのれが榮華を見ようが爲め。

兵左　殊にお家の御寶、我れ／＼兩人預かりにて、表向きをば紛失と、沙汰させるのもこれも計略。我れ／＼惡念發起せば、失ひし寶が今にも出るか。

權三
權八　サ、それは

助太　寶が出でずば白井本庄、兩家の難儀。そこに心が附かぬか、權三。

權三　それゆゑ二品、何卒事無う。

助太　イヽや出さぬ、罷りならぬワ。

權八　親人とても某を、不便と思しなされなば、何卒お心取直し、御次男樣へ異見を加へ、大江のお家

の榮えを願うて。

兵左　ぬかすな悴。惡事に一味もおのれが爲。それに異見は罰あたり。聞く耳持たぬぞ。そこ退きおらう。

ト足蹴にする。この時兵左衞門の懷中より、金毘羅の守り落ちる。權八取つて

權八　こりやコレ讃州

兵左　オヽ、象頭山の守りだ。助太夫どのより貰うたる、武運長久祈りの守り。

助太　身共も卽ち、コレこゝに、肌身離さぬ御守り。懷中なして二人の主人を

兵左　ぶち殺しても家國を、押領なしてわれにやりたさ。親の心も存ぜぬ悴め。エヽ、こゝ放せ。

ト守りを取つて懷中する。助太夫も同じく懷中する。

權三　その橫しまの心にて、何しに神の御利益が

權八　何とてかゝる企てが

ト兩方より縋つてキッとなる。この時行列三重かすめて、向うへ高張りの提灯、遠目に見える。皆々見て

助太　ヤヽ、向うに見ゆるは、慥かに主人のありや行列。

兵左　今宵仕損じ又いつか、かゝるよき首尾覺束ない。

助太　用意あられよ、兵左衞門。

兵左　いふにや及ぶ。

ト兩人とも權三權八をかきのけて、飛び道具を取つて向うを目當てにする。

權八　すりや、これ程に申しても

權三　聞濟みなきか、親仁樣。

兩人　いつかな〳〵、ひるがへさぬ。

トこれにて双方思ひ入れあつて

權三　養父の親人、大切と存ずるゆゑにこの御異見。

權八　斯程に申して承引なくば、お家の大事にや替へられぬ。

權三　主人の爲には親をも討つ。

權八　これ侍ひの習ひとあれば

權三　助けおかれぬ。さりながら、藁の上より十八年、手しほにかけてのいつくしみ。殊には養父。何とて刃物を。

ト思ひ入れ。

権八　そりや権八とても同じ事。互ひに討たれぬ養父同士。

権三　然らば替つて、拙者は白井

権八　この権八は本庄氏。

助太　両家の養父を

兵左　両家の養子が

権三　討たねばお家の

権三　権八　納まりが

ト屹度なる。

助太　すりや、おのれらは

兵左　身共ら二人を

権八　お覚悟あれや

権左　お二人様。

兵左　ナニ小ざかしい。権三は身共が

助太　おのれ權八、不便ながらも

ト權八へ切り附ける。兵左衞門は權三へ切つて行く。これより鳴り物變つて、兩人刃引きと知らず立廻りよろしく、權八は助太夫を切る。權三は兵左衞門を切る。兩人とも薄手を負ひ、よろしく立廻りのうち、前なる海へ落ちる仕組み。權八、權三駈け寄つて、水中をキッと見て、思ひ入れ。

權三　いかにお主の爲ぢやとて、貴殿の親を、貴殿の見る前

權八　某とても、この仕合せ。これも何ゆゑ、主君のお家を

權三　立てんが爲と、この仕合せ。

權八　その上入水の上からは、所詮存命思ひもよらぬ。

權三　これにて惡事の根を斷ち切らば

權八　萬代不易。

兩人　エヽ、忝い。

ト思ひ入れ。本釣り鐘。兩人キッとなつて思ひ入れ。

權三　さはさりながら貴殿の眼前、養父を討[illegible]たるこの權三、よもや、この儘見遁がす事は

權八　そりや此方も同じ事。養父を討ちし權八を、見遁がし置くは後日の人口、誠の武士の道立つまい。

権三　さある時には此方とても、養父本庄助太夫を、討つたる権八、この場で敵を

権八　兵左衛門を討つたる権三。見遁がし置かれぬ武士の意地。

権三　然らばこれにて、互ひに親の敵討ち。さはさりながら、この仔細は、家中の内にて知る者無く、
亂心なぞと沙汰あらば、世上の譏り。

ト あたりを見廻し、落ちてある紙と矢立てを取つて

殿に敵たふ兵左衛門、それゆゑ権三が仕留めしと、書置き認め殘し置き、貴殿を討つゝ、討たる
るも

権八　そりや天道に任せんより、外に仕様も無き合討ち。拙者も同じく貴殿の養父の、殿を覗ふの悪事
を認め、それを殘して其許の、手にかゝるとも、助かるとも

権三　この刄傷の仔細詳しく、貴殿もそれにて

権八　おてまへも

ト 變つた合ひ方、時の鐘。兩人互ひに、落ちたる矢立てにて、さら／＼と認め、雨水へ浸し、二張り
の提灯へ貼り、元の所へ直し

権三　斯樣いたして、心置きなう、果し合ふのが武士の道。

權八　左樣無うては刀の手前。

ト兩人指寄り、顏見合せ

權三　アヽ、誠にかゝる惡緣も、いはゞ妹が緣により、互ひに小舅、その上に、これまで近しき朋友の、敵同士となるも前世の

權八　約束事と思ふゆゑ、もし御身を某が、首尾よく討たば其許の、後々までのとひ弔ひ、屹度いたして進上申さう。もしも拙者が討たれなば

權三　必ず氣遣ひおしやるな。その時こそは互ひの事。併し拙者も養父の敵、左樣仰しやる權八を、物の見事に討つて捨て、跡の回向は致して進ぜう。迷はずそれにて成佛おしやれ。

權八　すりや某を其許が

權三　おんでもない事、養父の敵。

權八　さはさりながら水子にて、別れし實の母者人、いづくにお暮らしなさるやら。

ト思ひ入れ。

權三　某とても顏知らぬ、父母とても、最早この世に

ト思ひ入れ。

役にも立たぬ、この繰り言。支度がよくば

權八　イザ

權三　イザ

兩人　イザ／＼／＼

ト兩方とも刃引きと知らず、切りかゝる立廻り。これより兩人とも我れ切られんとする立廻りよろしく、よきほどに向うより久助、絆纒股引き、草鞋、旅のなりにて、花川戸と書いたる小田原提灯を提げ出てくる。あとより幡隨長兵衞、吉例の半合羽にて、一本差し、旅のなり、はるか下がつて、駕籠舁き、四つ手駕籠を擔ぎ、柳行李、風呂敷包み、三度笠附けたる垂れを上げしまゝ擔ぎ出て來り

久助　モシ、親方、爰からモウお召しなされませ。道がぬかりますぞえ。

ト云ひながら出て來て、舞臺の兩人の白刃を見て

ヤア、拔いてゐるワ／＼。

トうろたへる。長兵衞手早く提灯を取つて舞臺を窺ふ。久助と駕籠の者、うろたへて駕籠を舁きしまゝ向うへ逃げて入る。長兵衞この體を見て、ツカ／＼と走り來て、提灯を松の枝へ掛け、この中へ入り、あちこちと留めて、捨てありし二枚の高札にて、兩人の白刃をキッと押へて

長兵　お二人様、マア、お待ちなされませ。
權三　町人留めるな。養父の敵。
權八　此方とても敵討ち。
兩人　退いた〳〵。

ト屹度なる。

長兵　すりや、敵討ちとな。

トよく〳〵見て

イヽヤ、滅多には退かれませぬ。この提灯の火影にて、よく〳〵見ればお二人は、白井、本庄御兩家の、疑ひもなき若旦那。町人ながら私しも、大江のお家へお出入りの、お江戸住居のごろ附きも、狩り場普請の請負ひに、鎌倉海道おりのぼり、小揚げ人足駕籠の者、面を知つたる親方と、馴染みの多い道筋も、去年の冬は譯あつて、よんどころなう外々へ。春は早々歸りやれと、御贔負方のお世話にて、馴染みの土地へ御年始に、上下ならぬ半合羽、親仁の讓りの縞柄は、皆樣御存じ高麗屋縞、悴を連れて又こゝへ。いづれも樣、明けまして、よい春でござります。

權三　見ればどうやら覺えある、町人ながら我れ〳〵が

權八　白刃恐れぬ大丈夫。慥かに其方は噂ある

權三　お江戸根生ひの花川戸

長兵　イヽヤ、その長兵衞は長兵衞でも、親に似ぬ子の無口、生まじめ。イヤ、似ぬ子といふむすさまじい。今ぢやァ誠に親仁分。小まめな餓鬼もある親が、子を持つて知る親の恩。あなた樣にも親御樣の、あるのを存じた私しが、お怪我の無いうち留めました。若旦那、ひらに白刃は、お納めなされて下さりませ。

權三　町人は、この起り、存ぜぬゆゑに留むれども、我れ〳〵二人は

權八　養父の敵、勝負の相討ち、果し合ひ。留めずと爰を

兩人　サヽ、退いた〳〵。

長兵　エヽ、そんならいよ〳〵敵討ち。して、お二人の敵と仰しやる、慥かな證據は

權三　證據は卽ち書き殘す、あの提灯の果し狀。

　トこれにて長兵衞、二つの提灯の書置きを見て、思ひ入れあつて

長兵　成る程、あれなる書き物も、互ひの親子が殿樣を、失はんといふその上に、お家の寶が紛失の、在所を知つても仰しやらず、それゆゑ互ひに討つたとある、その文言と見ましたが、して、その

御両家へ預かりの、寶の在所が知れましたか。

両人　イヤ、それとても今以て

長兵　それ御覽じませ。親の敵の相討ちに、討つたる時はお二人の、武士の役目は立ちませうが、お家の寶な親々の、失はしつた在所も知らず、命ばかりを捨てるのが、誠の武士でもござりますまい。いはゞ寶を尋ね出し、その上にての敵討ち。互ひに討つとも、討たるゝとも。さもない内にうつかりと、其お命は捨てられませぬ。二人のお命、若旦那方。左樣なものぢやアござりませぬか。

権八　イヤサア、其方が申すに違はず

権三　親ども二人が預かりの、寶が出でずば、迂濶に一命

両人　こりや假初めにも捨てられぬ。

長兵　左樣御思案出でましたら、お二人ながら、暫く刃物は

両人　ムウ。

　　ト白刃を引き

詞にめでゝ

長兵　サア、これからは留めました。その高札の文字の如く、親の敵を討つのも孝心。忠孝二つはお互

ひに、いづれに變りはござるとも、權八樣のお命は、權三樣の預け物。又權三樣のお命は、白井のあなたへお預けなされて

權八　然らばこれにて寶の行くへ、知れたる上は討たるゝと、契約堅き固めの杯。

權三　水にはあらぬ互ひの生血。腕を引いて血杯。

長兵　幸ひこゝに水向けの、茶碗の中へ

ト墓茶碗を取つて、よき所へ置き、兩人とも切ッ尖にて二つの腕を引き、茶碗の中へ血を浸す事。この血一つに寄る。長兵衞見て思ひ入れ。兩人とも拔刀をあたりへ突き立てる。

お二人樣の腕の血汐、一つに寄るは何とやら、これぞどうやら同性の

兩人　ヤア。

ト思ひ入れ。

長兵　サ、同氣同性、兄弟同前、兄弟分の血杯。

權三　然らば權三が

ト一口飲んで

サ、權八、貴公へ。

ト さす。權八取つて

權八 互ひの生血、互ひに納めて

ト飲んで差出す。長兵衛取つて

長兵 今よりお二人兄弟の、固めは濟めども、尋ぬる品の、出るそれまでは、お互ひに

權三 こなたの科は、この權三

權八 そりや此方も引受けて

長兵 引受けるなら親々の、科をその身に引受けて

權三 討たるゝ時は主殺し、三尺高く

權八 木の空、承知。

長兵 それよりめでたい敵討ち。兄弟同士で討つ者も

兩人 討たるゝ者も

長兵 碎けて元の

ト件の茶碗を打割り

土となつても、その名は朽ちず。

權三　もしや二人が武運に盡きて

權八　死罪とならば

長兵　その時こそは幡隨長兵衞、後生心に香華手向けて進ぜます。あかの水向け、陰膳据ゑて、回向しませう。

兩人　エヽ、武士にもまさる

ト手を合せて思ひ入れ。この時忠太窺ひ出て

忠太　慥かに人を

トかゝるを、長兵衞立廻つて引敷く。この時雨の音する。

長兵　少しも早う

兩人　互ひに爰を

ト思ひ入れにて、兩方の舞臺の先きに行く。この時生垣の中にお才、手燭を持ち窺ひ

さい　お二人樣か。

權三　慥かにお才。

權八　見られぬうちに

さい　外面に誰れやら

　ト手燭を差出す。

兩人　逢うては却つて

忠太　さては

　トかゝる。長兵衞ちよつと當てる。忠太、ダヂ／＼として、思はず四つ手の網へ手を掛ける。この途端に權三、權八、上下の浪板の蔭へ飛び込む。

さい　ヤヽ、もしや入水の

　ト手燭を取落す。

長兵　ヤア。

　トこなしあつて、羽織を肩へ掛ける。木の頭

　素的に暗い晩だ。

　ト思ひ入れ。放心したる忠太、四つ手の網に取り附いたまゝ「ウン」と反るゆゑ、件の網の先きへ、助太夫、兵左衞門取附いて、だん／＼上がる。これをキザミにて、よろしく、ひやうし

幕

第壹番目　四立目　佐介ヶ谷の場

役名――三日月お小夜。團三女房、十六夜。白拍子、風折。下部、赤澤十内。曾我の團三郎。曾我の禪司坊。鬼王女房、月小夜。さぼてん善六。今市屋善右衛門。吉備津の大藤内實ハ近江小藤太成家。若黨、三平。

本舞臺、三間の間、二重の世話屋體。正面のれん口。鼠壁。上の方に一間の障子屋體。下座に片蓋の物置き。幕の内より團三郎、着流しにて赤鰯をこしらへてゐる。十六夜、七輪にて藥を煮、月小夜婆アは片肌脱ぎ、薪割りを持つて炭俵をこなしてゐる。上の方の屋體に風折、後家髷、病ひ鉢卷き。藪内つい衿、慈姑頭の醫者にて、脈を見てゐる。禪司坊、袴大小のこしらへ、挾み箱の蓋をそくひで繕うてゐる〳〵の見得、通り神樂、鳥追ひ唄にて幕明く。

月小　サア〳〵、これで二三日の焚附けには困りはせまい。十六夜どの、これを竃の下へでも入れて置きなさい。ヤレ〳〵、肩が張つた。

十六　ハイ〳〵。

ト　よき所へ出て月小夜、薪割りを逆さまにして肩を叩いてゐる。

團三　これは〳〵姉御樣、大きにお骨折りでござりました。この頃は焚附けに、いかう不自由を致しました。

月小　イヤ、また焚附けの無いほど、小自烈たいものはない。

トこの時、藥こぼれる。

それ〳〵、藥がこぼれるわな。

ト十六夜駈け寄つて蓋を取り

十六　併し藥のこぼれるのは、善い事さうにござります。

月小　なんの善い事があるものかな。第一は藥が損なり、どこもかしこも埃だらけ。ドレ〳〵、わたしが煎じてやりませう。

ト七輪の下を煽ぐ。

禪司　月小夜は、人のする事は、とんと氣に入らぬ氣性ぢやて。

團三　それも我精な氣性ゆゑでござりまする。

風折　ほんに、何事もよう氣が附く。弟夫婦の手助けになつてやりやる上に、我れ〳〵にも、よう深切にしてたもるわいの。

ついあれが卽ち世に云ふ、男まさりと云ふのでござりませう。イヤ又、それに引きかへ、御亭主のかいしよなさ。イヤ、これは團三どのゝ聞かるゝ前で、禁句を申した。ハヽヽヽヽ。

月小　モシ、わたしやアどうも、人のする事を見てゐると、小自烈たくつてなりやせん。コレ、團三どの、お前、鰯にいつまでかゝつてゐるのだえ。わしが手傳つてやりませうよ。

團三　イエ〳〵、もう直きでござります。

月小　そんなら若旦那、その蓋をわたしが繕つて上げませう。

ト手をかけるを

禪司　これはしたり、其やうに手荒う致すと、忽ち毀れてしまふ。構やるな〳〵。

月小　それでもお前さん、いつまでも〳〵……コレ、團三どの、赤鰯を手傳うてやりませう。

團三　もう殘らず仕舞ひ。

月小　ホイ。……そんなら藥を

十六　これを見なさんせ。一杯半が、丁度一杯に詰まりました。

月小　ホイ。エヽ、わしには何もさせぬかいの。

トあちこち思ひ入れして、風折の脈を見てゐるつい竹を突きのけ、脈を見ろこなし。つい竹惻りして

つい　これはどうぢや。月小夜どの、何を致さるゝのぢや。
月小　イヤサ、お前があんまり脈の見やうが埒が明かぬによつて、助けてあげうと思うて。
つい　イヤ、それは御大儀でござる。
月小　なにサお前さん、いつでもお頼みなさいやし。やつたものぢやァござりません。
風折　ホヽヽ、ほんに氣輕な事ぢやないかいの。

トこなし。

十六　左樣でござりまする。月小夜さん、お前のあぢやらゆゑ、ついにない風折樣のお笑ひ顏。
團三　其やうな事から、ふとお氣が引立つて、御全快なさるものでござりまする。
禪司　私しめも、母滿江より申し附かり、今日も御病氣お見舞ひの爲、參りましたが
風折　イヤモウ、日每々々のお見舞ひ、忝うござりまする。
禪司　して、御容體は
つい　矢張り同邊と見えまするて。
禪司　それは困つたものでござる。イヤ、困つたと申せば、コレ、團三郎、彼の逆澤瀉の鎧の一儀は
團三　サア、それも私しめが千辛萬苦いたし、だん／＼差し金も致し置きましたゆゑ、もう六十金遣は

せば、此方の手へは戻りますが、常なら融通のなる人さへ、まさかの時には差詰まる金銀、まして身貧なこの團三、所々の近づき、朋友にまで、足手かひさま駈けあるき、七所ごしらへとやら致しての入金。それにてやう／＼取留めましたが、殘金と申すも、只今も申す通り、大金の六十兩。もうこの上は仕樣もやうも……イヤ、どうか致しませうほどに、必ずお案じなされまするな

ト合ひ方、思ひ入れ。風折こなしあつて

風折　ほんに思へばこの風折、上方より、はる／＼と下る道すがら、途中よりのこの病ひ。計らずこの家の世話になり、艱苦の中で二人の衆の深切な介抱は、忝い。忝いが、それが一倍病ひの障りに

ト風折泣き入る。十六夜介抱して

十六　モシ、其やうなお心弱い事仰しやりまするな。河津樣の御縁につれゝば、矢ッ張りあなたもお主筋。御家來の私しどもが、どのやうにも御介抱申さねばなりませぬ。必ずお心遣ひなされまするな。いま團三どのゝ云はれました、鎧の金子も今日中には、きつと出來る筈でござりまする。

團三　ナニ、六十兩の金子が、どうして今日中に

十六　アモシ、ソレ、出來るでは、モシ、ござんせぬかいな。

ト思ひ入れ。團三郎呑みこみ

團三　オヽ、成る程、出來まするく。づんど出來まするやうにござりまする。

禪司　ヤレく、嬉しや。すりや、その鎧も手に入ると申すもの。拙者も只今までは、越後の久上寺にて、稚兒奉公いたせしを、養父祐信どのゝ仰せによつて、斯樣に男形して、曾我の跡目となりますれば、三老方の屋敷々々も、廻らねばならず。その武具、馬具といひ、供廻り、皆團三が世話になりまする。

月小　いかに御內證が不都合でも、若殿樣が御自身に、中間の擔ぐ挾み箱を、繕はつしやるといふは、こんな我精なわしでさへ、ほんに淚がこぼれまする。マアく、お挾み箱は、それでお間に合ひませうが……ほんに、この間まで、長押に掛けてあつた槍が見えぬが、アヽ、あれも七つ屋へ

團三　イエく、爰へ置きまするると煤けまするゆゑ

月小　やらかしたのかえ。

ト指を曲げて見せる。

十六　モシ、奥へ仕舞うて置きましたわいなア。

月小　エヽ、嘘ばつかり。

ト思ひ入れ。

つい　時に御兩所方へお願ひ申さねばならぬ儀がござりまするて。別の事でもござりませぬが、先達ても、お話し申した赤澤十內どの、今日も愚老が宅へ參つて、御主人方へお詫びをしてくれいと、だんだんとの賴み。團三どのゝ爲には小舅、十六夜どのには兄貴の事。これは愚老が一生のお願ひでござりまするが、どうぞ御堪辨を以て、歸參が叶ひますまいかな。

風折　度々のお賴みを、もどくも氣の毒、殊には十六夜が兄とあれば、わたしもとも〴〵曾我どのへ、詫び言して遣はしたけれど、彼れが心の橫しまより、常々この風折へも道ならぬ

十六　エ。

禪司　あの十內は、心の善し惡しは取りおいて、生れ附いての彼れが面體。どうも我れ〳〵が心に

風折　コレサ。お氣の毒ながら、この事ばかりは

禪司　お斷り申しまする。

十六　それがよろしうござりまする。わたしが爲には義理のある兄さんなれど、常から心の

團三　イヤ、此お詫びは、御無用になされて下さりませ。

つい　ハテサテ。それは困つたものでござりまするな。

ト思ひ入れ。神樂になり、向うより十內、紺の布子、一本差し。跡より善六、ばつち羽織、判人のこ

しらへにて、十内を呼びながら出て來り

善六　コレ〳〵、そこへ行くのは十内どのぢやァないか。オイ、ちつと、待つてもらはう〳〵。

十内　貴樣は判人の善六。おれを呼ぶのは、何ぞ用か。

善六　用といふのは外でもない。いつぞやこなたから買つたこの紙入れ、戻すによつて、代を下さい〳〵。

十内　何の事だ。藪から棒に、紙入れを戻すから代を返せと、そりや又、なぜ〳〵。

善六　イヤヨ、この頃をかしな噂を聞いて、何だかこなたの手から出た物を持つてゐると、どんな卷添へをくふも知れない。

十内　それで買つた物を返すといふのか。エヽ、この男もけちな根性ぢやァねえか。たとへどんな痛え目をしたとて、此方の仲間を抱きこむものか。カウ、そんな薄ッぺらな惡黨ぢやァねえワ。儘にして置くがよい。

善六　さういふ事なら厭い代物だから、おれも戻したくもないが

十内　コレ、そればかりぢやァない。この間も桐ケ谷の神道者のところへ仕掛けて、相應にやらかしたが、惡錢とはよく云つたもので、ほんの一夜檢校。この頃の間の惡さ。それゆゑこなたを賴んで、妹をそびき出して賣るつもりだが、どうだ、いゝ口があらうかな。

善六 そりやァあの玉なら、どこへでもはまるが、して、どうしてあの子を釣り出すつもりだ。

十内 その狂言といふのは、コレ

ト善六に囁き

といふ幕にしてもらひたい。

善六 そんならおれが、あの内へ行つて

十内 スッパリとやつて下ッし。

善六 呑みこんだよ。

ト矢張り通り神樂にて、兩人門口へ來り、十内は門口に窺ひ、善六は内へ入る。

ハイ、御免なされませ。

園三 これはようござりました。

月小 サア、茶でも煙草でもまゐりませ。

ト茶、煙草盆を出す。

善六 イヤ〳〵、お構ひなされまするな。……モシ、私しは、ちつとお願ひがあつて參りましたが、

園三 見れば近附きでもない町人衆ぢやが、この園三郎に、どのやうな用事がござつて。

善六 私しは、十内どのゝ店請けでござりまする。お初にお目にかゝりやした。

團三 ハテ、左様でござるか。その赤澤十内は、縁につれて、身共が爲にも小舅でござるが、御主人方のお心に違うて、今ではお目通りも叶はぬ身の上。それは格別、店請けとかあるこなたがござつたのは

十六 また兄さんの善からぬ事など仕出して、それゆゑこの艱難の中へ、お前を頼み、もしや無心なと

善六 イエ〳〵、決してさういふ事ではござりません。わしもこれまで、あの人の店請けをしてゐるて、ついぞ善い事を聞いた事はござりませなんだが、よく〳〵うんじやうし果てゝ、この頃は誠に樫の棒だね。

十六 そんなら兄さんが、アノ悪い心を

善六 改めやしたね。モシ、お聞きなされませ、今までは店請けのわしへさへ、盆暮れの遣ひ物はさておき、毎月の店賃さへ、わしに立てかへさせた男が、打つて變つて稼ぎ三昧、義理じんぎは勿論、それは〳〵人に深切で、モシ、わしが死んだ時、湯灌までしてくれる約束。その上、毎日々々萬遍を繰るといつて、ハヽア、これはマアお負けだが、お願ひと申すは、どうぞお主様へお詫び申して、不奉公した申し譯に、この節艱難の曾我様へ、お力にはならずとも、風折様の御病氣の、

お藥取りでもしたいからと
團三　ムウ、そんなら何と云はるゝ。あの十内が、誠に心を改めて、あなた方へ
十六　御奉公申したいと、本心で云ふのでござんすか。
月小　コレ、店請けどの、そりやァ屹度だね。
善六　屹度の段か、淚をボロ〳〵こぼして賴みましたよ。
ト此うち十内、門口にて、いろ〳〵こなし。
つい　そりやァ違ひはござりますまい。最前も申す通り、愚老へも打悄れて、只管に賴みましたて。ちやによつてどうぞお詫びを、ナ、御夫婦の衆。
團三　サア、一通りの朋輩と申す事ならば、そりや、どのやうにもお詫びを致さうが
十六　私しどもは義理ある仲ゆゑ、どうも押しつけては
つい　成る程、こりや尤もの事。モシ、風折樣、お聞きなされて下さる通りでござりまするが、なりませう事ならば今一度
善六　お召使ひなされては下さりますまいか。
風折　それ程までに皆の衆が、詞を添へての賴み、殊に惡事をとゞまつて、奉公いたす所存なら、團三

夫婦が忠義に免じて、逢うてやりませうわいな。

團三　それはマア、有り難う存じまする。

つい　サア〳〵、詫び事は、濟んだ〳〵。

善六　ヤレ〳〵、それで店請けも頼まれ甲斐があつて

ト門口へ向ひ

サア、十内どの、入らつしやい〳〵。

十内　ハイ〳〵。

トおづ〳〵内へ入り、小さくなつて坐り

モシ、あなた方、これまでは段々の不しだら、申さうやうもござりませぬが、以後はきつと心を改め、御奉公申すでござりませう。イヤモウ、御主人の罰といふものは恐ろしいもので、さまざまの艱難いたしました。これに懲りない事はござりませぬ。どうぞ御料簡なされて、只今まで通り、お召使ひなされて下さりませ。

風折　皆の者が只管に申すゆゑ、自らが曾我どのへ、執なし致すまいものでもないが、以後は不奉公なきやうに

十内　ハイ〳〵。
風折　心を附けるがよいぢや。それは格別、いかなる事にや其方の面差し、河津樣の敵たる、祐經どのに生き寫し。それゆゑ兄弟の衆が、心に叶はぬも無理ならず。わしでさへ其方の面體見るたびに、腹が立つて
十内　エヽ、それゆゑ情なく
風折　ヤ。
十内　ハイ〳〵〳〵、これから祐經どのに似ぬやうな、顏附きを致しまするでござりませう。
風折　それと申すも伊東の一家　昔と違うて兄弟の衆は年若、あとは女子の事ゆゑに、主も威光の輕きゆゑ、自然と不奉公もしやるであらうが、コレ、それによい物がある。
　ト側の手箱より一卷を取出し
これこそ伊東家代々の系圖の一卷、女子、子供に仕ふると思はず、この系圖に仕ふると思うて、奉公しやれ。
　ト思ひ入れあつて
十内　そんならそれが三ケの莊の、系圖の一卷でござりまするか。

風折　いかにも。この一卷も、河津どの、兄弟の者へ渡せよとの御遺言なれども、身内痛めし兄弟は、云ふに云はれぬ双子ゆゑ　ト思ひ入れ。

十内　エ。

風折　サア、兄弟といふは、身腹痛めぬ祐成どの、時致どの　ト思ひ入れ。

十内　モシ、その品は、賣買ひにでも致しましたら、定めて大枚の

團三　これはしたり、又其やうな下作な事を　ト思ひ入れ。

十内　ハイ／＼、申しますまい。　ト思ひ入れあつて、下の方へ來り

つい　コレ、賣買ひに致して、大金になる物と申すは、愚老が所持してゐるこの藥ぢや。　ト懷中より箱入りの誂への藥を出し

この藥品は、世にも稀なる白龍の腮の玉と申して、金瘡には大妙藥。これに同性の親子の血汐を

混じて服する時には、たとへどのやうな深疵にても、忽ち全快いたす稀代の妙薬ぢやによつて、至つて高直な薬種でござる。なんと珍らしい品でござらうが

善六　ハテ、世界には妙薬もあつたものでござりまするな。

ト思ひ入れあつて

十内　何よりも、大枚の金になるとは、ハテ好もしい

團三　これはしたり、又其やうな慾張つた事を

十内　ハイ〳〵、申しますまい〳〵。

トこの時風折咳入り、苦痛のこなし。皆々駈寄つて介抱して

團三　モシ、おせつなうござりまするか。

十六　ちよつと御覧じて下さりませ〳〵。

つい　ドレ〳〵、何か差込みが參つたのでござらう。

ト薬の箱をそこに置き、風折を介抱して、印籠より薬を出し

コレ〳〵、白湯を一つ〳〵。

十六　ハイ〳〵。



トうろ／＼する。

十内　エヽ、何をウロ／＼。お白湯はおれが汲んで行く。お背中でも撫つてあげろ。

ト十六夜を突きやり、茶碗を尋ねる振りして、つい竹が捨て置きし薬を取つて懐中し、その跡へ炭取りにある炭團を入れ置き、蓋をする。皆々介抱しながら、これを知らず

皆々　コレ、十内どの、早うお白湯を

十内　アイ／＼。アヽコレ、茶碗が

トわざとウロ／＼して、やう／＼白湯を汲んで

サア／＼、お白湯／＼。

ト持つて行く。つい竹は風折に薬を服ませる。

禪司　モシ、少しはお心ようござりまするか。

十内　ドレ、私しがお背中を撫つてあげませう。

ト思ひ入れあつて

風折　イヤ／＼、もう落ち着きました。ヤレ／＼、胸苦しうあつたわいの。

十六　何かに附けて、お心づかひ遊ばすゆゑでござりまする。

團三　必ずキナ／＼思し召さずと、お氣を廣くお持ちなされませ。

禪司　併し早速落ち着きなされて、私しも安堵いたしました。左樣なれば立歸りまして、御病氣の樣子滿江樣へ申し上げませう。殊には鎧の一埒も

團三　いづれ夕方までには、吉左右を申し上げまするほどに、必ずお案じなされぬやうに。

善六　わしやァちつと、十內どのに用事もあれば

十內　ほんに氣の附かぬ。店請けどのには何かのお禮に

十六　奧で御酒なと

善六　ナニ、構はつしやりまするな。

團三　お醫者どのには、また明日、お見舞ひなされて下さりませ。

月小　サ、參りませう。

ト鳥追ひ唄になり、禪司坊先きに、つい竹と月小夜向うへ、善六と十六夜は奧へ入る。十內、團三郎、風折殘る。合ひ方。

十內　いま月小夜どのに、鎧の吉左右、夕方までに致しませうと請合つたが、それでも、よく金の工面が出來たな。

團三　サ、だんく差し金して、殘金六十兩遣はせば、逆澤瀉が
十内　手には入らうが、六十兩といふ大金が、夕方までに出來るといふが、こなたの智慧で今日中に、逆澤瀉を請け戻す、その働きが……イヤ、覺束ないものだ。
團三　サ、出來ぬところを押し強く、佛神三寶いづれも様を、せがんでなりと團三めが、曾我を貢ぎの大役を、勤めんものと思へども、生れ附いたる不器量は、ほんの人眞似、附け燒刃、あくちも切れぬ生くら物。これを思へばありふれた、四百四病の病ひより、身貧を悔めば物數ならず、辛いは未熟、下手不器用。せまじきものは十内どの、身にも應ぜぬ役目でござるて。
十内　ハテ、感心したものだ。その心で押し通せば、忽ち曾我の御家老様、隨分忠義を盡くさつしやい
風折　コレ、團三、曾我の一家で力に思ふは、其方ばかりぢやほどに
　トこの時風折また咳き入つて苦痛のこなし　團三郎介抱しながら
團三　又差し込みまするか。
風折　どうも胸先きが切なうて
十内　ドレく、私しが押してあげませう。
　ト介抱しながら、こなしあつて

　モシ、爰でござりまするか。
風折　もそつと上の方を
十内　爰でござりまするか。
　　　ト思ひ入れ。
風折　エヽ、其方何しやるぞいの。もう〳〵、構うてたもるな。
十内　それでも捨てゝ置きまするると、胸先きへ差し込んで。……こりやモウどうも
　　　トこなし。團三郎、十内を引退け
團三　イヽヤ、御介抱は身共が致すほどに、コレ、早うお藥を
十内　ナニ、藥を持つて來い……成る程、人使ひのよいお屋敷だ。
　　　ト口小言を云ひながら、藥を持つて來り
サア、お藥〳〵。モシ、私しがあける藥。あなた樣の御病氣を、直してあげようと思ふ一心でも、御本復なさらにやなりませぬ。サア、お上がりなされませ。
　　　ト差出す。この時、風折、藥を取上げながら、十内の顏をヂツと見て
風折　ハテ、見れば見るほど、憎しと思ふ祐經に、これ程までに其方が面體。

十内　エ。

ト風折、持つた藥茶碗を十内に打ちつける。

風折　似た事わいの。

ト立腹のこなし。唄になり、つか〳〵と障子屋體へ入り、パッタリ締める。十内こなしあつて

十内　エヽコレ、ひよんな人に似たゆゑに、あれでは所詮、日頃の思ひも

團三　エ。

十内　エヽ、いま〳〵しい、しやッ面だなア。

ト我が手に額をくらはす。これをキッカケに、また唄になり、十内奥へ入る。團三郎殘り、思ひ入れあつて

團三　小舅ながらも、心よからぬあの十内。滅多に油斷は……イヤ、油斷して、すんでの事に忘れようとした。

ト通り神樂になり、今市屋善右衛門出て來り

善右　御免なさい。團三どのは内にござらつしやるか。

團三　これは今市屋善右衛門どの。さて鎧の儀も、だん〳〵延び〳〵になりまして

善右　コレ、團三どの、鎧の事は跡へ廻して、わしが方から寄越した代物の通ひ。ちよつと爰へ出して下さい。

團三　代物の通ひが如何いたした。

善右　マア、何であらうと、ちよつと見せて下され。

　　ト通ひ帳を見て

コレ、團三どの、こなたは盗みをさつしやるな。

團三　なんと。

善右　イヤサ、こなたは盗人だよ。

團三　ヤイ、今市屋善右衛門、身貧な脅我に仕ふれど、身共武士に向つて盗みするとは、鞘を割れとの詞の謎か。いま一言いつてお見やれ。

善右　これサ〳〵、團三どの、急かずと様子を聞かつしやれ。こなたを盗人といふ證據は

　　ト帳をひろげ

元金が三兩二分で、錦の戸帳、鈴一つ、神鏡が一面、かれこれ品数十一品、この通ひ通ひにあれば、こなたが置いたに違ひはあるまいな。

團三　イヽヤ、身共、此やうな品々を、質物に置いた覺えはない。
善右　覺えのない者が、なぜ通ひに附けてあるえ。使ひは十六夜とあれば、たとへこなたは知らぬにもせよ、どこまでも御亭主を、相手に取らねばなりませぬ。
團三　ハテ、變つた物の云ひがゝり。成る程、女房が使ひとあらば、置き主にもならうが
善右　サア、置き主なれば、いよ〳〵盜賊。
團三　なんと。
善右　その品々は、桐ケ谷の神主が、盜まれし品なりと、仲間一統詮議のところ、この善右衛門が見世にあつたを見附けられ、盜み質を取る今市屋と、その神主めに云ひ立てられ、品によつては、でんどへ出ねばならぬ羽目。其やうな難儀をかけるも、こなたがする仕事。それゆゑ盜みしたと云ふのぢや。
團三　何しに身共が左樣な事……さるにても、心得ぬ女房十六夜、どうしてかゝる品々を……さては小助十内が……こりや、迂闊に盜賊は出されぬわえ。
善右　サア、この通り通ひに記してあるゆゑに、盜人と云つたが誤りかえ。
團三　サア、それは

善右　でんどへ持出し、首を取らうか。

二人　サアノ〳〵

善右　この善右衛門まで盗人の同類にするか。エヽ、腹の立つ。いつその事に

ト立ちかゝる。十六夜奥より出て

十六　マアノ〳〵待つて下さんせいなア。

善右　ムウ、留めて出たのは十六夜どの。こなたは何であのやうな事を

十六　あの質物は、云ふに云はれぬ所より、わたしが頼まれ預けた品。それは團三郎は、露いさゝかも知らぬ事。その品々は私しが、たつた今請け戻して、先き様へ戻しませうほどに、モシ、善右衛門どの、どうぞ先き様にも、料簡あるやう取りなして。

善右　そりやアこなさんが品を受け戻し、この善右衛門が口を添へ、先き様へ詫び事したなら、表向きへ出さずに、事穏便に濟むまいものでもないが

十六　サア、さうさへなる事なら、この十六夜が

團三　すりや、女房が才覺で

善右　後ともいはず、たつた今

十六　戻す仕やうは

ト帯解きにかゝる。

善右　オツト、待つたり。それには及ばぬ。

十六　サア、留めて下さんすは、忝うござんすが、して、その品の納まりは。

善右　ハテ、高が元金三兩二分、こなさんの心一つで、この善右衛門がどうでもする。……イヤ、今日中に限る逆澤瀉の、それと一緒に、後方までに

十六　待つて下さんすか。

善右　待つも待たぬもこなさんの心。……見れば見るほど、畜生め。

ト抱きつかうとして、團三郎と顔見合せ

ハテ、女にはのろい奴だなア。

ト唄になり、こなしあつて善右衛門奥へ入る。團三郎十六夜殘り、思ひ入れあつて

團三　この身にとつて覺えなき無實の難題、その盜賊は誰れ彼れと、云ふに云はれぬ

ト十六夜が顔を見る。十六夜面目なきこなしにて

十六　義理ある仲の兄さんゆゑ、愛想盡かすに盡かされぬ。それゆゑにこそお前にまで、かゝりの繫が

ゐ今の難題、さぞ腹が立つたでござんせうが、モシ、堪忍して下さんせえ。

　　　ト思ひ入れ。この時障子屋體より十内出て來り、物も云はず門口の方へ行くを、團三郎キッと捕へて

團三　コレ、十内どの、どこへ行かれるのだ。

十内　サ、ちよつとそこまで。

團三　イヽヤ、やる事ならぬ。マア〳〵下にゐて、この團三が云ふ事を

十内　ヤ。

　　　ト團三郎、十内を下に置いて

團三　エヽ、こなたはなア。

　　　ト合ひ方になり

たとへ輕き御奉公にもせよ、年久しくお屋敷の祿を食めば、曾我のお家では譜代の御家來。盗みするとは、云はうやうない人非人。いはゞこなたと身共は朋輩、緣につれゝば兄同然、意見もしさうな身を以て、ようもこの團三に、恥つらかゝされたなア。

　　　ト思ひ入れ。

十六　お前ゆゑにはこの十六夜も、主へ對して云ひ譯もござんせぬ。エヽ、お前はなア。

十内　サア、尤もだ〳〵。おれもこなた衆二人に對して、云ひ譯も語り譯もないから、コツソリとどこぞへ行つて、死んでしまはうと思ふところを留められて、こんな面目次第もない事があらうか。どうマア二人へ、この面が合はされよう。所詮生きてはゐられぬ體

園三　すりや、我れ〳〵二人へ面目なさに

十内　死んでしまふがこの身の云ひ譯。いかなる事か此やうな、根性骨に生れた因果、生きてゐるその時は、こなたや妹が面よごし。いつそこの場で

ト一腰へ手をかけるを

十六　ア丶コレ兄さん、さう思はしやんすなら、短氣をせずと、この後ふつ〳〵惡い心を改めて

ト留めるを、園三郎こなしあつて

園三　イヽヤ、留めるな女房。……イヤ、十内どの、流石は河津樣のお馬添へほどあつて、恥を知り、前非を悔み、腹を切らうとは、天晴れ〳〵。緣者のよしみ、この園三が、介錯いたさう。サア、見事この場で

十内　ヤ。

ト思ひ入れ。

團三　切腹おしやれ。
十內　そんならこなたが介錯して
團三　死骸に恥はかゝさぬほどに、見事この場で腹切る事は……なるまいがな。
十內　なんと。

ト思ひ入れ。團三郎手早く十內が一腰を拔き、十內「それな」と思ひ入れなするな、キツとさしつける。訛への合ひ方になる。

團三　町人ですら一腰は、男たる身の魂ひ同然、武門の祿を食みながら、天晴れ嗜みの名作物、この付光で速かに、腹切る心か、十內どの。
十內　イヽヤ、腹は切らない。緣を切るのだ。
團三　なんと。
十內　こなた衆二人が夫婦の緣、後ともいはずたつた今、切つて下さい、退いてもらはう。
十六　エヽ、コレ兄さん、そりや又なんで。
十內　コレ、團三、此やうな身狀の悪い、兄のあるその十六夜を、女房に持つては、道立てすることなた、武士が立つまい。サア、この場に於て、妹と、緣を切つてもらひたい。

ト思ひ入れ。團三郎十六夜こなしあつて

十六　ぢやというて、コレ兄さん、飽きも飽かれもせぬ仲を、縁切らうとは胴慾な。わたしやお前と兄弟の縁を切るとても、團三どのと別れる事は、否でござんす。

十内　成る程、尤も。否であらうが、それぢやァあの團三は、曾我どのへ、忠心者とはいはれまいが。

團三　ハテ、變つた物の云ひやう。なぜ又夫婦の縁を切らぬその時は

十六　團三どのゝ忠義にならぬとは。

十内　コレ、おぬし達はまだ若いによつて、堅いばかりで世の中の味を知らないのだ。團三と縁を切る時は、この悪者の兄なれば、直ぐに今日からぜげんの手へ、たとへ渡つて君傾城の勤めをしても今さしつまる主人の御難儀、逆澤瀉の鎧ゆゑ、心を盡す夫團三が今日の手詰め。その艱難を救ふは金……サ、鎧を請けるも、請けぬのも、其方の勝手。飽きも飽かれもせぬ仲ゆゑ、兄はたつてと勸めはしないが、夫に忠義を立てさせたくば、今すつぱりと縁切つて、この悪者の兄へ附く方が、よさゝうなものだなァ。

トこなし。合ひ方になり、向うより三日月お小夜出て、門口に窺ふ。

十六　成る程、さうぢや。……モシ、團三どの、縁切つて下さんせ。

ト團三郎、呑みこむこなしあつて

團三　女房、何にも云はぬ。忝い。いま十内どのゝ詞のはし〴〵、聞いた上は、くどく申すは愚癡
至り。いかにも只今夫婦の縁は

十内　得心づくで切る氣なら、こなたが自筆で證據の書き物。

ト善六出かゝりゐて

善六　その去り狀と引替への、金は百兩、コレ爰に

ト首に掛けたる財布を見せろ。

團三　すりや、去り狀と引替へに、その百兩を……さある時には鎧の質請け。三方四方一時に、曾我
の御難儀、救ふは眼前。

十六　サア〳〵早う團三どの、去り狀書いて下さんせ。

團三　女房、堪忍してくれいよ。

トさら〳〵と去り狀を書いて、思ひ入れあつて

サ、十内どの、望みの去り狀。

トそこへ置く。

十六　お主の爲のこの去り狀、わたしや嬉しうござんすが、たゞ氣がゝりはその以前、云ひ號けなさんしたお小夜どの、もしや跡にて睦まじく

國三　氣遣ひしやるな。たとへ云ひ號けしたにせよ、あの道知らずの女を、何しに女房に……とはいへ疑ふも女の情、夫の心を汲み分けて、主人の難儀を救はんと、苦界に沈む貞節の其方が、心を休むる爲。

ト手早く差添へにて、左の小指を切つて

あの云ひ號けのお小夜めを、女房に持たぬといふ、證據は即ち武士の誓言、夫婦が心中。身共の小指を切つて渡すが心の潔白。これ受取つて、疑ひ晴らしやれ。

ト十六夜押戴き、こなしあつて

十六　エヽ、嬉しや國三どの、肌身離さず朝夕に、お前と添ひ寢をする心。

善六　十內どの、うまく〱やつて

十內　コレ。……こなたの料で、この女を

善六　すぐさま廓へ

十六　苦界へ沈むも忠義の爲。

團三　とはいへ、思へば

十六　アモシ、必ず未練は殘りませぬぞえ。

　　トこの時窺ひしお小夜、門口を明けスイと內へ入り、團三郎と十六夜の眞中へシヤンと坐る。皆々思ひ入れ。

善六　オヽ、お前は三日月お小夜ぢやアねえか。こゝの內へ何しに來たのだ。

團三　ヤヽ、わりや不義者のお小夜ぢやないか。此ほど思はず切り通し、湯屋の二階の美人局。その節われが緣切手、ナ……切手の恩は、いはゞその身の命の代り。さすれば其方の緣無きこの家、何用あつて

さよ　女房だから來たものサ。この頃逢つて別れる時、わたしら夫婦が働きで、お前の緣は……切手あけたよ。顏を知らねえこなさんに、切手あげたが曲事と、ころび合ひの半七どのにも愛想づかし。俄かに一人身。以前の緣を足にして、元木にまさる浮氣を捨て、お前の所へ駈込み女房。今までの事は、候ふづくの候ふとブン流して、今日向お前の女房に、持つておくれでないかえ。

團三　すりや、あの切手を恩にかけ、こりや亭主めと相談して、又も身共を……何も申すには及ばぬ。われが方からあの切手、さすれば緣は切れてあるワ。

さよ　イヽエ、縁を切手はわたしがあげたよ。お前の方から今日まで、まだ去り狀は取らぬによ。そんなら矢ッ張り女房のわたし。モシ〳〵、お前方もさう思つておくれ。わたしはどこがどこまでも團三郎が女房だによ。

トこなし。十六夜この中へ入り、思ひ入れあつて

十六　イエ〳〵、さうはならぬわいな。たとへ云ひ號けなさんしても、まだ祝言もせぬうちに、外の男と不義いたづら、逃げ隱れまでしなさんして、ようマア今更押し強う、團三さんの女房と、云はれた義理か、女中さん。アイ、憚りながら團三どのゝ女房といふのは、天下晴れてこの十六夜。モシ、皆さん、さう思うて下さんせえ。

ト思ひ入れ。

十内　コレ〳〵妹、おぬしはたつた今、去り狀取つたからは、この團三が女房とはいはれまいが。

十六　イエ〳〵、わたしや此わけのつかぬうちは、どこまでも團三どのゝ女房。この去り狀も、斯うするわいなア。

ト去り狀を二つに引裂く。皆々思ひ入れ。

淸六　コレ〳〵、それぢやァ此方の目算が……こいつはおつりきに風が變つたわえ。

十内　悪い所へ、まぜツ返しの女が來て。併し、遅かれ早かれ妹は、こなたの手より、ナ

　　ト善六へ思ひ入れして

コレ妹、その身の悋氣に忠義も外に、兄が詞を反故にするなよ。

　　ト思ひ入れあつて、合ひ方になり、十内は暖簾口へ入る。お小夜思ひ入れあつて

さよ　アヽ、そんなら爰にゐる女めが、團三さんのおかみさんかえ。たとへ女房があらうが、たらして
しまつて、跡の始末は

十六　あれ聞きなさんせ。あのやうな事を云ふわいなア。

團三　ハテ、構ふな。十六夜。……ヤイ女、おのれ、打はなして捨てる奴なれども、鎧の切羽、曾我への
お咎め、大事の前の小事ゆゑ、見のがして助けおく。とつとゝこゝを出てうせう。

さよ　そんならどうでも、お前はわたしを女房に

十六　アイ、わたしがさせぬわいなア。

　　ト思ひ入れ。お小夜こなしあつて

さよ　ホヽヽヽ、モシ、お前はどこのお孃樣か知らないが、素人の癖に、あんまり氣の強い事をお云
ひでないよ。成る程、わつちは不義者サ。云ひ號けの夫を踏み附けて、外に男をこしらへたのサ

亭主は持つたといふものゝ、表立つての亭主といふは、どこがどこまで團三さん。なんだな、人の男を寢取つておいて、さうはさゝぬも氣がなめ過ぎた。エヽ、思へば〱腹が立つて

トそこにある薪を取つて、十六夜へ打ち附ける。これにて十六夜の顏へ疵附く。十六夜「ハツ」と倒れる。皆々思ひ入れ。

團三 ヤヽ、女房の面へあの疵は

善六 とんだ疵物。まづこの金は閉帳々々。

ト金をしまふ。團三郎たまりかね、刀を引附け立ち上がる。善右衛門窺ひゐて、この時ズツと出て團三郎とお小夜の中へ入り、こなしあつて

善右 何かもやくやする中へ、ちよつとお邪魔と出かけたが、コレ、團三どの、いよ〱今日中に金が出來ねば、錯は外へやる對談。こなさん、云ひ分はござるまいな。

團三 サ、その金子も、折角調達したところ、この女め嫌りはし。これまで恥辱を與へしのみか、かへす〲も憎ッくき女め、もう料簡が

ト善右衛門を引退け、お小夜に立ちかゝる。この時十六夜起上がり、團三郎を留めて

十六 アモシ、どうぞ團三どの、憎いは道理、腹立たしやんすはもつともなれど、今のお前の詞にも、大事

の前の小事とやら、殊にわたしが身にとつても、この女中に怪我あつては、悋氣嫉妬の腹立ちと世に唄はれるも恥かしい。モシ、堪忍してやりなさんせいなア。

ト思ひ入れ。お小夜こなしあつて

さよ　これサア〳〵、何も其やうに氣を揉まずともの事サ。併し、成る程今更に、わたしが女房に持たれもせまい。ならうと云つたは横であつたが、といつて元の半七さんへ、撚りを戻すも未練らしいして見た時には中々に、迷つたこの身のしがくには

ト善六が見て

善六　オヤ善六さん、久しいね。カウ、わつちがやうな者でも、勤めとやらが出來る事なら、どうぞこぞへはめておくれな。

善六　ナニお前、アノ勤めをしたいといふのか。そりやお前、わしばかりぢやアねえ、三日月お小夜といつちやア、誰れ知らねえ者もねえ、それ程のお前の事、きつとそれに違ひなくば、はめる所はいくらもありやす。いよ〳〵さうなら、コレ〳〵、爰に金もあるが

善右　そんなら十六夜どのを破談にして、この女中を抱へるのか。

善六　御亭主へは氣の毒だが、これも商賣、無疵の玉へころぶのサ。

善右　ハテ、相手變つて鹽冶どのだなア。

善六　併し、足にはなるまいか、爰の亭主と。

さよ　そりやア氣遣ひしなさんな。今聞く通り、男の方から捨てたわたし、それでも足だと思ひなさるか。

ト捨てゝある去り狀取つて

丁度幸ひ十六夜と、宛て名の破れた去り狀へ、わたしが名宛てを書き添へて

善六　オット合點。コレ御亭主、それでこなさん云ひ分は

園三　ナニ、其方の勝手に。

善六　それでスッパリ埒が明いた。

さよ　埒が明いたら身の代は

善六　年一杯で百兩に、それ承知なら直ぐさま爰で

さよ　所詮よごれたこの體、年一杯も合點だ。

善六　そんなら金は、直ぐにおぬしへ。

ト渡す。

善右　それで其方の埒は明いたが、此方の埒の鎧の跡金。コレ團三どの、どうするのだ〳〵。

團三　サヽ、その跡金もたつた今、手に入る首尾を、あの女めにッ……思へば憎ッくき

さよ　成る程、お前腹が立たう。コレ、善六さん、たとへ去り狀取るにもせよ、アレあの通りの腹立ちゆゑ、しらちを附けねば惡足は

善六　搦んでくるのが當り前。

善右　搦まぬ仕樣は

さよ　斯うするわな。

ト團三郎へ百兩の金を打ち附ける。團三郎取つて

團三　これは

さよ　假りにも一度約束の、男の顏へ泥を塗ろ、悔んで返らぬこの身のいたづら。せめてそれにて、これまでの

團三　科をつぐなふ詫び代と、我れへ渡すも、その身を沈め

さよ　男の主の御難儀を

團三　救うてくれる謎々も

十六　解けて今更恥かしき、さぞやわたしを淺はかな、女子と心で
さよ　さげすまれるのはわたしが身の上、ほんに女の風上にも
團三　置かれぬ奴と思ひしも、打つて變つてこの深切。
十六　モシ、なんにも云はぬ、お小夜さん、
團三　一生恩に
　　　ト金を戴く。
さよ　エヽ、何の事だな。……サア、善六さん、
善六　そんなら直ぐに。
　　　ト兩人門口へ出る。
十六　モシ、それではあんまり殘り多い。せめてわたしに姉妹の
團三　杯なりとした上で
さよ　それもわたしが望みぢやけれど、心が咎めて片時も、針の蓆に
團三　ヤ。
さよ　善六さん、惡い事はしねえ事だね。

善右　あのアバズレな心にも、我が身の惡いは辨へて、飛んで火に入る夏の蟲。
さよ　油地獄の苦界に沈み
善六　落ちるところは矢ッ張り男が
さよ　モシ、わたしやア餘ッほど馬鹿だね。
トこなし。唄になり、お小夜先きに善六附き、向うへ入る。善右衞門あと見送り、手を打つて
善右　イヨ、稀代々々。さて／＼恐れ入りました。氣前の女もあるものだ。サア、それで鎧の質受けもて
園三　直ぐさまこれより
善右　さうサ。この善右衞門、取る事は早いが好きだ。併し、置き主は鬼王どの、月小夜どのも同道にて
園三　それに附けても若旦那の衣服上下、槍も預けて
善右　ハテ、百兩あれば、六十兩の鎧を受けても、殘りの金で登城の道具は、一式受けこみ、儲けるところを儲けぬのは、どこぞの人にやる心中。
ト十六夜へいやらしきこなし。
園三　エヽ、忝い。これといふのもあのお小夜が

十六　先を越されて、わたしや本意なう。……モシ、ちよつと此こと風折樣へ
團三　申し上げて、安心あるやう。……そんなら十六夜
十六　早う歸りなさんせ。
善右　サア、行きませう。

ト唄、通り神樂になり、團三郎善右衞門は向うへ、十六夜は奧へ入る。上の屋體より十內出かゝりゐて、あと見送り、こなしあつて

十內　おきやアがれ。とんだ巧くやりかけた所へ、横合ひからあの女が出やアがつて

ト思ひ入れ。

併し、おれもこんな態をしても、曾我の譜代の赤澤十內、よもやあの神道者も、おれが盜賊とは思ひもせまいが

トこなし。この時門口に大藤內、大小袴の形にて出かゝりゐて

大藤　そんならわれが、赤澤十內とな。

ト十內、大藤內を見て、恟りして、又氣を變へ

十內　アイ、赤澤十內だが、どうしよました。

大藤　十内ならば、盗人動くな。

ト思ひ入れ。

十內　コレ、お侍ひ、藪から棒に盗人呼はり、おらア何もこんたの物を、盗んだ覺えは

大藤　無いとは云はさぬその證據。この品々に覺えがあらう。

ト以前の通ひを見せる。思ひ入れあつて

十內　ヤヽ、さてはこの事、團三めが

大藤　サア、もうこの上は、おのれに繩打つ。腕まはせ。

ト十內の左の手を捕へる。

十內　モシ〳〵、成る程その品々は、わたしが盜みましたが、どのやうにも致してつぐのひますから、どうぞ事穩便に

ト詫びる。此うち大藤內、十內の左の腕にある痣に目を附け

大藤　誠に面體恰好、似たとこそいへ、これ程までも。殊に左の腕の痣

十內　ヤ。

ト手をふり放す。

大藤　もしや其方が生ひ立ちは、宇佐美村にて
十内　成る程、親のその名も十内と、その悴ゆゑわしも十内。
大藤　さてこそ違はぬ
ト思ひ入れあつて
コリヤ、その幼名は、犬太郎とはいはざるや。
十内　ヤヽ、どうしてそれまで、あなたは詳しく
大藤　知らいでどうせう。
ト思ひ入れあつて
モシ、拙者めが爲には、あなたは御主人。
十内　エヽ。とは又どうして。
大藤　變つたところで、お目にかゝりましたなア。
ト合ひ方
過ぎし永萬二年の頃、工藤武者所祐次どの、四十二歳の厄に當つて、一子出生、世俗の譬へ、四十二の二つ子とて、道路に一旦捨てられしを、領地の百姓、宇佐美村なる十内が拾ひ取りしを、い

かなる主人の胸中にや、その儘右の十内に、音信不通に下されしが、その後身共は赤澤にて、河津を射たるを越度とあつて、主人の勘當、それより斯様に神職となつて十八年。計らず御主人のお血筋に、めぐり逢ひは逢ひながら、只淺ましきはあなたの御身の上。兄弟と申すは誰れござらう。三ケの莊の大々名、鎌倉どのゝ一臈別當

十内　すりや、兄といふのは祐經どのにて

大藤　いかにも。斯く申す某は、御前の譜代の御家來筋、近江の小藤太が成れの果て。

十内　ハテ、知らぬ事とて今日の日まで、仇なる伊東の素中間、河津が馬の口まで取つたる腑甲斐なさ

大藤　サア、御身の素性を誰れあつて、告ぐる人なきゆゑにこそ。知らぬ昔は是非もなし、今日よりお心改められ、一つの功をお立てなされて、工藤の家へ御歸參あらば、モシ、折を窺ひ、三ケの莊も

ト思ひ入れ。よき時分より十六夜窺ひ、様子を聞き、思ひ入れあつて入る。

十内　一つの功の手がゝりは、あの風折が持つてゐる、三ケの莊の系圖の一卷。又一つには逆澤瀉

大藤　それぞ屈竟、奪ひ取つて……モシ

ト囁く。

十内 すりや小藤太も工藤家へ
大藤 歸參の御用意。
　　トこの時向うより、若黨三平走り出て來り
三平 モシ、旦那樣、お喜びなされませ。祐經樣よりお召しの御狀。
　　ト手紙を差出す。大藤内開き見て、喜ぶこなしにて
大藤 エヽ忝い。多年の積鬱一時に晴れ、今ぞ本地へ歸參の小藤太。
十内 すりや、祐經どのゝ執持ちにて
大藤 これ御覽あれ。直ぐさま工藤の屋敷へ參れと、吉事の書面。
　　ト手紙を十内に見せる。
三平 お旦那には、これより直ぐに。下郎もお供を
大藤 イヤ其方は、コレ
　　ト三平に囁く。
三平 すりや、十内どのに力を合せ、逆澤瀉を
大藤 コリヤ。……拙者はこれよりお屋敷へ。……必ず右の二品を

十内　いまに吉左右

大藤　相待ち申しまする。

　ト唄、時の鐘にて、大藤内は向うへ、三平はこなしあつて下手の物置きへ入る。十内残り、思ひ入れあつて

十内　思つて見れば、捨て子でこそあれ、おれも工藤武者祐次が三男、兄といふのは誰れあらう、三ケの莊の大々名、工藤左衛門祐經が、弟にてありながら、こんな小さな事にかゝらうより、一足飛びの出世には、河津が後家のあの風折、心をかけて口説いて見たが、貞女だてする古風なたはけもう斯うなつては勿怪の幸ひ、色戀なれば未練がない。叩き切つても系圖の一卷。

　ト奥へ行かうとする。暖簾口より十六夜出て、十内を留めて

十六　モシ、兄さん、お前どこへ行きなさんす。

十内　サア、奥へ行つて、風折樣の看病して

十六　イヤ、そりやなりませぬ。

十内　家來が主人の看病するを、なんでわりやァ留めるのだ。

十六　イエ、曾我の爲には仇敵、工藤の家の血筋のお前に、風折樣の看病は

十内　ヤ、すりや、この身の素性を、詳しくわりやア

十六　聞いたでもなし、聞かぬでもなし。お前も一旦は、曾我の祿にて人となり、主人と頼みし風折様に、附けつ廻しつ道ならぬ、心をかけるのみならず、最前聞けば恐ろしい、三ケの莊の系圖の巻を

ト云はうとする十六夜の口を押へて

十内　コレ、それを云はれて堪るものか。

十六　サヽ云はぬによつてこの後、ふつ〳〵悪い心を改めて、とわたし風情が意見したとて、中々聞き入れぬお前の氣質。あなたに過ちある時は、わたしら夫婦が不忠となる。

十内　そんならどうでもこの事を

十六　風折様へお告け申して

ト行かうとするを、十内手早く手拭にて十六夜へ猿轡をかけ

十内　サ、何にも云ふなら云へ。邪魔のないうち、あの一巻。

ト行かうとするを、十六夜すがるゆゑ

エヽ、面倒な。

ト突きとばす拍子に、そこにある薪割り、十六夜の脾腹へ立ち、苦しみ、手拭取れて

十六 エヽ、胴慾な兄さん、こりや、わたしを殺すのか。

ト悔りして

十内 ヤヽ、怪我とはいへどこの深手。………併し勿怪の幸ひに、邪魔を拂へば

十六 イエ〱、なんぼでも奥へはやらぬ。

十内 七面倒な。毒くはゞ皿

ト薪割りにて十六夜をしたゝかに切り下げる。立廻り、トゞ十六夜を殺す。この時十六夜の懐中より、以前の團三郎の小指、紙に包んだまゝ落ちるを、十内取上げ見て

こりやァ何だ。アヽ、先刻團三めが切つた小指だな。

ト思ひ入れあつて懐中して、右の薪割りを提げ、奥へ忍び込む。矢張り時の鐘、合ひ方。奥バタ〱にて、十内頬かむりにて、一巻を盗み出るを、風折、十内に附いて出て來り

風折 その一巻に心をかける盗賊め。やはか其まゝ

ト一巻に手をかける。立廻りに手拭取れ、十内の顔を見て

ヤヽ、そちや十内ではないか。

十内　ハイ〳〵、イヤモウ、面目次第もござりませぬ。

ト俯向き、こなし。

風折　ヤイ十内、そちやマア、道知らずと云はうか、不忠者と云はうか、譬へやうなき人非人。さてこそ最前勘當の、歸參の詫びも中々に、本心ならぬと知りながら、團三夫婦の忠義にめで、免してとらせし恩を仇。病みほうけたる風折に、間がな隙がな道ならぬ、心を通はすのみならず、三ケの莊のこの一巻を、奪ひ取らんとはようもマア、人の皮着てなる事かいの。人の知らぬが、その身の幸ひ、この風折が心一つで、今度は赦す、その代り、もう〳〵主でも、家來でもない、この家にとては一時も叶はぬほどに、サア、早う出て行きや。

十内　ハイ〳〵。

ト平伏して思ひ入れ。

風折　出て行きやらぬかいの。

トきつと云ふ。十内思ひ入れあつて

十内　イヤモウ、あなた様に其やうに云はれましては、一言の申し譯もござりませぬ。もう〳〵、どの面さげてお詫びも出來ませぬ。成る程、只今すぐに出て行きませうが、こゝに一つのお願ひがご

ざりまするが、これまで主従のよしみに、どうぞお聞きなされて下さりませ。

風折 ムウ。いかなる願ひの知らねども、これまでの主従のよしみもあれば、身に叶うた事なれば

十内 お聞きなされて下さりますか。

風折 マア、云うて見やいの。

十内 左様なら申しまするが、モシ風折様、戀は思案の外とやら申しますぞえ。

風折 何と云やる。

十内 たとへ主従であらうが、戀に上下の隔てなしと、惚れたがどうした。こなたの器量に十内が、ぞつこん心が迷つてゆゑ、間がな隙がな口説いたに、よくもつれなく振り附けたな。その返報に願ひといふは、外でもない、その一巻を貰ふのだ。

ト風折の懐中より一巻を引出すを、風折すがつて

風折 女の主と侮つて、手籠めにその品取らうとて、やはか其まゝ

十内 やかましいわえ。

ト以前の薪割りにて、風折がしたゝかに切り下げる。

風折 エヽ、おのれはなァ。病みほうけたる主を殺して、その一巻を

十内　知れた事だワ。戀の叶はぬ意趣晴らしに、一巻添へて命も貰ふ。コレ、主だ〳〵と吐かしやアがるが、素性を糺せばこの十内、うぬらか敵と付け覘ふ、祐經が實の弟だ。おのればかりか、蟲ツ子一匹、曾我へゆかりの奴ばらは、みんな殺らしてしまふのだ。こま言ぬかさず、くたばつてしまへ。

ト風折を滅多切りに切り倒し、トヾ風折を仰向けに押こかし、薪割りを咽喉に押あて、とゞめを刺さんとする。この時向うに人音するゆゑ、十内トツカワと小隱れする。時の鐘にて向うより團三郎、鎧を抱へ出てくる。直ぐに舞臺へ來り

團三　女房ども、首尾して戻つたぞや。……こりやどうぢや、日が暮れたに灯もともさず

ト内へ入り、思はず風折に爪づき、悸りして

ヤヽ、こりや風折様を何者が

トこなしあつて

モシ、風折さま〳〵。

ト呼び生ける。これにて風折苦しきこなしにて

風折　團三郎か。遅かつたノ〳〵。

團三　コレ、お心を慥かに。こりや何者が此やうに

風折　あの十内めが、むごたらしう

團三　エヽ、すりやアノ十内めが

トこの時十内、抜き足にて門口へ出かゝるを、團三郎窺ひ

さてこそ十内。

ト追ひかけやうとするを、十内、外より門口をシャンと締める、木の頭。風折落入る。團三郎氣を變へ裾をからげる。この仕組みよろしく、ひやうし

幕

第一番目　大詰　對面の場

浄瑠璃　紫の明ぼの染や春の庭　蝶羽風梅暫　常磐津連中

役名――義盛息女、舞鶴。かむろ、千鳥實ハ御所ノ五郎丸、曾我の五郎時致。工藤左衛門祐經。曾我の團三郎。近江の小藤太成家。八幡ノ三郎行氏。大江志摩五郎。大江千島之助。梶原平三景時。梶原源太景季。新貝荒次郎。竹の下孫八。安西彌七郎。愛甲三郎。小林ノ朝比奈。曾我十郎祐成

本舞臺、三間の間、正面高足の二重、向う金襖。この屋體の中に常磐津小文字大夫連中ゐならび、上の方筋かひに平舞臺の大杉戸。下の方柴垣、梅の立ち樹。日覆ひ一面の梅の吊り枝、すべて結構に飾り附け、早舞ひにて賑やかに幕明く。

ト頭取出て、口上觸れあつて入る。すぐに前彈きにかゝる。

〽霞晴れ、綠の空もおのづから、いつより分けて新らしき、春の顏見世花やかに、待ち設けたる色一座。

ト誂への鳴り物になり、眞中に時致、羽織衣裳、長煙管を持ち、此うしろに朝比奈、着流しにて手拭ひを片襷にかけ、剃刀を手合せしてゐる、立ち身。下の方に千鳥、禿にて、大きなる姿見を持ち、裏向きにて坐り、時致に見せてゐる。上の方に祐成、紫縮緬の蒲團掛けたる炬燵にあたり、口紅の文を見てゐる見得。尤もこの側に大杯、喰ひ積み臺、屠蘇の銚子を並べあり、双方見得よく、舞臺眞中へセリ上がる。

〽髭が執持つ吉例の、元服曾我にあらねども、思ふ敵に合せ砥の、今日を晴れなる身仕舞ひは、鎌倉風の今樣に、烏帽子下よく初剃りの、向う鏡は廓から、使ひに通ふ千鳥とて、幾

夜寢覺めか醉ひ醒めに、文の便りはよい目覺ましと、機轉も流石大磯の、いろ市川の高麗せ者、笑ふ姿は梅の花、兄が指圖の驚付きは、弟思ひの眞實に、蝶は牡丹に遊び好き、怠け仲間の鶴の丸、豐かに步む日の春や、仲よい同士と見えにける。

ト皆々よろしくあつて納まる。

祐成　オツトよし〳〵、まづ初剃りの祝儀には、この大杯にて、サア〳〵一つ。

朝比　また酒か。たつた今醉ひ倒れて、虎の所から文が來たので、起きたではないか。

千鳥　其やうにあがりなさんすと、おいらんに云ひ附けますにえ。

時致　エヽ、又この小僧は、こましやくれた奴だ。……コレ朝比奈、今日は左衞門祐經に逢はせてやらうと、兄弟こゝへ連れて來て、こりやアいつまで待たせるのだ。

朝比　イヤモウ、相も變らず氣短かな男だ。祐經は五月下旬の狩り場の地割り、その工夫のうちなれば、もう少つと待つてゐるがよいではないか。そんなに野暮を云ふから、ソレ、見やれ、大磯から兄貴のところへばかり文が來て、化粧坂からおぬしのところへは、文も一つ寄越さねえぜ。

時致　馬鹿を云ふな。この時致は、小いやらしい女の文、見るも嫌ひだ。只見たいのは女の文より、敵のおもて。

祐成　これはしたり、又しても〳〵。……我れ〳〵兄弟は、今日勘當の身の上、表立つて敵呼ばはり、それでは却つて、養父祐信どのゝ身の難儀。

時致　それだといつて現在に、工藤の屋敷へ來てゐながら

朝比　サア、それだによつて、今におれが逢はしてやる。急がずと、マア〳〵、もう少し

祐成　待つてゐるうち、サア〳〵、酒々。

ト大杯を取上げる。

時政　イカサマ、癇癪酒のこの杯。ドレ、時政がおッ初めて

祐成　千鳥、爰へ來て酌をせい。

千鳥　そんならどうでも上がるのかえ。

時致　知れた事だワ。この杯に十杯百杯、なんの事、瀧呑みにしてくれべいか。ドリヤ。

ト大杯を持ち、片手に塗り樽を持ち、取り上げて見得。この時ドロンと、短冊の附きし簪、酒樽へ突ッ立つ。

祐成
朝比　イヤア。

ト皆々見る。件の短冊に「しばらく」と書いてある。

時致　この短冊に「しばらく」と書いてあるは。

朝比　ハヽア、初春とはいへど、今年は矢ッ張り此方の顔見世。

祐成　でも、親玉が爰に居るのに、外に「しばらく」といふ者は無い筈ぢやが。

時致　まだもこれかと思ふ小倚は爰に居るし。誰れであらうな。

朝比　何であらうと、コレ、兄貴、音羽屋の株で、こなた、受けにならずばなるまい。

祐成　そんなら丁度、この羽織を斯う着て

ト羽織を裏返しにして、後ろ前に着る。杯臺を冠りにして、炬燵の上へ乘る。

千鳥　そんならわたしが、これをちよつと後ろから。

ト件の大杯を梅の枝へ附け、褄折りの傘のやうにさしかける。

朝比　成る程、氣の利いた禿だなア。

時致　何はともあれ、今この時致が引受けた杯、「しばらく」と聲を掛けたは何奴か、小林、爰へ呼び出しやれな。

朝比　成る程、春と顔見世を、打込んだる今この時、鯰坊主も髭仲間、二役かけて

ト思ひ入れあつて、花道の附け際へ來り

今揚げ幕から「しばらく」と、聲をかけたは有り觸れた、鬼か人かは知らねども、思はせぶりか、知らずなか、おめず臆せず恥ぢらはず、急いで爰へ、のたくりツン出ろエヽ。

〽かゝる所へ向うより

ト突ッ掛けになり、向うより舞鶴、鶴菱の振り袖、柿に三升の素袍の上みを引つかけ、出て來り

〽霞を分けて暫くと、留めた〳〵は小林の、朝いなんしな無理やりに、今日るつゞけの惡法を、かきの素袍の糊こはく、ア、つがもない出立ちばえ。

ト舞鶴、花道にて、よろしく振りあつて納まる。

朝比　とても事に暫くと、梅にとまつた花道で、わざッとばかり、ぐぜれ〳〵。

舞鶴　それ初春の壽を、祝ふは年の市川に、賣切れ申し組み入れの、三升は本家本升屋、火打ち鎌髭小林を、力紙ともみきの口、口ばし青き舞鶴が、子供遊びに高麗ちやんの、お友達ならいたづらを、叱られさうな所をば、受けてもらふは音羽屋さん、扇々のちなみにて、合ひの押への暫くは和田が三日山谷町、假り宅引けて本宅へ、木挽町から引ッ越しの、女房氣どりでやんすでごんすと、ホヽ、敬つてぢやわいなア。

時致　名だてがましく暫くと、つんでた奴をよく見れば、油ッ臭い仇附きもの、この時致は大嫌ひ。朝

朝比　比奈、キリ〳〵あの女を
　　オッと、吉例引ッ立ては、髭が持ち前、ドリヤ〳〵〳〵。
　　ト舞鶴の側へ來り
　　ヤイ、女め、キリ〳〵そこを、立てエヽ。
　　〳〵と云ふは僞り、太夫さん、まづ明けましては結構な、花の初春淨瑠璃に、いかに鎌倉なればとて、さりとは女の拂底な、ところへ丁度御來臨、引ッ立てどころか皆樣も、待ちかね山の時鳥、八千八町の贔屓綱、ヤレ聲かけてじんわりと、引いてもらうた初霞、その猿隈や猿若の、顏見世だけに暫くは、有り難いではないかいな、サア〳〵こちへと手を取れば、そのお迎ひよりわたしこそ、さらばお腰を先刻にから、上げたうて、行きたうて、つらね臺詞も跡や先き、いそ〳〵舞臺へ來りける。
　　トこの文句の切れよりトヒヨになり、舞鶴朝比奈、振りあつて舞臺へ來る。
祐成　これは誰れかと思うたれば、小林の妹、舞鶴どの
時致　なんで酒を暫くと
舞鶴　留めて出たのはお二人さん、今日は大事の願ひの日、その待合ひの癇癪酒。いつぞや和田の大寄

せに
朝比　九十三騎を呑みつぶし、障子蹴破り仁王立ち、この髭には困らせきつた。
舞鶴　サア、その酒癖の時致さん、あの時は皆御一家ゆゑ、跡は笑うてしまうたなれど、今日は恥あるその人に、逢ふ時あんな手があつては、濟まぬと思うて暫くと、お前の臺詞を見眞似にて、鶴の素袍の花色を、ひねつて染めた洒落畫きの、三升の紋で舞鶴が、お酒を留めた上からは、ハテ、落ちついて、ナア、兄さん。
朝比　オヽ、よく留めて出てくれた。それでおれも、落ちついた〳〵。
時致　和田酒盛りの事を、云はれては一言もないが、この時致に酒を留めて、出たばかりぢやァあるめえ。大方兄貴に
舞鶴　兄さんとはえ。　ト朝比奈を見る。
朝比　ハテ、おれぢやァねえ、彼方の兄イよ。　ト祐成を指さす。
舞鶴　イエ〳〵、なんのわたしや

ト時致へ思ひ入れ、時致睨み附ける。

祐成　アヽ、コレ〳〵。……成る程、流石小林通り者、有やうは先刻にから、この祐成が、そもじを妾で待受け役、思ひ附きぬる冠り裝束。この場で急に……ナ、ソレ、この祐成に思ひのたけを

ト舞鶴の側へ寄る。

舞鶴　アレ、側に附き手がゐるぞえ。

ト千鳥へ思ひ入れ。

千鳥　祐さん、ほんに呆れますぞえ。

〽わたしや禿で譯知らねども、浮氣〳〵は殿御の癖と、心で納めてゐたうても、惚れりやしみ〴〵野暮になる、その中々のお使ひで、矢ッ張り戀の目代役、祐成さんの張り番に、きつと離れずお側にと、あのおいらんの云ひ附けで、わしがゐるのに馬鹿らしい。

ト朝比奈前へ出て

〽これは尤もさりながら、悋氣もいはゞ名代だけ、ちつとは大目に五郎十郎、わるい地口や口合ひで、だましたらして春遊び。

ト此うち朝比奈、舞鶴祐成に目まぜして、祐成舞鶴千鳥、羽子板を持ち

〽梅にかほれば櫻に仇よ、風も吹くな、なほ吹くな、金の羽子板追ひ羽子や。
ト拍子になり、三人追ひ羽根の振りあつて、千鳥をだまし／＼、口說き模樣になる。
〽一夜二夜の廓がよひ、云ふぢやなけれどそれ其やうに、惚れさせ過ぎて今は早
ト千鳥を見て氣を變へ
〽三わたし嫁御にさしやんせう、いつかうか／＼わしが身は、だまされさうな室の梅
〽なんの情けも眞實も、廓に咲ける當座の花。
ト祐成また千鳥へ思ひ入れあつて
〽八つやる瀨もなみ／＼の、深い心は只ひとり。
ト撫鶴に寄添ふ
〽嬉しがらせておちら向き、笑はしやんすか知らねども、憎いといふは思ふから、忘れかねたるわたしには、なんの意趣やら今までに、水の早瀨のみをつくし、きをもませるが樂しみか。
ト思はず時致に抱き附かうとして、こなしあつて祐成に寄添ふ。千鳥中を隔て
〽九つ心を許させて、わしを子供と思うてからに、とうと二人はてつきりと、これがほんの

色ぢやえ。

ト鞠唄、口説き模様よろしく納まる。

時致　コレ、兄者人、おかッしやい。あんまり女に薄のろい。

朝比　また始まつた。コレ、兄イ、おぬしの色が爰に居ぬゆゑ、そこでそんなに中ツ腹か。

時致　イヤ、この時致は女は嫌ひだ。

朝比　コレ、まだ野暮を云ふのか。和田酒盛りの大寄せに、それから跡が化粧坂。

ト時致の背を叩く。

兄イと違つて時致は、嫌味のない勇み肌。

時致　イヤ、この時致は色も香も

〽嵐に揉まるゝ鎧蝶、蝶は菜種の花知らず、色氣知らずの里通ひ、一度や二度は附合ひに、ふられて歸る時雨月、猪牙より早き駿足も、小陰に首尾の待ち設け、丁度椎の木通ひ路と、思ひぞ伊豆の赤澤山、それから狂ひ十八年、逢ひたさ見たさは色よりも、只その人こそゆかしけれ。

舞鶴　その人とはえ。

時致　ハテ知れた事、敵、左衞門

舞鶴　イエ、逢ひたいは少將さん、

時致　エヽ、嫌らしい。貴女は嫌ひだ。

〽賣り詞に買ひ詞、馴染みとなれば犬猫でさへ、萬更憎うはないものを、氣隨氣儘や癇癪の苦勞が矢ッ張り樂しみに、暮らす女の心意氣、勤めする身も素人も、別に變りはなめすぎた云ひ草ながら持ち前の、鬼の女房に氣のきかぬ、わたしばかりは戀の慾、許してほしいぢやないかいな。

ト時致へ寄添ふ。

時致　おきやアがれ、浮氣者。兄貴に先刻べた附いて、また時致に嫌らしい。どこの女もおらア嫌ひだ

祐成　コレ、時致、女嫌ひと云はしておいても、よう知つてるぞや。

時致　そりや何を。

祐成　其方があんまり野暮なゆゑ、先刻の口說きは祐成が、相手になつて、心を引いたこの舞鶴。

舞鶴　云ひ寄る事も怖らしい。時致さんに思ひの丈を、兄御さんをお頼み申して

祐成　役の惡い名代も、弟だけに斯うした魂膽。

朝比　ハヽア、そんなら妹のは、祐成ぢやァなくて

祐成　遠から出來た弟の花。

千鳥　それでわたしも落ちついたわいなァ。

朝比　ハテ、とんだ上げ坪だ。

舞鶴　お氣に障るか知らねども、どうぞ心を、時致さん。

時致　おらァどうだか知らねえわえ。

ト悄げる思ひ入れ。

祐成　噓ばつかり……噓で固めた廓にも

〽いつか互ひの實も知れ、しげ〳〵逢へばお宿の首尾、又は内でも迫き迫かれ、人目の關や籬の關、忍んで通ふ魂膽は、色に苦勞の修行者か、さては田町の占屋さん〽奇妙頂禮さんげ〳〵、六根しみじみおぬしに首だけ金剛堂、見立ての杯、新造買ひ、裏の座敷がおいらん買ひ、禿が使ひの文の數、起請が三十三度にて、つもる話しに思ひがまさり、どうぞ首尾して哀愍納受、事が萬事、機轉が大事ぢやあるまいか。

ト祐成よろしく振りあつて納まる。舞鶴前へ出て



へ色の合ひ圖は人目にも、覺られまいと素知らぬ顔で、酒の擧げ句が爪彈きにへ鉦や太鼓でどんがらの、ちやんちきちと尋ね逢はれうものならば、どうぞ逢ひたや、迷ひの子の〱三太郎さんに逢はせたや。

ト舞鶴振りあつて、祐成、前へ出て

へ逢ふに幸ひあの一間、サアおいらんが先刻にから、待つてゐなんす、丁度よい、寸善尺魔のないうちに、お忍びなんしと手を取つて、門ちがひなる執持ちは、これも新らしき色の道に

トこの淨瑠璃のうち、舞鶴よろしく時致の手を取り、祐成執持ちにて、上手の格戸を明け、兩人を内へ入れる。

朝比　あきやアがれ。おらア仕組話して、また踊つてゐると思つたら、おいらを出し拔いて、あいつらは踊る眞似をして這入つてしまつた。あんまりな早手廻し。今時の娘には油斷がならねえ。

祐成　油斷のならぬは工藤の館、用を濟ますのが心得ぬ。ドレ祐成が、これより奥へ。

ト朝比奈をかきのけ、奥へ行かうとする。

朝比　コレ待て、イヤハヤ、珍らしい事があればあるもの。あの暴れ者の時致が色事を、生ぬるい祐成が執持つて、いつにない祐成が奥へ踏ん込まうとは、近年、世の中が違ひました。一番おれも踊つて

く、兄の色師を草摺曳き、爰でとまつて下さるなら、忝けなまめく濡れ事師、似合はぬながらも
吉例の、朝比奈だもサ。

祐成　いや、いつまでうか／＼期を延ばすべきぞ。こゝ放せ。

朝比　留めた。

祐成　放せ／＼。

朝比　留めた／＼、おッ留めた。

ト見得をしさうにする後ろより、千鳥、朝比奈を突き飛ばし

千鳥　爰はわたしが受取つた。お前は早う

祐成　たべつけぬ草摺りは、其方に頼んで

千鳥　早うござんせ。

祐成　合點ぢや。

〽勇む姿は楠に、櫻の咲きし如くにて、荒事まじりの蝶千鳥、浪を蹴立てゝ

ト祐成は思ひ入れあつて一散に奥へ入る。朝比奈やう／＼起き上がり、千鳥を見て恟り

朝比　ヤア、この小びッちよ、とッ拍子もねえ力だが、わりやァ只の禿ぢやァあるめえ。

千鳥　知れた事だ。頼朝公のお側去らず、御所の五郎丸重宗。強いが好きの曾我贔屓、日蔭の兄弟おちさん達と、遊ぶも人の思惑ゆゑ、名に大磯の禿と化けた。小林、なんときついものか。いつもの草摺り、時致の代りに、丁度同じ名の五郎丸が、相手にならう。力自慢の髭奴、力競べは今ここで、奴頭と重宗が、なまでガリ／＼噛つてしまふワ。

朝比　おやツかな。にしやアおれをば、駱駝の薩摩芋だと思ふか。小さい口から大きな事をまき出したな。ドレ、その顔を

千鳥　何を。

トきつとなる。

朝比　オヽこは。

〽こはい顔見世正月に、持ち越し酒の癇癪が、留めにやならぬに袖袂、引けども押せども
こりやどうぢや。

千鳥　朝比奈、力はそれぎりか。

朝比　ウヽヽエヽ。

〽オヽ恥かしや恥かしい、これぢやなるまい、木遣りも古し、今の流行りのよしこので、ち

つと和らにやんなんし。

トこれより千鳥朝比奈、手踊りになる。

〽花に蝶々はわしや氣が揉める、出てはちら〱迷はせる、よしこの〱、いて來ちやぐんぐんおややれ〱〱、すいら〱でん〱。

〽中の千鳥の啼くのも道理、見ずに逢はずに暮らさりよか、よしこの〱、なんだべこじやん〱、おややれ〱、面白や。

トこれより大太鼓入り。草摺りの鳴り物になり、よろしくあつて

〽互ひに爭ふ龍虎の勢ひ、引きつ引かれつ引く力は、外にたぐゐも荒事師、江戸市川の鶴の丸、外に中村めざましく、歌舞伎の春の吉例を、花の顏見世とりまぜて、賑はしかりける次第なり。

ト千鳥朝比奈よろしく見得。カケリにて、この道具ぶん廻す。

本舞臺、三間の間、揚げ障子の高二重、欄間蹴込みも庵りに木瓜の紋ちらし、東西常足の二重、塗り骨の障子、屋體同じく蹴込みとも紋ちらしにて、よき所に梅の立ち樹、吊り枝、ぱい見事に飾り附

け、爰に雲藤、黒の四天、忍びのなりにて、友切丸の太刀を持ち、竹平、菖蒲革足輕の形にて、こ
れを支へてゐる見得、本神樂にて道具納まる。

雲藤　青二才め、おれを支へてなんとする。

竹平　なんとするとは口元な、うぬが惣身の黒出立ち、云はずと知れた古風な泥坊。盗んだその品おれに渡し、きり〳〵どこぞへかッ走れ。

雲藤　ハヽヽヽ。さう云ふうぬこそ矢ッ張り古風、盗んだ品を左樣ならお渡し申すといふ奴が、どこの國にあるものか。ほんの無駄事、無駄口を、叩かすと通しやアがれ。

竹平　通しやアがれとはよく吐かした。うぬを通すは冥土の道、黒い出立ちで新らしく、亡者になつて地獄の門、勝手次第に通りやアがれ。先づその品を

トかゝるを立廻つて

雲藤　さう吐かしやアうぬもあの世の旅、菖蒲革より三途の川、婆アの子には相應な、うぬから先きへ

竹平　小癪な事を。

ト鳴り物になり、立廻つて、雲藤の懐より手紙を引出し

「小藤太どのへ、闇坊より」

雲藤　それを。

竹平　何か證據になるべき密書、八幡どのへ。

雲藤　何を

トまた立廻つて、竹平は件の密書を持ち、上手の障子へ駈け込む。雲藤は下手の障子へ、友切丸を持つて駈け込む。この時バタ〳〵になり、東西の障子を開く。上の方に祐成、吉例千鳥の素袍にて、竹平を引敷き、右の密書を持ち、この側に朝比奈、以前の形にて控へ、下手に時致、同じく鎧蝶の素袍、吉例の形にて、雲藤を引敷き、友切丸を持ち、この側に舞鶴扣へ、双方きつと見得。鳴り物になり

祐成　虎と見て、石に立つ矢のためしあり、父の仇には共に天を戴かず、十八年の折を得て

時致　盲龜の浮木優曇華の、今日ぞ敵のしやッ面を

祐成　見參せんと忍び寄る、一間のうちへ怪しき曲者。

時致　まッ黑出立ちの持參の劍、これぞ正しく敵の首、元は一家の祐經を、友切丸とは面白い。

祐成　密書の宛て名は近江の小藤太。

朝比　まづ幸先きよき、この曲者。

舞鶴　中を押への氣の藥。ぢれた茶碗のその代り

時致　うぬが五體を粉みぢん。

祐成　此方は小林、合點か。

朝比　オット呑みこみ。よい慰み。

雲藤
竹平　こりや堪らぬ。

ト逃げさうにする。朝比奈は竹平を踏み殺す。時致は雲藤を掴み殺し、雲藤見事に中がへりなする。

時政　ハテ、小氣味のよい、この血祭り。これから直ぐに踏んごんで

ト立ちかゝる。この時正面の障子の中にて

祐經　老船迷ひ易し、さんうの後、しゆんじやうつなぎがたし、夕陽の前。

祐成　あの聲は

時政　慥かに祐經。

朝比
新鶴　コレ。

ト押へる。

祐經　近江八幡、障子を揚げい。

近江
八幡　ハア、。

ト對面三重のかゝりより、直ぐに誂への鳴り物になり、正面の障子を揚げる。内に祐經、狩衣裃にて裏向きに坐り、正面に大きなる衝立て。これへ一ぱいに富士を描いたるを据ゑ、狩り場の地割りなしてゐる思ひ入れ。この衝立ての脇に富士淺間奉納と札附けて大袖鏡二面を飾りあり。上手に近江小藤太、上下にて扣へ、下手に八幡の三郎、對の形にて扣へゐる。舞臺の人數、朝比奈と舞鶴入れかはり、上手は祐成、此うしろに舞鶴住ひ、下手に時致、此うしろに朝比奈、腰抱きの見得にて、双方よろしく納まる。

小藤　皐月下旬の狩場の地割り、御工夫の其ところへ、かしましい二人の奴ら。

八幡　惣奉行たる御主人の、御物忌みの此ところへ、妨げあつてはお爲になるまい。

小藤　キリ〳〵そこを下がりをらう。

祐經　近江八幡、まづ扣へい。予が物忌みのその庭に、物申したは慥かに蟲か鳥ならん。これも生ある歌の徳。花に啼く鶯か、但しは水に棲む蛙か。しかも、かはづの子であらう。

時政　なにを。

祐經　富士淺間へ奉納の、鏡にうつる河津の子。ハテサテよくも、似たワ〳〵。

朝比　そりや何者に

舞鶴　似ましたな。

祐經　この場に似寄りし物語り。安元二年神無月、赤澤山にて敢へなく去りし、河津の三郎祐安に、兄弟の悴ありと聞きつるが、今は親なき日蔭者。殊に母にも勘當せられ、浮世に狭き兄弟二人。鏡へ映るは庭に啼く、蟲のかはづの子供らも、年恰好は兄弟に、似たりや似たりさりながら、ここへ誠の兄弟は出られぬ筈。勘當なれば一家も勘當。たゞ兄弟に似た蟲の、春なればこそ我が庭へ、ハテ、よく來たなア。

祐成　蟲に譬へしかはづの子、五つや三つの頃よりも、なき習ひたる無念の月日。

時致　一寸の蟲に五分の習ひ。蟲の中でも針のある、敵の素頭一刺しに、刺さねば蟲が納まらぬ。

祐經　ハテ、しをらしき春の蟲、花に宿りの蝶小蝶、兄は小鳥の羽もがれず、世にあるならば一家ぞと、名乘りもせんが今は早、いづくにあるか幼名も、兄は慥に一萬丸、さぞや成長いたしつらん。

祐成　物變り、星うつり、世に甲斐もなく人となり

舞鶴　祐信樣の御養子にて

祐成　曾我の十郎祐成。

祐經　まつた弟に箱王とて、たくましさうな兒ありしが

時致　明暮れ口惜しと浦島が、箱根に育ち成長なし

朝比　北條どのゝ烏帽子子にて

時致　曾我の五郎時致。

祐經　庭のかはづの子供の兄弟

祐成　工藤左衞門

時致　祐經どの。

祐經　ハテ珍らしい

トこの時祐經正面向き

三人　對面ぢやなア。

ト皆々よろしく見得。この時上下の障子屋體より、梶原景時、梶原景高、新貝荒次郎、安西彌七郎、竹の下孫八、愛甲三郎、いづれも大名にて、兩方へ三人づゝ並び

皆々　ドツコイ。

時致　親の敵、祐經觀念。

ト飛びかゝらんとする。祐成舞鶴、つか〳〵と來て、よろしく留める。

朝比　コレ、そこを一番、おッ堪えろ〳〵。

景時　待て〳〵。祐經狩り場の地割りの工夫、その鬱氣を見舞ひの爲

景高　諸士の別當梶原はじめ、在鎌倉の大小名

新貝　此ところにあるとも知らず、疊ざはりの荒い素丁稚。

安西　見るから形も曾我々々と、貧乏じみたあのしやッ面。

竹下　春風で寒いやら、ブル〳〵慄へてをりまする。

愛甲　見りやア見るほどみじめな態だ。いづれもお笑ひなされい。

皆々　ハヽヽヽヽ。

舞鶴　やかましいわいなア。お前方、コレ、よう聞かしやんせえ。金の草鞋で尋ねても、此やうに揃ひも揃うた御兄弟は、近年ほかにはあるまいがな。江戸の生粋日本一。憎まれ口をきかしやんしたら、口が曲らうぞえ。コレ、兄さん、お前も何ぞ、云うてやりなさんせいなア。

朝比　いゝツ〳〵、打ッちやつて置け。その代り、あんな事を云ふ奴は、いつでも女郎に振られるワ。野暮な奴らだ。

舞鶴　ほんに、色氣は微塵も無いわいなア。

朝比　時に祐經どの、この朝比奈が折り入つての頼み、曾我兄弟へ對面の、杯をしては下さるめえか。

祐經　これは小林の詞とも覺えぬ。只今も申す通り、曾我兄弟は日陰者。兄祐成は廓がよひに、逆澤瀉の鎧を失ひ、弟五郎は箱根にて、友切丸の疑ひかゝり、それゆゑ兄弟勘當の身。諸侯方の御列座のこの席へ、曾我兄弟では出られまい。さればこそよい事に、年も似合ひとかはづの子、曾我兄弟ではあるまいが。

朝比　成る程、これは髭が出そこなひ。併し折角參會の、その杯を祐經どの。

舞鶴　曾我にはあらぬお二人は……オヽ、それ〳〵、大磯小磯の廓の藝者、祐經さんのお物忌み、お氣慰みにと二人の衆を

朝比　オヽ、それ〳〵。口輕氣輕の太鼓持ち、氣晴らす爲と、てッぽうから寸志の二人。

祐經　流石義盛寵愛の、お身達二人が當座の挨拶、祐經殆んど祝着いたす。予が慰みにと送られし、廓の太鼓藝者なら、杯いたさう、さりながら、お見舞ひ下さる諸侯方、上座は失禮。いづれも方には、まづ〳〵これへ。

景時　然らば左衞門

皆々　祐經どの。

祐經　近江、八幡、杯の用意。
近江
八幡　畏つてござりまする。
ト三保になり、祐經舞臺へ下りて來り、いつもの所へ住ふ。大名のこらず後ろの屋體へ上がる。近江八幡、銚子三方持ち來る。
祐經　鎌倉どのゝ御治世にて、草木もゆるがぬ今この時、武を和らぐる廓の諸譯、憂きを語るを姉といひ、世話になるのを妹と呼び、音順なればさしあたる、兄とたとへる、そな若者。
ト祐成に杯をさす。
祐成　申すも烏滸なる事ながら、日蔭の身ゆゑ淺ましや、表向きなる名乘りさへ……イヤ、座敷勤めの我れ〳〵へ、祝儀の杯、有り難く頂戴仕る。
ト土器をグッと干す。祐經その土器を取上げ
祐經　後に押へしわッはやい。
時致　なんだ。
祐經　杯くれう。ずつと參れ。
時致　戴きますべい〳〵。

ト思ひ入れあつて

今日はいかなる開運にや、一﨟職のお客人、打つと名のある太鼓持ち、日頃どうがな座敷振り、大盡ぶりのその面を、見たい〳〵と神佛、せがんだ甲斐の有り難い、待ちに待つたる今日只今、杯頂戴いたすであらう。

ト土器をグツと干し、打碎いて見得。

祐經　ハテ、勇ましい……イヤ、廓に似げなき、荒々しき若者。其方は廓の太鼓持ちか。イヤサ、蟲けらと云はれても、この祐經に逢いたいとは、ハテ、天晴れ。併し廓の習ひにて、大盡の落ちぶれが、太鼓持ちとはまゝある事。以前は伊豆の三ケの莊、その大盡さへ世に落ちて、恥も赤澤山の端に、日蔭の身なれば無念なか。

時致　さん候ふ〳〵。

祐經　口惜しいか。

時致　ムウ。

祐經　さもさうず、さもあらん。口惜しうても無念でも、そこを忍ぶが太鼓の役。この祐經も廓でいはば大々盡、連れる時には太鼓、末社、連れざる時も新造、かむろ、全盛つくす某を、覗ふなどと

は廓で忌む、地廻りとやら、ごろつきとやら。ハヽヽヽ、及ばぬ事ぢや、叶はぬ事ぢや。

時致　もう料簡が

ト三方を掴み毀して立ちかゝる。朝比奈後ろより留めて

朝比　コレ、そこを一番、おツこてえろ／＼。

時致　放せ／＼。

近江　ヤア、最前からおし默つて見てゐるところ、慥かに曾我の祐成、時致。御主人左衛門祐經どのを親の敵と覗ふ樣子。その身に科のありながら、敵呼はりしやらくさい。曾我と工藤は一家のはし、合力受けに來さへすれば、年玉ものでも取らしてやるに、痩せ我慢は貧からと、立寄らば大樹の陰、長い物には卷かれろだ。

八幡　逆澤瀉といひ友切丸、二品出でぬその時は、養父祐信樣の身の難儀。その辨へなく此ところで

近江　たつてドクシヤクぎしやばれば、今日歸參の手始めに、お側に從ふ近江の小藤太

八幡　八幡の三郎扣へをれば

近江　どつけえ

八幡　そつけえ

兩人　やりやアしねえ。
時致　なにを。
景時　曾我兄弟なら二品の、疑ひかゝる大罪人。
景高　引ッ縛つて頼朝公の
皆々　御前へ引くワ。
祐成　いかにも、疑ひかゝりしその一つ、友切丸の詮議の手がゝり。最前手に入るこの密書。
ト以前の密書を出す。
祐經　ドレ。
ト取つて、上書きを口の内にて讀み、懐中して
手がゝりあれど正眞の
時致　その友切丸は計らずも、最前手に入り、即ち爰に。
ト出して見せる。祐經改め、思ひ入れあつて
祐經　いかにも、紛ふかたなき友切丸。
時致　この品出づる上からは、もう世の中に遠慮はねえ。工藤左衛門祐經どの。河津を討つたは我れなり

祐經　と、この場に於て名乘れエヽ。

祐經　イヽヤ名乘らぬ、其方達兩人、未だ明りは、立たぬ〳〵。

朝比　イヤ、紛失の品出る上は

時致　敵と名乘らぬ卑怯な祐經。

祐經　紛失の品出づると雖も、兄祐成が放埓にて、失ひたりし逆澤瀉が出ぬ時は、矢張り二人は日陰者。

祐成　すりや、今一いろの鎧が出ねば

時致　名乘る事は叶はぬか。エヽ、いま〳〵しい。

トばた〳〵になり、向うより團三郎と三平、前幕の形にて鎧を抱へ、立廻りながら出て來り

團三　祐成が難儀となりし逆澤瀉の鎧

三平　何を

トまた立廻つて

團三　曾我の家臣、鬼王新左衛門が弟團三郎

トまた立廻り

只今持參仕つてござりまする。

朝比　オヽ、出かした團三、ちつとも早く。

團三　ハツ。

三平　それを

トかゝる立廻り。鎧を差出す。

祐成　團三郎、手を負うたか。さるにても先方が働き。

團三　十內めが惡心にて、この團三めが心を盡し、取戾したるこの鎧、奪ひ取つて逃げ去りしを、やうやう道にて奪ひ返し、只今これまで……サヽ、少しも早く祐經樣へ。

ト朝比奈、鎧を取つて祐經が前に持ち行き

朝比　サア、祐經どの。二品そろつた。

舞鶴　御兄弟の日頃の念願

團三　河津を討ちしは我れなりと、お名乘りなされて下さりませ。

近江　又しても敵呼はり。友切丸の劍は出ても、一旦盜んだ箱王丸、この云ひ譯はあるめえが。

祐經　その盜人は卽ちこれに。

ト以前の手紙を出す。

近江　南無三、それを

ト寄るを、拔討ちに小藤太をポンと切る。

皆々　これは。

祐經　逆澤瀉といひ友切丸、二品出づる上からは、今ぞ名乘るぞよつく聞け。所領の遺恨によつて、奥野の狩りの歸るさに、河津の三郎祐安を、遠矢を以て射落させしは、斯くいふ左衛門祐經なるワ。

祐成 時致　さてこそな。

祐經　伯父祐親に恨みありしに、河津が下部赤澤十内、これなる近江の小藤太と心を合せ、主を手引きし、祐安を討たせしは彼れらが業。されども一旦某が、申し出せし遺恨の次第、祐親ならぬ人違ひは、互ひの因果。卑怯に左衛門祐經は包まず。斯く名乘る上からは、討たれてくれたきものなれど、今は叶はぬ、時節を待て。

時致　ヤア、この期に及び逃げ支度。時節を待てとは卑怯な祐經。

祐經　イヽヤ、卑怯でない、予が役目、皐月下旬富士ヶ根の、狩場奉行はこれ主命。その役終るそれまでは、我れにて我れの命ならず。

祐成　すりや、皐月下旬の狩くらまで

時致　敵討ちは叶はぬか。エヽコレ、寶の山に入りながら
祐經　手を空しくは歸さぬ寸志。寶二品出でたる上は、祐信の身に曲事もなく、親に代つて一家の某、
　勘當赦して狩くらの、お供は矢張り諸侯の列。
團三　親御の勘當赦されし、一家の工藤祐經樣。
祐成　情けは情け、仇は仇。
時致　富士の狩場で日頃の本望。
祐經　その場所割りは、あれなる衝立て。
祐成　ナニ、あの衝立てに
時致　富士ケ根の
敵役
皆々　裾野の陣どり。
　ト景時景高座つたまゝ、衝立てを兩方より少し舁き上げる。
祐經　いづれも方の素袍の紋は、假り家〳〵の幔幕にて
朝比　御領の狩り家は卽ち中央。
舞鶴　和田、千葉、北條、畠山

八幡　須彌の四天に御領を守護。

園三　乾の守りのその假り家は

時致　これぞ庵りに木瓜の

祐成　紋を日當ての皐月やみ。

祐經　名乘りて通れ時鳥。

時致　てつぺんかけて、恨みの刀。

祐成　おゆみの板まで

祐經　見事討つかよ。

祐成
時致　おんでもない事。

祐經　まづそれまでは、祐成、時致。

祐成
時致　祐經どの。

祐經　裾野で逢はう。

皆々　さらば。

時致　これより二番目始まり。

滿　來

ト打込みにて皆々見得よく

第二番目　序幕

鈴ヶ森の場

浄瑠璃　袖浦泪春雨　清元連中

役名――笹野權三。非人、宵寢の仁助實ハ有竹丹助。本庄の下部、助市。權三妹、八重梅。赤羽根作作。非人、勘太。同、竹。同、源。同、善八。同、松。同、鐵。同、龜八。同、長助。侍ひ、彌三太。同、鄕藏。

本舞臺、後ろ淺黄幕。葭簀張りの出茶屋。上の方に松並木を書割りたる張り物。爰に仕出し二三人腰を掛けゐる。よき所に四つ手駕籠をおろし、駕籠舁きへ茶屋の亭主茶を運びゐる。驛鈴、馬士唄にて幕明く。

亭主　御苦勞でござります。一つ上がりませ。

ト駕籠舁きへ差出す。

駕甲　剛氣な人だせ。權三の時に負けねえな。

駕乙　オイ、あなたへも、もう一つ上げてくんな。

亭主　ハイ〳〵、畏りました。

ト茶や莨盆を持ち、駕籠の後ろへ運ぶ。矢張り馬士唄にて、向うより助市、一本差し、海鼠襟の合羽脚絆にて、スタ〳〵と出て來り、直ぐに舞臺へ來て

助市　さて〳〵早い事ではあつた。大儀々々。

駕甲　イヤモウ、急げ〳〵と仰しやるから、この人込みで杖は出來ず

駕乙　いゝやみで乘せ申して、やみと急ぎました。

助市　それは定めし。身も遲れまいとは存じたれど……

ト駕籠の中へ思ひ入れして

さぞかしお待ち遠でござりました。イヤナニ、亭主、何事あつて此やうに群集いたすのぢや。

亭主　ハイ、この間は權三。今日は權八と申す者が、お仕置きになりまするので、晝の中から、夥しい見物でござります。

トこれを聞いて

助市　すりや、權八樣。權三樣にも先達て。ホヽホイ。

ト當惑の思ひ入れ。駕籠の中の八重梅驚き、出んとするを押へて

ア丶コレ、御尤もぢや、御尤ぢやが、こゝは人立ち。イヤサ、かけ構ひなき人達の事に、出ては惡い、サ、惡うござりまする。

ト皆々へ思ひ入れ。

仕出 同じ惡人でも、權三も權八も、晝のお仕置きを晩にするとは

同 お上はお慈悲なものではないかの。

同 そりやァお慈悲ばかりではない。權の字の附くのは皆晩よ。

同 なぜ〳〵。

同 ハテ、、、、ごんばんといふ地口よ。

皆々 何を云はツしやる。サア〳〵、行つて見よう〳〵。

ト三人下座へ入る。ト入り相の鐘になる。亭主は見世を片附ける。助市思ひ入れあつて

助市 はや入り相の鐘の音は、權八樣の近づく致死期、南無や六字の暮れ六つは、いつの世にかは修羅道の、かゝる苦患を受け給ふぞ。實に佛教にも、五逆生滅と聞くからは、せめて未來は

トあたりへ思ひ入れあつて、小錢百文を投げ出し

お世話でござつた。

亭主　有り難うござります。

助市　サア、急いで下され。

ト馬士唄になり、駕籠に附き添ひ、下座へ入る。亭主も入る。知らせにて、淺黃幕を切つて落す。

本舞臺、三間の間、うしろ黑幕。上の方に杉の大樹、同じく吊り枝、眞中に題目の大石碑、下に石の地藏。よきほどに繩打まはし、その中へ捨て札を立て、下へ寄せて青竹の槍掛けに拔き身の槍を立て掛け、舞臺前に浪板。こゝに竹、勘太、非人のなりにて、焚き火してゐる。すべて鈴ヶ森の模樣よろしく、時の鐘にて道具納まる。

竹　まだべら坊に寒いぢやアねえか。

勘太　三日すりやア三年といふが、腹からなつてゐりやア、さうも思はねえなア。

竹　そりやアさうと、あの間拔けめ。どこまで酒を買ひに行きやアがつた。

勘太　何をさしても埒の明かねえ奴だぜ。

ト浪の音になり、向うより宵寢の仁助（實は有竹丹助）誂へ非人のなりにて、一升德利を提げ、出で

來り、直ぐに舞臺へ來る。兩人見附けて

兩人　仁助ぢやァねえか。てめえ今まで何をしてゐたのだ。

仁助　何をしたといつて、隣りへ行くやうに、さう早く來られるものかな。

竹　口巧者に云ふなえ。さうして、何ぞ肴を買つて來たか。

仁助　ナニ、肴どころか、酒さへ二十足して買つて來た始末だ。

勘太　氣のきかねえ男だぜ。錢が無いといつて、その位な働きがなくつて、てめえ何にならうと思ふのだ。

竹　そんなこツちやァ、ほんの乞食になれねえぜ。

仁助　コレ、なんぼ新參だといつて、腹さんざこき使つて、あんまり人をちよツくらかへすな。乞食になれざアどうするもんだ。足を洗つて、町人になる分の事だ。

竹　ナニ、町人になる。なんぼてめえが槍突きの名人でも、素人になつて科人が突けるものか。

勘太　併し、てめえも粋狂な者だぜ。今日は權八を突くといつて、槍まで持ち出してくるとは、これがほんの、蓼くふ蟲もつき〴〵といふのだ。

竹　とんだ道樂だぜ。ハヽヽヽヽヽ。

ト笑ふ。仁助ムツとして

仁助　コレエ、、こめいゝ者だと思つて、あんまりこめるなえ。足を洗やアお町人様だ。うぬらにかけ構ひはないワ。この槍もおれが槍だ。持つて行くワ。

ト取りにかゝるを、兩人留めて

勘太　馬鹿な云ふな。三日晒して取り片附けた上は、われの物でもやる事はならねえ。それぢやァ掟が濟まねえワ。

仁助　突くなら外の槍で突け。こりやァおれが物だから、おれが持つて行くに、掟も何もいるものか。

ト三人爭ふ。浪の音になり、件の槍へ尺餘の百足出て這ひかゝる。兩人見て

竹　アレ／＼、仁助の槍へ素的な百足が

勘太　槍は近江（大身）と聞くからは、それで百足が附添ふのか。

兩人　テモマア剛氣な。

ト兩人立ち寄る。浪の音にて、百足は逃げ去る。

仁助　ソレ、見ろ。おれほど奇妙な槍だア。これを賣つて足を洗ふワ。

ト兩人を突きのけ、槍を持つて一散に下座へ入る。兩人跡を見送り

竹　べら坊に強情な奴だぜ。

勘太　あんな奴に構ふな。サア、やらかせ〳〵。

ト徳利を焚き火へかける。木につれて、上手の松並木打返す。爰に清元連中ゐならび、前弾きにかゝる。

〽罪とがの、重き初荷を冥土まで、送るこの世の通し馬、いぶせくかざる門松は

ト東の揚げ幕より、黒羽織、大小、股引きにて、突く棒さす股を擔ぎ、二側に並び出てくる。後より非人の松、襤褸の形にて捨て札を持ち、非人善八、同じく鐵、いづれも襤褸の形にて六尺棒を擔ぎ出る。長助、亀五郎、何れも絆纏、股引き、大小、草鞋かけにて出てくる。後より、荒席を敷きし赤馬に、權八、好みの形にて縄にかゝり乗つたるを、源、馬士にて口を取り、出て來る。後より赤羽根作作、ぶつ裂き羽織、野袴、大小。郷藏、彌三太、絆纏、股引き、大小にて附き、その外中間二人、槍を擔ぎ出て、花道へかゝる。

〽胸の鏡も曇りなき、心の誠それぞとも、世の人誰も白井氏、蕾みのまゝに散らすかと、手向けの爲の仇口も〽花におく露小笹の霰、こぼれやすさよわが涙〽命も今ぞ引き汐に、ひまだ寒き海苔のつや、法の臺に消えて行く、しばしは娑婆の別れぞと

トこの浄瑠璃のうち、警護の人数花道へ來り、馬は中程にとまる。權八は顔を上げ、思ひ入れあつて

權八　「今日は旅、又行先きも旅なれば、いづくの土や我れを待つらん」。此權八が身の果てを、見物せんとのいづれもへ、お聞かせ申すは外ならず、我れ／＼親子本國にて、殿を害せんなんぞとは、思ひよらざる事ながら、養父は悪しき朋友に、荷擔いたして横しまの、心出でしを先達て、仕置きとなりし權三が爲に、その身を果し、我れも又、權三が養父の助太夫、主人の爲に手に掛けしが、いはゞ二人は敵持ち。尋ねる寶の詮議をと、惜しからぬ命延ばる其うちに、親の悪事をお咎めにて、罪きはまりしこの權八、申さば養父の身の科を、引受けたりしこの死罪。哀れと思す方あらば、御回向なされて……

ト思ひ入れあつて

ア丶、よしない繰り言。サ丶、引かッしやりませ。

ト目を閉ぢて思ひ入れ。

〽身の繰り言も今更に、別れの駒の片手綱、濱川鮫洲引き渡し、見やる往來は泪橋、急ぐにつれて音消ゆる、こゝも驛鈴の鈴ヶ森、最期場近く着きければ

トこの人數皆々舞臺へ來り、よき所に住ふ。

仲作　權八を引きおろせ。

皆々　ハツ。

ト權八お馬よりおろす。この時浪の音、捨て鐘。向うより八重梅、薄藍鼠の裾模様、白襟、襟への振り袖、旅がけのなり。助市、風呂敷包みな背負ひ走り來り、舞臺を見て

助市　ヤヽ、あなたは未だ

八重　權八さんかいなア。

權八　其方は別れし

八重　其お姿は

〽見る目いぶせきわが夫の、姿形ぞと駈け寄つて

ト取縋らんとする。

鄕藏　ヤア、囚人へ近寄る女

皆々　間近く寄るな〳〵。

ト十手にて退ける。八重梅恐るゝを、助市介抱しながら

助市　へイ〳〵〳〵、御免なされませ〳〵。私しどもは、只今お仕置きに相なりまする權八が、これなる女は身寄りの者、何卒暇乞ひの儀を、お願ひ申し上げまする。

伴作　ヤア、さいふは八重梅ぢやな。今では互ひの敵同士。殊には御主人を失はんと、計りし助太夫兵左衛門。親の因果が子に報ふと、暇乞ひは叶はぬぞ。役人衆、遠ざけさつしやい。

非人　サア〳〵、叶はぬ〳〵。立て〳〵。

ト大勢立ちかゝり、二人を遠ざける。

八重　ハイ〳〵〳〵、御免遊ばされませ〳〵。承れば、兄権三どのにも早お仕置き、殊には連れ添ふ権八様、二人が二人養父の悪事が、兄さんばかりか権八様に、かゝりや繋がる女房の、わたしも共に、どうぞ殺して下さりませ。

〽殺してたべと手を合せ、共に死なんず眞實の、娘心ぞいぢらしき。

助市　尤もでござります。この下郎めも、お主の敵権八と、怨む甲斐なき天下の科人。

伴作　近寄る事は

皆々　叶はぬぞ。

ト屹度云ふ。権八思ひ入れあつて

権八　いづれも方へお願ひ。

伴作　ナニ、我れ〳〵に

皆々　願ひとは。

權八　別儀でもござらぬ。これなる八重梅は、先達て祝言のまなびまでも致したなれど、舅となるべき助太夫、討つて立退くこの權八。勿論女が兄權三、互ひに契約仕り、寶を尋ね出しなば、互ひに養父の敵討ち、致さん事と約せしに、權三も養父の科ゆゑに、死罪となれば權八を、敵と討たんは八重梅ばかり。

八重　イエ〳〵、なんの女子の身で、夫を敵に討ちませう。わたしやお前と共々に、死ぬる心でござんすわいなア。

助市　サヽ、其お詞は尤もながら、お前も養父の本庄樣、女ながらも武士の娘御、敵を討たねば道立たず。討つべき敵は連れ添ふお方。

八重　それぢやによつて自害して

ト助市が一腰へ手を掛ける。屹度留める。權八思ひ入れあつて

權八　左樣に思ふも尤もながら、いつぞや其方の親御たる、助太夫どのを討つたる砌り、あわてゝ立退く暗まぎれ、拔き持つ刀を思はずも、その場に捨てゝ立退きしは、武士の魂ひ飛び去る同然。我が亡き跡は二品の、寶を詮議し、お上へ差上げ、兄や夫の未來の迷ひ、晴らさせくれい、頼むぞ

二番目序幕



よ。

八重　すりや、その品を、アノわたしに、詮議せよとの、權八樣の

助市　今際の賴みは八重梅樣、お聞濟みなきその時は、權八樣の迷ひは目前。ならう事なら今一度、命乞ひして寶の行くへが……サ、その命乞ひ叶ひなば、八重梅樣は親御の敵、この下郞めもお主の仇。討つべき人は權八どの。

ト怨めしげに權八にかゝるを、八重梅取附き

八重　其方の怨みも尤もながら、この淺ましいお姿を、見る悲しさは

ト思ひ入れ

そんなら失せし一品を、お前に代つて

權八　この世の賴みはこれはかり。イヤ、作作どの、お聞きの通りの仔細なれば、この場に於て暇乞ひ

作作　イヽヤ叶はぬ。科人ながらもお家の扶持人。女、子供といふではなし、殿への聞え

皆々　叶はぬッ。

權八　然らば女、子供とござらば

作作　そりや暇乞ひ、まゝある習ひだ。

助市　左様ござらば私しが、持参いたした着替への小袖。

ト脊負ひし風呂敷より八重梅の振り袖を出し

少しの間この小袖、權八どのゝ肩に掛け、女同士と思し召し、何卒これにて、杯事、偏へにお願ひ申しまする。

作作　ハテ、さま／＼のよまひ言。いはゞ主人のお情けにて、夜に入つてから成敗と、類ゐ稀れなる白井が刑罪。それしきの儀は免してくれう。キリ／＼それにて杯を

助市　エヽ、有り難うござりまする。

八重　すりや、アノ、わたしは權八様と

權八　今際の名残り、水杯。我れから始めて

八重　アイ／＼、嬉しうござんす。

ト草笛入り合ひ方になり、助市、腰に提げたる水呑みを取つて差置き、件の振り袖を引きかける時、一腰の小柄を、あたりへ見えぬやうに取つて、小袖に巻いて、權八の後ろへ廻り

助市　お願ひ申せし暇乞ひ。權八ならぬお前の妹、お才様になぞらへて、女同志の暇乞ひ。

ト權八の縛しめの上へ、件の振り袖を着せるとて、小柄を以て繩を切る事、小袖の下にて呑みこませ

ろ。權八「さては」といふこなし、よろしくあつて

權八　然らばこれにて。

八重　アイ。

〽これぞ別れと汲み交す、器の水も焦熱の、あの世の苦患助けんと、南無妙法蓮華經、南無妙法蓮華經。

ト此うち助市、水呑みにて舞臺前の海汐を汲んで來り、權八の口へあてがふ。一口飲んで、八重梅へと額で知らせる。八重梅へ持ち行き、水杯の思ひ入れ。

〽妙法蓮華今日の今、あたら盛りを散らすかと、名殘りは盡きぬ暇乞ひ。

八重　嬉しうござんす。その振り袖はお前へ形見。直ぐにわたしはあたりのお寺へ、お願ひ申して尼法師、これぞ生れし年月時刻、守りのまゝにて、あの世へ土產。

ト守り袋を出す。

權八　我れも生れし臍の緒の、守り袋を

助市　取替へ持つが

ト八重梅の守りを權八の襟へ掛けさせ、權八の守りを八重梅に渡し

これぞ即ち形見と形見。尼ともおなりなさるゝ上は、この振り袖も

ト一腰抜き、八重梅の振り袖の先きを、兩袖とも切つて落し

髪切る前に、袖下拂うて。

ト袖先きは助市の手に殘る。

八重　女子の道を、立て切る振りの

助市　袖先き隱す

ト着たる合羽を脱ぎ、八重梅に着せる。權八思ひ入れあつて

權八　あと懇ろに

八重　未來は必ず

權八　これ今生の

八重　モシ。

ト寄るを、助市隔てる。兩人見やつて、愁ひの思ひ入れ。

〽見かはす目には血の涙、空も曇らす尼寺へ、たどり／＼て別れ行く。

ト暮れ六つの鐘を打ち込む。この文句にて八重梅、跡へ心を引かるゝを、助市いたはり／＼向うへ入る。

る。これにて太夫座を消す。權八は縛しめの上へ振り袖を着たまゝ控へる。

郷藏 時刻が延びた。あかしの用意。

皆々 ハア、。

伴作 役にも立たぬ此ひまどり。おのれも塔婆へくゝり附け、權三同樣、大身の槍で。サ、うせをらう。

ト高張り大分立てる。伴作近寄り

ト襟髮摑んで引寄せる。この時懷ろより、三立目の御判の包みしを落す。權八見て

權八 定かにそれと分かねども、お家にかねて紛失の、陰陽の印包みし袱紗。

伴作 ヤ、それをおのれが

ト手早く取る。

權八 存じた權八。さてこそ違はぬ。

ト立ち上がる。

伴作 知つたる上は

ト拔いて切り附ける。權八御判を咬へ、伴作の白刃をもぎ取り、見事に切る。これにて雷鳴り出し、雨の音。權八キッとなつて

權八　血をあやすれば俄の雷。もしや劒は天國なるか。

皆々　召捕れ／＼。

トかゝるを、件の白刃にて切り散らす。皆々「ワツ」というて逃げる。權八件の御判を懐中し、白刃を改めんとする。これより凄き合ひ方、時の鐘、浪の音。竹、勘太、鐵、善八、松、熊八、長助、たんだんとかゝるを、見事なる立廻りにて切り捨てる。源、さぐり出て、そこにある白刃を取つて無暗に切り附ける。權八左の肩へ疵受けたる事よろしく、源の白刃を打ち落す。源は割り木を拾ひ、權八の利腕を打つゆゑ、思はず天國を取り落す。源、手早く取ると、權八やらじと兩人奪ひ合ひ、あたりへ投げる。この白刃、仕置きの場所へ飛んだる思ひ入れ。權八は足許にある侍ひの捨てたる拔き身を取つて源を切り倒し、のりかゝつて止めをさす。この時本釣り鐘にて、好みの合ひ方、空へ月を引出す。途端に黑雲切つて落す。後ろの大塔婆に權三、死罪の見得。この塔婆に今投げし天國の白刃突ツ立ちあり。雷鳴薄く、雨の音。俯向きたる權三、心附きし體にて顏を上げ、兩眼見開き、權八を見て思ひ入れ。權八は件の御判を持ち、向うへ行かんとする。

權三　科人、待つた。

權八　ヤ。

ト思ひ入れあり。

音聲五音の調子も殺伐。
トあたりを見廻し
往來とだえしこの磯際。科人待てと呼びかけしは
ト上の方へ目を附け
よもや死罪の
權三　その物ごしは、たがはぬ白井。堅固なりしか。エヽ、喜ばしい。
權八　ヤヽ、疑ひもなき……さては、權三は
トためらひ見る。鄕藏、彌三太窺ひ出て
二人　さてこそ死罪の
ト鄕藏は塔婆へよぢ上る。彌三太は權八へかゝる。立廻りのうち、塔婆の繩切れて、權三鄕藏もろとも、ツカ〳〵と下りて來り
鄕藏　うぬを縛つて
ト帶を解いて權三を縛しめんとする。立廻りにて、鄕藏、權三がよきところを思はず腹帶に締め附けろ立廻りよろしく、權八は落ちたる白刃にて彌三太を切り倒す。權三は鄕藏を締め殺す。双方見合つ

て、キツとなつて

權八 一旦死罪のその身にて、存命なるは、何とも以て。

權三 それぞこの身の幸ひにや、生れ附いたる象身の笹野。槍先き既に十八本、貫かれしが一々に、皮肉の間を除けたるゆゑ、骨へかゝらぬ皆淺疵。突いたる者の心あつてか。その上二十四時の其うち、天水咽喉へ通ると忽ち、息吹き返せしこの場の幸ひ。尤も突き出す一番槍、受けしその時尺餘の百足、刃先きに纏ひし樣子といひ、これぞ世にいふ百足丸。その槍先きにかゝりしにや、未だ命數盡きざるにや、蘇生の後は笹野の苗字、世を憚つて變名なし、槍の權三と云はんは必定。

權八 天國出づれば寶も揃ふ、これぞ尋ぬる陰陽の

權三 御判はこなたの手にあらば、二品揃へて互ひの養父の

權八 まづそれまでは、この場にて、受けたる手疵を癒した上、一まづ爰を

ト有りあふ振り袖を取つて

これぞ連れ添ふ八重梅が、情けの小袖を

權三 すりや、妹めが

ト目を附ける。權八小袖を着て、落ちてある三尺帶にてしつかと結はへる。兩人とも手疵を受け、

ゐ、よろ／＼となる。この時、捨て鐘きびしく、凄き合ひ方。上の方より仁助、何心なう槍を擔ぎ出て來る。空の月へ雲かゝり、暗くなる。向うより八重梅、卒塔婆と切り髮を持ち、その身は尼となりし體にて、髷を切つたる鬘、件の合羽を着たるまゝ、權八の死骸へ切り髮を手向けんと出て來る、權三、權八は仁助の槍を探り見て、さては番の者と心得、兩方より槍へ手を掛ける。仁助悑りして立廻りのうち、權八は件の槍を踏み折る。仁助は權八の振り袖へ手を掛ける。權八振り切る。此はずみに程よく八重梅交るを、仁助は曲者と心得捕へ、立廻りのうち、件の槍を打ち附ける。この穗先き程よく大塔婆の、天國の白刃のあたりへシャンと立つ。この途端に權八は御判を落す。八重梅拾ふを、仁助探り取つて咬へる。權三權八兩方より仁助へかゝり、件の御判を爭ひ、仁助は思はず判を呑み込み、悑りして飛びのく、よき程に八重梅の着たる合羽脱げて落ちる。權三探り取つて着る。八重梅は持つたる切り髮と卒塔婆を落す。權八は御判と心得、切り髮を拾ふ。權三は槍と心得、卒塔婆を拾ひ、兩人見て、違ひしゆゐ、あたりへ捨てるを木の頭。八重梅飛びのく。仁助は胸をかきむしつて思ひ入れ。この仕組み双方よろしく、ひやうし引附けると辻打ちにてツナギ、引返し。

幕

第二番目　二幕目

山下廣小路の場

山崎町閑心宅の場

役名――新造、勝山實ハ權八妹、お才。髮結ひ、お六。丁稚、谷吉。笹野權三。寺西閑心實ハ赤澤十內。二葉屋扇吉。判人、さぼてん善六。家主、善九郞。若い者、源助。同、長吉、同、甚八。白井權八。ぼろ買ひ、助八。

本舞臺三間の間、上の方に開帳千部の建て札、此所に葭簀張りの出茶屋、床几一脚直し、この隣りは一軒の床見世。正面にたんしつ●●●●●く散と書いたる金看板。机の上は練り藥の蓋物、曲げ物、蛤貝など。この机の前には、諸病の繪圖を描いたる看板立て、正面の棚に黑燒きの壺の書割り　爰に閑心、惣髮、外科醫者好みの拵へにて、細き竹を持ち、云ひ立てをしてゐる。谷吉は前髮丁稚にて、藥包みを持ち、仕出し大勢立ちかゝり、下の方には御膳籠の上に莨入れ煙管毛拔き鋏根附け類、そのその外の品々を並べ、助八、やつし袷絆纏、腹掛け、股引きにて、頰冠りをして、莨のんでゐる。お六、女髮結ひ、前垂れ、駒下駄にて、櫛たゝうをかゝへ、床几に腰掛けてゐる。長吉、甚八、源助、羽織股引き、女郞屋の若い者の拵へ。藤六は袖無し羽織股引き草鞋にて、藥包みと梅の枝を下げ、左五助は大小足輕にて狀箱を持ちゐる。善九郞は羽織踏ん込み、家主にて、板に貼りたるお觸れ書を下げてゐる。この見得いづれも仕出しに交り、立ちかゝりゐる。辻打ちにて幕明く。

仕出　ドレ〳〵、爰へも一つ下さい。

谷吉　ハイヤイ、あそこでも一貝御用と仰しやる。

ト薬包みを渡す。

閑心　イヤ、手前見世の練り薬の效能は、只今御披露申した通り。また頭痛にて御難儀のお方、或ひは金瘡、切り疵、打ち身挫きの類ゐは、手前宅にて療治いたして差上げます。まづ休息に一服いたさう。

仕出　ドレ、大師樣へ參詣しませう。

ト辻打ちになり、仕出しは向うと下座へ入る。あと楊弓の音。

藤六　ヤレ〳〵、夥しい人ごみだぞ。今日はお見世と存じたゆゑ、先日お藥のお禮がてら、參じました。

閑心　オヽ、これは三河島の藤六どの、病人はだん〳〵快うござるかの。

善九　イヤモウ、爰の閑心どのゝ切り疵、金瘡の療治にかけては、大の巧者、至つて奇妙でござるて。

左五　そんならあなたが閑心樣かえ。私しは蒲の屋敷の足輕。お旦那天城達平樣より、密々のお使ひ。

閑心　アヽモシ

ト顏にて知らせる。

助八　ハテ、變つたお使ひだね。モシ、閑心さんといへば、道理でお前の療治、感心しました。昨日今日こゝへ見世を張つて、まだろく〳〵に知らねえ人だが、田舍の衆まで、わざ〳〵尋ねてくれる

といふのも、餘ッほど療治の仕方がよいと見えます。

長吉　ハヽア、聞えた。そんなら、この人のところの病人が、早速に直つたから、そこでお前

藤六　ハイ、爰の旦那樣へお藥のお禮に、持つて參りました取り立ての鴨、背戸に咲いた梅の花、田舍といふものは、此やうな物より外、上げる物はござりませぬ。

ト菰包みの中より鴨を出し、閑心の前に置く。

閑心　これは千萬忝い。

ト梅と鴨を受取る。

ろく　ほんに、わたしもそれで思ひ出しました。もし〳〵、お前さんにいつぞやお約束の、黑燒きになさるゝとやら仰しやつた髮の毛。やう〳〵落ち毛を集めて、持つて參りました。

ト櫛だとうの中より毛を出して渡す。

閑心　これは心づかれて、ようこそわざ〳〵と

ろく　イエ〳〵、今日は大師樣へお詣りがてら。

長吉　それ〳〵、先刻から詞も掛けなんだが、おらが二階へ來る髮結ひのお六さんか。

甚八　さうサ。見違へる筈もねえが

源助　おらァ又、よそのおかみさんだと思ふやつサ。
ろく　おかたじけ。おかみさんは嬉しいね。そりやァさうと、わたしはちよつと大師樣へお詣り申して來る間、どうぞこの櫛だたうを、見世のお邪魔にならねえ所へ、少しのうちお賴み申します。
閑心　心置きなく、いつまでも置きなせえ。明日序でがあるから、此方から持たせてやりませう。併しこりやァ商賣物だの。

ト箱の中を明けて見て

こりやァ中には銀の簪と櫛ばかり。外に髢が入れてありますの。
ろく　それは人の預かり物。あの三浦屋の女郎衆のサ。
助八　簪と聞いたから、わつちやァ又安く見倒して、見世へ置いたら値打ちが出來やうと、ちよつと慾張るやつサ。
長吉　蟲のいゝ、あんまりだの。
助八　さうサ。中の鄕でも、ちつとやそつとは小口もきくし、また惡い事にかけちやァ、イヤサ、惡い商賣には每日々々此やうに、砂まぶれになつて、僅かのはした錢を儲けるも、夜晝稼いで、內の嚊ァは里子を取り、夫婦稼ぎの籠ぼろ買ひ、本所の助八といふ、律儀一遍の商人サ。

長吉　ハヽア、そんなら貴樣は本所の……わしも又尋ねる者があつて、淺草きつて江戸の方、手分けをして探しますが、もしや爰らへ來たならば

ろく　モシ／＼、そりやァあの勝山さんの事かえ。

長吉　オットヽ、滅多に話しは

ト思ひ入れ。

左五　イヤ、先刻からお屆け申さうと、御狀は爰にござります。

ト狀箱を出す。

閑心　アヽ、成る程／＼。

トそつと取つて懷中して

さて／＼、病家の多いので廻り切れぬ。モシ、大屋樣、御覽じませ。有り難い事には、鎌倉のお大名方は、皆お出入り屋敷ゆゑ、療治を申して參りますが、御存じの通り留守居が無いゆゑ、よい弟子でも、どうぞ欲しいものでござります。

善九　それは幸ひ。わしが懇ろにする山伏町から頼まれた、年若な男、給金も何もいらぬが、少し病氣で、世間を歩く事が出來ぬばかり。隨分留守居なら請合ひ。なんと置いてやつて見さつしやい。

閑心　それはどうござらう。わしが宅にも四五日あとから、金瘡の療治の人を、引取つて置きますが、この丁稚ばかりでは困りますに、どうぞその人をお頼み申します。

助八　さうさね。内に留守居のねえのは、米の無えより困るものサ。

ト此の時寺鐘の勤め、チヤン〳〵と鳴る。

ろく　ほんに、下寺の御門の締まらぬうち、大師様へ。さう云ふうちに、もう七つ下がり。ありやア寺の勤めの鐘。

藤六　わしもそろ〳〵、根岸道を帰りませう。

ろく　モシ〳〵、道まで御一緒に……そんなら櫛だゝうは、お預け申しました。

長吉　お六さん、きつい御念だの。

ろく　どりやお詣り申さうか。

ト辻打ちになり、お六藤六向うへ入る。

閑心　成る程、春になつて、餘ツほど日は長くなつたとはいふものゝ、もう暮れ近い時分か。どりや、そろ〳〵と見世を片付けて

ト立ちかゝるを、助八留めて

助八　モシ〳〵、見世の事なら、いま茶屋の御亭主がわしへ賴んで、そこまで行きましたから、わしが呑みこんで片附けます。併し、まだ〳〵日は餘ッほど高いやうだが

ト空を見て思ひ入れ。

閑心　イヤ〳〵、內の病人も氣遣ひ。コレ〳〵、てまへは先きへ、この預かり物を持つて歸るがよい。

ト櫛だゝうを谷吉へ渡し

そして、內の客人の藥を、煎じる事を忘れまいぞ。

谷吉　ハイ〳〵、畏りました。

閑心　コリヤ〳〵、道で遊んではならぬ。釜の下も焚き附けて置かうぞ。

谷吉　ハイ〳〵。

助八　そんならわしも其うち、ちよつと黑門まで引ッかけて來ませう。モシ〳〵、少しのうち見世を

甚八　おいらは爰に待ち合す人があれば

源助　氣遣ひなしに行つて來なさい。

助八　左樣ならお賴み申します。

ト輕業の鳴り物になり、助八先きに谷吉附いて向うへ入る。

閑心　時に大屋様、晩にはこの鴨で酒にしませう。

善九　それは有り難い。奇妙だね。

閑心　必ずお待ち申します。

左五　モシ、ちよつとお手紙の御返事を

閑心　オヽ、それ〳〵。併し爰は途中。これから直ぐに

左五　お歸りならばお宅まで

善九　わしも一緒に行きたいが、お觸れの事で

閑心　御苦勞ながらお使ひの衆……サア、參りませう。

ト矢張り辻打ちになり、鴨と梅を持ち、閑心に左五助附いて下座へ入る。ト輕業綱渡りの鳴り物になり、向うより二葉屋扇吉、羽織ばつち尻からげにて、判人善六の襟髪を取つて引ッ立て來る。

長吉　コレ〳〵、そこにゐなさるのは二葉屋の若旦那、扇吉さん。見りやア判人の善六さんを捕へて、どうした譯だえ。

善六　コレ〳〵長吉、詫び言をして下さい、頼む〳〵。

扇吉　頼むもすさまじいわえ。お前方も知つての通り、この善六めが判で寄越した藝者の三勝、男嫌ひ

だの何のと、いろ〳〵もくを附ける譯も、どうかをかしらしいもの。その中で、お前方の内の勝
山さんまで、昨夜の騷動。

長吉　その斷落ちも、大音寺前の塀を拔けて、どこへか風をくらつたゆゑ、おいらまでが親方に云ひ聞
かつて

甚八　今朝から手分けをして探しても

源助　今に足の附かねえのも、困つたものサ。

扇吉　その元の起りといふのも、此さぼてん野郎めが、ろく〳〵に洗ひ方が悪いから、みんな判人の科
だワ。頭ばかり長くして、なんでも汝を腹の癒るほど、存分にせにやァならねえ。

ト善六を捕へてこづき廻す。善六思ひ入れあつて

善六　アヽ、コレ〳〵、そんなに云ふものぢやァねえ。おれもさぼてん善六といつちやァ、田町田中で
知らねえ者はねえ。コレ、見ッともねえわな。放してくんねえ〳〵。

扇吉　イヽヤ否だ。どこまでも、譯を聞かねえうちは、放す事はならねえ。

トまた突き廻すを、善六振り切つて

善六　ハテ、無理な事を云ふ。お前も仲の町の二葉屋の扇さん、素人ぢやァあるめえ。年中奉公人の世

話をする者が、悪者ばかりやるものかな。世にやァ善い奉公人もいくらもあるわな。まだ／＼駈落ちの勝山も、尋ね出して連れて行きさへすれば、いゝぢやァねえか。

扇吉　知れた事だ。探し出して早く連れて來ざァ濟むめえ。今日は又三浦屋の旦那も、廣小路の松坂屋まで、無盡があつてござる筈だ。駈落ち者が知れたらば、おらが所まで早く知らせてくりやれ。

善六　アイ、知らせやす。知らせねえでどうするものだ。それに附けても、とんだ目にあふものだ。

長吉　そんなら、とてもの事に、わしは根津の方から、三崎の方を探しませう。

源助
甚八　其うちおいらは、爰に頑張つて

扇吉　ドレ、旦那の迎ひに行つて來ようか。

ト矢張り輕業の鳴り物になり、扇吉ツィと下座へ入る。長吉は向うへ入る。

善九　ハテ、怪しからぬ間違ひ。うるさい商賣もあるものだ。

善六　こんな事はいくらも有うちサ。

善九　併し今聞けば、駈落ちの女郎は勝山といつたが、その女の元方はどこだえ。

善六　そりやァ、あの十内といふ者は、一體が癖のある者。その後方々を探しても、どこへ引ッ越したか、肝心の内が知れねえから、これには困つたものサ。

善九　待たッしやいよ。似た事もあるものだ。此お觸れ書も主殺しで名も赤澤の十内といふ者。さまざまの雜物を盜んで、その中にも、秋野の摺つた竹屋町とかいふ錦、その外にもまだ、いろいろの品數が紛失。帳へ記して、代官所から廻つたが、もしやこの人相書も、その主殺しの十内ぢやアねえかえ。

善六　ドン、ちよつと見せなせえ。

トお觸れ書を見て

こいつはどうやら、わしが尋ねに行く元方の、十内に似たやうだが、よもやあの男が、それ程の惡玉でもあるまいよ。

善九　さうサ。なんぼ別人でも、さうさう細かに洗ひ方も出來ねえ。

善六　ハテ、何しろ困つた事が出來た。

ト思ひ入れ。向うバタバタになり、勝山、新造の形にて、手拭を口に咬へ、顏を隱し、一散に走り出て來て、舞臺の善六に突き當り、こけて倒るゝ。善六悄りして

ヤア、こいつア悄りさせやアがつた。女の萬引かしらねえが、無性に駈けて來やアがつた。

源助　何でもこりやア怪しい奴だわえ。

善九　よく見さッしやい〱。

ト三人寄つて勝山を見る。

甚八　ヤ、こりやアおらが内の新造衆、勝山さんだ〱。

善六　ナニ、駈落ち者の勝山だ。……アヽ、此方の尋ねる、勝山だ〱。

ト皆々寄つて勝山を押へる。

勝山　アヽ、もし〱お前方、どうぞわたしを見遁がして下さんせ。

甚八　お前は〱、つまらねえ。爰をどうして見遁がされるものだ。

源助　お前ゆゑに、わたしらは昨夜から

善六　いま此方の難儀になつてゐるところだ。サア、何も云はずと、一緒に歩びなせえ〱。

ト勝山を引ッ立てる。

勝山　アヽ、モシ〱、わたしが身には少つと譯のある事。お前方お二人が、見遁がしてさへ下さんすれば

善六　どうして、ならぬ〱。

勝山　そんなら、見遁がす事がならずば、早うどうなとして、わたしを爰で、殺して下さんせ〱。

ト思ひ入れ。

善六 ヤア／＼、段平がどうしてそんな事があるものか。

ト押へるを

勝間 アレ、ちよつと髪を

ト振り切り行かうとするを

善六 ヤア／＼、逃がさぬ、放さぬえ／＼。

ト三人寄つて留めるを、勝間これを行かうとするゆゑ、こゝらしてトヽ振り切り行くを、善六進み出で、家来の又八二三返廻り、此ときに家来の端にて押さへる、善六是非をつけ、これにて胸を痛めると思ひ入れにて、この六尺腰の手合を追付て入る。善六善六を介抱する。

善九 コレ／＼善六さん、どうしたのだ／＼。

善六 アヽ、痛い／＼。逃がすな／＼。早く捉まへてくれ／＼。

トこの時両人、源助あたりを見て

源助 ヤ、これはしまつた。勝間さんが、又逃げた／＼。

善九 アヽ、大方下谷の方へ行つたであらう。

甚八　斯うしちやアゐられねえ。

ト源助甚八一散に跡退つて下座へ入る。善九郎、ウロ〳〵して

善九　コレ〳〵、腰が痛いか、腕が痛いか、どうだ〳〵。

善六　アヽ、痛い〳〵。何だか無性に痛いぞ〳〵。藥があらば下さい〳〵。

トこの時下座より扇吉出て來て後に窺ふ。

善九　オツト承知だ。ソレ藥こ

ト見世にある黒燒の壺を取つて出す。扇吉、二人の中へ入り

扇吉　大べら坊め〳〵。

トこの聲に善九郎恟りして、思はず黒燒の壺を善六の頭へブツかける。善六の顏眞黒になる。

善九　ヤア、こなたの顏が

善六　河童の黒燒。

ト顏を出す。

扇吉　恟りさせた。

ト辻打ちになり、この見得よろしく道具ぶん廻す。

本舞臺、常足の二重、上の方に障子屋體、正面床の間、押入れ、更紗の暖簾口。舞臺は本疊を敷き、門口の据ゑ物。この外に路地口の出入り、下谷山崎町と書いたる天水桶、二重の上には以前の樽にゝうを置き、この側に古葛籠。爰に閑心、硯箱を扣へ、手紙の返事書きしまうたる體。左五助は腰を掛け、鴨の毛を引いてゐる。すべて閑心宅のかゝり。角兵衛獅子の鳴り物にて道具とまる。

左五　モシ〳〵、閑心樣。私しはお返事の出來ますうち、待ち遠でござりますから、ツイいたつらながら、鴨の毛を引いて置きました。

ト出す。

閑心　それは幸ひ〳〵、忝うござる。それでは早速庖丁が入れられます。……イヤ、御覽の通りの手狹ゆゑ、お茶さへも上げませせぬ。どうぞこのお返事をお持ちなされて、よろしう仰しやつて下さりませせ。

左五　ヘイ〳〵、畏りました。左樣なら、私しはお暇いたしませう。

閑心　これはお使ひの衆、御苦勞。

ト角兵衛の鳴り物になり、左五助向うへ入る。谷吉出て

谷吉　旦那、只今歸りました。

閑心　オヽ、大分遲かつたの。
谷吉　モシ、あの髪結ひのお六さんが、ちつとのうち置いてくれろと、さつき櫛だゝうを置いて行きました。
閑心　オイ。知つてゐるわな。
谷吉　中には髢ばかりでござります。
閑心　コレ、てめえは家主どのへ行つて、お賴み申した奉公人を、どうぞ連れて來て下さりませと、さう云つて來やれ。
谷吉　ハイ〳〵、畏りました。

ト向うへ入る。

閑心　ヤレ〳〵、せはしない。見世から歸ると、返事を書いたり、茶さへ、ろく〳〵に飮まぬ。

トあたりを見て

オヽ、預かり物は、よく忘れずに置いた。

ト障子の中を覗き

ハヽア、病人はまだ寢入つてゐるさうだ……それに附けても、今日の吉事はこの手紙。かねて三

ヶの莊の系圖をば、此方にせしめてありさへすれば、手筈はよいといふもの。殊に血筋は正しき工藤武者、祐繼の胤といひ、蒲どのへ抱へられゝば、すぐに今日から、豆州次郎左衞門祐經、工藤にまさるおれも大名。だん／＼うまい出世の身の上。

ト氣を替へ、また障子の中へ向ひ

モシ／＼御病人、爰へ出て、ちつと話さつしやりませ。

ト合ひ方になり、障子屋體の中より權八、鈴ヶ森の場の形にて出て來り、思ひ入れあつて

權八　これは／＼先生、只今お歸りなされましたか。先刻から、ツイとろ／＼と、お歸りも知らず、一寢入り致しました。

閑心　それはようござつた。そして今日は、藥の加減を致しましたが、樣子はどうでござる。

權八　イヤ、少しは痛みも去りました。

閑心　それはその筈。まだ急な事では本復も致すまいなれども、今日の容體を、ちよつと見て進ぜませう。

ト權八の脈を見ること宜しくあつて

これは大きに廻りも附いたかして、脈の加減がようござるが、何にしてもむづかしい。なか／＼これではどうも

ト思ひ入れ。

權八 私しも左様存じてをりましたが、この上のお療治には、少しも早う本復を願ひまする。

閑心 イヤ〱、一體むづかしい切り疵。その上に、下地に病ひのあるところへ持ち込んだゆゑ、療治も致し悪いが、それに附いて、愚老が家に傳はる妙藥があれど、これは貴様には少し價が

權八 して、その價はどの位ゐな

閑心 まづズッと安くしたところが、五十兩でなければ賣られぬ藥ぢや。

權八 エヽ。

ト惘り、思ひ入れ。

閑心 しかも、カナノウルといふ唐物の藥。金瘡の妙藥。まだ〱その上、無くて叶はぬ一藥あれど

權八 それも定めし、得がたい生血とやら。

閑心 得心させて血を取つて、これを藥に加味いたして服ませる時は、忽ち本復疑ひござらぬ。

權八 ハテナア。

閑心 併し病體は、どうも今の分ではむづかしいが、マア〱、氣長に療治をして、自然と全快。もうお前、餘程手は使へる筈だが

權八　イエ〳〵、まだろくには使へませぬが、不自由ながら、大概の事なれば
閑心　オヽ、さうであらう〳〵。あまり使はずに置くも、却つて惡うござる。
權八　左樣ならアノ、そろ〳〵と、煽ぎながら藥でも煎じて見ませう。
閑心　それ〳〵、手を使うた方が、至極爲にはよいて……イヤ、その內わしも、この鴨の料理をして、
　　備へを出して、そろ〳〵煮かゝりせう。
權八　雜煮はよろしうござりませう。
　　ト合ひ方になり、閑心鴨を提げて暖簾口へ入る。權八はそこにある藥鍋を七輪にかける。團扇にて煽
　　ぐこと。角兵衞獅子の鳴り物になり、向うより善九郞、以前の形にて、お觸れ書を持つて出て來る。
　　跡より權三、一本差し、頭巾にて額を隱し、前幕の合羽を着て、出てくる。ずつと後より助八、古金
　　買ひの荷を擔ぎ、片荷の中へ、天德寺、辻番火鉢など入れて、擔ぎ、出て來り、門口へ來て
助八　何もござりませぬか。
　　ト善九郞見て
善九　オヽ、貴樣は先刻、山下で逢つた商人。
助八　わしは商ひの序に、入谷の方から流して歸ります。

善九　ハテ、よく稼ぐ商人だの。

ト此うち權三は、下の方に俯向いてゐる。善九郎門口へ入り

權八　時に御亭主は内かな。さつき約束の、奉公人を連れて來ました。

善九　ハイ、只今主は、少々用事がござりまして、勝手へ行かれました。

權八　よし〳〵。そんならお前、此方へ入りなさい。申し、この人は定助といふ者だが、委細は閑心どのへ話しておきましたから、その譯を云つて下さい。

權三　ハイ〳〵、畏りました。モシ、お前、此方へお入りなされませ。

ハイ〳〵。

ト腰をかゞめて、思ひ入れ。

善九　わしはまだ、お觸れ書の事について、自身番へ行かねばならぬ。此お觸れ書きを見さしつたら、早く長屋へ廻して下されと、この事も頼みましたぞ。

ト門口へ出る。

權三　これは大きに、あなたのお世話でござりました。

善九　隨分療治を見習ふがよいぞや。わしも後には鴨雜煮を食ひに來ます。さて〳〵、せわしない事だ

ぞ。

ト通り神樂になり、善九郎向うへ入る。助八、ウソ〳〵内を覗いて、思ひ入れ。

助八　どりや、わしらも一服のんで行かう。ハイ、御免なされませ。一つお貸しなされませ。

ト内へ入り、火鉢にて吸ひ附け、また門口へ出る。

權八　今ござつたお人、寒いに此方へ入らつしやりませ。

權三　ハイ、左樣なら御免なされませ。

ト何心なく内へ入り、兩人顏見合せ、思ひ入れあつて

權八　思ひがけなう、この内で

ヤこなたは。

權三　互ひに逢ふは、コレ

ト小聲になり

權八　イヽヤ、又ぞろあの時に

御判は所持か。

權三　すりや、あの者が……ハテ、是非もない。

ト あたりを見廻し

して、こなたには、この家にどうして。

権八　イヤ、此方はかゝり人ではない。この家を頼み、金瘡の療治ながらに、この程は弟子も同然。

権三　そんならあの夜のかすり疵、それが金瘡……アヽ、わしは仕合せ。あれ程の疵にも屈せぬ、象身の一徳。併し療治は致さんと、爰を頼んで弟子分に參つたところ、折よくこなたに……アレ、あの夜に別れて

ト門口の助八を見て、あと云ひさして思ひ入れ。助八、門口より

助八　モシ〳〵、お前、呼びかけなされたのは、賣り物か、買ひ物かえ。

権三　ほんに古金屋どの。貴様の籠の中にある、あの紙蒲團は。

助八　エヽ、天德寺かえ。おりやァ買つて來やしたが、こいつはまだ新らしいのサ。

ト籠の中より天德寺を出して

二百ばかり寄越しなさい。

権三　それは忝い。すぐに代錢。

ト懷中の小風呂敷より、四文錢を二百渡す。

助八　ハイ、有り難うござりやす。モシ、お前方も、お入り用の品があらば仰しやりませ。何なりと賣つてあげやせう。……ほんに、おつりなきな物があつた。

ト合ひ方になり、籠の中より、替へ鞘かけたる前幕の天國の劍を持つて來り

モシ、これを御覽じませ。

ト出す。權三取つて、思ひ入れあつて

權三　ハテ、金色も鍛へよき

助八　そりやアその筈サ。世にも稀れなる天國サ。

ト兩人思ひ入れ。

權八　ヤ、ナニ天國が

ト劍の銘を改め見て

成る程、こりやコレ天國の

權三　して又、劍が、商人どのゝ

助八　籠ほろ買ひが天國とは、掃溜めへ鶴が下りたる掘り出し物。モシ、お聞きなさい。この間願掛けに、太師河原の歸りがけ、夜明けぬうちに大森から、スタ〳〵來かゝる鈴ヶ森、切られた者は數


寺西閑心
松本幸四郎
五渡亭国貞画

知れず。こいつは御免と足早に、駈け拔けるとて仕置き場の、塔婆に立つたこの刃物。外に折れたる槍もあり。その日の稼ぎと持ち歸り、この二品を、好い口があらばと持つて歩きます。お好みならばお序に、廉くあげやせう、買つておきなせえな。

權三　すりや、天國が仕置きの場所に

權八　鈴ヶ森にとあるからは、割り符を合すあの夜の一腰。さてこそ俄に雷鳴の

ト思ひ入れ。

助八　エヽ。お前、御存じかえ。

權八　アイ、天國なれば雷の

權三　不思議があると人の噂、ハテサテ、好い品、貴樣が拾うて……して、一腰の値段はいか程

助八　お望みなれば、百兩サ。

權三　すりや、百兩なら天國を

權八　其方は賣る氣か。

助八　隨分賣ります。併しこの程御大家の、お大名からお尋ねは、天國ならば求めようと、御家中方のお頼みも、どなたへなりと賣りますが

権三　いよ〳〵劍に極まらば、相談したいものなれど、さし當つたる百兩の

権八　金拵へて手に入れなば、これまで盡す二人が願ひも。

権三　きつとこの品買ひませう。外へ必ず

助八　ハイ、賣る事ぢやァござりませぬが、併しわしも商賣づく、早く御左右をなされませ。わたしが内をお尋ねなら、この本所で中の鄕、籠ぼろ買ひの助八と申します。モシ、そのお序に、この代物はどうだね。

ト籠の中より、黑羽二重に丸に本の字の紋附きの小袖に、前幕の槍の穗先きを包み、持つて來り、権三に見せる。権三、槍を改め見て

権三　百足丸と銘ある穗先き……アヽ、思ひ出せば十七年、この槍持つて逐電は、小者でありし慥かに丹助。

権八　その噂こそ本庄の、我れに連れ添ふ八重梅が、實の親なる丹助と、聞けども顏は

ト思ひ入れ。

助八　本庄樣なら此方にも、心覺えの家柄にて、兄助市がお主筋。

権三　正しく槍のその役を、勤めし非人は、慥かに丹助。

助八　槍の出所は本庄氏。さうとは知らずこの間、兄助市が借家せし、入谷を尋ね、又例の、無心をきかぬが曲事と、さらつて歸つた古小袖、不粋の紋附き。今日が日まで賣れ口遠い

ト小袖ひろげる。權三見て

權三　覺えの小袖が、廻り〳〵て

助八　エ。

權三　賣れ口遠い品ならば、求めて置かう。

助八　買ひなさるなら、二百ばつたり。

權八　其ばつたりは、七里けつぱい。

權三　代金すぐに

ト紙入れより、小粒をひねつて渡す。

助八　受取りやした。併し買ふと仰しやつたこの天國、槍の穗先きも相談次第で

權八　求める價は百兩。

權三　金拵へるそれまで必ず

助八　間違ひないのサ。

兩人　商人どの。

助八　待つてるやすよ。

ト唄になり、荷を擔ぎ、呼びかけて向うへ入る。兩人殘つて、思ひ入れ。合ひ方になり、上の障子の中より閑心覗く。

權八　さては違はぬ天國の、在所はそれと知れたれども

權三　手に入れんには百兩の、金の工面が

ト思はず閑心と顏見合ひ、思ひ入れ。

閑心　アヽ、こなたが弟子になりたいと、云はッしやるお若いのか。

ト障子の中より、鴨の骨を俎板にのせ、持つて出る。

權三　左樣でござります。殊に、少しの口論より、思ひがけなく手疵をうけ、あらまし癒えてはござりますが、其お療治も願ひたく、内弟子にと、お頼み申します。

閑心　そりやァ雜儀だの。わしが家傳の金瘡に用ゐる藥はござれども、何をいつても高金だ。あのお人も疵の療治とお客分、今見たところが、貴樣はあのお客と近附きか。

權八　アイ……イヤ、左樣でもござりませぬが

閑心　それでも、あれから見たところ、どうか二人は知り合うた

權八　アイ、存ぜぬ事もござりませぬ。幼少なその頃は、慥か寺屋で

ト思ひ入れ。權三こなしあつて

權三　成る程、子供の時分には、同じ師匠へ手習ひの、朋輩でござりました。

閑心　さうでもあらう。どうか近附きの樣子と見た。時に名は何といふ。

權三　ハイ、定助と申します。

閑心　オヽ、定助とか。よし〳〵、覺えた〳〵。時に今日は神農樣の鏡、幸ひ到來の鴨雜煮をしよう。それにしては餅も燒かうし、鳥の骨も……コレ〳〵、お前は爰で鳥の骨を叩いて下さい……今來た若い人、貴樣はそこで餅を燒くがよい。おれは又菜を拵へよう。

兩人　ハイ〳〵、畏りました。

ト支度する。閑心捨ぜりふにて、長箱の火鉢と、金網を出し、盆の上に供へ餅の切つたるをのせ、俎板に鴨をこしらへて骨を載せ、出刄庖丁を添へて權八が前へ持ち行き、權三へは餅の卷きを渡す

閑心　さてと、これから肝心の神農樣を飾らねばならぬ。

トちよつと暖簾口へ入り、誂への掛け物を持つて來て　正面の床へ掛ける。

權八　左樣なら、私しは火をおこしませうか。

ト團扇を取つて無暗に煽ぐゆゑ、灰の立つ思ひ入れ。

閑心　アヽ、コレ〳〵、其やうに煽いでたまるものか。內の中が灰だらけだ。

權八　これは〳〵、夥しい灰だ。

閑心　お前、頭が灰だらけだ。

權八　・イ〳〵。

ト手拭を頭へ卷き

然らば鳥の骨を拵らへますて。

ト出刃にて意氣地なく骨を叩くこと。閑心見て

閑心　ソレ〳〵、お前も、あの男も、同じやうだ。見なさい、そこら中へ刎ねちらかして、ソレ〳〵、お前の着物も、オヽ〳〵〳〵、鳥の血が刎ねるわな。

權八　こりや、どう致しませうな。

閑心　待ちなさい〳〵。上ッ張りに、何ぞ着せたいが、おらが內には着替へといつちやァ

權八　イエ〳〵、ござります〳〵。幸ひ爰に

ト件の振り袖を出し

これなりと引ッ掛けておりませう。

閑心　イヤ、それぢやァいゝが、併し、その小袖へ刎ねぬやうに

權八　イエ／＼、大事ござりませぬ。これを羽折つて致しませう。

ト振り袖を着て、骨を叩く。

權三　ハテ、この炭は、さて／＼おこらぬワ。

トまた煽ぐゆゑ、閑心見て

閑心　エヽ、この人は、また灰が立つわな

權三　ハテ、それは困つたものぢや。

ト團扇にてそこら中を煽ぎあるき、神農の掛け物を見て、思ひ入れ。

ヤ、この掛け物の表具は、即ち秋野の錦、心覺えの竹やがし。他家に少なきその裂れが、どうしてお前の御所持の品に

閑心　あの掛け物は、干し見世で買つて來たのサ。

權三　して、その先きは

閑心　柳原サ。

權三　エ……ハテサテ、裂れが

ト思ひ入れ。通り神樂になり、向うより善六、跛を引いて門口へ入りさうにして、屠蘇の看板にて頭を打ち

アイタヽヽヽ。とんだ所へ看板を掛けて置くぜ。おればかりぢやアねえ、大分出入りにぶつわえ、途方もねえ。

ト看板を取つて下へ置き

閑心様、お内かね。

閑心　ハイ、お前、療治にかえ。

善六　左樣サ。今向うの酒屋で聞いたら、爰だといふ事だから、それで尋ねて來ました。今日山下で少し怪我をしましたが、腰をぶちましたから、どうぞ小手を當てゝ下さりませ。

閑心　それは危い事。ドレ／＼、見て進ぜませう。

善六　それはお世話でござります。

ト閑心を、よく／＼見て

ヤ、こなたは慥か十内どのだの。

閑心　アヽ、善六どのぢやアないか。

善六　オヽ、善六サ。コレ〳〵、今も貴樣の事を云ひ出して、コレ、こなたの世話をした勝山が駈落ちこゝらで見附けて、捕へるとてのこの怪我だ。コレ〳〵、貴樣も三浦屋まで、來て下さい〳〵。

閑心　コレ〳〵、その時はお前、今の身分ぢやアあるまい。今ぢやア長袖、その上わしは口入れしたばかりだによ。親元は死んでしまふし、證文を見なさい、寺西閑心といふ印形はあるまいぜえ。

善六　さう云へばそんなものだが、さう云つたと云つて……アイタヽヽヽ。

閑心　お前、揉みながら云ひなせえ。

善六　さうもしませう。腰を素的に打つた。

ト枕をして横になる。

閑心　なに、揉みほごして、小手を當てれば、ぢきに直るわな。

善六　コレ、おの貴樣の妹の代りに……ソレ、お小夜といつた女が、わしが判方で、今では勝。イヤモウ、あの女にも手こずるよ。……アイタヽヽヽ。

閑心　どうで眞面目な女ばかりも無えものサ。

ト療治してゐる。此うち通り神樂、鳥追ひ唄。權八は鳥の骨を叩く。權三は餅を燒きかける。

善六　イヤ、又さうばかりでもねえものサ。

ト此うち權八を、ヂロ〳〵見て

ハテ、美しい、素的な玉だ……アイタヽヽヽ。素的な子だわえ。アイタヽヽヽヽ。

ト顏をしかめる。閑心腰のまはりを揉むことあつて、アツと思ひ入れあつて

閑心　モシ〳〵、お前、痛い筈だ。爰に何か結へてあるの。

善六　左樣々々、大事の物が……アイタヽヽヽ。

閑心　これを取つては惡いかえ。

善六　隨分取つてもよいのサ。そんなら取りやせう。

ト百兩入れし胴卷きを出し、枕元へ置く。閑心見て

閑心　そりやア何だえ。

善六　これかえ。金サ、しかも百兩あるね。

トこれにて權八、權三、目を附ける。

閑心　ハテサテ、お前、見掛けによらぬ……富でも取りなさつたのか。

善六　馬鹿を云はッしやい。今にも好い玉があれば、ぢきに相談するから、百兩やそこらは、平常持つて歩くの……アイタヽヽヽ。

ト此うち權三權八は百兩へ思ひ入れあつて

權三　その百兩が此方にあれば、忽ちあの天國を

權八　現在所は知れたれど、金が先き立つ

兩人　ハテ、ある所には

ト顔見合せ、思ひ入れ。閑心、ヂロ〳〵見て

閑心　二人が二人あの金を、どうやら欲しい

ト思ひ入れあつて

アヽコレ、あの時のやうに、妹でもあつたらば、相談も出來ようが、何をいつても、今のこの身で

善六　コレ〳〵、今の身だの、毎度の身だのと、變る事はねえ。あの勝山が出入りもあれど、好い玉があらば知らせるがよい。併し貴樣にも、性も懲りもねえが、そこが商賣だ。玉さへ好ければ掛けを附けて、相談するが、よしか。勝山が出入りの埋め方だと思つて、世話して下さいよ。

閑心　儲け口なら如才はねえが、女郎、子供に賣りさうな、わしが内には
　　　ト思ひ入れ。善六、權八を見て
善六　有るの〳〵。あの子はお前の娘御かは知らねえが、素的な玉だ。吉原へやつて見ねえ、ぶつつけ
　　　中三だ。
閑心　エヽ、誰れがえ。
善六　あの〳〵
　　　ト權八が方へ顔で思ひ入れ。
閑心　あのとは、どこに。
善六　あの子の事サ。
　　　ト指をさす。三人思ひ入れして
閑心　エヽ、あの客人は
權三　ハア、實の女と……成る程、これは女。
　　　ト思ひ入れ。善六まことゝと心得
善六　五年やつたら、百兩には屹度請合ひ。

權三　その大金になる事なら
權八　思はぬわしを
閑心　コレ、娘……イヤサ、てまへはおれが娘だワ。
　　　ト呑みこます思ひ入れ。
　　　二人が二人金と聞き、どうか……サ、その入り用の譯は知らぬが、おれが娘が百兩の、金になるなら、わしらは遣り手サ。買はうといふを幸ひに、親が印形、ナ……サ、この親が印形据ゑたら、まんざらに
權三　成る程、お內の娘御を、親御のお前が御承知で、夢見たやうな廓の奉公。これも正しく天國の
權八　お引合せの金の方に、成る程拙者……イヤ、金になる事ならば、この身を賣つて
權三　初に參つて此やうな、お世話を掛けるも皆緣づく。これと申すも有りやうは、尋ねにやならぬその品の、價も丁度百兩の
閑心　何か樣子は知らねども、慥かに二人は兄弟か、又は衆道の因みやら。その中立ちは閑心が、一判据ゑたら百兩は
善六　直ぐに渡すが、斯う見たところ、側にござるは似合ひの年配。ハヽア、聟どのか。そんならお前

は、あの子の亭主か。

權三　アイヤ、私しは

　　　ト つかへる。

閑心　ア丶コレ、亭主だ〳〵。親と亭主が立合ひで、娘を賣るに、どこから法度が……何であらうと、ソレ、亭主だ〳〵。

　　　ト 思ひ入れ。

善六　わしも亭主と見ましたの。して、娘御と御亭主の、お名を聞いたるその上で

權三　ヘイ、私しならば定助と。

善六　あの子のお名は。

閑心　アイ、名は何とやら。……オ丶〳〵、それ〳〵。村といひます。

善六　お村さんだね。よし〳〵。……ほんにお村で思ひ出した。三浦屋には名代の花魁、小紫、今ぢやアその名が絶えてある。これがきまると、てッきり小紫がものはある。

權三　そんなら爰でその金を、手取る時には先刻の望み、殊には金瘡……イヤ、金銀ならで買はれぬ良藥。藥の價も

閑心　マア〳〵、いづれどうとも。何より金の……お前は早く證文を

ト善六思ひ入れ。

善六　相談する氣か。併し貴樣の判は、丁度これで三度目には馬の鞍、今度はよからう。併し賣り先きは矢ッ張り三浦屋。貴樣の事を、勝山が判方の、十内と云つちやァ出來ねえから、醫者の閑心で相談するから、その氣で掛け合つて下さい。

閑心　そりやァ掛りがその氣なら、なまじ此方に。併し今度の玉は、わしが女房の連れ子。間違ひは無いの。

善六　そのかみさんは留守か。

閑心　ナニ、死にました。

善六　さうか。イヤモウ、儲け口が見えるに、破談にでもなつちやァ、お互ひに物がない。そんならわしは、ツイ一走り。

ト門口へ出る。

閑心　アヽコレ、痛みはいゝかえ。

善六　儲け口ゆゑ、忽ち全快……イヤ、また貴樣も、妹や娘では仕合せ者だ。……コレ、ぢきに行つ

て來ます。

ト唄になり、早合點にて、件の金を懷中して、腰を抱へて向うへ入る。三人思ひ入れあつて

閑心　よもやと思つた相談が

權三　どうやら今のは承知の樣子。

權八　さし當つたる百兩の、その金手取らば、直ぐにあの品。

權三　化けの出ぬうち、劒の價。

權八　併し此まゝ、頭の樣子を

トこの時善六が取り置きし屠蘇の看板を解きながら

閑心　幸ひ預かる櫛だたう。髮の飾りもこの中に

ト幕明きの櫛だたうを出して見せる。

權三　女に仕立てるお前の働き。

閑心　細工は流々。

權八　併し首尾よく

閑心　案じなさるな。


白井権八
應需 豊国画

トこれより獨吟になり、閑心は上の方へ二枚折りの屏風を立て、權八を隱し、たゝうを持つて、髪を結ひ直さんと、同じく屏風の蔭へ入る。權三は團扇にて、件の餅をあぶりながら、そろり〳〵と摺寄つて掛け物を怪しみ、裂れを改め見ろ事あつて、此うち唄一くさり切れる。

權三　思ひがけなきこの內へ、來ると其まゝ劍の在所。金の工面も主が働き。變生男子のあの白井。金拵へるよこしまも、心得ざる秋野の狩衣。竹屋町にて仕上げし掛け物。何とも主の

トこのうち網に掛けたる餅、だん〳〵焦げる仕掛け。閑心、屏風の中より顏を出し

閑心　アヽ、焦げる匂ひだ。……ソレ〳〵、餅が

トこれにて權三うろたへ駈け行き、餅を引き返す。餅は半分黑くなる。

エヽ、餅の黑燒き。何にもならぬ。

トまた唄になり、この模樣よろしく、一ぱいに唄納まる。權八は屏風の中より、件の振り袖を着て出て、頭をさぐり見て、暖簾口の柱に掛けある屠蘇の看板を見附け、紅絹の袋を取つて引裂き、髷を結ひ、梅の枝を折つて頭へ挿す。權三この樣子を見て

權三　誠に見まがふ女の風俗。

權八　馬士にも衣裳と振り袖を

閑心　着こなしぶりは、まことに女。……イヤ、この閑心が娘になつて

權三　併し、話しの金瘡を、癒やす良藥。

閑心　それも先刻に話した藥、その價は五十兩。

權八　今の金子が調はゞ、それにてあなたへ

閑心　賣つてはやるが同氣同性、親子男女の生血が

權八　その儀ばかりは

權三　迂濶にそれと。

ト思ひ入れ。暮れ六つの鐘。通り神樂、向うより善六、四つ手駕籠を吊らせ、長吉附いて急ぎ出て來り、此うち閑心は行燈をつける事。

善六　サア〳〵、爰だ〳〵。長吉、入らつしやい〳〵。

長吉　ハイ〳〵、御免なされませ〳〵。

ト内へ入り

善六　わしばかりの云ふ事ぢやァ、親方の手前もあれば、旦那の名代を連れて來ました。コレ、あの事
私しは吉原の、三浦屋の若い者でござりますが、善六どのが口入れの、女中を迎ひに參りました。

は、跡でナ

ト閑心に呑みこませる。

閑心　これはようこそ。サヽ、此方へお通りなされませ。

ト兩人上へ通る。

長吉　善六どん、證文の判を賴みます。

ト懷中より出して渡す。

善六　モシヽ見なさる通り、文言はお定まり。御亭主は勿論、お前の印形、あの子の爪印、賴みます。

ト證文を開いて見せる。

閑心　これはお世話でござりました。……これが閑心。こちらが定助。

ト硯箱を出し、紙入れの印形を二つ据ゑて

サ、娘、てまへの爪印。

ト權八が手を取り、爪へ墨を附けて爪印を捺し

これでようござりますか。

ト長吉受取り

長吉　随分よろしうございまする。

善六　印形済んだら、即ち百両。

　ト閑心へ渡す。取つて懐中するを

権三　アヽ、モシ、女房の身の代、亭主の取るのが当り前。

閑心　そんなら貴様へ

　ト不承々々に渡す。

権三　ヘイ、慥かに金は

　ト懐中する。

権八　必ず先刻のあの品を

　ト思ひ入れあつて

それに附けても、この位牌こそ、親人白井の

　トあたりを見て

これをお前に預け置き、何卒回向を

　ト白井兵左衛門の位牌を権三に渡す。

權三　これ預かれば此方のも、預け置くこの位牌。紋は卽ち丸の中に、本の字附けし戒名は、云はねど
　それと。
　　ト權八へ助太夫の位牌を渡し、取替へ持ち、思ひ入れあつて
權八　互ひの親々
權三　互ひにしかと
權八　回向するのも
權三　思へばかたき
權八　アヽコレ。
　　ト云ひさま、門口へ出る。
閑心　娘、待ちやれ。駕籠で行かうが、この夜風。これを羽織つて
　　ト權八が着てゐたる男小袖を取つて出す。權八取つて
權八　何から何まで、閑心どの。
閑心　アコレ。親と亭主に別れる娘。
　　ト空泣きをする。

権三　渡せし位牌は我れらが養父。

権八　その戒名を朝夕に、回向は現在討つたる身にて

ト思ひ入れあり。

モシ、きつとわたしが

ト娘の振りにて駕籠へ乗る。

閑心　頼みますよ。

ト舌を出し、につこり笑ふ。唄になり、権八駕籠に乗る。善六長吉附いて向うへ入る。両人残り、顔見合せ

権三　閑心様。

定助。

閑心　あの、判人めは、間抜けな奴だ。……併し、てめえ、金は持つてるの。

権三　左様サ。この中で、お前へ薬の代金も

閑心　何サ、そりやアまア後でもよいが、思ひがけなう判人が、一杯くつて男と知らず

権三　人を偽り拵へた、金の入り譯有りやうは、あの者私し両人は、仔細あつて尋ねる品を、手に入れ

たさの此しだら。

閑心　おれも大概そこらだと、見きはめたゆゑ此もくろみ。して、その品の持ち主は

權三　助八といふ古手買ひ。

閑心　アヽ、そんならいつも寄合ひは、柳の稻荷の團子茶屋。

權三　左樣でござらば、ちよつと私し

ト行かうとするを留めて

閑心　アヽコレ、貴樣が行つては勝手が知れまい。つい一走り、連れて來ようか。

權三　それは近頃御苦勞ながら

閑心　行つてくるうち

ト行燈を見附け

油があがつた。火燈へ移して

ト行燈のあかりを、側にある火燈へ移して門口へ出かゝり

併し物騷、必ず今の

權三　金ならきつと私しが

ト出して見せる。

閑心　用心さつしやい。どりや、尋ねて來ようか。

ト唄、時の鐘になり、閑心は一腰を差し、心を殘して向うへ入る。權三思ひ入れあつて

權三　ア、、思へば武士の義に依つて、仕置きの場所を二人とも、遁がれて又も隱れ住み。尋ぬる天國取り得んと、女と僞り權八を、金の代りに吉原へ。その上我れに渡せしは、權三が爲に討たれたる、兵左衞門がこの位牌。此方よりも權八が、討つて捨てたる助太夫、戒名記せし位牌をしかと。

ト懷中して、思ひ入れ。時の鐘、バタ／＼になり、向うより勝山、新造のしごきなりにて走り來り、一散に內へ駈け込み

勝山　申し、どうぞ助けて下さんせ／＼。

ト權三恟りして

權三　エ、、恟りさせた。聞けば女の聲だが、コレ、女中か／＼。

勝山　アイ／＼、左樣でござります。わたしや吉原の追手に逢うて、難儀いたしまする者。どうぞお內へ、隱して置いて下さんせいなア。

權三　ナニ、吉原の追手に逢うたと云ふからは、こりやァ女郎の駈落ちか。コレ、主は留守だ、サア、

出て行かつしやい〳〵。

ト手を取つて外へ出さうとして、顔見合せ

勝山　ヤ、お前は

權三　其方は慥か。オヽ、白井が妹のお才ぢやないか。

勝山　コレ、お前と縁を組んだる現在……モシ、權三さん。

權三　コレ、その名を迂濶に

ト思ひ入れ。

勝山　モシ、逢ひたかつたわいな〳〵。

ト縋る。權三思ひ入れあつて

權三　合點のゆかぬこの姿。どうして爰へ。

勝山　アイ、わたしやお前が仕置きにならしやんしたゆゑ、三浦屋をやう〳〵忍び出て、川へ身を沈めんと、駈落ちして

ト此あたりより源助甚八に、若い者甚兵衛附いて來る。あとより扇吉附いて來り、囁き合ひ、門口に窺ふ。

権三　サ、その三浦屋からして合點がゆかぬ。殊に其方の形といひ、そんならお才は

勝山　白井の家は取上げられ、女子の事ゆゑ御追放。お前の行くへを尋ねるうち、十内といふ人が、父さんの石牌の營み、金がいるゆゑ斯う〳〵と、あの吉原の三浦屋へ、娘にやるとわたしを偽り、つらい苦界に賣り渡し、勤めはすれど何のマア、笹野權三に連れ添ふわたし、今日まで客に肌ふれず、遣り手の折檻強ければ、いつそ死なうと家出して、身を沈めんと思ふうち、追手にあうて此しだら。權三さん、どうでわたしは

ト思ひ入れあつて

さらばでござんす。

ト行かうとするを引留めて

權三　アヽコレ、そんならわれを賣つたは、十内といふ者か。

勝山　アイ。

ト思ひ入れあつて

權三　それで讀めたワ。この家の閑心、正しく以前は

ト思ひ入れ。この時門口を明け

甚兵　駈落ちの勝山、見付けた〳〵。
甚八　渡さつしやい〳〵。
ト喚く。權三は勝山を後ろへ隱し、有りあふ天德寺を打ちかける。
權三　こりやア貴樣達はどれから來た。主は他行。駈落ちなどとは、そりや何を
甚兵　これサ、しらを切つても見附けた勝山。慥かに爰に
ト三人駈け寄つてかゝるを、權三とつて投げる。はずみに、火鉢に掛けたる藥罐落ちて水こぼれる。天德寺へかゝりし思ひ入れ。
甚兵　エヽ、水だらけだ。
源助　そりやこそ爰に
ト勝山を引出す。權三二人を投げのける。扇吉見て
扇吉　モシ、お前が其やうに隱さしつても、廓の駈落ち、隱まひ立てをしようより、素直にわしらに渡すとも
源助　身の代金を寄越すとも、物云ひ丸く
皆々　挨拶さつしやい〳〵。

ト喚く。權三思ひ入れあつて

權三 成る程、さう云はるれば此方も、見知り越しなる女中のゑ、よんどころなう

三人 そんなら女を、渡さつしやい〳〵。

權三 して、こなた衆は吉原か。

甚兵 三浦屋の抱への勝山。駈落ち者を助けるなら

扇吉 あの子の身の代百兩を、お前の手から濟まさつしやるか。

トこれにて權三思ひ入れあつて

權三 その三浦屋は譯あつて、合ひ手にならぬ家といゝ、併し女を隱まはば、その身の代が

甚兵 百兩出さツし〳〵。

權三 アヽ、金はあれども

勝山 どうぞわたしを

皆々 連れて行かうか。

權三 サア

皆々 百兩渡すか。

權三　サア

皆々　サア〳〵

扇吉　氣の毒ながら、金とこけずばなりますまい。

ト迫り詰められて、思ひ入れあつて

權三　寶を求める金ながら、女が難儀も捨てられぬ。いはゞ白井が身の代金、その妹のこのお才。このりやモウ是非に……これなる女がかゝりの百兩、サヽ、渡しませう。

ト件の金を差出す。皆々見て

甚兵　アヽ、そんなら大枚百兩を、見事に渡すは、アヽ、聞えた、この勝山はこなたの色か。駈落ちさせた男は貴樣か。

扇吉　これサ源公、色であらうが、爰で大枚百兩渡すは氣おひだ。それをいらざる駈落ちを、勸めた男かとは、いらざる事……モシ、御不請なされませ。……ドレ、金は私しが

ト金を改め

源助どの、丁度百兩。

權三　金受取ればこの女。

扇吉　かゝり合ひは無いのサ。

勝山　あの金どうして

權三　コレ、寶は身のさし合せ。

甚兵　印形拔いて爰の内まで。

權三　然らば女は受取りました。

扇吉　金もわしらが

皆々　受取りました。

ト合ひ方、通り神樂になり、甚兵衞金を持つて、扇吉連れ立ち、皆々向うへ入る。權三跡見送り、門の戸締めて、かき金かける。

權三　思ひもよらぬ其方の身の代。あの百兩も有りやうは

勝山　エヽ、案じる事ぢやござんせぬかえ。

權三　其方の兄の

勝山　權八さんは行くへなう

權三　コレ。

ト引寄せて囁く。

勝山　エ、そんなら廓へ。

權三　コレ、寶の金に。

ト思ひ入れ。時の鐘、合ひ方。向うより閑心歸り來り、花道にて

閑心　天國持つたあの助八も、歸つた樣子。それを尋ぬる定助は、慥かに權三權八と、知つたるゆゑにあいつらを、騙して取つた百兩も、あの權三めが離さぬからは、いつそ彼奴を

ト思ひ入れあつて、門口へ來り、戶を明けんとして

もう締めたか。コレ、定助、寢たか〱。

トこの聲に恟りして、權三は勝山を隱さんと、あちこち見廻し、上の方の葛籠を見附け、手早く蓋を明け、中より蒲團を出して、この中へ勝山を忍ばせ、葛籠の紐を解いて置く事。この上へ濡れたるまま天德寺を掛け、思ひ入れ。閑心、門口にて、戶を叩き〱

コレ、明けねえか〱。

トこの聲に權三、ガラリと戶を明けて

權三　歸らつしやりましたか。

閑心　エヽ、悔りした。早く寢たの。
權三　イエ、寢はしませぬが、お前のお留守、不用心ゆゑ、そこらを締めて
閑心　アヽ、さうか。氣を附けるがいゝ。コレ、あの古金屋は、先刻歸つたとよ。
權三　左樣かえ。
閑心　大方明日は、代物を持つて來るであらう。
　　ト上の方へ行きかゝり、足を爪立ち
　　アヽ、冷たい〳〵。エヽ、爰へ水をこぼしたの。
權三　アイ、藥鑵がころげて
　　ト有り合ふ天德寺にて、そこらを拭き
　　南無三、寢道具を水浸しにした。
閑心　アヽ。寢るのに困らうに、そこの屛風へ掛けて、焚き火でもしてあぶるがいゝ。併し炭は御免た
　　油と炭は素的に値が出た。
權三　道理でお前も火燈のあかりで
　　トせりふのうち、天德寺を屛風へ掛け、前へ火鉢をやつて、干す思ひ入れ。

閑心　この位ゐ儉約をしねえぢやァ、御殿醫にやァなられぬ。……併し、こりやァ滅多には乾くまい。貴様に着せて寢かす物が……オヽ、あるぞ／＼、古い布子があつた、貸してやらう。

權三　なにサ、寒くはござりませぬ。

閑心　オヽ、爰に蒲團も布子も出してあるワ。

トそこにある蒲團と布子を取つて

サヽ、この布子を貸さうから、かぶつて寢るがよい。おれは、この布團を柏餅に

ト蒲團を敷き、思ひ入れあつて

ほんに先刻の金は、きつと持つてゐるかよ。

權三　アイ、心づくしのあの身の代、隨分大事に持つてゐますて。左樣なら、爰へ臥りませうか。

閑心　さうさツし／＼。

ト柏餅になり、權三、布子を冠らうとして、山形に木瓜の紋附きを、あかりにかざして見て

權三　ハテ、この紋は、山形に木瓜。

閑心　ヤ。

權三　ア、イエ、火燈のあかりは、どうしませうね。

閑心　風があたるわな。蓋をして置かッし。

權三　さうしませうか。

　　ト蓋をする。時の鐘、合ひ方。

閑心　サア、暗くなつたワ。

權三　餅があるから、鼠が出るぞえ。

閑心　猫は居りませぬか。

權三　ナニ、畜生をうす穢ない。……どりや、いゝ夢でも見ようか。

　　ト寢たまゝにて、空いびきかく。權三思ひ入れあつて

權三　モシ〳〵、お前、もう寢さつしやりましたか。エ、モシ〳〵、アヽ、おとづれなしだ。どりや、わしも

　　ト横になり、矢張り空いびきをかく。此うち時の鐘、好みの合ひ方。閑心ソツと顏を上げ、權三の方を窺ふ。權三も顏を上げ、閑心の寢息を窺ふ事あつて、兩人とも、ソロ〳〵と起き上がり、件の一腰を拔き、上草履の片し、又は雜巾のやうな物にて寢刃を合し、白刃を咬へ、尻をからげ、兩人兩方へ入れ代つて、探り〳〵白刃を引つ提げ、閑心は權三が寢てゐると心得、蒲團を探り、兩方とも押へて

白刃を突き立てる。手ごたへ無きゆゑ、思ひ入れあつて、眞中にありし火燈を探り、兩方より手を掛け、一度に蓋を取り、思はず顏を見合せ、悔りして、キッと見得。時の鐘の頭を打ち込む。途端に屏風へ掛けし天徳寺、糊が剝がれて、上張りの紙は前へへげて落ちる。下張りは權三の罪の次第を書いたる紙幟りの反古になる。よき所に、善九郎が置きし人相書の觸れ書き板へ、權三目を附け、閑心は紙幟りへ目を附け、双方キッと見やつて、思ひ入れ。

權三　こりや主殺しの十内が、人相記せしお觸れの書き物。

閑心　糊ばなれせし紙衾は、笹野權三が身の科を、書きあらはせし紙幟り。

權三　ふところ醫者の閑心が、掛けたる表具のその裂れは、秋野の錦の竹屋町、殊に布子の裏附きに、紋は山形木瓜の、曾我にゆかりの不忠者。

閑心　イヽヤ、それより重罪の、三尺高き木の空を、槍疵癒えてその異名、槍の權三といふまぐれ、鈴ケ森から紛失は、たぐひ稀れなるお尋ね者。

權三　その疵口を癒やさんと、祕法の良藥もらはん爲

閑心　所持する藥を望みなら、遣りもしようがその代り、若衆を女と僞つて、賣つた百兩、おれに寄越すか。

權三　イヤ、金よりもその良藥。
閑心　只取る心か、恐ろしい。
權三　藥變じて毒くはゞ
閑心　さらば命も羊のあゆみ。これからは生き物の
權三　屠蘇の袋の
閑心　破れかぶれだ。
兩人　マカショトナ。

ト權三は閑心の藥の包みへ手を掛け、これより兩人少し立廻り、鳴り物にかゝり、よろしくあつて、ト、火燈消える事。これにて忍び三重、時の鐘になり、權三は藥の包みを咬へ、くらがりの仕組み。此うち葛籠より勝山窺ひ出て、權三に縋る。この時向うより、月行事と書いたる弓張りを持ち、善九郎案内して、捕り手四人、黒の形、大小、十手、捕り繩を持ち、窺ひ／＼出て來り、門口に窺ふ。權三は勝山の手を引き、門口をソッと明ける。

捕手二人　取つた。

ト入るを見事に内へ投げ込み、閑心心得、二人を見事に切り下げる。權三門口をシャンと締めるを木。

の頭。閑心血刀を拭ふ。門口の捕り手、裏身になり、十手を振り上げる。これをキザミにて、よろしく、ひやうし

幕

第二番目　中幕

三浦屋別莊の場

隅田川中洲の場

役名——藝者、三勝實ハ三日月お小夜。新造、勝山實ハ權八の妹お才。三浦屋女房、お賤。藝者、お春。笹野權三。茜足袋屋、長九郎。絹屋、彌市實ハ本庄下部助市。二葉屋扇吉。半七の母實ハ有竹丹助。今市屋善右衞門。ぼろ買ひ、中の鄕の助八。三浦屋の小紫實ハ白井權八。花島宅兵衞。野ざらし半七。半七娘、お通。若い者、長吉。同、甚兵衞。同、忠次郎。美濃屋女房、お倉。太鼓持ち、櫻川善好。判人、さぼてん善六。

本舞臺、三間の間、眞中に大和葺きの門、左右に青篠の竹垣、下の方三尺の枝折門、九尺の中二階。よき所に見越しの松と梅。上手へ木地箱の水溜め、丸に三つ引きの紋を附け、飾り手桶へ三浦屋杯と書きたるを積み上げ、門口に注連飾り。すべて正月の模樣。こゝに扇吉、仲の町の茶屋の息子の

なりにて、判人の善六を捕へゐるを、古金買ひの助八、籠をおろし、留めてゐる。美濃屋の女房お倉、茶屋女房の形。今市屋善右衛門は道具屋、羽織ばつち。長吉、下女、下地つ子、幇間、いづれもこれな支へてゐる見得。通り神樂、流行り唄にて、賑やかに幕明く。

皆々　扇吉さん、マア〳〵、お待ちなさい〳〵。

扇吉　イヤ、待たねえ〳〵。この善六めが、三浦屋へ勝山といふ新造を賣つたが、半月經つや經たねえうちに駈落ちだワ。

善六　そりやァ生きものだもの、駈落ちもしまいといふ、堅い事が云はれるものか。したらしたやうに濟み濟ましも附けようわな。何も横合ひから、お前の出る所ぢやねえよ。

扇吉　イヤ、出なけりやァならねえ。この三浦屋の内證は、おれが内と親類だ。二代目の小紫さんも、てめえが賣り込んだのだ。あんな女郎衆をなぜ賣つたのだ。

善六　なぜ。小紫さんが、どこがどうしたといふのだ。

くら　こりやァ内證へはこれぎりだが、小紫さんも、お客を振つてばかりゐなさるけな。

扇吉　それで、わしが内ぢやァ、お客を幾人しくじつたか知れやせぬ。

くら　マア、まだ腹は立ちなさんな。お前の連れてくる奉公人に、ろくな者はねえによ。わしがとこ

ろへ賣つた藝者の三勝も、兄が元方で抱へたが、その兄が、兄だやら、亭主だやら。あんな惡足のある者を寄越して、困らせ切るわな。

扇吉　白痴が喧嘩をするやうに、胸ぐらばかり取りたがつて、判人も押しが強い。

善六　いつ胸倉をかした事がある。コレ、お前方、あゝいふ奉公人を抱へたといつて、不足を云ひなさるが、惡足があらうが、客を振らうが、又、あゝいふ玉が、どこを探したといつてあるものか。ほんの、あれが玉に疵といふもの。その疵も、抱へた者のしこなしで、どうでも療治のしやうがありさうなもんだ。なんぼ洗ひ方をしても、先から奉公人の癖が知れるものか。わしも昨日や今日駈け出しの判人ぢやァねえ。山から里から海川まで、蟒ぢやァねえが、棲み込んで來たぜげんの善六だ。お前方にやりこみをくつて、商賣がなるものか。

善右　これサ、どうしたものだ。ぢゞいなげもねえ、靜かに云つても事は解るわな。

下女　若旦那も、もう御料簡をなされませ。

長吉　初春早々、緣起でもございませんぜ。

幇間　今日のところはモシ、わらひ扇箱でござります。

善右　あの三勝も、以前鎌倉にゐる時分から、おれは馴染みゆゑ、爲にもならうと思つて、大江の御

幇間　家中、丑島宅兵衛様が引取つて、世話でもしてえやうに仰しやるゆゑ、外ならず骨も折つても、ぐにやら／＼と、蛇の生殺しで、今以てきまらねえの。

幇間　オヤ、モシ、何かえ。宅兵衛さんは小紫さんに表向きで、極意のところは、三勝さんに臍をきめて來なさるのかえ。

善右　知れた事よ。振られどうしに振られながら、足を近くござるのも、三勝といふ山があるからけ。小紫さんも、この頃突き出し、まだ本統に仲の町へは出ないゆゑ、客人も無いから、これが兩爲といふものサ。

くら　と云はしておいて善右衛門さん、小紫さんに色で逢ふ氣だね。

長吉　イヤア、それを聞いては、どうも只は通されねえ。

幇間　これサ、野暮を云ふまい。金轡が當世だぜ。なう、善右衛門さん。

善右　どうして／＼。まさかお出入りの屋敷の宅兵衛様の顏を、潰すやうは事がなるものか。

ト助八思ひ入れあつて

助八　モシ／＼、あなた、大江のお出入りとござりますれば、これを一つお世話なされて下さりませ。

ト荷籠の中より、白柄の短刀を出して見せる。善右衛門これを、よく／＼見て

善右　わしやァ古道具は見きれねえが、燒き刃、金色、際分只の物ぢやアねえ。

助八　左樣サ。銘を御覽じませ。それが正眞の天國でござります。

ト銘を見て

善右　成る程。この天國は、宅兵衞樣に身請けをさせ申したいものだが、どうかお前も勸めて、早く話しを附けてくんな。

助八　それにしても、話しは元からと、善六さんが元方の事だから、こりやァ斯ういふ譯にして

トお倉に囁き

時に善六さん、おかみさんが先刻お云つたやうなもの、、三勝さんの事に附いちやァ、又いろいろと話しもあるし、お前の心の解けねえうちは、しにくい譯だ。又、二葉屋の若旦那も、爰は一番、この古金買ひに、廉く負けておくんなさいまし。

長吉　扇吉さんも、蟲の居所とやらで、あんなはめ込みもある事サ。

皆々　善六さんも不請しなさいな。

善六　なにサ、お前。わしだといつて、初春早々、これぢやァ築地へ歸られねえと、野暮を云ひたくもござりやせん。モシ、扇吉さん、必ず氣にかけておくんなさんな。

扇吉　さう云やァ此方も氣の毒だが、親類内の事だから、云ふ事は云つて見たのサ。
善六　これはどなたも大きにお世話。
幇間　お茶でも上がれでは濟まねえぜ。この仲直りは扇吉さん、駐春亭へ申しつけてえね。
扇吉　おつな所でこめるの。そんならお辰、ちよつと行つて來な。
長吉　こいつは妙だ。
扇吉　カウ、お前も來なせえ。
助八　ハイ、有り難うござります。マア、お先きへ。
皆々　サア、お出でなされませ。

ト流行り唄になり、扇吉先きに、善六長吉外附いて門の中へ入る。善右衞門お倉助八舞臺へ殘る。直ぐに流行り唄になり、向うより宅兵衞、羽織ばつち大小。三勝、吉原藝者のこしらへ。お春、同じく藝者。甚兵衞、前幕の若い者、善好、幇間にて中間附き添ひ、皆々出て來り、直ぐに舞臺へ來る。

善右　モシ〳〵、宅兵衞樣、お倉とわたしの顏を切つて、三勝を引き注連綱とは、何より結構な春でござりまする。
宅兵　カウ、お倉、聞かつせえ。何でも三勝樣の御機嫌のいゝのがいゝけれど、大黑舞ひをお呼びなす

つて、それを受けてゐるのも辛かつたぞ。

三勝　オヤ、おかみさん、わたしぢやァありませんよ。

はる　ありや善好さんでござりまする。

善好　又わたしが出るのかえ。

甚兵　イヤ、又、旦那も、賑やかな仲の町を跡になし、大音寺前の寮通ひとは、ひねつたものでござりまする。

善好　そこが矢ッ張り、寮でごぜえす（どうでごぜえす）といふところサ。

甚兵　よく洒落るぜ。

くら　ほんに甚兵衛どん、旦那から祝儀が出てゐるよ。

甚兵　これは有り難うござりまする。

くら　どうぞお前、おいらんへ云つての、旦那は今日は御年始にお出でなすつたと、云つておくれよ。

甚兵　ハイ〳〵、畏りました。左様ならお早く。

ト甚兵衛は門の中へ入る。善右衛門跡見送り

善右　コレ、三勝、おぬしやァどう思つてゐるか知らねえが、宅兵衛様がてめえの事を、あれほど思つ

てござるのを、思ひやつてばかりゐちやア、先行きが知れねえぜ。

三勝　そりやァ本統なら嬉しいけれど、主だといつて、おいらんといふ者があるし、どうも仕やうがありませんのサ。

宅兵　三勝、また野暮を云ふぜ。小紫は當座の慰み。おぬしが又さういふ氣なら、引取つて、古風なやつだが手活けの花サ。

三勝　オヤ〳〵、蓮池の花が聞いて呆れる。しみ〴〵嬉しいねえ。

善右　ナニ、嬉しい。てめえばかり嬉しがらずと、宅兵衛樣にも、嬉しがらせるやうにすればいゝに。

宅兵　コレサ〳〵、どうしたものだ。そんなに云ふと、三勝が困るわな。さう側から無理におふられると、どうかいつもの敵役を見るやうで、此方の畑でねえの。色氣を捨てゝ、只おれは三勝が贔屓だからの事よ。ナウ三勝。

三勝　お前さんのやうな通り者のお客だから、わたしやァ何も云へませんが、おいらんといふ者のあるうちは、人の花だと諦めるのが一の手だ。

善好　とんだよしこのもあつたものだ。

善右　どこまでもそんな事を云つてゐては際限がねえ。

善好　際限のない性、柱暦、四文と出るぢやァないが、來年一杯の何のといふではなし、一生の身の固めだ。わたしならすぐに得心だけれど

はる　オヤ、善好さん、何が得心だえ。

善好　お前に身を任せるといふ事よ。

はる　ムウ、おかたじけ。

善右　イヤ、また宅兵衞樣の色となりやァ、忽ち身請けだ。活計歡樂きはめる事なら、早いがいゝわな。

三勝　そりやァわたしも遠からさうしたいが、まんざら否でもねえと思ふお人に、いろ／＼な苦勞をかけ申すが、しみ／＼お氣の毒だからの事サ。

宅兵　ハテ、其ところはどうでもいゝぢやァねえか。ナウ、お倉。

くら　左樣サ。まんざら金貸しや地主のお孃樣が、藝者に出るものでもなし、その位ゐの行き渡りは、當り前の事だもの。

三勝　そんならわたしやァ、主の女房になると、兄さんがあるが、引取つて世話をしておくれか。

宅兵　ナニ、兄がある。その兄はちと氣障だの。兄は甲に似せて穴を掘らせるのではねえか。

善好　兄とも以て合點がゆかぬ。

はる　また善好さん、默つておいでな。

三勝　その上にね、母さんが一人に、伯父さんが二人、盲の弟が一人、躄の姉さんが三人、聾の爺さんが四人ほどあるが、それをみんな世話をしておくれかえ。

善好　モシ、こりやァ書いてもらはざァ覺えられやすめえ。

宅兵　イヤ、さほどでもねえ、今年中には覺えられるだらう。

善右　何にしろ素的な厄介だの。

三勝　その上わたしの兄さんが、日本一の氣紛れ者。喧嘩の屆け、間男出入り、女郎の附き馬、博奕の借り貸し、つき合ひ花會仲直り、日にマァざつと二十度、今までわたしが皆厄介サ。

ト助八前へ出て

助八　厄介ついでに三勝さん、あの半七どのゝ所から、里に取つたコレ

ト籠の中より娘お通を出し

この通り、一分二百の里扶持が、半年あまり。何と云つてやつても、それなりけり。この厄介もお前、どうかせざァなるまい。

トお通を三勝の側へ突きやる。皆々思ひ入れ。

三勝　オヤ、助八さん、成る程こりやァわたしが……姪だが、兄さんがお前の所へ預けたといふ話し。いかに行き屆かぬといつて、客人の中へ連れて來て、さうしてわたしを困らせるのだね。

助八　お前より、半年あまり、わしが困るわな。

つう　母さん、人形買うて下され。

ト三勝に取り附く。

三勝　オヤ、この子は女さへ見ると、母さん〳〵と、好かねえの。

ト三勝突きやる。お春いたはり

はる　三勝さん、可哀さうに。ドレ、そんならこの母さんが

ト抱き上げ、奥へ行かうとするを、三勝引留め

三勝　コレサ〳〵、お春さん、連れて行つちやァ悪いわな。返してしまひなさいよ。

はる　それでもお前、可哀さうに。

ト無理に奥へ連れて入る。

三勝　アレサ、よしなといふに。

トこれをしほに、三勝も續いて奥へ入る。

宅兵　イヤ、子供まで打たせるの。
善右　宅兵衛様、かねてお話しの天國、この者が持參いたしました。
宅兵　ナニ、天國が
　　　ト善好を見て
　　　コレ、善好、奥へ行つて、酒や肴を拵へて置かぬか。
善好　もう品川屋から來てゐる筈でござりませう。ちよつと見て參りませう。
　　　ト善好は奥へ入る。
宅兵　ドレ、その品見せやれ。
助八　畏りました。
　　　ト以前の一腰を出し、宅兵衛に渡す。宅兵衛、よく〳〵見て
宅兵　成る程、紛ふ方なき天國の短刀。
　　　ト帶したる脇差しと寸尺を比べて思ひ入れ
　　　して、價は
助八　小判百兩でござります。

宅兵　ムウ、然らば仕送りの善右衛門、よろしく掛合ひつかはせ。

ト脇差しと天國とを一緒に渡す。

善右　畏りました。左様なら金子は明日善右衛門が……品は此方へ預かつてもよからう。

助八　イヤモウ、お出入りの善右衛門様。隨分よろしうござります。何分明日お頼み申します。

宅兵　世の中には、奇體な劍もあればあるもの。大江の御寶前へ納める時には、又と再び拜見は叶はぬ品。よく／＼見ておきやれ。身が差添へも業物なれど、天國を見る時は、なか／＼違つたもの。隨分ともに心をな……ソレ、入れかへて、とくと見て置くがよいてや。

ト善右衛門に眼でいろ／＼と知らせる。善右衛門呑みこむこなし。助八これに心附かず、籠の中より槍の穗先きを出し

助八　モシ、まだ外にお目にかける品がござります。これは百足丸といふ槍で、その天國に負けない品だけにござります。

ト差出す。宅兵衛取つて

宅兵　成る程、百足丸に相違ない。この槍は、本庄助太夫が家にあつて、重寶たるところ、小者丹助と申す奴が、盜み取つて立退きしとの事。手前どもには望みもなけれど、助太夫の身寄りの者に見

せたなら、直ぐさま求めるであらう。

助八　エヽ、そんならこれは、助太夫様の身寄りへさへ持つて參れば、大金になりますな。

ト籠の中へ入れる。この話しのうち善右衛門、宅兵衛の脇差しの身と、天國とを入れ替へ、本身の脇差した宅兵衛に渡し、似せ物の白柄を懐中する。

くら　コレ、助八さん、お前そんなに金が欲しくば、内の抱へのあの三勝を、宅兵衛様のお手に入れゝば、これも金だよ。

宅兵　イヤノウ、あのやうに請けてゐても、本心は半七と、手が切れぬに違ひない。先刻の娘も、慥かに二人が仲に出來た、餓鬼と見えるわえ。

善右　イヤ、餓鬼があらうが、何があらうが、仲を裂くにはこの妙薬。

ト懐より薬包みを出し

この薬は上野の山の女夫杉、その二股の中の土を、製法なした薬。これを服ませる時は、たとへ兄弟親子夫婦の仲でも、忽ち心がまづくなつて、縁切り榎よりは慥かなる切れ薬。なんと、これを三勝と、半七めに服ませてはくれまいか。

ト渡す。助八取つて

助八　こりやア癪の藥だね。

善右　ハテ、さう書かねば服ませ憎いわえ。

くら　モシ、助八さん、効能次第で、金だよ〳〵。

助八　それなら仕樣はさま〴〵。此方に賴んだ人もあり。又これを服ませた上

ト懷より福島土産の繪の描きし莨入れを出し

こりやアこの間半七が、わしが所へ忘れて行つた莨入れ、中を見れば、以前の女房のお園のところへ、金の無心を云つてやる文。藥を服ませたその上で、この文を見せりやア、猶々まづくなる道理。

ト右の藥を件の莨入れの中へ入れて懷中する。

善右　斯うも巧く段取りが附くものか。

くら　三勝はもうお前さんの物サ。

宅兵　前祝ひに、ちよつぴりやらう。助八も來やれ。

助八　それは有り難うござります。

ト荷籠を舁ぎ上げ

通り者で、金があつて、どこといつて云ひ分のない宅兵衞さんを、どういふ譯で三勝が

善右　なぜ。

助八　ふるかねえ(古金)とはどうでございます。

宅兵　おきやアがれ。

　　ト流行り唄、通り神樂になり、宅兵衛先きに善右衛門、助八、門の中へ入る。お倉殘る。矢張りこの唄
　　た借り、向うよりお六、女髪結ひにて、櫛箱を抱へ、前垂れ掛けにて出てくる、跡より彌市、一本差し、
　　頭巾羽織着流し、田舍者のこしらへにて出て來り、花道にて

彌市　モシ／＼、そこへ行く女中、ちと物が尋ねたうござる。向うに見えます門構へは、どなたのお屋敷でござるな。

ろく　あそこは三浦屋の別莊でござります。

彌市　ハヽア、三浦の別當とは、鎌倉のお大名、平六兵衛樣のお下屋敷かな

ろく　イエ／＼、お屋敷ではござりませぬ。吉原の遊女屋、三浦屋の寮でござりまする。

彌市　ハア、彼の小紫と申す、傾城の居らるゝ内かな。

ろく　左樣でござりまする。小紫さんは、この頃出養生、この寮へ來てお出でなされまする。

彌市　それは幸ひ。手前は上州の絹問屋、彌市と申す者、また村方の支配も致す庄屋兼帶、家柄も隨分、

村方寄合ひの節などは、地頭の次ぎに上席いたす者でござるが、どうぞ小紫を求めたいと存じて、はる〴〵江戸へ罷り出ました。なんと今宵一夜、本懐は致すこと相成りますまいか。

ろく　そりやモウ、女郎衆の事ゆゑ、ならぬといふ譯もござりませぬが、お茶屋でもござりますかえ。

彌市　イヤ、生れて初めての女郎買ひ、一向不案内でござる。

ろく　ハテナア、どうも小紫さんを、ふりでは買はれますまい。マア〳〵、お出でなされま

彌市　何分よろしくお賴み申す。

卜これにて兩人本舞臺へ來り

くら　オヤ〳〵、お六さん、おいらんの所へかえ。

ろく　イエ〳〵、おかみさんの所へ參りましたが……モシ〳〵、幸ひお倉さん、主は今道でお目にかゝつたが、上州の絹問屋彌市樣とやら、小紫さんを買ひたいというてお出でなされたが、江戸初めてのお方さうな。お客になさんせぬか。

くら　そりやもう、ふりの客人でも、仁體によつて隨分よいが

卜彌市の側へ來り

モシ、あなた、小紫さんを買ひたいと仰しやるのかえ。

彌市　左樣でござる。たつた一晩買へばよろしうござる。
くら　オヤ〳〵、情のねえ客人だ。モシ、一晩お買ひなすつても、餘程金がかゝりますが、御承知かえ
彌市　イヤモウ、金銀はどのやうにかゝつても大事ござらぬ。江戸のお女郎を買ふには、大層金のいると申す事は、國元から承り及んで參りました。勿論格別の大金を所持しては、旅中も不用心とざつと二百兩持參いたしたが、これで不足ならば、すぐに國元へ取りに遣はします。一晩百兩では上がりますまいかな。
ト財布を出し、金の音をさせて見せる。お倉これを見て
くら　イエモウ、その位ゐあれば結構でござりまする。併し、小紫さんは御病氣ゆゑ、餘ほど掛合ひがむづかしいが、折角思し召した事、どうか働いて見ませう。
彌市　何分よろしう。どうぞ成らう事なら、晝のうち面會いたしたいものぢや。
ゑく　ハテ、變つた……遊びは一體夜の方がよろしうござります。
彌市　イヤ〳〵、夜は少しわしが方にも、勝手の惡い事がござります。
くら　お宿がやかましいといふやうな事かえ、マア〳〵、何にしろわたしが内の、馴染みの客人ぢやと申しまするゆゑ、外の幇間も二三人、呑みこませて置かねばなりませぬ。

彌市　ハヽア、幇間とは、雷様の手間取りか、百姓の雨乞ひに雇はれた人かな。

くら　なにサ、藝者でござります。

彌市　藝者なら、三味線持ちと申しさうなもの。

ろく　こりやア御尤も。誰れぞ呼びにやるがようござんす。

トこの時うしろへ善好に若い者忠次郎附いて出て來り

善好　樣子はあれにて殘らず聞いた。幇間を呼びにやるまでもない、深川の住人、櫻川善好、むぐりながらもこれにあり。また吉原の忠次郎、兩人これにあるからは、それへ參つて、勤めるでござらう。

忠次　バタ〳〵バツタリ。

ト不器用に見得をする。彌市膽を潰し

彌市　イヤア、お江戶の幇間といふものは、えらい權識なものなア。

忠次　ハヽヽヽ。これは皆洒落でござります。マア〳〵、おいらんを買はうと思し召すなら、側の者へお辭儀が肝心でござります。ねえ、お倉さん。

くら　さうサ〳〵、お辭儀が無くては、女郎衆も思ひ附きません。兎角お辭儀の事サ。

彌市　それは隨分易い事、お辭儀を致すでござらう。

　　ト皆々の前へ出て、無性にお辭儀をする。

善好　コレサノ〳〵、お前さんがお辭儀をするのではござりませぬ。外の者にお辭儀をさせるのサ。

彌市　そんなら、おてまへ達がお辭儀をするのか。然らばわしに斷らずとも、勝手にしたがよい。

忠次　イエ、只お辭儀をする譯ではござりません。花をおやりなされませと申す事。

彌市　ハア、花をやりさへすればよいのぢやな。ドレノ〳〵

　　ト花道へ行かうとする。

ろく　モシノ〳〵、どこへお出でなされまする。

彌市　そこらへ行つて、梅の花でも買うて參らうと存じて。

くら　これはしたり、花と申しますは祝儀の金。

忠次　モシ、えて物の事でござりますよ。

　　ト小判の形をして見せる。

彌市　ハア、金子の事を花と申すのか。即ち洒落ぢやな。花は隨分これだけ持つて居るぢやて。

くら　そんなら私しが戴きませう。

ト財布より小判を出して、皆々へ一兩づゝやる。

皆々　エヽ、有り難うござりまする。

ト皆々辭儀をする。

彌市　ハヽア、こゝでお辭儀ぢやな。

ト感心する思ひ入れあつて

時に、小紫どのを求める花は、それで澤山かな。もし足りずば、國元へ花を取りに遣はしませう。わしが國元には、花藏が二戸前ほどござる。最早今し方、八つの花が聞えましたが、日の暮れぬうち、早く參りたいものぢや。

皆々　こいつは大笑ひだ。

ろく　モシノヽ、あなた、ちと洒落をお覺えなされませいな。

彌市　どうぞ指南を受けたいものぢや。

ろく　マア、今の流行の洒落は、幸ひノヽ。

ト懷より「よしこの節の仇文句」といふ小菊綴ぢの本を出し

このよしこのといふ唄が流行ります。

くら　オヤ〳〵、お六さん、この本はどこにありますえ。
ろく　されば、今流行の唄ばかり寫してもらひました。
くら　わたしにちつと貸しておくれ。内の下地ッ子に覺えさせるわな。
ろく　寫させて、直ぐに返して下さんせ。
　　　トお倉に渡す。
彌市　今の流行の洒落は、よしこのと申すとな。
ろく　左樣サ。猫も杓子もよしこのサ。
彌市　隨分承知いたした。
忠次　今日おいらんの廻し方は、佐兵衛さんだから、これにも奥で今のお辭儀を
彌市　オット、よしこの〳〵。
善好　おいらんがスッパリ出來れば、その時又も彼のお辭儀を。
彌市　よしこの〳〵。
忠次　さすればすぐに裏馴染み。おいらんからも又お辭儀。
彌市　よしこの〳〵。

くら　マアく、これからおいらんを、談じ附けるが肝心かなめ。

彌市　よしこのく。

ろく　何にも知らぬ

皆々　野暮大盡樣。

彌市　よしこのく。

皆々　サア、お出でなされませ。

彌市　よしこのく。

皆々　ハヽヽヽヽ。

ト彌市無性によしこのを云ふ。皆々浮かし立つて、この人數殘らず門の中へ入りかゝる。流行り唄にて、この道具ぶん廻す。

本舞臺、三間の間、庇附きの二重舞臺、注連飾り。向う上の方唐紙、障子。下手は餘程高き地袋戸棚、この上に食ひ積み臺を置き、床柱より眞中三尺の入り口、これに更紗暖簾を掛けてあり、上手一間の隱れ座敷を押し出す。舞臺よき所に雪見燈籠、つくばいの手水鉢、東西柴垣、春草の土手枚、梅の

立ち樹、植込みよろしく、いつもの所に風雅なる枝折り戸、すべて三浦屋別莊奥庭のかゝり。こゝに三勝、以前のなりにて、お通に糊と菓子をやつてゐる。この側に助八出かゝりゐる。矢張り通り神樂、流行り唄にて道具納まる。

助八　これサ、三勝さん、おめえ先刻から、わしにばつかり口をきかして、どうして下さる。この子の里扶持、たつた今勘定して下さりませ。

三勝　コレ、助八さん、お前も苦勞した人のやうにもない。こゝは座敷先き、殊に正月早々、なんぼわたしのやうな者でも、藝者とか何とかいへば、ちつとは見得もあるもの。里ッ子〱と大きな聲で、外聞が惡いわな。

助八　外聞が惡くば、里扶持の金を寄越すがいゝぢやアねえか。

三勝　わたしも可愛いゝ子を預けておくお前の所だもの、何しに投げやりにしておく氣はないが、知つての通り奉公の身の上、心に思ふばつかりで

助八　コレサ〱。奉公〱と云ひなさるが、お三どんの奉公ぢやアあるめえし、お前の勤め次第で、どうでも出來る譯だ。あの宅兵衛さんに氣休めを云つても、里扶持どころか、お前の身の方附きにもなりさうなものだ。

三勝　それをして樂をしようと思ふ位なら、何しに苦勞するものかね。
助八　それでもどうやら宅兵衞さんに、お前は心がある樣子に見えたぜ。
三勝　あんなに自惚れを云ふゆゑ、味に綾なしてゐると、だん／＼増長して、あんなモウ氣障な人は、又と二人あるものか。それはさうと、お前の方の勘定は、是非半七さんの方からも
助八　イエ、そりやア三勝さん、出來ねえ話しだ。ナニ、あの半七どのが、四文も金が出來るものか、と云ふ譯は、半七どのがこの間、わしが内へ來て、忘れて歸つたこの筥入れ。

ト　懷より件の筥入れを出し

この中に、半七どのが女房のところへやる金の無心の文。この女房は、茜足袋屋のお園といふ、夫婦別れのあとで、今に長九郎といふ人が二度添ひに入つたが、一旦別れて、外の亭主を持つた女のところへ、金を貸せと云つてやるほどの仕儀だァものを。そして、この文の中に、コレ／＼、元木にまさる裏木なし、心あらば、元のやうになりたいと書いてある。半七は餘ッぽど浮氣者だぜ。
三勝　ドレ、その文をお見せ。
助八　ドッコイ、これは滅多に見せられぬ。
三勝　それでもとちよつと

ト取りにかゝる。

助八　これが欲しくば、里扶持の勘定を

三勝　今はどうも

助八　そんならこれは

三勝　ちよつとお見せよ。

ト又取りにかゝる。助八はやるまいとする。揉み合ひの中へ、茜足袋屋の母、黒の頭巾、前帶、尼のなりにて、助八を突き退け、包み金を出し

母　ソレ、その子の里扶持。

助八　そんならこの金

母　取つておかんせ。

三勝　どうしてあなたの

母　ハテ、大事ない、この場の難儀、……金受取つたら、云ひ分はござんすまい。

助八　なんの、お前さん、結構な御隱居樣、有り難うござります。金さへお貰ひ申せば、その下紙は三勝さん、とつくり讀んで、氣まづい男を

トちよつと母と顔見合せ、思ひ入れあつて

サア、お通さん、おんぶして歸りやせう。

ト合ひ方になり、助八はお通を背負ひ、奥へ入る。三勝思ひ入れあつて、件の文と莨入れを懐中して
下手へ下り

三勝　これはマア〳〵、どなたかは存じませぬが、今の難儀をお救ひ下さりまして、この上もなう、有り難うござります。

母　なんのマア、その禮には及びませぬ。

三勝　でも、大枚のお金、お取替へ下されましたあなた樣。マア、どういふよしみで私しに

母　よしみもよしみ、現在の、子に繋がれし縁のはし。どうで浮世に長うゐぬわし、金ぢやとて、命ぢやとて、餘り惜しうもないわいの。

三勝　どうやら心ありげな其お詞、なんで命を

母　捨てねばならぬその樣子、否であらうがとつくりと、聞いて下され、三勝どの。

ト合ひ方になり、母は思ひ入れあつて

コレ、こなたと深う云ひ交した、あの半七が實の親、茜足袋屋の母でござる。

三勝　エヽ、そんならあなたが

母　サヽ、わしに逢うたら面目なからう。わしもこなたと名乘り合すが心苦しい。さりながら、この半七がいたづらとはいふものゝ、誰れあらう、本庄助太夫樣のお娘御お小夜樣。又あの半七の父御は、白井兵左衞門樣に御奉公いたせし若黨の赤根平左衞門といひし者。その以前同家中の家來と不義のお前ゆゑ、親御助太夫樣の御勘當。その義理ゆゑに半七めも、同じく家を追ひ出し、内へ入れた嫁のお園、後家にするのも氣の毒と、茜屋の家來分、長九郎といふ者を娶合せ、マア〳〵内は納まつたれど、納まらぬはわしが心。派手な藝者の色狂ひ。只一通りのこなさんなら、折り入つてこの母が、縁切つてもらうてといふ樣な話しもあらうが、以前が以前のお身の上、半七ゆゑに今の御苦勞。實の我が子で我が内を、立てたいと思ふとも、義理にもお前に縁切つて下されと云はれぬ譯は、子までなしたる二人が深い仲。わしが爲にも孫の事、逢ひたい見たいどうぞして、二人をすべよう内へ入れ、孫を愛して抱きかゝへ、暮らしたならばと心では、日にち毎日思へどもそれでは嫁のあのお園、義理があるゆゑ猶濟まず。後添ひの長九郎が、孝行にしてたもるにつけ、これが誠の半七ならばと、老いの繰り言、後生の妨げ。罪を造るも皆子ゆゑ。お園もわしが詞をもどかず、心に染まぬ二度添ひも、母の氣休めばつかりに、顔附きさへも見せねども、何や

らくよ〳〵目に持つ涙、笑ひに紛らすその素振り、側で見てゐるこの母が、心の中はどうあらう。嫁を不便と思へども、又切るに切られぬ義理の緣。實の子なれば半七は、猶更可愛い〳〵と、三方四方思ひやり、心の休む隙もなう。とてもどちらぞ義理をかき、恩にもならねば納まらぬ。それを見るのが猶否さに、この頃はわしとても、四五日内へは歸りませぬ。定めしお園が案じてゐるやう。されども見聞きする度に、ほんに浮世が否になり、いつそ死なうと覺悟のこの母。切ない苦しい入り譯を、推量して見て下されいなう。

トよろしく思ひ入れ。三勝一々これを聞き、泣き沈み、こなしあつて

三勝　聞けば聞くほど其お話し、御尤もともお道理とも、思へばわたしは此ところへ、消えも入りたい、面目ない。あなたに罪を造らすも、嘆きを掛けるも、皆わたしから起る事。せめてもの申し譯に、あの半七さんと、さつぱりと緣を切りませう。物の見事に別れまする。さうしたならばお園樣を、元々へ戻してほんの女夫。あなたも喜び、浪風なし、お氣の休まるやうに致しませう。

母　イヤ〳〵、こなさんに緣切らせる程ならば、今まで苦勞は致しませぬ。わしが心を休めようと、うはべの緣切り、その後にて、死ぬる覺悟を見てとつた。家にも替へて半七が、思ひ合うた三勝どの、殺してなんのこの母が、嬉しからうと思うてか。矢ツ張りこなたはいつまでも。

三勝　イエ〳〵、今まで御苦勞をかけましたこの三勝、憎いとも思し召さず、私しへ義理を立てゝのお詞、死なば一つと云ひ交した半七さん、お身のお爲になる事を、それでも退かれぬ切られぬと、なんぼ果敢ない女子でも、それ程の辨まへは、よう心得て居りますわいなァ。

母　そんなら何もかも得心して、ほんまに緣を

三勝　アイ、身を切るよりも緣切りは、辛い悲しい二人が仲、義理の二字には叶はぬ浮世。

母　アヽ、流石は武家の育ちとて、物の解つた三勝どの。半七が迷うたも

ト我れを忘れて、こなしあつて

イヤ、嬉しうござる、忝い。それでこそ、あなたの親御へ卽ち孝行。

三勝　エヽ。

ト思ひ入れ。

母　サア、親御助太夫樣は、白井の御養子權八樣に討たれしゆゑ、その白井の家來筋たるあの半七、いはゞあなたと敵同士。

三勝　其また白井の兵左衞門樣を、父さんの御養子、わたしが爲には兄さんの、權三樣が討ちしゆゑ、妹の八重梅と、云ひ號けの權八樣とも敵同士。互ひに妹脊のその仲が、敵同士も因果な緣。敵々

母　のお二人は、鈴ヶ森にていまはしい

其お仕置きも運強く……イヤ、白井本庄兩家の斷絕。助太夫樣のお預かり、天國の短刀。白井の家の陰陽の御判。二品の内どちらなりとも、詮議仕出し、半七が手より差上ぐれば、以前の科も何もかも、お免しあつて、兩家とも立つ。さすればお前も元へ御歸參。半七とても元の侍ひ、お園の緣を繰り戻し、あの長九郎には酒屋の店を讓り、これで三方四方の納まり。

三勝　その天國は、父樣のお預かりゆゑ、常々見覺えある短刀。わたしもどうぞ詮議して

母　御歸參あらば共々に、お園が心も落ち付く爲、お前と二人兄弟分、本妻妾うやなやの、その杯も土器の、土になつても今の恩を、忘れぬやうにお園にも、話して聞かさばさぞ喜び。

三勝　喜びあれば悲しい別れ。二世と誓ひし夫といひ、胤腹變れど兄妹、兄弟までも皆ちり〴〵。心がらとはいひながら

母　オヽ、尤もぢや。それも今に昔語り。

三勝　ほんに思へば世の中に

母　義理ほどつらい

三勝　アイタヽヽヽ。

ト癪の起りし思ひ入れ。母は側へ寄り

母　なゝ。癪が起らう。道理ぢや〳〵。

ト三勝の後より癪を押しながら、につこり笑ひ、乳をいぢる。

三勝　アヽモシ、何をなされまする。

母　イヤサ、何ぞ薬が

ト以前の紙畳入れを出し、この中より癪の薬と書きし包みを出し

幸ひ爰にこの薬、これを服んで

三勝　イヽエ、薬を服まうより、いつそ取詰め死んだが増し。

トこの薬包みをあたりへ抛り出す。

母　どうやらまんまと

三勝　エ。

母　コレ、必ず短氣を、出すまいぞや。

ト唄になり、母はこなしあつて上手の障子屋體へ入る。三勝残り、思ひ入れあつて

三勝　嬉しいも戀、悲しいも戀。戀といふ名の取分けて、苦を増す戀の切ない義理、親の許せし云ひ號

けの、男を捨てた報いにて、今また男に捨てらるゝ、浮世は車と、よういうた、ものぢやなア。

ト思ひ入れ。流行り唄になり、奥より宅兵衛、お倉、善好、お春、お辰、忠次郎出て來り

くら　オヽ、二勝、爰にゐやつたか。

善好　旦那、爰で始めませう〳〵。

宅兵　てめえ達は、今までどこにゐた。

善好　ちよつぴり盗みの慾心サ。

はる　お株だね。何ぞお奢りよ。

たつ　コレ、忠どん、お銚子や火鉢を持つて來てくんな。

忠次　アイ〳〵。

ト忠次郎は獅嚙み火鉢へ平鍋を掛けたるを持ち、長吉甚兵衛、銚子肴を持ち出て

甚兵　あちらの見世と違つて、寮ではあまり忙しくございませんから

長吉　私しどもゝ一つ頂戴。

はる　サア〳〵、大勢賑やかにお上がりな。

宅兵　サア〳〵、誰れ彼れと遠慮なしに、グッと飲みッこ〳〵。彼の酒地肉林の譯がいゝぜ。カウ〳〵

三勝、大分ふさぎの耳は長井兵助、いやいな姿だが、なんぞ心にさはり葉茶かの。ちつと浮き浮きしなこ餅、一つあけん堀の不動樣とは、どつでござりの剝き身、おきにいらず汁かね。

善好 イヤモウ、夥しい地口で恐れる譯だの。

忠次 此方のお株を酉の町で、いもが潰れる。

たつ 忠次さん、引け過ぎぢやアねえよ。

忠次 又おれをこめるな。

宅兵 こめるの婆さん茶を上がれ。あがれなる三勝は……どうだ〳〵。

三勝 人の氣も知らねえで、いゝ機嫌たよゥ。

ト つんとする。

宅兵 オヤ、いつもの調子と違つて、つんときさゝぎだの。

くら コレサ、お客が騷ぐに其やうに、何を膨れてゐるのだこの子は。エヽモウ、浮き〳〵しねえか。

宅兵 コレサ〳〵、お倉、どうしたものだ。泣くもふさぐも焦れるのも、勤めのうちはまゝあり陀佛だ三勝、おらァ無理おッつけに口說くのは大野暮だから、何にもいはぬ躑躅だが、男嫌ひの小紫の所へ、何しに來るものか。考へても見るがいゝ。どうかおつな風が吹いたらばと、有りやうは心

を通はすも、深草の少々ばかりは御用を足す筋もありやせう。なんだか平常氣休めばかりで、一向落ちつかなます。いつまでも氣を揉ませずと、本音を出して聞かせるがいゝぢやァねえか。

ト三勝の側へ寄り添ふ。

三勝　モシ、後生たから、ちつと物を云はずにゐてくんなさいまし。眞にふさぐ事がありますからの事サ

宅兵　ふさぐ事とは色事か、但しは金で山吹の、花色ごろも主や誰れ、問へど答へも口なしのはる

善好　オヤ〳〵、「夕霞」にそんな文句がありますねえ。

宅兵　今流行りの一中節か。

善好　忠次、一つやらッせえな。

忠次　三味線は眞平だ。

甚兵　藝のいゝ者は、いづれ勿體を付けるものだて。

宅兵　器量のいゝ者も、御勿體をお附けなさる。ところをちよつぴりからかつて見たい。われらは都太夫一中節。

ト又しなだれる。

三勝　エヽモウ、よしてくんなさいましよウ。

ト焦れて手を振り拂ふ拍子に、宅兵衛の帶せし脇差しの柄拔けてあたりへ飛ぶ。これに宅兵衛心附かぬ思ひ入れ。

甚兵　アヽ、モシ〳〵、あぶねえ、脇差しが拔けました。

長吉　脇差しぢやアねえ、目釘が拔けて柄が取れたのだ。

宅兵　そこらへ飛んだ。見てくれ〳〵。

長吉　お春さん、そこらを探しなく。

はる　柄とは何だえ。

長吉　脇差しの柄よ。

たつ　こゝらにはござりません。

善好　柄がないか。アヽつかもねえ。

宅兵　洒落どころではない。

ト此うち皆々柄を探す。長吉は宅兵衛の脇差しのこみを見附け

長吉　旦那の脇差しの銘は、大國と書いてあるぜ。

甚兵　大の字ぢやアねえ、天の字だ、天國だらう。

ト これにて三勝、フッと込みへ目を附ける。宅兵衛これを探す。お倉側にて氣を揉む思ひ入れ。

忠次　ナニ、天國といふ銘があるものか。

善好　でん〳〵は御馳走にあづかりました。

忠次　悪い洒落だ。天の字は慥か天の川の天といふ字だぜ。

甚兵　それぢやア天國かの。

忠次　下の字は豐國の國といふ字だね。

長吉　ハヽア、天國だな。

三勝　そんなら、いよ〳〵。

ト 目を附ける。お倉柄を探して

くら　ハイ、爰にござりました。

三勝　ドレ、わたしがはめて上げませう。

宅兵　それには及はぬ、爰へ寄越せ。

三勝　なぜえ。わたしがはめると穢れるかえ。

忠次　エヽ。

三勝　なんだか、お出しなさいましよ。

ト膝へ寄りかゝり、柄をはめる振りにて、よく〳〵心を附けて見ろ。宅兵衛は見せまいといふ心にて　よう〳〵三勝柄をはめ、目釘の代りに銀の耳掻きをさして置く。

宅兵　目釘の代りに、簪とは、當意即妙。

はる　三勝さん、機嫌は直つたかえ。

三勝　アイ。一つお飲ませな。

ト茶碗を引受け、ぐつと飲む。お倉宅兵衛顏見合せ

くら　宅兵衛さん、

宅兵　お倉、おつだの。

三勝　何がえ。

宅兵　ヤ。

ト三勝の顏を見ろ。

三勝　助けておくれ。

ト茶碗を差出す。

皆々　オヤ〳〵〳〵。

ト宅兵衛酒を一つ飲む。

三勝　眞に嬉しいよウ。

ト氣味合ひの思ひ入れ。流行り唄になり、奥より善右衛門走り出て來る。跡より小紫、誂へ座敷着のなり、紫の病鉢巻き、善右衛門を追つて出る。禿一人、部屋着の形にて附き添ひ

善右　眞平御免なさい槌あたま。

小紫　あれサ、後生だから、ちよつとそれをお見せなんしよ。

善右　滅多にこれは見せられませぬ。

禿　おいらん、お危なうござんすよ。

くら　おいらん、今日は大分お元氣でござりますね。

善好　お心よふござりますか。

小紫　アイサ、なんだか解りんせん。サア、モシ、善右衛門さん、お見せなんし。

宅兵　カウ、おいらん、何がそんなに見たがるのだ。

小紫　イエ、ちつと善さんの持つてお出でなんすものを……モシ、お前、意地が惡うざんす。
善右　おいらんの威光で、見られるなら見て御覽じませ。
小紫　そんなら猶見なくつてはなりません。搜りいすえ。
善右　それは眞平だ。
小紫　お春さん、みんな手傳つておくんなんし。
はる　善さん、雨ねむりの大小なら、わたしにも一枚おくんなんし。
善右　ナニ、大小ぢやアねえ、白鞘の短刀。
宅兵　そんならそれを
小紫　サア、お見せなんし。
ト禿お春お辰・善右衞門を搜る。
宅兵　おいらん、善右衞門と怪しいぜ。
小紫　アイサ、色ざんすものを。色だからお見せなんしな。
善右　おいらん、本統かえ。
小紫　マア、本統だから、それをわたしに

善右　マア、といふ字は否だね。

三勝　そこから本統にならなければ、色ぢやアありません。

小紫　オヤ、三勝さん、お前こそ宅兵衛さんと怪しいよ。

三勝　アイ、おいらん、勘忍しておくんなさいまし、わたしや宅兵衛さんに

小紫　惚れたら色にしなんし。わたしは根ッから、口惜しくも何ともありんせん。うるさくつて……イ
エ、さうぢやアありんせんが、思ひ合つた仲なら、わたしやァ隨分ようざんす。

くら　おいらんが、あゝ裁けておくんなさりやア、すぐに極まりサ。

宅兵　そんなら、いよ／＼小紫は

小紫　わたしがなんの構ひますものかね。

三勝　流石おいらん、通り者。そんなら眞に宅兵衛さん、浮氣をするときゝませんよ。

ト膝を抓る。

宅兵　アイタヽヽヽ。

皆々　サア／＼、大事の始まり／＼。

宅兵　お倉、裁いてくんな。

ト紙入れを抛り出す。お倉は皆々へ祝儀をやる。

皆々　エヽ、有り難うございます。

善右　おいらん、彼方は新出來、大色事。羨ましい譯だね。

小紫　アイ、わたしや客人に捨てられたもの、誰れぞ拾つてくれ手があればよいになア。

善右　拾ひたいね。

小紫　嘘ばつかり。

善右　大誓文。

小紫　宅兵衛さん、ようざんすかえ。

宅兵　大よし〳〵。色になれば、おれも安堵だ。

三勝　おいらん、なさいましよ。

善右　ヤア。

小紫　憎らしいなう。

ト抓る。

善右　アイタヽヽヽ。

皆々　サア、また大事の始まり〳〵。
善右　お倉、裁いてくんな。
　　　ト同じく紙入れを抛り出す。お倉、また皆々へ祝儀をやる。
善好　これは有り難うござります。
甚兵　今が色の世の中ぢや〳〵。
はる　お春さんは差詰めおれだらうの。
宅兵　お藤さんに云ひ付けますよ。
善右　時に、段取りが餘りうゑ過ぎの毘沙門。ほんま本式の色だといふ證據が見たいな。
　　　それ〳〵。おいらんの男嫌ひ、三勝の色氣なしも、一時に斷う解けかゝるとは、確かに目が覺めると、稻村で石地藏を抱いて寢てゐるさうだ。
小紫　ハテ、噂にも聞きなんした、わたしが男嫌ひは、今までこれぞといふ
三勝　深い色に浮れたといふ、評判もござんせぬぞえ。
くら　イエ〳〵、さう立派には云はれまい。宅兵衛樣と色になれば、何もかも洗ひ揚げねばならぬ。三勝が兒ぢやといふ、あの半七、深い色であらうがの。

宅兵　それは云はずと遠に知つてゐるのサ。今時色をしねえ女があるものか。

善右　男嫌ひの其許は・惚れた男へ立てる心中。

小紫　わたしが惚れた男とはえ。

善右　權三とやら、權八とやら。

小紫　エ。

善右　どこの居候ふか知らねえが、深い色だといふ事は

長吉　善右衛門さんが御存じなら、お案じなされますな。權三といふ名か知らないが、定助といふが元の亭主といふ事で、この頃は心變り、私し共の內の新造衆、勝山といふ者が、おいらんの此方へござつた日に、すぐに駈落ち。

甚兵　逃げ行く先きは廣德寺前の黑燒き屋。見附けて廓へ連れ歸るところ、その內にゐた、權三とやら定助やらといふ人が、百兩出して、勝山の身拔けをしました。

小紫　エヽ、そんなら黑燒き屋の見世にて

甚兵　アイ、金の取引きこの甚兵衛。オヽ、それ〳〵、しかもおいらん、お前さんを判人の善六が買うて、爰へ連れて來た日でござります。



忠次　慥かおいらんが元方も、その黒燒き屋、寺西閑心といふ醫者樣と、定助といふ人が、おいらんの亭主で、判をした證文サ。

長吉　その定助が日も變らず、すぐに勝山の身請け。

甚兵　おいらんと、新造と、替へ〴〵にした、その日の始末。

忠次　銀の代りに鉛とはこの事。

三人　とんだ話しもあるものさね。

ト　この話しを聞き、小紫思ひ入れあつて

小紫　そんならその日に……ムウ、この身を賣らせし身の代金、尋ぬる品を求めると、その約束でこの勤め。その日に女の身拔けといひ、品は矢ッ張りアノ妾に。

ト善右衞門の懷へ思ひ入れあつて

すりや、正しく騙かつて、誠は色に

ト思はずヤツとなり、向うを見て、立上がる、この拍子に懷より位牌を落す。

善右　この位牌は

ト小紫取つて懷中し

小紫　ほんに呆れた男の心。

善右　問はにや落ちいで語るに落ちる。以前の深間、その色男の男の戒名、舅に孝行盡す氣で、肌身離さず持つてゐるのか。

小紫　イエ、これは

善右　そんなら誰れの戒名だ。

小紫　サア、これは

善右　ちよつと爰で見たいものだ。

ト手を掛ける。

小紫　成る程、色の親の戒名、末は夫婦と云ひかはす、起證代りのこの位牌。それほど深い間男ぐるひも、今のを聞いては

善右　愛想が盡きたか。

小紫　アイ。

善右　その面當てに善右衛門へ、乘り替へる心なら、起證代りに今の位牌を

宅兵　此方も心中見ておいた、腕の彫り物。

ト三勝の腕をまくる。

三勝　アヽモシ……斯う現はれたら是非がない。古い色事さつぱりと、退き去りませう、その代り

小紫　女子の心落ちつくやう、お前方の

二人　心中も。

宅兵　此方の心中、指なりと

善右　腕でも首でも切つてやる。

小紫　イエ、切つた品より切れ物の、その白鞘を欲しいが望み。

三勝　わたしも目釘へ簪を、差した脇差し、男の魂ひ。

小紫　變らぬ證據の

二人　誓ひにどうぞ。

善右　すりや、白鞘と

宅兵　この脇差し

くら　互ひに望む心と心。

小紫　人は知らねど尋ねる品。

三勝　わたしも尋ねる
宅善　ヤ。
二人　イヤ、心中に
宅善　いかにも遣らう。
二人　アノ、眞實に
宅兵　先づその前に其方の心中
善右　おれが心の濟むやうに。
　　ト善右衛門は小紫の懷より位牌を出して、火鉢へくべる。
小紫　アヽコレ、それは大事の
　　ト寄るを、善右衛門押へる。位牌はフワ〳〵燃える。
宅兵　起證代りのあの位牌、燃えた焚き火の、火箸の招伴。
　　トだしぬけに三勝の彫り物を燒く。
三勝　アツヽヽヽ。……燒かるゝ腕の苦痛より
小紫　胸の苦しみ、心の云ひ譯。

三勝　望みの品ゆゑ

小柴　約を變じて

三勝　この場の心中

小柴　これで疑ひ

二人　晴れたかえ。

ト兩人よろしく思ひ入れ。

宅善　心底見えた。この二品は

くら　互ひに帶紐解いた上

小柴　それでは矢ッ張り

三勝　イエ、おいらん、お前の望みも、樣子は知らねど、とつくり糺した……サア、斯う打解けたから
は、これから固めの杯。

ト三勝は、二人を醉はして取らうといふ仕形。小柴呑みこみ

小柴　そんなら奥で、善右衞門さん

くら　宅兵衞さんも色一座。

善好　今年は珍らしい人物が流行る年だ。

忠次　これは不躾け。旦那なぞは、今流行る質だわな。

善右　これからは、お座敷を替へて

長吉　大洒落、大飲み、大騒ぎ。

はる　サア、おいらんも御一緒に

小紫　わたしは後から。皆さんお先きへ。

三勝　それでは、モシ

ト思ひ入れ。

小紫　ハテ、三勝さんの望みの品、譯は知らねどよう似た心。共にお前を

トこれにて三勝うなづく。

皆々　サア、まづ奥へ。

宅兵　これは面白だぬきの

善右　腹鼓だね。

善好　サア、お出でなされませ。

ト流行り唄になり、この人數皆々奥へ入る。小紫一人殘り、いろ〳〵こなしあつて

小紫 あの善右衛門が所持なす品、正しく尋ぬる天國の短刀。この身を沈めし身の代にて、買ひ戻す約束も、あの品の、人手にあるといひ、最前の噂には、勝山とやらいふ女を、身拔けの金も卽ち同日。よもやと思ふあの權三。思案の外の戀路に迷ひ、契約ちがへて某を騙かりしか。但し深き樣子あつてか。アヽ、兎角浮世に狹き身の、女姿にあまつさへ、ためし少なき流れの身。日本國に我が身ほど、因果な者が又あらうか。……鈴ヶ森にて受けたる手疵、苦勞の上のこの惱み。

トあたりを見て、三勝が捨てたる藥包みを見附け

癪の藥と書いたるは、先刻の客が紙入れを、投げ出したその時に、落したものか。幸ひのこの藥、せめて心痛助ける爲の

トあたりへ思ひ入れあつて、氣を替へ

勤めの身なれば持病の癪。ほんに辛氣な事ぢやなア。

ト獨吟のメリヤスになり、小紫は湯呑みへ藥を入れ、酒を一杯入れて飮む。この唄にて向うより權三着流し大小、丸に本の字の紋附きの小袖にて、文を讀みながら出て來る。この時空へ雁金三羽ほど啼き連れる。權三花道にてこれを見やり、思ひ入れあつて

権三　薄墨に、書く玉章と見ゆるかな。春まだ寒き黄昏に、三羽連れたるあの雁金。父と母とに一つは子鳥。親を慕ふは生ある習ひ。それに引替へ我れは又、現在親を人手に討たれ

小紫　親の敵はそれぞとも、知れて討たれぬ互ひの契約。

権三　敵々が兄弟の、約を違へぬ固めぞと、親々までもこの如く

ト位牌を出し、思ひ入れ。

小紫　位牌を取替へ所持なせしが

権三　身共が方には白井の親、兵左衛門がこの戒名。

小紫　本庄氏の位牌さへ、思はぬ難儀に火中なし、笹野に逢はゞ云ひ譯も

権三　内證男の白井が身の上、今は遊里の君傾城。

小紫　人目は色と見せかけて、今日も待つ間に啼き連るゝ

権三　雁の使ひか文の傳手。ゆかりの色の小紫、さぞかし待つて

小紫　聞きたい事は今日の仕儀。

権三　云ひたい事はお才が身抜け。

小紫　早う來よかし、待ち人の

權三　どうぞ首尾よう

二人　逢ひたいものぢやなア。

トまた唄の切れにて、權三舞臺へ來り、あたりを窺ふ。この唄の中程より、暖簾口よりお賤、三浦屋の女房のこしらへにて、馬盥に四季咲きの紫菊を活けたるを持ち出て窺ひゐる。權三小石を拾ひ、合ひ圖の礫を打つ。小紫表を見て

小紫　オヽ、待つてゐた、丁度よい首尾。

ト下手へ行かうとする。お賤、ツカ〳〵と出て

しづ　小紫、待ちや。

ト悔り、ふり返り

小紫　エヽ。

しづ　おかみさん。

トこれにて權三は袂より頭巾を出し、顏を隱し、忍びゐる。

しづ　コレ、其方は病氣といひながら、はしたなう其やうに、風があたらば猶大事。併し、この別莊へ寄越して置くのも、養生がてら、氣儘にしやるもよいけれど、これ見や、四季咲きとはいひなが

ら、まだ初春に珍らしいこの菊。紫いろに咲いたのも、其方の名にゆかりの色、あまり美しいゆゑ持つて來ました。これなと見て氣を晴らしや。

ト小紫の側へ置き

改め云ふには及ばねど、どうした縁やら、大金出してこちの内へ買ひ取り、間もなう病氣。それを一度もフッツリとも云はぬは、わが身も知つてゐやらう、世間では女郎屋の商賣すれば、鬼か地獄のやうにも思ふものなれど、ハテ、抱へた子供のその庇で、今日を暮らしてゐれば、マア〳〵、内の寶なり、眞實の子も同然、名さへ苦界といふ勤め、否であらう〳〵と、さうばかり云うてゐては、また商賣にもならぬといふもの。男嫌ひと云やるのも、深う云ひ交した、その人へ立つる貞節と……サア、さしこした推量ながら、樂みなうては勤まらぬと、何やらの本にもある通り、それをせくではなけれども、だん〳〵其方の身詰まり。思案しても見や。全盛ほど猶内證は廻らぬもの、節句、物日の付け屆けも、人より張りの廓の習ひ。否々ながら年季も殖え、儘にならねば不料簡、いくらも今まで型のある事。まだ廓なれぬ其方ゆゑ、よしない事も思やらうが、大事と思つて云うて聞かす……ほんにわたしとした事が、病人の伽に來て、一倍氣合ひにさはる事。ホヽヽヽホ。イヤモウ、こんな野暮な事はよしにしませう。併し、まだ餘寒が強い。爰へ床を敷き、庭を

見ながら、氣を晴らしたがよからう。コレ、辰や〳〵

たつ　ハイ〳〵。

ト　お辰奥より出る。

しづ　コレ、この子の床を、爰へ敷いてやりや。

たつ　ハイ〳〵。お客の床でござりますかえ。

しづ　イヤ〳〵、この子の寢てゐた床を

たつ　ハイ〳〵。

ト　入る。

小紫　おかみさん、此方へ參つて、まだ馴染みもなき私しを、御親切に仰しやつて、わが儘者とも

しづ　アヽ、もうそんな事は云はいでもよい、聞きたうもない。隨分氣儘一杯にして、早うようなつてたも。

たつ　マア、長吉どん、敷いて下さいよ。

ト　此うちお辰長吉出て、よき所へ床を敷き、屏風を立つて、其まゝ入る。お辰は、この床の側へ馬盥の菊を直し置き

たつ　ハイ、お床を取りました。

しづ　コレ、小紫、あの床の上で、アヽ誰れぞ氣に入つたお友達か、藝者でも呼びにやらうか……併し斯ういふところへ、上手な按摩さんなと來ればよいになア。

ト門口へ思ひ入れ。權三これを聞き、こなしあつて

權三　ハイ〳〵、按摩の安賣り、しかも名人。今流行りの按摩、ようきゝますぞえ。

しづ　オヽ、これは幸ひ。サア〳〵、爰へ來て、あの子の氣に入るやうに、療治してやつて下さんせ。

權三　ハイ〳〵、それへ參りますかな。

ト床の側へ來る。

しづ　ほんに、丁度こゝに酒もあるさうな。按摩さん、お前成る口なら、これを飲んで、ゆつくりあの子の伽をしながら、賴みますぞえ。

權三　酒でござりますか。イヤモウ、酒というては目の無い按摩。

ト探り〳〵、いま小紫の飲みさしの藥の入りし酒を取る。

小紫　アヽモシ、それはわたしが今、藥を入れた飲みさしの酒。

權三　おいらんの飲みさしなら、猶有り難い。甘露々々。

ト ぐつと飲む。

たつ　ほんに氣さくな按摩さん

しづ　その口前でしつぽりと

小紫　エ。

しづ　氣晴らしをするがよいわいなう。

ト唄になり、權三を屏風の中へ入れ、思ひ入れあつてお辰を連れ、奥へ入る。あと合ひ方になり、兩人思ひ入れあつて

小紫　權三さん。

權三　コレ。

ト思ひ入れ。

小紫　人目を憚るその爲に、深間と見せてこの姿、武士のあるまい

ト面目なきこなし。

權三　ハテ、それも尋ぬる品ゆゑに。それに付けても金瘡の、左の肩より今に惱み。

小紫　同じ惱みの手疵にて、今に自由に。

権三　病は療治で直らうが、心苦しい入り譯を、云はねばならぬ一通り、腹を立てずとトツクリと
小紫　そりや此方にも云ひ譯ならぬ、難儀の仔細……まづその話しは
権三　云ひ譯ならぬ話しとは
小紫　腹立つ譯は天國の
権三　サ、云ふに云はれぬ
小紫　して、其あとは
　　　ト奥にて
くら　おいらん。小紫さん。
　　　トこれにて兩人、折惡しき思ひ入れにて、俄に所體つくろ。権三は遠くへ離れ、火鉢の側へ座ろ。奥よりお倉と甚兵衞出て來り
甚兵　モシ、おいらん、美濃屋から初會なじみの客人、どうぞ出て下さりませ。
小紫　甚兵衞どん、病氣を知つてゐながら、どうしてわたしが出られませう。
くら　サア〳〵、御尤もでござりますが、今日のお客は、上州の絹問屋、大金持ちでござります。お前さんのお爲にも、隨分百兩や二百兩の入り用は、いつでも出します。お否でもござりませうが、

お前さんでなければならぬといふ、名差しでござりまする。只モウ御病氣の事ゆゑ、座敷ばかりでよろしうござりまする。あなたが出て下さらぬと、大事のお客をしくじります。どうぞお座敷ばかり

小紫　でも、病氣でこの通り、取り亂して居りますものを

甚兵　それはお客も、御病氣を承知の事でござりますから。モシ、側のうるぼひにもなります。

くら　マア／＼、あゝいふ金持ちのお客は、滅多に取らうといふてもござりませぬ。

　　　トこれを聞いて、權三思ひ入れあつて

權三　ハテ、遊びの金に百兩、二百兩、捨てる人さへある中に、僅かの金に

甚兵　オヤ、貴樣は何だ。

小紫　アヽ、そりやアわたしが頼んだ按摩さん。まだ療治が殘つてゐれば

くら　それでもお座敷ばかり。跡で療治なされませ。

權三　それ／＼、私しはいつまでも、待つて居りませう程に、さういふ金持ちのお客なれば、出る方がよろしうござりませう。

小紫　そんなら、座敷ばかりなれば

くら　出て下さりますか。それでは大きに皆も喜びます。

甚兵　左樣なら引付けに、あちらの座敷で

小紫　ちよつと顏を直してから……按摩さん、待つてゐて下さんせえ。

くら　サア、お出でなされませ。

小紫　エヽ、忙しない。

ト唄になり、小紫先きに、お倉甚兵衛奥へ入る。權三は跡見送り、こなしあつて

權三　白井が妹のあのお才、さしかゝつたる身拔けの金、天國の短刀を、買ひ受けるその金を、當座のがれに遣ひしが、妹の苦界を助くれば、兄が苦界に沈むとは……これも尋ぬる寶ゆゑ。今聞けば、初會の客、大金持ちと聞いたゆゑ、無理に出させて今宵のうち、樣子を明かし、その金を、借り受けるとも、得心なくば、いつそ忍んで奪ひ取り……アヽ、遊びの金は有りあまる。昔の身なら某しも

ト火箸を取り

どうか思案のありさうなもの。

トいろ〳〵思案の思ひ入れにて、火鉢の中を搔き廻す。この時灰の中より、以前の位牌の燃えさし出る。



　　　　權三これを見て

何か塗り物の燃えさしが

　　　　トだん〳〵出し、よく〳〵見て

こりやコレ位牌の蓮華座……ヤヽ、しかも覺えの恰好といひ、文字は燒失なしたれども、慥かにこれは取交せし、親人の。ムウ。

　　　　トこの時奥よりお辰出て來て

たつ　按摩さん〳〵。

　　　　トこれにて權三、件の燃えさしを紙に包み、懷中する。

コレ、按摩さん、おいらんがね

　　　　ト囁く。

權三　ムウ。幸ひ忍んでこの樣子

たつ　サア、モシ、爰へ

　　　　ト下手の地袋戸棚へ權三を忍ばせる。直ぐに奥より善右衞門、件の白鞘を持ち、出て來り

善右　この得手物にて小紫、どうやら斯うやら釣り寄せたが、幸ひ爰は小紫が寢どころ。爰に待ち受け

日頃の本望。有り難いわい。

ト あたりに落ちてある藥包みを見附け

ハヽア、こりやア先刻の藥包み、どうして爰に。

たつ それはおいらんがお上がりなさんして、その飲みさしを權三さんが

善右 ナニ、權三

たつ イエ、按摩さんが飲んだわいなア。

善右 すりや、權三といふ按摩が

たつ エヽ、知らぬわいなア。

ト奥へ入る。

善右 慥か間夫の權三とやら、按摩に化けて爰へ來たに違ひない。こりやア三勝半七に服ませるといつた緣切り藥。知らずに權三と小紫、これを服むとは、緣切らせるに手間隙いらず。

ト床の上へ上がる。バタ／＼になり、奥より小紫逃げて出る。跡より彌市、以前の形にて追ひかけ來り

彌市 そりやつれない小紫、わしが顏を一目見ると、其やうに逃げ廻るは、それ程までに、振り付ける

のか。

小紫 それぢやというて、どうマア顔が

彌市 合されぬとは、この彌市、見覺えあるか。

小紫 エ。

彌市 こなたの顔も、まだしみ〴〵

ト小紫を捕へ、顔見ようとする。小紫顔を隱す。この時暮れ六つの鐘鳴る。

ありやもう暮れ六つ。南無三。

小紫 こゝ離して

ト手疵ゆゑ、荒く出來ぬ思ひ入れにて、振り切る。彌市また捕へやうとするはずみに、側なる肴鉢の中へ足を踏みかけ、鷄目の思ひ入れ。小紫これに目を附け、彌市はそこらを探る。下手の戸棚より權三、半身出して様子を窺ふ。

まさしく鷄目か。

彌市 エ。

ト思ひ入れ。

小紫　それで仕合せ。

彌市　イヤ、何ともない、兩眼明らか。

ト上手の床の上にて、善右衞門、件の白鞘を出し、小紫に見せ

善右　エヘン〳〵。

トこれにて小紫思ひ入れあつて

小紫　善右衞門さん。

彌市　ヤ、外に誰れやら。

小紫　イエ、誰れもゐやせぬ。

ト善右衞門に目くばせして

わたしばかりでござんす。

彌市　すりや、爰には外に、誰れも居ぬこそ幸ひ、この彌市が云ふ事を一通り、聞いて下され、小紫どの

ト合ひ方になり、小紫の裾を捕へ、ヂッとなり

恥かしい事ながら、こなたをフッと見染めたは、土手の夜風の衣紋坂、突き出しとやら、目見得とやら、紫小袖に駕籠の内。此やうなお女郎が、又と二人あるものかと、見返るその夜は先月二十

日、戀の暗路もせふとくの、亥中の月の朧にも、こなたの顏が目先きへちら〳〵。金さへあれば一夜でも、抱いて寢られる賣り物と、コレ、この通り澤山に、金の事なば花とやら、所持して逢ひに來ましたわいの。

ト此せりふの中程に、善右衞門無性に招く。小紫は、彌市が捕へゐる上着を脫ぎ捨て、思ひ入れあつて、善右衞門の床へ入り、屛風を立てる。彌市は矢張り小紫が居ると心得、側へ來り

コレ、小紫どの〳〵。……ヤヽ、いつの間にやら、上着を脫いで

トあたりを見て探る。この時權三は、鷄目と聞いて、そろ〳〵と出て、彌市の金に心をかける。彌市は

そりやつれないぞや小紫どの、せめて一夜は

ト權三を小紫と心得、裾を捕へて

ト權三金を取らんとする。

ヤヽ、この金に手を掛くるは。そんなら得心か。

ト權三引つたくり、逃げさうにする。彌市捕へるはずみに頭巾取れる。彌市、この頭を探りあて

ヤア、小紫と思ひの外、こりや盜人ぢやな。泥坊々々。

トわめく。これにて奧より、善好、甚兵衞、長吉、忠次郎、お倉出て來り

皆々　なんだ、泥坊だ〳〵。

彌市　わしが花を、取つて逃げようとしました。

善好　なんだ、花を取つた。とんだ奴があるものだ。

忠次　雷様なら、臍を取る筈だが

甚兵　はなを取つたら、天狗様かも知れない。

皆々　お前の鼻は滿足であります。

彌市　イヤ〳〵、金を取りました〳〵。

　ト權三を無理に捕へる。この時權三、彌市の顏を見る。

甚兵　ヤア、泥坊だといつたは、先刻の按摩だな。

くら　ほんに、それ〳〵、按摩ちや〳〵。

長吉　按摩が泥坊するとは、あんまり太い奴だ。

皆々　ぶちのめせ〳〵。

　ト立ちかゝる。善好とめて

善好　カウ〳〵みんな、待ちねえ〳〵。斯う大勢で締めて、ぶちのめして、ひよつと疵でも付けて、懸

り合ひだ。よく糺して見るがいゝ。

忠次 それ〳〵、善好の云ふ通り、見たところが隨分立派な形だ。泥坊をしさうな風でもねえぜ。

長吉 黑羽二重に、丸の內に本の字の紋付きの小袖を着てゐる。それで泥坊するとは、まるでほんに氣が付かねえ。

トこれを聞き、こなしあつて

彌市 丸に本の字の紋どころは覺えある。もしやその名は、助八とは云はぬか。

皆々 サア、われが名は何といふ。助八か〳〵。

ト權三よき仕合せと頷づく。

忠次 頷づくからは、いよ〳〵此奴は、助八といふ奴だな。

彌市 助八なれば身が弟、ヤイ

ト權三を助八と心得、襟髪を引きつけ

こゝな人でなしめが。いつぞやも身が留守へ參り、ようも小袖を奪ひ取り、それをおのれは着てをるな。兄の面まで穢させる大泥坊め。以後の見せしめ。

トあたりにある平の蓋を探り取り、無性にくらはせる。これにて權三の額に疵つくこと。

甚兵　兄の物まで泥坊するとは、太い奴だ。按摩をして、方々枕探しをしやァがるのだらう。ドレ、面を

　　　ト權三の襟髮を摑み、顏を見て

長吉　そんなら、その時の金も、どこぞで盗んで來たのだな。

　　ヤァ、わりやァこの間廣德寺前で、勝山さんの身拔の百兩を出した、慥かその名は、定助だな〳〵

權三　イヤ、全く盗みを渡世に致す者ではござらぬ。思案の外の女に迷ひ、行き詰つての若氣の至り。

　　立つ立たざるの譯ゆゑに、よんどころなく

彌市　ヤ、、その聲は聞き馴れぬ

　　　ト云ふを打消し

皆々　サア〳〵、盗んだ金を出しやァがれ〳〵。

　　　ト權三の持つてゐる金を引出す。此はすみに包み解けて、みだけ小判、あたりへちらばる。

長吉　ヤア〳〵〳〵、この金は皆、銅脈だ〳〵。

皆々　ヤァ、似せ金だ〳〵。

權三　誠にこれは

ト悃り。彌市思ひ入れ。

長吉　ハヽア、いま兄弟たと云つたが、お客といつたこの兄も、似せ金遣ひの大騙りだな。

忠次　そんなら先刻貰つた金も

甚兵　みんな出して、改めるがいゝ〳〵。

ト皆々貰つた金を出して、改めて見て

善好　そりやこそ〳〵、みな似せ金。

忠次　ほんに延喜の小判だ。オヤ〳〵。

くら　コレ

ト彌市の胸ぐら捕へ

この人は〳〵。ようも〳〵田舎の大盡と云つて、わしを騙してお客になつたの。みんなの手前、

茶屋が濟まぬ。濟まぬわいなう。

甚兵　弟は泥坊、兄は騙り、二人ながら、會所へ引摺つて行くがいゝ。

皆々　それがいゝ〳〵。

ト立ちかゝる。

權三　似せ金とは心付かず、さしかゝる難儀ゆゑ、ふとした事の出來心、盜みし金が銅脈とは。ホイ。
彌市　さう云ふ聲は弟にあらぬ、聲はよく似た若旦那。
權三　アイヤ、弟に相違ない。もう斯うなつてはどこまでも、身が實名を隱すに幸ひ。兄弟ぢやぞ。
　　　ト思ひ入れ、彌市不思議のこなしにて
彌市　心ある詞といひ、エヽコレ、かてゝ加へてこの病ひ、見えぬ鷄目の悲しさは
權三　サ、その眼病ゆゑ盜み心。それが仇なるこの場の仕儀。
くら　いつその事に皆さん、ぶちのめすがよいわいなア。
皆々　しめろ〳〵。
　　　ト皆々寄つて彌市、權三をしたゝかに打つ。これにて彌市の衣裳、頭巾ぬげて、紺看板の奴の形になる。
　　　そりやこそ騙りに違ひない。
　　　トこの時、上手の屛風を明ける。中に小紫、善右衞門、よろしく思ひ入れあつて
善右　ハテ、油斷のならぬ世界だなア。
小紫　お客は騙り、あちらのお人は枕探し、揃ひも揃ひしお二人さん

權三　ヤヽ、そちや小紫、最前からのこの場の仕儀を、屏風の中で聞いてゐながら

小紫　知れた事、口出ししたら、盗人の同類になるわいなア。

權三　サヽ、盗み騙りと一筋に、聞いたら思ふも尤もぢやが、無ければならぬ金ゆゑに

小紫　それで人の物を盗むのかえ。無ければならぬ金ゆゑに、盗みをしやうものなれば、貧しい暮らしをする者は、浮世に一人もござんすまい。傾城に身を賣るのも、盗みがならぬ習はしゆゑ……コレ、外に何の金のいる

權三　ヤ。

小紫　この屏風で聞いてゐれば、思案の外の女に迷ひ、行きつまつて金がいると、隱すとすれどその口から、よもやと思へどたつた今。それで大概様子が知れた。

權三　イヤサ、あれは當座の嘘僞はり。

小紫　イヤ、僞りならぬその様子、何もかも知つてゐる。もう斯うなつたら云はにやならぬ。皆さんも聞いて下さんせ。

ト合ひ方になり

いま盗みした此お人は、以前わたしが大深間、命も共にと約束した仲、百兩で買はねばならぬ品

があるとて、わたしが身を苦界に沈め、その金で買ひ求め、身を立つるといふ仕儀ゆゑ、そこで斯うした勤め奉公。その金で、望みの品は買ひもせず、外の女を身請けして、傾城ぐるひの遊びの金。女郎になつた此わしは、ほんのお先に使はれもの。それも只の女子なら……云ふに云はれぬ切ない勤め、その辛抱も忠義と義理、姿を變へて……イヤサ、氣兼ね苦勞も皆無駄事。佛のやうな女子でも、腹が立たいでなんとせう。又その上に爰まで來て、小紫の間夫で候ふと、人の物まで盜み騙り。頼みの品も人手に渡し、堅い約束、義理までも、女にかへて忘るゝ程な、うつけ者にはもう構はぬ。これが縁切り、愛想づかし、男同士なら義絶とやら。盜み騙りを好きこのむ、そんな小さい魂ひの、男はフツ〳〵嫌ぢやわいなア。

權三　ムウ。樣子知らねば一通りの、恨みは尤も、さりながら、最前逢うたその時に、話し遅れた女の身抜き。それには深い

小紫　譯があるなら云はしやんせ。

權三　サア、その譯は、どうもこの席では

小紫　云はれまい。なんとして〳〵、云はれた義理ぢやござんすまい。その心ゆゑ彼の品も、外手へ渡し剩つさへ、盜み心の見下げたお方。

彌市　心にもなき騙り事、絹屋の彌市と僞つて、客になりしも敵の行くへ、尋ねる爲に世間のとり沙汰慥かにそれとその人に、似たとあるゆゑ來て見ても、因果な病ひの鷄目にて、皆目見えぬゆゑにこそ、この場の仕儀を何もかも、探り足なる間違ひだらけ。

小紫　似せ金の騙りの人、兄弟やら主從やら、皆馴合ひの拵へ事。ようも〳〵此わしを、深い所へ………人に心は許されぬもの。

トあたりを見て

人の心と丁度この、活け花の菊の花。

ト以前の馬盥に活けし菊を前へ持つて出て

黄菊白菊その外の名はなくもがなと、二色に限る菊も、人の拵へやうにより、紫にもまた紅にも咲けど、ようしたもので、外の色は褪め易い。取分けて紫は、朱を奪ふの譬への通り、盗みする人に繋がれては、紫の名の穢れ。活けた器は、馬盥の畜生侍ひ……ほんに見ざめがするわいなア。

權三　花に准へ、器にかづけ、畜生の、仇花のと、譯を知らねば疑ひの、心に呼はるその悪口、色紫の濃い仲も、只一通りの譯ではない。樣子とつくり聞かぬうち、その憤りは

小紫　聞くに及ばぬ、約束變替へ。

權三　ムウ。人目を思ふのその姿、女の悋氣と思はせる、拵へ事と存じたに、いよ〳〵本心

小紫　この後義絶。

權三　然らば身共も是非がない。堅い固めと取交せし、親々のこの位牌。この場に於て元々へ

　　　ト位牌を出し

　サア、其方へ預けたる、身が親の位牌を返しやれ。

小紫　サア、その位牌は

權三　如何いたした。

小紫　エ。サア

　　　トつかへる。

權三　あるまい〳〵。火中なしたな。

小紫　そんならそれを

權三　その燃えさしは、即ちこれに

　　　ト件の燃えさしを出す。小紫、思ひ入れあつて

小紫　あつて益なき品ゆゑに
權三　そんならそれまで
小紫　燒き捨てゝしまうたわいなア。
權三　ムウ。

ト立ちかゝる。

善好　何をしやアがる。

トかゝるを、腕を捻ぢあげ、見事に投げのけ

權三　ヤイ。エヽ、おのれはなア。

ト誂への合ひ方になり

最前よりいろ／＼と、明けて云はれぬこの場なれば、何申しても尤もと、餘所を憚り、料簡つけてゐる某、今といふ今、誠の心を見て悔り。假の色氣や浮氣でなく、眞實底から義絶の樣子。現在身共が親の位牌、燒き捨てたその心、もう此方も義理はない。義理を立つるも、世を忍ぶも、この親々の位牌ゆゑ。たとへ心に憤り、腹立つ事があらうとも、樣子を聞かぬ其うちに、一途の怒りに義絶するは、かゝる性根と某も、今の今まで知らなんだわえ。諸人の舌頭誠と心得、預かり

し位牌を失ふのみか、聞いてゐられぬ今の惡口。其方の親のこの位牌も、義絕のしるし、この場にて、まツ斯うなして

ト刀を拔き、我が持ち來りし位牌を二つに切り

斯くなす上は互ひの親々、破却なしたるこの返報。

小紫　すりや目の前で現在の、親の位牌を

權三　切つて捨てたる上からは

小紫　義を結びたる緣も切れ

權三　親の位牌を燒失なせば、又も重なる敵も同然。

小紫　我が親のその位牌、切つて捨てるは目前の、矢ツ張り敵。

權三　互ひに親の

小紫　敵と

權三　敵。

小紫　元へ戻れば

權三　義理も情も

兩人　これ限り。

トきつと詰めよる。

善右　ハテ、藥の效驗は爭はれぬ……イヤ、間夫を突き出す小紫、心底見えた上からは、この天國は望みの通り

小紫　そんならわたしに下さんすか。

權三　ナニ、天國とは

彌市　それが欲しさにお主の難儀

小紫　人の難儀が此方の腹癒せ、騙して苦界に沈めた代り、この天國は此方から

權三　うぬ、あくまで辛き

ト立ちかゝる。

善右　天國欲しがるその男、正しく彼れはお尋ね者、本庄助太夫が悴、笹野權三とやら。

彌市　アイヤ、その權三は鈴ヶ森にて、とうにお仕置き。

甚兵　そのお仕置きの槍疵も、急所をよけて助かつたとの風聞。權三を隱して今の名は、慥かに定助。

長吉　槍で突かれて助かつたゆゑ、それを異名に、槍の權三といふ噂。

忠次 權八とやらいふ者も、お仕置きのその場から、繩ぬけして逃げたとやら。權三權八同名で、二人ながら大惡人。

善好 槍の權三に逃げ權八、廿四孝の三の口。

くら 但し向島の料理茶屋

善好 それは武藏屋權三の事よ。

善右 權三であらうが權八でも、浮世へ出られぬ日蔭者。盗み騙りは其奴ら二人、大方そこらであらうかい。

彌市 眼は見えねども最前から、詞の端々、正しく存命ありし御主人樣。小紫どのといふは、この下郎めが八重梅樣の、形見の召し物着せました時、繩切つて逃がしたる

小紫 その科人は權八とやら。それは男、わたしは女子。

權三 今更卑怯によき幸ひと、女の眞似でも致さずば、此方とても打割つて、云はゞ互ひに科ある身。……イヤモシ、科人になる時は、戀も敵も討たれぬ道理。

小紫 そこを思うて此方も暫らく

權三 世に長らへるも今宵限り。

小紫　色にはあらぬ縁切りの
權三　命のきぬ〴〵、花に風。
小紫　その身もこの世のさらば垣、
彌市　昨日は仲も吉原に
權三　立てし屛風も今日は又
小紫　雀形なる裏表
彌市　破れかぶれの刃と刃。
權三　比翼塚なる
小紫　互ひの手の内。

ト權三は刀の柄へ手をかける。彌市、探りながらこれをとめる。小紫、側にある馬盥を打返し

覆水、盆に
權三　返らぬ意地づく。
善右　その盜人を叩き出せ。
皆々　こいつら二人を

ト権三と彌市へかゝる。立廻り。

くら　サア、モシ、おいらん

小紫　あんな者に構はずと

善右　そんなら奥へ

権三　心の腐つた

小紫　それでも武士かえ。

権三　オヽ、誠の武士の、性根は知るまい。

ト小紫に立ちかゝる。皆々支へて

皆々　大泥坊め、出やアがれ。

ト権三を門口の外へ突き出す。

権三　アヽ、朱に交はれば

小紫　赤の他人の

権三　義理もこれまで……アヽ、戀にはあらぬ

彌市　エ。

權三　闇ぢやなア。

　　ト唄になり、權三思ひ入れあつて向うへ入る。

皆々　太え奴もあればあるものだ。

彌市　アヽ、氣がゝりなこの場の始末。殊に小袖の紋どころ

忠次　うぬも同類

甚兵　此奴は會所へ

　　ト兩人、彌市を兩方より引立てる。

皆々　おいらんには、マア、奥へ

小紫　よもやと思へど人ごゝろ……これぞ尋ねる

　　ト思はず短刀を拔きかける。皆々思ひ入れあつて

皆々　エ。

　　トこれにて小紫、鞘をシヤンと納める。彌市、立ちかゝるを、甚兵衞、忠次引据ゑる。この途端に木の頭。

小紫　サアく、行かうわいなア。

ト　きざみにて、「石橋」の切りよろしく、拍子幕

本舞臺、二間の屋體、向う鼠壁、上の方一間の中二階、下手中窓の障子、いつもの所に門口、幕の内より善好、お辰、忠次、皆々以前の形、わや〳〵と捨ぜりふ。下の方に善好の迎ひの者、門口にゐる。流行り唄にて幕明く。

忠次　コレサ〳〵、善好さん、怪しいとは、そりや何が怪しいね。

善好　怪しいと云つたは、外に人も居ない所で、お辰を捕へて眞猫とは、羨やましい譯だな。

たつ　オヤ、善好さん、わつちやァ否だよ。

忠次　コレサ、善好さん、もう氣休めもいゝ加減にして、早く行きなせえ。おいらはこれから、ドリヤ、料理番でもいびらうか。

ト奥へ入る。

善好　オイ〳〵、使ひは誰れだ。

使ひ　ハイ、アノネ、木場の寮へ、森山の旦那がお出でなされましたから、ちよつとお出でなされませ。

善好　大音寺前から、深川の木場まで、ちよつと行かれるものか。併し、駕籠にでも乗つて行かう。お

辰どん、おかみさんによろしく

たつ　オヤ、直ぐにお歸りかえ。

善好　よんどころねえ事で

たつ　お慾さんだね。

善好　大の慾心サ。

若者　サア、お出でなされませ。

ト時の鐘、善好は若い者を連れて向うへ入る。お辰は奥へ入る。バタ〳〵になり、向うより勝山、袖頭巾をかむり、走り出て來り

勝山　わたしが身を拔いて下さんした權三さん、この三浦屋の寮へ來て、小紫さんとやら、突き出しのおいらんに、忍び逢ふとの事ゆゑ、譯も聞きたし、腹も立つ、どうぞ逢ひたいものぢやが。

ト舞臺へ來り、門口を窺ふ。奥より扇吉出て

扇吉　先刻莨入れを落したが、こゝらには無いかしらん。

ト尋ねる。

勝山　モシ〳〵、扇吉さん〳〵。

ト門口を見て

扇吉　オヤ〳〵、勝山さん。どうして爰へ来なすつた。

勝山　わたしや權三さんといふ人に、逢ひに來たわいなア。

扇吉　なんだ、權三さんだ。ハヽア、先刻の按摩が、慥か權三といつたが。カウ、勝山さん、慥かお前を黑燒き屋で

勝山　身拔きの金を、出してもらうたお方ぢやわいなア。

扇吉　待ちな〳〵。道理で見た顏だと思つた。ありやァ小紫さんへ大心底だぜ。

勝山　それ〳〵。それに違ひはないわいなア。どうぞ逢はして下さんせ。

扇吉　何だか樣子は知らぬが、いろ〳〵のもめがあつたから、今し方歸りなすつたが、又出直してござるだらう。カウ、勝山さん、お前權三さんに逢ひたくば、斯うしなせえ。

ト勝山に囁く。

勝山　そんならアノ、小紫さんの着物を着て

扇吉　おいらんの眞似をして、灯を消して置くと、小紫さんと心得、權三さんが忍んで來たところで、胸ぐらを取り、お前は〳〵と、恨みのありたけ。

勝山　どうぞお前、よいやうに。

扇吉　一番南北を書いて見せやせう。

勝山　そんならこれから

扇吉　忍ぶ所は奥二階。

勝山　權三さんがござんしたら

扇吉　必ず聲を出すまいぞ。

勝山　合點ぢやわいなア。

扇吉　そんなら勝山さん

勝山　何かとお前の……嬉しうござんす。

扇吉　コレサ、靜かにしなせえ。

ト扇吉勝山よろしく思ひ入れ。時の鐘、流行り唄にて、奥へ入る。直ぐに奥よりお倉先きに、忠次郎鉢肴を持ち出て來り、跡より宅兵衛、三勝の手を引き出る。この跡よりお春附き、長吉、いろ〳〵の酒道具を持ち出る。

宅兵　お倉〳〵、なんと、イケしつこい野郎ぢやアねえか。

くら　お前さんの手前、お氣の毒でござりますが、番毎にごたつきますわな。
はる　サアモシ、座敷を更へて、爰で飲み直しませう。
長吉　モシ、旦那え。あの野郎の事は、わつち共が始末を致しやすから、大びらにこゝでお始めなされませ。

トこの時奥にて

半七　否だ〳〵。濟まねえぞ〳〵。
ろく　マア〳〵半七さん、ようござんすわいなア。
善六　コレサ、靜かにしなせえ〳〵。
くら　モシ〳〵、あんな狂人に構はずと、そろ〳〵とあそこで始めませう。

ト半七、お六、善六爭ひながら出る。

半七　なんだ、おれを狂人だ。大笑ひだ。どつちが狂人か知れねえ　濟まねえぞ〳〵。
善六　コレサ〳〵、靜かに云つても解つてるわな。
半七　何が解るものか。うぬからして解らねえ。コレエ、、うぬが口入れで、男の手切れに賣つたあの女だ。元からの譯も知つてゐやァがつて、なぜ一緒になつて、小否らしい、女郎もゐねえ薄ッ暗

い座敷へ出したのだ。うぬらは藝者をころばして、その上ッ汁でも吸つてゐやァがるのだらう。この三浦屋の寮ぢやァ、出合ひ宿をしやァがるのか、途方もねえ奴等だ。

宅兵 カウ〳〵、お倉、田夫野人で恐れるぜ。野暮な男だの。

くら ようござります。わたしが居ります。……カウ〳〵、半七どの。たとへ何であらうと、お客の座敷先きで、何だな、大きな聲をして。お前は證文の表にやァ、兄だによ。奉公先きは主人方の勝手次第と、證文に書いたぢやァねえか。あんまり大風な口をきゝなさんな。丁度、コレ〳〵、このよしこのの文句にもある通り

ト以前の本を出し

「年のあるうちや親兄弟にさへ、まゝに話しもなりにくい。」奉公といふものは、さういふ譯のものだわな。

半七 證文はその通りでも、三勝は何の奉公に寄越したのだ。藝者奉公には出したが、客に抱き寢をさせようといつては出さねえ。なんで人の女房に疵を附けた。客は間男だぞ。

善六 これサ〳〵、それぢやァ一分が解らねえ。なんでもかでも、表向きは兄の證文ぢやァねえか。女房だの、間男だのと云つちやァ、筋が違ふぜ。

半七　筋が違はうが、骨が違はうが、主人方で後ぐらい事をすりやァ、此方も横を云ふのだ。給金は取つたが、女房を抱き寝をさせようといふ證文は出さねえ。半七が男は廢つた。どいつも、こいつも、おれが相手だ。
善六　それぢやァ話しも何も出來ねえ。無法といふものだ。
半七　無法を云つたらどうする。この間拔け野郎め。
ト莨盆にて善六の頭をくらはせる。これにて善六疵附く。
長吉　カウ〱、とんだ事をした、疵が附いた。
忠次　マア〱、血を拭ふがよい。さぞ痛からう。
トよろしく介抱する。
善六　ようごぜえます〱。構ひなさんな〱。疵を受けりやァ受けたやうに、話しがなりやす……カウ、半七どの、貴樣はおれが頭をぶちこはしたな。
半七　そんな頭を十や二十ぶちこはしても、焚き附けにもなるものかえ。
忠次　滅法界な事を云ふ。人の頭を澤山さうにろく　ほんに、どういふ譯か知らねども、三勝さん、お前默つてゐなさんしては

はる　半七さんの腹立ち。お前、何と思うてゐなさんすぞいなア。

ト云うても、三勝は俯向いてゐる。

宅兵　ハテ、あんな暴れ者にかゝつちやア、三勝だといつて仕方もあるめえよ。

くら　コレ、半七どの、どうすりやこなたの心が濟むえ。

半七　何にもいらねえ。女を二三日貸してもらはう。

くら　厚かましい事を云ひなせえ。岡場所なら格別、吉原だよ、御免の場所だよ。

半七　その吉原で、藝者を轉ばしても濟むか。

くら　エヽ。

半七　うぬらに揚げ足をとられてつまるものか。

善六　カウ〳〵、お倉さん〳〵、打ッちやつておきなせえ〳〵。……半七どの、おれが頭をぶちこはして、奉公先きの女を二三日貸せも餘ッほど押しが強い。藪に萬鍬な事を云つちやァ通らねえ。瘦せても枯れても、判人を渡世にしてゐる、この善六が爰にゐる。男なら、三勝を連れて行つて見さッせえ。

半七　連れて行かねえでどうするものか。おれが嗅ァだものを。

くら　善六さん、いゝかえ〳〵。

善六　ハテ、よしサ〳〵。連れて行きやァ此方とら商賣づく。天下の無え國ぢやァあるめえし、その覺悟で連れて行くがいゝ。

半七　それをうぬに習ふものか。脊中へひゞの切れるを怖がつて、附合ひがなるものか。元は武家からごろつきに、なり響いたる惡黨も、町家に住んで温なしく、商人ぶりと見せかけても、それぢやァ埓が茜足袋、水道の野晒し半七、異名を受けた兄さんだ。誰れだと思ふ、成田屋が聞いて呆れる。

　トのし〳〵前を通り、三勝の手を取り

サァ來や。

三勝　どこへ。

半七　どこへといふがあるものか。連れて行つて、久しぶりで女房にするワ。

　トこの時上手の中二階に、茜屋の母、以前のなりにて出て、三勝に死なうとして見せる。三勝思ひ入れあつて

三勝　そんな狂人の女房に、なる事は眞平御免。

半七　なんだ、をかしな事を云ふな。アヽ、酔つたな〳〵。
三勝　藝者だものを、酔はなくつてサ。お前、わたしを連れて行つて、女房にすると云ひなさんすが、女房は一人あるぢやアないかえ。
半七　どうしたと。
三勝　しかも時々金の無心、小遣ひ取りやら、頼もしいお内儀さんの、元木にまさる裏木なし。心あらば元々へ、返りたいとのこの文體。
ト以前助八が渡せし貫入れと文を出し
こんな氣まづい男なら、もうお斷わりでござんす。
ト投げ返す。半七取り
半七　オヽ、この文がどうしててめえの所に……イヤ、こりやア何だ、間違ひだ。何よ、ちつと譯のある事だ。これを見たら腹も立たうが、おれが悪い、あやまるよ。腹が立つなら、おれが所へ來て、どうでも云はッし。爰ぢやア今てめえの知つてゐる通り、云ひがゝりで、少し男の立たねえ始末だ。爰で腹を立つてくれちやア、ちつと間が悪い。
ト側に落ちてある本を取り

今の流行りの二上り潮來。「わたしが惡けりやあやまらう」……こんな役に立たねえ文は捨てゝしまつて

ト あたりへ件の貢入れを捨て

サア〳〵、歩べよ。

ト 手を取る。

三勝 イエ、否でござんす。一旦侍ひを嫌うて、お前に添うては見たなれど

ト 本をひろげ、思ひ入れあつて

この文句にもある通り、「貞女立つたり氣がねをしたり、人にやこけだと云はれたり」。うまらぬ者は女一人。思うて見れば、武士は武士だけ眞實な。それゆゑとんと思ひ切り、宅兵衞さんの方へ、行く心になつたわいなア。

半七 そんならわりやア……イヤ、そりやァ嘘だ〳〵。何か譯のある愛想づかし。芝居でいくらもする格だぜ。

三勝 ソレ、さういふお前が自惚れゆゑ、人に兎や角……サア、嘘でない證據には、主と今こゝで女房の約束。

宅兵　小びんながら、色男はおれだの。三勝にどんな足があらうが、そこがりやんこの當の前。コレ

ト本へ指をさし

「今年や南瓜の當り年」サ。

三勝　たとへどなたがどう云はうと

宅兵　おれが女房。時代に云はゞ侍ひの、今日から奥様。

半七　コレ、三勝、そりやァ地金か。

三勝　何しに嘘を……證據は腕の入れぼくろが

ト出して見せる。

半七　そんならそれまで

ト三勝はこなしあつて、宅兵衞の脇差しを投げ出し

三勝　腹が立つなら、それで／＼

ト柄の抜けかゝつた脇差しをわざと渡す

半七　うぬ、どうする。

ト刀を取り、立ちかゝるを、お六とめて

ろく　モシ〳〵、半七さん、尤もぢや、尤もぢやが、それは短氣でござんす。
半七　エヽ、お六さん、危ねえから、退きなせえ〳〵。
ろく　マア〳〵、待ちなさんせ〳〵。……コレ、三勝さん、そりやお前にも似合はぬぞえ。今まで外の藝者衆が、誰れと切れたの、出來たのと、風呂の噂を聞く度に、お前は何と云はしやんした。惚れた男を澤山さうに、よう思ひ切られた事と、笑ひなさんしたぢやござんせぬか。この本にある文句にも「人がどのやうに云はうとまゝよ、わしが目がねで惚れたもの」と、お前の作つたこの唄を、反故にしては、濟むまいがな〳〵。
はる　わたしも常から、仲を知つた半七さんの事。どうなる事やら三勝さん大きにお世話、おいておくれ。「否だよ〳〵藝者は否よ、地味ななりして主の側」。
三勝　ト本を讀みながら、宅兵衞に寄りかゝる。
半七　アレ、あんな事を吐かすわな。
ト又立ちかゝる。奥より助八、お通を連れて出て來り
助八　カウ〳〵、半七どの。お前、女と死合ふなら、この子の方を附けて死ぬがよい。親が無ければ、跡で里親が難儀になる。この子を其方へ受取るか、但し、この前からの里扶持の殘り一兩一分、

いま寄越すか。

半七　エヽ、それを愛で云ふ事か。明日やらう。

助八　コレサ〳〵、錢も無い癖に、明日やらうも氣が強い。いま女と死合ふではないか。それをどうして明日まで待たれるものか。いま寄越しなせえ、平常から大風に力味まはるが、金は無いか。エエ、しみッたれな男だ。

半七　なんだと。この野郎は

ト助八の胸ぐらを取る。

助八　アイタヽヽヽヽ。里扶持も寄越さずに、おれをどうするのだ、この野郎め。

トくらはせる。半七摑みかゝるを、善六、半七を捕へ

善六　先刻から默つてゐりやア、イケふざけた野郎だ。おれが頭をぶちこはして、女を連れて行くもすさまじい。連れて行きえやアしめえ。うぬは行く氣でも、女が不承知だ。自惚れた野郎でござらア。

ト突き倒す。おくら、半七の胸ぐらを捕へ

くら　いはゞ主人のわしを、よくいろ〳〵な惡態をついて、兄で候ふと證文書いて、また女房だの何の

と、どなたが何と云つても、これぱかりはわしの方が理屈だよ。おれが抱へたあの三勝、年季うちは此方の儘だよ。指でも附けて見やアがれ。

半七　うぬらア寄つてかゝつて

卜立ちかゝらうとする。お通、半七に取りついて

つう　父さま、怖いわいなう。

卜これにて半七、ヂツと思ひ入れ。

助八　サア、腹を立つなら里扶持の、金を寄越して、存分ぬかせ。

半七　サア、その金は

善六　ナニ、金があるものが。金と智慧は無え面サ。

助八　金が無けりやア、この餓鬼の、着物もおれが着せたのだ。裸にしてうぬが方へ。

卜お通を襦袢一つにして、着物を引つたくる。

つう　父さま、寒いわいなう。

卜半七に取り附く。三勝思ひ入れ、二階を見返り、ヂツとなる。半七口惜しき思ひ入れにて、お通を抱へ

半七　いゝわえ〳〵。べら坊め、ナニ寒い事があるものか。われも半七が子だ、吠えるな……エヽコレ、落ち目になつたを附け込んで、うぬら、よくむごい目にあはせたな。三勝、わりやア、この餓鬼が此ざまを見て、悲しくも何ともねえか。女の子は女に附く……コレ、小僧、てめえ寒くば、かゝアに温ためてもらへ。

ト　お通を突きやる。

つう　母さまいなう。

ト　三勝に取り附く。三勝こなしあつて

三勝　エヽモウこの子は。いつわたしが母さんだよ……子供に科はなけれども、出家が憎けりや袈裟まで、わたしや子は嫌ひぢやわいなア。

ト　むごく突きとばす。半七抱へて

半七　エヽ、邪慳な奴だなア。現在子にまで、うぬはマア

三勝　鬼とも蛇とも思はんせうが

ト　二階へ思ひ入れあつて

これが藝者馴れたるお庇。浮氣商賣いつとても、今日の樂しみ、明日の仇。色と藝者の三味線は、

新らしいのがなり次第。ばちがあたつて三の絲、切れる心になつたのも、末はどうがな絲卷きの、めぐる緣なら身の片附き。不實も浮氣もお互びに、人の事ぢやと目くじら立つて、身にも覺えのないやうに、あのマア、とんまな顏わいなア。

半七 默りやアがれ、とち女め。轉び合ひの色事とは、譯の違つた二人が仲。話しづくならさつぱりと倦きたら切れてやりもせう。大勢寄つた人中で、恥をかゝせる愛想づかし。子に引かされて癇癪の、蟲をこらえたこの場の始末。佛の顏も、コレ、三勝、さうした義理ぢやァあるめえが。

三勝 サア、それ故やつたその脇差し。サ、とつくり思案した上で、サア、切らしやんせ〳〵。「思ひ切らんせ木登りよさんせ、落ちて死んでもわしや知らぬ」。

ト件の本を顏に當て、讀みながら愁ひのこなし。

半七 うぬ、その口を

ト立ちかゝるを、宅兵衞、半七を引附けて

宅兵 野暮を云ふまい〳〵と、思つてゐたがこれからは、三勝はおれが女房。最前からなめ過ぎた小野郎め。薄穢ねえざまをして、身が目通りへ出るさへあるに、じたばたひろぐ慮外者。遊びの座敷で空々しい、鼻毛の伸びた大べら坊め。

ト半七を足蹴にする。

半七　もう料簡が

ト立ちかゝる。お通、半七に取りすがり

つう　父さま、怖いわいなう。

トお六側へ寄り

ろく　オヽ、尤もぢや。コレ。半七さん、この子可哀と思うてなら、口惜しいところも辛抱しなさんせ。
ほんにマアむごたらしい。寒からうに、わたしが前垂れなと

ト前垂れ取つてお通に着せる。

半七　アイ／＼、お忝うござりやす。エヽ、吠えるな／＼。……片ッ端、云ひ分のある奴等なれども、
何を云ふにも、この餓鬼が不便さゆゑ。お六さん、おらア口惜しい／＼。

ト男泣きに泣く。三勝思ひ入れ。お六、いろ／＼いたはり

ろく　尤もでござんす。ほんに／＼あんまりな。

ト三勝俯向き、くひしばる思ひ入れ。

助八　半七は泣くか。こいつは大笑ひだ。

善六　泣く筈だわな。色には愛想をつかされ、ほんの女房にやァ叩き出され、内は無し、錢は無し

長吉　智慧も無し、しだらも無し。

忠次　骨無し、皮無し、やくたい無し。

くら　此よしこのの文句の通り「主のやうなるとんまな馬鹿に、なんの惚れ手があるものぞ」。

長吉　「自惚れさんすなお前の身持ち、愛想つかすも無理ぢやない」。

忠次　「現在女房は勤めの身空、亭主やどてらでめくりひく」。

善六　「勤めさせては男が立たぬ、というて受け出す金は無し」。

助八　「色に逢ひたくば泥棒さんせ、首の無いのも粋なもの」。

皆々　ア、よしこの〳〵、ちげえねえ〳〵。

ト口々に囃す。半七口惜しき思ひ入れにて立ちかゝる。お通は半七に縋り、拜む。これにて半七ヂッとなつて

半七　いゝワ〳〵。怖い事はねえ。案じるな〳〵。どうもしやアしねえ。

トいろ〳〵すかし

カウ、助八どん、お通を此方へ丸裸で引取れば、こんたの方に、云ひ分はもう無えな。

助八　其方へ渡せば、云ひ分はもう無え。
半七　そんなら此方に殘りの勘定がある。
助八　エ。
半七　今おれをよく締めたな。うぬでもせめて
　　ト莨盆にて助八の頭をぶちこはす。助八「ワツ」と後へ倒れる。
皆々　とんだ事をしやアがる。
　　ト半七を捕へ、お通もろとも門口へ突き出し、戸をピツシヤリ締めて、中より押へる。
半七　コレ、三勝、もうこの上は向う面、色でも戀でもねえからは、大手を振つて歩くがいゝ。人の女房を引つたくつた、これが報いだ。元を糺せば三勝とは、主と親とに繋がれし、敵同士のその緣やら、とう〳〵その身も今宵の内。うぬ、安穩で
　　ト思ひ入れ。
つう　父さまいなう。
　　ト半七はお通を抱き、ヂツと顏を眺めて
半七　ア、子は三界の……覺えてゐろよ。

ト唄になり、半七、しほ／＼と向うへ入る。この時二階の茜屋娘、この様子を窺ひ、うなづいて障子を閉す。

くら　オヽ、三勝出かした。きついもの／＼。
宅兵　誠に本心、見えすき山／＼。
忠次　旦那、いつの間にか色男になつたね。
長吉　尾上菊五郎の通りだ。
宅兵　ナニサ、少つとばかり似てるのサ。
善六　時に、助八はどうした。氣を慥かに持たつせえ／＼。

ト助八を介抱して引き起す。

助八　ナニサ、些細な事サ。この位の罰はあたりさうなものだ。
善六　イヤ、お互ひにこの頭が
助八　はれまして結構な春でござります。
皆々　おきやァがれ。
助八　オヤ／＼、あのべら坊め、差し附けぬ脇差しゆゑ、忘れて行きやァがつた。

くら　ナニ、それは旦那のだよ。
三勝　折角渡したその一腰
宅兵　ヤ。
三勝　ほんにマアうつそりな
宅兵　イヤ、これから今夜は木母寺の、半右衛門がところで、夜明しの大浮きと洒落やせう。
くら　それがようござります。直ぐに堀から屋根船で、お春も一緒に
はる　わたしはどうも今夜の様子
ろく　およし〳〵。わたしと一緒に町へお歸り。
くら　ムウ、いらざるお世話。併し、否ならおよしな。
皆々　私しどもはお跡から
宅兵　お倉と二人、船に乗つて、待つてゐるによ。
善六　今夜はたつぷり大手をひろげ
助八　渡りがあらば押して推參。
くら　お前の働き、お禮は胸に。

忠次　祝ひに一つ〆めませう。
皆々　ヨイ〳〵。
くら　サア、お出でなされませ。
　　ト騷ぎ唄になり、皆々わや〳〵云うて奥へ入る。三勝お春残り、こなしあつて
三勝　半七さん、堪忍して下さんせ〳〵。
　　ト泣き伏す。
はる　そんならお前は
三勝　あのお通にも今宵が別れ。
はる　コレ、三勝さん
三勝　せめて一筆
　　ト思はずお春を見て
　と云ふのは嘘だよ。
はる　エ。
三勝　サア、來な。

ト唄になり、三勝ツイと奥へ入る。お春も續いて入る。引違へて奥より善右衛門出て、來り

善右　宅兵衛様は三勝を連れて、木母寺へ行くとの事。おれもどうぞ小紫を連れて、跡から仕掛けようわえ。

トあたりを見て、半七が捨てたる紙莨入れを拾ひ

なんだ、莨入れが落ちてあるが。

ト中より件の文を出し

なんだ、「お園どのへ、半七。」……ハヽア、あのごろつきの半七めが、先の女房の所へやる文だな。エヽ、嫌らしい。ドレ／＼、讀んで見てやらう。なんだ。「わざ／＼申し入れ候ふ。よんどころなき世の中にて、飽かぬ仲を引き別れ、又ぞろ斯様な事申し遣はし候うては、お下げすみのほど恥かしく候へども、我れら不料簡にて今の身の上、悔むに詮方なく、いろ／＼の附き合ひ、又は友達の義理、その外引くに引かれぬ男づくにて、金子入用に候ふ間、別れしそもじ様のところへ無心申し入れ候ふこと、よく／＼の仕儀とお察し、少々なりとも御都合なし下さるべく候ふ。又々承り候へば、只今では長九郎とやらいふ男が入夫に參り候ふよし、小糠三合の譬へ、よく／＼思ひ合うた仲と存じられ候ふ。あまり／＼聟を可愛がり過ぎて、腮で蠅を追はせぬやうになされ

かし。この間よそにてちよつと見受け候へば、隨分よい男、顏中が目の玉かと存じ候ふ。いづれ入り聟といふものは、間拔けじみた者にて候ふ。元木にまさる裏木なしとお心あらば、元のやうになりたきものにて御座候ふ。いづれ〳〵聟の長九郎はお拂ひ箱にて、我れらの願み、御都合下さるべく候ふ。めでたくかしこ」。……ハヽア、さても〳〵聟の事を惡く書いたワ。よし〳〵、この手紙をあの長九郎に見せ、思ひ入れしやくつて、喧嘩をさせ、高見で見物。こいつはよい慰みだわえ。

ト懷へ入れ

イヤ、小紫が來る間、爰に待つてもゐられめえ。オヽ、あるく〳〵。ちつと嫌味たが、その内ちよつと口中の匂ひよけで

ト懷より楊枝齒磨きを出し

なんでも身綺麗に、思ひ入れ掃除をしあげて。併しまだ、どうやら口が臭いやうだ。

ト齒磨きを遣うて、いろ〳〵あるべし。本釣り鐘、誂への合ひ方になり、向うより權三、頰かむり、尻からげにて出て來り

權三　今鳴る鐘は慥かに八つ。その音も霞む權八が、命の寂滅、無常の鐘。思へはこれまで由なき義理

立て。討ち遲れたる親の敵。暫しも不孝な身の云ひ譯。今宵ぞ本望。おのれ權八。

ト思ひ入れあつて舞臺へ來かゝる。この時下座の口より夜廻り、提灯を提げて、拍子木を打ちながら出て來り、權三を見て怪しむ。權三は顏にて、門口の戸を明けろと指圖する。夜廻りは慄うてゐる。この時善右衞門そこらを片附けて

權三捕へて、ちよつと囁く。夜廻り呑み込んで、門口を明けて、一散に逃げて向うへ入る。この時善

善右　オイ〳〵、誰れだ〳〵。

ト門口へ出ると、權三一太刀に善右衞門に切り附ける。善右衞門「アツ」というて駈け出すを、後よりポンと切り倒す。この時上手の二階の障子を明け、扇吉手燭を持ち、小紫の衣裳を着たる勝山の手を取つて出て來り

扇吉　サア〳〵、おいらんえ。爰に待つてお出でなさると、今にわしが彼の人に。小紫さん、必ず待つてお出でなされませ。

ト探り〳〵奧へ入る。權三これを聞き、さてはトいふ心にて頷づき、探り〳〵二階へ忍び、勝山を探り見て、拔打ちにポンと首を打落し、あたりを尋ぬる心にて

權三　ヤヽ、天國所持と思ひの外

ト思ひ入れ。この時奥にて

甚兵　アイ〳〵、只今参ります。

トこの聲を聞き、權三恟りして、勝山が首を提げ、拔き身を捨て、うそ〳〵二階より下りて來り、灯にて首を見る心にて側へ寄る。甚兵衞出て來り

ヤア、わりや權三だな。人殺し。

ト聲を立てる。これにて權三、甚兵衞が提げたる行燈を切り下げる。

ワア、人殺しだ。

トこの聲を聞き、權三是非なく甚兵衞を切る。これより「人殺し〳〵」の聲。拍子木の音にて、若い者大勢、棒を持ち、あちこち入り亂れる。此うち權三、柴垣の蔭に隱れてゐる。皆々、わや〳〵云うて下座と向うへ入る。この人數のうち一人、弓張り提灯を落しゆく。權三この提灯の灯にて、首を改めんとする後より、長吉忠次出て

二人　人殺し。

トかゝるゆゑ、是非なく立廻りにて、兩人を切り倒す。これにて又灯消える。この前より後へ善六窺ひ出て、慄へながら聲の立たぬ思ひ入れ。權三、善六の襟髮を押へ、「この提灯へ灯をつけて來い」トい

ふ仕方。善六、慄へ〳〵提灯を持ち、奥へ行かうとする、權三思案して、イヤ〳〵といふ心にて、後より善六を一かせ切り、あたりを窺ふ。時の鐘にて、大やうにこの道具廻る。

本舞臺、一面の二階づくりの外側。櫺子、庇の下九尺の格子の間、前側駒寄せ。上の方、九尺の間、黒塀見越しの松、植込みよろしく、すべて三浦屋の別莊裏手の道具。時の鐘にて道具納まる。

ト直ぐバタ〳〵になり、下座よりお春お六お辰若い者大勢逃げて來り

ろく　きつとこんな事であらうと思つた。

はる　怪我せぬうちに、逃げようぢやござんせぬか。

たつ　わたしや物が云はれぬわいなア。

ろく　これを思へば、先刻の半七さんも、此やうな事にならねばよいが。

はる　わたしもそれが苦勞ぢやわいな。

ト ばた〳〵になり、下座より扇吉、鉢卷き、尻からげにて、三浦屋と書きし弓張り提灯をつけて出て來る

皆々　そりや又來た。

ト あわてる。

扇吉　おれだよ〳〵。

皆々　扇吉さんかえ。
扇吉　マア〳〵、お前達に怪我が無くつて、めでたい〳〵。
ろく　扇吉さん、誰れも怪我は無かつたかえ。
扇吉　どうだか、てんやわんやでさつぱり解らぬ。おかみさんは癪を起し、おれは本店へ知らせて、その上組合ひの衆を呼びに行つた。みんなも怪我せぬやうに、早く逃げるがいゝ。
ろく　わたしが見た時は、甚兵衛どんが切られた樣子。
扇吉　いゝ氣味だ。あいつらは殺されても構はねえ。サア〳〵、歩びなせえ〳〵。

ト皆々、わや〳〵云うて向うへ入る。時の鐘、誂への合ひ方になり、二階の櫺子をメリ〳〵と切り破り、權三、拔き刀、女の切り首を携へ、上手の黒塀を切り破り、小柴の權八、女の着物を凛々しく端折り、件の白鞘を持ち出る。下手の格子の間を打ちこはし、丹助、そぼろなる襤褸のなり、頰かむりにて、茜屋母の衣裳を抱へ、出刃庖丁を持ち、三人一時に出て見得。この時空へ月出る。權三は首を見る。權八は白鞘の心を見て

權三　親の敵の權八と、思ひの外に、こりやコレ慥か
權八　ヤヽ、天國ならぬ、こりや似せ物。

丹助　そんならそれが

權三
權八　思へば無駄事。

ト權八は白鞘を、何心なく捨つる心にて、丹助の前へ抛り出す。丹助悄り飛び退く。權三は刀を拭ふ
三人一時に、途端に木の頭。

丹助　オヤ、危ない事。

ト件の白鞘を拾ふ。權三は下を見下ろす。權八はあたりを窺ふ。キザミにて拍子
迷ひ子の鳴り物にてツナギ、引ッ返す。

幕

本舞臺、向う一面の打抜き今戸橋、金波樓、聖天山など遠見の書割り。濱手摺り。舞臺眞中、芦の茂りたる中の洲。下の方へ寄せて誂への屋根船。すべて山谷堀の洲のかゝり。この屋根の上に船頭一人四布蒲團を冠り寢てゐる。船の中に宅兵衞お倉、酒飲んでゐる。三勝は俯向き、ふさぎゐる。流行り唄にて幕明く。

宅兵　あいつらは、もう來さうなものだ。

くら　イエ／＼、來ない方がようござりまする。この船の中で三勝と、しつぽり濡れる水馴れ棹とは、

どうでございます。

宅兵　イカサマ、色にはなまじ連れは邪魔。コレ、三勝、大ふさぎだな。どうでもあの半七の間抜けが事を、思ひ切られぬか。

くら　まだあんな奴に未練が殘つてゐるのか。

三勝　オヽエ、なんの。一旦愛想づかしをした男、未練が殘る位ゐなら、別れやせぬわいなア。モシ、宅兵衞さん、これからは變らぬ夫婦、必ず見捨てゝおくれでないよ

宅兵　アヽ、見捨てゝよいものか。斯う打解ける上からは、其方の望みの脇差しな

三勝　ほんまに下さんすか。

くら　女の癖に、味な物を欲しがる其方。これにはなんぞ

三勝　サア、その譯は

宅兵　譯を云やれ〳〵。

ト切なき思ひ入れあつて

三勝　サア、譯は寢てから話さうわいなア。

ト宅兵衞に寄り添ふ。

くら　そんならわたしは舳へ出て

三勝　この脇差しは其方の方へ。

ト　お倉は舳の方へ出る。三勝は脇差しを出して置く。

宅兵　オイ、船衆、そろ〳〵出して下せえ。

くら　上手の方だよ。

ト屋根の上の船頭、蒲團を取る。半七にて、そろ〳〵下りて、三勝の置いた脇差しを取り

半七　うぬ、三勝め。

トこれにて宅兵衞悔り。

宅兵　ヤア、半七か。

ト立ち出て捕へるを振り切り、宅兵衞が川の中へ切り落す。これにて雷の音、雨車。直ぐに屋根の内へ入り、三勝を捕へる。

三勝　半七さん、たつた一言

ト云ふを、かまはず一かせ切る。

くら　ヤア、人殺し。

ト云ふを及び腰にお倉な川の中へ切り込む。これにて屋根毀れて、三勝書置きを差し附ける。半七白刃を振り上げ、見得。雷の音、誂への鳴り物になり、三勝洲の上へ逃げ上がる。半七續いて追ひかけ三勝をむごく切り殺す。この立廻りのうち、三勝の書置き、半七の持ちし脇差しにまとひ附きしを、その儘とどめを刺し

半七　ヤイ、畜生あまめ、覺えたか／＼。

トさん／＼に切り

人を殺したこの半七、爰で直ぐに死なうとは思へども、うぬと心中したと云はれては、いま／＼しいから、所を變へて……さりながら、おれが死んだらお通は孤し兒。せめてどこぞへ賴んだ上

トよろしく思ひ入れ。この時洲の芦間へ船のみよし見える。半七は書置きのまとひし脇差しを持つたまゝ、下手の船に乘る。芦間の船、だん／＼漕ぎ附け、半分ほど出る。この小舟に茜足袋屋の長九郎乘りゐて、あたりを見て

長九　時ならぬ雷で、づぶ濡れに濡れた……オイ、船公、待たッし。洲へ乘ッ掛けたぜ。ドレ、おれが突き出してやらう。

ト洲へ飛び上がり、船を突き出さうとして、三勝の死骸を見附け

ヤア、こりやア人が切られて

ト半七花道へ棹をさしかゝる。此もやひを捕へ

慥かに怪しい

ト半七持つたる脇差しを書置きの附いたまゝ打ち附ける。これにて長九郎の持ちしもやひ綱切れて、撞と座る。これを木の頭。長九郎は件の二品を窺ひ見る。キザミにて、よろしく拍子　幕

幕の外、半七棹をさし、騒ぎ唄にて向うへ逝がれ入る。あとシヤギリ。

第二番目　三幕目

岩井町茜足袋屋の場
同百足煙草屋の場

役名――半七女房、お園。女順禮、お勝。半七娘、お通。權八女房、八重梅。笹野權三。茜足袋屋の長九郎。質屋、唐犬權兵衛實ハ有竹丹助。本庄下部、助市。茜屋平左衞門。岩淵久内。役人、藤馬。茜屋母、おかや。野晒し半七。小紫實ハ白井權八。

本舞臺、三間の間、二重舞臺、正面暖簾口、上手に腰障子。下の方足袋反物品々の書割り、軒より

柿に三升つなぎの暖簾。足袋屋の看板。門口に「四ッ谷千葉丸くすり取次所」といふ誂への仮板掛けあり。舞臺本疊。上の方下座に誂への萩垣。下の方路地口を取り附け、よき所に好みの衝立して すべて岩井町、茜足袋屋の體。幕の内よりお園、世話女房の拵へ、母おかやと前垂れがけにて 足袋を縫うてゐる。下女おせん、手間取りの才助、兩人差向ひ、石の上にて木綿を打つてゐる。門の外にお勝・笈摺、革籠を背負ひし女順禮の拵へにて、報謝乞うてゐる。初午の鳴り物にて幕明く。

才助　コレサ、お仙どの、もうちつと身にしみて打たないか。

せん　それぢやというて、わたしや手が痛うて、コレ、見やしやれ、此やうに豆が

才助　成る程、役に立たない手だぞ。併しそいつは痛からう。大きな豆だ。……一イ二ウ三イ。持ち前の豆を入れて。

　トちよつと戯れる。

せん　エヽモウ、何をするぞいなア。旦那さんに云ひ附けるぞえ。

かつ　ハイ〳〵、御報謝お願ひ申しまする。

　ト思ひ入れあつて

かや　コレ〳〵、仙や、表に報謝せうではないか。

せん　ハイ〳〵。

ト錢を持ち行き

かつ　ハイ〳〵、これは有り難うござりまする。モシ、御新造樣、お袋樣、有り難うござりまする。

サア、進ぜませう。

その　あれ〳〵。あれ御覽じませ。爪はづれも尋常な女中でござんすが、手の内乞ふとは、氣の毒な事でござんすな。

かや　ほんにマア、まだ若い女子の順禮するとは、よく〳〵の事であらう。其方、連合ひや子供はござらぬかいの。

かつ　ござりまするが、此やうな恥かしい苦勞いたしまするわいな。

かや　ヤレ〳〵、それは氣の毒な。コレ、時分なり、茶漬でもまゐつて行かしやらぬか。

かつ　御深切に有り難うござりまするが、まだ欲しうもござりませぬ。ハイ〳〵、これは御報謝にあづかりましてござりまする。南無阿彌陀佛々々々々々々。

ト叮嚀に挨拶して、路地の中へ入る。

才助　モシ、あんな順禮に甘い詞を掛けると、たび〳〵來てうるさいものでござりまするぞえ。

せん　また其やうな邪慳な事云うて、旦那樣に叱られうと思うて。

才助　オット、あやまり。ほんに旦那といへば、長九郎樣に、今朝會所から呼びに來ましたが、何の用でござりましたえ。

かや　あの養子息子の長九郎を、會所から呼びに來た樣子、お園、案じる事ではあるまいかいの。

その　さればでござんす。この頃世間に、ひよんな噂もあり……イエ〳〵、何も案じる事ではござんすまい。どこぞへ道寄りでもしてゐやしやんすやら。もう歸りなさんせばよいに。コレ、仙、茶でも沸かしておきやいの。

せん　ハイ〳〵。

ト七輪の下をあふぐ。

才助　アヽ、又おかみさんが燒き餅だな。そこで茶を沸かさせて、燒き餅を食はうといふ

せん　エヽ、また阿房な事云はしやんすな。

才助　よく叱るお屋敷だ。ほんに、此やうな善いかみさんを捨てゝ、家出をさしつた内の息子どの、半七樣は、餘ッほどな氣紛れ者だ。

かや　イヤ、大事ない。あの家出しやつた半七めは、わしと親仁どのゝ仲の實子なれど、不所存ゆゑに

勘當。その跡へ養子して、其方に娶合せた今の長九郎。それは〳〵實體な生れ。わしや生みの子の半七より、今では長九郎がいとしいわいの。

せん　ほんに、あの若旦那様はお仕合せ。爰のお内の手間取りから、すぐに跡取りにおなりなされますといふは。

かや　それといふが、連合ひ平左衞門どの、以前は白井の屋敷に勤めてゐられた時の、古朋輩のよしみゆゑ。お家退轉の後、あの長九郎がこの家へ賴つて來て、習ふともなし、縫ふともなしに、一體が器用な生れゆゑ、足袋職も覺えて、今ではわしら夫婦が、大事の〳〵かゝり息子ぢやわいの。

才助　成る程、それも一つは長九郎樣の運もよいのサ。おれもこれから商賣を精出して、あのお仙どのを女房にして、夜晝稼ぐつもりだが、おかみさん、仲人をお賴み申しやす。

その　ホヽヽヽヽ。そりやわしが吞み込んでゐるわいの。ほんに仙とは、丁度よい夫婦ぢやの。

せん　アレ、又おかみさんが、あのやうな惡口を。わたしやあのやうな人は嫌ひでござりまする。

才助　これは御挨拶。

かや　お仙、もう夕飯にしようかいの。

せん　ハイ、そんならお釜の下を焚き附けませう。

その　才助ぢ、おまんまにしやいなう。

才助　モシ、まだ夕飯には早うござりやす。

かや　そんなら、もう片々縫ひませうか。

ト　かすめたる屋體囃子になり、馬淵久內、切繼ぎの小袖、一本差し、さんすいなるこしらへにて、虚無僧の天蓋尺八を風呂敷に包み、出で來る。門口へ來り

久內　頼みませう〱。

ト思ひ入れ。才助この內矢張り砧を打つてゐて

才助　それ見た事か。先刻の女順禮が又來ましたワ。エヽ、手が塞がつてゐる。通つた〱。

久內　ナニ、どうしたと。

ト腹を立ち、ヌツと內へ入る。

才助　この物貰ひめが、イケふざけた

ト立ちかゝるを、おかや見附けて

かや　これは才助、どうしたものぢや。あなたはお園の

才助　ほんに、親御様でござりやすね。

久内　コレ、若い衆、よくもおれを乞食と見違へて下された。忝い。

ト皮肉を云ふ。

かや　ほんに、粗相ツかしいも程のある。畢竟あなたなりやこそよけれ

久内　イヽヤ、乞食と履き違へられてはよくない。コレ、若イ衆

ト立ちかゝるを、お園とめて

その　モシ、父さん、そりやほんの間違ひでござんす。もうよい加減にしやしやんせ。

才助　おかみさん、そこをどうぞよろしく。イヤ、大しくじり〳〵。

トこそ〳〵と逃げて入る。

かや　ほんに若い者と申すものは……あなた、ようお出でなされました。コレ、仙や、お茶を上げぬか
いの。

せん　ハイ〳〵。お茶お上がりなされませ。

ト久内に茶を出す。一口飲んで

久内　アヽ、ぬるい茶だ。成る程、乞食と見違へる程あつて、イヤ、結構なお取扱ひだ。

かや　コレ、お煮花でも拵へて上げやいの。

ト お園思ひ入れあつて

その　イエモウ、お構ひなされて下さりまするな。もし、父さん、お前、宵がけから其やうな事云はしやんして、わたしや舅御様へ、大抵氣の毒な事ぢやござんせぬ。そしてマア、日暮れ方に其やうな物持つて、何の用でござんした。

久内　借りようと思つて

その　そりや何をえ。

久内　金を。

久内　借りる氣でも來ないが、乞食と見立てられたによつて、合力受けぬも大きな損と、今フッと出來心で、借りる氣になつたのだ。コレ、おいやけの身共が、大事の娘をこなさんに遣つたからには、親仁がこんな態でゐるのを、まんざら見てもゐられまい。なんとさうぢやァござるまいか。

その　エ。

かや　そりやモウ、仰しやらいでも、お前の娘の此お園を、嫁におもらひ申してから、それは／＼孝行にしてくれまして、何一つ云ひ分の無い女子。それに免じましても、どうなと致して上げませいでかいなア。併し今は連合ひも、伜の長九郎も宿には居りませぬゆゑ、戻りましたなら、相談も致

しまして

その　イエ〳〵、母さん、決して構うて下さりますな……モシ、父さん、わたしが身にも少つとはなつて下さんせ。お前の無心々々も、二度や三度の事かいな。始めの内は内證で、わたしが着類、頭の物、貸して上げても三日にあげず、又も無心に來やしやんすゆゑ、さう〳〵わたしが自由にもならぬ事ゆゑ、こちの人、舅樣にもお願ひ申し、これまで貢いで上げたのは幾度やら。その度々に相應に、心附けして下さんす程、わたしやどのやうに辛からうと思ひなさんす。娘不便と思うてなら、もう〳〵其やうな事、必ず云うて下さんすな、賴みますわいなア。

ト思ひ入れ。此うち久内、空うそぶきゐて、莨のまうとして

久内　コレ、女中、莨の火が無いわえ。とんだひつてんな講釋場だ。娘、それでモウ前座は讀んでしまつたのか。ハヽヽヽヽ。

トお仙、火を入れて來り、こなしあつて奥へ入る。

その　お前は、慾の半分でも、恩愛といふ事を知つて下さんせ。

久内　されば よ。その恩愛を知つてゐればこそ、今日無心に來たのだ。おれも斯うしてゐても、思はしくないによつて、旅稼ぎの修行にでも出ようと思つて、コレ、天蓋尺八も、この通りに持つて、

可愛いゝ娘や聟どのへ、暇乞ひの無心。コレ、おかやどの、娘ゝ今度ばかりは快く叶へてくれるがよい。爰の内も、とんだめでたい事が出來て來たぞえ。

かや　ホヽヽヽヽ。久内樣の何云はしやるやら。併し、めでたい事とは耳寄りな。そりや何でござりますえ。

久内　さればサ。めでたいといふて外でもござらぬ。勘當されたあの半七が、山谷堀で、三勝とやらいふ藝者を殺したとの噂。コレ、こなさん達は知らないのか。

その　エヽ、そりやマァほんまの事でござんすか。道理こそ、先刻も人の

かや　噂にチラリと母が耳へも。コレ、久内どの、勘當しても實の子の半七、其やうな大それた事したのが、なんでめでたいと云はつしやるのぢや。

ト少しムッとしたる思ひ入れ。

久内　さればサ。勘當せずに置いたなら、兩親の首へも繩の附くのは知れてある。久離切つたりやこそ、その難もマァ遁がれやうといふもの。なんと此やうなめでたい事があらうか。その祝ひだと思つて、貸してくれてもよささうなものだな。

その　そんなら、いよ〳〵半七さんは

久内　どうで、ろくな死にやうはせまいよ。

ト　お園おかや顔見合せ、案じる思ひ入れ。合ひ方、かすめたる聖天の鳴り物になり、向うより長九郎、羽織着流し、手を組み、思案の體にて出て來り、門口にて内を窺うてゐる。

かや　勘當したれど我が子の半七。朝夕、箸の上げ下ろしにも、どうか斯うかと案じるもの。好からぬ噂を聞くにつけ

その　わたしやつかへが起つたわいなア。

久内　なんの案じる事があるものか。以前はわれが夫にもしろ、今は縁なきあの半七。マア、それは格別、サア、どうだ、娘、離縁した亭主の事を案じる隙で、親の云ふ事きいてくれろ。エヽ、こゝな不孝者めが。

その　わたしや、そこどころではござんせんわいな。

久内　おらア大きにそこどころだ。サア、親の困窮を救つてくれぬやりばねへ、てめえをくれてはおかれねえ。娘、一緒に來い。

ト　お園が手を取る。

かや　コレ、久内どの、娘を連れて、どこへ行かつしやるのぢや。

久内　されば、吉原にしようか、深川にしようか。

その　モシ、なんでわたしを其やうな所へ

久内　叩き賣つて、この親が食ひ方にするのだ。否でも應でも連れて行くワ。

ト　おかや、捨ぜりふにて留めるを、久内はお園の手を取つて引ッ立て、行きにかゝる。この時長九郎、ツカ／＼と内へ入り、附け廻して、久内を取つて投げのけ、すぐに引起していたはることなしにて

長九　これは舅御様、どうなされました。お危なうござります。

久内　アイタヽヽヽ。コレ、貴様は二度目の聟の長九郎だな。なぜ舅を投げたのだ。

ト　顔をしかめて思ひ入れ。

長九　どう致しまして、聟のわたしが舅御様を投げて、よいものでござりまするか。

久内　それでもたつた今。アイタヽヽヽ。

ト　腰をさすつて思ひ入れ。

長九　それは斯うでござります。お年寄りの癖に、何か娘を捕へて、わつぱさつぱとなされまするゆゑ危ないと存じまして、かばひまするはずみに。……ようござりまする。その痛いところへ、膏藥を貼つて上げませう。

久内 否だ〳〵、膏藥ぐらゐで癒るものか。アイタヽヽヽヽ。

長九 ハテ、さう云はつしやらずと、この膏藥を貼つて見さつしやりませ。

ト云ひながら紙入れより小判一枚出す。

サア、これがお前の痛いところには、妙藥でござりませうが。

ト差出す。久内見て、ニツコリと笑ひながら

久内 成る程、こりやア妙藥だ。聟どの、こなたは耆婆扁雀より名醫だわえ。併し、一枚では、この痛いところが全快すればよいが。

長九 ハテ、また貼り替へて上げませう。マア、二三日その膏藥を、貼つて置かつしやりませ。

久内 ナニ、また貼り替へて下さるとか。それは親切、忝い〳〵。どりや〳〵、そんなら、歸りませう歸りませう。

その 父さん、もう歸りなさんすかえ。

久内 歸つて惡くば、もつと居ようか。

その ようお出でなされました。

久内 エヽ、其やうに追ひ出す事はない。又ぢきに來るぞよ。それまでこの天蓋と尺八を預かつて置い

てくれい。……イヤ、聟どの、こなたは奇特な人だ。コレ、云はねばならぬ事がござるわえ。湯[illegible]して夜歩きなぞをさつしやるな。この間三浦屋の寮で、大勢の人殺し。その殺し手は[illegible]ひよつとこなたを、そんな者の卷添へにでもあはせてはならぬ。コレ、必ず夜歩きをさつしやるな。

ト此やうな事を云ひながら、門口へ出て窺つてゐる。

かや　コレ、長九郎、最前から案じてゐたが、會所からこなたを呼びにおこしたのは

その　モシ、何の用でござんしたえ。

長九　昨夜山谷の屋根船で

その　エ。

長九　イヤ、別して案じる程の事でもござりませぬ。

かや　さうかいの。それなれば。母も安堵しました。

長九　ほんに、安堵といへば、もう日が暮れた。見世の灯の支度を

その　云ひ附けて置きませうか。

かや　どりや、わしは佛樣の、お御灯の支度しませう。

久内　そんなら娘、また來るぞよ。

その　アレ、まだ居やしやんすかいの。

久内　イヤ、これは御挨拶。

ト　かすめたる屋體囃子になり、お園おかやは奥へ、久内は向うへ行きさうにして、思ひ入れして引つ返し、路地の內へ入る。長九郎一人殘り、こなしあつて

長九　コレ、荷主がござつた。才助々々、お茶を持つて來ないか。

ト　此やうな捨ぜりふを云ひながら、內外を見廻し、思ひ入れ。合ひ方になる。舞臺眞中の本疊を上げて

モシ、權三樣、さぞお氣詰まりでござりませう。大恩寺前の人殺しも

ト　前幕の莨入れを出し

この莨入れの中にある書き物にて、この家の悴半七どのに疑ひかゝり、あなたの御詮議は少し薄らぎましたれば、折を見合せこの所を。……それには幸ひ、この天蓋、尺八。これで人目を

ト　久內が預けて行きし天蓋尺八を緣の下へ入れ、思ひ入れあつて

申さば古主の敵たる、あなたをお隱まひするも、どうぞ若旦那權八樣と、尋常の勝負をなされました上、討ち討たるゝは互ひの御運、何とぞ古主の權八樣に、武士道が立てさせたいわたしが願ひ

こりや巾さすとも、あなたの爲にも養父の仇なる權八樣。必ずお命全うなされて

　ト思ひ入れあつて

さぞ下冷えが致しませうが、これで餘寒を

　トそこにある火鉢を床へ入れ

モシ、御飯は後ほど上げまするぞえ。

　ト疊を元のやうに直し、思ひ入れあつて

古主の敵を隱まひ置くも、矢ツ張り古主へ忠義の爲。大恩寺前の人殺しも、この莨入れの證據ある上は、雪を墨とも爭つて、權三どのを救ふまいものでもなけれど、さある時には大恩ある、この家の子息、半七どの、科に科を重ねる道理。こりやアどの道、思案ものぢやわえ。

　ト唄へかすめて聖天の鳴り物。向うより源次、ちんこ切りの拵へ、莨の俵を一俵かつぎ、泣いてゐるお通の手を引き、跡より金毘羅參りの〇、△、白の四天、股引き、誂への箱を背負ひ、わや〳〵云ひながら出る　ズツと下がつて半七、尻端折り、頰かむりにて　窺ひ〳〵出て來り、花道にて、ためらひゐる。

源次　コレ、何も泣く事はないぞ。伯父さんが、いま内へ連れて行つてやるワ。

金○　そんなに泣くものぢやアない。ア、、いゝ子だぞ。
金△　そんなら、その茜屋といふは、向うの内かね。
金○　アレあの内よ。コレ、もうお前の内はそこだわな。
つう　イエ〳〵、あそこではない。父さまの所へ、連れていて下され。
　　ト半七思ひ入れ。
源次　ナニ、あそこではない。成る程、おれも平常あの門口を通るが、こんな子は見掛けなんだが
金○　それでも迷子札に、しつかりと書いてあるから
金△　さうサ。マア、連れて行つて見さつしやるがよい。わしらも一緒に行きませう。
源次　マア〳〵、連れて行つて見ようかね。
　　ト三人はお通を連れ、門口へ来り
　　モシ、、どなたでもお目にかゝりたうございます。
金○　モシ、、お頼み申します〳〵。
　　ト奥よりおかや、お園出て
かや　コレお園、表へ誰れやらござつたぞえ。

その　モシ、どなたでござります。此方へお入りなされませ。

金〇　モシ、爰の娘御が迷子になつてゐたから

金ム　わしらが見附けて連れて來ました。サア〳〵、お渡し申します。

ト云ひながら皆々内へ入る。金毘羅參り兩人は、内の樣子を、キョロ〳〵見廻す思ひ入れ。

その　そりやモシ、門違ひでござんせう。私しどもの内に女子の子は

源次　わしも無いとは思ひましたが、コレ、見さつしやい。この迷子札に、「岩井町茜足袋屋平左衛門孫娘お通」と書いてござるから、連れて來ました。

かや　そりや、似た名はいくらもあるもの。こちの内に、迷子になりさうな孫というては

長九　お袋樣、お待ちなされませ。

ト舞臺へ下りて來て

何にしても、合點のゆかぬ事ぢやが、お前方の連れてござつた娘といふは

源次　この子でござりますよ。

長九　マア、ちよつと迷子札を見せて下さりませ。

トお通の迷子札を、よく〳〵見て

成る程、こりやア「岩井町茜足袋屋平左衛門孫娘お通」と書いてある上に、手跡も覺えの

さては違はぬ
ト以前の直入れの文を出し、ちよつと手跡を引合せて見る事あつて

その　エ。

長九　コレ、見やれお園。この子は誰れにやら、似てゞはないか。
トこれにてお園、お通の顏を、つく〴〵見て

その　成る程、さう云はしやんすりや、淸やかなこの目許といひ、口許まで

かや　似たとは誰れに
トこの時半七、拔き足にて、窺ひ〳〵門口へ來り、戶をソツと明け、思はず長九郎と顏見合せ、半七は外よりシヤンと戶を閉める。

長九　ムウ。すりや、いよ〳〵この子は

かや　誰れに似てぢや。

長九　この子の親に。

かや　ムウ、この子の親とは

長九　モシ、私しでござります。
かや　ホヽヽヽ、長九郎とした事が、あぢやらも程のあるもの。其方夫婦がその仲に、子といふものは
そのござりませねど……ござりますわいな。
かや　ヤ、なんと云やる。
ト思ひ入れ。
長九　これはお前方、大きにお世話でござりました。
金〇　そんなら、この子は爰の内の
長九　アイ、娘でござります。
源次　ヤレ〳〵、それでわしも安堵しました。
長九　コレ、お園、折角娘を連れて來て下されたお方へ、ちよつと酒でも出しやれ。
源次　イヤ〳〵、構はつしやるな。わしはこの裏の新道の、莨屋の内へ、毎日〳〵來ますから、又ゆるりと御馳走になりませう。
金△　ハヽア、そんなら百足莨屋といふは
金〇　この裏新道かね。

源次 わしやァそこの内へ、今、荷を持つて行くのだ。

金△ わしらもその莨屋へ用があつて行くのだが、丁度よい。

金○ 一緒に行きませう。左樣なら御免なされませ。

ト兩人暖簾口の方へ行くを

長九 モシ〳〵、お前方はどこへ。

兩人 この裏だといふ莨屋へ。

かや ても不遠慮な。商人の見世を

金⌒ 通り拔けになりませぬかな。これは不調法しました。

金△ でも、茜足袋屋といふからは、よもや、あの半七が

かや エ、何ぢやえ。

金○ モシ、そんなら爰はアノ、半七どのとやらの内かね。

ト兩人方々を、ウソ〳〵見廻す。

その 何ぢややら、アタ氣味の惡い。モシ、莨屋なら、外の路地から行かしやんせ。

源次 コレ、おれと一緒に行くがいゝわな。モシ、氣を附けて行かつしやるがよい。初午時分は、えて

迷子になるものでござりますよ。

金八　サア、そんなら爰はアノ、半七どのゝ内だね。

ト猶もウソ／＼見廻す。

源次　オイ／＼。そんなら娘御は、しつかりと渡しましたぞや。

長九　これは御深切に忝なうござります。

トかすめたる屋體囃子になり、三人路地のうちへ入る。此うち半七はズッと花道の方へ引下がつて、見ひゐる。おかや、こなしあつて、

かや　コレ、長九郎、母はさつぱり合點がゆかぬ。非人の胤ぢややら、何者の子ぢややら、知れもせぬものを、こちの娘ぢやといふて

その　イエ／＼、なんのその子が非人の胤でござりませう。その子を産んだ親御といふも、大概それとわたしも推量。長九郎どの、ようマアお前は、こちの内の子ぢやと云うて下さんした。モシ、お袋様こりや是非ともわたしが娘に貰うて、温なしう育てねばなりませぬ。あなたの爲にも現在初孫。

かや　そりや云はいでも、其方衆二人が娘にすりや、わしが爲にも初孫ぢやが

ト心々の思ひ入れあつて

長九　連合ひの平左衛門どのにも相談せねば大事ござりませぬ。お園と私しが仲に子の出來ぬ事を、親仁樣も平常御苦勞なされましたに、女房が身腰痛めずに初孫。これと申すも、御陽山樣の引合せ。この子をお園と私しが、大事に育てるその時は、半七どのへ義理も立ち

かや　エ、なんと云やる。

長九　ヤレ／＼、思ひがけなく私しも、子寶を儲けました。コレ、お園、おれは奧へ行て、おまむき樣に、此お禮の看經するうち、この子の親に

その　エ。

長九　サア、お山人形でも買うてやりやれ。

ト合ひ方、時の鐘、門口へこなしあつて、長九郎奧へ入る。

かや　オヽ、もう入り相ぢやさうな。ちと早いが、灯りを點して

ト思ひ入れ。

その　イエ／＼、わたしがつけませうわいな。

トお園は暖簾口より丸行燈を出し、灯をともし

つう　サア、これからお前の母樣は、わたしぢやぞえ。

つう　アイ〳〵。わしや眠いわいなう。

　　ト おかや行燈の灯影にてお通を、つく〳〵見て

かや　ほんに、見れば見る程どこやらが

　　ト思ひ入れあつて

成る程、よう似たわいなア。

その　それぢやによつて、わたしが娘に。

かや　ムウ。すりや、この子を產んだ母といふは、もしやこの頃噂のある、慥かその名も三勝と

その　半七樣のその仲に、儲けた娘と推量して

かや　育てる心の夫婦の衆。殊に其方の女子の情、悋氣嫉妬の心も無う。その美しい氣立てなば、あの

勘當した不所存者に、せめて露ほど

　　ト思ひ入れ、半七も立ち聞きして思ひ入れ。

つう　おば樣、爰はどこぢやえ。

その　爰はお前の內ぢやぞえ。そして今から、わしを母樣と云はうぞや。オヽ、よい子ぢやの。

つう　お前は母様かや。そんなら、乳飲ましう〳〵。

その　これはしたり、その乳には困るわいの。

ト　おかや思ひ入れあつて

かや　こりや尤もぢや〳〵。コレ、お園、乳を貰ふまでも、なんぞ菓子はないか。手遊びなと買うてやりやいの。

その　アイ〳〵、人形町へ行て、よい姉様買うて來てやりませう。

ト　何心なく門口を明ける。この時表に窺ふ半七、懐より手振り人形、いろ〳〵の手遊びに薬を添へ、お園が前へソツと出すゆゑ、驚き

オヽこは。誰れやら門口に

かや　何をマア仰山な。

その　でも、アレあそこに

ト　こは〴〵半七を覗き見て

つう　アレ、父様が

アヽお前は

かや　ナニ、父とは。……ヤ、、慥かに我が子の

その　モシ。

ト伸び上がるおかやへお通を渡し、門口をシャンと閉す。おかやはお通を抱き、思ひ入れ。半七門口に手を組み、皆々よろしくこなし。合ひ方變り、思ひ入れあつて

かや　コレ、そこに居るのは何ぢや。

その　サ、ありや犬でござります。

かや　ナニ、犬ぢや。

その　アイ。しかも子持ち犬が、その子犬の爲に、ようマア爰へ。

かや　そんならこの子の親犬が。コレ、今と云ふ今、産みの親の大恩を、思ひ知りをつたであらうがな。

半七　それゆゑにこそ人目を忍び、我が家の門口まで、やう〳〵と

ト思ひ入れ。

その　云うて返らぬ事ながら、最前も内外の噂。あの美濃屋の三勝どのと、ひよんな事仕出して、その身ばかりか、東西わかぬこの子にまで。それで足らいで、親御樣へも御苦勞かける半七樣。わたしもお前に怨みの數々、ほんにこれまで露ほども、色に出しはせぬけれど、三勝どのに見返られ、枕

淋しき寢覺めの夜、よその女夫の睦まじう、花見遊山を見るに附け、羨やましさはいかばかり。わたしぢやとても女子のはし、悋氣の仕やうも、かこつのも、知つてはゐれど不束かな、この身に恥ぢて心にばかり、泣いて表面は美しう、添うてゐたのも若しひよつと、お前の心の捨て情けにも、不便な者とこれ程も、思ひ直して下さんすかと、はかない事を樂みに、長い月日を待つうちに、舅御樣の御勘當。頼みの綱も切れ果てゝ、風の便りもいつしかに、善からぬ耳のみ積り積つて、たうとう其やうな身の上に、なぜになつては下さんした。モシ、この子の事は、わたしがきつと預るほどに。サ、斯ういふうちにも心がゝり、早うこの場を、行て下さんせ〳〵。

トよろしくこなし。半七思ひ入れ。おかや、こなしあつて

かや　子を思ふ、その恩愛のわりなさは、追へども去らぬ煩惱の、柱をめぐる親犬の、心は誰れしも……人目にかゝらばどのやうな、憂き目に逢はうも知れぬほどに、サ、早うどこぞへ遁げてくれ。

半七　この罰あたりの畜生めを、それ程までにかばうて下さる親の慈悲。心は同じこの身にも、それなる餓鬼めを頼まうと、面おし拭つて

その　それは氣遣ひさしやんすな。あの子を産んだ三勝どのになり代り、わたしが大事に育てる程に、必ずともに安堵して

ト思ひ入れして

かや　オヽ、行燈の灯し火。命も消えぬ其うちに、サヽ、早く行てくれ〳〵。

ト半七を向うへやりたきこなし。半七心を殘し、花道の方へ行きかゝる。向うを見て

半七　南無三、向うへ親仁樣が……併し忍んでよそながら、親子一世の暇乞ひ。

その　エヽ、いまはしい、其やうな事を

半七　どうで始終は細つた首。

かや　エヽ、また其やうな事を……コレ、親仁どのに、其方の影を見られては

その　モシ、暫しのうちはお許しなされて

ト半七を内へ入れる。

つう　アレ、父樣が

かや　コレ。

ト　お通を半七に渡す。半七ヂツと抱き締める。

わしや何にも知らぬが佛。

半七　現在親にも逢はれぬやうな

その　身状もお前の心がら。モシ、半七様

半七　お園、よく幕を切れよ。

トこなし。唄になる。お園はお通を抱いた半七を、衝立ての蔭へ忍ばせる。おかや思ひ入れ。この唄をかり、向うより平左衛門、老けたるこしらへ、羽織ばつち、尻端折り、杖を突き出て来り、内へ入りながら

平左　戻つたぞ〳〵。

ト両人ウロ〳〵して

かや　オヽ、親仁どの、なぜ其やうに早う戻らしやつたぞいの。

平左　なに早い事があるものか。コレ、お園や、何をウツカリ、茶でも湯でも一つくれいよ。

その　ハイ〳〵。

トうろたへて、火入れを茶臺へ載せて差出す。平左衛門知らずに、これを飲まうとして

平左　アツヽヽヽヽ。あんまり沸え立つた茶を

トよく〳〵見て

こりや何ぢや、わしに途方もない茶を飲ませやうとしをつたな。

かや　ほんに、そりや火入れぢやないかいの。

平左　コレ、鼻のさきを火傷して、ひり〳〵するぞえ。

　　トこれにて氣の毒なる思ひ入れ。

その　オヤ、わたしとした事が、そゝつかしい。お免しなされませ〳〵。さぞマア草臥れたでござんせうな。

平左　イヤモウ、草臥れた段ではない。コレ、そこの盥へ水汲んでくれ。

その　お御足をお濯ぎなされますなら、湯を汲んで參りませうか。

平左　イヤ〳〵、水の方が、ひいやりとよからう。

その　左樣なら、直ぐに爰でお洗ひなされませ。

　　ト盥へ水を汲む。平左衛門、足を洗ひながら

平左　コレマア、お婆も、嫁女も聞きやれ。今日も道場參りの講中の噂。この親仁が以前勤めてゐた、白井兵左衛門樣を、殺して立退いた權三といふ奴、鈴ケ森の仕置き場から逐電して、又ぞろ三浦屋の黛で、大勢の人を切つたとやら。世間には、さま〴〵の噂がある。矢張りその晩の事ぢやけ

な。あの悴の半七が、三勝といふ女を切つたとやら、突いたとやら。それゆゑお上より嚴しく御詮議なさるとの事。勘當しても、血を分けた悴。惡い噂を聞いた時の心のうち、マどのやうにあらうと……イヤ、赤の他人のあの半七、どのやうな憂き目に逢はうと、構うた事でもなし。只大切なかゝり息子といふはあの長九郎。コレ、お園、二人が仲に、なぜ孫をば拵へて見せぬぞ。

その　舅御樣とした事が、何をマア、じやら／＼と

ト思ひ入れあつて

ほんに、お喜びなされませ、わたしや俄かに子が出來ましたぞえ。

平左　何と云ふ。アノ孫が、一夜の内に出來たとか。

かや　出來た拔かいなう。それは善い娘の子でござるわいの。

平左　ハヽヽヽ。お婆もよい年をして、何を阿房つくすぞいやい。なんぼ今の若い者が器用ぢやというて、一夜のうちに

その　出來たその子を舅御樣、只今お目にかけませう。

ト合ひ方になり、お園・衝立ての蔭へ行き、お通を抱き、平左衞門の側へ行き

コレ、お通や、其方のお祖父樣にお目にかゝり、可愛がつてもらひませうぞ。サヽ、お側へ行き

やく。

ト平左衞門の方へ突きやる。

つう　アイ〳〵。お祖父樣、可愛がつて下されや。

平左　オヽ、孫とはわれか〳〵。これがマア、あの二人が仲に、俄かに出來た

ト思ひ入れあつて、引寄せて、お通の顏をヂツと見てこなし、迷子札手にさはるゆゑ、氣が附き、こ

れを見て思ひ入れあつて、

「岩井町茜足袋屋平左衞門孫娘お通」……ハテ、この札を書いた手蹟、勘當した悴めに、よう似

た手蹟。殊にこの子が面差し恰好、どこやらが、あの不所存者めに、見れば見るほど

ト思ひ入れ。この時衝立ての上より半七覗く。平左衞門フツと顏を見る。半七隱れる。平左衞門こな

しあつて

ハヽア、そんなら大方この家を見込み、嫁女や婆をたらしこみ、捨て子の押賣りか。この親仁も、

買うてやりたいものなれど、盜人、人殺しの胤ぢややら、どうで碌な奴の拵へた子ぢやあるまい。

貰うた子ならば返すがよい。拾うた子なら捨てゝしまやれ。お婆、嫁女、馴染まぬうちに、捨て

てしまやれ。

ト衝立ての蔭へかけて、よろしく思ひ入れにて云ふ。

その　左樣でもござりませうが、長九郎どのも、二人の子にして育てようと、折角喜んでゐやしやんすもの。

かや　それ／＼。老いては子に隨ふとやら、今更どうも長九郎に

平左　ナニ馬鹿な。餘の事は兎も角も、この事ばかりは、長九郎が得心でも、この親仁が不承知ぢや。ならぬ事ぢや。わいらが捨てずば、わしがその餓鬼

トお通へ立ちかゝる。この時奥より長九郎、着流しの上へ、門徒の肩衣を引つ掛け、誂へのお文樣を入れたる箱を持ち、出て來り、平左衞門を留めて

長九　親仁樣、その娘を育てましても、苦しうはござりますまい。

平左　こりやア聟の長九郎、この子を育てゝも大事ないとは。

長九　ハテ、これ程までに育てましたる娘の子を、誰れがくれませうぞ。又捨てる者もござりませぬ。これぞ誠に御開山、上人樣より長九郎に、お授けなされた、如來樣の御再誕、近う寄つて親仁樣、初孫育てゝつかはされませ。

平左　すりや、どうあつても其方衆夫婦は、あの子を、我が子に

その　ハイ、致しますが私しどものお願ひ。モシ、舅御樣、どうぞあなたの初孫に。

平左　それ程までに、夫婦の者が云ふ事なら、孫にせまいものでもないが、この子の實の父親から、持參の品が添ふならば

長九　孫になされて下さりますか。

平左　隨分するぢや。望む持參を添ゆるなら、品によつたら勘當も

かや　免して、逢うてやらつしやりますか。

その　して、その持參といふは舅御樣

長九　何がお望みでござりまする。

平左　持參に望むは、天國の短刀ぢや。

長九　エ。

平左　長九郎、こなたとわしは、年こそ違へ古朋輩、古主白井兵左衛門樣、お家の退轉は、天國の短刀紛失ゆゑ、その短刀だに出るならば、若旦那權八樣、本地に歸らしやつて、お家再興あるとの事。聞くより親仁、大恩ある兵左衛門樣へ御奉公に、せめて短刀の手がかりなと聞き出さうと、心をつくせど、いつかな／＼、老い朽ちてせうどはなし、譬への通り蛇の道は蛇、こんな物のかゝり

所嗅ぎ附けるは、結句わる者仲間が賢こいもの。ア、コレ、その子の親めも、藝者狂ひに身が入つて、果てはお上のお尋ね者になるほどの、十分の一を心を用ひて、その天國を尋ね出し、若旦那權八樣に差上げてくれたなら、この親仁が死んで行つた時、大旦那兵左衞門樣へよい土產。又この世では子の罪科がこの身に報い、たとへ親の首へ繩附けられても、さら〳〵いとはぬ、勘當免してやらうもの……イヤその娘、祖父が孫にて可愛がつてやらうもの。そこに心の附かぬといふは、その子の親めも、馬鹿な奴ぢやなア。

ト衝立ての蔭へ思ひ入れにて云ふ。長九郞こなしあつて

長九　すりや、その天國の短刀を、尋ね出すその時は……此ほど隅田の向う河岸、舟の中より計らずも、短刀もろとも、添へて投げたる女の書置き。

ト衝立ての蔭より窺ふ。

半七　ヤ。

ト押へて

その　モシ。

すりや、その時に

長九　思はず手に入る女の手蹟。これぞ即ちお文も同然。親仁樣、如來樣より書き物添へて、初孫に下されたその娘、是非ともお貰ひ申さずは

平左　ナニ、如來樣より書き物添へて、アノ娘を

長九　左樣でござりまする。御開山樣よりお添へなされたお文樣、今これで讀み上げまする。親仁樣、そこらあたりにゐる人も、よう御聽聞あられませう。

ト合ひ方變つて、件の箱の中より、前幕の短刀に添へし三勝の書置きを出し、うや／＼しく思ひ入れあつて

「書置きのこと。」

皆々　ヤア。

平左　コレ／＼、長九郎、「書置き」といふお文樣があるか。

長九　ござります／＼。まづ／＼神妙に御聽聞なされませ。「われやさき、人やさきとは世の中の習ひこれまでお目にかゝり申さず候へども、私しこそは本庄助太夫と申す者の娘。勘當の後、其許樣の古主、白井兵左衞門どのゝ養子、權八どのに討たれ給ふの由、さすればこの三勝とは敵同士、その上お園樣といふ誠のお内儀樣のある男を、横取り致し候ふ罰にて、添ふに添はれぬ義理詰めと

なりしゆゑ、死なんと覺悟きはめしところ、天國の短刀だにお手に入る上は、御勘當もゆり候ふとの事承り候ふ折柄、宅兵衛どのゝ持つたる一腰、誠の天國と見受け、それを手に入れんと、心に思はぬ愛想づかしも、果てはお手にかゝり申す覺悟にて候ふ。この劍は、私し家にても尋ねる品に候へども、親よりも夫を大切に致せと申す敎へを守り、一腰は半七樣へお渡し候ふまゝ、これにて御勘當ゆり候はゞ、お園樣と末ながうお添ひ遂げ遊ばし、その節はお通こと、くれ〴〵よろしく賴み上げまゐらせ候、申し上げたき事は山々候へども、涙にくれ、惜しき筆とめまゐらせ候、めでたくかしこ、茜屋御兩親樣、半七樣へ、三勝より」。……南無阿彌陀佛々々々々々。

トよろしく思ひ入れ。此うち半七、衝立ての蔭にてこれを聞き、こなしあつて

半七　すりやアノ、船の中にて投げたる品は、尋ぬる短刀。

長九　血汐に殘る手形の印文、これぞ美濃屋の三勝が

ト書置きの末に、血の附きたる手にて摑みし痕あるを、ちよつと見せる。

その　すりや、それ程までに、男を思ふ三勝どの。

かや　可哀や邪慳の刃にて

半七　知らぬ事ゆゑ、やみ〳〵と

ト思ひ入れ。

平左　ヤ、悴か。

ト半七隱れる。

長九　アヽモシ。……あなかしこ〳〵。サア、親仁樣、此お文樣の御誓言では、是非ともその子は、あなたのお孫に。

平左　成る程、古主の白井權八樣へ、差上げたその上にて

長九　お約束の勘當をお免しなさるが、即ち彌陀の御本願。私し事も、以前は白井兵左衞門の小侍ひ、申さばあなたと古朋輩。お家退轉のその後、以前のよしみにこの家を便り、侍ひやめて足袋屋の手間取り。御實子の半七どのが、家を出なされたその後に、これなるお園と夫婦になつて、この跡式を立つてくれいと、宿老はじめ御親類を以て、再三のお頼み。たつて御辭退申すのも、大恩ある今の主人、あなたの心に背くも如何と、表向きの祝言は致したなれど、ついに一度の枕さへ、かはさぬ事は女房が證人。床の中では帯締めて、寢てくたびれて起きての氣のばし。心が味になる時は、こゝが大事と一心に、南無阿彌陀佛、御開山、願ふところは御子息の、半七どのを呼び返し、添はせてやりたいわしが願ひ。この長九郎は足袋屋の手間取り、惡所遊里はどちらや

ら、首の女郎もこの年まで、求めても見ぬ野暮者ゆゑ、相談相手にならぬのか。コレ、わしと相談して下されたら、三勝どのをやみ〳〵と……サア、我が内の人にも隠れる程な、暗い身にはせまいもの。貧乏しても長九郎、わしも男ぢや、男ぢやわいの。

ト衝立てに向ひ、よろしく思ひ入れ。半七はお通の顔をヂッと見て

半七　只この上の情けには、偏へに娘が成人を、頼むは二人へ。アヽ、子を持つて知る親の恩

平左　今の背身にこたへならうが。

半七　それゆゑせめて両親に、これがこの世の

ト衝立越しに顔を出し、ヂッと思ひ入れ、この姿獄門と見ゆる體。

その　アレ、いまはしいその姿。

かや　その身の果てを

平左　蟲が知らすか。

つう　アレ、父様が

長九　コレ、父とはおれぢや。必ずともに

かや　初孫ながら半七が

平左　子で子にあらぬ惡緣は
かや　血を吐く思ひ、親仁どの。
　　　　ト　お通を抱きながら、思ひ入れ。
平左　どりや看經を……しまはうか。
　　　　ト　衝立ての方へ思ひ入れ。半七伸び上がり見る。お園これを隔てる。おかやはお通を抱きしめ、長九郎と顔見合せ、思ひ入れ。双方よろしく、唄になり、平左衛門先きに、おかやお通入る。跡に長九郎お園殘る。衝立ての蔭より半七、ツカ〳〵出て
半七　この世の名殘り、長九郎どの
長九　ヤ。
半七　頼みました。
　　　　ト　門口へ出にかゝるを、お園、突き廻してよろしく留め
その　アヽコレ、お前が出ては
長九　おれが心も水の泡。
半七　それだといつて

ト また行きかゝるを、お園留めて

その　コレ、うろたへてか半七さん

長九　アヽコレ、その名を迂闊に

ト思ひ入れあつて

とてゝ返さぬ籠の鳥、懐ろに入る窮鳥は、狩人さへも捕らぬとやら。この長九郎が身に引受け、その身の科もやす〱と

半七　ヤ。

長九　コレ、安兵衛々々。

その　モシ、安兵衛とはえ。

長九　ハテ、野暮な。八文や九文。半七といふ名はお上のお尋ね者、それを夫婦が義理立てして、この家へ隠まひおく時は、舅御様へもお咎めが、かゝりや繋がる血筋の縁。ぢやによつて、そこにゐるのは、律氣一遍足袋屋の手間取り、安兵衛としておかう。イヤサ、たつて居るのが、よさゝうなものぢやてな。

ト両人へ呑みこませる思ひ入れ。

その　成る程、さうでござんす。そんならぬしは、足袋屋の手間取り、安兵衛どの。

長九　コレノ〳〵、その仕掛けた仕事を、片附けてしまやれ。

ト半七思ひ入れあつて

半七　ハイ〳〵、旦那樣、左樣ならこの半沓の方を片附けませうか。イヤ、この晒しの方へかゝりませう。

その　イエ〳〵、疵持つ足のぎえんには、晒しといふはどうやら氣がゝり。

長九　それ〳〵。折りを見合せこつそりと、遠い田舎へ行く人に、註文された草鞋がけ。マア、その方をしてもらはう。

ト思ひ入れ。

半七　左樣なら、どりや一精やらかさうか。

ト足袋を縫ひにかゝる。長九郎思ひ入れあつて

長九　コレ〳〵、お園、わしは風をひいた樣子、蒲團を貸してくれ。

その　アイ〳〵。

トそこにある蒲團を着せ、眞中へ坐る。この時前幕に拾ひし莨入れを落し置く。

モシ、お前、風ひいてなら、酒一つ飲ましやんせいなア。

長九　成る程、それもよからう。いつもの通り熱燗にして、ちろりを持つて來やれ。

ト　お園ちよつと暖簾口へ入る。直ぐに銚子杯を持ち出て、落ちてある莨入れを拾ひ

その　モシ、こりや見馴れぬ莨入れ。

ト出す。半七見て

半七　ヤ、そりやそれ、いつぞや三浦屋の

長九　アイヤ、三浦屋で誂へて拵へた、そりや人の屆け物ぢや。

その　さうでござんすかいな。派手な好みの莨入れ。

ト　あちこち見て、中にある文を見付け

何やら中に書き物が

半七　そりやソレ、おぬしへ。

その　エ。

ト　半七取りにかゝるを、長九郎ちよつとさゝへて

長九　そりやァ大方受取りであらう。三浦屋なら、定めて廉く上げたであらう。ちよつと讀んで見やらぬか。

その　イエ〳〵、こりや受取りぢやござんすまい。

長九　マア、なんであらうと讀んで見やれ。

その　アイ。

ト不思議さうに文をひろげ

「わざ〳〵申し入れ候、よんどころなき世の中にて、あかぬ仲を引分け、又ぞろ斯樣な事申し遣はし候うては、おさげすみも恥かしく候へども、我れら不料簡にて今の身の上、悔むに詮方なく、いろ〳〵の附き合ひ、又は友達の義理、その外引くに引かれぬ男づくにて、金子の入用御座候ふ間、別れしそもじ樣へ無心申し入れ候ふこと、よく〳〵の仕儀とお察し、少しなりとも御都合なし下さるべく候ふ。」

ト讀みながら思ひ入れ。半七、それを讀んでは惡いといふこなしあるべし。

こりや見覺へのある手蹟。慥かにお前の

ト半七へ思ひ入れ。半七、讀むなといふこなし。

長九　ハテ、お家長尾にさ山にた山、流儀によつて似た手はいくらも……イヤ、それは中々面白い手紙ぢやわえ。サア、その後を、聞きたい〳〵。

その　ぢやというて、わたしやどうも……何ぢややら、讀み憎い手ぢやわいな。

長九　ナニ讀み憎い手ぢや。外の流儀は兎も角も、その手蹟がナニ讀み憎からう。そんなら安兵衛、讀んで聞かしやれ。

半七　ナニ、おれにその文……イヤ、私しには、その手紙は

長九　讀めぬ事があるものか。コリヤ、てめえは主人の云ひ附けを背くのか。

半七　サア、背きは致しませぬが

長九　そんなら讀んで聞かしやれ。

半七　これは又迷惑な。

トよんどころなく讀みにかゝる。

ナニ〳〵「又々承り候へば、只今にては長九郎と……イヤ、兵九郎とやらいふ男が入夫に參り候ふ由、小糠三合のたとへ、よく〳〵思ひ合うた仲と存じ候ふ。さぞ〳〵毎晩お樂しみ、あまり聟を可愛がり過ぎて、腮で蠅を追はせぬやうになされかし」。

ト半七せつなきこなし。お園、いろ〳〵こなしあつて、我れを忘れて

その　エヽ、なんのマア、神佛かけて、わたしや否らしい事は露はどもないものを、そりやお前の邪推

といふもので

長九　これはしたり、お園、そりや何を云ふのぢや。默つてゐやれ。……安兵衞、その後は

半七　サア、この後は、どうも私しには

長九　なぜ讀まぬのぢや。

半七　春先きのせゐかして、目が霞みまして

長九　よし〳〵、さういふ事ならおれが

ト取りにかゝる。半七ウヂ〳〵するを、長九郎取つて

なんだ。「腮で蠅を追はせぬやうになされかし。この間ちよつとよそながら見受け候へば、隨分よい男、顏中が目の玉かと存じ候ふ」。

トこなし。兩人せつなきこなしにて、無性に咳をする。

ハテ、夥しい咳だな。

半七　イヤモウ、急に風をひいたので。エヘン〳〵。

長九　お園もひいたか〳〵。

その　只今ひきたてゞござんす。

長九　ムウ、今日は風ひきの誂へが出來るさうだ。ドレ〳〵、この先きを。……「顔中が目の玉かと存じ候ふ。いづれ入り聟といふものは、間拔けじみたものにて御座候ふ。元木にまさる裏木なしとやらお心あらば、元のやうになりたく候ふ。いづれ〳〵聟の長九郎とやらは、お拂ひ箱にて、我れらの賴み、御都合下さるべく候ふ、めでたく〳〵」。……ハヽア、こりやアどれからどれへ遣はした文ぢやゝら、味な事を書きをつたわえ。ドリヤ、宛て名を讀んで

トこなしあつて

半七　アヽ、モシ〳〵、どうぞ宛て名は

その　もう堪忍して下さんせ。

ト兩人無性に汗を拭ふ。長九郎こなしあつて

長九　ハヽア、二人ながら一汗かいたな。イヤ、この俵屋では、どんな風でも拔けるであらう。ハヽヽヽ。

ト文を引裂き捨てる。半七思ひ入れあつて

半七　イヤモウ、此やうなせつない事は、手間取り安兵衛も一生覺えませぬ。

その　わたしもすんでに、逃げ出さうとしたわいなア。

長九　イヤ、てめえが逃げ出すより、顔中が目の玉の入り聟は、お拂ひ箱にならねばよいが。

その　アレ、もう堪忍して下さんせ。

半七　ハヽヽヽ。誠に面目次第も……とはいへ、どうして又その文が、アノこなさんの

ト思ひ入れ。合ひ方になる。

長九　所は吉原近所なる、大恩寺前の三浦屋の、寮で多くの人殺し、その時わしが手に入るこの品こそ、尤もその夜の騷動は、權三が業に極まれど、この代物の出る時には、お上の疑ひ、その身に科を重重の、善からぬ噂を聞くも氣の毒。最前も會所へ呼ばれて、こなさんの詮議。

その　すりや、その品が人殺しの場所に、落ちてありしゆゑ

半七　かけかまはぬ罪科まで、身にふりかゝるも野晒しが、これまでつくす惡事の報い。めぐり〳〵て天の網。

長九　半七ならぬ、こりや外にと、云ひ譯するその時は、いよ〳〵罪は權三どの。リア、誰れを敵と討つべきと、義理と忠義の二道に

その　心をつくす長九郎どの。して、人殺しの證據なる、この一品の納まりは

半七　所詮のがれぬこの身の罪。科人の咎めも身に引受け、せめてはそれをこれまでの

ト立ち上がるを、長九郎留めて

長九　コレ、こなたが名乘つて出る時は、今は格別、その以前は、奉公人の長九郎、主の息子を見殺しと、世間の人の口の端より、勘當されても實親の、平左衞門どのへ長九郎が、なんと面が合はされう。急かずと時節を、半七どの……イヤ、手間取り安兵衞。マア〳〵、一つ飮まつしやい。

ト杯を出す。

その　モシ、あのやうに云はしやんすほどに、必ず短氣を

半七　そんなら旦那のお詞背かず、サア、一つ戴きませうか。

長九　サア〳〵、氣を詰めずに爰へ來て

ト杯を取上げる。

半七　お酌いたしませうか。

ト長九郎、半七の酌にて一つ飮んで

長九　イヤ、これは燗ざましで、とんと冷のやうぢや。

その　ちよつと燗つけて來ようかいなア。

長九　イヤ、ほか〳〵するから冷もよからう。これはてまへへ

トお園へさす。

その　わたしへかえ。

ト手酌にて飲まうとするを

長九　此方へ寄越しやれ。

その　こりや憚りでござんす。

ト長九郎の酌にて、お園一つ飲んで下へ置く。

長九　折角呼び附けて、水入らずの酒盛りを、見せて置くのも受け憎からう。コレ、その杯は安兵衛へ。

その　そんなら一つ上げるぞえ。

ト半七へさす。長九郎酌をする。半七、捨ぜりふにて一口飲んで下へ置く。長九郎こなしあつて

長九　アヽコレ、何ぞ肴を。

その　ちよつと何ぞ見て來ようかえ。

長九　イヤ／＼、これにいゝ肴があるわえ。

ト思ひ入れあつて

安兵衛、これを肴にしようかえ。

ト懐中より、前幕に手に入りし天國の短刀を差出す。半七これを取つて思ひ入れ。

半七　ヤ、、これぞ尋ぬる天國の
長九　サア、その短刀を權八どの、
その　お手へ渡して舅御樣の
半七　勘當ゆりるその時は
長九　二人は元の
　　　ト兩人へ思ひ入れあつて
　　元の手間取り長九郎、われに渡せしこの天國。
その　少しも早う權八樣へ
半七　渡した上にて
その　親御の勘當、
半七　所詮この身は
　　　ト思ひ入れ。この時下座より久内先きに、藤馬、ぶツ裂き羽織、絆纏股引き、大小にて、黒天の捕り
　　　手四人を連れ出て來り、門口に窺ふ。半七お園、聞き耳立てる思ひ入れ。
その　モシ。

ト囁く。

半七　心を附けやれ。

ト短刀を持ち、こなしあつて、長九郎半七、ツカ〳〵と上の障子屋體の中へ入る。この時門口より

久内　人殺しの野晒し半七、慥かにこの家に

藤馬　者ども、召捕れ。

捕手　ハア。

ト皆々内へこみ入り

動くな。

ト お園を取卷く。

その　アヽモシ、お役人様、何ゆゑあつて此やうに。

藤馬　何ゆゑとは、最前も會所で聟の長九郎に渡した、三浦屋の人殺し跡に、落ち散りあつたは、この家の悴半七が貰入れ。まつたその夜山谷堀にて、藝者三勝を手にかけたるも、半七なりと慥かな訴へ。

その　でも三浦屋の人殺しは、權三なりと世上の噂。

藤馬　いかにも權三の業なりと、目代へ訴へ。それゆゑ彼れを、召捕らん爲、出口々々へ組み子をくば

れば、所詮のがれの籠の鳥。先づそれよりは、この家の悴、隠まふ半七、きり〳〵爰へ、出しをらう。

そのモシ、お役人様、慥かな訴人と仰しやりまするが、以前の連合ひ半七どのを、隠まひまする位るなら、何しに親御も勘當を

藤馬　キリ〳〵出さねば踏み込んで、二階物置き床下まで、家探しせうか。

そのサ、それは

久内　但しは爰へ半七を差出すか。

そのサ、それは

皆々　サア〳〵〳〵

藤馬　者ども、踏んごめ。

捕手　ハア。

ト奥へ踏んごまうとする。この時奥より長九郎、ツカ〳〵と出て

長九　アヽイヤ、お役人様、その人殺しは私しが訴人いたしませう。まづ〳〵お待ち下さりませう。

久内　こなたは入夫の長九郎どの。人殺しは外にあるとな。

長九　いかにも外にござりまする。

藤馬　して、その人殺しは何者だ。

長九　餘人ではござりませぬ。卽ち斯く申す、この長九郞でござりまする。

久内　ハヽヽヽヽ。コレ、長九郞、あんまり人をたわけにするな。三浦屋の人殺しとといひ、山谷堀にて三勝を切つたのも、なんの恨みでこなたの仕業。その人殺しこそ權三、半七。

長九　イヤ、どのやうに云はしつても、その人殺しは長九郞。よし私しでないにもせよ、我れと我が手に名乘つて出たる科人を、一應お引きなされずば、お上の掟が立ちますまいがな。

藤馬　ムウ。何は兎もあれ人殺しと、名乘つて出でたる長九郞、彼れを召捕り、拷問なすその時は、誠の人殺しも分明ならん。

長九　そりやあなた方の御勝手次第。矢がら鐵砲ぶり／＼責め、どんな責め苦をうけましても、その人殺しは長九郞。いざ代官所へお引きなされて

その　すりや、どうあつても長九郞どの、その人殺しはこなさんが

長九　名乘つて出れば古主へ忠義、二つには、この家の子息半七どのも

その　たとへ枕は交さずとも、假りにも夫と名を呼びしを、義理と忠義に

長九　しがらむ繩目。

その　そりや、それほどまでに……ほんに神とも、佛とも

長九　コレ、なんぼ足袋屋の職人でも、恩は命で返すのぢや。

ト久内思ひ入れあつて

久内　慥かに下家に

ト疊へかゝらうとするを、長九郎立廻つて久内を引据ゑ、その上へ乘りかゝり

長九　お役人樣、イザ、お引きなされて下されませう。

ト手を後ろへ廻す。お園「モシ」と寄るを、藤馬隔てながら繩さばきする。この見得、時の太鼓にて道具廻る。

本舞臺、三間の間、二階づくりの煙草見世、柿の暖簾、百足の畫描き。こゝに竹村の艾、小田原外郎の取次ぎの札を掛け、下手に國分舖山荒切りなぞ書きし障子。積みし臺の上に煙草の箱。門口の外丸井戸、朝鮮矢來、すべて隣家の體。曲撥にて道具とまる。

トすぐに掠めし聖天の鳴り物。こゝに以前の○△わめきゐる。お勝爭ひゐるを、煙草屋權兵衞（實は丹助）立ちかゝりゐる。古鐵買ひの助八、ちんこ切りの源次、なだめてゐる見得。

○　駈落ち者だから連れて行く。小紫を、爰へ出せ〳〵。

△　出さねえと、爰の亭主はかどわかしだぞ。

兩人　小紫を出せ〳〵。

權兵　やかましえわえ。三浦屋の寮で、小紫の方から頼まれたから連れて來たのだ。それをかどわかしだとは、何を吐かすのだ。

助八　コレ〳〵、てめえ達もそんな形をして來るから、人の氣が立つワ。岡場所の玉ではなし、吉原の事だ。眞面目に云ふがいゝワ。

○　さう云ひなさんな。金毘羅參りの眞似をして來たから嗅ぎ出したのよ。

△　物貰ひの面で、足を附けた百足煙草屋。揚げて來た小紫を

兩人　出してもらはう〳〵。

かつ　モシ〳〵、お前方は何事か存じませぬが、わたしや爰の亭主の丹助どのに捨てられました、女房でござりまするわいなア。

源次　コレ、順禮さん、待ちなさい。爰の亭主は先度から、女房はねえげな。そりやァお前、門違ひであらうによ。

かつ　おきなさんせ。十年十五年逢はずにゐたとて、娘まで産んだ女房が、男の顔を忘れてよいものかえ。コレ、丹助どの

權兵　やかましいわえ。若い時には、女房を置去りにするは、いくらもある習ひだワ。おれもこの見世へ引ッ越し早々、順禮嗚アと金毘羅參りに怒鳴られては、外聞が悪い。サア〳〵、出て行きやアがれ行きやアがれ。

○　ナニ、外聞が悪いも凄まじい、爰の亭主は、この頃まで、非人だわえ〳〵。

△　外聞も當分もいるものか。てめえは非人の、足洗ひだワ〳〵。

權兵　なにを。非人ならどうする。うぬら、去しやアがらねえと

ト煙草庖丁を振上げる。助八留める。二人は外へ逃げ出し

兩人　うぬ、足洗ひ乞食め、どうするか見やアがれ。

ト喚きちらし、路地へ入る。源次は着物を後ろ前に着てゐて

源次　エヽ、頑人のくせに、とんだ奴等だ。

助八　コレ〳〵、お前、なぜ後ろ前に着てゐる。

源次　エヽ、これかえ。今日はわしが年日だから、灸を据ゑてもらはうと思つて。

權兵　そりやア誰れに据ゑてもらふのだ。

源次　奥へお前が連れて來た、小紫さんに据ゑてもらふ氣サ。時にあのおいらんは、薄ツぺらな寢卷き一枚でゐなさるから、さぞ寒からうと思つて、幸ひ近所の息子が、假り宅の女郎にやるといつておいた仕掛けがありやしたから、持つて來て着せやした。そして又、先刻あのおいらんが、斯うしてゐるも氣が盡きるから、草双紙でもないかと云ひなさるから、わしが氣をきかして、大屋さんから慰みに、琴を借りて置きやした。こいつは中三ものだね。

ト琴を出して見せる。

權兵　いゝ氣な男だ。煙草切りの内で、琴を彈いてたまるものか。踏み折ると悪い。二階へでも上げて置かツし。

源次　オツト、呑みこんだ。

ト琴を二階へ持ち行く。

助八　イヤモウ、吉原の駈落ちと聞くと、誰れも賴まねえに、今のやうな奴等が……イヤ、そりやアのけて、あの小紫は、こなさん返すのか、返さねえのか。

權兵　返す氣だが、それも三浦屋の亭主が、禮を云つてくれればよし、わしも商人だ、女郎子供を引き込


大山道
四ツ谷

んで、どうするものか。……コレ、てめえもいゝ加減に歸られねえか。

かつ　イエ／＼歸りませぬ。コレ、お前はマア忘れえもさんすまい……モシ、お前方も聞いて下さりませ。わたしやさるお屋敷に、この人と一緒に奉公いたしてをりまして、行く／＼は夫婦にもならうと、若い時といふものは、身のいたづらに懐妊いたし、そのマア身重なわたしを捨てゝ、駈落ち致しましたわいなア。

助八　そいつはとんだ話しだ。

權兵　エヽ、昔の事を云ひ出して、鼠が笑ふワ。いゝ加減にしやべれ。

かつ　しやべつてもようござんす。……それでもマア御方便なもので、そのマア苦勞の中でも、やすやすと産み落しました娘の子。それを旦那樣がお育てなされまして……モシ、お聞きなされませ。有り難い、マアすぐに娘になされまして、名も八重梅とお附けなされ、只今では、御主人樣の娘御ぢやわいの。

ト權兵衞これを聞いて思ひ入れ。

助八　そいつは仕合せな事だの。

かつ　そのマア御恩のある旦那樣の、御祕藏なさるゝ百足丸といふ手槍を盜んで、お前、駈落ちさんし

たぞえ。

　トこれを聞き、助八思ひ入れ。

サヽ、わたしやこなさんに用はないが、こなたの在所が知れゝば、旦那様のお頼みなされた、あの槍を持つて行かにや、御恩報じがならぬわいの。八重梅といふお子はの、お前の娘ぢやわいの

サア、その槍を下さんせ。持つて行かにやならぬ〳〵。

　ト腹立てゝ云ふ。權兵衞「さては八重梅は娘か」といふ思ひ入れ。助八こなしあつて

助八　コレ〳〵、かみさん、さう云つてもお前、過ぎた事を云ひ出して、そりやア誠に後の祭りだ。なう、權兵衞どの。

權兵　打つちやつて置きねえな。十五六年も過ぎた話しを、今時分に、大べら坊め。

かつ　アイ、阿房ぢやによつて、此やうな目にあひますわいなア。

權兵　やかましいワ。行きやアがれといふに。

　トお勝を門口へ突き出す。

源次　モシ〳〵、さう聞いては、わしらも萬更聞き捨てにはなりませぬ。コレ、古金屋さん、斯うしやせう。此かみさんを、わしが內へでも連れて行きませう。

權兵　なにサ、打つちやつて置かッせえよ。
かつ　捨てゝ置けとは、てもマア邪慳な。
源次　アヽモシ、マア〳〵わしが内へ。サア、あゆびなさい〳〵。
ト背負ひし革籠や杖笠までも持つて、お勝をいたはる。
かつ　これはマア、お前のいかいお世話になりまするが、コレ、丹助どの、娘の世世と聞いて、また無心になぞ行かんすな。コレ、それにしても、旦那の手槍を
權兵　エヽ、知らねえわえ。
かつ　ソレ其やうに
ト立ちかゝる。
源次　ハテマア、あゆびなさいよ。
ト四ツ竹節になり、お勝をせり立て〳〵、兩人向うへ入る。
權兵　エヽ、とんだ交ぜつけえしがうせた。
助八　コレ、それでも貴様が娘は、屋敷のお孃様。
權兵　あの女めがしやべつたが、産みの娘は屋敷の養女。

助八　仕合せ者は貴樣ばかり、コレ、仁助、足を洗つて唐犬權兵衞、以前か丹助。

權兵　これで丁度三度の改名。貴樣の賴みで、半七が母と僞り、三勝とあの緣切りがうまく行つたが、併しあの子も生まじめに、屋敷にゐたら本庄の奧の娘御、それが紛れて藝者の三勝。白井の若黨平左衞門、しかも隣りの茜足袋、その子の半七、敵同士、それゆゑ緣を切らさうと、思つた事が今更に

助八　藝者殺しのあの半七。そりやァ格別、今聞いたおぬしが取逃げ、駈落ちの手槍といふは

ト風呂敷の中より槍の穗先きを出し

これぢやァねえかえ。

ト差出す。

權兵　ヤ、そりやァ百足丸。どうして貴樣の

助八　鈴ヶ森にて拾つたが、道理で權三がよみがへり、皮肉の間を除けたる手の內、二十四時が其うちは

權兵　天水五臟へ納まれば、息吹き返す稀代の象身。

助八　權三にとゞめの殘つたも、助けた非人の宵寢の仁助、足を洗つて煙草屋權兵衞、槍の穗先きは元

の鞘、納めてやらうが、金でも仕切りやれ。これぢやア金と、ころばずばなるまい。

ト思ひ入れ。聖天の鳴り物になり、向うより助市、紺木綿、奴の形にて、藁の鳥毛槍を腰に差し、一本差しにて出て來り、花道にて門口を見て

助市　百足煙草の唐犬權兵衞、慥かにおれに小紫。さうぢや。

ト門口へ來り、内を窺ひ、佇む。

助八　割り符の合つた女が話し。槍の始末はどう附けるな。

權兵　足を洗つた御祝儀を、非人の前から仕切りを取るか。併し今ではちんこ切り、庖丁ならば買ふ氣だが、槍は不用だ、その上に、金といつちやア苦しがり

助八　工面が出來ぬか。出來ずばいゝワ。これから爰に埋めてある。あの小紫の事が大切。殊にこの槍を餌にして、お砂利の上で

ト槍を引ッ提げ出かゝるを、權兵衞とめて

權兵　コレサ、さう氣短かに

助八　知らねえワ。

ト門口へ出る。助市、件の槍をもぎ取る。助八憫りして

何をしやアがる。

ト顔を見て

ヤ、こなたは兄貴か。

助市　おのれが目にも助市と

ト内へ突き込む。權兵衞見て

權兵　ヤ、こなたは助市、何用あつてし。

助市　少々お頼み。殊に見附けし弟め。

助八　ヤ。

ト出でんとするを引ッ捕へ

助市　エヽ、おのれはなア。

ト合ひ方になり

身共が留守を考へて、跡へ仕掛けて主人の召し物、定紋附きしお小袖を、よくも盜んでうせをつたな。其お小袖ゆゑ思はぬ間違ひ。權三樣とも露知らず

ト思ひ入れあり

兄が云ひ分。おのれを手にかけ

　　ト刀へ手をかけるを、權兵衛留めて

權兵　アヽ、そんなら噂の貴樣の弟、あの助八とは、この男か。心の惡いと常から噂。穢ない指でも親身の兄弟、この丹助が命の御無心。

助市　思へば憎ツくい人非人、助け置かれぬ奴ながら、久しぶりでの逢うたるこなた、詞にめでゝ助け置く。命冥加な

　　ト門口へ突き出し

百年も生きをらう。

　　ト思ひ入れ。

權兵　それで此方も安堵。

助八　安堵しねえはこの助八、兄でも杖でも大事ない。この槍ばかりは

　　ト寄るを押へて

助市　何であらうとこの槍は、丹助どのから出たなれば、いらぬおのれが……サ、受取つて置かッしやりませ。

權兵 何かといかい世話になります。

ト權兵衛へ渡す。

ト助八思ひ入れあつて

助八 そんならいらざる左平次に、槍は矢ッ張り元々へ……どうするものだ。仕方がねえ。これから仕事は小紫、かの親方へ、爰にゐるのを

權兵 助八待ちやれ。槍の代りは、ソレ。

ト前幕に手に入れし似せ物の天國を渡す。

助八 こりやコレ慥かおれが手で

權兵 廻り／＼て手に入る天國。

助市 ナニ、天國はお家の寶。それを彼奴に

權兵 サ、渡して置くのも、この身の錆を

助八 臺なしにした此方の代物、これを預けてあの槍の、その代金を交易するか。

權兵 イヽヤ、貴樣の望みの通り、槍の價が出來たるその時

助八 また元々へ引きかへる。して、その金は

權兵　長くは待たせぬ、今宵のうちに。出合ふ所は柳原、稻荷河岸まで出かけて來やれ。その時引替へ。

助八　間違ひなしに出かけて來よう。その時必ず

權兵　この身の舊惡、口ふさぎ、高は云はねど小判の耳を

助八　揃へて寄越しやれ。それまで預ける此方の代物。この天國は

助市　あの惡黨めに渡すは氣遣ひ。

ト寄るを押へて

權兵　ハテ、おぶつた子より

助八　大事の代物。

ト腰に差し

後に逢はうよ。

ト唄になり、以前の鞘ゆゑ誠と心得、中身を見ずに一散に向うへ入る。此うち助市、こなしあつて

助市　こなたの難儀と思ふゆゑ、その儘やりしがこれからは、兄が追ッかけ、あの天國を

ト追ひかけんとするを引留め

權兵　コレサ、助市、此方もうつかり誠の天國、なんで渡さう。コレ、あの劍こそ

ト驚く。

助市　ヤ、、すりや三浦屋にて變りし似せ物。

權兵　サ、それだによつて、必ず捨て丶

助市　それで少しは安堵の思ひ」……安堵ならぬは死罪のお二人、重き手疵を受けたる取沙汰。それな癒やすの一藥あれど、親子男女の生血取り得、用ゆる藥法。よもや血汐が迂濶には

權兵　ナニサア、疵を受けたる笹野權三どのも、金瘡の惱みもありと世間の噂。それにて思ひあたりしは、あの小紫も何か惱みの

ト思ひ入れ、助市これを聞いて

助市　ヤ、その小紫と云はる丶は、慥かに三浦の小紫。主人の仇の權八どのに似たとの噂。殊にあの夜に家出して、こなたの內に駈け込みしを、聞いて來た小紫、敵の顏に似た事なら、なんと逢はせてくれまいか。

權兵　イヤ、それはつかりは逢はされぬ。よし、その顏が似たにもせよ、男やもめの權兵衞が、連れて來たのも有やうは、氣があるゆゑの色狂ひ。

助市　その色狂ひも大概に……コレ、こなたは實の娘もあらう。それも今では旦那の娘、八重梅樣

ト云はうとして、

権兵　イヤ、主人の娘は助市が、鈴ヶ森までお供して、云ひ號けの權八どの、敵同士とはいふものゝ、仕置きの場にて暇乞ひ。その時二人の産み年と、年月日時の守り袋を、權八どのと取替へ持つてござれども、その砌りよりお行くへを、見失うたるこの下郎。小紫こそ權八が、似寄りの噂と見ぬ戀に……女郎は賣り物、買はうと思つて。

助市　三浦屋ならば賣るのが商賣。わしは煙草屋、女郎の賣り買ひ、仕憎いの。

權兵　すりや、どのやうに頼んでも

助市　わしが氣のあるあのおいらん、どうして餘人に

權兵　逢はさぬならば物もらひ。一文奴の助市が、是非小紫に

ト鳥毛を引ッ提げ、奥へかゝるを、權兵衞立廻つて、助市を外へ突き出し、門口を締め

助市　物貰ひなら出たのがない。手がふさがつた。其うちござれこ

權兵　いゝや敵に似たとの噂。もし白井ならお主の敵。

助市　白井であらば古主の仇、どうして爰に置くものか。

權兵　小紫にはどうあつても

權兵　逢はせる事はマアならぬ。

助市　然らばあたりにいしかつて、いづれ善惡。

ト行きあたり、引ッ返して思ひ入れ。これをキッカケに唄になり、こなしあつて路地の內へ入る。入り相の鐘、合ひ方。よき時分、權八の小紫、しごきの形にて、奥より出かゝつて窺ふ。

權兵　あの助市が小紫を、疑ふ心と思へども、よもや白井が女には

ト思はず振返つて、顏見合せて、

小紫　あるじの旦那さん。

權兵　おいらん。何かと氣詰まり。

小紫　なんのマア、わたしやあの夜の騷動を、怖さのまゝに、知らぬお前を頼んであの場を

權兵　連れては來たが一人者、あの三浦屋から迎ひの來るまで、心置きなう。わしも其うち中三を買つて、居續けにゐる心持ち。コレ、おいらん、あんな恐ろしい事のあつた內へ歸らずと、物は相談、わしが嚊アになる氣はないか。

トしなだれる、

小紫　そりやモウ、切つゝ張つゝの劍の中、助けてもらうた恩のあるお前ぢやもの、親方さんが得心な

らば。

權兵　そいつは有り難い。其お情けのお詞に、甘へてぬしへ。

ト抱き附く。この時小紫、肩先きの痛む思ひ入れにて

小紫　アイタヽヽヽ。

權兵　どうした〳〵。

小紫　アイ、この肩先きに少つと痛みが

權兵　そいつは惡いの。何か藥が

ト小紫の守り、袖より出かゝりしを見て

アヽ、こりやァ何だ。

小紫　アイ、大事のわたしが

權兵　アヽ、大事のとは、起證だの。

小紫　どうして其やうな

權兵　起證でなくば、見せなさい〳〵。

ト寄るを、守り袋を隱して

小柴　なんの其やうな

權兵　アヽ見せずばよしサ。おれも又、よく見たがるやつサ。……イヤ、見たがるといへば、もう暮れ方、あかりの支度。

ト角行燈を出し、油注ぎを見て

アヽ、油が切れたが、コレ、おいらん、油を買つてくるから、其うちお前。イヤ〳〵、留守へ又先刻の奴等がうせやうも知れず。

二

小柴　イエ〳〵、大事ありんせん。ちよつと買うて來なさんせ。

權兵　そんなら其うち、二階へなりと上がつてゐなさい……ほんに、二階に借り物の琴があるが、イヤイヤ、彈いては惡いよ。わしが歸るまでは默つてゐなよ。

ト云ひさま、件の槍を取つて後へ隱し、油注ぎを持つて門口へ出かゝる。ほの暗き思ひ入れ。

小柴　もう暗うなるほどに、早う歸りなんしよ。

權兵　ぢきに歸るわな。

ト門口へ出て、思ひ入れあつて

素性を知つたあの助八。生けて置いては

ト油注ぎを投げ捨て、槍の穗先きを手拭にて拭ふ。

小紫　まだゐなんすか。

ト出かゝる。

權兵　出ては惡いよ。……待つてゐな。

ト唄になり、槍を隱し、向うへ一散に入る。小紫殘り、思ひ入れあつて

小紫　心の知れぬ主のお方。あの三浦屋の間違ひも、誠の武士の義を捨てしと、我れを恨みて早まる權三。破却なしたる位牌が起り、科なき人を手にかけて、不便や妹のお才まで、思へばこの身の身替り同前。何につけても金瘡に、用ふる藥は閑心が、方にはあれど

ト肩先き押へて思ひ入れ。この時捨て鐘きびしく、下の障子の間より竹槍を小紫へ突きかける。驚いてこれを捕へ、手荒く引く。障子蹴はなし、助市、槍に引かれ、ツカ〱と出て小紫と立廻り、キツとなる。

小紫　思ひがけなき、女子のわたしを

助市　その僞りをとりおいて、誠の武士と云はれんなら、實名明し、主人の敵、勝負さつしやい、權八どの。

小紫　イエ〳〵、わたしや小紫。なんで其やうな

助市　卑怯な一言。鈴ヶ森にて八重梅樣、伴ふ砌り覺えがござらう。縛め切つておいたるも、主人の敵、をやみ〳〵と、仕置きになすが殘念ゆゑ、一旦助けし下郎が寸志。八重梅樣はさは知らで、黒塀切つてお行くへ知れず。身共が主の仇敵を、討たねば外に誰れあつて

小紫　無禮な一言。よし又わたしが白井にせよ。寶出でざる其うちは、互ひに討たじ、討つまいと、契約なせしその上に、惱める金瘡、平癒なさぬ其うちは

助市　今更未練な權八どの、是非〳〵下郎が主人の敵。

ト竹槍にて向ふ。小紫肩先き痛む思ひ入れにて、これをあしらひ、竹槍を打ち落す。助市すかさず一腰拔いて切り附ける。小紫肩先き痛み、ひるむを引附け、白刃を差附けキッとなる。この時暮れ六つの鐘鳴る。助市思ひ入れあつて

ヤヽ、ありや暮れ六つの……さすれば鳥眼の

ト思ひ入れ。

小紫　たつてとあれば

ト竹槍取つて突いてかゝる。助市鳥眼の立廻りにて、竹の先を捕へる。小紫手荒く突く。これにて

ト助市撞となり

助市　こりや權八どの、助市が、烏眼と聞いて、騙し討ちにか、こなたはなう。

小紫　忠義の働き、助け置きたきものなれど、聞きわけなければ、是非に及ばぬ返り討ち。

ト思はず男の思ひ入れ。

助市　主人の娘に連れ添ふこなた。いはゞ家來も同然ながら、刃向ひ立ても武士の意地。

ト刎ね返し、立ち上がるを、小紫立廻つて、舞臺よき所へ來り、助市撞となる。小紫、落ちたる白刃を取つて振り上げる。助市、兩肌脱ぐ。白襦袢に、こま〴〵と云ひ譯書きし、書置きの襦袢を着込みゐる體。小紫、おぼろに見附け

小紫　肌の襦袢に何やら文字が

助市　下郎が云ひ分、討たるゝ覺悟。

小紫　ヤ。

助市　モシ。

ト首さしのべて、手を合せ、ヂツとなる。小紫、振り上げし刀を落し、襦袢の書置きに目を附ける。思ひ入れ。これをキッカケに前側へ葭簀、バラ〳〵と下りる。時の鐘、向う、バタ〳〵にて、糊紅、

手負ひの助八、似せ物の天國を拔き持ち、權兵衛は槍の穗先きにて、助八を突きたる體。立廻りながら花道にて

助八 うぬ、天國の似せ物渡し、その上おれに何の意趣。……人殺しだ〳〵。

トわめくを、槍にて無暗に突く。助八、切りかけるを、權兵衛拔き身を引ッたくり、立廻りながら舞臺へ來て、助八を取つて押へ、槍にてとゞめをさす。思ひ入れあつて、釣瓶繩を下げ、水を汲み、手足の血を洗ふこなし。此うち舞臺にて樣子うかゞひに上がると小柴の權八、七輪へ附け木を大分さしくべ、この燃ゆる火にて、片袖の書置きを讀みゐる見得、よき所に助市の死骸あり。鳴り物、捨て鐘、誂への合ひ方、思ひ入れあつて

權八 さては忠義の助市が、權三が弟の助八と、思ひ違ひに疵を附け、殊に八重梅見失ひ、云ひ譯のため覺悟して、我れに討たれん身の覺悟。ハテ、いたはしき

ト思ひ入れ。この時權兵衛、血を洗ひ、助八の死骸と、似せ物の天國を井戸へ打ち込む。水音する。これを聞き權八、助市の死骸を手早く障子の向うへ隱す。この時件の守りを落すこと。權八思ひ入れあつて、拔き足にて門口を明ける。權兵衛驚き「ワッ」と飛び退く。權八恟りして、件の助市の一腰を隱し、窺ひ見て

權八　誰れさんぢや。

權兵　おれだ。

ト内へ入る。

權八　歸りなさんしたかえ。わたしや三浦屋から、先刻の衆が見えたと思うて

ト一腰を後ろへ隱す

權兵　さぞお前、待つたであらうの……アヽ、まだ灯りをつけずにか。

權八　お前、油を取りに行きなさんしたぞえ。

權兵　ほんにさうだ。買ひに行つて油を忘れて來た。アヽ、暗くつては

ト思ひ入れ

よし〳〵、提灯に蠟燭のともし缺けが

トあたりを尋ね、ぶら提灯をさぐり、中より蠟燭を出

あつたぞ〳〵。蠟燭を立てよう。

ト火鉢の火にて、附け木へ移し、蠟燭をともし、有りあふ行燈へ蠟燭を立つて

イカサマ、おいらんと二人ゐるに、油ぢやア、うつりがわるい。どうでも蠟燭のあかりぢやア、

一しほ美しいワ。

ト落ちてある守り袋を見附け

権八　こりやコレ、先刻見ようと云つた、ぬしの起請か。

ト取らうとするを、権兵衛抑へて

権八　ほんに粗忽に、わたしが落して

権兵　オツト、待ちなさい。とてもの事に、色のその名を

権八　アヽコレ。

ト寄るを押へて、権兵衛手早く書き物を取出して見て

権兵　こりやア男の起請でなく、生れし年月記せしばかり、殊にその名も八重梅と

権八　アイ、その八重梅は、わたしが幼名。

権兵　ヤ、すりや、おいらんの幼名は、アノ八重梅と……そんならもしや、顔見ぬ娘か。

ト思ひ入れ。

権八　エ。

権兵　サ、娘にしてもよい年配、それを女房に持ちたい願ひ。萬更ぬしも

權八　戀の諸譯も、苦界の義理も

權兵　知つてゞあらう。

權八　それも勤めの身につまされて

權兵　嗅アになる氣か。

權八　エ。

權兵　足を附けたよ。

權八　オヤ、馬鹿らしいによ。

ト向うバタ〳〵になり、八重梅　若衆がつらにて、袖下切りたる件の藍鼠の小袖、お仕着と見える思ひ入れ。好みの帶しどけなく解けかゝりし體にて、一散に走り來り、內へ駈け入り、門の戶をシヤンと締めて、ホツと思ひ入れ。兩人悯りして

權兵　誰れだ〳〵。人の內へ案內なしに。見りやアどうやら若衆のやうな

ト窺ひ見る。八重梅思ひ入れあつて

八重　アイ、わたしや危ふい所を遁れて

ト權八聞き耳立て

權八　どうやら女子の聲のやうだが

八重　イヽエ、わたしや……私しは若年者。仔細ござつて跡より追手。お隱しなされて下さりませ。

ト男の思ひ入れ。

權八　すりやアノ、追手に

ト思はず顔見合せ

八重　ヤ、お前は。

權八　其方は。

權兵　近附きか。

權八　アイ……イヽエ。

ト思ひ入れ。

權兵　そんなら、おいらん、この前髪を

八重　今更お前、知らぬとは

ト女の思ひ入れあり、又氣を變へて

イヤ、知らぬとは云はれまい。

ト思ひ入れあつて、守り袋を出し

守りの中の書き物は、この身の素性。生れし年月日時まで、記しあるのが慥かな證據。逢ふと其まゝ知らぬとは、そりや恨めしい白井さん……サ、白井といふは身が家名。

權八　さては其方が……イヤアノ、お前が

八重　證據の守り。

ト出す。權兵衛取り、よく／＼見て

權兵　ヤヽ、この書き物は白井權八。そんならお前が

八重　囚人駕籠が破つて爰へ。思ふお方に逢ひたいばかり。……イヤ、お尋ねの白井權八。

權兵　すりやアノ、天下の囚人なる、權八といふ證據の守り。小紫には幼名を、八重梅といふこの書き物。若衆は白井、白糸が、ゆかりの色の紫に、心引かされ八重咲きの、花を散らしに來たのであらう。但し守りを取替へて、持たば白井は別れし娘。

八重　さう云はしやんすお前の年配、お顏知らねど、若しや誠の

ト權兵衛の顏をヂツと見る。權八「さては」と思ひ入れ。八重梅また氣を變へて

その八重梅にこの世にて、一目逢ひたき我が願ひ。イヤ、權八が身の願ひ。我れと名乘つて捕は

れの、證據はそれなる守りの書き物。網代り物にて引かるゝ途中、駕籠を破つて助けしは、わたしが姉たる三勝さん、それに緣ある半七どの、この家へ行かば戀しき男に、逢うてこの品渡しなば、女子の操が

ト天國を懷中より出しかけ、又氣が變へ

權兵　イヤ、その八重梅に逢はるゝと、聞いてこれまで足も空。妹脊の緣の我が夫……イヤ我が妻の八重梅どの、よう顏見せて下されたなう。

權八　イヤ、幼名は八重梅でも、今日はおいらん小紫。引込み置くもおれが女房に。その相談の最中へ、命のがれて駈け込む權八。この家を出しては物がない。今から爰に丁稚奉公、人目忍んでちんこ切り、勤めて見なさい。

八重　すりや、駈け込みし權八さんを、爰のお內に隱まうて

權兵　奉公せよとのお慈悲なお詞、成る程あなたのお內にしばし。

權八　併し譯あるその二人、一つに置くも修羅の種。小紫、お前はあの二階へ。

權兵　そんならわたしは

　　　サヽ、上がつてくんな。

ト權八の手を取つて二階へ上げる。この時權八、助市の一腰を隱し、二階の琴を見て

權八 お内に似合はぬこの琴は

權兵 ぬしの慰み、わざ〳〵借りて

八重 して、私しは、いよ〳〵爰に

權兵 奉公させるその手見せ。コレ〳〵

ト切り藁と、風除けの小さき屏風、庖丁添へて持つてゆき

刻み煙草の、お前は見習ひ。

八重 左樣ござらば

ト件の道具引寄せ、煙草切りにかゝる。

權兵 其うちわしは引下げの、三里へ灸を

ト二枚折りの屏風を立てゝ、盆に艾と線香を用意して、よき所へ座を取り

イヤ、おれが三里の灸より、噂のある權八樣、金瘡にての腕の惱み。

八重 なんのわたしは……イヤ、私しは其やうな

ト樣子を知らぬ思ひ入れ。權八は二階にてこなしあつて

権八　アヽモシ、権八さんは手疵の悩み。その金瘡の良薬も
ト我が腕へ思ひ入れにて知らず、八重梅こなしあつて
八重　成る程、白井は金瘡の、手疵の悩み。
ト権八と顔見合せて思ひ入れ。
権兵　痛みを直す良薬に、無くて叶はぬ親子の生血、二人が二人覚悟して、切つたる血なら金瘡の
八重　御用に立たば夫の為……イヤ、この権八が金瘡の
ト爰にて権八、肩先きの疵を教へるこなし。八重梅は血汐を薬に用ひんと心付きたる思ひ入れ。
権兵　小柴とて肩先きに、爰でのもつれ、歯形の疵か。二人が二人、疵持つ足の……サ、三里の灸は、
手づからおれが
権八　イヽエ、わたしがお前の灸を
ト下りんとするを留めて
権兵　ハテ、痛み所のあるおいらん。わしが願ひだ、二階で琴を……それ聴きながら皮切りの
八重　切つても切れぬ親と子の、思はず爰で、慥かに父さん
権兵　娘……とサ、云ふを云はぬは

權八　浮世の義理に搦まれし
權兵　血筋の縄目・駕籠の網。
八重　遁れてこゝへとまり木の
權兵　足さへ弱き羽抜け鳥。
權八　安き心も絲竹の
權兵　調べる琴の一曲を

ト獨吟、琴のかゝり。權兵衞、三里を押へて思ひ入れ。二階の權八、琴にかゝる、八重梅煙草切り臺へ風除けを置き、權兵衞は二板折りを前へ立てゝ、三里を据ゑる。この唄のうち向うより權三、虚無僧の形、尺八を吹き出て來る。跡より捕り手二人、大小にて十手をかまへ、窺ひ〳〵附いて來り、權三は門口に立ち、竹を合はす。捕手二人囁き合ひ、路地へ入る。行燈の蠟燭、だん〳〵と心の立ちし思ひ入れにて、ほの暗くなる。この時唄一くさり切れる。

權八　あの蠟燭の心が立ちしか、おかりも暗う
權兵　暗きその身の日陰者、親は泣き寄り、蠟燭の、流れの末が……アツ、、、、、、、、、、、

ト思ひ入れ。

八重　末は煙りと立ちのぼる、煙草切る手も覺えなく、刃はあつても血汐の穢れ。

ト天國の白鞘を出し、あたりへ置き、思ひ入れあつて

稽古に切るはこの刃物。

ト煙草庖丁にて腋の下を突き刺し、思ひ入れにて「ワッ」と苦しむ。權八思ひ入れあつて

權八　權八さんの息づかひ。何か苦痛の

權兵　そりやアその筈サ。素人の手馴れぬ業には味をやる。三つ子に習うて淺瀬の譬へ。大の丈の大の蟲。これが三途のかはきり灸。

ト槍を腹へ突ッ込み

アツヽヽヽヽ。

權八　ハテ、仰山な三里の灸。

八重　門に調ぶる絲竹の

權兵　笛の音色は巣ごもりの

權八　鶴は千歳といふものを

八重　盛り短かき

權兵　今際の別れ。……アツヽヽヽヽヽ。

ト思ひ入れ。また唄になり、この模樣仕組みよろしく、唄一ぱいに切れる。

こらへかねたる灸据ゑの、これでも侍ひ、有竹丹助。

八重　ヤ、、そんなら違はぬわたしの父さん。

權兵　娘と知つて勸めし切り粉。

權八　二人が二人に苦痛の樣子、もしや藥に用ふる血汐

ト下家を見やる。

權三　親子の生血とゝのふとて、無くて叶はぬ彼の一藥。この修行者が持參の手の内。

ト藥の包みを投げ込む。權兵衞取つて

權兵　ヤヽ、表に窺ふ

權八　すりや、梵論字の

ト下家を見やる。この時以前の金毘羅參り二人、窺ひ出て

○へ　小紫、見附けた。

ト權八にかゝる。門口に捕り手出て

捕手　まさしく笹野。

ト權三へかゝる。兩方一時の立廻りあつて、天蓋落ちて權三のこしらへ、二人の捕り手を尺八にて當てる。二人見事に倒れる。二階の○△立廻りのうち、權八の女小袖脫げて、下は紋附き、權八の形にて、鬘は若衆と見える仕掛けにて、助市の一腰を構へ、二人を取つて下家へ投げる。○△見事にかへる。此はずみに八重梅と權兵衞の前にたてたる屛風倒れる。八重梅は上着の肌脫ぎ、下には振り袖を着込み、煙草庖丁にて乳の下を搔切りゐる體。權兵衞は槍にて腹切りの體。空に月魄上がる。四人とも一時に顏見合せ、キッと思ひ入れ。この時遠寄せの頭を打込み、直ぐにほぐれて通り神樂、誂への合ひ方。所々にて早拍子木を打ち立てる。

權三　すりや權八には、あの夜に紛れて

權八　この家へ賴つて窺ふ今宵、權八なりと駈け込む八重梅。

八重　夫に代る心には、網のかゝりし囚人駕籠。さは知らずして半七どの、駕籠を破つてこの家を敎へ、急ぎ天國、權八樣へ、お渡しなされと貰うた劍。血汐の穢れを憚つて、卽ち爰に

ト天國を差出す。權三取つて

權三　すりや實義ある長九郎、あの半七へ遣はせし、その天國を八重梅に、渡せし心は、三勝殺せしその云ひ分、妹の彼れに送りしならん。寶も出づるその上に、自殺いたせば金瘡の

權兵　お役に立てんと今日の今、めぐり逢ひたる實の親。以前小者の丹助が、取逃がしたる百足丸。その槍先きで、主人のあなたを

權三　さてこそ皮肉の間を除け、心あつての槍先きに、殊更象身のこの權三。

權兵　役目といへど御主人を、突き貫きし非人は御家來、天罰直ちにこの槍で、腹掻切つて申し譯。殊に半七三勝様、敵同士なる主從と、知つたる上に頼み手の、あるを幸ひ母親と、僞り事の緣切りが、跡にて聞けは皆仇事。

八重　姉さんまでが非業の最期。

權八　して又權三が下部にて、この權八を隱まふ心は。

權兵　それぞ主人の仇敵、外へ逃がさぬ下郎が手立て。殊に最前、以前の女房、話しで知つたる娘は八重梅、親子男女の二人が血汐。

權三　この一藥に交へて白井へ。

權八　心づくしの親子の生血。

ト二階よりツカ／＼と下りる。此うち權兵衛、八重梅を引寄せ、流るゝ血汐を鉢に滿へて

權兵　サヽ、藥に混じて

ト薬もろとも出す。權八取つて

權八　敵の我れをさほどまで

權三　これ皆武士の恩義の二つ。

ト此うち權八、鉢の中なる血汐を服む思ひ入れ。

良薬用ふる上からは、快氣は目前。殊に大願出る上は、今二品は陰陽の

權兵　御判は即ち鈴ケ森、あの暗まぎれ、怪しき品、口に咬へて思はずも、この腹中に納まりしが、今切る腹の臟腑に、あり／＼。

ト臟腑に搦みし御判を差出す。權三、手桶の水にてその血を濯ぎ

權三　ヤヽ、これぞ誠に陰陽の

權八　二品揃ふ上からは

權三　殿へ差上げ、お家の納まり。

權八　只不便なは助市が、身の云ひ譯を片袖に、殘してわれと返り討ち。

ト片袖を見せる

權三　養父の敵は本庄白井。これより直ぐに鎌倉へ、めでたう出立。

權兵　親と娘はあの世へ旅立ち。
八重　菩提の爲の比翼塚。
權三
權八　あと懇ろに
　　　　ト思ひ入れ。○△立ち上がつて
○△　さてこそ二人が
　　　　トかゝるを、權三權八ちよつと立廻つて、帯は解け、白の絆纏兩人の手へ一つ宛のこる。思ひ入れ
　　　　あつて
權三
權八　これ幸ひの敵討ち。
權三　討ち、討たるゝも
權八　天運次第。
兩人　然らば此まゝ。
八重　隨分御無事で
權兵　モシ。
　　　　ト槍を差出す。權八取つて思ひ入れ。

○△　うぬを

トかゝるを、権三は天國にて○を切る。権八は槍の穂先きにて△を突く。兩人一度に苦しむ。この時微かに空に雷鳴、雨車。槍の穂先きへ件の百足現はれる。権三は虚空を見上け、権八は百足を見詰めて

権八　これぞ世にいふ百足丸。

権三　俄かの雷鳴、劍の奇特。

ト権八、肩先きの癒えし思ひ入れあつて

権八　忽ち癒ゆる我が金瘡。

権三　これも二人が忠心、貞心。

権八　思へば不便な

ト兩人は権兵衛と八重梅の苦しみを見て思ひ入れ。これにて切りかけし手先ゆるむゆゑ、○△立ちながら落入る。権三権八氣を變へて、双方を見事に投げる。此うち権兵衛と八重梅は落入る。権三権八は不便の思ひ入れにて見合す。この途端に木の頭。兩人泣き落す。よろしくキザミ、ひやうし

幕

第二番目　大切

大山道敵討の場

役名――笹野權三。白井權八。本庄助太夫。白井兵左衞門。野ざらし半七。幡随長兵衞。伊豆ノ次郎祐兼實ハ赤澤十内。

本舞臺、三間の間、向う黒幕。正面御矢來。左右の袖草土手、裾は石垣、書割りの張り物。舞臺前浪板。すべて高輪大木戸の體。浪の音、禪のツトメにて幕明く。

ト爰に役人藤馬、四天の捕り手四人、菖蒲革の足輕二人、突棒、刺又、袖搦みな持ち、立ちかゝるを長兵衞、着流し一本差し、羽織を肩に掛け、留めてゐる。舞臺所々に高張り提灯など打毀せし體にて散亂しており、眞中に半七、青網の破れたる囚人駕籠に腰かけてゐる見得。藤馬皆々十手をかまへ

藤馬　ヤイ／＼、大切の囚人權八の、網乘り物を打破り、落しやつたる不敵な奴、殊更その身もお上より、お尋ね厳しき野晒し半七、重罪人の身を以て、かゝる大膽いたせし曲者、かばひ立てする不敵の町人。して其方は

皆々　何者だ／＼。

ト立ちかゝる。

長兵　アヽ、モシ〳〵、どう致しまして、お上よりお尋ね厳しき科人を、何しにかばひませう。御用先きの妨げを致しまして、よいものでござりまするか。生得無暗向う見ずな私しでも、恐れるところは、却つて外の人より恐れまするが、權八どのゝ網乗り物を、破つて逃がしたといふ男を見ますれば、萬更知らぬ者でもござりませぬ。私しめは花川戸の、幡隨長兵衞といふ者でござりまするが、ちつとあの者に云ひたい事も、聞きたい事もござりまするゆゑ、恐れながら、しばしの御猶豫がなりませう事なれば、お役人様、へイ〳〵、お願ひ申しまする。

トこなし。

藤馬　すりや、其方が幡隨長兵衞とな。イカサマ、聞き及んだる男達、其方が願ひとあれば、しばしは猶豫いたしてくれうワ。

長兵　へイ〳〵、それは有り難うござりまする。これはあなた方、暫く御容赦をお願ひ申しまする。

ト皆々へ挨拶して、半七の側へ來り、こなしあつて

野晒し半七、久し振りで、變つた所で逢つたなア。

ト思ひ入れ。合ひ方になり、半七こなしあつて

半七　花川戸の頭、長兵衞どん、こなたの方から義絶して、平常は物も云はない、この野晒しへ。

長兵　聞きやれ。内の野郎どもを連れて、二三日あとに惠方詣りから氣が紛れ、品川の増本で、居續けうつての歸りがけ、通りかゝつて樣子を見りやア、この場の始末。コレ半七、おぬしは歷とした茜足袋の息子株で、何もこの長兵衞が子分といふではないが、馴染んだ女の貰ひ引き、はした喧嘩の仲人から近附きになつて、ごろつき仲間の兄弟分。おぬしが行跡、少つとこの長兵衞が氣にいらぬゆゑ、義絶して今日が日まで、どこで逢つても知らぬ同士、面を反けてゐた仲も、通りかかつて樣子を聞けば、その身もお上のお尋ね者、お手にあはゞ忽ちに、木登りするを知りながら、飛んで火に入る夏の蟲。警護きびしい權八どのゝ、網乘り物もこの通り、落しやつたるその働き。天晴れ出かしたその性根玉を、今日が日まで見そこなつたは、幡隨院が一生のあやまり、不請して下さいよ。

半七　婆娑の名殘りに長兵衞どの、その詞を聞く上は、こなたの異名の幡隨院、名僧知識の引導より、この半七は浮かみますぞえ……サア、お役人樣、キリ／＼繩打ち、引かッしやりませ。

藤馬　イヤ　おのれは不敵な奴だわえ。成る程、權八が詮議は追つて。コリヤ／＼、者ども、半七に繩を打て。

捕手　ハヽア。

ト捕り手は半七を縛り上げる。長兵衛思ひ入れあつて

長兵　出かした半七。おぬしが代官所へ引かれるうち、期を延ばさば、權三どのと權八どのたばにからげ、あの三勝へ未來の土産。

半七　天國手に入るその上は、互ひに大事の御身ゆゑ、權三どのゝ人殺し、網を破りし重罪も、十世一

長兵　遲れ先立つ世の習ひ。遲かれ早かれ、おれも跡から

半七　イヽヤ、決して急ぎはいらぬ。隨分ゆつくり

長兵　そんなら半七

半七　長兵衛どの、

長兵　あの世で逢はうよ。

藤馬　科人、立たう。

半七　頭、回向を賴みやすぞえ。

ト時の太鼓、三重になり、藤馬先きに半七、捕り手皆々向うへ入る。長兵衛あと見送り、思ひ入れあつて

長兵　ハテ、奇特な奴だ……ほんに。思ひ出せば、いつぞや鎌倉で、通りかゝりといひながら、互ひに

養父の敵ぞと、權八どのに權三どの、切り結んだる白刃と白刃、忠孝二つと仲人に立つて、紛失なしたる寶の出るまで、この長兵衞が預つたが、その短刀が權八どのゝ手に入る上は、親の代からお出入り屋敷の白井本庄、再興なすは近いうち。それにしても、あの惡者の野晒しめは、見上げた魂ひ。成る程なア、世の中の人と、煙草の善し惡しは、煙りとならねば

ト この時、本釣り鐘ゴンと鳴る。

アヽ、もう明け六つださうだ。

ト 思ひ入れ。馬士唄にて、道具廻る。

本舞臺、正面葭葺きの小宮、金毘羅大權現と書きたる白布の戸帳を下げ、奉納の繪馬大分。左右に、三立目に殘せし刃引きの白刃、これを繪馬にかけ、願主白井氏、一つには願主本庄氏と記し、納めある體。上下の杉の枝より油紙帳を吊り、修行者野宿の體。この下の方に、武藏相模國境と記したる榜示杭、すべて戸塚境木の體。時の鐘、馬士唄、驛路の鈴にて道具とまる。

ト 爰に久内、侍形、大小にて、弓張りを持ち、運平、屋敷飛脚にて、狀箱を首に掛け、飛脚提灯を持ち、宮の椽に腰を掛けてゐて

久内 コレ〳〵運平どの、貴樣は殊の外急用と見えるな。

運平　左樣でござりまする。久内樣、お聞きなされませ。大江のお屋敷では御家督の御譲り、無くて叶はぬ陰陽の御判、まつた天國の劍、日延への日限明日限り。それゆゑ御惣領千鳥之助樣は御切腹、御家督は弟御の志摩五郎樣と、あの蒲樣のお屋敷へ、お知らせの早飛脚でござる。

久内　それは御苦勞千萬。拙者も工藤家の御連枝、次郎左衞門祐兼樣のお供にて、藤澤宿にお泊り、明朝のお立ちについて、殊の外取込みでござる……然らば、その後、ゆる〳〵御意得ませう。

ト久内は下座へ入る。運平殘り

運平　ハテ、あの久内どのは附合ひの無い男だ。併し、急の御狀、どりや蒲樣のお屋敷へ參らうか。

ト時の鐘、身ごしらへして、草鞋の紐を結びゐる。この時金毘羅の戸帳が明け、内より權三、白き帷子、金毘羅詣りの形にて、一腰を差し窺ひ出て、行かんとする運平を捕へ、狀箱を引ッたくる。

ヤ、うぬ、金毘羅詣りめ。大切なる主人の御狀、サ、返しをれ〳〵。おのれらが見て役に立たぬ物、戻しをらぬか。

ト立寄るを、見事に投げ、狀箱の蓋を明ける。運平またかゝるを、とつて投げつけ、足下に踏まへ、狀を月あかりにかざし見て

權三　さては若殿切腹と、御身の大事を披露の書面。今ぞ火急の主家の大事、今宵思はず兩人とも、宿

りし社は金山彦、金毘羅應護の利益なるか。エヽ、忝ない。

蓮平　おのれ、その狀。

ト　かゝる、金剛杖にてくらはす。これにて下座へ逃げて入る。權三は宮の方に向ひ

權三　コレ同行、目が覺めてか。お家の大事が

ト高聲に呼ばはる。宮の内より權八、同じく行者の形、白の帽子、一本差しにて出て來り

權八　一大事とは氣遣はしい。仔細は何と。

權三　蒲との屋敷へ急ぎの飛脚。書面のおもては

ト狀を渡す、權八見て

權八　まことや、お家の一大事。屋敷へ送らば主人の御身、爰で直ぐさま

ト狀を寸々に引裂き

二品揃ふこの樣子を、直ぐさま屋敷へ。

ト行かうとする。權三引とめ

權三　イヤ、その寶の出でたるは、おてま八ばかりの働きならず。身共が二品持參する。扣へておゐやれ。

權八　でもこれまでの憂き艱難、命を的の寶の詮議。それのみか養父の敵さへ、眼前見遁がすこの權八、

權三　そりや此方も同じ事。敵同士は相身互ひ、殿の御難儀救うた上、權三が養父の仇たる權八。

權八　是非この品は拙者が持參。

ト天國の白鞘、袱紗包みの御判、二品持つて行かうとする。

權三　權三に渡さにや、養父の敵を

ト拔かうとする。權八押へて

權八　然らば敵は此方も

ト腰刀へ手をかける。兩人ちよつと立廻り。この時上の方紙帳の中より、助太夫、下の紙帳より兵左衞門、兩人とも世話六部の形にて走り出て

助太　こりや待て權三。

兵左　急くな兩人。

ト留めるを振切り、突きのけ〳〵立ちかゝるを、助太夫兵左衞門心附き、宮の左右に懸けたる白刃の額二枚を、てんでに取つて二人が中へ分け入り、件の額を寄せて、キツと留めて

助太
兵左　必ず急くな、早まるな。

権三 ヤヽ、あなたは養父助太夫様。

ト これにて兩人心附き

權八 誠に親人、存命にてありけるか。

兩人 仔細のあらん。サヽ、なんと。

ト 變りし合ひ方。

助太 その仔細こそ誠に珍事。この助太夫が存命も、いつぞや六浦の磯際にて、權八の爲に思はぬ手疵、淺瀬ながらも海に入り、水死と思ふ其うちに、下ろしある四つ手網、それに縋つてやう〳〵と、引上げくれしは幡隨長兵衞。

兵左 兵左衞門も、數ヶ所といへど皆かすり手。陸に上がつて長兵衞に、面談なせば早兩人は、水中を潜つて立退く其あとに、捨て置く白刃をよく〳〵見れば、二腰ともに刃引きの樣子。さてこそ北條時政公、二人の刀を預かりて、お渡しありしに慥かに刃引き。詳しき樣子は往來に認め置けば、これにて疑ひ、晴らせよ兩人。

ト 助太夫兵左衞門、めい〳〵懷中より出して兩人に渡す。

權三 權八 すりや、往來に、詳しき樣子を

ト開き見て。

權三「ナニ〳〵「二人の若者、天晴れの侍ひなりと惜しませ給ひ、兩方咎めぬ情けのほど、さては知らずして兩人とも、兩家の親を討つたりと、存じ違ひの敵同士、殊に我れ〳〵兩人は、肌身離さぬ象頭山のお守り」

權八「殊に身共は水天宮のお守りまで、所持せしゆゑに安々と、二人が二人守りの奇特。されども二親存命と、披露いたさばお家の佞人、寶の納まり氣遣はしく、暫し姿を隱せよと、時政公の仰せを受け、養父二人は廻國修行」……ヤヽ、詳しく記せし

助太　その節殘りし刃引きの刀は、まッこの如く繪馬に懸け、金毘羅宮へ。

權三　さすれば身共が討つたりし、兵左衞門どのも存命にて

權八　この權八が切り込みし、助太夫どのも堅固の上は

權三　討ち、討たるゝの疑念も晴れ

權八　互ひの親々御安泰。

兩人　これにて二人の仇討ちも

助太
兵左　イヽヤ、討つべき敵があるぞ。その跡早う。

ト兩人往來を聞き

權三「おことら二人は河津の胤、殊に双子の兄弟にて、都にありしその砌り、風折といふ女に馴染みその胎内に生れし二人、藁の上より身共が養育、卽ち幼名、京の次郎と云ひしは權三。」

權八「權八ことは三郎とて、白井へ養子、腹は變れど曾我殿原とは正しき兄弟、然るに家來赤澤十內といふ者、三ヶの莊の系圖を奪ひ、主の風折殺害なし、お尋ね者となりしゆゑ、變名なして寺西閑心、町醫の世渡り。」

權三「奪ひし系圖を餌となし、蒲どのに取入つて、今のその名は次郎左衞門祐兼とて、伊豆一ヶ國を領地なし、富士の根方へ檢見の役目。母の敵はその十內」

兵左 彼奴を討たずば孝道立つまい。兩人ともに

兩人 心得たるか。

權三 さては我れ〳〵兩人は、河津の胤にて双子の兄弟

助太 京の次郎と云ひしは其方。

兵左 幼名、京の三郎こと、養子となして白井權八。

權八 すりや兩人は曾我どのに、矢張りゆかりの双子の落胤。さうとは知らいで、權三どの

權三　權八どのも誠の兄弟、夢にも知らざる二人の素性。不思議な縁で

兩人　あつたなア。

權三　只憎くきは家來十內。系圖を奪ひその上に、母を討つたる人非人。

權八　いつぞや逢うたる寺西閑心、

權三　面體覺えあるからは、母の敵を

兩人　討たいでおかうか。

ト思ひ入れ。

助太
兵太　して、我れ〳〵が失ふ品は

權三
權八　お二人樣へ、直ぐさまこれにて

ト天國と御判を、助太夫兵左衞門へ渡す。

助太
兵左　誠に二品。エヽ、忝ない。

權三　然らばこれより敵討ち。幸ひなるかな象頭山、行者姿の白出立ち。

權八　金毘羅應護の御利益にて、形も其まゝ敵討ち。

助太
兵左　藤澤宿を七つの出立。

權三　先きへ廻つて四ツ谷の別れ路。
權八　大山道の追分けにて
助太
兵左　いそふれ兩人
權三
權八　おのれ十内
　　ト行かんとする。運平は馬士一人を從へ、窺ひゐて
二人　今の御状を
　　トかゝるを、權三權八、二人を引敷き、キツと見得。時の鐘にて、この道具ぶん廻す。
本舞臺、うしろ黑幕。上の方に石の不動尊。石塔に大山道四ツ谷宿と朱にて書き、所々に杉の大樹。七つの鐘かすめて、禪のツトメにて道具とまる。
ト馬士唄になり、向うより旅形の供廻り、三階殘らず惣出にて箱提灯、弓張り、旅荷物大分、其うちに旅乘り物舁いて出る。駕籠脇に久内附添ひ、この人數舞臺へ來り
久内　お乘り物、暫く。
皆々　ハア。

ト乘り物をよき所へ下ろす。久內、駕籠に向ひ

久內　只今打ちしは、藤澤寺の七つの鐘。して御前には件の系圖、矢張り御所持でござりませうな。

ト思ひ入れあつて

へイ〳〵、承知仕りました。然らば馬入川をば夜明けぬうちに

ト同勢に向ひ

いづれも聞かるゝ通りの仰せ。急いでお供いたされてよからう。

皆々　ハアヽ……お立ち〳〵。

ト駕籠を舁き上げる。この時、權三權八飛んで出て

權三　母の敵の赤澤十內、變名なして豆州祐兼。

權八　河津が落胤、双子の兄弟、系圖を渡して速かに

權三　勝負いたせよ。

兩人　下部十內。……いで、乘り物の

ト駈けよつてかゝる。內より戸を刎ねのけ、祐兼、野袴、羽織、大小の形にて、ツカ〳〵と出て、兩人を突きのけ、キツとなる。

さてこそ面體覺えある

祐兼　權三、權八、二人の奴等。さてはおのれら、風折が、産み落したる双子の兄弟。

權八　云ふにや及ぶ。母の敵の赤澤十内

權三　奪ひし系圖を渡すまじきや。

祐兼　小癪なおのれら。いかにも系圖は三ヶの莊、所持せし女の所望なせしに、渡さぬ風折、ぶッ放したは赤澤十内、今は國取り、次郎祐兼、敵なぞとは慮外な一言。間近く寄つたら、返り討ちだぞ

權三
權八　さてこそ敵、尋常に

ト詰め寄る。

祐兼　切り捨てろ。

ト禪のツトメになり、大勢抜いてかゝるを、兩人追ひ散らす。この間に祐兼、同勢に紛れ退く、權八は追うて入る。ト、爰にて夜明けの鐘、鶏の聲、知らせの柝にて黒幕切つて落す。遠目に見たる富士の景色、權三は久内と立廻つて切り下げる。それより大勢かゝるを、殘らず切りまくる。下座より祐兼權八、切り合うて出てくる。立廻りのうち、一卷を落す。權八取つて

權八　慥かに系圖の

祐兼　それを

ト寄るを、權三一太刀浴びせる。祐兼ひるむを、兩人切り附け／＼、キツとなつて

權三
權八　母の敵、覺えたか。

トゑぐる。助太夫、兵左衛門出かゝりゐて

助太
兵左　めでたい／＼。

供廻　動くな。

ト取卷く。

權三　まづ今日はこれぎり。

トめでたく

打出し

東海道四谷怪談

とうかいだうよつやくわいだん

東海道四谷怪談

序幕

淺草觀世音額堂の場
宅悅住居の場
裏田圃の場

役名——小間物屋、與七實ハ佐藤與茂七。奥田庄三郎。伊藤喜兵衛。同娘、お梅。同乳母、お槇。たいこ醫者、尾扇。藥賣り、直助。藥賣り、藤八。お岩妹、お袖。四谷左門。茶屋内儀、お政。通人、文嘉。柏屋彦兵衛。大三つの升太。按摩、宅悅。宅悅女房、お色。伊右衛門妻、お岩。民谷伊右衛門。

本舞臺、三間の間、正面額堂、座元紋附きの團子提灯、掛け茶見世の道具よろしく、上の方楊枝見世、爰にお袖、やつし娘、浴衣にて、楊枝をこしらへてゐる。側に庄三郎、菰かぶりにて寢てゐる。額堂の内には、文嘉、通人の形。勝藏、店者のこしらへ。此方の床几に桃助、石藏、地廻りの形にて茶を飲んでゐる。お政、茶屋女房にて茶を汲んでゐる。双盤、大拍子にて幕明く。

彦兵　かみさん、ま一つおくれんか。
まさ　ハイ〳〵、大分おがはきなさいますな。
彦兵　えらう走つて來たさかい、かわきくさるわいの。
文嘉　かみさん、わつちやァゆるりとしやせう。
まさ　ハイ〳〵。

ト汲んできて

桃さん、もつと上げませうか。
桃助　踵でふんづけてくんな。
石藏　コレ、大概に飲みや。面が湯氣にあがるワ。カウ、氣をよくしてゐると、お飯を入れてくれと云ふぜ。いゝ加減にしやな。接待ぢやァねえわえ。
桃助　べら坊め、接待といふがあるものか。茶代は節句に水引で、結はへて持つて來て置くのだ。
石藏　おつゥ云やァがる。觀音樣の長芋ぢやァあるめえし。
桃助　カウ、お政さん、あの子はいつから出た。石や、見や、剛氣なもんだぜ。
石藏　剛氣に婀娜だな。おらァ初めて見たぜ。

まさ　その筈サ。あの子は昨日から代りに頼まれて出たが、楊枝見世にやア惜しいもんだなう。
桃助　ちけえねえ、粂三に其まゝだぜ。イヨ、大和屋々々々。
石藏　よせエ、可哀さうに、まぜッ返すなエ。
　　　トこれにて文嘉、彦兵衞も見て
文嘉　成る程、鮮かだの。カウ、ありやア何か、月三兩の三月縛りとでもいはざア、話しは解るまいかの。
まさ　なにサ、その癖さうでねえさうでござりますよ。
彦兵　ほんにきやうといものぢやな。なんと、花三本ぐらゐで話しは出來まいか。
まさ　左樣サ、出來ない事もござりますまいよ。
桃助　そんなら地獄をするか。
まさ　どうして、そんな事はしめえわな。
石藏　風が惡いと思つて、おらッちには、隱すの／＼。
まさ　ナニ隱すものかね。本當に堅いとよ。
桃助　しら／＼しくお前のやうに嘘をつく者はねえぜ。

石藏　年中大筒の額の下で、商賣をしてゐるから、鐵砲は當り前だらう。
桃助　鐵砲と云やァ聞きねえ。奥州の獵人が、素的な木菟を生捕つて來て、奥山で見せるさうだ。
石藏　さうか。この繪圖か。
桃助　それよ。

ト柱に掛けてある繪圖面を取つて見せる。

彦兵　これかいな、えらい物ぢやな。
文嘉　なんだ、丈の高さが五尺五寸、胴の大きさが四尺二寸……こいつは大層な木菟だの。

ト皆々立寄り見る。双盤太鼓にて、向うより喜兵衞、袴、大小、老けたる拵へ。お梅、振り袖の娘。お槇、乳母の拵へ。尾扇、醫者にて、中間一人附き出て來り、花道にて

喜兵　コリヤお梅、今日は大分氣合ひもよささうなが、あまり又押して歩行いたすにも及ばぬことだ。駕籠なと申しつけうか。
うめ　イエ〳〵、私しは矢ッ張りこれがよろしうござりますれど、あなたが嘸お氣まだるう思し召しませうと存じまして。
まき　サア、何事も其やうにお氣遣ひ遊ばすのが、それが矢ッ張りあなたの御持病。今日は御保養かて

らの御參詣、お氣儘におひろひ遊ばし、また御下向には、なんぞお氣に入りましたお人形でも、大旦那樣へおねだり遊ばしませ。

尾扇　左樣々々、兎角にその御病症には、御鬱散が肝要でござります。ちとあれなる茶屋にて、御休息遊ばしまするがよろしうござりませう。

宮兵　イカサマ、左樣いたさう、サ、來やれ〳〵。

ト皆々舞臺へ來り、床几へ腰をかける。

まさ　ようお出でなされました。

まき　御覽遊ばせ。此やうにも御參詣絶えず、群集いたします觀音樣はござりませぬ。今日は私しも、とも〴〵に、御願がけ致しまするほどに、あなたにも、彼のお方に早う……サア、早う御利益にて、御本復遊ばすやうに、御信心遊ばしませ。

うめ　此方がこれ程思うてゐても、あなたの方にはよそ外に、又どのやうな……お神籤など、取つて見やいなう。

ト思ひ入れ。

まき　畏まりました。私しが呑みこんで居りまする。

尾扇　イヤ又、數多の醫書をも見たなれど、娘ッ子の病症を見定めるは、乳母にはしかずと、千金方に論じてござるて。全くこれは、戀煩ひと見えまするて。

　トお梅、恥かしき思ひ入れ。

まき　また尾扇さんの、其やうな事を。

桃助　石や、聞いたか。あのお孃樣は戀煩ひだとよ。てめえを思つてゐるのぢやァねえか。

石藏　うさァねえ。戀の煩ひなら、瀧に打たせて見ればいゝ。

彥兵　大切な錢金遣うてさへ、容易に出來んものが、女子の方から煩ふほど慕ふとは、どこの和郎か、えゝ月日の下に生れくさつたなァ。

文嘉　此方でよければ、お寢間の伽に行きてえね。

桃助　モシ、おつう云ひなさるね。

喜兵　たとへ戀ひ病であらうとも、氣にいつた男なら、金にあかしても聟に致し遣はす。ハテ、當時出頭の師直樣の御家來、伊藤喜兵衞が一人の孫……ナァ尾扇老、乳母もとも〴〵、お梅が胸中承つた上では、また如何やうとも取計らうて遣はさうほどに、左樣心得めされい。

まき　畏まりました。この儀は又私しが、追つて申し上げまするでござりませう。

尾扇　それが宜しうござるて。何事を仰せ出されうが、これが一つ出來ぬと申す儀はござらぬて。少々御不快とあれば、御保養の故とござつて、四ッ谷町邊に御別莊をもおしつらひ。何でもあなたの御意次第でござりまするて。

喜兵　イヤモ、それも全く御主人、師直公の御發明と申し、御威勢によつて我れ〳〵に至るまで、斯く活計歡樂に年月を送ると申すものぢや。見さつしやれ、我が君に敵對いたせば、鹽冶どのゝやうに、家國をも失ひ、家中の者ども、散り〳〵と罷りなるて。左樣な狼狽へた主人へ、仕官いたすもこれ因緣。それを思へば、冥加至極の身の上ではないか。

尾扇　左樣でござりまするて。

トこれを聞いてお袖、無念なこなし。菰をかむりし庄三郎も、顏を上げて同じく思ひ入れ。矢張り右の鳴り物にて、向うより直助、藤八、二人とも藤八五文の藥賣りにて、呼びながら出て來り、花道にて

藤八　カウ直助、てめえ今日は本郷から板橋の方を流すと云つたぢやアねえか。なぜ爰を流すのだ。

直助　サア、おれも少つと此方に用があるから、斯う向けて來たのよ。

藤八　コレ隱すな、知つてゐるぜ。てめえこの頃ぢやア山の女にかゝつて、賣り溜も親方の方へ遣らね

えさうだが、そんな事があつちやァ、外の賣り子へも外聞が惡いぜ。

直助　ナニサ、わッちやァ跡月から、大山道者を當てに、川崎の方まで流して行つたワ。その賣り溜を、谷中の方まで持つて行かれるものか。いつか一度は持つてゆくわな。

藤八　おつう根締めをきめてゐるな。きめると云へば、大三ッで一合きめようぢやねえか。

直助　そいつもよからう。

藤八　サア〳〵。行くべえ〳〵……藤八五文。

直助　奇妙。

ト呼びながら二人は舞臺へ來る。お政見て

まさ　一服のんでおいでな。

直助　アイ〳〵。

桃助　オイ〳〵、一つくんな。

直助　ハイ〳〵、

石蔵　オイ〳〵、爰へも一つくんな。

藤八　ハイ〳〵。

石藏　カウ、こりやァ何にきくの。
藤八　第一、癪のつかへ、頭痛眩暈。
直助　腎精を増し、脾胃を補ふ。岡村藤八、オランダの傳法でござります。
文嘉　そいつァ耳寄りだね。おれにも一つくんな。
直助　ハイ〳〵。
彦兵　わしも求めようかな。
藤八　ハイ〳〵。
藤助　これは有り難うござります。
まさ　掛けておいでな。
直助　今日は大分お取込みでござりますから、お紋さんの見世で一服やりやせう。
藤八　又ぴりにかゝりやァがる。そんならおらァ、大三つで待つてゐるぜ。
直助　氣前を見せて、いゝのを二合半とくらはせやな。
藤八　そんなら早く來さつし。待つてゐるぜ。
直助　アイサ。今に行くワ。

ト藤八、呼びながら下座へ入る。直助、楊枝見世の方へ來て

そで　お袖さん。お前昨日から見世へ出たさうだの。

そで　それいなァ、爰のお紋さんに頼まれて、それでわたしが名も、矢張りお紋というて、昨日からこの見世へ。

直助　アヽさうかえ。そんなら藤八お紋奇妙、遁がれぬ仲だ。マア、一服やらかしやせう、一つお貸し。

ト楊枝見世に腰をかける。

そで　サア、のましやんせ。

ト行火を出してやる。神樂になり、向うより宅悦、按摩の拵へにて出て來て、すぐに舞臺へ來て

宅悦　おかみさん、今日はお賑やかでござりますね。

まさ　オヤ〳〵宅悦さん、先刻からぬしが待つてお出でだよ。

文嘉　時に按摩さん、おつりきな奴があるなら、ちよつぴり行きてえの。

彦兵　此方にも格好な代物を、一ト切り頼みますぞや。

宅悦　好いのがござりますとも。わしの所は、按摩と灸を据ゑるが商賣、その片手業に致しますから、お出でなさいまして、年增が圍ひたければ大をする。中年增は中、娘は小をする。又グッと

大年増は、袋艾をするゑてくれろと仰しやりますれば、そのつもりで呼びにやります。

文嘉　成る程、そいつは奇妙。

ト手を打つ。

直助　御用かね。

文嘉　ナニサ、内證の話しよ。どうでおいらは大にしよう。

彦兵　此方は小にしてほしい。

宅悦　まづ見てからの御相談になされませ。

ト桃助、この話を聞き

桃助　カウ、按摩さん、お前の所では地獄をするのか。

石藏　そんならおいらも買ひに行くぜ。

桃助　道理で又がそんな話しをしたッけ。ずるい坊主だぜ。

宅悦　どう致しまして、わしが宅で其やうな事を……尤も灸點の看板は、女が閻魔へ灸をするゑてゐる看板ゆゑ、そこでお客方が、地獄へ行かう〳〵と仰しやりますて。一月を十日づゝに仕切つて、一分二朱ぐらゐでお出でなさるゝを、これを十日づゝ地獄と申して、割は別してお得用でござりま

す。また大の方がお好きなら、熱い事は焦熱地獄、取分け大なぞは、ようきゝまするて。
文嘉　そんなら、ちよつと据ゑてもらはう。
彦兵　わしも腰の輕くなるやうに、燒いて來ようか。
文嘉　そんならかみさん、歸りに寄りやす。
まさ　お待ち申しますぞえ。
宅悅　サア、御案内いたしませう。
　ト矢張り右の鳴り物をかり、宅悅先きに、文嘉と彦兵衞は下座へ入る。桃助は石藏に囁やき
桃助　何でも彼奴が内で、ヽヽえてをするにやァちげえねえ。
石藏　行つてごだついてやるべい。
桃助　サア、來やく。
　ト二人は宅悅の跡を追つて下座へ入る。
喜兵　さてく、何を申すやら、一えん解らぬ事どもばかりぢや。
尾扇　イヤモウ、がさつな儀でござります。
まき　ほんに私しと致しました事が、御新造樣から、お楊枝をおことづかり申して參つたに、とんと打

ち忘れましたでござりました。幸ひあれにござりまするが、どのやうなのが宜しうござりまする
か。お慰みにあなた、御覧遊ばしませぬか。
うめ　女子どもへ土産に、調べて遣はしませうか。
喜兵　オヽ、さうしやれ〳〵　おのしも參つて見てやりやれサ。
ト皆々楊枝見世へ來て
まき　お土産は斯樣いたしませう……福に羽根楊枝と房楊枝と……御覧遊ばせ。江戸香と申しまする歯
磨にも、矢張り御贔屓の成田屋の似顔が描いてござりまする。
うめ　尾扇さん、お前も、歯磨などお取りなさんせぬかいなア。
尾扇　イヤ〳〵、愚老は少と心願の儀がござつて、楊枝歯磨ならば斷ち物でござる。あなたのお土産に
は、あれ、あそこにござる役者の紋所を描きましたのは、どうでござりまする。大方、梅幸か、
三升なぞが御意に入りましたらうな。
まき　ほんに、其やうなのが宜しうござりませう。
喜兵　何にせい、コレ女子、いろ〳〵取揃へて、これへ出しやれ〳〵。
尾扇　サヽ、早く御覧に入れさつしやい。

ト このうちお袖、知らぬ顔をしてゐる。

喜兵 この女めも何をウッカリ致して居るぞ。早く出さぬか〳〵。

そで 申し、あなた方は、たしか高野の御家中でござりまするな。

喜兵 ハテ、この女も、商賣は致さず、異な事を訊く女子ではある。いかにも師直公の藩中ぢやが。

そで サア、それなれば賣られぬゆゑ。

喜兵 高野の家中へ賣られぬとは、そりや又なぜ。

そで あまり御威勢が強いゆゑ、お求めなされたその上で、御意に入らぬその時は、又どのやうなお祟りを、受けまいものでもないゆゑに、それでどうも賣られませぬわいな。

尾扇 ハヽア、さては鹽冶浪人の身寄りの者と見ゆる。エヽ、賣らぬと申さば買ふまいワ。軒を並べていくらもあるわサ。

そで 外でお求めなされませ。

尾扇 それをおのしに習はうか。こいつ出過ぎた女めでござるわえ。

ト 直助、中へ入り

直助 コレサ、どうしたものだ、そんなに愛嬌のねえ……イエ旦那、これは斯うでござりまする。この

娘は昨日から、この見世へ雇はれて、代りに出ました者ゆゑ、楊枝の値段も、ろく／＼存じませぬゆゑ、それで只今のやうに申し上げたのでござります。必ずお氣にさへられて下さりますな。

尾扇　イヤ／＼罷りならぬ。餘りと申せば失禮な奴だ。

直助　そこをどうぞ、御堪忍なされて遣はされませ。

尾扇　なんのいらざる庇ひ立て。われもよく五文と出る奴だ。

喜兵　ハテ、打つちやつて置きめされ。たとひ鹽冶浪人が、どれほど御主人を恨まうとも、當時足利家にても格別のお扱ひにて、新地御拜領なされてお屋敷替へ。御威勢強きあなたに對し、扶持方離れた素浪人ども、いらざる我慢も貧からと、イヤハヤ、馬鹿な女ではあるて。

トこれを聞いて、庄三郎も無念の思ひ入れ。

尾扇　おのれ、屋敷へ連れゆく奴なれども、今日は其まゝにさしおくぞ。

まき　折角の御參詣、もうあなたにも、御料簡なされて遣はされませ。

喜兵　よしない事に參詣の妨げ、サヽ、來やれ／＼。

直助　これは大きに有り難うござります。

ト大拍子になり、喜兵衛先きに、お梅、お槇、尾扇に中間附いて下座へ入る。

カウ、お袖さん、坊主が憎けりや袈裟までと、お前の云ふのも尤もだが、あゝ云つて見た時にやア、すぐに敵へ氣取られるわな。併し、斯ういふわしも、以前はお前の親御、四谷左門樣とは同じ家中の、奥田將監が下郎の直助。御短慮とはいひながら、御家中は皆ちり／＼。わづか小者のわしまでも、藤八五文の藥賣り。おれはまだしも、左門樣のお娘御が、今では楊枝見世の雇ひ女、これも時世と諦めて、貧しい暮らしもとも／＼に。

そで　かけも構はぬ小者の其方、それ程までに、この身を思うて。

直助　思うてどころか、屋敷にゐるその時から、附けて廻しつしてゐた事、まんざらお前も忘れはしまい。色になりと、女房になりと、なつてくれる氣はねえか。

ト云ひながら、お袖に寄り添ふ。お袖ムツとして

そで　以前其方は下郎の直助、わたしが父さん左門樣と、將監樣は同じ格式。その小者の輕い身でゐながら、浪人したと見くびつて、わたしを捕へてアタ嫌らしい。聞く耳は持たぬわいなア。

直助　何だな、輕いの重いのと、燈籠佛樣へ願がけをしやアしめえし。元は小者にもしろよ、運が向きやア賣藥うりでも、二十や三十の元手はコレ、爰にも持つてゐるサ。お前がウンとさへ云へば、おれも又、三度飛脚へ狐の附いたやうな形をして歩きもしねえワ。なんぞおつりきな商賣を見附

けて、お前だつてこんな所へ出しやアしねえ。どうだ〳〵。

　　ト云ひながら、しなだれる。お袖立つて

そで　たとへ有德に暮らさうとも、嫌な人には片時も。

直助　お前まだ屋敷氣質がやまねえの。それぢやアおれに恥をかゝせるやうなものだ。お袖さん、どういふものだ。

そで　エヽモ、知らぬわいなア。

　　ト振り放し、下座へ入る。直助跡を見送り

直助　あんなに又強情な女もねえものだ。口が酸くなつた。

　　ト茶見世の方へ來て

　　一杯おくれ。

まさ　アイ……カウ藤八さん、今聞けばお前の名は、直助さんといふさうなが、どつちが本當の名だえ。

直助　なにサ、藤八といふなア、この藥を賣る親方の名で、おれが名は直助サ。

まさ　さうかえ。さうして先刻から聞いてゐりやア、あの子を口說いてゐるが、誠に馬鹿〳〵しい。なんの、あんなのに口をすほめる事があるものかな。あの子はあゝ見えても、エテに出るわな。

直助　なに、エテに出るとは。

まさ　コレ。

（ト直助に囁く。）

直助　そんなら直助に目に見せておいて、矢ッ張りさうかえ。それで出來りやア、奇妙。

まさ　口では立派な事を云つても、内證は火の車ださうな。

直助　そんならどうぞ、今晩すぐに

まさ　それだといつて、その形ぢやア

直助　そりやァすつぱりと極めてくるのサ。

（ト[illegible]トかすめたる大拍子、双盤の太鼓になり、向うより酒屋の小僧升太、徳利を提げたる樽拾ひの形にて出て來り

升太　大三ツはよろしうござい〳〵。

（ござい〳〵ト呼びながら來る。）

まさ　カウ直さん、行くならどうせいるから、五合取つておかうかの。

直助　いゝやうにしてくんねえな。

まさ　カウ〳〵、御用どん、藪の按摩さんの所へ、好いのを五合持つて行つてくんな。
升太　エヽ、あの地獄の看板の出てゐる、杜庵の按摩さんの所かえ。
直助　ナニ、按摩で杜庵もするのか。
まさ　さやうサ。
升太　丁度お前のやうな、怖い顏の閻魔が灸をするてゐるから。
まさ　なんだなこの子は。お客を捕まへて
升太　ナニお客なものか、この人は藤八五文だ。
直助　馬鹿を云ふな。これでも晩にやァお客さんだ。
升太　アヽ、そんならお前、あすこの内へ行くのか。いゝ年をして、よせばいゝのに。
直助　この小僧、色氣なしな事を云ふ奴だ。
まさ　そんな憎まれ口をきかずと、早く持つて行きな。
升太　持つちやァ行くが、置いて行けはあやまるぜ。
まさ　いゝ加減に口もきゝな。人も聞いてゐるわな。小僧のくせに。
直助　器に一本あるから、肴も少し氣取つておいてくんな。

ト お政へ錢四百文を渡す。

まさ　これぢやァ多いわな。

直助　剩りやァ茶代よ……小僧や、早く持つて行つてくれよ。

升太　そんなら錢は爰から取るのだな。

まさ　アヽしつこい、早く行きな。番頭さんへ云ひつけるによ。

升太　云ひ附けたら、味噌を買ひに來ても、まけてやりやァしねえ。

まさ　サァ持つて行きな。

ト 錢を數へてやる。

升太　そんなら行つて來よう……大三ツはよろしうござい〳〵。

ト 呼びながら下座へ入る。

直助　イマ〳〵しい餓鬼だ。ドレ、おれも出直して來よう……ほんに、これも遣つておかう。

ト 懷から二朱一つ出してお政に渡し

うまく賴んだ、あほりが肝腎だよ。

まさ　そこに如才があるものかな。阿母ァを手なづけて

直助　どうか今夜で病みつかせ
まさ　色にするとも、女房にするとも
直助　奇妙。ドレ、行つて來ようか。
　ト直助下座へ入る。お政跡を見送り
まさ　直さん、早く來なよ。成る程、口はきいて見やうものだ。酒の尻尾と、引手で三百、下駄でも買はうか。イヤ、矢ッ張り米屋へ入れておかう。ドレ、行つて來ようか。
　ト下座へ入る。双盤になり、向うより、づぶ六、泥太、非人のなり。願鐵、乞食坊主の形にて、左門、浪人者の親仁、編笠を持ち、皆々に引摺られ出て來る。少し跡より伊右衞門、黒羽織、大小、浪人の拵へにて出てくる。非人皆々花道にて
一同　サア、來やァがれ〳〵。
づぶ　太え親仁だ。此奴かほんの、乞食の上前取りといふのだ。
一同　何でも引摺つて行け〳〵。
　ト皆々、左門を捕まへて舞臺へ來る。
づぶ　コレ、わりやアどこの奴か知らねえが、おいらが仲間にも、渡り引きのあるものだワ。

泥太　われも只のぐれぢやァあるめえ。いゝ年をしやァがつて、馬鹿な野郎ぢやァねえか。

願鐵　青天井に草むしろ、一年中の寢所は、行きあたりバッタリ、蜘蛛にも附合ひがあない。

づぶ　まして土一升米一摑み、御繁昌の御地内で、敷石の上の住居だワ。サア、誰れに渡つて地内で貰つたのだ。

願鐵　何も云ふ事はねえ。頭の所へしよびいて行け。

一同　それがいゝ〳〵。

ト一同寄つて左門をこづく。

左門　おてまへ達の仲間に、左樣な作法のあると申す事も存ぜず、この所にて物貰ひ致し居つたは、身が不念、何分にも容赦おしやれ。

泥太　ナニ容赦しろ。容赦しろで濟むものか。サア、われが貰ひ溜めを、爰へ出せ〳〵。

左門　イヤ、往來の合力受けうと存じたのみ、未だ一錢も手取りは致さぬ。

づぶ　こんな奴を打ッちやつておくと、仲間のきまりが惡いワ。

願鐵　見せしめの爲に、着物も何もふん剝いて

泥太　筋骨を拔いてやれ。

一同　それがいゝ〳〵。

ト皆々寄つてたかつて左門を打擲する。伊右衛門この中へ入り、四人を隔て、左門を圍ふ。其うち下座より喜兵衛、お梅、お槇、尾扇、出て窺ふ。

伊右　イヤ〳〵、ちと待ちやれ〳〵。

ト伊右衛門と顏見合せて

左門　ヤ、こなたは

トちよつと思ひ入れ。

づぶ　モシ〳〵、あなた、知る人かは存じませぬが、わし等が渡世の邪魔をするこの親仁を、なんで留め立てなさるのだえ。

泥太　仲間の法を破られては

願鐵　おいら達の世渡りが出來やせぬワ。

づぶ　知る人でも構ふ事アねえ。

一同　ふん剝け〳〵。

ト騒いで立ちかゝる。

伊右　マア〳〵、待ちやれ〳〵。身共も敢へて知る人と申すではなけれども……それ〳〵、身共今日はちと志あつて、當觀世音へ參詣の道すがら、詳しい樣子は存ぜねども、何か老人を捕へて手籠めに致す樣子。勿論、當人にも心得違ひと存じ居らるればこそ、手出しもえゝ致されぬと相見ゆる。然らばこれにて理非は解り居るやうなもの。老體のお人、見る目も氣の毒に存ずるゆゑ、此お人になり代り、武士たる者が其方どもへ對して、詫びを致すほどに、此まゝに勘辨いたしてはくれまいか。

づぶ　ナニ勘辨しろえ。なんぼお侍ひ樣でも、乞食の法は御存じありやすまい。貰ひ溜めを出させた上、身ぐるみ脱がせて持つて行かにやア、仲間の法が立ちやせぬワ。

伊右　成る程、左樣な儀もあらうて。然らば斯樣いたさう。これに少々金子貯へ致し居る間、その詫び代と致し、遣はすほどに、此まゝに料簡いたしくりやれ。

ト鼻紙入れより一朱を四つ出してやる。左門見て

左門　イヤ、その金子借り受けては

伊右　ハテ何事もこの場は拙者に

ト思ひ入れ。

づぶ　ヤア、この旦那から一朱で四つ

一同　それは有り難うござります。

泥太　身ぐるみ剝いでも、一本が物は無えところへ、あなたがお出でなすつたばつかり、親仁にも仕合
せ。此方も仕合せ。

づぶ　外の奴らの來ぬうちに

願鐵　辨天山で一杯やらうか。

一同　それがいゝ／＼。エヽ有り難うござります。

ト皆々下座へ入る。左門あたりを見廻し、思ひ入れあつて

左門　御覧の通り、尾羽うち枯らす今の身の上、御深切、千萬忝う存ずる。只今の恩借は、明日屹度
返却いたすでござらう。

ト云ひ捨てたまゝ行きかける。伊右衛門は袂を扣へ思ひ入れ。

伊右　マヽ、ちとお待ち下されい。

ト合ひ方、風の音になり、伊右衛門手なつかへ

これはあなたのお詞とも存じませぬ。舅は親なり、聟は悴。たとへお岩と別れ居つたとて、あな

たは正しく實の親。

左門　サア、それゆゑにこそ今の金子、借りともなう存ずるゑ。

伊右　そりや又何ゆゑ。

左門　一旦聟舅の縁組みは致したなれども、最早娘のお岩も、此方へ引取るからは、聟でもなく、舅でもござらぬゆゑ。

伊右　左門樣、なぜ又お岩を返しては下さりませぬ。互ひに飽きも飽かれもせぬ仲、殊にはこの程懷姙いたし、子まで儲けし二人が仲。何があなたのお氣に入らいで

左門　そりや御自分の心に問はッしやれ。尤も娘お岩めも、不所存にてころび合ひ、親の許さぬ夫婦仲。畢竟、遣らう、貰はうと、きッとした仲立ちはなけれども、そりやこの道ばかりは別なものと、その儘に捨ておいたが、氣にはさえられな、聟のこなたの根性が、おれの氣に入らぬ。

伊右　ヤア。

左門　とサア、申す譯は、未だ御主人御繁昌の砌り、お國許にて御用金紛失。その預かりは早野勘平が親三太夫、越度と相なり、切腹いたして相果てた。その盗人もこの左門、よッく存じて罷りあれど、その論議中にお家の騷動、それゆゑたうとうそれなり、胸に包んで何事も、云はずにゐるは

伊右　身が情、それゆゑ娘は添はされぬ。

左門　黙らッしやい、左門どの、いま其許は、聟でもなく舅でもないとお云やつたぞよ。すりや赤の他人でござるぞよ。赤の他人の伊右衛門に向つて、ヅカヽヽと物云はッしやるが、して又何ぞ手前が盗んだと申す、證據でもござるのかえ。

左門　ハヽヽヽヽヽヽ。證據呼はりさつしやるは、自分の悪事を、自分の口から白状いたすやうなもの。その以前娘の所へ、結納の帶代にと、贈られたるその金子は、一兩々々お家の極印。

伊右　ヤア。

左門　それも云はぬが舅の寸志。その儘にして戻した事、貴公覺えがござらうがな。

伊右　イヤ、あの金は配分金。

左門　云はッしやるな。また騒動にならぬ前、なんで配分おしやつた。

伊右　サアそりやア

左門　口先き揃はぬ詞の端。それゆゑ娘はえゝ添はせぬ。

伊右　すりや、どうあつても

左門　今の恩借はきツと返す。お岩を返す事は罷りならぬ。

伊右　ならずばいゝワ。畢竟舅と思ふゆゑ、詞を盡し、手を下げて、持ち上げればつけ上がり、往來の人に合力受け、食ふ事もならねえ分際で、心が違ふの、氣に入らぬのと、痩せ我慢も貧乏から。

左門　身に錦繍をまとふとも、不義の富貴は望みにないワ。貰いでやらうと存じたに。身のほど知らぬ老ぼれめ。

伊右　なんと。

左門　どりや、歸宅いたさうか。

ト唄になり、左門向うへ入る。伊右衛門、跡見送り

伊右　この身の惡事を氣取つた左門、露顯いたさば後日の妨げ。最早生けては……跡追つかけて。さうだ。

ト早めたる双盤になり、伊右衛門、跡追ひかけて向うへ入る。喜兵衛みなく、山門の中より出て、跡を見送り

喜兵　今のは慥か鹽冶浪人。併し今一人のあの若者、古主の鹽冶を思はぬ樣子。さすればどうぞ此方へ引き込み、御主人へ推擧なし、何かの樣子を、糺さするには最屈竟。

まき　お梅樣の御病氣も

尾扇　種は矢ツ張りあの侍ひ。

うめ　ほんに床しい

　　ト思ひ入れ。お梅恥かしきこなし。この前より、寝てゐたる庄三郎起き上がり、喜兵衛の前へ出て

喜兵　ヤ。

庄三　御報謝お願ひ申します。

　　ト面桶を出す。

喜兵　物詣りの歸るさ。手の内を遣はせ。

中間　ソレ、取らせるぞ。

　　ト錢を出して取らせる。

庄三　ハイ、有り難うございます。御大身の旦那樣、ます〳〵御繁昌で、その上おめでたい事だらけでございます。

喜兵　何がめでたい。

庄三　最前、よそながらちよつと承りますれば、あなたのお主樣は、お屋敷替へでございますと承りましたが、定めしお住居のよい所でございませう。いづれの邊へお屋敷替へでございまする。

喜兵　ハテ、非人のくせに、それ聞いてどうする。身が主人を、何人と存じて居る。

庄三　エ……サア、どなた様やら、そこは存じませぬが、あまり御出世のおめでたさ。むさくろしい非人でも、せめてあなた方のお名でも承りますれば、私しが身の守りにでもなりませうと存じまして

喜兵　イカサマ、主人の御出世を、それほどにめでたいと喜ぶなら、非人とても萬更憎くはない。云つて聞かさう。手前が主人は、當時出頭第一の、高野師直様、この度のお屋敷替へは、鎌倉花水橋の向う河岸の、葛飾臺と申す所に、新地を下され、新たにお屋敷が建つ。さて家老用人は申すに及ばず、中間下々に至るまでも御加増あつて、イヤモ殊の外のお物入り。なんと御威勢は、ひどいものであらうがな。

庄三　エヽ、すりやお屋敷は花水橋の向う、葛飾臺へ新しく……そこがお上屋敷でござりまするな。

喜兵　オヽサ、卽ちそこがお上屋敷と定まるのサ。

　　トうか〳〵話してゐる。庄三郎、いろ〳〵に口惜しき思ひ入れあつて、持つてゐたる面桶の錢を、喜兵衛に見えぬやうにあたりへ捨てる。尾扇これを見附けて

尾扇　ヤイ〳〵、このドウ乞食め。折角旦那が合力なされた錢を、なんでおのれ捨てたのだ。冥加を知らぬ罰あたりめ。

庄三　どう致して私しが

尾扇　でも、たつた今、愚老が見て居つた。

喜兵　何ぢや、合力した錢を捨てた。ハヽア解つた。道理こそ詳しく屋敷の樣子をねらひ出すと思つたが、察するところ鹽冶浪人。非人になつて御主人を、附け覘つても及ばぬ事だワ。

尾扇　左樣々々。いらざる非人が齒向ひ立て。屋敷へ引ッ立て、拷問して、一味の奴らを白狀させうか。

ト かゝる。庄三郎ちよつと立廻りあつて、見事に投げる。

喜兵　ヤア、非人に似合はぬその手の內。

ト刀を拔きかけるを、庄三郎、面桶で留めて

庄三　イヤ、私しも腹からの非人でもござりませぬ、小さい時から角力好き、少つとづゝやつたら、小力のあるのが身の病。喧嘩より親の勘當。せう事なしに非人をして、生きてゐたいが即ち人情、それを滅多にお侍ひ、瓜や西瓜ぢやあるまいし、滅多に切られちやなりませぬ。

ト振りほどいて立廻りのうち、庄三郎、懷中から廻文を落す。尾扇、手早く取り上げ

尾扇　「廻文狀」……さてこそ一味の

庄三　南無三、それを

ト驚いて寄るを突き退け、尾扇は廻文を持つて花道へ駈け出す。庄三郎、追ひかけて行かうとするを、喜兵衛とめる。この時向うより小間物屋の與七、實は佐藤與茂七、小間物屋の荷を擔ぎ出て來て、尾扇の持つたる廻文を引つたくり、懐へ入れ、舞臺へ來る。尾扇、追つかけ歸り

尾扇　ヤイ町人め、今の品を

庄三　ヤア、こなたは佐藤

與茂　エヽ、この狂人乞食が何を云ふやら。ハヽヽヽヽヽ……モシ／＼旦那方、この非人は何を無禮致したかは存じませぬが、この邊にまごついてゐまする、ありやァ宿なしの狂人。狂人を捕へ、理屈を仰しやるは、不狂人の同じく狂ふ世の譬へ。何事も、御勘辨なされて遣はされませ。

喜兵　イヤ／＼、狂人と申すは、其方が扱ひの嘘と申す者。身共が主人の名を聞いて、屋敷の所替へまで、覗ひ出したこの非人、鹽冶浪人に相違ない。それゆゑ身共が

與茂　すりや、あなた方には

尾扇　師直公の御家老、伊藤喜兵衛様だワ。

與茂　ハヽア、それゆゑ爰にて

ト思ひ入れ。

中間　鹽冶の浪人、屋敷へ引ッ立て、拷問するワ。

與茂　これは又、怪しからぬ事を承はりまする。この乞食は、いつも〳〵他愛ない事を申しまする狂人。なんの鹽冶浪人でござりませう。よし又浪人にしたところが、なんでお屋敷へ引ッ立てゝ、拷問をなされまする。但しお上からお觸れでもござりましたかな。

喜兵　ヤア。

與茂　なんぼお家は斷絶でも、その家來の浪人まで、引ッ捕へて根葉を斷やさうといふやうな科もござりますまい。なんと、そんなものぢやァござりませぬか。

喜兵　ムウ。

ト詰まる。

尾扇　それはそれにしてもやらうが、いま愚老が持つて驅けだした物を、なぜ途中で引ッたくつた。

與茂　あなたの持つてお出でなされた物とは、これでござりますか。

ト懷中より三つ折にした鼻紙を出して見せ

私しも奇相な。あなたが藥の引き札を配つてお出でなされたと存じまして取りました。これは大きに奇相、眞平御免下さりませ。サア、お返し申します。

ト返す。

尾扇　イヽヤ、身共が持つて行つたのは、それではない。この非人の懐中から落した廻文。

與茂　イヽエ、そんな物は存じませぬ。わしが取りましたのはこの鼻紙。大方あなたの、お覺え違ひでございませう。それとも非人、本當に廻文とやらを落したのか。

庄三　イエ、鼻紙でござります。

與茂　それ御覽じませ。矢ツ張り初手から鼻紙を、廻文狀などとは、お醫者樣、あなたも少し狂人と見えますて。

尾扇　エヽ、馬鹿を云ふな……でも、見す／＼

喜兵　よいワ／＼。捨てゝ置け。たとへば、どのやうに浪人めらが、羽ばたきをしたとても、何として何として

與茂　イヤモウ、氣違ひの氣の字もある事ぢやァござりませぬ。殊にこんな狂人の非人、御料簡なされて遣はされませ。

尾扇　無性に非人をかばふ町人。われも大方

與茂　どうしましたえ。

尾扇　イヤサ、町人が挨拶。狂人とあれば、料簡して遣はさう。

與茂　それは有り難うござります……サア〳〵、狂人の乞食、早く裏の田圃へ行つてナ……サア、早く行け〳〵。

庄三　ハイ〳〵。これは旦那樣、有り難うござりまする。

ト庄三郎に、廻文はおれの懐にあるといふこなし。庄三郎、領いて下座へ入る。

まき　ほんにモウ、どうなる事かと、大抵案じましたわいなア。

うめ　それいなう。もう行かうぢやござりませぬか。

喜兵　イカサマ、さぞお梅も待ち遠であつたらう。そこから駕籠に乘つて歸るがよからう。

尾扇　ちつとも早く參りませう。

與茂　左樣なら、もうお歸りでござりまするか。

尾扇　たしかに懐中

ト思ひ入れ。

與茂　お靜かにいらつしやりませ。

ト與茂七、こちらの床几へ腰をかけて思ひ入れ。

喜兵　それはさうと、先刻の浪人。
うめ　ま一度、一目
喜兵　其方も見たいか。
うめ　アイ。
喜兵　おれも逢ひたい。
うめ　エヽ。
まき　サア〳〵お出でなされませ。
　　ト唄になり、喜兵衛の一群れ、靜かに向うへ入る。與茂七殘り、こなしあつて
與茂　すんでの事にこの廻文
　　　　ト あたりを見て、思ひ入れあつて
　　愛のおかみさんは、見世を明けて、どこへ行つてゐるかしらん。
　　　ト双盤になり、下座より宅悅の女房お色、出て來て
いろ　お政さん、この間は……オヤ〳〵、居ないさうだ。
與茂　男の茶見世だけ、流行らうがね。

いろ　オヤ與茂七さん、お前さんが茶見世を出せば、山中の女は皆殺しだよ。
與茂　有り難いね。此方が先へ死ぬであらう。時にお色さん、常住山へ行つて商ひをするが、小間物屋といふものは、是非女を相手にしてする商賣だから、うまい事を云はれては倒れ、横目で見たといつては倒れ、差引いて見ると、餘ッほど割りの惡い商賣だね。
いろ　噓ばつかり、山中の女がお前の來るのを、毎日々々待つてゐるよ。
與茂　氣をよく貸すからの事サ。大きなべら坊だ。
いろ　時に素的なものが出來たよ。
與茂　さうだとサ。この頃二三日山へ來ないが、大層美しいさうだの。
いろ　コレサ、この見世だアな。
ト楊枝見世を指さす。
與茂　爰はお前、お紋さんの出てゐた所だ。
いろ　そのお紋さんが病氣といつて一昨日から雇つて出した子だがの。內は餘ッほど苦しがりださうだ。
與茂　ムウ。粂三に似てゐるといふ評判だが、本當か。
いろ　ずぶ大和屋と來てゐる。其くせ溫なしくつての、屋敷出ださうだ。

與茂　そいつは猶いゝな。名は何と云ふえ、

いろ　先の名は何といふか知らねえが、爰の内へ出てから、矢ッ張りお紋さんよ。

與茂　名はお紋さんだの……内はどこだえ。

いろ　北新町だよ。

與茂　宗旨は何だ。

いろ　法華だとよ。

與茂　寺はどこだ。

いろ　エヽ。

與茂　葬ひは何時だ。

いろ　何を云ふのだ。

與茂　ホイ、あんまり浮れたやつサ。そいつはどうかなるまいかね。

いろ　なるどころか、エテ物に出るわな。

與茂　それは妙法蓮華經。

いろ　すぐに法華で洒落たの。

與茂　法華の幸ひだ。今夜すぐに出かけようが、出るだらうか。
いろ　商賣だもの、出なくつて。
與茂　サア／＼、行きやせう／＼。
いろ　剛氣に急ぐの。マア、荷をどこぞへ預けて來ねえよ。
與茂　イカサマ。カウ、きつと晩には
いろ　い丶と云ふ事サ。
與茂　ちよツぴり酒で
いろ　さうサ。
與茂　こいつは浮いて來たわえ。

ト荷を背負つて立上がり、ちよつと思ひ入れあつて

斯うして騷げば騷ぐもの丶、同じ姿をやつしても、あの奧田の御子息は
いろ　ナニ、奧田より大三ツがい丶わサ。
與茂　忠義の爲とて、菰かぶりとは
いろ　そんなに吞めるものかな。五合でい丶やな。

與茂　アヽ、さぞや苦患を

いろ　そこが地獄サ。

ト氣を變へ

與茂　おきやアがれ。

ト二人はてん〴〵に思ひ入れ、双盤にてこの道具廻る。

本舞臺、三間の間、二重世話屋體、白く反故貼り、つぎの襖、上の方、破れ障子たてたる一間の屋體、よき所に小さき衝立二枚、貼交ぜの屛風。門口に閻魔の灸をすゑてゐる看板と、奉公人口入れの看板と二つ出しあり。爰にお大、とやにつきし毛の抜けたる女、髮を島田に結ひ、白歯にて、眉毛のなきこしらへ。文嘉、彦兵衛、以前の形にて住ひ、按摩宅悦、盆へ灸をほぐしてゐる。よき所に角行燈をつけ、誂への流行り唄にて、道具とまる。

文嘉　カウ〳〵、おらア素的な大がいゝぜ。

宅悦　ハイ〳〵、この位のがよくきゝます。

文嘉　コレサ〳〵、本當のをすゑられて堪るものか。

宅悦　それは承知でござります。マア〳〵、表向き人氣が惡うござりますから、それで灸をほぐして居

ります。

彦兵　わしは又、一向年のゆかぬ子がよいぢや。至つて小さいがよい。

宅悦　エヽ、番太郎で賣る灸の事でござりまするか。

だい　モシ〳〵、わたしの前でそんな事は、ちつと差合ひだね。

宅悦　コレサ、お前は早く、御拵へでもしねえかな。

だい　アイ〳〵。

ト唄になり、向うよりお政、ぶら提灯を持ち、直助、羽織着流しに着替へ出て來り、花道にて

直助　カウ、お政さん、いよ〳〵あの楊枝見世のお袖さんを、買はしてくれるか。

まさ　お袖といつたか知らねえが、今ではお紋さん、どうであゝいふ事に出る日にやア、否應は無いのサ。

直助　そいつは奇妙。

まさ　コレサ、その奇妙が悪いよ。藤八が現はれるから、お云ひでないよ。

直助　それは承知だよ。

まさ　サアお出で。

ト舞臺へ來り

まさ　宅悦さん〳〵、お客を連れて来たが、いゝかねえ。
宅悦　アイ、そりやア有り難い。サア、お入りなされませ。
直助　ハイ、御免なせえ。
宅悦　あなたのお望みは、大か、小かね。
直助　なにサ、灸をすゑに来はしません。彼のお紋といふを
宅悦　エヽ、定紋をおすゑなさるのかな。
直助　なにサ、灸の事ぢやアねえ。
まさ　コレ、それは承知だがね、表向き灸のつもりにして置くのサ。そこで看板に閻魔様が灸をすゑて
　ゐるのサ。
直助　ハヽア、成る程こいつは、奇妙。
まさ　コレサ。
　　ト直助、口を押へる。
文嘉　いま聞けば、お紋とやらは、先刻見た子だ。おいらも何ならそれにしてえ。
彦兵　さうぢやわいの。とても金出して買ふ位なら、えいのがよい。わしもそれにしませう〳〵。

宅悦　さう大勢じや一人の子を目がけてはなりません。こりや斯う致しませう、あなた方は大と小のお望み、跡からお出でなされたはお紋さん、恨みッこのないやうに、籤取りがようござりますて。

まさ　左様サ、両方の名を書いて、縁結びがようござんせう。

皆々　それがよい〳〵。

直助　おらア外の子ぢやァ否だ。

宅悦　マア〳〵、何にしろ、運は天に任せて

ト宅悦、縁結びの籤を拵へろ。お政これを結び、思ひ入れあつて

宅悦　サア〳〵、みんなしんを取つて、明けて御覧じませ。

文嘉　おれのは何た。文嘉にお大。

宅悦　こりやアあなたのお望み通りだ。

彦兵　わしは彦兵衛お小。

直助　ドレ、そんなら差詰め、おれは藤八お紋、奇妙。

ト浮かれて云ふ。

宅悦　斯う誂へたやうに極まる事もないものだ。

まさ　マア、お前はお紋さんの來るまで、あの障子の内に寐轉んでおいで。

直助　先刻の小僧は、酒を持つて來さうなものだ。

まさ　わたしが一遍行つて來よう。

直助　そんなら頼むよ。

宅悦　その次手に、かのもナ。

まさ　承知だよ。

　　ト唄になり、お政は向うに、直助は上手障子屋體の内へ入る。

文嘉　サア、おいら達のは、どうするものだ。

宅悦　お前は年増だね。

彦兵　わしは若いのぢやぞや。

宅悦　畏まりました、マア、ちつと横になりなさりませ。

　　ト宅悦、小さき衝立を眞中へ置き、蒲團を二つ敷き、屛風をたて、行燈を暗くして置く。文嘉寐ころびゐる。宅悦、お大に囁き、奥へ入る。お大うなづき、側にある硯箱を引寄せ、懷中鏡を出し、眉毛を引くこなしあつて、彦兵衛の側へ來り

だい　モシ、お休みなされましたかえ。

彦兵　オイ／＼、先刻からお出でを待つてゐたのぢや。

だい　わたしやお山さんといふ名ぢやござりませぬ。

彦兵　ハヽア、成る程さうぢや。

　　トお大の顔を見て

　イヤア、お山どころぢやない、惣嫁のやうぢや。

だい　なんだえお前、おやまだの、さうかだのと、日光道中記を見たやうな事をお云ひだね。

彦兵　お前、年は幾つぢや。

だい　アイ、わたしが年は、とつて十才。

彦兵　鷄の化け物なら、木菟よりは流行るであらう。なんぼ若いのがよいというて、あんまり若過ぎるな。

だい　よしか、本の年は

彦兵　六十八か。

だい　可哀さうに、たつた十六サ。

彦兵　逆さまにして六十ぢや。

だい　エヽモウ、口の惡い。

　トこなし。合ひ方になり、向うよりお袖、以前の形にて、草履を穿き、爪立つて拔き足にて出て來り、門口へ來て

そで　ハイ、御免なされませ。

　ト小聲にて云ふ。宅悅出て來り

宅悅　オイ〳〵、御苦勞々々〳〵。今夜は大分遲かつたの。

そで　ハイ〳〵、内の樣子が、ちつと出憎うござりましたゆゑ

宅悅　サア〳〵、あそこの障子の内へ

そで　ハイ、有り難うござります。

　トお袖、障子屋體へ入る。

文嘉　カウ〳〵、おいらが年增はどうしたのだ。

宅悅　ハイ〳〵、只今。カウ〳〵、お大さん、もう來さうなもんだ。

　ト思ひ入れ。お大出て來り、眉毛を拭き、宅悅はお大に囁き、奥へ入る。お大、文嘉の側へ來り

だい　ヤツトコショ、もうお休みかえ。
文嘉　オイ、剛氣に待たせたの。
だい　アイ、年がよると、歩くのに大儀だからね。やう／＼杖に縋つて
文嘉　エゝカウ、お前いくつだ。
だい　アイ、年は七十九サ。
文嘉　べら坊な年増だの。年寄りでなくつてもの事だ。あんまり年増過ぎるの。
だい　それでも二人や三人位の客は何ともないよ。お前は大年増がいゝと云ふからわたしが來た。この位の年増は、もう滅多にはござりません。頭は黑いやうなれど、殘らず白髪サ。こればかりは本の事サ。皆さんがよく御存じサ。
文嘉　叮嚀に年の寄つた人だね。何たる因果だ。

トこなし。合ひ方、バタ／＼になり、障子の内よりお袖逃げて出る。直助追うて出て來り、思ひ入れあつて

直助　どうして／＼逃がすものか。
そで　それぢやといふて、どうマア其方と顔が

直助　合はされぬのも尤もだが、お袖さん、お前は孝行なものだなう。

そで　エヽ。

直助　マア下にゐな。おれが云ふ事をとつくりと聞きなせえ。お前の親も、わしが主人も、不慮なお家の騷動にて、今の流浪。親の難儀を貢ぎの爲、淺ましい此すぎはひ。外の人は兎も角も、わしは推量してるるゆゑ、せめて少つとも手助けになつて進ぜうと……サア、斯う云つても、わしが無理に口說くゆゑ、お前は得心あるめえが、わしが云ふ事を聞いてくれゝば、こんな商賣させはしねえ。それともお前はすき好んで、さういふ勤めをしなさるのかえ。

そで　なんのマア、苦しいこの身の世渡りも、今云ふ通り親の爲。

直助　親御を思ふ心なら、わしが云ふ事、聞いた方がよからうぜ。又この事が親御へ知れたら、昔氣質の左門樣、貧乏しても穢らはしい、武士の名までをよごすといひ、殊によつたらお主の名まで

そで　エヽ。

直助　サア、三方四方まん丸く、わしが詞に附く方がよからうぜ。

そで　勤めといふは身すぎばかり、餘儀ない事の譯云うて、賴めば人に鬼もなく

直助　その代りにやア、うまい事もねえといふものだ。ハテ、只惚れて口說くと思ふから料簡が違ふ。本

の深切といふものだ。マア、この金で親御にも

ト懐より金を出し

袷でも買つて着せるがいゝぢやァねえかえ。

そで　そんなら以前のよしみにて、大枚のその金を

直助　浪人なれば大枚だが、今ぢやァ十や二十の金、商人の身ぢやァ何でもないのサ。

そで　その深切な心なら、少つとの間その金を

直助　貸すといふのは他人の事だ。ハテ、いくらでも

そで　嬉しうござんす。

ト金を取りさうにする。

直助　只嬉しうござんすとばかりでは、まづいな。

そで　それぢやといふて

直助　マア、一緒に寝る位の事は

そで　エヽ。

トこの時奥より宅悦出て來り

宅悦　お紋さん、何しに爰へ出てゐるのだ。早く客の所へ行きな。
そで　ハイ〳〵。
直助　いま涼みに出たのだ。サア、座敷へ行かう。
そで　どうぞそればかりは
宅悦　そんな事を云つて濟むものかな。
直助　ハテ、いゝわな。マア、來なせえ。
ト直助、お袖の手を取つて障子屋體へ入る。此うち彦兵衛出て
彦兵　わしがげんさいめは、居らぬかえ〳〵。
宅悦　さうでござりますか。お小さん〳〵。
トこれにてお大出て、また眉毛を引き、額を出す。ト文嘉も出て
文嘉　カウ〳〵、お大さん
だい　ハイ〳〵、今參ります。
トまた眉毛を拭いて額を出す。この拍子に衝立倒れて、三人顏見合せ
文嘉　ヤア〳〵、頭が島田で

彦兵　顔が年増。

宅悦　面は猿に似て、嘶く聲豚に似たり。丹波の國から生捕つた。代はお戻り〳〵。

文嘉　おきやァがれ、とんだものを一座廻し

彦兵　新造のお小さんも凄まじいわいなう。

文嘉　とやについた者を、お大さんも氣が強い。

だい　お大さんだといつて、安くおしでないよ。この三月開帳があつたよ。

彦兵　お小さんはどうしたのぢや。

だい　大分損をしたとサ。

文嘉　惡く洒落やァがる。

ト突きたふし

サア、歸らう〳〵。

宅悦　歸るなら勤めを置いてゆかつしやい。

文嘉　ナニ勤め。押しの強い。こんなものに二百でも置くものか。

彦兵　厚かましいも程があるぞや。其方から錢取つても否ぢや。

だい　否ぢやも凄まじい。
二人　眞平御免なさい。
だい　それぢやァお前方は逃げる氣だね。
文嘉　エヽ、やかましいわえ。
宅悦　勤めがなければ、歸す事はならぬぞ〱。
　　　ト爭ふ。流行り唄になり、向うよりお色先に、與茂七、出てくる。跡より大三ツの升太、五合德利を下げて出て來り
いろ　大三ツの升太、どこへ持つて行くのだ。
升太　お前の所サ。
いろ　誰れがさう云つた。
升太　額堂のおばさんがさう云つたから、持つて來た。
いろ　ドレ〱、おれに渡した。
升太　イエ〱、誂らへた人に渡しませう。
いろ　いゝわな。錢さへ拂つたらよからう。

升太　ナニ、錢は先刻取りやした。それでなくては、お前の所へ持つて來やアしません。顏が惡いものを

いろ　この小僧は外聞の惡い。お客も聞いてゐる前で

升太　人の聞いてゐる時でさへ拂はねえもの、誰れもゐねえ時は猶拂はねえ。

與茂　ハヽア、こいつは違えねえ。マア〳〵、内まで持つて行くがいゝ。

ト これにて三人舞臺へ來る。

升太　代が濟んでゐるから、置いて行きやせう。

だい　サア〳〵、勤めをおくれ〳〵。

兩人　否だ〳〵。

宅悅　放すな〳〵。

ト 文嘉と彥兵衞は宅悅を突き倒し、一散に逃げ出す。

だい　小僧どん〳〵、つらめえてくんな。

ト 升太、兩人を捕へ

升太　此奴等は泥坊か。

だい　その人達は食ひ逃げだ。
升太　とんだ奴等だ。サア、金を出しやァがれ。
文嘉　あんな面の奴に、誰れが金を出すものか。
升太　あんな面でも、初手から承知の上であらう。錢を置かねえが最後、これから山へ來た時に、子供を集めて囃させるぞ。
文嘉　イヤ、それは恐れる。山でそれを囃されては
彦兵　これがほんの劍の山。
升太　針の山をば、棒ほどに觸れて歩くぞ。
兩人　そんなら出しますく。
ト二人とも二朱づゝ出す。升太取り
升太　これさへ取りやァ赦してやるヮ。
文嘉　なんの事はねえ、三途の川で剝がれたやうだ。
升太　こま言吐かさず、手に手を取つて死出の山、づんく連れて、うしやァがれ。
兩人　イヨ高麗屋の若旦那。

ト文嘉と彦兵衞、一散に逃げて入る。

だい 小僧どん、おかたじけ。まづその金をおくれ。

升太 この金か。遣りは遣らうが、アレ／＼、そこを見な。

だい なんだえ。

ト振りかへる。

升太 べら坊あまやアい。

ト一散に走り入る。

だい ヤイ小僧め、泥坊々々。

ト同じく追ひかけて入る。

いろ なんだ、イケ騒々しい。

宅悦 騒々しいどころか、泥坊だ。

いろ 恐ろしい亡者だ。然しその埋め草に、いゝお客をお連れ申した。サア、此方へお入りなされませ。

ト與茂七、内へ入る。

宅悦 ようお出でなされました。

奥茂　ハイ〳〵、わしは急ぐから、早いがようござります。
いろ　あのお紋さんはゐるかしらん。
宅悦　丁度此方へ來てゐる。
いろ　それは幸ひ。ちよつと頼んで
宅悦　然し今の二の舞はあやまるぜ。
いろ　ナニ、そんな氣遣ひは少しもない。
宅悦　そんならおれが呼んで來よう。
ト宅悦、奥へ入る。お色、行燈をよき所へ置き、風呂敷をかけて暗くする。
奥茂　なぜ眞暗にした。
いろ　爰が地獄の名代所サ。
奥茂　成る程ナ
ト上手よりお袖出て來る。
そで　退引きならぬ所へ、呼び出して下さんしたゆゑ、ひやいな所を
いろ　コレ、お紋さん、隨分おとなしいお客だから、叮嚀に勤めなよ。

そで　ハイ、有り難うござります。

いろ　おしけりなされませ。

ト與茂七の側へお袖を押しやり、お色奥へ入る。お袖、思ひ入れ。

そで　モシ、お休みなされましたかえ。

與茂　どうして〳〵、一人で寢る位なら、内で寢てゐるのサ……コレサ、どうしたものだ。此方へ寄んなせえ。なぜウヂ〳〵してゐるのだ。エヽ、眞暗で顏が見えねえ。ちよつと行燈を

そで　アヽモシ、灯をおつけなされずとも

與茂　エヽ、恥かしいか。畜生め。

ト こなし。お袖思ひ入れ。

そで　モシ、私しはあなたへ、お願ひがござります。

與茂　なんだ、お願ひとは。どうせろくな事ぢやァあるめえ。

そで　サア、申し憎い御無心ながら、私しが斯ういふ事に出まする譯、お聞きなされて、どうぞ不便と思し召し、一つ寢だけは

與茂　なんの事だか、一向わからねえ。マア〳〵、その譯を話しなせえ。

そで　ハイ〳〵、お恥かしい事ながら、私しの內は、もと武家でござりまするが、樣子あつて父さんは浪人、一人の姉さんもござりまするが、さる屋敷へ緣附きましたところ、懷姙して、どういふ譯やら離緣になり、今日一日の煙りも、立てかねまする程の貧苦の中へ、病氣の姉を引取りましたゆゑ、よんどころなう晝の間は楊枝見世、夜は此やうな淺ましい、すぎわひを致しまするも、せめて少しのお錢をもらひ、父さん姉さんを過したいばかり、心にもない隱し勤め。お情深いお客樣に、この身のしがを打明けて、お願ひ申すは無理ながら、どうぞ切ないわたしが身を、不便と思し召しまして、一つ寢いたします事は、お免しなされて下さりませうなら、ハイ〳〵、有り難うござります。

與茂　成る程、聞けば氣の毒な事だが、親の爲に斯うした勤めをしようより、いつそ吉原へでも行つておいらんになつたら好さゝうなものだぜ。

そで　イエ、此やうな事いたしまするも、親姉へは一向沙汰なし。

與茂　ハテ、隱れて出るのか。孝行者だの。その孝行な心を聞いて、猶々思ひが增して來た。お前、よく積つても見なせえ。中には腹を立つて歸る客もあらうし、また、とても孝行する位なら、思ひ切つてその譯を云へば、出やう次第でいゝ旦那が附かうも知れぬ。つい一通りの客だといつて、

二朱や一分は遣る氣になるわサ。

そで　それがなります程なれば、申し憎い事、お賴み申しは致しませぬ。

與茂　どうしてもならぬといふは、ハヽア、云ひ號けでもあるといふ事か。

そで　エヽ……イエ、さういふ譯でも

與茂　そんなら何もいゝぢやァねえか。

そで　でも、どうぞこればかりは

與茂　ハテ、悪い合點だ。

そで　アレ、およしなされませ。

ト飛びのくはずみ、行燈の風呂敷落ちて明るくなり、兩人顏見合せ

與茂　ヤア、其方は女房

そで　お前は與茂七さん、面目なうござんす。

ト顏を隱して思ひ入れ。與茂七ムッとして

與茂　面目ない……イヤ面目ないも凄まじい。コレ、お袖、てめえは〳〵。屋敷の騷動あつてから、散り〴〵に別れたが、今まで便りをせぬおれゆゑ、忘れ果てゝこんな勤めに出るのだな。現在亭主

がありながら、男欲しさのいたづらか。あんまり呆れて物が云はれねえ。

そで　モシ、與茂七さん、樣子御存じないからは、そのお腹立ちも尤もでござんすが、男欲しさのいたづらとは、あんまりむごい仰しやりやう。お屋敷の騒動より、みな散り〴〵に御浪人。今もお話し申した通り、親の爲に斯うした勤め。いたづらな心なら、何しに親のしがまでも、打明けて話しませう。これまで一度の便りもなう、つれないお前に操を立て、切ない苦しいその譯も、聞きわける人は稀れにして、大概みんな無得心、それを兎やかう云ひ抜ける、人一倍のこの苦勞、誰れに立てうと辛苦をすると思うてぞ。わたしの斯うした勤めより、恨みは却つてお前にある。現在女房のある身でゐながら、斯ういふ所へ遊びに來て、女房と知らず此わしに、貞女を破らせやうとさしやんした。斯ういふ所に、遊んでゐる間はありながら、女房の所へは、便りする間はござんせぬか。ほんに〳〵あんまりな、お前の心に引くらべ、逆捻ぢな今の腹立ち。あんまりぢや、あんまりぢやわいの。

與茂　さう云ばれて見れば一言も無いが、さぞかし今までいかい苦勞。おれも折々其方の所へ、便りしようと思うてゐれど

そで　イエ〳〵、その便りのない事は、實は恨みは致しませぬ。その譯は、由良之助樣の思し立ち、御

主人の敵討……

與茂　コレサ、譯も無え事を聞きかじつて、ズバラ〳〵と。外の浪人にそんな噂があるか知らぬが、おれは少つともそんな氣遣ひはない。今は商人、小間物屋の與茂七、何しに敵討なぞは

そで　サア、女子は口のさがないものゆゑ、お隱しあるは御尤も。斯うした所へうか〳〵と、遊びあるくも、敵に油斷さする爲

與茂　これはしたり、又しても敵々と、そんな時代な事は聞くも否。久しぶりで女房ども、今までの事は、腹が立つならあやまらう。行燈の明るくなつたが結ぶの神。

そで　成る程、迂濶に大事も……ほんに思へば久し振り。ようマア、まめでゐて下さんしたなア。

與茂　おぬしも無事で、めでたい〳〵。

ト奥よりお色出て來り

いろ　ハイ、きまりましたらお勤めな

與茂　ほんに、それ〳〵

ト金を出してやる。

うぬが女房に勤めを出すのも

いろ　エヽ。
與茂　これも話しの種だらう。時に、先刻の酒があるだらう。
いろ　爰にあるが、冷でござります。
與茂　冷でもかまはぬ。
いろ　たんとお樂しみなされませ。
　　ト酒を出して、奥へ入る。
與茂　サア、嗅ア、一つ飲まつし。
そで　ほんにマア、いつの間に其やうな物云ひに。
與茂　へヽ、古風な事を云ふ奴サ。
　　トこの時奥の障子を明け、直助、この樣子を聞いてゐる。
そで　お前、酒を深うはあがらぬぢやないかえ。
與茂　なんだ、さゝをあがらぬ。お富士樣の蛇ぢやァあるめえし。併し、誠に久しぶりで、女房と二人で水入らずの酒盛り。
そで　斯ういふ所へ、遊びにござんすからは、定めし方々へも、行かしやんしたでござんせうな。


初日二番目
序幕

與茂　どうして〳〵、てめえの所なればこそ。
そで　そんなら、初手から知つてござんしたか。
與茂　なにサ、知りもしねえが、……カウ、よく詞咎めをするなア。さう云へばおれも云はねえぢやア
ならねえ。今まで多くの客に出た内ぢやア、定めし自由になつたのもあつたらう。
そで　イエ〳〵、神さんかけて、そんな事はござんせぬ。その證據にはコレ、お前にもあの通り
與茂　そりやこそ、おれと知つてゐても
そで　イエ、知らねばこそあのやうに
與茂　もしおれのやうに、無理やりにあゝしたらどうする。
そで　そりやわたしが心一つ。人を見て法とやら、勇み肌のお客なら、馴れぬながらも職人の、女房で
ござると噓ついて、亭主の病氣に勤めはすれど、心は淸ききよがんな、かけて去なして又明日の
夜。坊さん客には此方から、帶も解かいで永々と、お談議說いて詫び事も、御出家方は溫なしう、
緣なき衆生は度し難しと、得心づくで歸るわいなア。
與茂　また店向きの商人ならば
そで　宵を限りの四つの鐘、これが別れのきぬ〳〵と、思へば遲うどこへ行て、歸らにやならぬ勘定も

ツイうかくと算盤の、たまたまごんせと騙してやる。

與茂　侍ひ客の山さんなら、拔ける手管はあるまいが。

そで　武家は元より此方の物。手討ちにあはうが、殺されうが、忠義の爲とたらしこみ、頼めばグツと侍ひ冥利、せう事なしの褒めそやし、去なした跡へ旅人客、一しほ哀れに、年貢の代りの勤めと云へば、涙々の片手にも、小豆一升、大根一把、貰うた事もあるわいなア。

與茂　ハテナア。商賣に馴れるとはいひながら、天晴れ嘘の上達、來世は必ず、閻魔に舌を拔かれるぞや。

そで　イエ、その氣遣ひはごさんせぬ。この世からなる地獄の責め。

與茂　イカサマ、云やればそんなもの。思はず今宵逢うたのも

そで　ほんに地獄で佛とやら

與茂　もうこれからは奈落の底も

そで　離れぬ夫婦。

與茂　女房ども。

そで　こちの人。ほんに夢ではないかいなア。

與茂　夢なら覺めるな。

そで　オヽ嬉し。

ト縋りつき、互ひに懷へ手を入れる。與茂七はお袖が懷の財布を引出す。お袖は與茂七の廻文を引出す。

與茂　貧苦に迫ると云ひながら、この金は

そで　さてこそ義士の廻文狀。

ト與茂七手早く取る。

與茂　これ見られては

そで　エヽ。

與茂　女房なれども

ト思ひ入れ。

して、この金は

そで　その金は……マア寢て話さうわいなア。

ト唄になり、屏風を引廻す。直助、こちらへ出て來て、いろ〳〵口惜しき思ひ入れあり。無性に手を

叩く。奥より宅悦、お色、出て來り

いろ　モシ〳〵お前、如才もなくて、靜かになさいまし。

宅悦　夜更けさふけ、世間の前もありますわな。

直助　やかましいわえ。うぬら、よく女の二重賣りをしやァがつたな。

いろ　モシ〳〵、聲高に仰しやりまするな。いつ二重賣りを致しました。

直助　しねえものか。おれが買つた女は、この屛風の中にゐるわえ。

宅悦　そりやお前、一人で買うてゞはあるまいし、廻しといふ事もござります。

直助　ナニ、隱し賣女の癖に、廻しも氣が強い。あの女は泥坊だ。大騙りだ。それを承知で買はせるからは、うぬらも盗人の同類だ。

いろ　なんぼ出たらめの惡態でも、泥坊と云はれては濟みませぬ。それには何ぞ證據がござりますか。

直助　證據といふは、この屛風の中に寢てゐる野郎も、大泥坊だ。

ト此の時、與茂七、お袖出て來り

與茂　先刻から聞いてゐれば、盗人の、泥坊のと、そりやァ誰れの事だ。

直助　外でもねえ、うぬ等二人の事サ。

與茂　ヤア、さういふわれは、ハテ見たやうな

直助　見た筈サ。以前屋敷の同家中、奥田の家に下部奉公、今は商人藥賣り、藤八五文で仕出した金、地獄の女のおこわにかゝつちやァ男が立たねえ。それゆゑ騙りといふ事サ。

與茂　そんなら今のその金は

直助　女が懷ろ、財布の金、ほつかと渡して置いたのも、もしやにかゝつたその上で、夫婦呼はり剩さへ、おれが錢で買つた酒まで、只飲まれていちやつかれちやア、佛のやうな男でも、胸の炎は地獄の廻し。うぬらは盜人、大騙り、とサア、云つてはあんまり有りふれた、憎まれ口も餘ッほど古風。どうで賣女に出るからは、一座廻しを合點で、おれが方へもすべよく出れば、金も遣らうし、この場も濟ます。洒落てしまふがいゝぢやァねえかえ。

與茂　イヽヤならぬ、武士の相方、金銀づくで外の男に、添ひ寢さす事罷りならぬ。

直助　なんだ、武士だ。コレ、以前は武士でも、今は浪人、町家の住居の小間物屋、それでも武士か。

與茂　ヤア。

直助　女房々々とイケ騷々しく、どこで貰つて、誰れが仲人。よし又相對づくの夫婦にもしろ、隱し賣女も同然だ。買ひに來たおらァ客だ。但し武士の浪人が、女房を挊がせても濟むか。

與茂　サア、それは

直助　ソレ見ろ。おらァ畢竟深切づくで、親の難儀とあるゆゑに、金まで遣らうといふ男を、ぬつぺり騙して一文の、働きもねえ浪人を、亭主でござると嬉しがる。思へば矢ッ張り親に孝。金もいらずは此方へ返せ。貧乏神のとッついた、うぬらに金は授からねえ。キリ〳〵爰へ出してしまへ。

トいろ〳〵惡口云ふ。與茂七、口惜しき思ひ入れ。

與茂　エヽコレ、貢ぎの金はありながら、義士の神文、外へ遣はぬ配分金。

直助　ヤ。

與茂　エヽ、石、瓦も同じ事。

ト我が懐へ思ひ入れ。これにてお袖、思ひ入れあつて、以前の財布を取出し、直助の前に投げ出す。

直助　すんでの事に。危ない事。

そで　それ返したら、云ひ分もござんすまい。

直助　あつても云はねえ。ナニ、未練らしく

そで　最前いろ〳〵深切に、云うたこの金。その時も、底に針ある詞の端。取るまいとは思ったれど、そこが侍ひ、世につれて、親の難儀とツイ金を、入れて置いたが此方の誤まり、それを云ひ立て

盗人の、ヤレ騙りのと聲高に、僅かな金で腹立てる。ほんに貧するわたしより、心のむさい直助どの。千金萬金積んだとて、なんの心に隨はう。たとへ浪人であらうとも、わたしが好いた心が金。日本中の寶をば、一つ所へ山と積んでも、替へられぬ大事の男。この後わたしがどういふ苦患、身を切り賣りにしてなりと、可愛いゝ男の爲と思へば、辛苦な事もござんせん。ほんに今までアタ嫌らしい、附けつ廻しつ無理口說き。この後フッツリ、うるさい頭拂うたと思や、此やうな嬉しい事はないわいな。

直助　それ程までに惚れた男と
そで　嫌な男と比べては、毒と藥の隣り同士、目に見るさへも嫌ぢやわいなア。
直助　ムウ。

ト思ひ入れ。流行り唄になり、向うより藤八、以前の形にて出て來り

藤八　あの野郎め、どこへはまり込んでゐるかしらん。なんでも、びりにかゝつてゐるに違えねえ。人が來たら、う……ハイ、御免なさりませ……ヤア、爰にゐるな〳〵。
直助　ヤア、お前は

ト逃げにかゝる。

藤八　ドッコイ〳〵、大方こんな所にゐるであらうと思つた。道理でこの頃は賣溜めも寄越さず、藥も固めて卸し賣り、親方へ仕切りの金まで、みんな汝が引摺り込んで、女狂ひとは太え野郎だ。

直助　モシ〳〵、わしがなんの、そんな事をするものかな。賣溜めも、藥の代も、明日親方へ持つて行くところでござります。

藤八　そんなら何しに爰へ來てゐるのだ。

直助　サア、爰へ來たのは……オヽ、それ〳〵、肩がつかへたから、灸をすゑに來たのサ。爰は灸點所だから。ナウ、おかみさん

いろ　左樣々々、今すゑるかゝる最中でござります。

宅悦　そこに艾がほぐしてあるワ。

直助　コレサ〳〵、本當にすゑなくつてもいゝわサ。

藤八　灸をすゑるとは嘘つきめ、矢ッ張りぴりにはまりやァがつて

直助　どうして〳〵、いま灸をすゑるかゝる所サ。

ト肌を脱ぐ。

いろ　ソレ、皮切りぢや。

ト本當に灸をすゑる。

直助　熱々々……これが本當の焦熱地獄。もうよい〳〵。

藤八　たつた一つで、もうよいとは、ハテ、よく利く灸だ。この灸は一つで二朱か。もう一つすゑると、お直しになるだらう。何でもかでも、賣藥めと藥を持つて行かねばならぬ。サア、寄越せ〳〵。

直助　明日わしが持つて行きますよ。

藤八　何だ、うぬは親方の所へ出入りは叶はぬ。おれに取つて來いと云はれた。キリ〳〵と出しやアがれ。

ト直助が懷へ手を入れて、以前の財布を引出す。

そりやこそ〳〵。爰に持つてゐる癖に……藥の代の代りにやア、着物を脱ぎやアがれ。

直助　これも取るのか、情ない。

藤八　みんな親方の仕着だ。灸をするに來るのに、羽織で極まつて來ずともの事だ。サア〳〵、脱げ〳〵。

ト直助を裸にして、羽織、着物を取上げ、金財布も取上げ

太え奴でござるわえ。

ト抱へたまゝ表へ出て

どなたもおやかましうござりました。

宅悅　斯う丸裸にされては、此方の勤めも

いろちやアふうかえ。

直助　ふられたからは、遣らすともいゝわえ。

宅悅　ほんに今まで藥賣りの、藤八がざまは、奇妙。

藤八　誠に太々しい奴でござるわえ。

ト雜物を抱へ、藤八向うへ入る。與茂七この樣子を見てゐて

與茂　成る程、金持ちは違つたものだの。一文無しの素浪人でも、親方の物を引摺り込んで、着物まで剝がれるやうな事アねえ。金持ち〳〵と、金びら切つた商人が、立派な形たの。人の金で金持ちといはうなら、お金藏の番人は、みんな金持ち。盜人、騙りと云つたその身が、いま目前、ほんの正銘、大盜人。ハテサテ、氣の毒千萬な。

そで　ほんに思へばあの金を、取らぬが仕合せ盜人の、既に同類、オヽ、怖い事。

宅悅　カウ〳〵、裸でおらが內に、ゐられてはあやまるぜ。

いろ　早く出て行きなせえ〳〵。

直助　エヽ、やかましい。今出て行くわえ。いま〳〵しい。とんだ所で恥つらを

與茂　恥と思はゞ逃げ支度。思へば灸まで無駄にする

そで　山も見られぬあの姿。

與茂　此方は爰から夫婦連れ

そで　手に手を取つて

宅悦　お歸りなら、提灯を貸して上げませう。

與茂　アイ、そんなら提灯借用代

ト また懐から二朱出してやる。

宅悦　これは有り難うござります。

與茂　カウ、あんな者が内にゐるから、油断をしなさるな。

いろ　今に叩き出しますよ。

宅悦　ハイ提灯。

ト 藪の内と書いたる提灯を與茂七に渡す。

そで　サア、モシ、こちの人

與茂　今宵は内でしつぽりと
直助　うぬ、これ見よがしに
與茂　羨ましいか。
直助　どうで今夜は
與茂　積る話しを
そで　道々二人が
宅悦　早く出て行け。

ト宅悦かゝる。直助、宅悦を毆り倒す。與茂七、お袖は門口で寄り添ふ。

直助　目當は提灯。

ト直助「ムウ」と行くを、お色、シャンと門口を閉す。これを木の頭にして、よろしく

禪のツトメにてツナギ、引返し。

幕

本舞臺、向う一面栗丸太の垣、土手板、上の方に稻村、石地藏、すべて觀音裏田甫邊の道具、爰に、ぴぷ六、泥太、願鐵、以前の菰かぶり。庄三郎、同じ形にて、皆々酒を飮んでゐる。禪のツトメにて

幕明く。

づぶ　なんと、今日のやうな仕事が毎日あればいゝ。

泥太　一人前二朱づゝの立前サ。

庄三　いゝ仕事をしたな。おいらにも沙汰なしに。

願鐵　それだからこんなに奢るのだ。

づぶ　てめえの仲間入りの時も、矢ッ張りこんなに奢つたぜ。

泥太　これ見や、これが二升目の酒だ。素人でもこんなに奢るものはあるめえ。

願鐵　ナニあるものか。昔の紀文大盡でも、おいらにやァ叶ふめえ。肴を見やな。

づぶ　なんだ、鯛だな〳〵。

願鐵　鯛も野暮に身ばかりはないワ。あら煮だワ。

泥太　さうサ、素的なあら煮だな。あんまり叮嚀に身を取つてしまつたな。

づぶ　その代り、どんないゝ女がしやぶつた骨かも知れねえ。

庄三　そりやァ大方、富士屋のお剰りだらう。先刻見てゐたら、鼻の缺けたカサかきがしやぶつてゐたッけ。

づぶ　エヽ、穢ない事を云ふな。おらァ穢ねえ事を云ふと、ぢきに胸が悪くなるわえ。
泥太　ざまを見ろ。てめえの形が綺麗な形か。
づぶ　それでもおらァ綺麗好きだ。決して捨てゝある菰は着た事がない。しつけのかゝつた新しい菰ばかりだ。
願鐵　菰にしつけがかゝつてゐるものか。
泥太　體にしつけがあるといふのだ。
庄三　こいつは違えねえ、大笑ひだ。
一同　ハヽヽヽヽ。
づぶ　大笑ひか中笑ひか知らねえが、なぜみんなおれを安くして笑ふよ。太平樂ぢやァねえが、この仲間ぢやァおれが一番古いワ。腹からの宿なしだ。憚りながら田圃のづぶ六さんといつちやァ、人に知られた宿なし樣だ。あんまりこめてくれるな。
一同　ソリヤづぶが、怒つた〳〵。
泥太　なんだ此奴らァ
ト無性に腹を立てゝゐる。

願鐵　ヤアー、小屋の始めの一踊り、づぶ六踊りが所望ぢやが、合點か。

一同　オヽサアテ合點だ。

ト皆々、づぶ六の手を持ち添へ、踊りながら下座へ入る。

庄三　ハテ、騷々しい奴らだ。

ト思ひ入れあつて、あたりを見て

今日晝間地内にて、とり落した廻文狀。その時來合せた與茂七どの、どうぞ安否が聞きたいものだが。

ト時の鐘、合ひ方になり、向うより與茂七、ブラ提灯を提げて出て來て、透かし見て

與茂　庄三郎が居る所は、慥か爰ら。

庄三　さういふ聲は與茂七どのか。

與茂　庄三郎どの……コレサ、嗜みめされい。いかに若いといひながら、最前とても思案もなく、高野の家の侍ひに、身の上を悟らるゝやうな事。畢竟、身共が參り合せたればこそよけれ、重ねて氣を附けさつしやるがようござる。

庄三　御厚志の御意見、忝うござる。併し鬱憤忘れかね、思はず知らず

與茂　それも尤も。御主人御無念の程、朝暮忘れぬ我れ〳〵なれば、かゝる姿も皆忠義。

庄三　それにつけてもその砌り、とり落したる義士の廻文。

與茂　その廻文も身共が所持。これより直ぐに某は、鎌倉表へ立ちこえ、それより都山科へ通達して、思ひ〳〵に出立の、支度を知らするこの廻文。

庄三　鎌倉へお出でとあらば、敵の近邊、身の上を悟られぬやう、拙者が姿と

與茂　成る程、非人の姿となり、貴殿は江戸に徘徊なす、一味の者へ

庄三　最前聞きたる屋敷替への趣き、花水橋の向う河岸へ引移るとある、この旨いち〳〵知らすでござらう。

與茂　然らば姿を變へ〳〵に

ト手早く着類を脱ぎ、庄三郎の襤褸と着替へ、庄三郎も與茂七の衣裳を着て

庄三　この提灯は

與茂　非人に提灯はいらぬ物。これも貴殿へ

庄三　然らば與茂七どの

與茂　後して面會

庄三　隨分御無事で
與茂　お別れ申す。
ト與茂七は、菰を冠り、よろしく向うへ入る。庄三郎、こなしあつて
庄三　これにて先づは一つの安堵、……併し急に違つたこの姿、仲間の乞食どもが見附けたら又面倒。少つとも早く今の内に、さうぢや〳〵。
ト庄三郎は頷いて、下座へ入る。すぐに向うより四谷左門、最前のまゝの形で出てくる。跡より伊右衛門追ひかけ出て
伊右　アイヤ左門どの、お待ちなされい。しつこく申すやうでござるが、お岩ことも身ごもつてまで居る仕儀でござるゆゑ、勘辨下されて、どうぞ此方へお返しなされて下されい。
ト左門、ちよつと振返り、知らぬ顔して行きかける。
待たッしやい。一言の挨拶もなく、近頃無禮でござらうぞ。
左門　無禮といふ事、よく知つてゐさつしやるな。身共が物を申さぬは、一旦娘をやつたよしみ。親の氣に入らぬ婿ゆゑ、取返したあのお岩。幾度云つても御返答は、ならぬといふより外は無い。それゆゑ無駄に物は申さぬ。こなたも若い者のやうにもない、女一人ではあるまいし、しつこく云

はずと、思ひ切つたがよいわサ。

伊右　すりや、どのやうに申しても

左門　君子に二言なしサ。

伊右　貴様が君子か。ハヽヽヽヽ、君子はその罪を憎んでその人を憎まず。よしや手前に不始末な事がござらうとも、そこが親身。若い者ゆゑ、意見を云つて下さつてもよさゝうなものを、僅かな事を云ひ立てに、娘を引揚げ、苦しまぎれに、遊女はしたにでも賣る心か。大概そこらでござらうがの。

左門　ハヽヽヽ。成る程、おのれの心に引くらべ、大事な娘を添はしておいたら、おのれこそ夜鷹にがな賣りこくるであらう。それが不便さ二つには、盗人根性のある者を、縁家にしてはこの身の穢れ。

伊右　なんと。

左門　云へば云ふ程その身の破滅、年寄りは惡い事は云はぬ程に、諦めてしまはつしやれサ。

伊右　イヤ諦めぬ。一旦武士が云ひ出した事、刀にかけても。

左門　刀にかけて、どうおしやる。

伊右　最前といひ、今といひ、あくまで身共をさみする老ぼれ。女房の縁に繋がりやこそ、舅あしらひもモウこれまで。娘を返さぬ上からは、他人の左門、打果すのが武士の意地。

左門　年は寄つても四谷左門。ナニやみ〳〵とお身達に

伊右　その舌の根を

ト白刃を抜いて切りかける。左門も抜き合せ、立廻り。左門、手ひどく切りつける。伊右衛門あしらひかね、石地蔵のうしろへ廻る。左門、及び腰に切らうとする。この時、伊右衛門、石地蔵を突き倒す。左門の足にあたり、撞となる。すかさず左門を一かせ切る。よろしく立廻りあつて、この道具ぶん廻す。

本舞臺、三間の間、一面のまさき垣、上の方、富士權現の賽錢箱、すべて裏田圃の道具、爰に直助、頰かむりにて、與茂七の衣裳を着たる庄三郎を出刃にて刺し殺してゐる。時の鐘にて道具とまる。

直助　戀の敵の佐藤與茂七、宵の意趣、思ひ知つたか。

ト止めを刺し

後日に見咎められぬやう、面の皮を

ト拵つたる出刃にて面の皮をくり

刃物があつては

ト思ひ入れあつて、垣根の中へ刃物を隠す。バタ〳〵にて下座より、左門、朱に染まり、出る。跡より伊右衛門、拔刀にて出で、ちよつと立廻りあつて左門を切り倒し、止めを刺す。

伊右　强情ぬかした老ぼれめ、刀の錆は自業自得。ハテ、いゝ態だわえ。

ト直助、伊右衛門を透して見て

直助　さういふ聲は、たしか民谷どの。

ト同じく直助を透して

伊右　奥田の下部直助か。どうして爰へ。

直助　戀の意趣ある佐藤與茂七。たうとう爰で

伊右　女房の親の四谷左門、お岩を返さぬその上に、國で盗んだ用金を、氣取つた老ぼれ、後日のさはり、それゆゑ是非なく

直助　丁度揃つた人殺し

伊右　よく似た事もあるものだ。

トこの時向うより、足音するゆゑ、二人とも小隠れする。時の鐘、合ひ方になり、向うよりお岩、手拭をかむり、安下駄をはき、糸立てをかゝへ、辻君の姿にて出て來り

いは　もう餘程夜更けであらうに、このマア父さんは何をして、歸りの遲いことやら。お年の上といひ、宵からの胸騒ぎ。急に案じられるゆゑ、お迎ひに出て見たが、どこにお出でなさんすことやら。

ト云ひながら舞臺へ來る。下手よりお袖、小提灯を持つて走り出て來て、思はずお岩に突きあたり

そで　ハイ〱、御免なされて下さりませ。心の急く者でござります。

いは　ヤ、其方は妹ぢやないかいなう。

そで　オヽ、姉さんかいなア。

トお岩の姿を見て

お前マア、味いな形をしてゐなさんす。殊に夜更けといひ、只の身でもないのに、冷えては惡いぢやござんせぬか。さうしてマア、なんぼ別れてゐればとて、夫のある身で、賤しい辻君の

いは　アヽコレ、滅多な事云やんな。……成る程、朝夕貧しい暮らしをするゆゑ、其やうに思やるも尤も。又わしが此やうな物を抱へてゐるゆゑ、猶更さう見える筈ぢやが、先刻に内を出るとき、少しばら附いてゐたゆゑ、傘はなし、それでこれを……マア〱、わしよりは其方の身の上。お屋敷

に居る自分、與茂七といふ云ひ號けがありながら、この頃聞けば、味な勤めとやらに出やるけな。

そで　エ。

いは　なんぼ貧しい暮らしをしても、武士の娘があらう事かと、サア、表向きでは云はねばならぬが、そこを云はれぬわしが身も、有やうは、其方の推量の通り、賤しい業を勤めるも、年寄つた父さんが、貧苦の上にわしらへ氣兼ね、現在娘の姉妹にも隱して、朝夕觀音樣の地內へ出て、一錢二錢の袖乞ひなさるゝといなう。お留め申すも、隱してお出でなさるゝ所へ、其やうな事云うたら、面目ないとて、もしひよつと……ほんに日頃の御氣性ゆゑ。そこでわしが思ふには、內の事さへ相應に廻つたなら、父さんの御苦勞もやむであらうと、思ひ附いた辻君も、肌は觸れねど譯云うて、矢ッ張り袖乞ひ同然な、今の世渡り。

そで　わしも同じその心で、父さんにもお前にも、隱してこの頃二三度は、耻かしい事に出ますけれど、それが勿怪の幸ひやら、今日云ひ號けの與茂七さんに、不思議にお目にかゝつて、いろ〳〵話しのその上にて、又どこへやら行かしやんしたゆゑ、その跡慕うて爰まで來る道、どうやら頻りに胸騷ぎ。

いは　ムウ、さう云やれば、わしも父さんの歸りが遲いゆゑ、矢ッ張り胸騷ぎ。なんぞ兇事がなければ

よいが。

ト此うちお袖あたりを見て

そで　エヽモ、氣にかゝる所へ、それ〳〵姉さん、お前の側へも、血がこぼれてゐるわいなア。

ト提灯を出す。

いは　エヽモ氣味の悪い……オヽ、大さうな血ぢやわいなア。

トあたりを見て、お岩は左門の死骸、お袖も庄三郎の死骸を見つけて思ひ入れ。

いは　ヤア、そりやこそ父さん

そで　ヤヽ、覺えの召し物、印しの提灯、與茂七さんもこの所で

兩人　こりやマアどうせう、どうせうぞいなア。

ト兩人よろしく泣き伏す。この時、伊右衛門、直助、そつと兩花道へかゝり、窺ひゐる。お岩、左門の死骸を抱きおこし

いは　申し、父さんいなア〳〵、氣を確かに持つて下さんせ。敵は何者でござんす。コレイナア、物云うて下さんせいなア。

そで　ほんにマア、父さんといひ夫まで、一つ所であへない御最期。

いは　時が延びたか、もう死に切つて、今際の際の一言さへ、叶はぬ事か、淺ましい。

そで　ほんに果敢ない

兩人　別れぢやわいなア。

ト兩人大泣き。この時、伊右衛門、直助、バタ〳〵と足音をさせて駈け來り

伊右　夜陰に何やら女の泣き聲……ヤア、わりや女房お岩ぢやないか。

いは　ヤア、お前は伊右衛門どの、父さんが殺されて居ますわいなア。

伊右　ヤア、こりや舅どのを何者が、……エヽコレ、今一足早くんば、おめ〳〵とは討たすまいもの。エヽ、殘念千萬な。

直助　此方に居るのはお袖さんか……ヤア〳〵、こりやア先刻見覺えのある提灯といひ、さては與茂七どのは

そで　父さんと同じ所で此やうに

直助　オヽ〳〵、これは大變々々。

伊右　すりや、お岩が妹の云ひ號け、佐藤與茂七もこの所で……察するところ舅の身の上、危ふい所へ駈けつけて、助太刀せんと思ひし與茂七、却つて共に討たれたに違ひあるまい。さすれば討ちし

曲者は、餘儀手だれと見えるわえ。

ト此うち直助、思ひ入れあつて

直助　南無阿彌陀佛。

ト伊右衛門の脇差にて腹切らうとする。伊右衛門とめて

伊右　ヤア、其方は奥田の下部直助、何ゆゑ切腹。

直助　サア、切らねばならぬこの身の云ひ譯。安い奉公する者は、心も惡く現在の、御家中の娘御、これなるお袖樣に横戀慕、云ひ號けの與茂七樣の、ある事まで知つてゐながら、金びら切つてこのお子を、無理に口說いた罰が當り、宵に思はぬわしが耻。二言三言云ひ合つた、揚げ句に切られた與茂七樣。わしに疑ひかゝらにやならぬ。わしも宵には與茂七樣を、恨んで見たが、よく／＼思へば、忠義一圖に凝り固まり、二君に仕へず、貧しい浪人してござる、各〻樣をよい事にして、色にせうの何のと、思へば／＼勿體ないと、前非を悔いてせめてもの、その云ひ譯に來かゝるこの場。思ひがけない横死の樣子。それだに依つて

伊右　成る程、さう聞いては其方が身に、疑ひかゝると思ふも尤も、また疑ふまいものでもないが、其方は刃物帶した物も持たず、舅といひ與茂七どの、二人の死骸、中間小者の其方の手で、やみ／＼

と討たるゝやうな人達でもない。そこを思へば、其方の業でないは明白なれど、さほど本心に返り、前非を悔い、云ひ譯いたす所存なら、與茂七討つたるその敵、探し出してあのお袖に、討たしてやるが其方の潔白。
直助　それは下郎が願ふところ。この身の面晴れ二つには、お袖樣へ今までも、無理なじやら附き申した云ひ譯、この身を粉に碎いても、敵討の助太刀を
いは　つらい貧苦の其うちも、云ふに云はれぬ才覺して、一日送るも父さんを、少しも樂にさせましたいと、思ふばつかり。その父さんには敢へない別れ、なに樂しみに世の中に、生きてゐらるゝものぞいなア。
そで　さうでござんす。姉妹互ひに隱し合うて、つらい苦しい恥かしい、苦勞をしたのも皆無駄事。とりわけ戀しい與茂七さんに、逢うて嬉しと思ふ間も、なき別れとは情ない。いつそ逢はぬその前に、死んだと聞いたら諦められう。夢見たやうな女夫の緣。
いは　親の死骸のこの場にて
そで　夫と共に親子四人
いは　あの世へ一緒に

そで　さうぢや。

ト死骸の側にある刃物にて自害しようとするを、伊右衞門直助留めて

伊右　コリヤ、うろたへ者め。いま姉妹が自害して、親夫の敵は誰れが討つ。

兩人　エヽ。

伊右　妹お袖は親夫、一度に別れてその悲しみ、死なうといふは尤もなれど、姉のお岩は現在の、夫を捨てゝ相果てなば、孝は立つても、操は立つまい。

いは　でも別れたる夫婦仲、今更どうも

伊右　サア、飽きも飽かれもせぬ仲にて、殊に姙娠、子まで儲けし女房を、何とて身共は身捨てやう。舅の心に叶はぬゆゑ、まづ逆らはず戻したが、死なれて見れば差あたり、去り狀やらぬ女房の親、この儘にも捨ておかれず、身共の爲にも舅の敵。

いは　そんならこれから伊右衞門どの、便りになつて親の敵

伊右　知れた事、女房が親は身共が親サ。

そで　成る程、相對で別れたとはいふものゝ、去り取狀らねば矢ッ張り女房。

伊右　親の敵は身共が討たす。氣遣ひせずと、身共と一緒に

そで　飽かぬ仲の元々へ、お歸りなされて父さんの、敵の助太刀、力になつてやらうとは、お羨ましいお二人さん。
直助　ハテ、今もわしが申す通り、與茂七樣を討つたる敵、尋ねてお前に討たせねば、この身の潔白濟みませぬ。どうぞそれまでお前の命、わしに預けて下さりませ。
そで　それぢやというて、これまで愛想をつかしたこなさんを
直助　サア、そこが前非を悔いたる直助、善心になるからは。是非ともお前のお力に
伊右　直助が申す通り、兎角悲しい辛抱も、つゞまる所は夫の爲、首尾よく敵討つまでは、その直助と假りの夫婦に。
そで　エヽ。
伊右　サア、それが卽ち世を忍ぶ、世間の思惑、敵に油斷さする手立て。
そで　でも直助どのと假初めにも、夫婦とよんでは、未來の夫へ
直助　立たぬも道理、さりながら、夫婦といふは人目ばかり、志ばかりがわしが潔白。
そで　それでも、どうやら
いは　アヽコレ妹、うはべばかりの夫婦になりや。姉が願うても、結んでほしいこの緣組み。直助どのと

やらの先刻の詞も、嘘か誠か側にゐて、とつくり敵を糺したなら、敵も矢ツ張り……サア、ついちよつと知れる手がゝりが、あるまいものでもない程に、姉が詞に從うて、假りに夫婦にナ、ソレ、なつた方がよからうぞや。

ト呑みこませる。

直助 エヽ。

そで うはべばかりの、そんなら夫婦。

伊右 それで互ひに

いは 力と便り

そで とは云ふものゝ、これがマア

いは 諦められぬが女氣の

伊右 それも尤も。

直助 併しいつまで云つたとて

伊右 盡きぬ名殘と

いは 盡きせぬ緣。

そで　鴛鴦の衾にひきかへて

いは　心の劍羽。

直助　やがて本望。

ト兩人につこり思ひ入れ。この時、最前の、づぶ六、泥太出て

づぶ　人殺しめ。

泥太　さてこそてめえは

ト兩人へかゝる。伊右衞門は拔討ちにづぶ六へ一刀浴びせる。直助は泥太の腕を捻ぢ上げ

伊右　敵討ちと婚禮の、門出の血祭り。

直助　假初めながら祝言の

伊右　これが卽ち色直し。

そで　涙の杯。

いは　さん／＼くどい

直助　エ。

いは　くり言ながら

ト死骸へ思ひ入れ。

伊右
直助　どうやら、斯うやら

ト両人顔見合せ、につこりと舌を出す。お岩、お袖は死骸へ取りつく。

いは
そで　思へば果敢ない

ト伊右衛門、直助、非人を見事に投げる。お岩、お袖は手を合せて拝む。双方よろしく顔見合せ

いは
そで　ハアヽ。

ト泣き落す。伊右衛門直助は、指先きにて「ヨイ〳〵」と〆める思ひ入れ。これをツナギにて、ひやうし

幕

二幕目

雑司ヶ谷四ッ谷町の場

伊藤喜兵衛内の場

役名——民谷伊右衛門。秋山長兵衛。關口官藏。中間、伴助。伊藤喜兵衛。同娘、お弓。同孫娘、お梅。同乳母、お槇。按摩、宅悦。小平父、佛孫兵衛。利倉屋茂助。民谷小者、小佛小平。伊右衛門妻、お岩。

本舞臺、三間の間、平舞臺、正面のれん口、下手に杉戸の押入れ、よき所に床の間、上の方障子、内に蚊帳吊つてあり、六枚屏風にて、いつもの所に門口、一體に造作そこねし家作、雑司ヶ谷四ッ谷町民谷伊右衛門浪人住居の體、四つ竹節の合ひ方にて幕明く。

ト爰に伊右衛門、浪人の形にて、仕入れ提灯を貼つてゐる。下の方に孫兵衛、木綿やつし、老けたる拵へにて、うづくまつてゐるを、按摩宅悦、執成してゐる體、よろしくあつて

宅悦　モシ／＼、伊右衛門様、左様ではござりませうが、そこが御料簡でござります。

孫兵　どのやうにもお詫び申しまするほどに、いま一兩日の所を

伊右　イヤ／＼、待つ事はならぬ／＼。いはゞあの小平めは、取り逃げ、駈落ち。捕へ次第身共が手討ちにせねば、腹が癒えぬわえ。此やうな賃仕事いたしをるも、浪人ぐらしのコリヤ慰みと申すものぢや。御主人が榮えてゐらるれば、鹽冶の家中、民谷伊右衛門、きつと致した侍ひぢやぞ。なんと心得て居るのぢや。返答次第で、年寄りとは云はさぬぞよ。

ト細工を仕かけて立ちかゝる。

孫兵　へイ／＼、御尤もでござります／＼。どのやうに仰しやりましても、此方に一言の申しやうもござりませぬ。小平めが不屆き、只今も仰しやります、取り逃げいたした代物は、マア何々でござ

ります。

伊右　何と申して、おのれらが存じた品ではないワ。この民谷家に先祖より、持ち傳へ居るソウキセイと申す唐藥。こりや外には少ない藥種、腰膝ぬけたる難病にも、忽ち眼前の不思議。浪人の身の不自由ながらも、外手さへ渡さぬ品、それを盜んで駈落ちひろぎ、コレ

ト粗末な脇差を出し

このがた〳〵丸を忘れてうせた。彼奴が雜物といふはこればかりだ。近所の衆も氣の毒がつて、今朝早々、小平めが行くへの詮議。おれも常なら駈け出すが、何をいふも折惡う、女房の初産ゆゑ、人手が欲しさ、雇つた小平め、却つて主に手を煩はせる。思へば〳〵腹の立つ。捕へ次第に、左樣心得うせをらうぞ、

ト叱りつける。孫兵衞思ひ入れ。

宅悅　御尤もでござります〳〵。按摩とりのわしが口入れで、雇ひに抱へた小平が駈落ち。折惡いお内儀の初產が、血が納まらないで後の御病氣。その中での駈落ち。誠にわしが旦那へ云ひ譯がござらぬ。親仁どの、こりやマア貴樣は、何と思はつしやる。

孫兵　イヤモウ、何と申してようござりませうやら。併し常から私しが悴ながらも、正直者の役立たず、

殊に取り逃げ駈落ちの、持つて參つたその品は、あなた樣の御先祖から、お家に傳はるその藥種。

アヽ、何とも以て

卜考へる。

宅悦　錢金は取り逃げの當り前。藥を持つて駈落ちは

孫兵　そんならもしや、古主の御病氣、あなたへ用ゆる心から、そのお藥を

伊右　どうしたと。

孫兵　ヘイ〳〵、憎い奴でござりまする。

伊右　コレ親仁、今申したソウキセイは、僅かな物と思はうが、世間に稀れなる代物ゆゑ、藥種問屋へ持つて行つても、十兩や二十兩には直きなるワ。先祖よりの添へ書、お醫者方の鑑定もある、相違ない代物だ。併しそれほど願ふ事なら、其方に免じて、一兩日の日延は致しくれう。その内に行くへ知れねば、藥種の代り、代金を持參いたして、その上に濟ましてくれうぞ。左樣心得、歸れ〳〵。

孫兵　ハイ〳〵、それは有り難うござりまする。只今からきつと尋ね出しまして、その上お詫びを申しませう。これはお前、いかい苦勞をかけまする。

宅悦　イヤモウどうも、迷惑ながら掛り合ひ、誠に人の世話は、こゝが怖いて。

ト この間に孫兵衛、草鞋を穿き、身拵へする。

伊右　併し彼奴が宅は、どの邊であつたな。

宅悦　エヽ、深川の寺町邊でござりますれば、誠に遠方でござりまする。……歸りがけでも氣を附けて、尋ねながら行かつしやいよ。

孫兵　イヤモウ、その心懸けでござりまする。左樣なら旦那樣、お暇申しまする。

伊右　一兩日にきッと詮議して參れ。さもないと、われもその分ではさしおかぬぞ。

孫兵　ハイ／＼、畏まりました。宅悦樣、御厄介にござりまする。

宅悦　氣を附けてござれよ。

孫兵　ハイ／＼。

ト門口へ出て、ちよつと考へ

常から正直な小平め、取り逃げしをるとは、誠にこれが、子は三界の首枷、とはいふものゝ、藥とあれば、テッキリお主の

ト思ひ入れ。

宅悦　まだござらぬか。

逑兵　ハイ、おやかましうござりました。

ト唄になり、孫兵衞、菅笠を持ち、思案しながら向うへ入る。

宅悅　さう云つてもあの親仁は、氣が氣ではあるまい。

トこの時蚊帳の中にて手を打つ音する。

ハイ〳〵、お藥かな。

伊右　氣を附けて下さいよ。

宅悅　畏まりました。

ト屛風の中へ入る。伊右衞門思ひ入れあつて

伊右　この無けなしのその中へ、餓鬼まで產むとは氣のきかねえ。これだから素人を女房に持つと、こんな時に亭主の難儀だ。

ト小言を云ひながら又仕事にかゝる。宅悅出て來て

宅悅　サア〳〵、藥だ〳〵。溫めてあげませう。

ト七輪へ土瓶をかけて煽ぐ。

伊右　お岩の藥か、產れ子の藥か。

宅悦　イエ〳〵、お岩樣のでござりまする。あの子はグッとも仰しやらぬ、應揚なお子樣だ。誠にお前によう似て、爭はれぬものでござりまする。

伊右　ナニ、おれに似てゐるか。

宅悦　左樣でござりまする。

伊右　親に似たなら、定めし目玉が思ひやられる。

宅悦　ハヽヽヽヽ。

ト思ひ入れ。角兵衞獅子の合ひ方になり、向うより秋山長兵衞、さんするゐなる形、大小にて走り出て來り、門口より

長兵　伊右衞門どの、お宅か〳〵。小平めを見附けて來た〳〵。

伊右　これは秋山氏、見當りましたか。

長兵　左樣々々。まづ心當りは下町邊と存じつき、わしの身寄りが築地にあるゆゑ、あの邊まで參り、新堀通りにかゝる道にて、見當りました。なんでも彼奴は、深川邊へ參ると見えました。

伊右　深川は彼奴が親の內でござる。今まで親仁も呼び附けておきました。

長兵　オヽ、左樣か。イヤ、何よりは貴殿が苦勞にさしつたソレ、持つて逃げた藥はこれでござらう。

ト木綿の小風呂敷に包みし薬包みを渡す。

伊右　これは忝い。誠にこれが返れば安堵します。して小平めは

長兵　アレ〳〵、あそこへ官藏どのが引ッ張つて参つた。

ト また角兵衞獅子の鳴り物になり、向うより官藏、浪人、件の形。伴助、中間にて、小平をグル〳〵巻きに縛り、髪も亂れ、着類も破れし體なるを、二人して捨ぜりふにて手荒く引摺り來る。

小平　ハイ〳〵、御免なされませ〳〵。

官藏　御免といつて濟むものか。

伴助　うぬア太い奴だなア。

ト 此やうなセリフ云ひながら舞臺に連れてくる。

官藏 伴助　サア入りやアがれ。

ト 内へ引摺り込む。

伊右　これは官藏どの、御苦勞千萬。秋山氏に樣子を承つてござる。何かと忝う存ずる。オヽ、伴助か、大儀であつたなア。

伴助　ヘイ〳〵。モシ旦那、御安堵でござりませう。

宮藏 コレ、伊右衞門どの、身共などが出ますると、直きに斯樣ぢやて。懷中に彼の一藥を持つてゐましたが、誠に見掛けに依らぬ太い奴でござる。

宅悅 コレ〳〵、てめえゆゑにナ、おれまでが難儀をするワ。コレ、今まで親仁を呼び附けておいたが、マア〳〵てめえ、どういふ心になつたのだ。

トこれにて小平、やう〳〵顏を上げ

小平 口入れして下すつた、お前にまでも苦勞をかけまする。フトした出來心。左樣なら、親仁も參つて歸りましたか。アヽ氣の毒や、さぞ案じませう。申し、旦那樣、持つて走りましたお藥も、長兵衞樣がお取上げなされました。もう〳〵、外に何も取りました品はござりませぬ。どうぞ御勘辨の上、穩便にお願ひ申しまする。

ト思ひ入れ。

伊右 ナニ、穩便に致してくれろとか。イヤ、此奴不屆きな事をぬかすな。おのれが取り逃げ駈落ちを、主のおれがナニ穩便に致すものか。誠に此奴、呆れるほどな太い奴だ。

宮藏 左樣〳〵。殊に常から此奴が申すを聞けば、此奴が古主は鹽冶の家中、お手前が朋輩、小汐田又之丞が小者との事。親仁は勿論、女房子までござるとの事。誠に人は見かけによらぬものでござる。

作助　左樣でござりまする。聞けば此奴の內に、その又之丞どのとやらが、居候ふにゐるとの事。

伊右　何といふ。同家中であつた又之丞が、こいつ小者か。ヤイ小平め、おのれ、いよ〳〵左樣か。

小平　ハイ〳〵、それに違ひはござりませぬ。私しが親元は、又之丞樣の御家來筋。御恩を受けしお主樣は御浪人の上、この間は御難病。それに附き私しが雇ひ奉公。女房忰親仁まで、皆それ〴〵に賃仕事やら商ひやら、貧な中へ主人の御病氣。その御用にも立たうと存じたゆゑあのお藥。全く惡氣では致しませぬ。主人の爲と忠義の盜み。捕へられたは誠に天命。旦那樣、どうぞお助けなされて下さりませ〳〵。

トいろ〳〵に詫びるを聞いて

伊右　そりや何か、われが古主の又之丞が病氣につき、おれが家に持ち傳へた一藥を盜み取れと、又之丞がわれに賴んだのか。

小平　イエ〳〵、毫頭主人は存じませねど、こりや私しが出來心で

伊右　出來心であらうが、忠義であらうが、人の物を盜まば盜人。忠義で致す泥棒は、命を助けるといふ天下の掟があるか。たわけ面め。一藥も取り返し、取り替への金子さへ返せば助けてやらう。その代り、おのれが指を一本づゝ折つてしまふワ。

長兵　これはよい慰みでござらう。然らば十本の指を、殘らず折つて見せうか。

官藏　金の代りに指十本。イヤハヤ廉いものでござるな。

伴助　私しも稽古の爲に、折つて見せう。

長兵　サア〳〵。手傳へ〳〵。

ト皆々小平に立ちかゝる。宅悦、捨ぜりふにてとめる。小平思ひ入れ。

小平　アヽモシ〳〵、この上指を折られましては、手が不自由となり、お主や親を過す事が出來ませぬ。

三人　それをおい等が知るものか。

小平　お慈悲でござりまする。どうぞこの儀は

長兵　エヽ、やかましい。猿轡でもはめさつしやい。

三人　合點だ〳〵。

ト三人立ちかゝり、伴助、手拭を取つて、小平の口をゆはへて

伊助　これでようござりまする。

長兵　まづ手初めに鬢の毛を抜け。

官藏　こいつはよからう。

ト立ちかゝつて、小平が小鬢の毛を拔き、莨を吹きかけ、いろ〳〵さいなむ。唄になり、向うよりお槇、前幕の乳母にて、供の中間、隅田川の酒樽と、重詰め物を持ち出て來り、門口へ來て

まき　ハイ、お頼み申しませう〳〵。

三人　アヽ、誰れか來たぞ〳〵。

伊右　客とあればその下郎、押入れへなりとぶち込め。

三人　合點だ〳〵。うしやアがれ。

ト杉戸を明け、小平を打込み、戸をさす。此うち宅悦出迎ひ

宅悦　ハイ、どれからお出でなされました。

まき　ハイ、御隣家の伊藤から參りました。お取次ぎの儀を

ト云ふを長兵衛聞きつけ

長兵　アヽ、伊藤からのお使ひか。……オヽ、お乳母のお槇どのか。サア〳〵此方へ、入りやれ〳〵。

まき　ハイ〳〵、左様なら御免なされませ。

ト內へ入る。

長兵　伊右衛門どの、喜兵衛どのから使ひが來ました。

伊右　アヽ左様か。これへ〳〵。誠に御近所にあつて、御疎遠仕る。御主人にもお變りはないかな。

まき　有り難うござります。主人喜兵衛はじめ。後家弓ことも、よろしうお言傳を申しまする。承りますれば、御内室お岩様が、御産ありしとおめでたきお噂。この品は、あまりお麁末にはござりますれど、お目にかけまする。また御酒とお煮染は、お夜伽遊ばしまするお方へ、お慰みのためお目にかけますと、遣はしましてござりまする。よろしくお頼み申しまする。

ト切溜めに煮染め。酒樽。二重の組重へ、切り餅、白味噌、鰹節の類の詰めたるを差出す。

伊右　これは〳〵、いつもながら御叮嚀に、誠に痛み入りまする。忝う存じまする。お入れ物は此方より持たせ遣はしませう。よろしく申して下され。

まき　畏りました。……また一品の粉薬、これは即ち手前隠居の家傳とござりまして、調合いたされまする血の道の妙薬、お岩様へお上げなされても苦しうござりませぬと、わざ〳〵遣はしましてござりまする。

ト懐中より粉薬の包みを出す。伊右衛門取つて

伊右　これはお心附かれ、忝う存ずる。早速に用ひませう。コレ、てめえ、白湯を仕掛けてくれろ。

作助　畏りました。

ト別の土瓶へ水を入れてかける。この時、屋體の内にて、赤兒頻りに泣く。

まき　オヽ、やゝ様が、いかうおむづかり遊ばしまする。して、御男子でござりまするか。

伊右　左様々々。

まき　それはおめでたうござりまする。

ト此うち矢張り、兒はせわつて泣く。

これはしたり、いかうおむづかり遊ばしまする。大方蚤がせゝりますのかも知れませぬ。私しが見てあげませう。

伊右　それは忝い。何分よろしく

まき　ハイ〳〵。

ト立ちあがり

コレ、こなたは先へ歸つて、申し上げてくりや。わしは只今歸りまするると、お上へ申して下され。

中間　畏りました。左様なら御免遊ばしませう。

ト唄になり、お槇、風呂敷包みを持つて屏風の中へ入る。長兵衞、官藏、切溜めを出し、樽を引寄せ

長兵　伊右衞門どの、始めさつせえ〳〵。

伊右　ハテ、せわしない手合ひだ。

ト云ひながら、打寄つて酒を始める。角兵衛獅子になり、向うより茂助、大風呂敷を肩へ掛け、質屋にて出て來り、内へズツと入り

茂助　伊右衛門どの、お留守かな。

伊右　イヤ、宿に居る。

茂助　これは珍らしうお宿ぢやな。此方からお宅かと云ふと、留守と云はつしやるから、お留守かと云つたら、お宿とは珍らしい儀でござりまする。モシ、伊右衛門様、この間からお貸し申しました蚊帳蒲團に、搔巻まで、代りも來ぬのに上げましたが、あの損料の元利〆め高二分二朱、サ、勘定なさるとも、品を返さつしやるとも、方附けて下さりませ。又その外に、去年中から不義理なあれなりの五兩の一件、サア、片附けてもらひませう。さもないと今日は、この地面のお屋敷へ、斷つて出ねばなりませぬ。サア、どうでござります〳〵。

トせき立てる。伊右衛門、思ひ入れあつて

伊右　これはしたり、この間は取込みがあるゆゑ、挨拶も延引いたすが、いづれ近々のうちに

茂助　イエ〳〵、待ちませぬ〳〵。左樣なら是非がない。御地面のお屋敷へお斷り申して

ト行かうとする。皆々とめて

長兵　コレサ、おいらが請け合つたからは、あの一件は

茂助　イエ〳〵、お前樣方のお請け合ひ、これまで一つも解りませぬ。お構ひなされますな〳〵。

ト行かうとするを、伊右衛門、思ひ入れあつて

伊右　利倉屋待ちやれ。

茂助　エ。

伊右　五兩の勘定、致してやらう。

茂助　エヽ、左樣ならアノ五兩を……サア、受取りませう。

伊右　イヤ、その金は無いが、その代りにはこれを渡さう。

ト藥包みに、鑑定書、殘らず附けて渡す。

茂助　モシ、これは何やら藥の包み。アヽ、これが、五兩の抵當になりまするか。

伊右　その唐藥は民谷の先祖、持ち傳へたるソウキセイ。賣り買ひなれば二十兩、それ以上にもなる藥種、相違のないはその添へ書。さる奥醫者の鑑定もある。不請であらうが利倉屋茂助、五兩の代りに預かつてくりやれ。

ト茂助、藥包みをよく〳〵見て、

茂助　成る程、お醫者方の御判の据つたこの唐藥。さう仰しやれば違ひもあるまい。幸ひ私しが下質を送る、深川の金子屋、亭主は以前藥種屋あがり、それへ見せたその上にて

伊右　わづか五兩だ、預かつておきやれ。

茂助　そんならこれはマアこれで

ト懷中し

これからは入れ替への代物、蚊帳と蒲團を持つて行きます。御免なされませ。

ト立ちかゝる。

伊右　これはしたり、まだその外に借り着の品を

茂助　あの二分二朱の勘定が濟まぬと、棚卸しが片附きませぬ。御免なされませ。

ト屏風へかゝるところへ、お槇出て來り、茂助をとめる。

まき　コレ、町人どの、産婦のお居間へぶしつけな。聞けば何やら金子のこと……コレ、それで大方ナ、その儘おいて

ト思ひ入れ。紙に包みし小判壹兩、ツツと茂助に握らす。茂助、思ひ入れあつて

茂助　ヤア、こりや小判。
まき　サ、産所へ聞えて益ない事。それではこなさん。
茂助　アイ、云ひ分もござりませぬ。誠にこれは、大きにお世話でござります。
伊右　何やらかやら、度々のお心附け。お禮を申さうやうもござらぬ仕合せ。
まき　何しに左樣な。御心配御無用に遊ばしませ。私はもう、お暇仕りませう。
　　ト門口へ行く。
茂助　左樣なら私しも、道までお供いたしませう。伊右衞門樣、唐薬の儀は、下質へ見せた上にて、その御返事を
伊右　何分預かつてもらはう……これはお乳母どの、よろしう頼みます。大儀でござつた。
まき　ハイ〳〵。あなた方も御ゆるりと。サア、茂助さんとやら
茂助　ドリヤお、暇申しませうか。
　　ト唄になり、お槇に茂助附き、向うへ入る。皆々思ひ入れあつて
長兵　コレ〳〵、民谷氏、あゝマア伊藤の屋敷から、こなたの所へ叮嚀に、折々の見舞ひ。一度は禮に行つたといつて

伊右　サア、さう思つても、あの屋敷へは、どうも身共は世間の手前で
宮藏　そりや又なんで
伊右　ハテ、伊藤喜兵衛は高野の家中、今は町家のあの屋敷。この伊右衛門は鹽冶の浪人。それゆゑどうも肩身がすぼまつて
宮藏　成る程、そこもあるわえ。
　　　トこの時、上手の屋體にて、赤兒泣く。
伊右　よく泣く餓鬼だ。蚤でもくふのか。
　　　ト障子を明ける。此うちに木綿蒲團を敷き、お岩、産後の體、襟に苧を引かけ、赤兒を抱き、いぶりつけゐる。此うち合ひ方。伊右衛門見て
　　　お岩、今日は心よいか、どうだ。
長兵
宮藏　見舞ひに來ました。
　　　トお岩思ひ入れあつて
いは　有り難うござりまする。産後と申し、この間の不順な陽氣。その所爲かして、一倍氣持ちが
　　　ト思ひ入れ。此うち、赤兒の上に、結構なる小袖かけあるを、伊右衛門見て

伊右　コレお岩、その小裁は見馴れぬ着物。そりやアおぬしが

いは　イエ〱、こりや今、喜兵衛樣のお宅から、後家御樣が內證で、わたしが方へ心附けて下さりました。お前、禮に行て下さんせ。

伊右　アヽさうか。あの內からは、氣の毒なほど物を贈るが、どうもおれは氣が知れぬて。

長兵　それだによつて、度々身共が申すはこゝサ。以前は以前、今は浪人民谷伊右衛門、敵同士の義理を捨て、あの屋敷へ行くがよからう。

いは　仰しやる通り隣家の事、どうぞお禮に行て下さんせ。

伊右　イカサマ、お岩が云ふ通り……すりや、ちよつと行かずばなるまいが、何をいふにも、おれ一人では

いは　お前その心なら、お二人を連れにして

長兵　さうサ〱、おいら二人が

官藏　行つて進ぜう。

伊右　そんなら直ぐに、思ひ立つ日を吉日と、行きませう〱。

兩人　さうさつしやい〱。

伴助　私しがお供を致しませう。

宅悦　お留守は私しが致しませう。ちよつとお禮にお出でなさるがようござります。

ト此うち伊右衛門、大小を差し、古き羽織を着て、支度をする事あつて

伊右　イヤ、行きは行かうが、今日はまだ飯を炊かずにおいた。コレ、てめえ、飯を焚いてくれめえか。

宅悦　ハイ〳〵、何でも致しませう。

伊右　併し、あの押入れの奴を逃がすなよ。コレ、これが彼奴の扶持方棒。

ト一本差を見せて

ほんに、この粉藥は、いま伊藤の屋敷から、お岩が所へ寄越さしつた血の道の藥、これを服むがよい。家傳だといふ事ぢや。

ト藥を渡す。

いは　左様でござりまするか。いまお乳母どのが、その噂を致されました。爰へ下さりませ、白湯が沸いたら下さりませうが、モシ、お前は早う戻つて下さりませえ。

伊右　直に歸るわサ。サア行きませう。コレ、飯を頼むぞよ。

宅悦　心得ました。

伊右　行くぞよ、お岩

いは　アイ、必ず早う

伊右　何をしてゐるものか……サア、行きませう。

ト唄、時の鐘になり、伊右衛門に三人附き、向うへ入る。宅悦、奥へ入る。あと合ひ方、捨て鐘。お岩あと見送り、思ひ入れあつて

いは　常から邪慳な伊右衛門どの、男の子を産んだというて、さして喜ぶ様子もなう、何ぞといふと穀つぶし、足手まとひな餓鬼産んでと、朝夕にあの悪口、それを耳にもかければこそ、針の蓆のこの内に……ひよんな男に添ひとげて、辛抱するも父さんの、敵を討つてもらひたさ。

ト思ひ入れ。この時、頭に差したる鼈甲の誂への櫛落ちる。取上げ見て

こりやこれ、母様のお形見の、三光のこの差し櫛。物好きなされし菊重ね。胸に工風の銀細工。身貧な仲でも離さぬは、どうで産後のこの病氣、とても命も危ふいゆゑ、わしが死んだら妹に、せめて形見と贈るのは、母の譲りのこの差し櫛。これより外に、この身に附いた

ト思ひ入れ。この時赤兒頻りに泣くゆゑ、いぶりつけ／＼、産所を離れ、よき所へ来り、よろ／＼として

アヽ、また眩暈がする。血の道の所爲であらう。この粉藥、マア、これなと服んで

ト合ひ方。蟲の音。時の鐘。お岩、件の粉藥を茶碗へあけ、土瓶の白湯を茶碗につぎ、服む事あつて

これで少つとは心持も直らう。ドリヤ、大事のやゝを

ト抱き取らんとして、俄に病氣起りし體にて、苦痛の思ひ入れ。

ヤヽ、今の藥を服むと頻りに、常より氣持が……ヤヽ、こりや顏が熱氣して、一倍氣合ひが……

アヽ、苦しや〳〵。

ト思ひ入れ。宅悅、奧より何心なく出て來り

宅悅　モシ〳〵、お汁でも仕掛けませうかな。これはしたり、どうなされた〳〵。お前は、それ〳〵、顏色が變つて、どうやら樣子が

いは　今の粉藥を服むと其まゝ……アヽ、苦しや〳〵。

宅悅　ナニ粉藥をあがつて苦しいとは、藥違ひではないか。マア〳〵、風にあたつては惡い。サヽ、此方へござつて

トいろ〳〵介抱する。赤兒頻りに泣く。お岩苦しむ。宅悅、あちこちしてゐる内、押入れの戶をやうやう明けて、小平出ようとするを見附け

ドツコイ〳〵、逃がしはせぬぞ。

ト戸をたて、思ひ入れあつて

一方ふせげば又一方、二方三方、イヤ、とんだ留守を頼まれたわえ。

ト思ひ入れ。お若苦しむ。駈けよつて介抱する。時の鐘にて、道具、鷹揚に廻る。

本舞臺、三間の間、伊藤喜兵衛が宅、座敷の體。床の間、違ひ棚、よき所のれん。結構なる襖。下には生垣、枝折り門。よろしく飾りつけ、甚句の唄にて、道具とまる。

ト伊右衞門、上座に坐り、お弓、後家の形、お槇つき、銚子杯、鉢肴など取散らし、長兵衞、官藏、酒盛りの體。伴助、甚句を踊りゐる。二重舞臺よき所に喜兵衞、眼鏡をかけ、隱居い體にて、銅盥にて小判を洗ひ、箱にしまうてゐる。よろしく納まる。伴助踊り、ころぶ。皆々笑ひになり

長兵　イヤ、どうでも伴助は越後産れゆゑ、甚句はきついものだ。

ゆみ　とてもの事に秋山樣、何ぞあなたのお隱し藝を、拜見いたしたうござりまする。

長兵　イヤ、それは迷惑。身共が藝と申しては、聲色ばかりでござるて。

喜兵　それは一興。聲色は誰れを遣はつしやる。

長兵　矢張り築地（坂東善次）の聲色サ。

宮藏　イヤ、貴公の築地も、あまり流行に遅れた。ちと外の者でもお遣ひなさい。
長兵　その外の者と申しては、然らば聲色のてんたくは、愛宕の下ではござらぬか。
宮藏　何を云はつしやる。
　　ト笑ひになる。奥より若黨、吸ひ物椀を三人用意して運ぶ。
まき　お吸ひ物が宜しうござりまする。あなた方へ上げませうか。
ゆみ　さうしてたも〳〵。
　　トお槇、三人へ膳を据ゑる。伊右衛門、喜兵衛へ目をつけ
伊右　イヤ御隱居、あなたのそれに洗うておいでなさるは、目貫の類でござるかな。
喜兵　イヤ〳〵、左様の品でござらぬ。これは親どもより貯へ罷り在る小判小粒でござるが、折々錆が出まするゆゑ、金銀を洗ひまするが、隱居の役でござるて。ハヽヽヽ。
まき　サヽ、お麁末にはござりますれど、お吸ひ物にて御酒一獻。
長兵　それは御馳走。時に伊右衛門どのへ膳が足りぬが、マア〳〵これなと
　　ト手前の膳を据ゑようとする。
まき　イエ〳〵、伊右衛門樣には、外に上げまするお吸ひ物がござりまする。マア〳〵あなた方、お麁

末ながら

三人　然らば御馳走に相成りませう。

ト銘々吸ひ物の蓋を取ると、中に小粒の金澤山入つてゐる。三人悄りして

長兵　このお吸ひ物は誠に珍物。

官藏
伴助　イヤ、恐れ入りました。

ゆみ　常から願ふ伊右衛門様を、御同道なされて下さりましたあなた方、どのやうに御馳走申しても、決していとひはござりませぬ。お心に叶ひましたら、槙や、お替へ申して上げや。

三人　それは何より御馳走でござります。

ト云ひながら皆々袂へ入れる。

喜兵　何れも方へ御馳走は申せども、肝腎の伊右衛門どのへは、ア丶、何を馳走に

三人　その御馳走を、拜見いたしたうござるな。

まき　左様御意なされまするなら、分けてあなたへ御馳走に

トあたりへ心遣ひして

お二人様は、少しの間お席を

ト こなし。兩人のみこみ

三人 心得ました。然らば此まゝ

ゆみ お附き申して。

まき サア、御案内仕りませう。

ト合ひ方になり、お槇先に、長兵衞、官藏、伴助附添ひ奥へ入る。三人殘り、喜兵衞、洗つてゐたる小判を手箱にのせ、伊右衞門の前へ差出し

喜兵 伊右衞門どの、不躾ながらこの品、御受納なされて下されい。

伊右 見れば多くの金銀を、拙者が前へ差置いて、受納いたせとお云やるは、何か仔細の

ト思ひ入れ。

ゆみ その儀はわたしが、只今これにて

ト合ひ方變つてずんと立ち、お弓、奥より振り袖姿のお梅の手を取り、よき所へ坐らせ、思ひ入れ。

これなる者は、病死いたしたわたしの連合ひ、又市どのと二人が仲の、娘のお梅。

喜兵 これに居る身が娘の、お弓が腹に儲けましたる孫のお梅、どういふ縁か其許樣を、見染めましたが病ひの起り。養生の爲淺草へ、同道なして又ぞろや

ゆみ　思はずお見受け申してより、この子の喜び。サア、常々思ふ心のたけを

　　ト云はれて、お梅、恥かしき思ひ入れあつて

うめ　母さんの其やうに、心を附けてのおいつくしみ。何をお隠し申しませう。いつぞやより御近所へ、お宅替へなされし民谷様、どうした事やらお目もじの、その時フッと恥かしい、女心の一筋に、思ひ詰めたるこの身のわづらひ、明暮れ思ふが戀病みの

ゆみ　枕につかねど顔形、日にまし痩せるその様子。やう〳〵問へばあなたの事、忘れかねたる娘氣の

うめ　奥様のあるお前様、思ひ切らうと思うても、因果な事に忘れかね、せめてあなたの召仕へ、水仕奉公いたしても、わたしは大事ござりませぬ。どうぞお側に、お使ひなされて下さりませ。

　　ト恥かしき思ひ入れ。

喜兵　サア、お聞きの通り。ならう事なら聟に取り、梅が願ひを叶へてやりたさ。

ゆみ　あれ程までに思ひ染めし娘が心根。町人の身で暮らしなば、お岩様の手廻りにて、お使ひなされて下さるか、但しあなたの妾にも、遣はしたう思うても、武士の家にて世間の聞え。殊に連合ひ病死の上は、位牌の手前、どうも左様な

　　トこれにて伊右衛門、こなしあつて

伊右　委細の樣子を承り、申しやうなき娘御の心根。いはゞ拙者も民谷家へ養子の入り聟、義理のある女房お岩、これぱつかりは、氣の毒ながら

喜兵　然らば孫めが、斯程の願ひも

ゆみ　叶ひませぬも皆御尤も。この上は、わが身はあなたの事を

うめ　アイ、思ひ切ります。その證據は、爰でわたしは

ト帶の間より剃刀を出して

南無阿彌陀佛。

ト自害せんとする。皆々とめて

喜兵　こりや尤もぢや。其方が願ひが

ゆみ　叶はぬ時はとひきつめし、娘心も武士の胤。可哀や其方の願ひもこれでは

ト思ひ入れ。この時長兵衛出て來り、伊右衛門に向ひ

長兵　コレ、伊右衛門どの、こなたは大きな料簡違ひ。どうで死にかゝつてゐるあのお岩どの、遲いか早いか死んだ跡では、女房を持つは今の間だ。お二人の氣休めに、こなたはいつそ巣を替へる、その相談が、よさゝうなものだぞよ。

伊右　イヤ〳〵、この上有徳になるとても、お岩を捨てゝは世間の手前、こればつかりは出來ますまい。

トこれを聞き、喜兵衛思ひ入れあつて、伊右衛門の前へ坐り

喜兵　サア、伊右衛門どの、殺して下され。この喜兵衛めを、殺して下され〳〵。

伊右　お年寄りの突き詰めた様子。この相談が調はねば、なぜ又殺せと仰せらるゝな。

喜兵　サヽ、そこでござる。孫めが事を不便に存じ、聟に取らうも女房持ち、アヽどうがなと工風をこらし、お弓にも知らさずに、身が覺えたる面體崩るゝ秘法の毒薬、お岩どのに服ませなば、忽ち相好變るゆゑ、その時こそは、こなたも、女房に愛想づかし、別れ引きにもなつたなら、後へ持たせるこの孫と、悪い心が出たゆゑに、口外せねど、先刻こなたへ血の道の薬と、内へ持たせて遣はしたるは面體變る大毒薬。併し命に別條なし。こればかりを取得にして、よもや罪にもなるまいと、お岩が所へやつたるが、事叶はねば身の懺悔、それだによつて殺して下され。

ゆみ　すりや其やうな恐ろしい、巧みの元もこの子ゆゑ

うめ　逆罰あたるはそりや眼前。

喜兵　こなたが得心ある時は、家の有り金残らずこなたへ

長兵　その据ゑ膳を食はぬのは、こなたの料簡ちがひといふもの。

喜兵　サヽ、腹が立つなら殺して下され。

ゆみ　ぢやと申しても、あなたを愛で

うめ　いつそわたしが

　　ト死なうとするを、お弓とめる。

長兵　承知はねえのか。

伊右　サアそれは

ゆみ　死ぬるこの子を、どうぞ助けて

伊右　ぢやと申して

喜兵　然らば身共を

伊右　サアそれは

兩人　サア

伊右　サア、サア〳〵

喜兵　横しまながら

ゆみ　御返事を

ト思ひ入れ。伊右衛門、こなしあつて

伊右　承知仕りました。お岩を去つても、娘御を申し受けう。

喜兵　すりや御得心下されて

ゆみ　さすればこの子も

長兵　願ひが叶うて。

伊右　その代りには拙者もお願ひ。

喜兵　して其許の願ひとは

伊右　高野の屋敷へ推擧の程を

喜兵　承知いたした。お頼みなうても一家となれば

伊右　御息女もらへば聟舅、民谷の家名も、いつしか伊藤の

ゆみ　思ひ立つ日も今宵は吉日。

喜兵　內祝言も直ぐに今晚。承知でござるか。

伊右　いかにも承知サ。

長兵　まづ何よりはこれにて杯。仲人はこの長兵衞。コレ、お梅どの。へゝ、あやかり者め。

うめ　今更どうやら

ゆみ　流石初心な

喜兵　そりや、聟どのぢやぞ。

ト お梅を突きやる。伊右衛門へ倒れかゝり、恥かしきこなし。伊右衛門氣を變へて

伊右　女房でござる。變ぜぬ金打。

ト小柄をとつて金打の體。兩人見て

喜ゆ　エヽ、忝い。

ト手を合せる。時の鐘、唄になり、この道具鷹揚に廻る。

本舞臺、元の伊右衛門の世話場に戻る。爰にお岩、面體恐ろしき様子に變り、苦しみ倒れゐる。宅悦、介抱してゐる體にて、道具とまる。

宅悦　イヤ、誠にとんだ留守を頼まれた。モシ、お岩様、どうでござります。氣持はようござりますか。

いは　アヽ、何ぢやゝら、喜兵衛様より下された血の道の藥を服んで、俄に顏が發熱して……アヽ、苦しうなつたわいの。

宅悦　イヤモウ、大きに案じました。マア〳〵よいさうで、落ち附きました……これはしたり、もう日暮れたさうな。灯をつけずばなるまい。ドレ〳〵

ト行燈を出し、灯をつけて

併し、今の藥で、どうして俄にあの苦痛を

ト云ひさま行燈の灯にて、お岩が顔の變りしを見て、恟りして

ヤア、お前は顔が

いは　顔がどうぞしたかいの。

宅悦　サア、少つとのうちに、マア其やうに

ト云はうとして、思ひ入れ。

サア、其やうに癒るとは、大方そこが、家傳の良藥でござりませう。

いは　わしも最前は俄の熱氣。どうなる事と思うたが、併し、苦痛も、少しは癒つたわいの。

宅悦　イヤ、お仕合せでござります。イヤ、灯はついたが、油がなかつた。私しが、ちよつと買つて參りませう。

いは　さうして下され。この様子では叶はぬ。コレ、爰にお錢が




尾上
京大坂
関三十郎

ト　あたりより小錢を五十ばかり通したのを探り取り

これを持つて、早う頼みますぞえ。

宅悦　畏りました。

ト　油注ぎを取つて

まだ〳〵、歸つてくるまではござりませうよ。

いは　早う頼みますぞや。

宅悦　ハイ〳〵。

ト　門口へ出て、身慄ひして

ハテ、奇體な事だわえ。先刻までは何ともなくつて、ちつとのうち苦しむと思つたら、あれ程までも

ト　これを聞きつけ

いは　まだ行かぬかいの。

宅悦　ハイ、鼻緒が切れましたから

ト　時の鐘、合ひ方にて、宅悦、向うへ入る。お岩殘り

いは　何ぢやゝら、伊藤様から下されたお薬は、血の道にはよいやうなれど、顔の熱氣は今に癒らず、悪い御酒などたべた氣持ぢや。

トこの時赤兒泣く。

アヽ、又せわるかいの。添へ乳してやりませう。

ト赤兒に添へ乳しながら

サア、今に父さんがお歸りであらう。爰では蚊がさしまする。マア〳〵蚊帳へ入つて、添へ乳してやりませう。

ト上の方蚊帳の内へ入り、赤兒をたゝきつけてゐる。唄、時の鐘になり、伊右衛門、腕組み、思案の體にて出て來り、花道にて

伊右　今の喜兵衛が話しでは、命に別條ないかはり、相好變る毒藥と申したが、もしや女房があの跡で……物は試しだつ

ト門口へ來り、ズツと入つて思ひ入れ。お岩、蚊帳の中より

いは　油買うて來て下されたか。

ト蚊帳の中から聲をかける。

伊右　イヤ、油は買ひに行かない。おれだ。
いは　オヽ、伊右衛門どの、お歸りでござんすか。
伊右　どうだ、先刻貰つた藥は服んだか。血の道はどうだ。
いは　アイ、血の道にはよいやうなれど、不思議な事には、服むと其まゝ發熱して、その苦しさといふものは、分けても面體俄かの痛み。
伊右　熱氣が強くて、その顏が
いは　しびれるやうに、覺えたわいなア。
ト云ひながら、蚊帳より出て來る。伊右衛門見て恟り
伊右　ヤア、變つたワ〱。ちつとの内に其やうに。ハテ、爭はれぬ。
いは　何が變りましたぞいなア。
伊右　サア、變つたと云つたは、オヽ、それ〱、おれが喜兵衛どのへ行つて來たうちに、てめえは大きに顏色がよくなつたが、それも先刻の藥の加減でがなあらう。顏が大きに直つた。
ト呆れし思ひ入れ。
いは　わたしの顏附きが、よいか惡いか知らねども、氣持は矢ッ張り同じ事。どうで死ぬでござんせう。

死ぬる命は惜しまねど、生れたあの子が一しほ不便で、わたしや迷ふでござんせう。モシ、こちの人、お前、わたしが死んだなら、よもや當分

伊右　持つて見せるの。

いは　エヽ。

伊右　女房ならば直ぐに持つ。しかも立派な女房を、おらア持つ氣だ。持つたらどうする。世間にいくらも手本があるわえ。

　トずつけり云ふ。お岩、呆れし思ひ入れ。

いは　コレ、伊右衛門どの、常からお前は、情を知らぬ邪慳な生れ。さういふお方を合點で、添うてるるのも

伊右　親仁の敵討を賴む氣か。コレ、否だ。今どき親の敵も、あんまり古風だ。よしにしやれ。おれは否だ。助太刀しようと受合つたが、否になつた。

いは　エヽ、そんなら今更、アノお前は

伊右　オヽ、否になつた。否ならどうする。それで氣に入らずば、この内を出て行けよ。外の亭主を持つて、助太刀をしてもらふがいゝ。こればかりは否だの。

いは　エヽ、今更否だと云はんしても、外へ頼む當て便りもなき女の手一つ。さすれば願ひも叶はぬ道理。さりながら、わたしに爰を出て行けなら、成る程出ても參りませうが、跡でお前は繼母に、あの子をかける心かいの。

伊右　コレ〳〵、繼母にかけるが否なら、あの餓鬼も連れてゆけ。まだ水子のあの餓鬼と、新規に入れる女房と、一口に云へるものかえ。

いは　すりや、こなさんは女には、實の我が子も

伊右　見替へねえでどうするものだ。われもおれを見替へたから、おれもわれを見替へるのだ。

いは　エヽ、なんでわたしがアノお前を、誰れに見替へましたぞいなア。

伊右　サア、その見替へた男はアノ

いは　誰れでござんす〳〵。サア、聞きませう。云はしやんせ。

伊右　オヽ、それ〳〵、あの按摩坊主に見替へた。わりやァ彼奴と、間男をしてゐるな〳〵。

いは　エヽ、何を云はしやんす。いかにわたしのやうな者ぢやというて、あのやうな男と、不義間男をしやうぞいなア。

伊右　わりやアしまいが、おれがの、外で色事をしたらどうする。

いは　サア、そりや男の名聞とやら、どのやうな事さんせうが、願うておいた敵討、力となつて下さらば、なんの、どのやうな事があつても

伊右　かまはぬといふ代りには、敵討を頼むのか。品によつたら、餓鬼まで出來た女房だから、助けてもやらうが、知つての通り工面が悪い。コレ、何ぞ貸してくれろ、急にいる事がある。と云つて何も質草が

　　ト あたりを見廻して、落ちてある櫛を見て

コレ、これを借りよう。

　　ト 取り上げる手に縋り附き

いは　アヽ、そりや母さんの形見の櫛。外へやつては

伊右　ならねえのか。コレ、有やうはナ、おれが色の女に、不斷差す櫛がない、買つてくれと云ふから、これをやらうと思ふが、悪いか。

いは　こればッかりは、どうぞ免して下さんせ。

伊右　そんなら櫛を買ふだけの物を貸せ。まだその上にナ、おれも今夜は身のまはりがいるから、入替へ物でも工面せねばならぬ。何ぞ貸せ。サア、早く貸しやァがれ。

ト手荒く突き飛ばす。お岩、是非もないといふ思ひ入れ。

いは　何と云うても品は無し。いつそわたしが

ト着る物を脱ぎ、下着になり

病氣ながらもお前の頼み。サア、これ持つてゆかしやんせ。

ト涙ながらに出す。伊右衞門取つて、よく／＼見て

伊右　これぢやア足りねえ。もつと貸してくれろ。何も無えか……ヨシ／＼、あの蚊帳を持つてゆかう。

ト駈け寄つて、吊つてある蚊帳を外し、持つて行かうとする。お岩、惆り縋り附き

いは　アヽモシ、この蚊帳がないとナ、あの子が夜一夜、蚊にせゝられて

ト取りつく。

伊右　蚊がくはゞ親の役だ、追つてやれサ。放せ／＼。エヽ、放しやアがれ。

ト手荒く引つたくる。お岩、これに引かれ、タヂ／＼として、蚊帳を離すとて、指の爪を剝がし、手先は血になり、撻となる。伊右衞門ふりかへり

それ見たか。エヽ、イケあたじけねえ。併し、これで足りればいゝが。

ト唄、時の鐘になり、伊右衞門セヽラ笑ひ、蚊帳と小袖を抱へ、悠々と向うへ入る。お岩やう／＼起

上がり

いは　コレ、伊右衛門どの、その蚊帳ばかりは

ト あたりを見て

そんならもう行かしやんしたか。あの蚊帳ばかりはやるまいと、病みほうけても子が可哀さ。放さじものと取り縋り、手荒いばかりに指先の、爪ははなれて此やうに。斯程邪慳なこなさんの、胤とはいへど、いとゞ不便に

ト思ひ入れ。赤兒泣く。お岩、よろ〳〵しながら、あたりを尋ね、土火鉢を出して蚊遣りを仕掛ける思ひ入れ。この内、捨て鐘の合ひ方。向うより伊右衛門、件の品々を肩へ引つかけ、宅悦の手を捕へて出て來り、花道にて

宅悦　モシ〳〵旦那、それはあんまりお情ない。さう致しならお岩樣と私しと、惡い浮名が

伊右　立てさせるのがおれが仕事だ。首尾よく致せば、コレ

ト囁く。

宅悦　エヽ、左樣ならあなたは、今宵アノ内祝言を

伊右　コレ、口外するな。ソレ。

ト包み金を一分やる。

宅悦　エヽ、この金を下されて、アノ私しに

伊右　やり損ふとやらかすぞ。

ト刀の柄へ手を掛けて嚇す。宅悦ブル〳〵して

宅悦　アヽ、呑み込みました〳〵。

ト伊右衛門頷き、引き返して入る。宅悦門口へ來り

お岩樣〳〵、さぞ待ち遠でござりませう。サヽ、油々。

ト行燈へつぎ、お岩の顏見ては、薄氣味のわるき思ひ入れ。お岩、蚊やりをあふぎながら

いは　オヽ戻つてか。こなたの跡へ伊右衛門どのが戻つてござんして、吊つた蚊帳まで取り上げて

宅悦　アヽ、又えて吉へやられましたか。ハテ、むごい心だ。……アヽ、見ればお前は大分薄着に

いは　冷えては惡いといふ病氣、それを貸せとて此やうに、剝いでしまうて

ト涙ながらにふさぐ思ひ入れ。

宅悦　剝いでござつたか。アヽ、困つたものだ。お前もいかい御苦勞なさる。その苦勞をなさるより、いつそ亭主を持ちかへる、工面をなさるが

ト云ひながら、側へ寄つてお岩の手を取り

こりやァお前の手には、悪い筋がござります。一體、コレ〳〵この筋は、女は貞女で苦勞の絶えぬ、これが筋ぢやて。そこでこの筋を切るがようござります。切るとは、その男の緣を切る事でござります。

ト云ひながら、お岩の手を取り、いろ〳〵いやらしき身振りする。お岩、恟りして突き退け

いは　これはしたり、アタ滅相な。コレ、其方はマァ武士の女房に、なんで其やうなみだら千萬。重ねて左樣な不行跡な事しやると、今度は免さぬぞよ。

ト強く云ふ。宅悦笑つて

宅悦　モシ、お前樣ばかり其やうに、眞實をお盡しなされても、あの伊右衛門樣は、遠から心が變つてをります。それを知らずに貞女を立てゝると、跡で難儀をなされませうぞえ。それよりお前樣、いつそ私しと

ト云はうとする。お岩腹を立て

いは　何と云やる。貞女を立てゝ難儀をしようより、私しとゝは、そりや聞き事。サア、それを云や。それを云や。

云はぬと、わが身は不義云ひかけるか。慮外な奴の。女でこそあれ武士の娘、侍ひの妻ともいはるゝこの岩が、品によつては

ト有り合ふ小平の脇差を取つて、スラリと拔いて立ちかゝる。宅悦は悔り、狼狽へ

宅悦　これはしたり、何をなされます。危なうござります。

トその手を留めんとして、あちこちするはずみに、白刃を誤つて後へ飛ばす。この白刃、後の欄間の下の所へ突ッ立つ。宅悦うづくまつて

モシ〱、お待ちなされませ〱。嘘でござります〱。今のやうに申したは、誠に嘘でござります〱。お前の貞女を見ませうと、存じたからの皆僞り。モシ、必ずお腹をお立てなさるな。有りやうは、只今までとは事かはり、お前のやうなそでない顔の女なぞと、なんぼ私しがやうなものでも、アヽ、うとましや〱、何の罰にか病氣の上に、二目と見られぬそのマアお顏。ハテ、氣の毒千萬なものだ。

ト此せりふの内、お岩、不思議の思ひ入れあつて

いは　ナニ、わしの面が先刻のやうに、熱氣と共に俄の痛み。もしやあの時

宅悦　サア、そこがお前は流石女氣、喜兵衛どのから參つたる、血の道の藥は、ありやみんな嘘。人の面

を變へる毒藥。それをあがつたお前の顔は、世にも醜い惡女の面。それをお前は御存じないか。私しが斯う申すのが、疑がはしくば論より證據。コレ／＼、爰の

ト櫛臺より鏡を出し

これでトックリ御覽じませ。

トお岩猶々不思議の思ひ入れ。鏡を手に持ち

いは　何をマア、いろ／＼の事云うて、人に氣ばかり揉ませるわいなう。

宅悦　何は兎もあれ、早くお顔を御覽じませ。必ず悔りなされますなえ。

ト宅悦、手を持ち添へて鏡を見せる。お岩、ちよつと見て、恐ろしき顏ゆゑ悔りして

いは　あれいなう、誰れぞ後に

ト俯向くを、宅悦、猶も鏡をさしつけ、よく／＼見せる。お岩、又怖々と鏡に向ひ、よく／＼見て、思案の體。

いは　ヤヽ、着類の色あひ、頭の樣子、ヤア／＼／＼、こりやこれ本間にわしの面。マアいつの間にわしの顔が、此やうな惡女の面になつて、マア、こりやわしかいの／＼。ほんまにわたしの顏かいなう。こりやマアどうせう／＼。どうしたらよからうぞいなう。

ト大悯り。途方に暮れて泣き落す。宅悦背中を撫で

宅悦　サヽ、御尤もでござります〳〵。それにも外に作者がござる。即ち隣家の喜兵衛様。孫のお梅に伊右衛門様を、貰ひたいにも女房持ち。流石向うは金持でも、ちつとはお前に義理もあり、断わらしつたる曲事と、血の道の藥と僞つて、お前に服ませて顔を變へ、亭主に愛想を盡かさす工面。さうとは知らいでうか〳〵と、一ぱい參つたお岩様、近頃以て氣の毒千萬。

ト殘らず口走る。お岩、だん〳〵と腹の立つてくる思ひ入れにて、鏡にうつる我が顔をヂツト見込んで

いは　さうとは知らず隣家の伊藤、わしが所へ心附け、日毎に贈る眞實を、忝いと思ふから、乳母や婢女へ最前も、この身を果す毒藥を、兩手を突いての一禮は、今に思へば恥かしい。さぞや笑はん、口惜しいわいの〳〵。

ト泣き伏す。宅悦さし寄つて

宅悦　まだ〳〵そんな事ぢやござりませぬ。愛想を盡かして伊藤の聟様、お前と手を切るその爲に、どうぞ汝は女房と、間男いたせとお頼みを、ならぬと申せばスッパ抜き。よんどころなう今の戯れ。お前の着類を其やうに、非道に剝いでござつたも、有やうは今宵が内祝言、聟の支度の入替へに、

持つてござつたお前の代物。その上お前へ私しに、色を仕掛けてくれろと頼みは、即ち嫁をこの内へ、連れてくるにもお前が邪魔、それゆゑわしを頼んだ間男。一部仔什はこの通り。なんぼ頼まれた事ぢやというて、そのお顔ではどうして色に、イヤ、御免だ〳〵。

ト お岩これを聞き、きつと思ひ入れ。

いは　もうこの上は氣を揉み死。息あるうちに喜兵衛どのへ、この禮云うて

宅悦　そのお姿でござつては、人が見たなら狂人か、形もおぼろなその上に、顔のかまへも只ならぬ

ト よろ〳〵する。宅悦、有りあふ衝立にてとめ

ト お岩また鏡を取つて、よく〳〵見て

いは　髮もおどろなこの姿、せめて女の身嗜み、鐵漿なとつけて髮も梳き上げ、喜兵衛親子にこの場の禮を……コレ、鐵漿の道具を、揃へて爰へ。

宅悦　ヤヽ、産婦のお前が鐵漿を附けては

いは　大事ない、サヽ早う。

宅悦　すりや、どうあつても

いは　エヽ、持たぬかいなう。

ト焦れて云ふ。宅悦、恂りして思ひ入れ。

宅悦 ハアイ。

トこれより獨吟になり、宅悦、鐵漿の道具を運ぶこと。蚊いぶしの火鉢へ、さんすいなるぜうごを掛け、麁末なるはんぞうに、道具とも揃へて持ち來る。これにてお岩、こまかに鐵漿をつける事。此うち件の赤兒泣く。宅悦駈けよつて叩きつける。唄一ぱいに切れる。お岩、鐵漿をつけしまひ、件の櫛を見て

いは 母の形見のこの櫛も、わしが死んだら、どうぞ妹へ……ア丶、さはさりながらお形見の、せめて櫛の齒を通し、もつれし髮を、オ丶、さうぢや。

トまた唄になり、件の櫛にて俯向きになり、髮を解き、細かに梳く。赤兒泣くを、宅悦抱いてあちこち歩く。此うち唄切れる。お岩、髮を後へ下げ、この時正面を向くと、生え際うすく拔けあがり、猶更凄き顏色となり、前へ落ち毛山の如くにたまる。右の拔け毛を、櫛と共に持つて思ひ入れ。

今をも知れぬこの岩が、死なば正しくその娘、祝言するはこれ眼前。たゞ恨めしいは伊右衞門どの、喜兵衞一家の者どもゝ、なに安穩に置くべきや。思へば〳〵、エ丶、恨めしい。

ト云ひながら、持つたる拔け毛を櫛もろとも、きつと掴み、思ひ入れ。この髮の毛の中より血汐、タ

ヲ〳〵と落ち、前へ倒れし白地の衝立へ、その血かゝる。宅悦見て慄り

宅悦　ヤヽ、落毛から滴る生血は

ト慄へ出す。

いは　一念通さでおくべきか。

ト叫びながら、よろ〳〵と立ち上がり、向うを見詰めて、立つたまゝ片息になる。宅悦、兒を抱きながら駈け寄つて

宅悦　コレ、お岩様、モシ〳〵

ト思はずお岩の立ち身へ手をかけてゆすると、又よろ〳〵として、上の屋體へバツタリこけかゝる。そのはずみに、最前鴨居に立ちし白刃、程よき所へ落ちかゝりゐて、思はずこけかゝりしお岩の咽喉を貫く。顔へ血かゝり、よろ〳〵と屏風の間をよろめき出て倒れる。宅悦驚き、慄へながら

ヤア〳〵〳〵、小平めの白刃で、思はず止めもこりや同然。ヤア〳〵〳〵、大變々々。

トうろたへ、兒を抱きながら騒いでゐる。此うち凄き合ひ方。捨て鐘。この時、誂らへの猫一疋出て、幕明きの切溜めへかゝる。宅悦見て

この畜生め。死人に猫は禁物だ。シイ〳〵〳〵。



伊右　なんだ彼奴は、鼠々と、跡もぬかさず逃げうせたが、それにしても、お岩を引出すその相手は、誰れにしような。

ト考へて

オヽ、あるぞ〳〵。あの中間の小平めを間男にして、彼奴等二人を叩き出し、いづれ今夜中にお梅を爰へ

ト舞臺へ來て内へ入り

お岩〳〵、どこに居る。お岩〳〵。

ト呼び立てる足許に、赤兒泣き出す。吻りして飛び退き

こりやアどうだ。この餓鬼を道端へ。すんでの事に踏み殺さうとした。お岩〳〵。

ト呼ぶうち、ドロ〳〵になり、又ぞろ大きなる鼠現はれ、赤兒を咬へて行くを、伊右衞門見附けて

ヤア、こりやア鼠がこの餓鬼を……エヽ、とんだ畜生だ。シイ〳〵。

ト追ひ散らし

うぬが餓鬼を鼠が引くも知らないか。コレ、お岩〳〵。

ト赤兒を抱へて尋ね廻り、お岩の死骸を見附けて

ヤヽヽヽ、こりやァお岩が死骸。咽喉に立つたは小平めが赤鰯。そんなら彼奴が殺したか。それにしても、あの押入れの

ト駈け寄つて押入れを明け、縛られたまゝの小平を引出す。

此奴が繩目は矢張り其まゝ。そんならよもやお岩をば……此奴を相手に

ト思ひ入れあつて、いきなり小平の繩を解く。小平、急き込んで涙交りに伊右衛門に縋り

小平　旦那様。エヽ、こなたはなう〳〵。

伊右　なんだ此奴は。おれがどうした。

小平　両手も口も叶はねば、お岩様を此やうに、氣を揉み死に殺したも、みんなお前のさつしやる業。コレ、何もかもあの按摩が、隣り屋敷の喜兵衛様と、云ひ合せたる一部仔什、殊に面體忽ちに、相好變へたも藥の業。現在女房を今更に、宿無しにしてその身の出世、どうしてそれが榮えませう。エヽ、お前様は、見下げ果てたお人だなう。

ト強く詰めよる。

伊右　やかましいわえ駄折助め。お岩が死んだも汝が刃物、そんなら主の女房をウヌ、殺したな〳〵。

小平　エヽ、滅相な事云はつしやりませ。たつた今まで両手も口もゆはへられ、どうして左様な

伊右　それでもソレ〳〵、兩手がその通り自由に動くワ。そんならお岩は、てめえが殺した〳〵。
　ト捲し立てゝ怒鳴り散らす。小平、いろ〳〵に云うても耳にもかけぬゆゑ、思ひ入れ。

小平　さう云はつしやりますなら、成る程、お岩樣を殺したは、わしが科になつて、人殺しの罪も負ひませうが、その代りには、モシ旦那樣、どうぞ盜んで走りました、唐藥のソウキセイ、あのお藥を私しに

伊右　べら坊め、あの唐藥なら、先刻質屋へ五兩の質にやらかして、爰には無いワ。

小平　そんなら藥はアノ質屋に……先さへ知れゝば、參つて願うて
　ト門口へ駈け出さうとする後より、伊右衞門、拔討ちに一刀切る。……小平は、ロッと倒れながらも、その手に縋り

小平　こりやお前、何科あつて騙し討ち。

伊右　知れた事、お岩が敵だ。たつた今、わりやア人殺しになつたぞよ。殊に隣家の企みの樣子、聞いたとあれば猶更に、生けて置かれぬ小佛小平。民谷が刀で往生ひろげ。
　ト又切り附ける。小平、數ケ所切られて苦しみながら伊右衞門に縋り

小平　わづか一夜の雇ひでも、假の主ゆゑ手出しをすれば

伊右　主に刃向ふ道理だワ。それだによつてなぶり殺し。お岩が敵だ、くたばれ〳〵。

トずた〳〵に切り倒す。このうち木魚の入りし合ひ方。向うより秋山、關口、足早に出て來て、内へ入り、この體を見て驚き

兩人　こりや小平めを、伊右衛門どの

伊右　何かを聞いたこの小者、殊に死んだるお岩が不義の

兩人　そんなら内儀のお岩どの

伊右　相好變へて此奴等二人が、この家を逃げんとひろいだ不義者。

兩人　聞けば聞く程野太い野郎め……して、この死骸は

伊右　世間へ見せしめ、二人の死骸、戸板へ打ちつけ、姿見の、川からどんぶり、直ぐに水葬。

ト押入れの戸板を外して、小平の死骸を戸板へ打ちつけようとする。この時、ドロ〳〵になり、小平の兩手の指、殘らず蛇の形になつてうごめく。兩人膽をつぶし

長兵　アレ〳〵、兩手の指が

宮藏　どうやら蛇に

伊右　何をたわけた

ト この時向うより伴助、走り出て來り、内へ入り

伴助 伊右衞門さま〳〵、喜兵衞樣から花嫁御が、只今これへ御一緒に

伊右 それは早急。然らば二人の死骸は奧へ。

長兵 心得ました。

伴助 ヤア、小平が死骸にお岩樣、そんなら二人は

伊右 間男心中二人を、戸板で直ぐにどんぶりと、仕事は奧で

三人 呑み込みました。

伊右 見られまいぞ。

ト唄、時の鐘にて、兩人は小平の死骸を杉戸のまゝ、氣味惡さうにさし擔ひ、伴助はお岩の死骸を引ツ抱へ、何れも奧へ入る。この唄をかり、向うより中間二人、箱提灯を持つて出る。喜兵衞、袴、大小、羽織にて、お梅の手を引き、跡よりお槇。中間二人、吊り臺に絹地の夜具、六枚屛風さし擔ひ、出て來り、門口にて

喜兵 伊右衞門どの〳〵、約束の通り、喜兵衞が參つた〳〵。

伊右 これは〳〵御隱居には、早速に、お梅を同道。サヽ、これへ〳〵。

うめ　アモン・只今も申します通り、最前いたせし内祝言、それさへあるに、あなたのお宅へ

喜兵　ハテ大事ない。伊右衛門どのも、家内に間違ひ出來し、家を賄ふ者なきゆゑ、縁者となつた幸ひに、武家にあるまじき引ッ越し女房。それゆゑにこそあの通り、夜具も屏風も持たせて參つた。サヽ、大事ない／＼。

まき　左樣ではござりませうが、何を申すも、お年のゆかぬお子樣を

喜兵　ハテ、大事ないといふに。

ト恥かしさうに、モヂ／＼してゐるお梅の手を無理に引ッ張つて內へ入り、皆々座に附き、喜兵衛、思ひ入れあつて

時に伊右衛門どの、いよ／＼貴公の申されし通り、お岩どのには

伊右　先刻内祝言の砌り、お話し申した男と違ひ、小者の小平といふ者と、又ぞろの不義間男、事現はれしを存じつき、產後の女を同道いたし、この如く乳呑子を捨ておき、家出いたせし憎き兩人。さすれば直ぐにお梅どの、今晚よりして泊めまする。舅御にも、左樣御承知下されい。

喜兵　アヽ、まだ外に男がござつたか。重ね／＼の不埒千萬。併し、その間違ひも此方が爲には、誠におうたり叶うたり。丁度折よく斯樣な間違ひも出來ぬもの。コレ、梅、これからは天下晴れて、其

方は爰の女房ぢや。何も考へてゐるには及ばぬ。乳母も喜べ〳〵。

まき　先刻も左様なお話し、よもやとは存じましたれども、あの御病後の御様子で、どうして家出なされしやら。マア〳〵、それは格別、さし當つて御男子様が

伊右　イヤ、誠に小兒に弱り果てます。

喜兵　サア、それゆゑ身共も今晩は、留守居がてらに泊つて進ぜる。明日は早々、乳母を尋ねる分の事。コリヤ、槇よ、勝手よき所へ、おれが床をとつてくれい。

まき　畏りました。

ト　お槇は下手の方へ、持參の夜具を敷き、屏風を立てゝ

ハイ〳〵、御隱居様のお床は、これへのべましてござりまする。

喜兵　して聟どのと、孫めが寢間はな。

伊右　只今までお岩が罷り在つた一間、彼奴等へ面當て、矢張りあれへ臥りませう。

喜兵　成る程、それもようござらう……コリヤ、梅よ、これは其方が守りぢやほどに、大事にこれを掛けて居やうぞ。

ト　赤地錦の守り袋を渡す。

うめ　左樣なら、離さずに掛けて居りませうが、心がゝりは、あのお岩樣の事が
まき　左樣ではござりますれど、マアノヽ、それは格別でござりまする。
伊右　ハテ、大事ない。身がよいと申すに、誰れが何と申すものぢや。
ト少し立腹の體。
まき　イエノヽ、誰れも左樣は申しませぬ。左樣ならばお前樣は
ト　お梅の手を引き、上の方、お岩の寢てゐた床の上へ連れてゆき
今宵は日頃のお恨みを
うめ　それおやといふて、モシひよつと、わたしが事ゆゑお岩樣
まき　ハテ、それ仰しやると、あなたの願ひが
ト無理に屏風を引廻し、此方へ來る。赤兒、頻りに泣く。
伊右　ハテ、折わるいあの乳呑子。
喜兵　今宵は身共が乳のない乳母、かんがくいたし、寢させて進ぜう。
ト赤兒を抱いて床の上へあがる。
伊右　然らば舅御、何分よろしく

まき して、私しは

喜兵 何かゞ濟んだらめでたく開き、今宵の始末を娘にも、話してくりやれ。

まき 畏りました。そんなら私しは、めでたくお開き申しませう。

伊右 何かと大儀。お内方へも宜しう傳言。

まき あのお子樣を、何分お願ひ申しまする。

ト唄、時の鐘になり、お槇、中間を先に、供を殘らず連れて向うへ入る。喜兵衞、屏風を引廻す。眞中に伊右衞門は一人立ち、思ひ入れ。

伊右 ハテ、物事も、これ程までに巧くゆくか。

ト正面のれん口より秋山、關口、ヌツと顏を出し

長兵 伊右衞門どの、戸板の二人を

官藏 早稻田のあたりの流れへ突き出し

兩人 不義の成敗。

伊右 コレ。

ト押へる。兩人、顏を引ッ込ませる。

さてこれからは新枕。

ト凄き合ひ方、時の鐘になり、一間の屛風を明け

お梅どの、さぞ待遠で

トお梅、床の上に俯向きゐる。

お梅どの、これサ花嫁、俯向いてばかり居る事はない。恥かしくとも顏を上げ、日頃の戀の叶うたしるし、今宵めでたくこちの人、我が夫かいのと、笑うて見せやれ。

ト寄り添ふ。この時、薄ドロにて、お梅、顏を上げると、顏はお岩にて、恐ろしき顏色、恨めしげに伊右衛門を見詰め、皺枯れたる聲にて

うめ　アイ、こちの人、我が夫、必ずともに末長う

トきつと見詰め、件の守り袋を差出す。伊右衛門、ゾッとせし思ひ入れにて、直ぐに側なる刀を取り、拔討ちにポンと首を切る。この首、前の縁へ見事に落ちると、お梅の本首になり、大ドロ〳〵にて、この首へ數多の鼠むらがる。伊右衛門恟りして

伊右　ヤヽヽヽヽ、お岩かと思ひの外、矢ッ張りお梅だ。こりや早まつて

ト狼狽して、刀を提げたまゝ下手の屛風を明けると、内に喜兵衛、赤兒を抱き、掻卷を着て寢てゐる。

ト云ひながら、懐より守り袋を出し

コレ、この守りは、娘が横死の砌りまで、肌に附けたるお守りなれど、あのやうなる時節にも、守りの奇特の無いといふは、誠に死ぬる約束事。今思へば、この守りも恨めしいわいなう。

まき　ア丶申し、また愚痴な事仰しやりまする。其やうなお心をお出しなされては、あのお子様のお爲にもなりませぬ程に、いつものやうに御回向なされてお上げなされませ。私しはお夜食の、御飯ごしらへを致しませう。

ト木魚入りの合ひ方になり、お槇は布袋の中より米を出し、あたりより小さき桶を出し、川水なすくひ、洗ふ。お槇、守りを竹に吊し、回向する思ひ入れ。この鳴り物にて向うより佛孫兵衛、手に卒塔婆を持ち、川の中へ氣を附けながら舞臺へ來て、二人を見て

孫兵　ア丶何ぢや。この衆は物貰ひにしては、さて人柄のよい女非人。コレ、こなた衆は、この川端にゐやるからは、ひよつと爰へ、杉戸に縫うたる男と女の死骸が、流れて來はしませぬか。どうぢやな。

ゆみ　イエ〳〵、見當りませぬが、その又死骸を、なんでお前は尋ねてござつたぞ。

孫兵　コレ、聞いて下され。わしの悴が、さる武家方へ奉公に行きをつた、先から駈落ち、今に行くへが知れぬ。今日聞けば、女と男の浮き死骸、戸板に打ち附け流るゝと、きつい評判。もしや悴が

其やうな目におひはせぬかと、心ならず。此やうな事内へ歸つて話しては、嫁や孫が案じ居らうと、云はれもせず内證で、靈岸樣へお參じ申し、御回向願うてこの塔婆。息才で居をれと祈禱。もし死にをつたらと思ふから、戒名附けてもらうて、出た日を命日。アヽ、うとましの娑婆世界。南無阿彌陀佛々々々々々。

ト思ひ入れ。お弓、これを聞いて

ゆみ　アヽ、いづれを聞いても悲しい話。世間には似た事も

まき　まゝある事でござりまする。お前樣はそのお守りを、毎日御覽の度に物思ひ。そりや斯う致しませう。私しが明日早々、靈岸寺へ持參いたして、納めて參りませう。

ゆみ　成る程、其やうなものかいの。持つてゐるほど涙の種、後生にもなるまい。そんなら納めて來やいなう。

まき　左樣いたしませう。晩程參りませう。

ト何心なく守り袋を取つてせりふのうち、薄き風の音になり、薦間ザワ〳〵とうごめき、大きなる鼠一疋出て、件の守りを咬へ行く。兩人見附け

ゆみ　ソレ〳〵、鼠が守りを

まき　これはしたり、どこから鼠が

ト狼狽へて追ひ廻すうち、鼠は守りを咬へたまゝ川へ飛び込む。お槇惘りして

アレ／＼鼠が

ト手を伸して捕へんとして、そのまゝ川へ、ヅカ／＼と落ちんとする。お弓うろたへ、お槇が帶の端
をとらへ

ゆみ　コレ、危ないわいの／＼。

ト引けども及ばず、孫兵衛も手傳つて、お槇が帶を捕へ引戻す。この時、お槇が帶の端、切れてお弓の手に殘り、お槇川の中へ落ちる。お弓。ハツととりつめ、氣を失うて倒れる。孫兵衛、介抱して

孫兵　コレ／＼、物貰ひの女中、氣を附けさつしやれ。

トいろ／＼こなしあつて

これはしたり、あの鼠が出たゆゑ、一人の女は思はず川へ落ち込み、殘つた女中は氣を失うて、こりや怪しからぬ……イヤ／＼／＼、通りがゝりの袖乞ひ女、おれも生中かゝり合ひになつては迷惑、というて捨てるも氣の毒……アヽ、いづくの女か、ハテ氣の毒な……人の事見て我が身の上。アヽ、悴めはどうしをつたぞ。

ト側にあり、赤合羽なと、お弓に打着せ、卒塔婆を持つて、思ひ入れあつて下座へ入る。佃節になり、向うより直助權兵衞、鰻掻きの拵へ、誂へのやすなかつぎ、ゝゝうきと樽を持ち、川のあたりを見やり〳〵、出て來て、花道にて

直助　さて、今年のやうに篦坊に漁の無い事は覺えぬ。したが、こゝらはどうか水の濁りがよささうな。ドレ、こゝらをやつて見ようか。

ト舞臺へ來り、川の中へ入る。腰たけになり、鰻を掻く事。此うちかすめて佃節。直助、捨ぜりふよろしく、鰻掻きに何やらかゝりしゆゑ、取上げ見ると、髮の拔け毛一かたまり、この毛の中に鼈甲の櫛、搦み上がる。直助取つて、よく〳〵見て

ヤア、こいつア鼈甲だ。萬更でもねえ。ドレ、磨いて見ようか。

ト土手へ上がり、稻村の藁を取つて、櫛を磨いて見んと、煙草のみながら磨いてゐる。かすめし佃の鳴り物になり、向うよりお熊、世話の婆アにて、これも卒塔婆を持つて出て來る。跡より伊右衞門、深き編笠、浪人にて、大小、びくを提げ、釣り道具をかつぎ出て

伊右　申し母者人、お前も御健勝で、マア〳〵、めでたうござります。伊右衞門も安堵しました。

くま　イヤモウ、わしも其方の惡い噂を案じてゐましたが、マア〳〵、息災な樣子を見て、安堵しました。

知りやる通り、昔の連合ひ近藤源四郎どのが離別してより、師直樣へお末奉公。その砌り顏世どのを、御前樣へ執持たうと、かゝつて見たが、し太い顏世、強情ゆゑに鹽冶の騷動。その節師直樣の仰しやつたは、其方もしや後々に、難儀な身分となつたなら、これを證據に願うて來いと、コレ〳〵

ト懷の風呂敷包みより書き物を出し、伊右衞門へ渡し

これは御前樣の判の据つたお書き物、師直樣のお直筆。いはゞわしへのお墨附も同然、願うて出て、其方の難儀を救はうとは思うても、今の亭主は鹽冶の陪臣ゆゑ、知られてはと思ふうち、民谷伊右衞門といふ浪人が、女房のお岩といふを殺し、その上隣りの屋敷の親子を殺して、立退いたとの噂まち〳〵。それゆゑ此やうに

ト塔婆を見せ

これ見や、「俗名民谷伊右衞門」其方は死んだと噂をさせる、その爲のこの卒塔婆、立てゝ置くのは、なんと智惠者であらうがの。

伊右　これは〳〵、母者人のお志し、先づは大慶。併し隣家の喜兵衞、娘のお梅を殺したるも、死靈の業。それゆゑ工夫をめぐらして、親子の者を害せしは、朋輩の官藏、彼れと小者兩人に、なすり附けておくからは、よもやこの身にかぶれも來まいが、マア〳〵、お前の氣休め、そこらへ立

てゝ置かつしやりませ。

くま　合點ぢや〳〵。人目に立つやう、この土手のこゝらへ立てゝ

ト好き處へ塔婆を立てゝ

コレ、悴、わしが住家を尋ねんと思はゞ、あの深川の寺町で、佛孫兵衛といふ苦しがり。必ずともに尋ねて來や。

伊右　心得ました。この間に尋ねませう。わしは當分、本所蛇山庵の坊主を頼んで、暫らく隱れ家。

くま　そんなら悴、其方の住家へ

伊右　尋ねさつしやりませ。

ト木魚入りの合ひ方になり、お熊、そこへ卒塔婆を立てたまゝ、急いで入る。此うち直助、櫛を磨きながら聞いてゐる。伊右衛門、川を見廻してゐるうち、入相の鐘。

もう入相か。ドレ、こゝらへおろして

ト釣竿を二三本川へおろして、煙草を出して、直助が煙草をのんでゐるを見て

火を借りませう。

直助　お附けなされませ。

ト出しながら、笠の中を覗き

伊右　ヤ。さう云ふてめえは直助か。

直助　伊右衛門さん、お久しうござります。アイ、その直助も今では改名、鰻搔きの權兵衛。モシ、伊右衛門樣、いはゞお前はわしが爲には、姉の敵といふところだね。

伊右　コレ、洒落か無駄かは知らないが、なんで身共が、てめえの敵。

直助　ハテ、忘れなすつたか。わしが女房の姉といふなア、四谷左門が娘のお岩、わしが女房は妹のお袖。そんなら萬更わしとお前は、敵同士でねえ事もなからう。爰で逢うたりや優曇華の、女房が姉のお岩が敵、民谷伊右衛門、イザ立上がつて勝負なせ……と云ふところだが、そこを云はねえの。その代りはお前が又、出世する話しが出來ると、今のお前の貰はしつた、師直樣の書き物を、わしは借りに行きやす。その時知らねえ顏をなさるなよ。

伊右　どうして〳〵、その時はわれにも遣らうが、おれも有やうは出世の種を

直助　種を蒔くなら權兵衛が、ほじくり出しても尋ねて行きやす。

伊右　そりやァ承知サ。てめえとおれの仲だもの。ナニその時に

ト話しの内、釣り絲へ魚の附きし樣子にて、ピク〳〵引く。伊右衛門、手早くあげる。小鮒かゝりゐる。

アヽ、出來たな。

ト云ふ内、外の竿また動き出す。

そりや、又かゝつたワ。

ト大きな聲で云ひ、伊右衛門、その竿を上げると、今度は鯰かゝつて上がる。

ソレ、逃げるワ〳〵。

ト側にてあせり、手傳うても、ぬらつくゆゑ、立てゝある卒塔婆を拔き、鯰をやう〳〵押へ、卒塔婆はあたりへ捨てる。この時、氣を失ひしお弓があたりへ卒塔婆落ちる。この前よりお弓心附き、胸撫でおろし居たりしが、この時思はず卒塔婆を取上げ、よく〳〵見て

ゆみ　ヤヽ、卒塔婆に記せし戒名の、下に俗名民谷伊右衛門。そんならもしや、父さんと娘を殺したる、民谷はこの世に

トこの聲を聞いて、伊右衛門、お弓を見附け、さてこそといふ思ひ入れ。顏を外けて、直助の袖を引き、何やら囁いて見せる。お弓はこれを知らず、思ひ入れあつて

申し〳〵、あなた樣、ちとお聞き申したい事がござります。

直助　アヽ、何だえ。
ゆみ　外でもござりませぬが、爰にありまする卒塔婆に、民谷伊右衛門とござりまするが、この人は病死でも致したのでござりまするか。
直助　ナニ滅法界な。伊右衛門は死にはしませぬ。コレ／＼爰に
　トうか／＼云ひかける。伊右衛門、袖を引いて、目くばせする。直助領き
ほんに、死んだ／＼。コレ、死んだに依つて、塔婆を仕立てたのだ。生きてる者に、ナニ塔婆を立てるものか。死んだ／＼
　ト無性に云ふ。お弓こなしあつて
ゆみ　して、そりや、いつの頃の事でござりました。
直助　アヽ、そりやア何よ、たしか今日は、大方、それ／＼、四十九日だ。
ゆみ　エ。すりや、相果てまして四十九日に……エヽ。
　ト云ひかけて無念泣きに泣き入る。直助見て
直助　コレ／＼、其やうに泣くのは、こなたは兄弟か、亭主か、なんだ。
ゆみ　イエ／＼、私しが親と娘を、この民谷伊右衛門と申す者が、殺害いたして行くへ知れず、その敵

たる伊右衛門を、女なりともおのれやれ、一太刀なりとも恨みんと、斯様な姿になりましたに、
その敵が病死と聞いては、誰れを敵と打ちませう。願ひの綱も切れ果てゝ
ト無念の思ひ入れ。伊右衛門聞き、また直助へ書いて見せる。

直助　コレノ〳〵、非人の女中、よし又伊右衛門が生きてゐても、ナニあの人は、敵ぢやァない〳〵。

ゆみ　エヽ、して、民谷を退けて、誰れが敵でござりまする。

直助　コレ、まこと殺したその時の相手は、秋山長兵衛、關口官藏、家來が一人、此奴らが殺したのだ。

ゆみ　そんならあの時仲人せし、あの兩人が仕業なるか。何の恨みで父さん娘。思へば〳〵口惜しい。
伊右衛門さんと思ふのは、こなたの大きな料簡ちがひサ。

ト きつとなる。伊右衛門、よき時分より、そろ〳〵立つて窺ひ來り、この時、臑にて、だしぬけにお
弓を前なる川に蹴落す。水音して、姿、深みへ落ち入る。兩人顏見合せ

直助　伊右衛門さん、成る程お前も、强惡だなァ。

伊右　この强惡も、見やう見眞似の

直助　そりやァ誰れを

伊右　おぬしが仕草を

直助　アノ、わしが平常を

伊右　見習つたのよ。

直助　誠に感心。……奇妙。

ト時の鐘になり、思ひ入れあつて直助、下座へ入る。伊右衞門こなし。

伊右　いらざる所にうせたばつかり。益ねえ殺生。

トこのとき、釣竿、ピク〳〵引く。急いで上げ見て

南無三、餌を取られた。

ト附けかへる思ひ入れ。禪のツトメになり、向うより長兵衞、頰かむりに顏を隱し、キヨロ〳〵として出て來り、伊右衞門を見つけ

長兵　ヤア、民谷氏。爰にござつたか〳〵。

伊右　コレサ、ひそかに〳〵。

長兵　コレ〳〵民谷氏、こなたがお岩と小平を殺し、又その上に喜兵衞親子も、殘らず、こなたのした事だに、おいら主從三人へ、思ひがけなき疑ひかゝり、もうこの上は面晴れに、これから直ぐにお上へ訴へ、あの人殺しは民谷が業、伊右衞門でござりますと、貴樣の舊惡一々云ひ上げ、おいらが

伊右　身抜けをせねばならぬ。必ず後にて恨まつしやるな。伊右衛門どの、斷わりましたぞ〳〵。

長兵　コレ〳〵、そりやアおてまへ、これまで懇にした甲斐がないといふものだ。たとへにも云ふ如く、人の噂も七十五日、その内には又どのやうな風が、吹くまいものでもござらぬて。

伊右　コレ〳〵、それを手前も存じてゐるから、當分われらは遠國へ、影を隱すつもり。それでよからう。

長兵　サヽ、さう致せば手前も安堵。

伊右　然らばこなたの安堵の代り、路銀を貸しやれ。

長兵　ナニ路銀を……コレ、日頃から苦しがりの身共。どうして金の工面は

伊右　出來ない。出來ずば此まゝ訴へるか。

長兵　アヽコレ、それをこなたが

神谷　云はぬ代りに路銀を少し

伊右　どうして金は

長兵　貸さずば直ぐに

ト行きかける。

伊右　アヽコレ、それ云はれては
長兵　路銀はどうだ。
伊右　サア
長兵　サア
二人　サア〳〵〳〵
長兵　路銀の工面は出來ぬのか。

ト云はれて伊右衛門、思ひ入れ、懐よりお熊の渡した書き物を出し

伊右　コレ、この書き物は師直様の、御判の据つた墨附き同然。おれが母から斯ういふ廻りで。コレ。

ト長兵衛に囁く。長兵衛呑みこみ

長兵　成る程、さういふ手堅い書き物なら、路銀の代りに、當分身共が
伊右　預けるからは、金が出來たら、その時引替へ。
長兵　承知しました。民谷氏。
伊右　秋山どの。
長兵　隨分ともに、氣を附けさつしやい。

ト時の鐘、蟲の音、合ひ方になり、長兵衛、向うへ入る。伊右衛門、跡見送り

伊右 よしなき秋山うせたばつかり、口ふさぎの墨附も、彼奴に渡したこの身の舊惡。ハテ、いらざる所へ、うせずとよいに。……南無三、暮れたな。ドリヤ、竿を上げようか。

ト伊右衛門、竿をあげてしまふ。凄き合ひ方。薄ドロ〳〵。このとき、兩方の雨窓をおろし、暗くなる。前の流れへ、お岩小平を兩面に打ちつけし、前幕の杉戸、流れ寄る。伊右衛門見て

ヤヽ、覺えの杉戸は

ト思ひ入れ。この時大ドロ〳〵にて、件の杉戸、自然と正面の土手へ立ちかゝる。その拍子に、かけてある菰落ちると、お岩の死骸、水に溺れ、肉脫せし見ぐるしき拵へ、首は本首を出し、鼠の咬へし最前の守り袋を手に握つて居る、ドロ〳〵烈しく、兩眼見開き、恐ろしき相にて伊右衛門を見詰める。

伊右衛門、思ひ入れ。

お岩、迷つてゐるか。コレ、女房、免してくれろ、往生しろよ。

トお岩の亡靈、伊右衛門を見詰め、守り袋をさしつけ、凄き聲音して

いは 民谷の血筋、伊藤喜兵衛が、枝葉を枯らさん、この身の恨み。

ト物云ふゆゑ、伊右衛門恟りして、手早く菰をかけ

伊右　まだ浮かまぬな。南無阿彌陀佛々々々々々々。此まゝ川へ突き出したら、鳶や烏の餌食となり、業が盡きたら、佛になれ。

ト突き出さうとする。杉戸、バッタリとかへつて、裏のかた小平の死骸、首へ藻をかむり、同じく恐ろしき凄き拵へ。薄ドロ〳〵にて、藻はバラリと落ちて、小平、兩眼見開き、片手を差出し

小平　お主の難病、藥を下され。

トジロリと見る。伊右衞門又ギヨツとして

伊右　又も死靈の……立去れ〳〵。

ト拔討ちに死骸へ切り附けると、大ドロ〳〵になり、この死骸戸板の上のまゝ殘らず骨となつて水中へ落ちる。何もなき綺麗の杉戸となる。伊右衞門ホッと溜息つき、杉戸を川中へ落し、きつとなる。バッタリ音して、正面の稻叢より直助權兵衞、鰻搔きを持つて窺ひ出る。途端に早變りの佐藤與茂七、非人の姿、桐油に包みし廻文狀を首にかけ、糸立に卷きし一腰を持つて、樋の口より出てキッと見得。窺ひながら出て高土手へ上がる。これより誂への鳴り物になり、伊右衞門、廻文狀へ手をかけ、直助、この中へ入り、だんまりよろしくあつて、直助、鰻搔きにて打つてかゝるを、與茂七、拔討ちに鰻搔きを切折り、權兵衞と書いた燒印のある柄の方、與茂七の手に入り、廻文狀は直助の手へ入る。三人、立廻りよろしく、足許に落ちてある魚籃を取つて、三人取上げると、ドロ〳〵になり、右の魚

苦、忽ち人の顔になり、籠の中より心火燃えあがる。三人、顔見合せ、キッと思ひ入れ。ドロ／＼打上げ、心火消えて、暗くなると、柝の頭、三人、三方へ別れてホッと思ひ入れ。……拍子　幕

四幕目

深川三角屋敷の場
寺町孫兵衞内の場

役名——鰻かき、直助權兵衞。佛孫兵衞。孫兵衞女房、お熊。蜆うり、次郎吉。小平女房、お花。古着屋庄七。米屋長藏。小汐田又之亟。赤垣傳藏。按摩、宅悦。女房、お袖。小平の亡靈。佐藤與茂七。

本舞臺、三間の間、二重の世話屋體。正面、暖簾のかゝりし納戸口。鼠色の古びし壁。二ツ竈、引窓。上手の方、卒塔婆まじりの生垣、草むしたる五輪の頭なぞも見へ、下手の方寺の入口にて、黒き冠木門をとりつけ、門口よりその門へ物干竿をわたし、前幕の、小佛小平の着物干してある。入口の醬油樽に樒の花を突ッ込んであり、すべて深川三角屋敷、法乘院門前のかゝり。爰に金子屋の手代庄七、風呂敷包みを持ち、長藏、米屋の若い者、叺を持ち、煙草をのんでゐる。蜆賣り次郎吉、荷を擔いで立つて居り、仕出し、花を買つてゐる。序幕のお袖、世話女房の拵へ、山刀を持つて樒の根を廻してゐる。弔ひの鳴り物、てんつゝにて、幕明く。

長藏　モシ、米を持つて參りました。
そで　どうぞ、いつもの所へ明けて下さんせ。
長藏　オツトのみこみやした。
庄七　わしが頼んだ洗濯物は、まだ干ぬかしらん。
　　ト云ひながら干し物を見てゐる。長藏は押入れを明けて米櫃へ米を入れる。
そで　庄七さん、お前もせはしない。冬の日で其やうに早く干るものかいな。元の通りにして置きなさんせ。
庄七　成る程、どうして見ても、爰が一番日當りがよいやつサ。
　　ト元の所へ干しておく。
仕出　コレ／＼お内儀、爰へも花を十六文賣つて下さい。
そで　ハイ／＼、只今あげまする。
長藏　モシ、今入れた米の錢はどうなされやす。待つて居りやせうか。
そで　どうぞ、もそつと待つて居て下さんせ。お前に話しがござんす。
庄七　わしも急に頼みたい事があつて、また來やした。何にし、ろちよつとお目にかゝりたいね。

そで　せはしない、此やうに手がふさがつて居るものを……サア、お持ちなされませ。
仕出　アイ、錢はそこへ置きましたよ。
次郎　をばさん、蜆買うて下されく。
そで　ホヽヽヽ、今買うてやるほどに、少つとのうち、そこに遊んでゐや。ほんに可愛らしい……サアお前さん、お持ちなされませ。
ト仕出しに花を渡す。
仕出　アイく。今日はこの法乘院に、弔ひがござるかな。
庄七　しかも二つあるが、イヤ、珍らしい亡者を持ち込んだな。
長藏　オランダからでも渡りはしまいし、亡者に珍らしいといふ事があるものか。
庄七　コレ、こなたは萬年橋へ流れ附いた、戸板の死骸の噂を、まだ聞かないのか。
長藏　その話は聞いたが、そんなら今日の佛は、戸板をしよつた土左衞門にお土左の弔ひかね。
庄七　男と女を戸板の兩面に釘附けにして、どんぶりやらかすといふは、成る程、世の中には、むごい奴があるものサ。
そで　どのやうな惡い事をして、其やうな目にあうたやら。ほんに氣味の惡い話しでござんすな。

仕出　そりやアてつきり、間男出入りでござります。

長藏　それだからお袖さん、お前間男はしない事だ。

庄七　併しこの庄七となら大事あるまい。

長藏　おきやアがれ。

仕出　こなさんは、その弔ひを、見に行く氣はござらぬかな。

同　サア〳〵、行つて見ませう。そんならお内儀

そで　どなたも詣つてお出でなされませ。

ト弔ひの鳴り物になり、仕出し、門の中へ入る。

庄七　時にお袖さん、お頼みといふは外でもないが、どうぞ又この着物を、ざつと振り出してもらひたいね。

ト風呂敷包みより、お岩の死骸が着てゐたる衣裳を出す。

そで　もう日暮れぢやに、洗うたというて、干る事ぢやござんすまいぞえ。

ト手に取り上げ見て、思ひ入れあつて

この着物はどうやら見覺えのある、慥かにこりや、わたしが姉さんの……モシ庄七さん、こりやお

前、どこから買うてござんしたえ。

庄七　こりやァ何サ、あすこに干してある着物と一緒に、戸板の土左に

長藏　ハヽア、それぢやァお株で湯灌場物だね。

そで　エヽ、何ぢややら氣味の悪い。

庄七　コレサ〳〵、ナニそんな物ぢやァない。コレ、お前も野暮な事を云ふものだ。たとへ湯灌場物だといつて、門前住居をしてゐて、香花を賣るお内儀が、それを嫌つてなるものかな。成る程お前も、まだ商賣じみないぞ。

そで　ぢやというて、わたしや其やうな物なら御免ぢやわいなア。したが、モシお前、その着物は、どこから借りて來やしやんしたえ。

庄七　そりやァ何サ、おいらが見世の流れだが、あんまり穢れてゐるから、ざつと振り出してもらつてせりにでも出さうと思つてサ。

長藏　おきやァがれ。見す〳〵知れた土左衞門の着物を

庄七　これサ、胸氣な事を云ふまい。お袖さん、この男の云ふ事を、必ず誠にせまいよ。何しにおれが湯灌場まで買つてあるくものか。それほど慾張りはしねえわサ。

長藏　あんまり慾張らねえ事もあるめえ。
庄七　成る程、胸氣な事を云ふ男だぞ。
　　　ト門口にある中盥の中へ、その着物を漬けて
長藏　ほんに胸氣といへば、お袖さん、米の代はどうしてくんなさる。一體置きかへのつもりだから、
　斯うして置くから、どうぞお頼み申しやす。
　先頭の代の濟まぬうちは、入れるぢやアなかつたが、お前が度々さう云ふから持つて來たが、今
　直ぐに代を遣はして下されまし。
そで　サア、尤もでござんすが、こちの人が歸らしやんしたなら、直ぐにも持たして上げるほどに、後
　まで待つて下さんせ。
長藏　そりやア迷惑なものだ。
　　　トこのうち次郎吉、表で樒の葉を持ら、遊んでゐる。庄七見て
庄七　この子は小佛小平どのゝ子だが、ハヽア、蜆を賣りに來て遊んでゐるな。
長藏　ヨシ〳〵、おいらが內へ行つて、あの婆さんにいひ附けてやるぜ。
次郎　それではわしが叩かれます。否ぢや〳〵。

ト泣く。お袖、駈け寄つて

そで　お前方も可哀さうに、其やうな事云うて泣かしてからに

庄七　ハヽヽヽ。そんならどうぞお頼み申しやす。

長藏　モシ、親方へは、後程と云つておきますぞえ。

そで　ほんに憎らしい伯父さんぢやなう。

ト佃節、木魚の音になり、長藏、庄七は向うへ入る。お袖、次郎吉の顔を拭いてやる。

次郎　伯母さま、蜆買うて下され。

そで　商ひしようと先刻から、爰で遊んでゐたお前の物、買うてやりたいが、今日は大事の佛の日ぢやによつて

ト錢を出して

蜆はいらぬほどに、これを持つて行きなさんせ。

ト次郎吉にやる。

次郎　イエ〳〵、蜆買うて下されねば、錢はいりませぬ。

そで　ホヽヽヽヽ、ほんに正直な温なしい子ではある。コレ、其やうに思ふなら、斯うしなさんせ。

わたしに賣るだけその蜆を、川へ放して下さんせ。それではよからうがな。

次郎　アイ〳〵、そんなら、あの川の中へ逃がしてやりませう。

そで　オヽ、さうして下さんせ。お前は悧巧な子ぢやなア。

ト次郎吉を見つめて、ホロリとせし思ひ入れ。木魚入りの合ひ方、寺の門の中より孫兵衞、しほ〳〵出て來り、次郎吉を見て

孫兵　わりや次郎吉、また今日も蜆賣りに出をつたなア。アヽ、何にも知らずに生き物の

ト云ひながら、干してある着物に目を附け

あそこに干してある着物は、悴が死骸に

そで　エ。

孫兵　南無阿彌陀佛々々々々々〳〵。

次郎　祖父樣、今日は蜆が賣れぬゆゑ、晩に婆樣に、また叩かれるわいなう。

孫兵　オヽ、いとほしなげに、年端もゆかぬ孫めに、此やうな商ひさせて。コレ、案じやんな、祖父が錢遣るほどに、これを今日の賣溜めぢやと、あの婆めに見せてやりや。

ト懷より小錢を出して、次郎吉にやる。

次郎　あの伯父様にも、只錢を貰つた。

孫兵　そんなら何といふ。爰の内の伯母樣にも、只錢を貰うたといふのか。

ト此うちお袖、茶を汲んで來り、孫兵衞へ思ひ入れあつて

そで　すりやお前さんが、此お子のお祖父さんかいな。マア、お茶一つお上りなさんせ。モシ、此方へお入りなされませ。

孫兵　これは〳〵、お手で下さりませ。ほんに孫めに錢下されたさうにござります。忝うござりまするが、なぜ又、蜆とつては下されぬぞいの。

そで　今日は大事の佛の百ケ日ぢやによつて、それでの事でござんすが、ほんに、いとしらしい子ではござんすわいなア。

孫兵　でもマア、若いに似合はぬお優しい。それに引かへ、聞いて下さりませ。この孫めが婆は、わしが後添ひではござるが、それは〳〵邪慳なやつ。少つと商ひがたるいと、年端もゆかぬこの坊主めを、ぶつたり、抓つたり、それを見るのが不便でござるわいの。

そで　それはマア可哀さうに。その婆樣の代りに、お前、いとほしがつてあげなさんせ。してお前は、この近所でござんすか。

孫兵　アイ、この二三町先きでござるが、こなさんは、この頃爰へ越してござつた樣子でござるの。

そで　わたしも段々不仕合せな事がござんして、先月爰へ參りまして、此やうに、香花を賣つたり、濯ぎ洗濯、艱難な暮らしをして、お恥かしうござんすわいなア。

孫兵　ナニそれが恥かしうござらう。コレ、艱難の暮らしといへば、この子の母親めを聞いて下され。それは〳〵甲斐々々しい生れ。まだなま若い身の上で、正月の薺から始めて、嫁菜たんぽゝ、はうれん草、又は枝豆、ゆで玉子、ありとあらゆる出商ひ。その艱難の中で、舅のわしをば、よう孝行にしてくれまするて。

そで　それはマア、奇特なお方でござんすなア。そんならこの子の親子の衆は、夫婦養子とやらでござりまするかえ。

孫兵　イエ〳〵、悴めは、わしが爲には血を分けた

ト云ひかけ、着物に口を附けて、こなし。

そで　それでは賴もしうござんせう。モシ、必ず心細う思はしやんすなえ。これいなア、父さんがもう待つてぢやあらうほどに、商ひやめて、祖父樣と歸つて、なんぞよい物を、父樣に買うてもらはしやんせ。

次郎　コレ、祖父様、父様に、よい物買うてもらうて下されや。

ト　これを聞き、孫兵衞、たまりかねて

孫兵　南無阿彌陀佛々々々々々々。

ト　花道へ行きかける。

そで　もしいなア。お前もマア何ぢややら心細いやうな。可哀さうにこの子も、一緒に連れて行かしやんせいなア。

孫兵　アイ〳〵。ほんに年寄ると、何かにつけて涙もろうて。サア、次郎吉、祖父と一緒に……これは大きに厄介になりました。

そで　モシ、また寺詣りの次手に、必ずお寄りなされませ。

孫兵　ほんになア、袖ふり合ふも多少の緣とやら。忰が死にがらあのやうに

そで　エ。

孫兵　もう洗濯物を、取り入れさつしやれ。

ト　入相の鐘、唄になり孫兵衞、次郎吉を連れて、しほ〳〵と向うへ入る。お袖殘り、思ひ入れ。

そで　ほんに、あのお人も年寄つて、何ぢややら、いかう物案じのある樣子。兎角苦勞の娑婆世界……待

たぬ月日は早いもの。今日は義理ある父さん、云ひ號の夫與茂七どのゝ百ケ日。同じ場所にて同じ日に、親や夫を非業の刃に失ふといふは、よく〳〵因果なわたしの身の上。まだその上に、枕こそかはさね、今の權兵衞どのを夫に持ちしも、何卒お二人の仇敵……モシ、堪忍して下さりませ……アヽ、もう日が暮れるに、庄七さんに頼まれた洗濯物。これは斯うしておいて、明日の朝のこと。

ト外へ出て、竿にかけてある着物を探つて見て

この着物はまだ乾かぬ。こりや、もそつと斯うしておいて、どりやお燈火を上げうかいなア。

ト四ツ竹節の合ひ方、木魚の音になり、お袖は佛壇へ灯を入れ、行燈をともす。この時分、上手のま さ木垣の奧の卒塔婆へ、白張りの提灯に灯をつけて立てる。この鳴り物にて、向うより直助權兵衞、川魚を取る簗を三つ四つ提げて出て來り、門口にて

直助　コレ、日が暮れかゝつたに、干し物がしまはずにあるワ。

ト内へ入り

なんだ、この盥の中にも洗濯物があるな。イヤ、大さうに稼ぐな。それに引かへ、おらア今日はあぶれてしまつた。

そで　あぶれたとかえ。

直助　隱亡堀へ三つ四つ、土を伏せておいたに、目そつ子にもお目にかゝらねえ。

そで　其やうな事もようござんせう。モウあまり、物の命を取る事は、よして下さんせ。

直助　馬鹿な事を云ふぞ。鰻搔きが殺生をやめては、腮をつるしてゐなけりやアならない。カウ、腮をつるすといへば、米はどうした。

そで　最前持つて來る事は來たけれど、後までと輕く云うておいたぞえ。

直助　それ見た事か。早速お差支へだ。カウト、たつた一枚の廣袖は、大家が立て催促に飛んでしまふし

ト考へて

オツト、あるぞ〳〵、天道人を殺さず。いつやら斯ういふ物を拾つた。

ト叺莨入れから前差の櫛を出して

コレお袖、この櫛はいくらぐらゐ貸すであらう。

お袖、何心なく手に取つて見て、驚き

そで　モシ、この櫛は、どこで拾はしやんしたえ。

直助　二三日あとに、猿子橋の下で、鰻掻きにかゝつて上がつたが、てめえ見覺えでもあるやうか。

そで　ある段かいなア。この櫛は、わたしが姉のお岩さんが、母さんの形見ぢやというて、大抵や大方、祕藏した事ぢやござんせぬ。行く〳〵は、わたしへ讓つて下さんす約束、それがどうして川の中に……それにまだ不思議なは、あの庄七さんが、洗うてくれいと賴ましやんしたこの着物、姉さんが夏中着てゐやしやんした單衣物に、寸分違はぬ

直助　コレ〳〵、てめえも馬鹿な事を云ふものだ。着物の模樣や櫛の形は、世間に同じ物はいくらもあるワ。

そで　イエ〳〵、着る物は兎も角も、この櫛ばかりは、それに違ひはござんせぬ。

直助　そんならそれにしておいて、おれが工面が直つたら、受けててめえにやらうから、ちよいとこれを曲げて米屋の拂ひを

そで　イエ〳〵、どうぞそればつかりは、堪忍して下さんせ。姉さんの大事に差したその櫛、わたしが見ては、どうも其やうな事はならぬ。こりや、あしたお隣りの伯父さんなと賴んで、四谷まで屆けねばならぬわいなア。

直助　コレサ、てめえが貰ふ約束の櫛だといふではないか。そんなら其やうに無駄な事をせずとも、て

めえの物にしておくがいゝではないか。

そで　イエ〳〵、實の姉妹なら、其やうな事してても大事ござんすまいが、義理のある姉さんの櫛、この儘にしておいては、わたしの心が

直助　成る程、てめえも馬鹿律儀な……その心だものを、今時の女に似合はねえ、死んだ亭主へ義理を立つて、斯うしてゐても、夫婦といふはほんの名ばかり。コレ、おらア毎晩變な心持ちだ。

そで　エヽ、お前も、わたしも願ひが叶ふまでは、その約束ぢやござんせぬか。それを承知でありながら、又しても〳〵其やうな事を

直助　オットあやまつた。のろい奴だが、どうなりと御意次第。

ト思ひ入れあつて

時に、御新造様、私しめは甚だ空腹、どうぞ夕飯を一膳、お願え申しやす。

そで　ホヽヽヽ、何を冗談。ほんにまだ夕飯前でござんすか。そんなら飯持つて來てあげるほどに、必ずその櫛は、どこへもやつて下さんすなえ。

直助　ハイ〳〵、畏り奉りました。

そで　エヽ、何ぢやぞいなア。ホヽヽヽヽ。どりや夕飯の支度しようかいなア。

ト唄になり、お袖こなしあつて、のれん口へ入る。直助殘り、思ひ入れ。

直助　へゝゝゝゝ、なんのこつた。姉の櫛であらうが、お袋の足袋であらうが、おれの手に渡つては、安穩におくものか。こいつ質にやるより、いつそのくされ、大家の內儀さんをだまくらかして、バツタリに賣つてしまはうわえ。それにしても女といふものは、親の形見だの妹に讓るのと、大事にするといふは、成る程罪の深いものだぞ。

ト櫛をひねくりながら門口へ出ようとする。一つ鉦、誂らへの合ひ方、薄ドロになり、行燈と佛壇の灯、あかるくなつたり暗くなつたりする。と、盥の着物の中より、細い手スツと出て、直助の足をとらへる。直助、これを見て、仰天して、持つたる櫛を落すと、これにて右の手は盥の中へ引込む。薄ドロやむ。直助、ホツと思ひ入れあつて

はてな。今のはたしか女の手だが、何にしても、こいつは稀有だわえ。

ト腕を組む。合ひ方。暖簾口よりお袖、日光膳の上へ粗末な燗徳利と猪口をのせ、飯櫃と一緒に持つて出て來り

そで　サア、夕飯にしやうぢやないかえ。

直助　もう膳を持つて來たのか。コレ、酒の買つたのはあるか。

そで　アイ、取つておいたわいなア。

直助　そんなく熱く燗をして來て下ッし。

そで　モシ、それに如才があるものかいなア。

ト徳利を見せながら、そこに落ちてある櫛を見附け、取上げ見て

あれほど姉さんが大事がらしやんす櫛ぢやといふに、此やうに捨てゝおかしやんして、ほんに男といふものは。モシ、こりやわたしが預つておくぞえ。

ト直助思ひ入れあつて

直助　何も借り取りにするといふではあるまいし、明日は直ぐに持たしてやるがよい。畢竟おれが鰻搔きへ引ッかゝつたから、てめえにも渡るといふもの。さうでないと水の底で、腐つてしまふ代物だ。コレ、うぢ〳〵してゐるうち、米屋の野郎が來るとうるさいワ。野暮を云はずと、貸して下つし。

そで　成る程、思うて見れば、云はしやんす通り、お前が見附けたればこそ、姉さんの仕合せ。その上、榮耀に使ふといふではなし、細い暮しの煙りの代。姉さん、ちつとのうち貸して下さんせえ。

ト戴いて

サア、持つて行かしやんせ。

直助　そんなら聞きわけて貸してくれるか。

ト盥は眞中、お袖は上の方、直助の下の方から手を出して、及び腰に櫛を受取らうとする。又薄ドロドロになり、盥の中より女の手出て、櫛を持つたる直助の手を握る。直助見て吻りし

アレ〳〵、また細い手が

トぞつとして、櫛を盥の中へ落し

エヽ、不氣味な

そで　何をお前は其やうに仰山な……櫛はどうしたのぢやえ。

直助　櫛か。櫛は盥の中へ……アヽ、そんならてめえは、今のは見ないか。

そで　そりや何を

直助　こいつはいよ〳〵稀有だわえ。

トぢつと思ひ入れ。

そで　お前もマア何を云はしやんすやら。そして、櫛は盥の中へ落したと云はしやんしたな……エヽモウ、氣味のわるい。そんなら、お前探して見やしやんせ。

直助　いやな事の。もう〳〵あの櫛へかゝり合ふ事は御免だ。てめえ、よく探して見るがよい。

そで　それぢやといふて、無いもせぬものを

　トお袖、あちこち探して見る。一つ鉦、薄ドロ〳〵の合ひ方になり、お袖、盥の中の着物をふるつて見ると、初めのうちは本水にて、絞るうちに自然に血汐と變り、したゝる。直助、これを見附けて

直助　エヽ、それ〳〵、その着物は、血だらけだワ〳〵。

そで　エヽ。

　ト恟りして、絞りあげた着物を盥の中へ落す。途端に盥より一疋の鼠、櫛をくはへたまゝ飛び出す。薄ドロ〳〵、一つ鉦。

直助　それ〳〵、鼠が櫛を

　ト追ひかけると、鼠は櫛を佛壇へ置き、消える。直助、櫛を取り上げて

何にしても、今夜は變ちきな晩だぞ。コレ、その盥の中から、鼠が櫛を咬へて飛び出して、佛壇へ置いて行つたワ。

そで　そんならその櫛を、鼠が佛壇へ

直助　コレ、その櫛はおらア否だ。てめえ差してゐて、明日早く姉御に屆けるがよい。●

ト　お袖の髪へ櫛をさしてやる。

そで　アヽモシ、其やうな所へさしては

ト櫛を直さうとして、自分の手を見て

エヽ。氣味のわるい、どうせうぞいなア／＼。

直助　今の血が附いたのだ、ドレ／＼、おれが洗つてやらう。

ト手桶の水にてお袖の手を洗つてやる。

そで　モシ、早うその盥を、どこぞへ片附けておかしやんせ。

直助　オット合點だ。イヤ、とんだ洗濯物を頼まれたぞ。

ト門口の外へ出す。

そで　わたしやモウ、怖さも怖し、氣にもかゝる。ひよつとマア、姉さんの身の上に

直助　ハテ、物は氣にかけると方圖のないものだ。必ず案じないがよい。

そで　それもさうかいな。ドレ、そんならわたしや、夜鍋仕事にかゝらうわいなア。

ト　お袖は針箱を出し、河岸揚げの肩當てを刺しにかゝる。直助見て

直助　アヽ、なんだ、木場の河岸揚げの肩當てだな。そいつを差し溜めて、賣るといふ始末か。素敵に稼

ぐやつサ。

ト四つ竹節、木魚の合ひ方になり、寺の門の中より宅悦、頭巾をかむり、足力の杖をかつぎ、笛を吹きながら出て花道へかゝる。直助聞きつけ

オイ、按摩さん〳〵。

ト呼ぶ。宅悦とつて返して門口へ來て

宅悦　お呼びなされましたか。

直助　オツト此方へ入らつしやい。

宅悦　ハイ〳〵、御免なされませ。

ト内へ入り、頭巾を脱ぐ。

直助　アヽ、足力だな。こいつは奇妙だ。さうして按摩さん、お前は見えるの。

宅悦　左樣でござりまする。

ト云ひながら直助を、つく〴〵見て

ヤア、こなさんは慥か、淺草でいつぞや逢つた、藥賣りの藤八ぢやアないか。

直助　道理で聞いたやうな聲だと思つたが、その時の灸點屋だな。イヤ、こいつは飛んだ人を呼び込んだ

そで　お前は宅悦さん、どうして爰へ。

宅悦　ヤ、お紋さんか。お前はどうして爰にマア……ハヽア、そんならとう〳〵この人を亭主に持つたのか。イヤ、蓼くふ蟲も好き〳〵だぞ。

直助　これは御挨拶だ……時にこなたは、まだ淺草にゐるのか。

宅悦　ちつとあの邊には居憎い事があつて、この頃まで四谷の方に行つてゐやした。

そで　モシ、四谷は、どの邊にゐやしやんしたえ。

宅悦　水道町の近所サ。ナニ、やう〳〵一月ばかりしか居ませぬて。

直助　お坊も兎角尻が据らない樣子だな。

そで　あんまり色事を稼がしやんすからの事サ。

宅悦　ナニ稼ぎもせぬ癖に……イヤ、時に療治をなされますか。

直助　折角呼び込んだものを只も返されまい。ざつとやらかしてもらひませう。

そで　モシ、一服のましやんせ。

ト莨を吸ひ附けて出す。

宅悦　お前の吸ひ附け煙草も久し振りだ。こいつは仕合せが直りませうよ……サア、致しませう。

直助　どうぞきつく頼みやす。

ト四つ竹節の合ひ方になり、宅悦、捨ぜりふにて、直助の肩を揉み出す。お袖、矢張り縫ひ物をしてゐる。

宅悦　イヤモシ、いつやら中田圃の騒動は、誠に珍事ちうような事でござりました。一體あの一件は

ト云ひかける。直助、思ひ入れ。

直助　ア丶、かゆい〳〵。カウ按摩さん、思ふさま頭を搔いてもらひたいね。

宅悦　それでもお前、まだ昨日あたり結つた頭を、二十八文の出入りだ。お紋さん、ちよつと櫛を貸しなさい。

そで　そんなら待ちなさんせ。ちよつと黄楊の櫛を取つて來て

宅悦　モシ〳〵、お前の頭に、それほど差してゐるではないか。

そで　でも、この櫛で頭を搔いてはたまらぬわいな。

ト奥へ行かうとする。宅悦、無理に櫛を取つて

宅悦　この櫛はどこか見たやうな櫛だが……さうだ〳〵。イヤ、この櫛について、とんだ話がありますよ。

そで　エ。この櫛について話があるとは、そりやどのやうな

宅悦　その櫛は、お前どこから買つて差してゐなさるかは知らないが、こりやァ山の手の四ツ谷町で、民谷伊右衞門といふ浪人の女房、お岩どのといふ女の、差してゐた櫛であつたが

直助　コレ、こなたは詳しい事を知つてゐるの。

宅悦　知らないではさ、あの邊は療治場でござりましたて。

そで　モシ、そのお岩さんといふ女中は、どうぞしなさんしたかえ。

宅悦　どうしたどころか、イヤ、大騷動でござりやした。

そで　エヽ、そりやマアどうした譯で

宅悦　モシ、世の中に怖いものといふは、嫉妬深い女と、人切り庖丁を差してゐるお侍ひサ。その民谷伊右衞門といふ侍ひの女房、お岩といふ女は、嫉妬から起つて、亭主に殺されやした。

そで　エヽヽヽ。

直助　お袖、こりやマア大變だぜ。

宅悦　ハヽア、そんならお前方、由縁でもござるかね。

直助　由緣どころか、そのお岩といふは、このお袖が姉だよ。

宅悦　エヽ。

ト宅悦、恟りする。お袖、宅悦を捕へて

そで　モシ、そりやマア誠でござんすか、ほんの事かいなア〳〵。

宅悦　ほんの事はほんの事だが、わしは又そんな緣引きのある事は知らず、ツイうか〳〵と、飛んだ話をし出して

そで　イエ〳〵、よう云うて聞かして下さんした。してマア姉さんには、何の科あつて其やうな

宅悦　サ、わしもその一件には係り合つて……イヤ〳〵、係り合つたといふ譯ではないゆゑ、詳しい譯は知らないが、早く云ふと、その亭主の伊右衞門どのが、女房に飽きが來て、外の女を足にしようとしたのを、少し燒きかけたから起つた騷動だといふ話だ。それから、その伊右衞門といふ人は、氣が違つたか、自棄になつたか、その外に二三人を殺して影を隱したが、イヤモウ、思ひ出すとゾツとする程恐ろしい事が……イヤ又その筈の事かえ。さして科もないお岩どのを、それは〳〵むごい殺しやう……イヤ〳〵、この話はやめやせう。何だか目先きへ死骸がちらつくやうだ。何にしても、その民谷伊右衞門どのといふ男は、強惡な侍ひサ。

ト思ひ入れ。直助こなし。お袖、思ひ入れあつて

そで　チエヽ、いかに夫の高下ぢやというて、科もない姉さんを、其やうにむごたらしう殺すといふ事

が……わたしが爲には義理ある姉さんの敵、その伊右衛門どのゝ在家を、云うて聞かせて下さんせ。モシ、教へて下さんせ〳〵。

ト こづき廻す。

宅悅　これサ〳〵、どうしてわしがそれを知るものか。こりやマア、ひよんな話をし出したわえ。

そで　イエ〳〵、なんぼでも、お前から詳しく聞かねばならぬ。サ、姉さんを、どのやうにむごたらしく殺したのぢや。サ、もつと云うて聞かせて

宅悅　イエサ、わしやァそんなに詳しくは

ト 宅悅は持てあましたる思ひ入れ、段々門口の方へ出てゆく。お袖、附きまとつて

そで　サア、その伊右衛門どのゝ在家を早う

宅悅　これは又迷惑な。有やうは、わしも人の話で聞いたが、何にしてもお力落しでござりやす……わしはお暇申します。

そで　イエ〳〵、もつと聞きたい事がござんす。どうぞ云うて聞かせて

ト 宅悅の足を掴まへる。

宅悅　これはしたり、わしは今夜大事な出入り場の御隱居を療治せねばならぬ。マア爰を

そで　イエ〳〵、詳しく聞かぬ其うちは、なんぼでも放す事は

直助　コレお袖、可哀さうに、歸してやるがよい。大抵譯は解つてゐるワ。

宅悅　左樣サ、いくら饒舌つてもこんな物。ヤレ〳〵、氣の毒な

トこそ〳〵逃げ出す。

直助　コレ、療治代を持つてゆかないか。

宅悅　成る程、肝腎な物を

ト歸りかけて

イヤ、爰が按摩の辛抱どころぢや。

直助　コレサ〳〵、足力の杖もあるよ。

宅悅　それも按摩の辛抱どころぢや。

直助　これサ、道具が無くつては、商賣は出來まいが。

宅悅　それも按摩の辛抱どころだ。

ト四つ竹節に木魚の入つた合ひ方になり、宅悅、這々の體にて向うへ逃げて入る。直助、ザツと思ひ入れあつて

直助　コレ、お袖、おれも初めて聞いたが、さて〳〵飛んだ事になつたなア。

ト氣を持たせるやうにチッと云ふ。お袖、途方にくれたる思ひ入れ、おろ〳〵して

そで　思ひがけない姉さんの、刃にかゝつて果敢ない御最期。さういふ事とは露知らず、明日はこれなる櫛に添へ、文にこま〴〵便りをと、思うてゐたのに今の噂。父さんといひ姉さんまで、非業にお果てなさんすといふは、モシ、わたしやどうせう、どうせうぞいなア。

ト泣き伏す。直助チッと思ひ入れ。

直助　斯ういふ噂を聞く端か、種々樣々な稀有な事。コレ、その櫛もおれが拾うて來て、思はずおぬしが手へ渡るも、死んだ姉御が一念の

そで　わたしに屆けて下さんしたのか。それ程までに姉さんの、妹を思うて下さんす、形見のこの櫛、今は仇なる姉聟の

直助　その伊右衞門も武士の浪人、舅左門どのゝ仇敵、討たねばならぬ身を以て、却つてその身が敵となれば、コレ、親の敵、姉の敵、討つべき者は其方一人。何をいふにもか弱い女。エヽ、コレ、この直助も、繋がる緣のあるなれば、ナニ安穩に敵をば……左門どのも草葉の陰で、口惜しからう、無念であらう。


尾上菊五郎
片岡市蔵

ト心ありげに云ふ。

そで　いかに甲斐ない女子ぢやとて、ナニ安穩に仇敵

ト口惜しいこなし。

直助　そんなら其方は親左門、姉のお岩に夫の與茂七、その三人の敵をば、見事女の手一つで。その仇討は覺束ない。おれも以前は武家奉公、二人や三人相手にも、仕兼ねぬ手ぶしは持ちながら、赤の他人でゐる時は、粋興らしく助太刀も……エヽコレ、腕がムヅ／＼するなア。

ト猶もお袖に氣を持たせる思ひ入れ。合ひ方變つて、お袖、思ひ入れあつて、徳利と猪口を持つて、直助が側へ寄り、手酌にて一口飲んで、直助の前へ置き

そで　サ、一つ飲んで下さんせ。

直助　これは御馳走。そんなら一つ注いでもらはう。

トお袖の酌にて一つ飲み

成る程、女の狹い心では、酒でも飲まずば立ちきれまい。話を聞いてもこの胸が、いはゞ他人のおれでさへ

そで　イエ／＼、お前を他人にせまい爲、女の方から獻した杯。

直助　ヤ。

そで　モシ、もう祝言は濟んだぞえ。

ト思ひ入れ。直助こなし。

直助　そんならおぬしは、帶紐といて
親と夫の百ケ日、今日が過ぎれば今宵から、約束通りお前と女夫に

そで　アイナア。

ト思ひ入れ。

直助　イヤ、そりや惡からう。おれもおぬしに有やうは、のろけ切つた心から、女房になつたら力にな
らうと、約束はしたものゝ、よく／＼思つて見る時は、草葉の蔭の與茂七へ、それでは其方の

そで　操を破つて操を立てるわたしが心……モシ、其やうな事は捨てゝおいて
お前も、もう一つ飲ましやんせぬかえ、

ト又手酌でグッと飲んで

直助　酒ならいくらでもお辭儀は無しサ。

トお袖、酌をして、直助また飲む事あつて

そで　酒ならお辭儀無しと云はしやんすが、さうして女子はえ。
直助　イヤ、女といふものは怖いものよ。
そで　それでお辭儀をさしやんすのかえ。
直助　マア、ざつとそんなものよ。
そで　そんならわたしや、一つ飲まうわいな。
　　トまた手酌で飲む。
直助　イヤ、こいつは素的に今夜は大分出來がよい。
そで　わたしやモウ、氣が揉めてならぬによつて
　　ト直助にしなだれるこなし。
直助　成る程、氣が揉めるも無理はない。たつた一人の姉貴がひよんな
そで　サ、それぢやによつて、どうぞ力に
直助　そんならいよ〳〵直助と、夫婦になつたその上で
そで　一人ならず二人三人、打たねばならぬ仇敵。
直助　助太刀しよう。

七〇〇

そで　エ。
直助　討つてやらうワ。
そで　エ、すりやアノほんまに
直助　女房になるか。
そで　必ず見捨てゝ下さんすなえ。
直助　たうとう首尾よく
そで　エ。
直助　アヽ、素的に醉つた。
　　ト云ひながら、脇の方を向いて舌を出し
サア、嗅ア、寢ようぢやないか。
そで　わたしやもつと夜鍋をしようわいな。
直助　そんなら勝手にするがよい。おれも有やうは、赤の他人が勝手だ。
　　ト云ひながら表を締める。
そで　エヽモ、寢る事は寢るけれどナ

ト思ひ入れあつて、佛壇へ手を合せ拜むこと。直助見て

直助　コレ、今に敵は討たしてやるワ。

ト唄になり、直助、お袖の手を引き、そこに立てまはしたる屛風の中へ入り、引きまはす。合ひ方になり、向うより與茂七、一本差し、隱亡堀で手に入つたる鰻搔きを持つて出て來て、花道にて思ひ入れあつて

與茂　いつぞや計らず大切なる、廻文狀を失ひし、その折手に入るこの品に、あり〳〵名前の彫り附けし、權兵衞といふ者こそ、法乘院の門前にて、香花商ふ家なりと、聞き出せしが詮議の手がゝり、主に逢うて廻文の、有無を糺したその上にて、すべによつたら蟻の穴、つゝむ大事にや替へられぬ、不便ながらも……何は兎もあれ、この持ち主に逢うた上。オヽ、さうぢや。

ト思ひ入れあつて舞臺の方へ來かゝる。薄ドロ〳〵になり、門口に干してある小平の着物の裾に陰火燃え立ち、誂らへの小蛇つきまとふ。與茂七これに目を附け

ヤヽ、陰火と共に蛇の、あれなる衣類に附きまとふは、ムウ、非業の最期に世を去りし、正しく死靈の

ト思ひ入れあつて、つか〳〵と舞臺へ來かゝると、ドロ〳〵打ちあげ、陰火、蛇と共に消ゆる。與茂七、

訝かしげに思ひ入れ。

さても不思議な。ハテナ。

ト思ひ入れあつて、氣を變へて門口を叩き

モシ〳〵、お頼み申します〳〵。

トこの聲を聞き、屏風より直助出て

直助　オイ〳〵、誰れだ〳〵。

與茂　どうぞ線香を一把賣つて下さい。

直助　アヽ、お氣の毒だが、線香は切れ物でござりやす。

與茂　そんなら爰にある、樒を賣つて下さりませ。

直助　樒かえ。そりやァ滅法界に高い。一本で百より廉くはまからない。そしてそれは賣れてある花だ

外へ行つて買はツしやるがいゝ。

與茂　まだ日が暮れて間もないに、怪しからず早く寢たわえ。アヽコレどうぞ

トちよつと考へて

モシ〳〵、外に干してある洗濯物を、盜人が持つて行きます。アレ〳〵、盜人が洗濯物が持つて

行くワ〳〵。

ト大きな聲で云ふ。直助驚き、とつかは起きて、門口を明け

直助　さつぱり忘れて寢てしまつた。お前、よく氣を附けて下さりやした。

ト洗濯物を持つて內へ入らうとして、與茂七を見て

こなたはたしか……

ト暫らく見てゐたりしが惘りし

ヤア、幽靈だ、幽靈が來た〳〵。

トとつかはと內へ飛び込み、門口を押へてゐる。

與茂　ナニ幽靈が、どこに〳〵

トうろ〳〵する。

直助　コレ、幽靈が來た〳〵。

トこの聲にお袖も起きて來り、うろたへ、直助に縋る。

そで　エヽ、氣味のわるい、どこに幽靈が居るわいなア。

直助　門口に立つてゐるワ〳〵。コレ〳〵てめえ、幽靈除けは持たねえか〳〵。

そで　わたしや其やうな物は持たぬわいな。藤八五文は幽靈には驗かぬかいなア。

直助　コレ、近所の衆、幽靈が出た、來て下さい〳〵。

ト無性に騒ぐ。

與茂　無性に幽靈〳〵と云ふが、おれが目にはさつぱり見えない。コレ、幽靈どん〳〵、どこにゐるのだ〳〵。

直助　エヽ、幽靈たけ〴〵しいとはこなたの事だ。

與茂　ナニ、わしが幽靈だ。そりやァ人違ひだ。わしやァそんな者ではない。マァ、何にしろ、爰を明けて下さりませ。

直助　イヤ〳〵、滅多に明ける事はならない。幽靈に近附きはないぞ〳〵。

與茂　これはしたり、ちよつとお目にかゝりたい事がござりやす。門の戸を明けてもらひやせう。

トお袖聲に聞き耳立てゝ

そで　モシ、今ものを云はしやんしたは、以前の夫與茂七どのに、よう似たものごし。

直助　サア、それだによつて幽靈だといふのだ。

與茂　モシ、幽靈か幽靈でないか、お目にかゝればわかります。マア〳〵爰を明けて、正體を見さつし

やい。

ト この聲を聞いて、お袖、直助をかきのけ、門口を明けて、與茂七を見て恟りし

そで　ヤヽ、お前はほんに、與茂七さんぢや〳〵。

與茂　お袖か。コレ、おぬしが在家を探したが、變つた所で、ハテ面妖な。

そで　エヽ、わたしよりお前が面妖な。そんなら屹度幽靈ぢやござんせぬな。サア〳〵、此方へ入りなさんせ。

ト 與茂七を内へ入れ、いろ〳〵と思ひ入れあつて

ほんに幽靈ぢやない、正眞正銘、寸分違はぬ、與茂七さんぢや〳〵。……モシ、わたしやお前が人手にかゝつて、死なしやんしたと思うたゆゑ

ト 直助の方を見て、こなしあつて氣を變へ

ようマア、達者でゐて下さんしたなア。

ト 云つて俯向く。直助も思ひ入れあつて

直助　そんならいつぞや中田圃で、ばつさりやつたと思つたは

與茂　ヤ。

直助　いつも達者で、おめでたうござりやす。

　　　トこなし。與茂七、直助を、つくづく見て

與茂　たしかこなたは淺草で、見知りごしの藥賣り、たしかその名も直助どの、ハテ、變つた所に……

　　　コレお袖、爰は、てめえの內か。

そで　アイ、マア、其やうなものぢやわいなア。

與茂　して、この人は、なんで今時分來てゐるのだ。

そで　サア、あの人はナ

　　　トちよつと口ごもり、そこにある宅悅の置いて行きさし足力の杖を取つて

　　　オヽ、それそれ、按摩ぢやわいのう。

直助　ナニ、おれを按摩だ

そで　按摩ぢやぢや、モシ、按摩さんになつてナ、……按摩さんぢやぢやわいなア。

與茂　ハヽア、藥賣りが按摩と化けたか。

直助　さうサ、藥賣りが按摩と化けるは、まんざら緣のないでもないが、以前は赤穗の御家中が、小間物賣りや袖乞ひと

與茂　どうしましたとえ。

直助　世の中といふものは、さま〴〵なものサ。

與茂　ハテ、思ひがけない女房の内へ、尋ね當つておれも安堵。その上按摩まで呼んでおいてくれると

いふは、ハテ氣の附いた……コレ、お前さん、一療治やつてもらはうか。

直助　そんなら、いよ〳〵按摩にするのか。

そで　サア、按摩さんぢやによつて、療治してあげなさんせ。

直助　イヤ、按摩とは、あんまりむごい。

與茂　サア、揉んで下さい。

直助　わしやァ足力療治で、無性矢鱈に踏んで踏み附けるが、それが承知なら、療治さつしやるがよい。

與茂　その荒療治が此方の望み。併し足力の道具は、わしが貸してやりませう。

直助　こりやァ珍らしい。そんなら道具を御持參で

與茂　わしが持參の足力の、杖は即ちこの品だ。

ト合ひ方、變り、與茂七、持ち來りし鰻掻きを出す。直助見て、思ひ入れ。

直助　ヤ、こりやこれ何時やら六ぱ島、隱亡堀で失うた

與茂　そんならこれはこなさんの
直助　商賣道具サ。
與茂　その柄にしつかり權兵衞と、ありく〲彫り附けあるからは、そんならこなたの今の名は
直助　以前は直助中頃は、藤八五文の藥賣り、今は深川三角屋敷、寺門前の借家住み、見世で商ふ代物は、三文花に線香の、煙りも細き小商人、後生の種は賣りながら、片手仕事に殺生の、梁を伏せたり砂村の、隱亡堀で鰻掻き、ぬらりくらりと世を渡る、今のその名は權兵衞と、金箔の附いた貧乏人サ。
與茂　そんならこなたは、この家の御亭主。して、お袖は何ゆゑ爰に。
直助　この女かえ。こりやアわしが女房サ。
與茂　ヤ。
そで　アモシ、それを云うては
直助　いゝわえ。以前の亭主に在家を知られ、いつがいつまで其やうに、白を切つてもゐられまい。與茂七どのとやら、この女はわしが嚊アさ。
與茂　そりや早一旦この與茂七と、夫婦別れをした女の、再緣するもまゝある習ひ。併し未だに去り狀

を、渡さぬからは女房のお袖、誰れが許して再縁したのだ。

そで　サア、さう云はしやんすも皆尤も。譯を話せば長い事、父さんはじめお前まで、人手にかゝつて

直助　ヤイ〳〵、今となつては百萬だら、云ひ譯するほど罪が深い。所詮穢れたおぬしの體。性根を据ゑて、おれの見る前、先の亭主と別れてしまへ。又こなさんも薄のろく、心の腐つた女のあとをおはへて歩くも恥の上塗り、未練を云はずとこの女は、わしに下さい、貰ひましたよ。

ト圖太く思ひ入れ。與茂七も、こなしあつて

與茂　成る程こなたも横車、押し手を強くすつぱりと、女房をくれとよく云つた。その大丈夫な氣性に免じ、長熨斗附けてこの女、進上しまいものでもないが、只は遣られぬ、望みがある。

直助　望みといふは古風なお仕着、大概知れた紋切り形、女の手切れは、金と轉んで

與茂　イヽヤ卑劣な、何しに金を

直助　ムウ。して又何をこなさんは

與茂　望みといふは金でない。場所は砂村六ぱ島、隱亡堀の闇の夜に、鳴かぬ烏のいどみ合ひ、その時思はず失ひし、小間物仲間の符牒の書附け、拾つた人はこなさんと、知つたはこれなる道具から女房とその品替へ〴〵に

直助　變つた物と女と引替へ。併し此方は素人で、小間物仲間の符牒は知らぬが、その連名に四五十人徒黨を集める廻文と、この權兵衛は睨んでおいた。

そで　その書き物なら淺草で、わたしもちよつと見たわいなア、

與茂　アヽコレ、……そんならいよ／＼こなさんは

直助　拾つて持つてゐるならば、握つてゐても益ない反故、返してやりたいものなれど、拾はぬ物は是非がない。外を探すが、マア近道でござりやせう。

ト空うそぶく。與茂七うなづき

與茂　成る程こなたも中々以て、一筋繩ではほぐれぬ氣性、併し云ひ立する時は、見す／＼間男、密夫の權兵衛、以前の身なれば女敵討、また町人なら衛により、耳鼻削ぐか金銀を、強請つて取るもまゝある習ひ。その兩樣にかゝはらず、只管望むはその書き物、渡さぬうちは外へは決して。この家の内にいしかつて

そで　そんならお前は、この家のうちに

與茂　方の附くまでかゝりう人。

直助　腮をつるすが承知なら、そりやアこなたの勝手次第サ。

與茂 一人の女房に二人の男

直助 ハテナ、何方へ札が落ちるであらう」

與茂 そりやァ此方が先なれば

そで 蔓一筋に、わたしが心で

直助 二人へ立てる心中を

與茂 見たいはたしか懐中に

ト寄るのなお袖は隔てゝ

そで モシ、只何事も、わたしが胸に。

直助 上から見えぬ人心。

與茂 鏡にうつるものならば

そで さぞ恥かしい

直助 昔の御亭主

そで モシ。

與茂 今宵はさぞかし

與助　ヤ。

與茂　おやかましうござりやせう。

ト三人氣味合ひよろしく、キツパリとなる。唄になり、お袖案内して、與茂七奥へ入る、直助殘り、こなしあつて

直助　ハテ面妖な。いつぞや淺草田圃で、殺らしてのけたと思つた與茂七、生きてゐるのも不思議の一つ。そんならあの時殺したは、何奴であつたか、よく〳〵運の盡きた奴。それは兎もあれ、彼奴が欲しがる廻文狀、この書き物を師直樣の、屋敷へ持ち出し、恩賞受けたその上で、厄病神で敵とやら、あの與茂七めを……イヤ〳〵、それよりいつそ手短かに、この家の内でぐつさりと

ト思ひ入れあつて、そこにある出刃庖丁を取つて奥へ行かうとする。この時、お袖出て

そで　マア〳〵待たしやんせ、こちの人。

直助　そんならわりやァ今の樣子を

そで　モシ、與茂七どのも以前は武士、もしもお前に怪我あつては、誰れを力に親姉の

直助　ハヽヽヽヽ、お爲ごかしにあやなして、以前の男の與茂七を、庇ひ立てする詞の端々。

そで　エヽモ、男の癖に廻り氣な。一旦お前に大事を賴み、女房となつた上からは、金輪奈落お前と一

緒に、モシ、與茂七どのを殺す手引きは、ナ

ト直助に囁く。直助こなしあつて

直助　そんなら其方が與茂七を、酒に醉はしてこの所へ

そで　屏風を引いて寢入り端。

直助　合圖はおぬしが行燈の

そで　あかしを消す折忍び寄り

直助　あの與茂七を、たつた一突き。

そで　モシ。

ト押へる。

直助　必ず合圖を

そで　違へぬやうに

直助　合點だ。

ト思ひ入れ。こなし。時の鐘。合ひ方になり、直助下座の藪へ入る。お袖、思ひ入れ。奧より與茂七窺ひ出て、思ひ入れあつて

与茂　お袖、主の權兵衞、いづれへやつた。

そで　慥か遁がれぬ用事とやらで

与茂　他行なしたか。それぞ幸ひ、歸りを待ちうけ

　　　　トつか〳〵と表へ行かうとするを、留めて思ひ入れ。

そで　モシ、待たしやんせ。あの直助も以前は武士、殊に常から強氣の者、大事を抱へたお前の身に、もしも過ちある時は、古主へ不忠になりませうがな。

与茂　その心配もさる事ながら、今も奥にて云ふ通り、一味の廻文、彼奴めに拾はれ、大事を知られし上からは、所詮生けては置かれぬ奴。

そで　さう思はしやんすなら、仕樣もやうは……モシ。

　　　　ト囁く。

与茂　ムウ。すりや、いよ〳〵其方が手引きして

そで　わたしが親も鹽冶樣の御家來なりや、わたしが爲にも矢ッ張り御主人、お爲にならぬ直助どの。殺す手引きも御奉公。

与茂　出かしたお袖。して又合圖は

そで　寢酒すゝめて正體なき、折を窺ひ行燈の
與茂　あかりを消すを合圖と定め
そで　枕に立てし屏風越し
與茂　あの直助を、たつた一討ち。
そで　モシ。

ト押へる。

與茂　コレ、必ず共に
そで　怪我せぬやうに
與茂　承知いたした。

ト二人は示し合せるこなし、あたりを見廻す。時の鐘、しづかに合ひ方。舞臺廻る。

本舞臺、三間の間、平舞臺、向う鼠壁、眞中のれん口、上の方折りまはし、一間の反故ばり障子屋體の下の方、誂らへの門口。下座の方黒板塀。爰にお熊、蜆の籠より錢を出して數へてゐる。孫兵衞、次郎吉をかばうて捨ぜりふ。合ひ方、禪のツトメにて道具納まる。

くま　コレ、此ざまアなんだ。今日一日擔いで歩いて、賣溜めはこればかり。うぬ、大方錢をくすねたらう。サア、爰へ出せ。

孫兵　コレ、婆どの、可哀さうに子供を、其やうに叱らぬものぢや。して、賣溜めの錢はなんぼある。

くま　見さつしやれ、こればかりだわな。

　　トそこへ百三十の釣瓶錢を抛り出す。孫兵衞見て

孫兵　ハテ、五つか六つの子供の商ひ、それ程あればよいではないか。コレ、坊や、泣くなよく〳〵。よく稼いだ。坊はよい子ぢやぞ。

くま　エヽ、こなさんがさう甘やかすによつて、兎角商ひに出しても錢をくすねて、買ひ喰ひばかりしやアがる。サア、錢をどこへ隱して置く。出さねえか。この餓鬼は、出しやアがらないのか。

　　ト抓る。次郎吉、泣き出し

次郎　イエ〳〵、どこへも隱しはしませぬ。婆樣、堪忍して〳〵

孫兵　これはしたり、可哀さうに、どうしたものぢやぞいやい。

くま　こなさんは、そんな結構人だによつて、世間で佛孫兵衞といひますワ。その子も同じ代物ゆゑ、小佛小平。わしは身腹痛めぬ子の所爲かして、一倍間拔に思はれます。其奴がこしらへた餓鬼だに

よつて、薄馬鹿の筋を引かぬやうに、性根を叩き直さにやならぬ。エヽ、退かつしやい〳〵。

孫兵　コレ、おのれは年端もゆかぬ者を、常住三界ぶち打擲。もう〳〵、手荒い事はおれがさゝぬ。手ぶしかけると、聞く事ぢやないぞ。

くま　こなさんが庇ふだけ猶腹が立つ。うぬ、どうしてくれう。エヽ、小面の憎い餓鬼だ。

ト蜆の籠を持つて立ちかゝる。

孫兵　この鬼婆アめ、何をしをるのぢや。

くま　何を、この提灯爺イめが。

孫兵　おのれ、なんと吐かしをる。

くま　うぬ、餓鬼め、どうするか見やアがれ。

ト籠を持つて打つてかゝる。孫兵衛もお熊に掴みかゝる。禪のツトメをかすめ、佃の合ひ方に時の鐘をかむせたる鳴り物。向うより小平の女房お花、世話女房のこしらへ　手拭をかむり、前垂れ、裾を高からげ、茹で玉子の籠を提げて出て來て、直ぐに内へ入り

はな　ハイ、只今歸りました。

トこの體を見て急いで中へ入り

こりや何事でござります。マアく、御料簡なされませ。

ト双方を留める。

孫兵　お花や、聞きやれ。この婆アが、また坊主を窘めるわいの。

くま　コレ、其方のへり出したこの餓鬼、平常わしが可愛がつてやればよい事にして

孫兵　ヤイく、うぬ、この坊主をいつ可愛がつた。大福餅一つ買うてやつた事はあるまいがな。

はな　ハテ、もうようござります。マアく、御料簡なされませ。コレ、次郎吉、何を其方は婆樣の、御機嫌を背いたのぢや、

孫兵　また賣溜めが多いの少ないのと云うて、いぢりをるわいの。

くま　コレ、親仁どの、何も商賣ぢやもの、賣溜めの事云はいでかいの。こればつかりは憎まれても云はにやなりませぬ。コレ、お花、今夜なんぼ程商ひしやつた。

はな　ハイ、まだ勘定は致しませぬが、ちよつと御覽じて下さりませ。

ト玉子の笊をお熊の前へ出す。お熊中を見て

くま　こりや、まだ賣り切らずに持つて來やつたの。

はな　ハイ、三つ剰りました。

孫兵　オヽ、よう賣りやつたの。サヽ、ひもじからう、茶漬でも食うたがよい。コレ、賣溜めはさぞ澤山あらうな。

ト お熊、籠の中の錢を見て

くま　アイ、大方四百五十か、五百ばかりもござりやせうよ。

孫兵　ヤア、そりやマァ大枚な商ひぢや。それで其方も機嫌が直つたであらう。オヽ、大儀であつた〳〵

くま　又この位ゐ商ひせねば、水も飲まれるものではない。どこの牛の骨か馬の頭か、知れもせぬ病人を、内へ引摺り込んで、大抵物のいる事ではない。コレ、お花、とてもの事に、なぜ皆賣つてごんせぬのぢや。

はな　ハイ、そりやお前に明日の朝、茶うけにあげうと思ひまして

くま　ホヽヽヽヽ、そりやよう氣が附いたが、わしや其やうなもの食ふのは否ぢや。コレ、次郎吉、阿母が野良かはいて賣り殘した玉子、早う賣つて來い。

孫兵　可哀さうに今日一日、蜆かついで歩いて、草臥れたであらう。もう料簡してやりやいの。

くま　イエ〳〵、あのやうな病人のかゝりう人がゐるもの、うつかりしてゐると、生きながら餓鬼道へ落ちにやならぬ。サア、よい子ぢや、ちやつと賣つて來や。

ト猫撫で聲をして次郎吉に玉子の籠を持たせ、二人に見えぬやうに次郎吉を抓る。

次郎　アレ、痛いわいの〳〵。

孫兵　オヽ、どうしやつた〳〵。

次郎　婆樣がわしをつめつて

くま　エヽ、この子はよう嘘を。あれ程平常いとしがつてゐやしやんすもの、ナニ婆樣が其やうな事……コレ、そんな事は捨てゝおいて、早う賣つて來やいの。

次郎　アイ〳〵。

ト泣きながら門口へ出る。

孫兵　エヽ、うぬ邪慳な

はな　アモシ……サア、怪我せぬやうに行つて來やいの。

ト涙ながらにすかして出す。次郎吉は籠を提げながら

次郎　玉子々々、ゆで玉子〳〵。

ト悲し氣に呼び歩いて向うへ入る。合ひ方、時の鐘。

くま　成る程、瓜の木に茄子の譬へ、其方の亭主ぢやが、あの小平の意氣地ない所に、よう似てゐるわい

の。わしが生んだ子を褒めるぢやないが、そりやこなさん達に見せたい。歴とした侍ひ、それも今は浪人して……ほんに浪人といへば、腰拔けの病人どのは、まだ死ねさうもないが、あれがほんの穀つぶしとやら。

ト障子の内をちよつと見て

孫兵　ドリヤ、賣溜めの勘定でもしようか。

ト お熊、籠の蓋へあけた錢を持つて奥へ入る。孫兵衛、お花殘り、顏見合せ、思ひ入れ。

孫兵　成る程、あの婆ァも年寄るほど、根性が惡うなる。わしも年寄つて、退去りも外聞が惡さに、捨てておけばよい事にして、附け上りをる。コレ、お花や、わが身もさぞ、うとましからうが、マア辛抱してくりやれ。また仕樣もあるであらう。

はな　エヽ、勿體ない。母さんは甲斐々々しいお生れゆゑ、私しどもや連合ひの致す事は、お氣に入らぬも尤もでござります。それはさうと、こちの人が留守の内も、くれぐ〳〵氣を附けて進ぜろと云うておかしやんした御病人樣、今日は少しもお心ようござんすかえ。

孫兵　今スヤ〳〵と寢てござつたが、どうも捗らぬ御病氣、あなたへ對しても、あの婆めが邪慳ゆゑ、おりや氣の毒で……ほんに、藥あげてもよい時分であらうぞや。

はな　ハイ〳〵、溫めてあげませう。
　　　トとつかは立つて七輪へ藥土瓶をかけ、煽いでゐる。障子屋體にて
又之　お花は歸りやつたか。孫兵衞や〳〵。
孫兵　ハイ〳〵、若旦那樣、お目が覺めましたか。
　　　ト合ひ方になり、孫兵衞、上手の障子を明けると、一間に小汐田又之丞、浪人者の拵へ、病ひ鉢卷、
　　　搔卷によりかゝり、木綿布子を肩に掛けて、あへいでゐる體。
又之　今宵は大分寒氣が強いが、雪でもチラつきは致さぬのか。
孫兵　イエ〳〵、雪は降りませぬが、この寒さでは、御病氣にさはりませうかと、私しも大きにお案じ
　　申しまする。
　　　トお花茶碗へ藥を入れて持つて來て
はな　ハイ、お藥をおあがりなされませ。
　　　ト又之丞藥を服みながら
又之　お花、小平はまだ歸らぬか。
はな　もう彼れこれ三月あまりにもなりまするゆゑ、お暇を願つて、歸る時分でござりまするが

又之　イヤ、大方今宵は歸るであらう。
孫兵　エ。
又之　お花、其方、さぞ待遠であらうな。
はな　ホヽヽヽ、あなた何を冗談ばつかり。

ト思ひ入れ。孫兵衞は小聲で念佛を唱へるこなし。

又之　夫小平は雇ひ奉公。妻の其方は女の身として夜商ひ。その艱難の暮しの中へ、斯樣に長々の病氣にてのかゝりう人。それをうたてく思はず、よう世話しておくりやる深切、コレ、寢た間も忘却は致さぬぢや。忝い〳〵。

孫兵　なんの其お禮に及びませう。この親仁めは、お前の御親父樣のお草履摑み、また悴の小平めは、お前の御家來。お屋敷の騷動から、御家來由良之助樣はじめ、御家中もちり〴〵ばら〳〵。畢竟私し風情を、御家來と思し召せばこそ、便り寄つてお出でなされた若旦那、粗末に致すと罰が當ります。また艱難の中と云はしやりますが、この親仁は、ずんど工面がようござりまするぢや。併し金の有るふりを致すと、人が貸せ〳〵といふてうるさし、第一はこの嫁なぞが、金の簪買うてくれいの、ヤレ錦の振り袖が欲しいのとねだりまするゆゑ、無いふりをしてをりまする。ナニ千兩

の二つや三つ、神棚へも載せておきますて。ハヽヽヽヽ。

はな　ホヽヽヽヽ、父さんの何云はしやんすやら、いつも〳〵冗談ばつかり。

ト云ひながら、又之丞の掛けて居る搔巻に目を附け

モシ、あなたのお召しなされました、この着る物は

孫兵　ほんに、こりやおれが布子ぢやが、夏中質屋の庫へ

はな　アモシ……こりやマア、誰れが持つて參りましたぞいなア。

又之　こりや最前、あの次郎吉が持つて參つて、寒氣を防ぐ爲、身共に着せるやうにというて、あの小平が屆けたと申す事ぢやて。

孫兵　エヽ、アノ悴の小平が

ト悑りする。

又之　又この搔卷も屆けたぢや。

孫兵　すりや、それ程までにお主樣を……悴、出かしをつた。南無阿彌陀佛々々々々々々。

はな　ホヽヽヽヽ、父さんとした事が、何を云はしやんすぞいな。又さういふ事なら、早う戻らしやんすりやよいに。

ト門口を覗いて見たり、いそ〳〵して

モシ〳〵、若旦那様、お御足を撫つてあげませうかいなア。

又之　イヤ〳〵、今宵は大分快い。構やるな〳〵。

はな　ハテ、御遠慮には及びませぬわいなア。

ト又之丞の足を撫つてやるこなし。孫兵衞は口の内で念佛を唱へてゐる。靜かなる木魚の合ひ方・禪のツトメ……向うより次郎吉、三布蒲團を繩で縛り、引摺つて來て、門口へ來て格子を明ける。お花立つて來て

小平どの、歸らしやんしたか。

ト次郎吉を見て

こちの人かと思うたりや次郎吉、そりや何ぢやぞいの。

次郎　父様が、これを旦那様に着せろというて、屆けさしやつたわいの。

ト蒲團を内へ入れる。

はな　そんならこれも若旦那へ、お着せ申せと、アノ父さんが

孫兵　何と云ふ。それも悴が屆けやつたといふのか。

はな　アイ……エヽ、何の事ぢやぞいの。年端もゆかぬ者に、此やうな重い物を荷げさせずと、なぜに自身に持つて、早う歸つては下さんせぬぞいなア。

孫兵　南無……エヘン〳〵。

ト咳に紛らかす。

又之　ヤレ〳〵、次郎吉、大儀であつた、爰へ來やれ、褒美を取らさう〳〵。

ト側の袋の中より菓子を出して次郎吉にやり

コレ、父が歸るであらう、温なしうしませうぞ。ほんに賢い奴ではある。お花、褒めてやりやいの。

はな　ハイ〳〵……コレ、久しぶりで父樣と一緒に寢々するのぢやが、嬉しいかや〳〵。

又之　その子よりも、第一其方が

ト お花を見る。お花、恥かしき思ひ入れ。

身共も嬉しい。ハヽヽヽヽ。

ト思ひ入れ。孫兵衞俯向いてゐる。唄になり、向うより赤垣傳藏、大小、ぶツ裂き羽織、小提灯など

もし、出て來て、門口にてこなしあつて

傳藏　頼みませう／＼。

はな　ヤ、こちの人が歸らしやんしたさうな。

ト　とつかはと門口へ行き、戸を明けて

小平どのかいなア／＼。お前はマア

ト傳藏を見て

ホヽヽヽ、わたしとした事が

ト氣の毒なるこなし。

傳藏　ナニ人違ひかな。ハヽヽヽヽ……イヤナニ女中、孫兵衛どのと申すは此方かな。

はな　左樣でござりまする。あなたは何方から

傳藏　身共は小汐田又之丞に、用事あつて參つた者。ちと免しやれ。

ト内へ入る。又之丞見て

又之　ヤ、貴殿は赤垣傳藏どの

傳藏　小汐田氏。さて一別以來。

又之　これは／＼、ようこそ御入來、まづ／＼これへ。

傳藏 然らば御容赦下されい。

ト座に附く。又之丞よき所へいざり出て

又之 まづは御健勝にて

傳藏 貴殿にも御無事と申したいか、承れば、何か御病氣との事。

又之 さればでござる。痛疾風とか申す病ひにて、未だに歩行が心に任せぬやうでござる。

傳藏 ハテサテ、それは御不自由でござらう。イヤナニ、孫兵衞どのとやら、何かと又之丞どのゝ世話致さるゝと申す事。身共も古朋輩の事、祝着いたす、忝うござる。

孫兵 ハイ〳〵、若旦那も長々の御病氣にて、此やうな見苦しい内へ、お隱まひ申しておくといふは、ほんの名ばかり。ほんに心は矢竹に思ひまするが、貧乏人の事、思ふやうに甲斐は廻らず。それでも奇特に、この嫁女が手一つで、晝は人樣の濯ぎ洗濯、夜は鯣やうで玉子

ト お花茶を汲みながら孫兵衞の袖を引き

はな イヽエイナア。

ト傳藏の前へ持ち行き

ハイ、あなた、お茶一つ。

傳藏　イヤ〳〵、構やるな〳〵。

ト　お花は孫兵衛に囁く。

孫兵　オヽ、よう氣が附いた。二合半とつて來やれ。コレ、西横丁の西の宮がよいぞや。そして、何ぞ肴な見つくろつて

はな　ハイ〳〵。

ト　門口へ出かゝるを、孫兵衛こなしあつて

孫兵　コレ〳〵ノ〵、お花や、酒買うて歸りに、ちよつと法乘院へ寄つて、爺がお願ひ申しておいた物を下されませと、其方、持つて來て下され。

はな　ハイ、そりや何でござりまするえ。

孫兵　何であらうと、持つて來やれば解るワ。コレ、必ず悧りせまいぞや。

はな　エヽ、何ぢやゝら氣味の惡い……どりや酒買うて來ようかいなア。

ト　木魚入りの合ひ方になり、お花は德利を提げて向うへ入る。又之丞は傳藏へちよつと心遣ひして

又之　コリヤ〳〵孫兵衛、その坊主が眠うなつた樣子ぢや。納戸へ連れて行つて寐さしてやれ。

孫兵　ほんに、何も知らぬ子供は佛。南無阿彌陀佛々々々々々々〳〵……左樣ならあなた、御ゆるりとお話

しなされませ。

ト孫兵衛は傳藏に會釋し、次郎吉を連れて奥へ入る。木魚入りの合ひ方。傳藏あたりを見廻し

傳藏　さて小汐田氏、身共今宵貴殿の隱れ家を尋ね、わざ〳〵參つたは餘の儀ではござらぬ。兼ねての一儀も、早近々のうち

又之　すりや、敵の館へ亂入の

傳藏　コリヤ。

トあたりを見廻し、懐より小判を出し

この金子は由良之助どの、四十七人へ配分の金子。小汐田氏、お受取りなされい。

又之　何か存じませぬが、大星どのゝお志し、忝うは存じまするが、餘人は格別拙者儀は、敵の門内へ踏み込みまするを、まづ生きて再び歸らぬ所存でござれば、所持いたしても不用の金子。

傳藏　さればでござる。拙者はじめ、皆左樣に思ひましたが、由良之助どのゝ申さるゝは、もし敵地にて討死いたすその砌り、死骸に金子所持なき時は、鹽冶浪人活計に迫り、師直の館へ亂入なし、切り取りなさん企てと、世の人口を防がん爲、これは各自肌に附け、持參あるやう、大星どのゝ指圖でござるて。

又之　ハヽア、流石は大星どのゝ御料簡は又格別。然らば受納いたすでござりませう。

ト金を受取り、其まゝ前へ置き

傳藏　赤垣氏、してその夜の手配りは、貴殿には御承知でござるかな。

又之　その儀も大星どのより、書き物にして斯くの通り。密かに披見あるやうに

ト思ひ入れあつて、懐中より書き物を出して、又之丞の前へ置く。又之丞こなしあつて開き見る。合
ひ方。

傳藏　ムヽ、成る程、四十七人二手となし、表門より二十四人、裏門より二十三人、伍々を略して三人
一組、三々九人を一手となし

又之　大星どのゝ兼ねての練磨、甲州山鹿の采配にて

傳藏　序の太鼓にて人數を繰り入れ

又之　いかにもく、破の太鼓には人數を分ち

傳藏　急の太鼓に切り入つて

又之　織部、大鷲、不破なんど、太刀打槍術手練の荒者、三九二十七人は、爰に押し伏せ、彼所に責め
立て

又之　殘りの人數は四方を固め、八方くまぐヽ眼を配り
傳藏　目ざす敵を取逃がさぬやう、或ひは矢襖槍襖
又之　ハヽア、天晴れノヽ。敵師直天を驅け、大地を潜る術ありとも、首をおけんは瞬くうち。
傳藏　コレ……密かに披見。
又之　ハテサテ感心。
　　ト兩人こなしあつて書き物を見てゐる。かすめたる佃の合ひ方、時の鐘になり、向うより前場の古着屋の庄七、米屋の長藏、弓張り提灯を持つて出て來り、花道にて
庄七　コレノヽ、長藏どの、貴樣はどこへ行くのだ。
長藏　わしやア孫兵衞の所へ催促に行くが、お前はなぜ彼所の內へ催促に行くのだ。
庄七　聞かつせえ。おらが庫へ泥坊が入つて、二品三品代物が紛失したが、調べて見れば、みんなあの孫兵衞が所から置いた質。そりやア僅な代物だが、四ッ谷町の利倉屋から、下質に下つてゐる、ソウキセイといふ唐藥、この置き主は浪人者の、民谷伊右衞門といふ者ださうだが、この一品が金目の代物サ。
長藏　なにか、それで彼處の內が怪しいによつて、探りに行くのか。

庄七　マアそんなものサ。
長藏　ハテ、飛んだ事があるものだ。
ト話しながら兩人、舞臺へ來て
庄七　孫兵衞どの、お内でござるかな。
長藏　ハイ、御免なさい。
ト門口を明ける。この聲を聞いて傳藏、手早く書き物を懷中する。奥よりお熊、出て來り
くま　ハイ〳〵、何方からござりました。
ト二人を見て
こなた衆は、西横町の金子屋に、米屋の若い衆、大方碌な事ではござんすまい。
長藏　これは來がけからの御挨拶、さう云はれては猶の事だ。
ト懷より帳面を出し
この間から書出しをあげておきました米の代、一貫六百匁はどうさつしやります。是非とも今夜は拂つてやつて下さりませ。勘定して下さい〳〵。
くま　サア、尤もでござりますよ。命を繫ぐ米の代、長くとはいふまい、もう二月か三月のところを

長藏　イエ〳〵、どうして〳〵待たれませぬ。今夜は是非とも勘定してもらはにやなりませぬて。

ト此うち庄七、又ノ丞の引掛けてゐる布子、側にある掻巻蒲團に目を附け

庄七　モシ、ちつとお免しなされませ。

ト提灯を持つて、あちこちと見て

これだ〳〵、これに違ひない。見世の符牒もまだ其まゝ。モシ、お前さん、この品は、どこから持つてお出でなされましたえ。

又之　どれから持つて參つたやら、身共も存ぜぬが、親の小平が屆けたと申して、あの次郎吉と申すが持參いたしたて。

庄七　へイ、左樣ならあの半端もゆかぬ次郎吉どのが、この品々を……モシ、お前さん、それは積もりにも知れた事。イヤ、これは捨ておいて、この外に、ソウキセイと申す藥包みが、參つては居りませぬかな。お返しなされて下さりませ。

又之　待て〳〵町人、何か合點のゆかぬ物の云ひやう。そのソウキセイを身共に返せとは

庄七　イヽエサ、モシ、わたしが和らで物を申すうちお返しなさるが、あなたのお爲でござりませうぞえ。モシ、お前は見かけによらぬ、盜みをさつしやりますな。

又之　ナニ、ドヾどう致したと。

　　　トきつとなる。

庄七　ハテ、腹をお立てなされまするな。コレ、御覽じませ、お前の引掛けてござる布子、爰にある搔卷蒲團、見世の符牒が附いてゐますぞえ。わしどもの庫へ泥坊が入つて、外の物には手も附けず、この三品と、只今申したソウキセイ、右の四品が紛失しました。三品は早速爰で見當りましたがモシ、とてもの事に藥も爰へ、出さつしやるがようござります。

又之　コリヤヤイ町人、爰に身共が古朋輩も聞いて居らるゝに、覺えない無實の難題、殊に大それた盗人なぞとは、おのれ、今一言云うてお見やれ、免さぬぞ。

　　　ト脇差引寄せてキットなる。お熊思ひ入れあつて

くま　モシ〳〵、其やうに嚇しかけては、町人といふものは、ビク〳〵して云ふ事も云ひませぬわな。モシ、あなたも聞いておゐでなされまするが、質屋が疑ぐるも無理ではござりませぬぞえ。その病氣には、無くてはならぬといふ、ソウキセイとやら、帶星とやらいふ藥を、お前が盗んだであらうといふ證據は、ソレ、引掛けてゐさつしやるその布子、搔卷の出所を、詳しく云はつしやりませ。わしらも世間へは、どうか盗人を飼つておくやうに思はれては立ちませぬわな。サア、その

品々は、どこから取つてござつた。それとも誰れぞ持つて來ましたか。それを有體に云はつしやりませ。イケ太々しい。

又之　ハテ、合點のゆかぬ。すりや物の間違ひか……コリヤ、この品々は、只今も申した通り、この家の小悴次郎吉が

くま　ヘエイ、年端もゆかぬあの餓鬼が、……そんならその品々を。お前もマア積もりにも、ハヽヽハヽ。

ト奥へ向ひ

コレ、小僧や〳〵、爺イどの、餓鬼を早く連れて、ござらつしやいな〳〵。

ト大聲に呼び立てる。孫兵衞、次郎吉を連れて出て來り

孫兵　婆、何を其やうに、けたゝましく呼ぶぞいやい。

くま　呼ばないでどうするものか。殊によると爰の內の者は、殘らず盗人になる詮索でござるわいの。

孫兵　何と云ふぞいやい。そりやマアどうした譯で

長藏　コレ、孫兵衞どの、わしも先刻から來て待つてゐるが、米の代はどうさつしやる。

くま　エヽ、何をぐち〳〵。その餓鬼を此方へ寄越さつしやい。

ト次郎吉が無理に引つたくり

次郎 コレ、小僧よ、あの搔卷や着物は、われが持つて來たのか。サア、有體に云へよ。

次郎 アイ、あれはわしが

ト云はうとするを、お熊「云ふな」といふ思ひ入れあつて、睨みながら抓りあげる。

イヽエ、わしぢやない、知らぬわいな〳〵。

又之 コレ、知らぬでは濟まぬ。サ、有やうに申せとといふに。サヽ、どうぢや〳〵。

ト お熊、また睨めるゆゑ

次郎 知らぬわいな〳〵。

又之 エヽ、それではこの場が。エヽ、鈍な奴ではあるわいやい。

ト又之丞氣を揉む。お熊、したり顏にて

くま なんと、どうでござりまする。子供は正直、知らぬと云ひますぞえ。そんなら誰れが持つて來ませう。この盗人は

孫兵 おれぢや、この親仁ぢや。

皆々 ヤ。

孫兵　その搔卷と蒲團を盗んで來たは、南無阿彌陀佛々々々々々々、コレこの親仁ぢやつ南無阿彌陀佛南無阿彌陀佛。

ト涙ながらにこなし。

くま　エヽ、この親仁どのは耄碌して、埒はござらぬわいなう。

庄七　この盗人は、見す〳〵知れた浪人どの。それとも盗人でないならば、ソレ、そこに金もあるではないか。藥と共に四品、締めて元利六兩足らず、勘定すれば盗人の

又之　惡名拔けるとお云やつても、金輪奈落この金は

庄七　そんならこなたは矢ッ張り盗人。但しその金爰へ出すか。

長藏　米の代は拂はないか。

又之　サアそれは

孫兵　サアそれは

皆々　サア〳〵〳〵

長藏　エヽ、小ぢれつてえ、ヘギクタ親仁め。

庄七　金を出さねば

二人　いつその事に

ト長藏は孫兵衞、庄七は又之丞を引ッ捕へ

これでもいゝかく。

ト打ち据ゑる。最前より傳藏、手を組んで樣子を聞いてゐたりしが、この時ズッと立つて、長藏庄七を投げのける。兩人、這々に起上がり

長藏　アイタヽヽヽ。この侍ひは、なんで此やうに

庄七　コレ、盗人の肩を持つのか。

ト立ちかゝるを、傳藏、懷中より金包みを出し、兩人へ投げ附ける。

二人　ヤア、こりやア何だ。

傳藏　それで其方達、云ひ分はあるまいがな。

トこれにて兩人、金を見て

庄七　ヤア、これは小判でキッチリ六兩。

長藏　爰へも一分。そんならこれは

傳藏　おのれら商人の身を以て、病人と申し、老人を相手に、手籠めに致す無法者。只置く奴ではなけ

れども、その分に免し遣はす。キリ〳〵この家を歸りおらう。

ト威丈高に云ふ。

長藏　ハイ〳〵、歸ります〳〵。コレ、庄七どの、長居したなら又どのやうな、ひどい目にあはうも知れぬ。

庄七　痛い目するは辛抱するが、罰が當つて立ち切れない。

くま　コレ、こなさん達歸るなら、その提灯のおかりをかすり、わしも隣の念佛講へ。

孫兵　何をおのれが後生三昧。八萬地獄へ眞逆樣に

くま　アイサ、それも承知サ。鬼のやうな亭主が欲しいよ。

ト三人門口へ出かゝる。孫兵衞、次郎吉を抱き上げ

孫兵　コレ、坊よ、わりやほんまに父に逢つたか。

次郎　アイ。

孫兵　南無阿彌陀佛々々々々々々々。

くま　サア、行かないのかな。

ト寺鐘の合ひ方になり、孫兵衞、次郎吉を連れて奥へ入る。三人は行かうとして、囁き合ひ、お熊と

庄七は下座へ、長藏は提灯を消して向うへ入る。傳藏、こなしあつて、物も云はずにツト立つて行きかける。又之丞、袂を押へ

又之　アイヤ、お待ち下され傳藏どの、物も云はずに立出でらるゝは、すりや拙者めを誠の盜賊と、思し召しての事でござるか。

傳藏　イヤ、其許が盜賊でない事は、身共がよつく存じ居る。ハテ、行歩叶はぬ身を以て、左樣な業かなり申さうか。

又之　して又何ゆゑ拙者めに、一言のお詞もなく、お歸りあるは

傳藏　たとへその身によこしまなくとも、四十餘人の義士のうち、左樣の惡名受けられては、世の人口は防がれず、浪人の貧苦に迫り、盜賊夜盜なしたりと、噂あつては亡君への不忠。計らず汚名な受けられしは、その身の不運と諦め召されい。

又之　すりや拙者めは敵討の、一列に加はる事は

傳藏　相成りますまい。亡君伯州公の御家來多き中にも、この度の一儀は、由良之助どのゝ智略を以て、忠心無二の魂ひを見拔き、まつたその身の行狀まで、一分一點曇りなき、義士を選んで四十七人、その連判の人數のうち、左樣の惡名うけたる者は、中々以て大星どの、よも承引はござるまい。

又之　サ、御尤もなる赤垣氏の、仰せではござれども、そこを只管お執成しな以て、是非ともお供いたすやう

傳藏　そりや一方ならぬ貴殿の事、申しては見ませうが、十が九ツ、一列には叶ひますまい。その上、いつ全快も計られぬ貴殿の御病氣。お氣にはかけられな、亡君のお心にも叶はぬといふ。ハテサテ、氣の毒千萬な。

又之　すりや、どうあつても拙者めは

傳藏　小汐田氏、御緣もあらば又重ねて

ト立ちかゝるのを

又之　モシ

ト留めるを振り切り

傳藏　隨分堅固で、保養めされい。

トこなし。時の鐘よろしく、傳藏向うへ入る。時の鐘、あと合ひ方、又之丞思ひ入れあつて

又之　チエヽ、思へばく、よくく武運に盡きたる某。最早敵討の日限も近附く折に、かゝる難病。又その上に計らずも、盜人なりと惡名受け、四十餘人の一列に外れ、おめくと生き長らへ、ど

の面下げて世の人に、武士の生き面會はされう。もうこの上は是非に及ばぬ、今日只今腹かッさばき、未來に於て主君へ云ひ譯。オヽ、さうぢや。

トいざり寄つて脇差を取る。この時分より奥にて、孫兵衞の打つ一つ鉦聞えることヽ又之丞、脇差を抜き、袖にて拭ひ、白刃をキッと見る、トこれより物すごき誂らへの合ひ方、寢鳥、薄ドロ〳〵をかむせ、小平の亡靈、ありし姿のまゝにて、藥包みを持ち、門の外へボッと現はれる。又之丞、思ひ入れあつて

小汐田又之丞武運に盡き、敵一人討ちとらず、四十餘人に先立つて、生害いたす無念の心中。亡君尊靈、あはれみ給へ。

ト腹へ突き立てようとする。急に腕すくみ、腹切れぬこなし。又之丞、訝かり、又こなしあつて、又突立てようとする。この時小平の亡靈、ふうわりと立つたまゝに門口を通り抜け、又之丞の側へ坐る又之丞、氣も附かず

ハテ心得ぬ。手先しびれて、腹切る事の叶はぬは、こりやどうぢや。

ト云ひながら、フト小平を見附け

ムウ、それに居るは、小平ぢやないか。

ト寢鳥、薄ドロ〳〵、凄き鳴り物、一つ鉦。又之丞思ひ入れ。

ヤヽ、なんと申す。いま切腹なしては犬死。手に入る良藥にて、難病全快なした上、敵討の一列に加はれと申すか……こりやヤイ、それをおのれに習はうか。身共はおのれゆゑに、盗賊の惡名受け、一大事の人數をも省かれたワ。エヽ、こゝな不忠者めが。

ト小平の襟髮を捕へやうとする。このとき亡靈の衣裳ぬげて、白裝束、亂れ髮、跳らへもの凄き幽靈の姿になる。ドロ〳〵烈しく

何と申す。身共を大切に思ふゆゑ、心に思はぬ盗みを致し、良藥を取り得たれば、これを服して全快なせとか。エヽ、流石は下郎の淺ましい。おのれがその藥品を盗みしゆゑ、この又之丞はナ身に覺えなき盗賊の惡名、敵討の供も叶はず、さすれば全快なしたとて、何の益なきこの體。留め立て致すな。南無阿彌陀佛。

ト又腹へ突き立てようとする。ドロ〳〵烈しく、小平の亡靈、これを留めることなし……又之丞いらつて

エヽ、聞き譯なくまだ留めるか。下郎ながらもこれまでの、忠義に免じ捨ておけば、某に恥面かゝせしその上に、猶も武士道捨てさするか。もうこの上はおのれをも、手討に致した上、邪魔

を拂うて潔く切腹いたす。覺悟なせ。

ト刀を取り直して小平をいざりながらに追ひ廻す。一つ鉦、責め念佛の鉦……小平の亡靈、眞中へスックと立ち

小平　あなたの願ひを叶へんと、苦しい悲しい恐ろしい、云ふに云はれぬ艱難にて、やう〳〵手に入るこの藥、それにて全快なした上、どうぞ首尾よく本望の、門出あるやう、旦那樣

又之　何をおのれが。覺悟なせ。

ト摺り寄つて烈しく切り附ける見得。大ドロ〳〵になり、小平の亡靈、柱の中へ消える途端、又之丞スッパリと二つに卒塔婆を切る仕掛け。ドロ〳〵やむ。又之丞ギヨッとして

ヤヽ、小平を手討と思ひしに、姿は消えてこの卒塔婆。ムウ、「俗名小佛小平。」ヤヽ、こりやどうぢや。

ト呆れし思ひ入れ。このとき向うよりお花、白木の位牌をかゝへ、一散に走つて出て、門口より駈け込み

はな　舅御樣、モシ、孫兵衞樣、こりやマアどうせう、どうせうぞいなア〳〵。

トうろ〳〵取り亂して泣き伏す。孫兵衞、鉦と撞木を持ち、よろめきながら出て來り

孫兵　オヽ、悲しからう、尤もぢや／＼。おりや間がな隙がな佛壇の前で、この鉦撞木を杖柱、いつまで泣き死に死にたいにも、命めが自由にならず。よく／＼業のつくばつた親仁が身の上。嫁女、推量してくれ／＼。

はな　お前が最前歸りには、お寺へ寄つてくるやうにと、云はしやんしたゆゑ何心なう、法乘院様へ行つて、親仁が願ひました品をと云うたれば、方丈様がお手づから、下さんした白木の位牌。不思議な事と手に取り見ればコレ、俗名小平、施主は親御のお前の名、怕りせまいか、わたしやもうツ、その場で直ぐに、死にたうござりましたわいなア。

ト大泣きに泣く。又之丞、扨はトこなしあつて

又之　すりや悴小平が、この世を去りし魂魄の、身共が難病救はんと、寒氣を防ぐ衣類といひ、良藥までも業通にて、取り得て我れに與へしのみか、切腹までも止めしは、死んでも盡きぬ忠義の心底、忘れはおかぬ忝い。さうとは知らず、我れに惡名負はせし小平、憎さも憎しと追ひ詰めて、手討になせしと思ひしに、姿は幻し消え失せて、斜に切つたはこの卒塔婆。

はな　そんならこちの人、小平どのは今までの、在りし姿を現はして、爰に居やしやんしたか、夫のわたしや次郎吉には、なぜに逢うては下さんせぬ。わしや逢ひたい、なつかしいわいなア。

ト泣き伏す。

孫兵　オヽ、尤もぢやく。尤もぢやがコレ嫁女、位牌になつたを見た其方より、現在悴が浮き死骸、隠亡堀で見附けた時の悲しさは、コレ、どのやうにあらうと思やる。その上何者の仕業やら、むごたらしい、目も當てられぬ殺しやう、涙のありたけ泣いた上、法乘院様へお願ひ申し、葬むつたのは今日の夕方。嫁や孫めに知らさぬのは、少つとも遅う明かさう爲。この親仁が心一つに、收めてゐた胸のうち。嫁女、若旦那様も、御推量なされて下さりませく。

ト愁ひのこなし。又之丞思ひ入れあつて

又之　聞けば聞く程、不便なは小平が成行き。さるにても、元より正直正路な生れ、非道を働く者でない。殺せし奴は何者か。

トきつと思ひ入れ。この時また物凄き合ひ方、薄ドロになり、陰火燃え、奥より次郎吉、駈け出して來り、スツクと立ち

次郎　わしを殺したは民谷伊右衛門。

はな　ヤヽ、すりやこちの人が稚子の

孫兵　體をかりて物云ふのか。

又之　その民谷伊右衛門こそ、不義士の隨一、近藤が悴にて、親にもまさる邪しまな者。

はな　そんなら敵は民谷伊右衛門。

トきつとなる。

次郎　イヤ〳〵、惡人なれども一旦は、主人と頼みし民谷どの、敵と思ふは道でない。この上は若旦那様、少しも早うこの藥を

又之　心づくしのこの良藥、いかにも服せしその上にて、この一埒を大星どのへ、演舌なさば、わが惡名も晴れし上、大事の供に立たんは必定。氣遣ひいたすな、忠義の小平、今ぞ良藥服用なさん。

ト孫兵衛とつかは水を汲んでくる。又之丞、それを服む。

次郎　嬉しやそれにて未來の本望。

トどろ〳〵烈しく、又之丞、放心して倒れる。次郎吉も倒れる。鳴り物打あげ、陰火消える。よき時分、庄七、表に窺ひゐて、この時内へ駈け入り

庄七　さてこそ鹽冶の浪人者。師直樣へ

ト又之丞へかゝる。又之丞、スツクと立上がり、庄七を捻ぢ上げる。皆々驚き

孫兵　ヤ、あなたはお足が

又之　誠に……さては難病、全快なしたか。

はな　草葉の蔭にてこちの人

孫兵　さぞ喜んで

又之　エヽ、忝い。

庄七　何を。

トかゝるを、突き廻してポント切る。トお熊窺ひ出て

くまヤ、人殺し。

ト聲立てるのを、孫兵衛引ッ捕へ

孫兵　エヽ、爰な魔王めが。

ト押へつける。又之丞、血を拭ふ。お花は右に位牌、左に子を抱いて泣き落す。この見得よろしく、

時の鐘の送りにて、舞臺廻る。

本舞臺、元の三角屋敷に戻る。眞中に屏風立て廻してあり、矢張り誂らへの合ひ方にて道具とまる。

ト屏風の中よりお袖、書置を片手に、行燈を下げて出で來り、行燈をそこへ直し、思ひ入れあつて

そで　水の流れと人の身は、移り變ると世の譬へ、思へば因果なわたしの身の上。實の父さん元宮三太夫樣、まだその上に一人の兄さんありと、聞いたばかりでお顏は知らず、義理の父さん姉さんは非業にお果てなさんした、その敵を討ちたいばかり、女子の操を破りしからは、所詮この身は

ト思ひ入れあつて、守り袋より臍緒書を出す。凄味の合ひ方。門の中より直助、出刃を手拭ひにくるんで持ち、拔き足にて内を窺つてゐること。お袖、こなしあつて

この臍の緒の書き物は、血を分けし親の形見、せめてはこれを兄さんに、わしが死んだその跡で屆けてもらうて……これがこの世の

トこなしあつて、行燈の灯を吹き消す。この途端、捨て鐘強く、忍び三重になり。直助、花道へゆき、出刃を口に咬へ、尻をからげ、キッと見得。このとき上手の生垣を押分け、與茂七、窺ひ出る。お袖は屛風の中へ忍ぶ。兩人とも窺ひながら内へ入り、屛風ごしに與茂七は一刀、直助は出刃にて、ガッと貫く。屛風の中にお袖の「ワッ」とうめく聲に、兩人仕濟ましたりと思ひ入れあつて屛風を取り除けると、お袖、書置と臍の緒を持ち、手を負つて苦痛の體。兩人、お袖へ手をかけて貫かうとする途端、チョント知らせにつき、月出る。三人これにて顏見合せ、愕りして

直助　ヤ、正しく男と思ひしに

與茂 屛風の內なは女房お袖

兩人 ヤヽ、こりやどうだ。

ト思ひ入れ。これより本調子の合ひ方になり、お袖、苦しきこなしあつて

そで 同じ合圖に二人の夫、手引きなしたは疾くよりも、わたしが命を捨てる覺悟。只恥かしいは與茂七どの、わたしが操を破りし元は、義理ある父さん姉さんの、敵が討ちたさ一つには、お前が長らへゐやしやんすとは、神ならぬ身の夢にも知らず、矢ッ張りいつぞや淺草の、裏田圃にて父さんと、同じその夜に人手にかゝり、死なしやんしたと思うたゆゑ、お前の恨みも晴らさう爲、直助どのを力と頼み、操を破つた面目なさ、お前に顏が合はされうか。お手にかゝつて死ぬるのが、せめての云ひ譯。また直助どのには約束の、養父の敵姉さんの、仇を討つたるその後は、この書置に添へてある、わしが一人の兄さんを、尋ねてこの譯、云うて聞かせて下さんせ。返すがへすも與茂七どの、この世の緣は薄くとも、未來は同じ蓮の上、夫婦になつて下さりませ、賴みますわいなア。

トこなし。與茂七、思ひ入れあつて

與茂 出かした女房。其方が在家を探せしも、いつぞや計らず淺草にて、この與茂七が所持なす密書、手に取り見たる女ゆゑ、不便ながらも品により、命は身共が貰はんと、思ひ居りしにかゝる成行

き。さはさりながら合點ゆかぬは、何を證據に某が、裏田圃にて人手にかゝり、相果てしと

そで 思ひ詰めしは死骸の顏、やぶれ損じてそれぞとは、知れねど着類は見覺えある、お前の定紋、それゆゑに。

與茂 ヤヽ、それにて思ひ合はすれば、奥田將監が悴庄三郎と、仔細あつて互ひに衣類を脱ぎ替へしが、さては身共に遺恨ある者、この與茂七ととり違へ、騙し討ちに討つたるか。

直助 ヤヽ、すりや中田圃にて殺したは、奥田の悴、庄三郎どのであつたか。ホヽホイ。

ト惘りする。

與茂 さてはおのれが庄三郎を

ト詰め寄るを

そで モシ。

ト與茂七を留め

この書置を兄さんに、逢うたらどうぞ

ト差出す。直助取つて、臍の緒の書き物を見て

直助 元宮三太夫娘袖。



トヤ、、すりやお袖が親は元宮の

トヽ又大悄り

そでアイ。

與茂ヤヽ、女が首を

ト思ひ入れ。直助、手早く與茂七の一腰を取つて、お袖の首を打落し、一腰を投げ出して撞と坐る。

直助打たねばならぬ云ひ譯は

ト出刃を腹へ突ッ込み、苦しき思ひ入れ。

與茂所詮助けておかれぬ權兵衞。さはさりながら何ゆゑに

直助人の皮着た畜生が、往生際の懺悔ばなし、聞いて下され、與茂七どの。

與茂ヤヽ、なんと。

トこれより竹笛入りの合ひ方になり、直助こなしあつて

直助元この直助は奥田の家來、身狀が惡さに主人の勘當、因果の起りはこのお袖、附けつ廻しつ口說いても、得心せぬは夫があるゆゑ、與茂七殺したその上で、この身の願ひを叶へんと、裏田圃の暗まぎれ、騙し討ちに殺したは、古主の御子息庄三どのと、聞いて知つたは、たつた今。親兄

夫の仇敵、討つてやらうと僞つて、女房にしたは情ない、この直助が血を分けた、妹と知つたはこの書き物、槍一筋の親は侍ひ、その子は畜生主殺し、末世に殘る直助權兵衞。

與茂　すりや、それゆゑにこの切腹、まだしも惡念發起は奇特。

直助　地獄へ急ぐ置き土產、いつぞや手に入る廻文狀。

ト廻文狀を出す。與茂七取つて

與茂　たしかに落手。未來成佛。

トこのとき表に窺ひゐたる長藏、ツカ〳〵と内へ入り

長藏　さては鹽冶の

ト廻文狀へ手をかけるを、與茂七、手早く白刃を取つて長藏を切り下げ

與茂　飛んで火に入る

ト刀を拔く。これにて長藏、見事に中返りする。與茂七見事にこれを蹴返す。柝のかしら。

直助　南無阿彌陀佛。

ト引廻す。與茂七、廻文狀を口に咬へ、後手に長藏に止めを刺す。この見得よろしく、

幕

大詰

夢の場
蛇山庵室の場

役名——民谷伊右衛門。伊右衛門母、お熊。近藤源四郎。秋山長兵衛。小林平内。齒磨賣り半六。植木屋、勘太。魚屋、三吉。船頭、浪藏。關口官藏。下部、伴助。お岩の亡靈。佐藤與茂七。

大詰の口上觸れ濟むと、ドロ〳〵になり、幕の前より銀紙細工にて「心」といふ字を上へ引いて取る。ドロ〳〵烈しく、幕明く。

本舞臺、三間の間、正面、緣側つきの亭屋體、伊豫簾かけあり、左右の柱に七夕の短册竹をたて、屋根より軒づらへ唐茄子這ひまとひあり、入り口、栗丸太の枝折り門、爰へも唐茄子まとひある仕掛け、あたりは萩の盛り、百姓家の體。ドロ〳〵打上げる。

ト唄淨瑠璃、トヒヨになり、鷹一羽、外れて來り、屋體の中へ入る。唄一くさり切れる。誂らへの合ひ方、向うより伊右衛門、袴、着流し、大小、庭下駄をはき、朝顏を描きし綺麗なる切子燈籠を持ち、あとより長兵衛、綺麗なる奴の拵へにて、首玉の附きし犬を曳いて出る。この途端に正面の簾卷きあげる。内にお岩、模樣やつし、夏なりの振り袖、美しき在所娘の拵へにて、糸車にて糸を繰りゐる。よき所に綺麗なる行燈を灯しある。その上に件の鷹とまりゐる體。空には月を引出す。舞臺一面、

螢むらがる。

伊右 天の川、淺瀬白浪ふくる夜を

いは うらみて渡る鵲の橋……鵲ならぬこの鷹の、外れてや爰へ羽を休め

伊右 祕藏の逸物いづれにと、尋ね來りしあの庵、女竹に結ぶ短册は

長兵 ほんに今宵は六月の、七夕祭り星合の、その日に外れた小鷹は、天の川へ飛びはせまいか。

伊右 何を阿房な……併し外れたる鷹は、慥かにこのあたりぢや、サヽ、尋ねてくれ〱。

ト思ひ入れ、また唄淨瑠璃になり、兩人、門口へ來る。長兵衞、内を覗いて恟りし

長兵 モシ、旦那〱、御覽じませ。あのやうな美しい女が、糸をとつて居ります。

伊右 ナニ、美しい女が糸を曳いてゐるとか。

長兵 左樣でござります。

伊右 ドリヤ〱……成る程、鄙の住居には珍らしい女。其方は案内して、鷹の事を問うて見ぬか。

長兵 左樣いたしませう。

ト内へ入り

コレ〱、姐え〱、おらが旦那が合さしつた鷹が外れて、行くへが知れぬが、もし爰の内へ舞

ひ込みはせなんだか、どうだ〳〵。

いは　ハイ、その鷹は、コレ御覽じませ、わたしが側へ來て、此やうにとまつて居りますわいなア。

長兵　イヤア、こいつは妙々。そんなら旦那を呼び申して來よう……モシ〳〵旦那、鷹が居ります居ります。

伊右　オヽ、左樣か〳〵。然らば貰ひに參らうか、其方も參れ。

ト門口へ來り

女中、免しやれ。

ト内へ入り、あたりをちよつと見て

さて〳〵風雅な住居ぢやな。イヤ、手前ことは、此あたりに住居いたす者ぢやが、今日小鳥狩りに罷り出で、手飼ひの鷹が外れたぢや。聞けばこの家へ參つたとの事、申し受けて歸りたいが、渡してはくれまいか。

いは　これはマア、改まりましたお賴み。あなた樣の手飼ひのお鷹とあるなれば、御遠慮なう御持參遊ばしませいな。

伊右　それは忝い。然らば持ち參るでござらうが、アヽ、夜に入つて歩行いたすは道の程。コレ、さ

ぞ暗うて難儀な事であらうな。

長兵　モシ〳〵旦那、ナニ暗い事がござりませう。今晩は七夕の祭り。アレ〳〵、お月樣がお上りなされて、晝のやうでござります。殊にあなたはお歸りの御用意とあつて、お手細工のその切子燈籠それを灯して參れば、お提灯より明るうござります。サヽ、お歸りなされ〳〵。

ト云ひながら、切子燈籠を軒へかけ、心なしにせき立てる。

伊右　これはしたり、さて、おのれ氣のきかぬ奴ぢや。あれ程表は暗いではないか。暗いによつて歸らぬと申すに、おのればかり月夜ぢやと申すが、斯うしやれ、この鷹を据ゑて、その犬を曳いて、おのればかり、先へ歸りをれ〳〵。たわけ面め。

トこれにて長兵衞、ムツとしたる思ひ入れにて

長兵　コレ〳〵、あんまりそんな大風な事を云ふなえ。今でこそこなたの折助になつて、旦那〳〵と云ふが、以前はおれも朋輩の秋山長兵衞。犬も朋輩、鷹も朋輩。曳いて歸らば、サア貴樣が曳け。イヤ、てめえ曳いてゆけ〳〵。

ト犬の綱を伊右衞門に投げつける。

伊右　イヤ、こいつが〳〵以前は以前、只今は予が折助ではないか。おのれ曳いて、歸りをれ〳〵。

長兵 ナニ予が折助だ。コレ、あんまり大風を云ふな。今でこそ出世して大祿とり。以前は民谷伊右衞門とて、われもヒツテンテレツクでナ、嫌がられた惡仲間。女房のお岩も駈落ちして行くへなし

伊右 イヤおのれ歸りをれ。その一件でおいらも此ざま。それといふも、われがした事だワ。畜生を曳いて歸りやアがれ。

ト兩方より犬を突きやり

長兵 オヽしき〳〵。

トけしかける。犬は吠える。お岩、この中へ入つて

いは これはしたり、マア〳〵お待ちなされませ。其やうにばかり仰しやらいでもよいぢやござりませぬか。承りますれば。主家來とはいふものゝ、以前は御朋輩と仰しやるからは、お二人樣のその仲を、わたしがお貰ひ申しませう。左樣なされて下さりませいな。

伊右 主の其方が左樣に申せば、身共は隨分この者と、仲直りも致し遣はさうが

長兵 相手の民谷が承知なら、此方にも云ひ分は無いが、コレお娘、そもじ、仲人に入るか。

いは アイ、わたしが仲を結ぶわいなア。

長兵 そいつは面白い……イヤ、これ〳〵、爰に用意して來た酒がある。爰で始めようか。

ト腰に附けたる瓢箪を取出し

姐え、茶碗を貸さつし。

いは　アイ〳〵。

ト湯呑を出し

何はなくとも、コレ〳〵爰に、今日の節句を祝うたさしさば、これなと當座のお肴に。

ト鉢の儘出す。

伊右　イヤ、さしさばとは面白い。其方とわしと其さしさばのやうに、二人斯様に引ッ附いてゐたいわいの。

トしなだれる。

いは　これはしたり、わたしがやうな在所女に、なんのあなたが

伊右　これは痛み入つたお詞。只今にては身共は獨身。その證人は、それ〳〵、その折助ぢやて。

長兵　さうサ〳〵。女房もあつたが、どうした事やら行くへなし。マア、何にしろ、亭主役に姐御、始めさつし。

いは　そんならわたしが、お始め申して。

ト長兵衛酌して、飲む思ひ入れあつて

このお杯は、どなたへお上げ申しませう。

伊右　差づめ我れらが戴きませうか。

長兵　さうサ〳〵、この旦那へ、さしさば〳〵。

いは　憚りながら

伊右　戴きませう。

ト兩人酒を飲み、いやらしく寄り添ふ。

長兵　コレ〳〵、旦那の伊右衛門、朋輩の折助にも、飲ませてくれぬか〳〵。

伊右　成る程、おのれへ献すワ〳〵。

長兵　イヤ有り難いな。

ト瓢簞を取つて無暗に飲む。

伊右　コレ〳〵折助、ちと廻さぬか〳〵。

長兵　ナニ廻さぬかとは、おれが廻せば善次舞だ。今の流行りは神事舞だな。

いは　その舞、舞うて見せなさんせ。

長兵　どうして〳〵、あれは舞へまい。
伊右　そこを我れらが頼みぢやほどに
長兵　イヤ〳〵、御免だ〳〵。
伊右　コレ〳〵、手傳うてくりやれ。
いは　アイ〳〵。舞はんせいなア〳〵。
長兵　イヤこれは迷惑。

ト鳴り物になり、伊右衞門お岩二人して、長兵衞をつかまへて、目を押へて、くる〳〵廻して突きはなす。長兵衞、グル〳〵廻りながら下座へ入る。これを見て、犬も吠えながら一緒に附いて入る。あと合ひ方になり、兩人殘り、顔見合せて

伊右　ハテ、たわけた奴ではないか。……イヤ、それはさうと其方は、この邊の百姓の娘などといふ事か。左樣か〳〵。
いは　アイ、わたしや此あたりの民家に育ちし、賤の女子にござりまする。
伊右　ア丶、其方は民家の娘か。民家の文字は變れども、いはゞ我れらが家名にて、民家は民谷。
いは　すりや、あなたの御家名は、民谷樣と申しまするか。

伊右　いかにも民谷……して、其方の名は何といふぞ。
いは　アイ、わたしがその名は
ト思ひ入れあつて、あたりを見廻す。薄く風の音、竹に結びし七夕の短册、ヒラ〳〵と落ちて、お岩の側へ吹きくるを、手早く取つて見て、思ひ入れ。
即ちこれが私しの
ト差出す。伊右衛門取つて、その歌を見て
伊右　こりや七夕へ捧げたる、百人一首の歌……瀬をはやみ、岩にせかるゝ瀧川の
いは　われても末に逢はんとぞ思ふ」……われても末に
ト伊右衛門の顏をヂツと見込み
逢うてたまはれ、民谷樣。
伊右　ヤ、さういふ其方は。
いは　岩にせかるゝその岩が、思ふ男は、お前ならでは。
ト膝にもたれ、思ひ入れ。
伊右　岩によう似た賤の女の、振りの姿は以前に變らぬ、妻のお岩に

いは　岩にせかれしわたしが戀人。今日からわたしを
伊右　色にするのぢや。コレ。
ト引寄せる。
いは　また移り氣の
伊右　移り易きは人心。
ト帶の端を引き、刀を提げて、ツカ〳〵と屋體の内へ引く。
いは　誰れも見えねど、アレ〳〵鷹が
伊右　下世話で云はゞ夜鷹とも
いは　そんならわたしや夜鷹かえ。
伊右　灯があつては
ト丹檠の灯を消す。
いは　アモシ、蚊遣りも無いに。
伊右　ほんに藪蚊が
ト團扇を持つてあふると、殘らず螢ゆゑ

ヤ、螢の蟲が

いは　身で身を焦す螢火も、露よりもろき果敢ない朝顏、日の目にあはゞ忽ちに

　　ト燈籠に目をつける。

伊右　悄るゝ花も

いは　露の命も

伊右　咲く朝顏も

いは　吹く秋風も

伊右　ヤ。

いは　オヽさむ。

　　ト伊右衛門にもたれかゝる。唄になり、伊豫簾下りる。合ひ方になり、奥より長兵衛、件の犬を曳いて出て來て

長兵　アヽ、醉つたぞ〳〵。酒を飮んで善次舞をしたから、誠に目が廻つて、アレ〳〵、まだ此やうに、そこら中がグル〳〵〳〵と廻るワ……併し、あの民谷めは、爰の娘をしめたかしらぬ。エヽ、畜生め。

ト犬にふざけると、犬は怒つて長兵衞の頸へくひつき、踏みちらして逃げ込む。

オヽ、痛い〳〵。あの畜生めは、長い頭を既に嚙らうとしをつた。コレ、民谷氏々々々……ドレ、ちつと樣子を窺つてやらう。

ト簾の隙間から内を覗き、悔りしたる思ひ入れ。

ヤヽヽヽ、ありやアなんだ〳〵。今の娘のあの顏は、ありやア人間ぢやアあるまい〳〵。サアサア、こいつは爰にはゐられぬ。この燈籠でも提げて、早く逃げてゆかうか。

ト軒の切子燈籠へ手をかける途端、ドロ〳〵になり、燈籠へお岩の怖き顏現はれる。長兵衞「ワツ」と云つて腰をぬかし

これはどうだ〳〵、とんだ物が……コレ、民谷どの〳〵。

ト呼びあるき、思はず軒を見ると、這ひまつりし唐茄子、殘らずお岩の顏になる。

南無阿彌陀佛々々々々々々……爰にはゐられぬ〳〵。

ト始終ドロ〳〵にて、こけつまろびつ向うへ逃げて入る。時の鐘、凄き合ひ方になり、靜かに伊豫簾上がる。伊右衞門は鷹を据ゑ、刀を提げて立ち身。お岩その裾を扣へてゐて

いは こりやモウお前、お歸りなさんすかえ。

伊右　オヽ、夜の更けぬ間に歸宅いたさう。左樣いたして、又の御見を

いは　それ見やしやんせ。お前さんは可愛いお方、お岩さんといふお内儀さんがあるゆゑに、いはゞわたしをお弄りなされて

伊右　イヤ〳〵、なんの其方を弄らうぞ。併しお岩と申したる、妻もあつたが至つて惡女、殊に心もかたましい、女ゆゑに離別いたして

いは　すりや先妻のお岩さん、それほどまでに愛想がつきて、未來永劫、見捨てる心か、伊右衞門樣。

ト伊右衞門をキッと見詰める。伊右衞門ゾッとしたる思ひ入れ。

伊右　さういふ其方の面ざしが、どうやらお岩に

いは　似たと思うてござんすか。但し面影冴えわたる、あの月影のうつるが如く、月は一つ、影は二つも三つ汐の、岩にせかるゝあの世の苦患を

伊右　ヤヽ、なんと。

いは　エヽ、恨めしい、伊右衞門どの。

伊右　ヤ。

ト飛びのくはずみに、持つたる鷹は鼠と化して、伊右衞門目がけて飛びかゝる。月に雲かゝり薄ドロ

ドロ〳〵、黒幕落ちて、舞臺一面に闇の景色。この途端、お岩引拔いて、物凄き幽靈の姿に變る。大ドロドロ。伊右衛門キッと構へて

伊右　さてこそお岩が執念の、鼠となつて妨げなすか。

いは　共に奈落へ誘引せん。來れや民谷。

伊右　愚かや、立去れ。

ト拔いて切つてかゝる。大ドロ〳〵、燒酎火數多あらはれ、伊右衛門を妨げる。伊右衛門、心火を切り拂ひ〳〵、精魂疲れて苦しむ思ひ入れ。よきキッカケに絲車へ心火うつり、車は忽ち火焔となつて、片輪車に火の附いたまゝクル〳〵と廻る。お岩の亡靈、伊右衛門を連理引きに引きつけ、キッとなり、よろしく見得。ドロ〳〵にて兩人の姿をせりおろす。この時、幕明きの心の文字、下へ引下ろす　大ドロ〳〵にて、百萬遍の鉦の音、念佛の聲聞える。黒幕切つておとす。黒幕のうち、道具變る。日覆より雪降つてゐる。

本舞臺、庵室の體。上の方、障子屋體、眞中に紙帳吊つて、内に伊右衛門、病氣にて寢てゐる體。丸太の門口。外には一面雪つもりし體にて、白布を敷き、よき所に流れ灌頂、手桶添へあり、柳に


尾上菊五郎
海老蔵

雪つもりし景色。爰に淨念、黑衣、坊主にて鉦を打ち、植木屋の勘太、齒磨屋の半六、魚屋の三吉、船頭の浪藏、珠數に取りつき、百萬遍の體。源四郎、白半天、股引、世話六部にて、笈を下ろし、足を洗うてゐる。すべて藪の內、蛇山の道具、雪降りにて、よろしく道具納まる。

淨念　願意宿得不等一切精靈發菩提心、南無阿彌陀佛々々々々々々……これはどなたも御苦勞でござります。

勘太　イヤモウ、わしらは同家中に勤めてゐるうちから、懇ろな人ゆゑ、一倍氣の毒に思ふのサ。

半六　さうでござる。殿樣の屋敷がだりむくつてから、此やうに齒磨賣りで世を渡つて、今では町人の方が、はるか增しでござるよ。

三吉　さういへばお前方も、二本差して二百石も取つた衆だが、今では一日が又兵衞取りの職人とは、洒落た身の上でござるの。

浪藏　それ〳〵、屋敷出の衆が、おいらの長屋へ引越して、庭仕事やら商人やら、よく早く覺えたものだ。おいらは武士になつたら、さぞ腰が重からうと思ふの。

淨念　イヤモウ、合長屋だけ、深切な事でござります。時に六部どのは、今日江戶へ着かしつたか。

源四　左樣でござります。生國は播州生れ、昨日お江戶へ着きまして、道々も聞いて來ましたが、六部

住みなさつしやる庵室の事、道場内はお頼み申します。
淨念　イヤモウ、ゆるりと江戸を見物さつしやるがよい。
源四　ハイ／＼、左樣いたして參りませう。
半六　六部どの、播州は、どの邊でござる。
源四　ハイ、赤穗でござりまする。
浪藏　アヽ、鹽冶どのゝ御城下だの。
源四　左樣でござります。
　　　トこの聲を聞き、勘太と半六、六部を見て
二人　さう云はしつしやるは、源四郎どのではござらぬか。
源四　これは眞壁、堀口の御兩所。ヤレ／＼、久しぶりでお目にかゝりました。
勘太　まづは御健勝の段
半六　お互ひに大慶に存じます。
源四　イヤモウ、達者で居ると申すのみの儀でござる。お互ひに浪人仕り、亡君御菩提の爲と存じ、廻國に出ましてござるが、各〻方はそのお姿、未だ好い主取りもござりませぬかな。

勘太　左やう〳〵、イヤモウ、僅かな知行を取らうより、その日暮らしが增しでござりますて。

半六　私しなぞは商ひにかゝりまして

源四　アヽ、左やうか。して、見ますれば百萬遍の樣子、それも町家の附合ひとやら申す儀でござるかな

三吉　アヽコレ六部さん、ぬし達は以前の朋輩だといつたが、この庵りに掛りう人の病人の、祈禱の爲の百萬遍でござる。

浪藏　幸ひお前も、念佛を助けて下さりませ。

半六　アヽコレ〳〵、さつぱり忘れてゐました。コレ、源四郎どの、この庵りに掛りう人の病人は、其許の御子息

勘太　民谷伊右衛門どのでござります。

源四　ヤヽ、離緣いたした女房の實子、江戸屋敷に勤めをつた、伊右衛門でござりまするか。

二人　左やうでござる。

淨念　アヽ、左やうなら病人どのゝ親御でござりまするか。さう致せばあの阿母の爲には、このお方はお連れ合かな。

勘太　アヽもし〳〵、そのお話しは少し御遠慮々々々々。

ト云ふなといふ思ひ入れ。この時紙帳の中、バタ〳〵と音して、病氣にやつれし伊右衛門、刀を引きげ、紙帳を切つて落し、熱氣に浮され、正氣を失ひし體にて走り出で

伊右　おのれお岩め、立去らぬか〳〵。

ト白刃を振り廻す。大勢寄りかゝつて押しとめ

皆々　また起りましたか。氣を鎭めてござりませ。皆が居ますぞ〳〵。

ト取すがつてとめる。伊右衛門、皆々の顏を見て、胸撫でおろし

伊右　アヽ夢か……ハテサテ恐ろしい。まだ死なぬ先にこの世から、あの火の車へ……南無阿彌陀佛、南無阿彌陀佛。

ト思ひ入れ。源四郎立ちよつて

源四　コリヤ、ヤイ悴、わりや、この親が目にかゝらぬか。

伊右　ヤ、誠にお前は親仁樣。どうしてこれへ。

源四　年寄つて浪人すりや、二君に仕へる所存もなく、後世を願うて廻國修行。

伊右　すりや親人には、主取りなさらぬお心がけとな。

勘太　我れ〳〵とてもその通り、よしなき企で致さうより

半六　その日暮らしが誠に氣樂サ。
源四　して、其方が病氣の起りは
伊右　僅かな女の死靈の祟り。
源四　ハテサテ、それは難儀であらうに、いづれも方の何かとお世話。して少しも
伊右　ハイ、心よいやら惡いやら、折に觸れては熱の差引き。どうでこの身は浪人の、有附きあるまで
　庵主のお世話。
源四　存ぜぬ事とて、何かとあなたの
淨念　イヤモウ、御懇ろゆゑ愚僧が方に
源四　然らば拙者も暫く御庵に。
伊右　どうで、この雪のやむまでは、親も悴も掛り人。どなたも後方。
皆々　また念佛を
伊右　お頼み申します。
　ト時の鐘になり、淨念案内して、源四郎皆々奧へ入る。伊右衛門殘つて思ひ入れ。上の方障子を明け、
　お熊、同じく病ひ鉢卷にて出て來り

くま　コレ、伊右衛門、縁の切れた親仁どの、思ひがけなうこの庵りへ。わしも離別のその後は、高野の家へ取り入つて、頂戴したるあの書き物、今にでも持つて行きや、大なり小なり御褒美下さる其方に渡したあの墨附。必らず共に

伊右　どうで長らくこの庵りに、掛つてもゐられぬゆゑ、平内どのを頼み込み、近々高野へ行きつく手段。それもお前の下された、御判の据つた書き物ゆゑ。

くま　それは耳寄り。併し高野へ奉公と、聞いて眞面目な親仁どの、わしらが心に叶はぬ事を

伊右　それも合點。いづれ近々この身の落附き。それは格別、して母人は、いつもの鼠か

くま　イヤモウ、今日も數多の鼠。これも大方

伊右　子年のお岩が親子の者を苦しむる。思へば〳〵、執念深い女め。

　ト口惜しさうに思ひ入れ。雪降つてくる。禪のツトメをかすめ、向うより小林平内、半合羽、大小、足駄に傘。赤合羽の中間、挾み箱をかつぎ、侍ひ一人、菅笠合羽にて附いて出て、門口にて

平内　この庵室に同居のお方、伊右衛門どのに用事ござつて。

　トこの聲を聞き、伊右衛門思ひ入れ。

伊右　これは小林平内どの、この大雪に。サヽ、これへ。

平内　許しめされい。

ト上座へ通り

この程内談いたせし通り、貴公御所持の殿の墨附、拙者も披見のその上にて、いよ〱御判に相違なくば、貴公を同道いたせよとの仰せ。お目見得の節の用意の衣服、大小相添へ。家來その品。

中間　ハツ。

ト廣蓋に衣服大小をのせて差出す。お熊、嬉しさうに受取り、伊右衞門の所へ持つて行き

くま　これは〱あなた樣、このマア雪に、御苦勞に存じまする。

平内　伊右衞門どの、殿より下され物、受納おしやれ

伊右　忝う存じまする。然らばお目見得の儀は、貴殿方より

平内　それも其許所持おしやる、殿の御判の据りし墨附き、披見いたさう。

ト伊右衞門思ひ入れ。

伊右　サア、その墨附の儀は、かゝる他人の入り込む草庵、殊には病中、それゆゑ外へ預け置きましてござれば、後方までに。

ト お熊心得ぬ思ひ入れにて

くま　コレ〳〵悴、あれほど其方に渡した大事の
伊右　ハテ、お氣遣ひなされまするな。いづれ後方御披見あつて
平内　然らば拙者は又ぞろこれへ。必ず共にその節は
伊右　お目にかけるでござりませう。御前よろしう
平内　お暇いたさう。
　　　ト合ひ方、時の鐘になり、件の品を殘し、平内は家來引つれ引返して入る。お熊、側へ寄り
くま　コレ悴、あの大切な書き物を、其方は、なんで
伊右　それも矢ッ張りこの身の爲に、訴人しようと申した秋山、あの品渡して少しの內を
くま　すりや彼の品で
伊右　取返して參ります。お氣遣ひなされまするな。
　　　トお熊思ひ入れ。この時、暮れ六つの鐘鳴る。
くま　ありやもう暮れ六ッ。
伊右　お前もわしも熱氣の時刻、冷えないやうになされませ。
くま　わが身も大事に

伊右　ドリヤ、灯をつけませうか。

ト合ひ方、時の鐘になり、お熊、奥へ入る。伊右衞門、行燈へ灯を入れ、門口を明けて

アヽ、つもつたワ。眞白になつたな。

トあたりを見廻す。門口に菰をかむり、秋山長兵衞、寢てゐる體。よく／＼見て

アヽ、この大雪に軒下の宿無し。初雪の樽拾ひよりも、みじめな態だ。

ト云ひながら、流れ灌頂に向ひ、卒塔婆を見て

戒名附けても俗名の、矢張りお岩と記し置くは、世上の人の回向なと、受けたらよもや浮まうと、跡の祭りも怖さが一倍。產後に死んだ女房子の、せめて未來を

ト手桶の中の柄杓を取つて側へ寄る。寢鳥、薄ドロ／＼、一つ鉦になる。伊右衞門、白布の上へ水をかける。この水、布の上で心火と燃える。伊右衞門、恟りしてタヂ／＼となる。ドロ／＼烈しく、雪は頻りに降る。布の中よりお岩の亡靈、產女のこしらへ、白裝束、亂れ髮、腰より下は血に染みし姿極く凄き思ひ入れにて、子を抱いてスッと現はれ出る。伊右衞門フッと見附け、ギョッとして、跡へ退る。入れかはつて、亡靈上の方へゆく。亡靈の足跡、雪の上へ血にて一つ／＼附く事。伊右衞門、跡じさりに內へ入る。亡靈も續いて入る。內に、引千切りし紙帳ちらばつてゐる。その上を亡靈踏んで廻る。これにも血の足跡附く事よろしく、亡靈、お熊の寢所の方をヂロリと見やつて、恨めしげな

様子にて立ち身。伊右衛門、側へ寄つて思ひ入れ。

ハテ、執念の恐ろしい……コレ、亡者ながらもよく聞けよ。喜兵衛が娘を嫁にとつたも、高野の邸へ入り込む心。義士の面々手引きしようと、不義士と見せても心は忠義、それをあざとい女の恨み、舅も嫁もおれが手に、かけさせたのも汝がなす業。その上伊藤の後家も乳人も、水死したのも死靈の祟り。殊に水子の男子まで横死させたも、根葉を斷やさん亡者の祟りか。エヽ、恐ろしい女めだなア。

トきつと云ふ。亡靈、この時振りかへり、抱いたる子を見せる。伊右衛門、聞き耳立て

ヤヽ、そんならあの子は、亡者の手しほで

ト嬉しげに赤兒を受取り

まだしも女房、出かした／＼。その心なら浮んでくれろ。南無阿彌陀佛々々々々々。

ト兒を抱いて念佛を云ふ。亡靈、兩手にて耳を抑へ、きかぬ思ひ入れ。このとき門口に臥したる長兵衛、襲はれ聲にて起上がり

長兵　アヽまた鼠が……畜生め／＼。

ト刎ね起きると、ドロ／＼。鼠、數多むらがつて障子の内へ入る。伊右衛門、恟りして、抱いたる赤兒

を取落す。この子は忽ち石地藏になる。これにて伊右衛門呆れし思ひ入れにてふりかへる。この時亡靈、ザロリと見て

ト皺枯れたる聲にて凄く笑ひながら、壁際にて見事に消える。始終、大ドロ〳〵、障子の内にてお熊の唸り聲聞える。伊右衛門思ひ入れあつて

いは　オホヽヽヽヽヽ

伊右　ハテ、恐ろしい。

ト思ひ入れ。ドロ〳〵打上げる。長兵衛心づき、内を覗いて

長兵　コレ、そこに居るのは、伊右衛門どのか。

伊右　秋山どの、ヤレ〳〵、こなたを尋ねる最中。コレ、貴樣に渡した書き物にて、高野の家に有り附けた。早くあの品、戻して下さい〳〵。

長兵　サア〳〵、戻すよ〳〵。おれもこなたに無心いふ、金の代りのあの墨附、持つて歸つたその夜から、どこからうせるか大きな鼠、髪の毛爪まで嚙られて、誠に難儀だ、返してしまはう〳〵。

伊右　すりや、こなたへも鼠が附いたか。アヽ、これもお岩が……南無阿彌陀佛々々々々々々……サア、返す氣なれば、あの書き物を

長兵　返すは返すが貴様の仕業で、多くの人を殺したる、既にその科此方へかゝつた、殊に官藏伴助まで、皆巻添への人殺し。コレ〳〵民谷、これには大方、譯があらうな〳〵。

伊右　サア〳〵、その譯といふは、元おれが母が高野の家中の娘ゆゑ、師直様へ手蔓かよさに、忰のおれが浪人の、身を苦に病んで高野の家へ、仕官の願ひ、それがこの節聞濟みあつて

ト話をしてゐるうち、よき時分、ドロ〳〵になり、上の欄間の中よりお岩の亡靈、恐ろしき様にて、長兵衛の頭の上へ眞逆様に下りる仕掛け、長兵衛の襟にかけたる手拭にて、長兵衛を縊り殺す。長兵衛「ワツ」と聲を立てるゆゑ、亡靈、長兵衛の口を押へる。長兵衛落入る。直に襟首を捕へしまひ、長兵衛の體を中に浮かせて欄間の間へ引摺り込む。伊右衛門はフツと見附け悸りし、立ち寄らんとするとき、天井より血汐、タラ〳〵と落ちる。伊右衛門、キツと見上げて

これもお岩が……重ね〴〵も恐ろしい。

トこの時、ドロ〳〵打上げる。上より墨附、伊右衛門の前へ落ちる。手早く拾ひ取つて

こりや秋山へ預けし墨附。これさへあれば

ト思ひ入れ。向うより小林平内、身輕なる姿になり、捕り手四人を従へ、走り出て來て、門口へ寄り

平内　伊右衛門どの〳〵、先刻の契約、開見の爲に早速これへ。

伊右　それは御苦勞、さりながら、貴公の出立ち、何とも以て。

平内　かゝる姿も高野の家中、伊藤喜兵衞が親子の者ども、殺害なせしは關口官藏、下部作助二人が仕業と、早速召捕り、路にて預け、次手に書き物披見の爲。サヽ、少しも早う

伊右　委細承知仕る。然らばこれにて内見あつて、何分よろしく

ト差出す。平内取上げると、薄ドロになり、件の鼠出る。墨附を開くと、この書き物鼠喰ひにて判とも文言もくひちらしある體。平内恟りし

平内　ヤヽ、こりやこれ御判も文言も、鼠の齒にてくひ裂きあれば、反故も同然。こりやどうぢや。

ト呆れる。伊右衞門取つて、よく／＼見て

伊右　誠にくひ裂く鼠の仕業。これもお岩が死靈の業か。ハテ、是非もない。

平内　エヽ、役にも立たぬ暫時の隙入り、この旨主人へ言上いたさん。さすれば最前渡せし品々、家來ども、取上げい。

捕手　ハツ。

ト件の衣服を廣蓋のまゝ取上げる。

伊右　すりや下されし品々まで

平内　持歸つて右のあらまし、披露いたさん。あまりと申せばたわけた民谷。イヤ馬鹿々々しい。

ト　あざ笑ふ。時の太鼓になり、平内、捕り手を連れ、足早に向うへ入る。伊右衛門見送り

伊右　折角母の志し、この身の出世のこの蔓附、鼠の仕業も死靈の祟り、もうこの上は、立てし卒塔婆も

ト門口へ行かうとする。最前より窺ひゐたりし近藤源四郎、走り寄つて伊右衛門を引留め、キッとなつて

源四　コリヤ悴、わりや腹立つてあの卒塔婆を、蹈にもかけん心ぢやな。

伊右　施餓鬼回向も聞き入れぬ、あの亡者めが戒名なりと

ト行くを捕へ、思ひ入れあつて

源四　ヤイ、道わきまへぬ不忠者めが。……こりやヤイ、聞わけのない亡者より、無得心な不義士のおのれ。あの母親が縁につれ、敵高野の館へ取入り、奉公願ふ道知らず。さすれば親の身共まで、不忠の汚名をとるわいやい。エヽ、見下げ果てたる畜生め。

ト思ひ入れ。伊右衛門こなしあつて

伊右　親仁どの、敵の館へへつらふも、義士の輩手引きの爲に

源四　まだ吐かすか。なんのおのれにその一言、この親はえゝ聞くまい。かゝる未練な民谷の一族、武士の風上に置かれぬ奴。親が手にかけ

ト腰へ手かけ、刃物なきゆゑ思ひ入れ。

以前にあらぬ、今は出家も同然な、人に物乞ふ修行の身。

ト側にある伏せ鉦の撞木を取つて、伊右衛門をしたたかに打ち

勘當ぢや。親でも子でもないおのれ。

伊右　エヽ、左樣なら親仁樣、アノ私しを

源四　親ではない。エヽ、勝手にしをれ。

ト撞木を打ち附ける。唄になり、源四郎、立腹の思ひ入れにて、奥へ入る。伊右衛門殘つてこなし。

伊右　昔氣質の偏屈親仁、勘當されたも、矢ッ張りこれもお岩の死靈か……イヤ、呆れたものだ。

ト思ひ入れ。この時、障子の中にて物音して、お熊の苦しむ聲。

くま　アレ〳〵、鼠が〳〵

ト狂ひ出て、のたうち廻る。所々へ鼠が群がる。薄ドロ〳〵。伊右衛門介抱して

伊右　コレ〳〵阿母、心を慥かに、氣を慥かに、コレ阿母、コレ、……エヽ、畜生め。

ト撞木を取つて鼠を追ひ廻し

モシ〳〵、また刻限だ。お頼み申します〳〵。

トこの聲に、淨念はじめ以前の四人、出て來り

淨念　起りましたか〳〵。少つとも早く、お念佛〳〵。

四人　心得ました〳〵。

ト苦しむお熊を珠數の内にとりこめ

サア、お念佛〳〵。

淨念　南無阿彌陀ン佛。

四人　南無阿彌陀ン佛〳〵。

ト伊右衞門も珠數に取附き、百萬遍を繰り出す。お熊、矢張り苦しむ。薄ドロ〳〵、よき時分、お熊の側へお岩の亡靈、白裝束、亂れ髮にてホツと現はれ、お熊を捕へ、惣身をゆすり〳〵、いろ〳〵と引廻す。お熊、ます〳〵苦しむ。皆々これを知らず

伊右　サア〳〵、念佛々々。

ト皆々念佛を高らかに唱へる。亡靈、伊右衞門の顏を見詰めながらお熊を苦しめる。伊右衞門思ひ入

れ。

又も死靈の眼前に……サア、念佛々々。

皆々　なまアいだ〳〵〳〵〳〵。

ト責め念佛になり、亡靈、珠數の中より這ひ出し、耳を押へ、よろ〳〵と門口へ行きかける。お熊少し苦しみとまる。淨念、お熊に向ひ

淨念　コレ、阿母、心持ちはどうでござる。

くま　どうした事やら、少し苦痛が

ト　お熊、伊右衞門、門口を見る。途端にお岩の亡靈、恐ろしき顏色にて振りかへり、兩人を見る。

伊右　ハテ、恐ろしい……サヽ、念佛々々。

皆々　南無阿彌陀佛〳〵。

ト　お岩の亡靈、又よろ〳〵と歸り來り、珠數の中へ這ひ込む。又お熊を捕へ、擽ぐるやら引廻すやら、いろ〳〵に苦しめる。お熊、ます〳〵苦しむ。トヾ亡靈、お熊の咽喉へくらひつく。「ロッ」といふて咽喉、血だらけになり、落入る。伊右衞門見附け、ギヨツとして

ヤヽヽヽヽ、母者人を此やうに、

ト立ちかゝる。始終大ドロ〳〵。體のすくむこなし。皆々この時、フッと亡靈の姿見えし思ひ入れにて、「ワッ」と驚き、珠數を抛げ出し、奥へ逃げて入る。伊右衛門、刀を取り

おのれ死靈め。

ト白刃を抜いて切り附ける。亡靈、伊右衛門を苦しめ〳〵、跡すさりに壁のあたりへ寄る伊右衛門、恐れて、障子ごしにトンとよろけかゝり、障子倒れる。内に源四郎、首を縊りし體にて死んでゐる。亡靈、壁の中へ消える。一度の仕組み。伊右衛門、恟りして

ヤヽヽヽヽ、親仁樣にも首かゝり。二親ともに暫時の内に……エヽ、淺ましき此なきがら、これも誰れゆゑ、お岩めゆゑ。エヽ、口惜しい。

ト無念のこなし。バタ〳〵になり、向うより官藏、伴助、一散に走つて來て、内へ駈け込むゆゑ、恟りして飛び退く。跡より平内、捕り手を連れ、窺ひ〳〵出て來て、門口に樣子を窺ふ。

官藏　伊右衛門どの〳〵、こなたの舊惡何もかも、拙者が業と云ひ立てゝ、伴助まで繩かゝり

伴助　お前のお身に科もなく、云ひ拔け立つて事納まり、油斷を見濟まし、繩拔けして爰まで來ました

官藏　少つとも早くこの隙に、落ちさつしやい〳〵。

伊右　何かと貴公の心遣ひ。然らば一先づこの場を落ちのび

二人　影を隱さつしやい〳〵。

伊右　合點だ……併し路銀を

二人　捕つた。

ト伊右衛門に打つてかゝる。拔討ちに二人を切つて捨て

伊右　その手はくはぬ。おれもさうとは

平內　そりや。

捕手　捕つた〳〵っ動くな。

ト踏ん込むを、切り捨て〳〵、見事に殘らず切り立てる。組み子の跡より赤合羽に菅笠、中間體の者が來り、門口に窺つてゐる。伊右衛門、身拵へをなし

伊右　死靈の祟りと人殺し、どうで遁れぬ天の網、併し一旦遁れるだけは

ト門口へ出かける所を、表より雪を礫に打つ。心得て白刃を拔く。合羽の男、脫ぎすてる。佐藤與茂七にて、兩人ちよつと立廻つて、キツと見得。

與茂　民谷伊右衛門、爰動くな。

伊右　ヤ、わりやァ與茂七、なんで身共を

與茂　女房お袖が義理ある姉、お岩が敵の其方ゆゑ、この與茂七が助太刀して

伊右　いらざる事を。そこ退け佐藤。

與茂　民谷は身共が

ト立廻る。これより薄ドロ、陰火燃えて伊右衛門を苦しめ、立廻りのうち鼠数多現はれて、伊右衛門の白刃にまとひ附くゆゑ、思はず白刃を取落すを、すかさず與茂七、伊右衛門に切り附け、立廻り。

これにて成佛得脱の

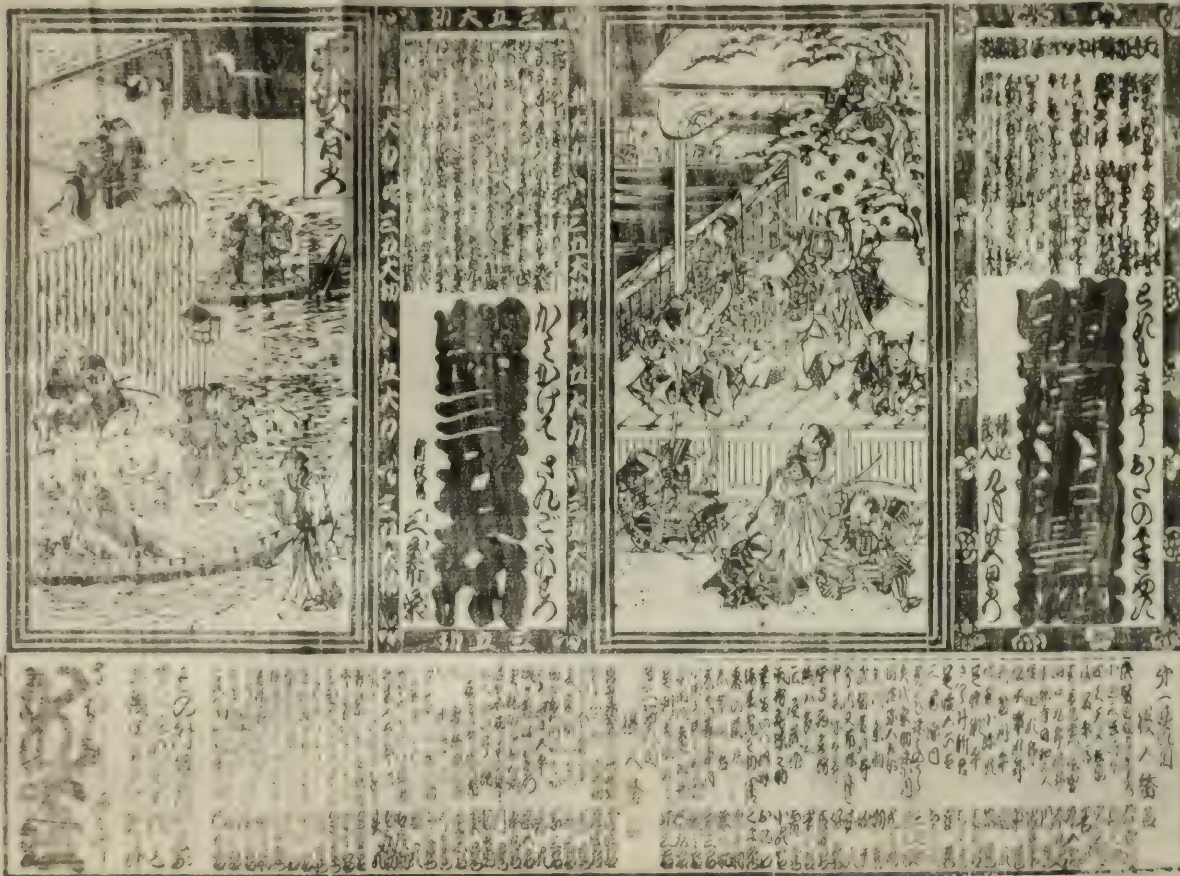
伊右　おのれ、與茂七。

ト立ちかゝる。ドロ〳〵、心火と共に鼠むらがり出で、伊右衛門を苦しむる。與茂七、附け入つてキツと見得。ドロ〳〵烈しく、雪しきりに降る。この見得にて、よろしく

幕

此あと雪を用ひて　十一段目めでたく夜討。

盟三五大切（かみかけてさんごたいせつ）


かミかけて さんごたいせつ

盟三五大切

序幕

佃沖新地鼻の場
深川大和町の場
二軒茶屋の場
五人切りの場

役名――薩摩源五兵衛實ハ不破數右衛門重種。若黨、六七八右衛門。富森助右衛門。判人、長八實ハごろつき又平。十二軒內びん虎藏。賤ヶ谷伴右衛門實ハごろつき勘九郎。廻し男、むぐりの幸八。道具屋、はしたの甚介。同、やらずの彌十。船頭、笹野屋三五郎實ハ德右衛門悴、千太郎。ごろつき、お先の伊之助。藝者、妲妃の小萬實ハ神谷の召仕ひお六。藝者、菊野。粂本娘分、お弓。

一番目の切れ、浪幕を引附けると、トメの柝につき、舞臺前と花道へ、浪板をせり出す。佃になり、下の方より小舟、これに伴右衛門、帷子、着流しの侍ひにて、舟に乘りゐる。伊之助、船頭にて、艪

を押して來り、舞臺前よき所にて、洲へ乘りかけし思ひ入れにて

伊之　エヽ、いま〱しい。まだ汐がある筈だが、べら坊に早くそゝつた。

ト艪を引上げ、水棹を取つて突き戻す思ひ入れ。

作右　コレ〱、どう致したのぢや〱。早くやらぬか〱。

伊之　お前さんより彼のお子さんが、待ち焦れてゐなさるだらうと思つて、急ぎやア廻ると、また爰はど洲のある所はねえ。

作右　時に、斯うぢや。明朝は殿の御用で、未明に戻らねばならぬが、それを申すと、また小萬がふさいだり、癪を起したり致すゆゑ、今夜は目を覺まさせぬやうにして歸るつもりぢや。その折に又この間のやうに、てまへが居らぬと困り果てるて。

伊之　あの晩はね、お前さんにお貰ひ申したので、ツイ味な氣になりやして、嗅アに當りのある女があつて、行きやしたところがね、汐留の友達が、二三人來てゐやして、ざらに食つた上で、少し間違えを拵えやした。その跡始末をしてゐる內、からりと夜が明けやして、粂本へ行くと、お前さんはお歸りなすつた跡サ。輕子めらにやア冷かされるし、エヽモウ、どのくらゐ泡をくつたか知れやせん。

作右　泡をくつても大事ないが、酒は御免だ。

伊之　モシ、作さんえ、文が來てゐやすぜ。火繩箱の下にござります。

作右　ナニ、文が來てゐるか。

ト探り取つて、透かし見て

エヽコレ、生憎闇で少しも解らぬわえ。梅の蕾みと小萬が文は、開く間を待ちかねる。

伊之　旦那、うまく仰しやるぜ。併し、色の文と今のお話しは、見ねえ内が山だね。

作右　サア、早くやれ〳〵。

伊之　アイ〳〵。

ト艪を押し、向うを透かし見て

そりやアどうするのだえ。來るのか……ナニ入るのだ。表舵だよ〳〵。

ト押し切つて上の方へ入る。矢張り佃にて、向うより又小舟一艘、これに小萬、深川藝者。三五郎、船頭、浴衣なり、三尺帶にて、漕ぎ出て、花道にて

小萬　オヤ、三さん、おツかない雲が出たが、降つたらどうせうの。

三五　なアに、上げ汐の鼻までは氣遣ひない。併し、素的に暗くなつた。モシ、小萬さん。

ト あたりを見て

イヤ、コレ、お六、今夜の客は店者だな。少つとは解つたか。

小萬 せうがな癖に、いつまでも引留めて、困らせ切つたわな。

三五 何だかべら坊に待たせたぜ。

小萬 カウ、わたしやァお前にきく事があるよ。

三五 マア待ちや。もう少つと沖へ行つて話しや。

ト 佃にて、舞臺へ漕ぎ來り、よき所にて思ひ入れ。

サア、云ふ事があるなら遠慮なく云や。もう、おれとだぼ沙魚より外に聞く者はねえ。

ト 火繩箱より叺莨入れを出し、吸ひつける。よき時分より、長繩の浮き樽、上の方より流れ來る。

三五郎、これを取つて

アヽ、此奴は妙だ。

ト これをたぐる。小萬見て

小萬 なんだな。そんな惡い事をせずと、云ふ事を聞きなよ。

ト かすめし佃。

三五　云ふ事とは何を

小萬　何をぢやァねえわな。お前、いつまで藝者をさせて置くのだな。

三五　いつまでさせて置くでもねえが、てめえも又、内に山の神で、茶釜ばかり荷厄介にして居るよりは氣がきいてゐるぜ。

小萬　お前もいゝ氣な事を云ふ。それだから、しみ〴〵腹が立つ。

ト此うち件の繩を曳き見て

三五　オヤ、沙魚か……はぜ愚痴を云ふやつサ……カウ、一服つけてくれ。

ト小萬へ煙管を抛り出す。

小萬　ナニわたしが愚痴を云ふものかな。お前こそあんまり解らねえよ。

三五　なぜ〳〵。

ト誂らへの合ひ方。此うち小萬、三五郎の煙管を通しながら

小萬　なぜと云ふがあるものかな。お前、わたしを沈める時分、何と云つた。父さんの古主樣とやらが金のいる事があるから、一二年挊いでくれろと云つたぢやァねえか。

トかなぐり見て

三五　エヽ、また沙魚か……はぜ、それからどうした。

小萬　冗談も大概だよ。わたしだつて、お前の父さんにする事だから、何も恩にかけるぢやアねえが、お前の連れて來た、あの浪人者の源五兵衞さんからも、どの位取つてやつたか知れねえか、その金をお前、どうしたものだ。又その金が屆いたなら、父さんだといつてサ、一度は逢つてくれても、よかりさうなものだわな。

三五　ソレ、それが愚痴といふものだ。十年以前に勘當された、このおれに、よく〳〵の事だから金の無心に、てめえを沈めたその金で、それを機に出入りはするものゝ、何と云つても大枚百兩。忠義の爲めにと昔氣質で、坊主にまでなつて、四谷のお岩稻荷の建立をして歩くとよ。又てめえに逢はせる事も知つてるがな、さうして見た時にやア、女房賣つた金だと思つた時にやア、親仁が立つめえぢやアねえか。マア、先の事が片附いた上で、逢ひたくば逢やアな。

小萬　さう云やアそんなものよ。どうぞ、もう少つとも上げたいけれども

三五　コレ、てめえ、本所の方から、足を近く來る侍ひがあるぢやアねえか。

小萬　たしかありやア、高野とやらいふ屋敷の、金役とやらだとよ。吝な癖に、おれが旦那は、今ぢやア飛ぶ鳥も落ちると、何だか解らねえ味噌ばかり。

三五　さうであらう。あの侍ひの面からして、殺生石に似てるらア。玉藻の前より、この物前になつて尻尾を出さねえやうに引ッかけて置きやな。

小萬　そりやアわたしも其つもりだが、あれで出し穢ねえといつちやアねえよ。

三五　さうして、源の字も今の內、思ひ入れ取りやアな。

小萬　なんぼ人が善いといつたつても、さう〱も云へねえわな。さうして今ぢやア、どつともしねえやうだよ。

三五　てめえ、それが悪い。どうで取りかゝつたものだから、根こん際取りやアな。蛇の生殺しで、却つて罪だ。

ト此あたりにて、繩を捨て、手を洗ひ、手拭を艪床の上にて絞る事よろしく

もう長い事はねえワ。

小萬　さうお前の云ふやうにも仕憎いわな。

ト三五郎思ひ入れあつて

三五　コレ、てめえ、この頃ぢやア浪人者を庇ふな。それぢやア今では、嫌でもなく呼んでゐるのか。さうだらう。何だかおれもをかしいと思つたよ。

トこれにて小萬ムッとして

小萬　何がわたしがをかしいえ。

三五　何がをかしいか、われが胸にきいて見やな。

小萬　サア、何がをかしいのだ。それを云やァな〳〵。

トニ五郎の袖を捕へる。

三五　エヽ、云つたがどうした……と云ふは話しよ。おれがをかしな氣になつたといふ事よ。

ト引寄せてこなし。

小萬　なんだな。人に腹を立たせて置いて、氣休めも大概だよ。さうして、女房をとらめえて、珍らしさうに

三五　てめえは珍らしくなくつても、おらァ珍らしいヮ。

ト縋り寄る。

小萬　エヽ、なんだな。

三五　なぜ〳〵。惡いのか。惡かァよすヮ。

小萬　惡かァねえが

三五　誰れぞ來ると……惡いと云ふのか。

ト小萬、三五郎に寄り添ふ。この時、チヨンと月出る。これをキツカケに黑幕を切つて落す。うしろ佃沖、新地の鼻を見せたる遠見、夜の模樣よろしく、上の方に屋根船一艘、內に源五兵衞、着流し、羽織にて、簾をあげ、煙管を持ち、空を眺めてゐる。本釣り鐘、かすめたる合ひ方。

源五　「何一つさはるものなし海の月」……併し戀には心も闇。

トこの聲を聞いて、兩人恟りして

兩人　エ。

ト飛びのく。源五兵衞、小萬を見て

源五　ヤ、、其方は小萬か。

三五　旦那かえ。

源五　オ、、三五郎。

小萬　オ、、源さん。

源五　たしか二人は

兩人　エ。

トぎつくり思ひ入れ。

源五　迎ひに來たのか。

三五　知らぬ事とて

小萬　大事の話しを

源五　ヤ。

三五　イヤサ、大事の月を

源五　今まで雲が

小萬　隱せし事も

源五　今宵はしつぽり

三五　濡れた水棹の

小萬　心のたけを

源五　そんなら一緒に

トト小萬、三五郎へ思ひ入れして

小萬　アヽ、嬉しいねえ。

ト、ツイと立つゆゑ、舟は搖れて、三五郎尻居に撞と座す。源五兵衛、煙管で舟べりを叩く。これを木の頭。

三五　エヽ、畜生め。

ト水棹を抜く。小萬、帯を締める。これを佃にてキザミ、よろしく拍子引附けると、あと浪の音にてツナギ、引返す。

幕

本舞臺、三間の間、上の方三尺の地袋戸棚、刀掛けに紫の袷袱紗かけ、花活け、正面のれん口、下の方一間の床の間、掛け物、香爐臺、向う茶壁、いつもの門口、外は黒塀、忍び返し、すべてこの道具綺麗に仕立て、爰に八右衛門、ぼつとせいが栗、切繼ぎ布子、一腰差し、彌十、甚介の古道具屋、鍋釜莨盆、七輪鑵子なぞ持ち出さうとするを留めてゐる。深川大和町、源五兵衛浪宅の體、大拍子にて幕明く。

八右　コレ〳〵、こなた衆は理不盡に、人の内の道具を、こりやアマア、どうするのぢや〳〵。

甚介　わしらは寺町の道具屋だが、昨日旦那の源五兵衛樣がござつて、内の鍋釜諸道具を、賣りたいと云はつしやるゆゑ

彌十　そこで昨日、仲間の甚介と連れ立つて來て、家財かざい殘らず踏んだところが、三兩二分八百、前金に渡したゆゑ、今日取離して持つて行くのサ。

ト道具を持ち出さうとするを、八右衞門とめて

八右　コレサ〳〵、滅相な。どうして〳〵、さうは成り申さぬぞ。

甚介　ハテ、それでも旦那の源五兵衞樣と、對談が濟んで居りますよ。

八右　たとへ旦那が賣らうと云はれても、コレ、その釜を失うては、飯を炊く事がならない。人間が飯を喰はずに、マヂ〳〵して居られるものかいやい。

彌十　ハテ、聞きわけの惡い。それでも旦那から買ひうけた道具でござるわな。エヽコレ、面倒な、構ふ事はない。マア、疊から持ち出さう。

甚介　オツト合點だ。

ト疊を上げようとするを引留めて

八右　これは情ない。その疊を上げられては、身共の寢所が無い。その疊は、ならぬぞ〳〵。

ト疊を押へつけて留める。

彌十　そんなら此方から上げようわえ。

八右　コレ、その疊は旦那の寢る所だ。
甚介　そんなら、この疊から
八右　イヤ、それもならぬぞ〱。
彌十　そんなら、これから
八右　イヤ、ならぬぞ〱。

トあちこち疊を上げようとするを、八右衛門、疊の上を踏みつけて歩き、兩人もちあつかふ思ひ入れ。大拍子になり、向うより源五兵衛・着流し、大小、下駄がけ、手拭を持ち、錢湯歸りの體にて出て來り、この體を見て中へ入り

源五　コレ〱、其方達は何をマア、其やうに立騷ぐのぢや。
八右　モシ〱、旦那樣、あなたのお留守へ、とんだ理不盡な奴が舞ひこみました。
源五　ナニ、理不盡な者が舞ひこんだ。
彌十　イヤ、源五兵衛樣、よい所へ歸らしやりました。モシ、昨日お前樣から買ひうけました道具を、取離して持つて行かうと致しますのを
甚介　御家來の強情者には、誠に困り切つて居る所でござります。

八右　旦那樣、そんならいよ〳〵、この家財かざいを

源五　いかにも、この町人に賣り渡した。

八右　エヽ、そりやァお前樣、本氣の沙汰でござりまするか。

源五　本氣も疝氣もいらぬワ。身共の家財を身共が賣るに、誰れが何と申すものか。……サヽ、早う持つて行きやれ。

彌十　それ見た事か。なんぼこなさんが、じや〳〵ばつても

甚介　鶴の一聲で、忽ち埒が明いたといふものだ。

八右　イヤハヤ、呆れたものぢや。

ト思ひ入れ。甚介、彌十、花道へ向ひ

甚介　オイ〳〵、若い衆、ちよつと來てもらはう〳〵。

ト大拍子にて、若い者三四人、天秤棒或ひは畚など持ち出て來り

皆々　サア〳〵、何から運びませうな〳〵。

彌十　マア、疊から賴みませうかい。

ト八右衛門が座つてゐる疊をグッと上げる。

八右　アヽ、萬歳樂々々々。

ト惘りしてころげる。

甚介　萬歳樂には疊を上げ、とはどうだね。……旦那、御免なされませ。

ト源五兵衛の座つてゐる疊も上げて持ち出す。

源五　身共は元より覺悟の前ぢや。サアノ\、持つて行くがよい。とは云ふものゝ、アヽコレ、座る所が

八右　コレ、せめて旦那の居所一疊は、料簡してくれまいか。

彌十　ナニ、料簡してくれろ。イヤ、とんだ茶釜だ。

ト茶釜を持ち出す。

甚介　藥鑵と化けたか。

ト藥鑵を持ち出す。

八右　エヽ、沒義道な奴等ぢや。いかに旦那が賣らうと云はれたというて、ちつとは目こぼしをして行き居らぬかやい。

彌十　目こぼしどころか、味噌こしまでも此方の物サ。

ト八右衞門の顏を味噌こしを持つて撫でる。八右衞門腹を立て

八右　うぬ、何しをるのぢや。

甚介　鍋にお前は腹立て鑵子。

ト鍋と鑵子を八右衞門の目へ突きつける。

八右　エヽ、そんな機嫌ぢやないわえ。

ト突きとばす拍子に、甚介、鍋と鑵子を持つて彌十へこけかゝり、兩人の顏、眞黑になる。此うち若い者、門口に荷拵へして、兩人の顏を見て

皆々　ハヽヽヽヽ、此奴はとんだ化け物だ。

兩人　ナニ、化け物だ。

皆々　お前方の顏がよ。

源五　コレ〳〵、其方達の顏で、身共も地口を一つ申さうか。

彌十　アヽ、そりやァ何とでござります。

源五　鍋釜の化け物とは、どうぢや〳〵。

甚介　アヽ、龜山の化け物といふ洒落でござりますか。ハヽヽヽヽ。

八右　モシ〳〵、旦那、あなたマア、思ひ附きどころでもござりますまい。鍋釜までも、拂つてしまはしやつて、明日の朝から、何で飯を炊くのでござりますな。

源五　ハテ、其やうな苦勞いたすな。あの小萬めが、どうかしてくれるであらうわえ。

八右　イヤ、呆れるわえ。夥しい涎れぢや。

ト思ひ入れ。此うち兩人、刀掛け、香爐臺、掛け物など殘らず持ち出し

彌十　これで取り殘した物は無いな……左樣なら旦那、お暇申しまする。

甚介　これは、おやかましうござりました……サア、若い衆、賴みます。

ト皆々門口へ出る。

源五　コレ〳〵、まだ爰に擂鉢と五德がある。持つて行きやれ。

彌十　ハイ〳〵、ほんに餘程の金目の物を取殘したの。擂鉢五德（藤八五文）奇妙。

ト地口を云ふ。八右衞門腹を立て

八右　エヽ、人の心も知り居らいで

トそこにある擂粉木を取つて

コレ、この擂粉木も持つて歸つて、煮てなりと燒いてなりと、食つてしまやれ。

ト門口へ抛り出す。

甚介　ハヽヽヽヽ、どこの國にか、擂粉木を食ふ者があるものかな。

彌十　ハテ、さう云やんな。六尺棒さへ呑む者があるわえ。

若者　モシ／＼、その擂粉木を呑んではどうだね。

甚介　そいつは奇妙。サア／＼、呑んだり／＼。

彌十　只今この所にて、この擂粉木を呑んでお目にかけませう。ハア、左やう。

ト輕業の鳴り物になり、彌十、擂粉木を呑むこなし。甚介、若い者、荷物を持ち、囃し立てながら、この人數皆々向うへ入る。

源五　アヽ、これでサバ／＼したわえ。併し、敷物が無うては、あまりむさくるしい。コレ、八右衛門、何ぞ敷物を持つて來い。

八右　なんの敷物がござりませう。莚一枚、箸片しござりませぬ。とんだ内もあるものぢや。

源五　コレ／＼、無いでは濟まぬ。身共が居る所が無いわえ。ヤイ、おのれは主の詞を背くか。早う持つて參らぬか。

八右　これは又、よう無理を仰しやるわえ。

ト思ひ入れあつて、奥より絹布の五布蒲團を持つて來り

サ、この蒲團も、損料屋の代物。マア、これを敷いてござらつしやりませ。

ト蒲團を抛り出す。源五兵衞こなしあつて

源五　エヽ、埃が立つわえ。

ト蒲團を敷き、その上へ寢はらばひ

これでよい〱。この蒲團の上に、あの小萬めが居やうものならば〱榮華にも榮燿にも、實にこの上やあるべきや。

ト謠をうたひ、こなし。

イヤ、生野暮の八右衞門では、とんと面白うないて。

ト煙草のみながら、手枕にて寢ころぶ。八右衞門こなしあつて

八右　モシ、お旦那、そりや本心でござりまするか。

源五　本心とは、そりや何が

八右　そんなら、どうでも……エヽ、情ない、お前樣はなア。

ト思ひ入れ。合ひ方になり

初めの程は敵を計る、計略と思つてゐましたが、今はほんまの身持ち放埒。どこの國にか家財かざいまでも、賣女めに入りあげさつしやるといふは、興も大坂も覺め果てました。小者の徳右衛門は、髪を下ろして、お岩稲荷の建立に事よせて、あなたか失うた御用金を償のひ、義士の連判に入れて、世上の人に忠義者と云はせたい、心は同じこの八右衛門。四十餘人の方々が、御本望をお遂げなされて、お果てなされた跡は、腹かッさばいてあの世のお供いたさうと、思ひ詰めてゐるこの下郎や、徳右衛門が心を御存じないか。この頃はあの仲町で、姐妃と評判する、小萬といふ藝者に打込み、僅かな貯へも遣ひ捨て、諸道具までもこの始末。どう考へて見ても、本氣の沙汰とは思はれぬ。この樣子を徳右衛門が聞いたなら、呆れ果てゝ才覺の、金の蔓も切れやうと押し默つて苦勞するのは私し一人。コレ、それでも武士か、侍ひでござるか。イヤサ、鹽冶家の御家中、不破數右衛門といふ、歴々の果でござりまするか。サア、此やうに下郎の云ふのが腹が立つなら、あの小萬とやらを、思ひ切つて下され。コレ、拜みます〱。

ト よろしくこなし。此うち源五兵衛、あくびしながら

源五　ヤレ〱、永談議、ねつから面白かつたわえ。

八右　何と云はつしやります。

源五　ハヽヽヽヽヽ。心あつての身持ち放埓、朝夕召しつかふ其方までが、誠と思ふ程に致さねば、なかなか敵に油断はさせられぬ。ハテ、いらざる苦勞は、しやらぬがよい。

八右　すりや、敵の間者を防ぐ爲めの、放埓と云はつしやりますか。

源五　大概知れたものぢやワ。

八右　ヤレ〳〵、嬉しや。それで私しも、安堵いたしました。

ト思ひ入れ。流行り唄になり、大拍子、向うより小萬、前幕の拵へ。幸八、廻し男の形。菊野、藝者の形。お弓、娘の形。虎藏、役者にて、足早に出る。花道にて

幸八　モシ〳〵、小萬さん、山の伊勢屋へお客を置いて、どこまで油を賣つて歩くのだね。

小萬　エヽ、お前も野暮な。わたしの行く先が知れぬかいな。

菊野　これいなア。いつもの大和町であらうわいな。

ゆみ　お前、いつも小萬さんの行かしやんすを、知らしやんせんかいな。

虎藏　成る程、小萬さんは大和屋によく似てゐるによつて、行く先は大和町。この虎藏ならば虎の門。

幸八　エヽ、お前もお株で、解らない事を云ふ。それよりおらア伴右衛門様が、火のやうになつてゐるであらうと思つて

小萬　ホヽヽヽヽ、なんだえ、番太郎が火の用心をするとえ。

幸八　モシ、洒落どころぢやアござりません。

菊野　幸八どん、一人で氣を揉んでおいで。

小萬　サア、菊野さん、源五兵衞さんの所へ行つて、思ひ入れ遊んで行かうわいな。どウれ〳〵。

ト流行り唄にて、この人數本舞臺へ來り、小萬こなしあつて

虎藏　ハヽヽヽヽ。こいつア大笑ひだ。そりやア内で云ふ事だ。

ゆみ　モシ、菊野さん、敎へておあげなさんせいな。

菊野　モシ、慥か、物もう、と云ふのぢやわいな。

小萬　ホヽヽ。さうかいな……物もう〳〵。

ト門口を叩く。この聲を聞き八右衞門、不思議さうに門口へ立つて來り、大聲にて

八右　どウれ。

ト云ひながら、沒義道に門口を明ける。皆々悄りして

小萬　エヽ、悄りしたわいなア。

八右　南無三、又うせた。

ト苦々しき顔して、門口をピッシャリ締める。源五兵衛、この様子を聞きつけ

源五　コレ、八右、表へ參つたは、誰れぢや〳〵。

八右　サ、表へ參つたは、犬めでござります。

小萬　ナニ、わたしを犬ぢやとえ。エヽ、わたしや犬ぢやない、人間ぢやわいな〳〵。

源五　コレ〳〵、犬ではないと申すぞよ。

八右　成る程、犬ではござりませぬ。狐でござりまする。しかも人を化かす、憎い狐めでござりまする

源五　狐なら內へ入れて、油揚でも食はしてやれよ。

八右　どうして〳〵、あの狐を門へ入れて、たまるものでござりませう。たつた今、棒で追ひ歸してしまひます。

小萬　モシ、源五兵衛樣、この人はわたしの事を、犬ぢやの狐ぢやのと、座敷を拔いて、折角來た者ぢらさずと明けて下さんせ。

ト門口を叩く。

源五　慥か、ありや小萬の聲ぢやが

ト源五兵衞立つて門口へ來るた

八右　イエ〳〵、ありや狐が女に化けたのでござりますぞえ」側へ寄らつしやりますな〳〵。

ト源五兵衞を上の方へ突きやる。此うち小萬、門口を明けて内へ入る。

小萬　人の事を、よう狐ぢやと云はしやんしたな。

八右　南無三、しまうた。

源五　そりやこそ、小萬が來た〳〵。

小萬　藤八どん、酒を持つて來ておくれ。

幸八　モシ〳〵、小萬さん、お前にさう御輿を据ゑられては、私しがしくじりやすわな。

虎藏　マア〳〵一旦、山の伊勢屋へ

小萬　否だよ。常から好かぬあのお客、顏を見てさへ癇癪にさはるもの。座敷を拔いて、源五兵衞樣の所へ來たからには、もう〳〵あそこへは行かぬぞえ。お前方も野暮を云はずと、サア〳〵、爰はわたしが內ぢや、入んなさんせ〳〵。

ト蒲團の上に居る。

幸八　イヤ、これにも困るわえ。

源五　コレ、小萬、今も今とて、てまへの噂を申して居つたところぢや。サア〱、皆の者、內へ入り給へ〱。

ト皆々內へ入り、膽を潰し

虎藏　ヤア、こりや怪しからぬ。爰のお內では、疊が他行なされましたか。

幸八　ほんに、煤掃きには氣が早し

菊野　オヤいかな。こりやマア、どうしたのでござりますえ。

源五　オヽ、こりやアなんぢやて……それ〱、今日普請を致すゆゑに、裏に疊屋は參つて居るし、大工は木場で木取りも致して居るが、コレ、八右、いつ頃建前になるであらうな。

八右　こいつは大笑ひだ。建前より、家主に店だてを

源五　エヘン〱。

ト思ひ入れある。

小萬　モシ、わたしや何ぢややら、仲町へ歸る事は、しみ〱嫌ぢやによつて、お前、どうぞして下さんせぬかえ。

トもたれかゝり、こなし。

源五　承知ぢや〳〵。仲町へ歸るが嫌なら、幾日でも、この家に逗留するがよい。
八右　この內に三日居たなら、藝者の干物が出來るであらう。
幸八　モシ、滑稽はのけて、あの件じるしが、大抵の腹立ちではござりませぬ。
虎藏　モシ、幸八どのが、あのやうに氣を揉んでゐるから、一旦出直してはどうだね。
小萬　イエ〳〵、もう爰の內は動かないよ。
幸八　エヽ、人ぢらしな。サア〳〵、小萬さん
　　　ト小萬の手を持つて引ッ張る。
小萬　アイタヽヽヽ。
　　　ト顏をしかめて思ひ入れ。
幸八　モシ、何が痛いのだえ。
　　　ト小萬の左の腕を取る。この時まくれて、ヽヽヽ五大力と彫つてある事。
虎藏　モシ、小萬さん、その彫り物はえ。
小萬　聞かれて云ふも氣恥かしいが、外の男に肌ふれまいと、浮氣を封じた入れ黑子、誓ひに彫つた五大力。

菊野　そんなら心に、心中立つて

源五　そりや又、誰れに

小萬　誰れにとは源五兵衛樣、見なさんせ、お前に立てし五大力。

源五　そんなら身共に……こりや嘘らしい。

小萬　エヽ、憎いなう。

ト抓る。源五兵衛、皆々の手前、氣の毒なる思ひ入れ。

虎藏　こいつは、あやかり者だわえ。

幸八　モシ旦那、こりやァ只では通されやせんぞえ。

小萬　それぢやによつて、是非ともわたしや爰の內に

源五　いつまでも歸しはせぬぞ。

小萬　きつとだね。わたしや今日から爰の內で、女房ぢやわいな〳〵。

ト立騷ぎ、こなし。

幸虎　こいつは大事になつたわえ。

八右　氣が違つたさうだ。

ト思ひ入れ。唄になり、向うより助右衛門、羽織、大小、深編笠にて出て來り、門口へ來て、

助右　頼みませう〳〵。源五兵衛、在宿おしやるかな。富森助右衛門でござる。

ト編笠を脱ぎ、内へ入る。

源五　イヤ、これは伯父者人、ようこそ御入來。まづは御機嫌よろしう

助右　一別以來、まづは堅固で……ハヽア、見れば疊も敷いてないが、ハテ、侘びた住居ちやな。

源五　ハヽヽヽヽ……コレ、八右衛門、お茶、煙草盆を持たぬかえ。

八右　モシ、其やうな物も、最前あの道具屋が

源五　エヘン〳〵。コリヤ、早うお茶をあげぬかえ。

ト叱りつける。八右衛門、オロ〳〵する。小萬、こなしあつて

小萬　ほんに、こりや七輪も茶碗も

トうろ〳〵して、茶碗へ手桶の水を汲んで差出し

サア、お茶一つおあがりなさんせ。

ト助右衛門、不思議さうに見て、こなし。

助右　イヤ〳〵、構はつしやるな。

ト取上げ、グツと飲んで

これは冷たい。こりや、水をくれられたな。

小萬　モシ、年寄りの冷水。なんと、よいお心持ちでござんせうがな。

助右　ハヽヽヽ。ながく氣の輕い女子ぢや。時に源五兵衞、先達てより段々の賴みゆゑ、身共もいはゞ伯父たる身の上。浪人ながらも千辛萬苦いたして、やうく才覺いたし、百金持參なしたが大分見馴れぬ衆が

ト思ひ入れ。小萬、百兩といふ事を聞き、思ひ入れ。源五兵衞、こなしあつて

源五　イヤ、この者どもは、この邊の者でござりまするが

トつかへる。小萬、こなしあつて

小萬　モシく、私しなら爰の內の

源五　アヽ、コレく……イヤモシ、伯父者人、この女中は、なんでござる……それく、この深川は正五九月は彼の八幡宮より、巫女が參りまして、神樂を上げまする。その巫女でござりまする。

ナ……コレ、巫女ぢやぞく。

ト小萬に吞みこませる。

小萬　成る程、わたしや巫女々々、巫女でござんす。巫女ぢや〳〵。
虎藏　モシ、巫女(猫)ぢや〳〵と仰しやりますがといふ唄が、昔流行りましたが
幸八　そりやアお前の若い時分の事。これは今出來立てのホヤ〳〵。
小萬　溫たかい巫女でござんす。
八右　コレ、巫女どの、此やうな所に長居は無用。神樂が濟んだら、一昨日ござらつしやい。
小萬　エヽ、又あのやうな事を……好かぬわいなア。
　トつんと思ひ入れ。
源五　併しながら、歸るがよからう。コレ、巫女どの、また荒神拂ひに
菊野　ほんに、あまり長うなつては惡からうぞえ。
虎藏　エヽ、おのれが伊之坊に逢ひたがつて
菊野　エヽ、また惡口かいなア。
ゆみ　ほんに、小萬さん、もうお歸りなさんせいなア。
源五　サア〳〵、巫女は歸つた〳〵。
小萬　エヽ、お前までが歸したがつて……覺えてゐやしやんせ。

トつんとして門口へ出る。

虎藏　ハヽヽ、巫女さんが素的に、熱くなつた〳〵。

幸八　巫女が熱くなれば、お湯花の始まり〳〵。

虎藏　どこどん〳〵。

ト幸八、虎藏、囃し立て、流行り唄になり、小萬、菊野、この人數向うへ入る。助右衞門思ひ入れ。合ひ方。

助右　流石繁華の土地ほどあつて、荒神拂ひの巫女までが、派手やかな事なア。ハヽヽヽヽヽ……時に、數右衞門、先達てより其許にも、義士の數に入りたき願ひとあつて、身共を以てたつての頼みなれど、何を申すも其方と三左衞門、當番の夜に御用金の紛失。合ひ役三左衞門はその砌り切腹。其許は添へ役ゆゑ、その科輕く御勘當。彼の御用金の盗賊めは、慥かに二人にて、一人は左の腕に、三つ星と一文字を、入れ黑子なしたる奴との風說。それはともあれ、其方には、紛失の御用金を償ひ、亡君の御勘當ゆりし上にて、義士の列に加はりたき所存でござるかな。

源五　是非とも仇討のお供いたしたき心願ゆゑ、紛失の御用金、三百兩のところ、過ぎし頃まで千辛萬苦いたし、二百兩は大星どのへ受納いたしたれど、殘りの百金は才覺に盡きましたるゆゑ、申さ

ば同じ一味の伯父者人へ、お氣の毒ながら右の才覺を、お頼み申したのでござりまする。

八右　へイ〳〵、何卒お旦那にも、義士の一味に加はりまするやうに、この下郎めも、共々お願ひ申しまする。私しも朝夕、それぱかりを神佛へ

助右　ハテサテ、奇特な其方と申し、小者の德右衞門とやらんまで實心に、甥の數右衞門を貢いでくれやるとの事。この助右衞門が身にとつても、大抵過分な事ではない。一つは其方達の忠義に免じて、甥の數右衞門が願ひ通り、百兩調達いたして參つた。サア〳〵、受取りめされい。

ト胴卷きより包み金百兩出して、源五兵衞の前へ置く。源五兵衞こなしあつて

源五　これは誠に伯父者人の御深切。この金子がある上は、拙者が願ひも……エヽ、忝い〳〵。コレ八右衞門、喜べ〳〵。

八右　これが喜ばずにゐられませうか。これと申すもあなたのお庇。エヽ、有り難うござりまする〳〵

助右　オヽ、喜ばしいか〳〵……コリヤ、數右衞門、この金子には一兩々々、ちぎりの極印が打つてあるが、申すまでもないが、其方才覺いたした體にて、由良之助どのへ持參なし、その身の願ひを……イヤ、これは身共も、共々執持つてあらうて。

源五　とてもの事に、その儀も何分

八右　偏へにお願ひ申しまする。

助右　承知いたした。然らばこれより石町へ參り、大星どのに逢つた上、萬端掛合ひ致し、又々後ほど吉左右を

ト立ちかゝる。

源五　然らば、萬事よしなに大星どのへ

ト助右衛門、門口へ出て立ちどまり

助右　コリヤ、八右衛門々々々々。

八右　へイ〳〵。

助右　異な事を申すやうぢやが、最前の巫女なぞは、あまり爰へ參らぬやうに

八右　エ。

助右　氣を附けてくりやれ。

トこなし。大拍子になり、助右衛門向うへ入る。源五兵衛思ひ入れあつて

源五　成る程、伯父なればこそ、浪人の身として、大枚のこの百兩。

八右　モシ、必ず仇に思し召しまするな。

源五　エヽ、忝い〳〵。

ト思ひ入れあつて、金を胴巻きへ入れて懐中する。佃節になり、向うより三五郎、足早に出て來り花道にて

三五　いま幸八と小萬が云ふには、あの源五兵衛の手へ、金が百兩入つたといつたが、こいつは聞き逃しにはならない。是非ともブツクリかけて

ト思ひ入れあつて、門口へ來り

御免なさいまし〳〵。モシ、源五兵衛さん、小萬さんが、是非とも逢はなければならぬといつて有り難いぢやアござりませんか。コレ、紅筆で書いたこの手紙。これを見さしつて、何にしろ逢つてやらつしやりませ。

ト鼻紙へ書いた文を源五兵衛に渡す。源五兵衛、これを見て

源五　成る程、この文の樣子では、遁れぬ用事のある樣子。こりや參つてやらずばなるまいが

三五　モシ、それをぶん流しになさると、取殺されやすぞえ。

八右　エヽ、來る奴も〳〵、一つ穴の狐。今日はどうして、旦那は遣られぬ〳〵。

源五　いかにもさうぢや。伯父者人が今の深切。こりや八右衛門が意見について、今日は宿に居ようわ

え。

八右　さうなされませ〳〵。それでこそお旦那大明神様ぢやわえ。

三五　エヽ、お前もマア、生若い形をして、戀を知らないな。モシ旦那、お前さんは、この人の野暮な意見に附いて、あれ程逢ひたがつてゐる小萬さんに、焦れ死をさせるのか。小萬さんが死ねば、二十歳頃からあの子の世話になつてゐるこの三五郎、お前方を敵と討ちやすぜ。ハヽヽヽヽ。イヤ、冗談はのけて、何だか知らないが、山の伊勢屋で、急腹を立てるやら、笄で前髪を搔きむしりながら、ボロ〳〵涙をこぼすやら、モシ、冗談は脇にして、可哀さうだ、行つておあげなさいやし。

ト媚てろ思ひ入れ。源五兵衛こなし。

八右　モシ、旦那、眉毛を濡らして、爰が辛抱どころだ〳〵。

ト思ひ入れ。

三五　そんならようございやす。これから歸つて小萬さんに、あの源五兵衛さんはお前をば、長棹にして、百年待つても無駄だから、こけ未練を起さずと、スッカリ思ひ切つて、おつりきな客に乗りかへなさいと、思ひ入れそくらをかつて、段切れにしてしまふが、ようございやすかえ。

八右　それこそ此方の望むところぢや。コレ、一生恩に着るワ。さうして下され〳〵。
三五　さうしないでサ。モシ旦那、ようござりやすか。

ト源五兵衞こなし。

ドレ、そんならこれから、緣切りの一段にかゝらうか。

ト行きにかゝる。源五兵衞、いろ〳〵思ひ入れあつて

源五　アヽ、コレ〳〵、三五郎々々、ハテサテ、われも氣の短かい。そんなら行かうかい。
八右　エヽ、情ない。それでは伯父御樣に私しめが
源五　何をおのれが……こま言云はずと、きつと留守いたせ。
八右　イエ〳〵、留守は出來ませぬ。私しも一緒に
源五　なぜ其方は、留守が出來ぬと申すのぢや。
八右　家主から店賃の立て催促で、居たゝまれるものではござりませぬぞえ。
源五　これはしたり、三五郎の聞く手前。コリヤ、家賃位ゐに差支へる身共ではない。爰にも金子一包、み、所持いたして居るワ。

ト三五郎に見せる。三五郎思ひ入れ。

八右　そりやソレ、たつた今、伯父御樣が

三五　ハヽア、小判で數も一包み

源五　エヽ、又しても默りをらう。家賃位ゐにこの金子を、遣うてはならぬ。

ト思ひ入れあつて、脇差の片しの笄を取つて

こりや後藤が作の千疋猿、これを預け物に致した上、家主へ拂うて遣はせ。

ト八右衞門へ笄を渡す。

八右　そんなら旦那樣、どうあつても

源五　三五郎、一緒に參れ。

三五　サア〳〵、早くお出でなされませ〳〵。

トせり立てる。八右衞門思ひ入れ。佃節になり、源五兵衞に三五郎附いて向うへ入る。八右衞門殘りこなしあつて

八右　ヤレ〳〵、憎い野狐女、何を云ふにも旦那が、あの小萬めに、餘ッほど伸びてござるわえ。アヽ、困つたものだ。ほんに困つたといへば、家主からの催促も

ト件の千疋猿の笄を見て

なんぼ後藤の細工でも、片しの笄。これで勘定濟めばよいが

ト あたりを見て

外に預ける物は塵ツ葉一本……ハテサテ、困つたものぢやなア。

ト 越後獅子の唄にて、思ひ入れよろしく、この道具ぶん廻す。

本舞臺、三間の間、中足の二重、舞臺正面、一面の腰障子、いつもの所に誂への枝折戸、その外建仁寺垣、すべて深川二軒茶屋伊勢屋の座敷の體。爰に伴右衛門、小萬を引附け、伊之助立ちかゝり、菊野、長八、お弓、中へ入り留めてゐる。この見得、流行り唄にて道具とまる。

伴右 イヤ〳〵、料簡ならぬぞ〳〵。

長八 マア〳〵、お靜かになされませ〳〵。

伴右 イヤ〳〵、料簡ならぬ。おのれゆゑに金銀を、塵埃のやうに蒔きちらす、この賤ヶ谷伴右衛門、なぜ心に隨はぬのぢや。

小萬 なぜというて、わたしや好かぬから

伴右 ナニ、好かぬからぢや。

菊野　ハテ、其やうに木折りで、藝者衆と色戀が。モシ、小萬さんも、よい加減に調子を合せて置くがようござんす。

小萬　イエ〳〵、わたしや好かぬ人とは、合せ袱紗がならぬわいな。

伊之　コレ〳〵、われが其やうに云つても、この兄さんの高下で、伴右衛門様へ遣らねばならぬぞ。否だと云やア

ト立ちかゝる。長八こなし。

長八　マア〳〵、兄貴、待たつしやい。わしやァ賣込みの判人で、今では賣れッ子の小萬さんでも、この子を引上げて、わしが判を入れて、金を借りたからには、なんぼ兄貴でも、手籠めにして疵でも附けさせちやア、判人が迷惑するワ。

伊之　コレ、その金を償のつて、小萬が體を身儘にしてやらうと、云はつしやる伴右衛門様、兄弟ともに浮かみ上がる穿索だワ。その旦那を否だと云ふ妹の小萬

作右　身共が武士は、立たぬぞ〳〵。これでは濟まぬ〳〵。

菊野　マア〳〵、わたしがどのやうにも、小萬さんに申しませう程に

ト杯を取上げ

あなた、マアお一つ、お上がりなされませ。

伴右　酒よからう。もう白桑酒とやらぢや、サア、つけ〳〵。

菊野　ハテ、其やうな事仰しやらずと、モシ、お弓さん、お酌を

ゆみ　アイ〳〵。

トお弓、酌をする。流行り唄になり、向うより源五兵衞、三五郎出て來り花道にて囁き、兩人拔き足にて門口へ來り、三五郎ちよつと門の戸を開け、伴右衞門と顏見合せ、こなしあつて又ソツと戸を締める。伴右衞門思ひ入れ。三五郎、源五兵衞、立聞きのこなし。

伴右　コレ〳〵、兄貴、一體小萬めが、身請けを嫌がるには譯があらう。コレ、判人の長八、存じて居るなら、その譯を申せ。

伊之　譯と云ふのは、外でもござりませぬが、有りふれた通り小萬には、惡い蟲が附いて居りますよ。

伴右　ムウ。その蟲は武士か、町人か、何と申す奴ぢや。

長八　慥か源五兵衞とかいふ、侍ひの浪人者に、この子が打込んで、身請けなさるといふ結構なお前様へ、今のやうな、ふて勝手。

伊之　いま〳〵しい貧乏神は、あの源五兵衞といふ侍ひでござりますて。

小萬　兄さん、たとへ今源五兵衛様が、しがない身の上になつたというて、元はといへばわたしから。それを見捨てゝ、なんぼ藝者の身の上でも

伊之　エヽ、その手は食ふものか。高が浪人の源五兵衛、てまへに引ツかゝらぬ内から、一文無しの素寒貧。コレ、何もかも、この兄が知つてゐるわえ。

ト源五兵衛思ひ入れ。三五郎こなしあつて、源五兵衛を花道へ連れ行き

三五　モシ、旦那、ちよつと聞いたところが、あの位なものだ。わしやァもう胸ツくそが悪くて〳〵、腹が沸えかへるやうでござりやす。又一つには小萬さんの心意氣も、可哀さうぢやァござりませんか。

源五　身共もあまり心持ちもようもないが……イヤ、此やうな所に居ては悪い。身共はもう、歸らう歸らう。

ト行きにかゝるを、三五郎引留めて

三五　モシ〳〵、それではあんまり、達引が無いといふもの。ちつとは小萬さんの心も推量して。エヽコレ、おれが金があれば、あの侍ひの横ッ面へ叩きつけて、お前に小萬さんの手を引かせて、見せつけてやるが、たつた百兩でも、口惜しいわい〳〵。

伴右　コレ、小萬、その源五兵衞とやらいふ浪人者が、百人寄つたといつて、大枚百兩といふ金が出來るものか。又この伴右衞門は、たつた今懷中から百兩出して、この小萬を女房にする。兄貴も、長八も、云ひ分はあるまいがな。

伊之　なんの云ひ分がござりませう。コレ、小萬、結構な旦那、又もや御意の變らぬうち

長八　あの貧乏神の、源五兵衞が事は思ひ切つて、是非とも伴右衞門樣の

伴右　女房になるか。

小萬　否でござんす。

伴右　ヤ。

小萬　コレ、見やしやんせ。

ト左の腕を捲り、こなし。誂らへの合ひ方になる。

浮氣な商賣しながらも、外の男に肌ふれまいと、誓ひに彫つた五大力。たとへわたしや殺されたとて、源五兵衞さんより外にゃ、男は持たぬ心の錠前。金銀づくの合ひ鍵で、明けられるなら明けて見やしやんせ。アイ、わたしや源五兵衞さんといふ、立派な侍ひの、女房でござんすぞえ。

伴右　そんならどうでも、この伴右衞門には

伊之　これといふのも、あの源五兵衞ゆゑ。思へば〳〵、いま〳〵しい
皆々　扶持離されだなア。
菊野　モシ、其やうな事云はしやんすな。ひよつと源五兵衞さんが聞かしやんしたなら
ゆみ　大抵腹立てる事ぢやござんすまいぞえ。
伴右　聞いても大事ない〳〵。また腹が立つなれば、たつた今爰へ、百兩出して見ろ。
伊之　何のつきに、百兩どころか。
長八　小二朱判の一つも工面が出來るものか。源五兵衞の
三人　貧乏神めが。ハヽヽヽヽ。
　　ト敵役、こなしあつて云ふ。門口の三五郎、ムツとこなしあつて
三五　エヽ、もう料簡が、ならねえ〳〵。旦那、入らつしやりませ。
　　ト無理に源五兵衞を連れ、内へ入る。
小萬　ヤ、源五兵衞さん、ようマア爰へ
皆々　そんなら、これが
菊野　それ見やしやんせ。わたしが云はぬ事かいな。こりやマア、大抵では濟むまいぞえ。

ゆみ　モシ、菊野さん
　　ト囁く。

菊野　ほんに、爰に居ては……サア、來やしやんせ。
　　ト菊野、お弓、こなしあつてツイと奧へ入る。三五郎こなしあつて

三五　コレ、どいつも、こいつも、源五兵衞樣がお出でだぞ。百兩位ゐな金はいつでも懐に、持つてござるまいものでもないぞ。貧乏神か、福の神か、仕上げを見て、たわ言を吐きやァがれ。誰れだと思ふ。この三五郎がお附き申したお客人だぞ。

源五　コレサ〱、三五郎、其やうに大風な事を申すな。成る程、身共は、貧乏神の浪人者。いま門口にて聞けば、あのお侍ひが、この女を身請けとやら、決して身共に遠慮はござらぬ。女房になりとも、妾になりとも、勝手次第に

三五　モシ〱、旦那、そりやァ何を仰しやりまする。それでは小萬さん始め、お附き申したこの三五郎は、どこで立ちます。

小萬　モシ、源五兵衞さん、どうぞよい思案は、ござんせぬかいなァ。

伊之　モシ、源五兵衞さんとやら、これまで段々妹をお世話。私しは妹が庇で、暑くなく寒くなく

暮らして居りましたが、モシ、有り難うございます。

トなじろこなし。

長八　なんの事たね。身請けの切端のこの所へ、ズッと入つて來たからは、百兩金を抛り出すのかと思へば、イヤ、こいつは大笑ひだ。

伴右　コレ、長八、そりやア云はずとも知れてある事。この伴右衛門は高野の家來、金の事なら跡へは引かぬ。以前は大家の扶持人か存ぜぬが、當時は浪人、編笠に高砂やアの口では、なアに身共に齒が立つものか。

三五　エヽ、口惜しいわえ／＼。モシ／＼、旦那、あれを聞いては

源五　ハテ、彼方は全盛なお侍ひ、此方はしがない浪人者。どうしてこの源五兵衛なぞが、齒が立つものか。

三五　エヽ、小自烈てえ。

源五　ハテ、捨てゝ置きやれ。

トなだめる思ひ入れ。

三五　して、小萬さん、お前はこの場を、どうしようと

小萬　どうといふなら、頼みに思ふ、源五兵衛さんはあの通り。わたしやモウ、覺悟をきめて
　　　ト源五兵衛が脇差へ手をかけ、死なんとする。
源五　コレ、小萬、そちや何をするのぢや。
小萬　何をするとは、エヽ、聞えぬわいな、源五兵衛さん。
　　　トこなし。
三五　成る程、こいつは死なずばなるまい。小萬さん、尤もだ〳〵。
伊之　こいつは面白い。死ぬなら死ね。妹を見殺しにすりやァ、源五兵衛どのとやら、この兄が存分
　　お禮を申しやす。サア妹、死ね〳〵。
伴右　コレ、それとも、この伴右衛門の心に隨ひ
長八　玉の輿に乘る心か。
小萬　なんの穢らはしい。どうでわたしは
　　　トまた手をかけるを、源五兵衛、脇差を取上げ、小萬を上の方へ突きやる。小萬、思ひ入れあつて、
　　　伴右衛門の脇差を取つて
源五兵衛さん、あの世できつと……南無阿彌陀佛。

ト死なうとする。源五兵衞思ひ入れあつて

源五　アヽコレ、待て。

小萬　エヽ。

ト源五兵衞、いろ／＼あつて

源五　身請け致さう。

伴右　すりや、浪人どのが

皆々　百兩を

ト源五兵衞、懷中より、以前の包み金を取出し

源五　サア、封金百兩、小萬が身の代、慥かに受取れ。

ト前へ金を出す。

皆々　ヤア、正金百兩、こりやどうだ。

ト長八、金を受取り

長八　成る程、人は見かけによらぬもの。この浪人どのが、百兩を

三五　やかましいわえ、この長ツ面野郎め。コレエヽ、市川丸の笹の三五郎が、附いて來たお客だぞ。

誰れだと思ふ

長八　エヽ、面も長い。（つがもれえ）

三五　なんだ、この唐變木め。

ト長八を毆り倒す。よき時分より、助右衛門、八右衛門、下座より出て、門口に窺ふ。源五兵衛思ひ入れあつて

源五　浪人しても身共も侍ひ。賤ヶ谷作右衛門どのとやら、ちつと御意得たい。

伴右　ヤ。

源五　イヤ、それは格別、コリヤ、二人の町人、その百兩で小萬が身の上に、云ひ分ないか。

伊之　なんの云ひ分ござりませう。たとへどなたでも、金さへ出して下されば

長八　云ひ分はござりませぬ。

源五　其方に云ひ分がなうても

助右　此方に云ひ分あるわえ。

トずつと内へ入る。皆々思ひ入れ。源五兵衛、恟りして

源五　ヤヽ、あなたは伯父者人、どうして爰へ。

助右　どうしてとは、うぬ、こゝな人でなしめが。

ト きつと寄るを、八右衞門とめ

八右　アモシ、場所と申し、滿座の中、どうぞ御料簡を

助右　邪魔いたすな。

ト 隔てる八右衞門を突きのけ

〃　おのれはなア。

ト 源五兵衞の胸づくしを取る、誂への合ひ方。こなしあつて

ヤイ、こゝな人畜生めが。日頃おのれが忠義々々と吐かすを、年寄つたこの伯父は、誠と心得、夜の目も合はさぬ心配に、才覺いたして持參なし、最前渡したあの金子も、誠の武士に致してやりたさ。その心も汲み分けず、その體裁、そりや何事。コレ、おのれが放埒の入用に、遣へというて渡したかやい。この儀を忠心第一の、御家老どのに沙汰あらば、我れ〳〵までが不覺となり、どの面下げてオメ〳〵と、人前へ罷り出られやうぞやい。エヽ、ずた〳〵に切りさいなんでも、飽きたらぬ奴。おのれ、この場に於て

ト 立ちかゝるを、八右衞門縋つて

アヽ、御尤もでござりまするが、遊里と申し且つは又、主人の胸中、下郎がとくと、お聞き申したその上にて

助右　エヽ、何を此奴が胸中に

八右　場所柄でござりまするぞ……モシ

トこなしあつて引とめる。助右衛門、ヂッと思ひ入れあつて

助右　成る程、思つて見れば、畜生のやうな奴を手にかけては、六十年來研ぎすました、刀の穢れ。エヽ、甥と思ふも穢らはしい。未來永々、伯父でないぞ。

ト思ひ切つて行きにかゝるを、八右衛門とめて

八右　モシ、あなたの御縁が切れましては、主人の身の上

助右　エヽ、思へば／＼、馬鹿な奴めが。人外めが。

ト振り切つて、こなし。唄になり　助右衛門、足早に向うへ入る。八右衛門こなし。

八右　モシ、旦那様、それぢやによつて私しめが

源五　どうするものだ。たとへあの伯父に勘當されたといつて、一旦小萬が入用に、遣つた百兩の金、覆水盆に返らぬ譬へだ。

八右　ぢやというて、お前様は

源五　やかましいわえ。こま事ぬかさず、すツこんで居れ。コレ、伴右衛門どのとやら、この源五兵衛が、ちよつと近附きになり申さう。

伴右　サ、身共もお近附きになりたいが、只今急に疝癪が、アイタヽヽヽヽ。

伊之　成る程、おいらも足許の明るいうち

ト三人立上がるを

源五　イヤ、待たつしやれ、お侍ひ。

伴右　アイヤ、ちよつと手水に、コレ、案内いたせ。

ト伴右衛門、伊之助、コソ／＼逃げて奥へ入る。

源五　ハヽヽヽヽ、ハテ、張合ひの無いあの侍ひ。それはともあれ、もうこの上は、とても濡れたる袖とやら、小萬は身共が婦妻に致す。これより直ぐさま。小萬、來やれ。

ト手を取る。

小萬　そんならわたしや、お前の所へ

トこなし。三五郎もこなしあつて

三五　モシ旦那、ちよつとお待ちなされませ。

源五　待てといふのは、そりやナ何を

三五　外の事でもござりやせん。小萬さんの借金は、拂つておもらひ申しましたが、お氣の毒ながらこの子にやア、亭主がござります。その手を切らぬ、其うちは

八右　ナニハ、この女中に亭主があるとか。

源五　して、小萬、其方の男といふは、何者ぢや。

小萬　サア、それはナ

源五　コリヤ〳〵、三五郎、小萬が男といふは何者ぢや。

ト三五郎こなしあつて

三五　わしでごんす。

源八　ヤ。

ト双方見合つて思ひ入れ。きつぱり合ひ方。

三五　亭主といふは小びんながら、この三五郎サ。ありやうは、この小萬は、わしが女房。拵ぎ女へどうぞして、いゝ客をくツつけようと、魂膽した甲斐あつて、源五兵衛様、只今までは、剛氣にお

世話をかけました。

源五　そんなら夫婦馴合ひにて、この源五兵衛を、深い所へやり居つたか。

三五　それといふのも、金が敵の娑婆世界サ。

八右　そんなら旦那を二人して。エヽ、成る程、世にはすたつた人も

三五　義理や浮世を考へて、一生抱き寝をする女房、多くの人のなぐさみものに、稼いでゐられるものか。とは云ふものゝ、實は氣の揉める穿索サ。

源五　すりや、いよ〳〵小萬めも、亭主のおのれと同心にて

小萬　サア、腹立たしやんすは尤もぢやが、これには段々云ふに云はれぬ

三五　エヽ、役にも立たない女の口出し。コレ、何事もこの胸に

小萬　それぢやというて

三五　エヽ、やかましいわえ。

源五　小萬が色香に迷うたは、この身の不覺と云ひながら、いかに匹夫の下素下郎ども、さほどまでにも人情捨てゝ、人の財を貪り取る、思へば憎くき人非人。この場に於て

トきつと思ひ入れ。ズツと立つて刀を引下げ、立ちかゝるを、八右衛門とめて

八右　モシ、大事を抱へし、あなたの身の上。
源五　あまりと申せば
八右　ハテ、ぢつと辛抱さつしやりませ。
　　ト思ひ入れ。源五兵衞「ムウ」と息込む。三五郎思ひ入れあつて
三五　騙された腹ッ腹で、そんならこなたは二人を切る氣か。サア、切るなら切らつしやい、だが、浪人ならば町人も同然、一人切つても下手人ものだ。茶屋盛り場のすッぱ拔き、忽ち階子棒づくめ殊に小萬は親方の、借金拔けばおれが女房、云はゞこなたは間男だ。おれを逆捻ぢに、切れるなら切らつしやい。
　　トこなし。源五兵衞思ひ入れ。八右衞門、堪り兼ねて
八右　エヽ、畜生のやうなおのれ等に、惡口されてもお旦那は、願ひある身の御辛抱、側で聞きゐる八右衞門……もう料簡が
　　ト立ちかゝるを、源五兵衞とめて
源五　ハテ、捨て置けく。
八右　でも

源五　コレ、なんにも云ふな。人ではないわえ。

ト よろしくこなし。唄になり、八右衛門を叱りつける。是非なく扣へる。源五兵衛、歸らんとこなしあつて、二兩人胸にをさめ、向うへ入る。跡に小萬、堪り兼ね

小萬　モシ、いかにお主の爲ぢやというて、何にも科ない源五兵衛さんを、今も今とて伯父御樣の御勘氣、それもお前とわたしゆゑ。わしやアどうもこの胸が

三五　尤もだく。女の狹い心からは、さぞ氣の毒にも思はうが、何を云ふのもお主の爲。とは云ふものゝ、源五兵衛どの、さぞや二人が憎からう。

ト 思ひ入れ。流行り唄になり、奥より伊之助出て來り

伊之　コレ、三五郎、どうやらぐるになつて、首尾よく百兩。サア、其方へ渡さう。

ト 件の金を三五郎に渡す。受取つて

三五　御大儀々々々々。おぬしが小萬の兄も、巧いものであつたが、あの勘九郎が侍ひ客で、餘ッほど味なやつたな。

伊之　禮はしつかりあるだらうな。

三五　そりやアこの三五郎が胸にあるワ。

伊之　有り難い。コレ、小萬さん、お前、强勢に爵いでゐるな。
小萬　わたしやあの源五兵衞さんへ、今更どうも
伊之　なんの氣の弱い。併し、どこの女も同じ事、あの菊野のあまも、素的に氣の毒がる奴よ。
三五　コレ、何を云つても根が侍ひ、今の氣振りで歸つたからは、今夜は油斷はならねえわえ。
小萬　わたしや泊つて行かうかいな。
三五　イヽヤ、爰は泊れない。あの白身番橫町の松虎の內で
小萬　モシ、伊之助さん、お前もあの菊野さんを
伊之　連れて來いとか。そんなら今夜は、おいら二人が請ける役か。
三五　馬鹿を云へ。なんの珍らしくもない。
伊之　覺ましてあがれ。

ト小萬を三五郞の方へ突きやる。

小萬　エヽ、冗談な。

トそのまゝこけかゝり、三五郞を引寄せ、顏見合せるを木の頭

三五　コレハ何をするのだ。

ト此の仕組みよろしく、流行り唄にて、ひやうし引附けると佃のツナギにて引返し。

幕

本舞臺、三間の間、正面一面の二重舞臺、茶壁、上の方九尺の二階、誂らへの炭櫃あり、蹴込み、建仁寺垣、下の方一間の泥壁、下地窓、好みあり、その下柴垣、植込みの體、すべてこの道具に誂らへあり、流行り唄、時の鐘にて幕明く。

ト二階には三五郎、小萬の彫り物を三五大切に直してゐる。舞臺には伊之助、菊野、とりやつてゐるを、虎藏この中へ入り、なだめてゐる。長八、伴右衞門、オヽ〳〵とけしかけてゐる。

虎藏 コレサ〳〵、お前方、なんぼ心安いおれが内だといつて、近所あたりへ外聞が惡いわな。マア、靜かにしなさい〳〵。

菊野 それぢやというて、可哀さうに源五兵衞さんを

伊之 エヽ、小まつちやくれた事を云ふな。何をてめえが、そんなに氣の毒がる事があるものか。

菊野 ぢやというて、小萬さんも、いつそモウ

小萬 モシ、わたしもあの事を思ひ出すと、一倍氣色が惡うなるわいな。

長八　なんの氣の弱い。そんな事で藝者の商賣がなるものか。おいらもその一件では、友達のよしみに判人の眞似をして、築地丸むきでやらかしたッ。

伴右　それ〳〵、おれも賤ヶ谷伴右衛門といふ、侍ひの眞似をしたが、爰の亭主に見せたかつたぜ。

虎藏　一體お前は、あの染五郎に似てゐるよ。

伴右　氣障な事を云はつしやる。あんな奴に似て、おたまりこぼしがあるものか。

小萬　これいなア、其やうにせずとも、ツイ灸すゑて濟ますがよいわいな。

三五　イヤ〳〵、所を、針を加へて三五大切。

伊之　ハヽア、そんならあの源五兵衛を、かきのめす狂言に、五大力と彫つたのか。

三五　癇癪にさはるから、三五大切とは、どうだ〳〵。

皆々　イヨ〳〵、三五大切さま〳〵。

虎藏　モシ〳〵、大切さまは、葛西の柴又ではねえか。

皆々　おきやアがれ。ハヽヽヽヽ。

トこなし。向うより若い者一人、杵正の提灯をともし、走り出て來り

若者　モシ〳〵、虎藏さんはお内かね。

虎藏　杵正の若い衆か。

若者　モシ〳〵、代地の旦那が、わしどもの内へござつて、ちよつと虎藏を呼んで來てくれろと云はつしやります。サア、早くお出でなされませ。

虎藏　アイ、代地の旦那なら、行かずばなるまい。

伊之　コレ、また慾張りの筋だな。

虎藏　ハヽヽヽ、大きにそこらサ。

ト羽織を引かけ、門口へ出かゝり

モシ、女房も今日は和泉町の、師匠の所へ行つたから、おとなしく留守を頼みますぞえ。

二五　アイ〳〵、留守はわしが、しつかり預かつたよ。

虎藏　サア行かう。

ト若い者附き、虎藏向うへ入る。

小萬　モシ、今彫つた所が、何ぢやゝら、ヒリ〳〵してならぬわいな。

三五　エヽ、てめえの可愛がるおれのした事だもの、辛抱しろ。

小萬　オヤ、きつい事だね……寒いわな。

ト寄り添ふ。兩人こなし。

長八　エヽ、畜生め。氣が揉めるワ。コレ、二階で二人はあの通りいちやつくし、伊之公は菊野といふ相手があるが、つまらぬ者はおれ一人だ。

伴右　つまらぬ者はおいら二人。

長八　コレ、よまぬ同士かゝぬ同士で、鶯でも追ひに行かうか。

伊之　併し、それでも源五兵衞の間抜よりは、まだ氣がきいてゐるな。

三兵　コレ〳〵、てまへ達が鶯を追ひに行くなら、附合ひだ、おれも一緒に行かう。

小萬　エヽ、人ぢらしな

ト二階の障子をしめる。皆々思ひ入れ。

伊之　菊野、てまへ、何を其やうに鬱ぐのだ。コレ、おれも二階の樣子を見て、おつな心持ちになつて來た。此方へ來やな。

ト手を持つて引ッ張る。

菊野　モシ、それでも廻しの幸八どのが

伊之　彼奴には三五郎が、二分摑まして置いたから、苦勞にする事はない。カウ、二人ながら大目に頼

むぜ。

ト菊野の手を引いて上の屛風の中へ入る。

長八　おきやアがれ。委皆おいらが身の上は、初午の狸といふものだ。

作右　いま〳〵しい。直ぐに爰へ寝てくれべい。

トあたりにある五布蒲團をかぶつて寝る。

長八　これサ、初心な者だぜ。おれも寝さして下ツし。

ト作右衛門が着たる蒲團の中へもぐりこむ。時の鐘、誂らへの合ひ方になり、眞中の下地窓を破り、源五兵衛、顔を出して窺ふことあつて、そろ〳〵窓を破つて、拔刀にて内へ入り、こなしあつて屛風を明け、伊之助菊野が寝てゐるを透かし見て、三五郎小萬と心得、疊みかけて切り下げ、トヾ兩人が首を一度に打落す。この物音に二階を明け、三五郎小萬窺ふ。源五兵衛、行燈を取つて來るを見て、二階の兩人あわてる事。此うち源五兵衛、兩人の首を取直すと、兩人とも眞向きになる。此うち二階の三五郎、炭櫃を明け、その穴へ小萬を入れ、自分も入り、穴より手を出し、炭櫃を元の通りに直し置く。源五兵衛、首を見て、これではないといふこなしにて、上の二階へ上がり、探す事。この時二階の下の垣根を破り、中より三五郎小萬出て、逃げる心にて、寝てゐる長八に爪づく。長八目を覺まし

長八　アイタヽヽヽヽ。誰れだ〳〵。

トこなし。この聲を聞き源五兵衞、二階より下りて來るゆゑ、三五郎小萬は、あわてゝ伊之助の蒲團をかぶつて倒れゐる。源五兵衞再び下りて尋ねるを、長八見附けて

ヤ、源五兵衞か。

ト起上がるを、源五兵衞ポンと首打落す。この首屏風の緣へシヤンと乘り、暫くおつてツル〳〵と落ちる仕掛け。伴右衞門、この物音に驚き

伴右　ヤア、人殺し〳〵。

ト聲立てるを源五兵衞、蒲團越しに無暗に突く。伴右衞門苦しみ、蒲團の中より這ひ出すと、糊紅になり、源五兵衞の脇差へ手をかけるを蹴飛ばす。これにて片しの笄、伴右衞門が手に殘り、倒れる。源五兵衞、行燈を下げ、三五郎小萬の上を踏みこえ、奧へ入る。これにて兩人、慄へ〳〵、やう〳〵に門口へ出る。矢張り捨て鐘、凄き合ひ方。この時向うより幸八出て來り

幸八　あの小萬さんと菊野さんの迎ひが、剛氣に遲くなつたわえ。

ト此やうな事を云ひながら舞臺へ來り、兩人と摺れちがふ。幸八は門口へ、三五郎小萬は花道へ行く。この時、源五兵衞出て來り、幸八、內の樣子を見て

ヤア。

ト源五兵衛を見て

人殺し。

ト云ふを、源五兵衛一太刀浴びせる。これにて幸八「アツ」と云ふ。この聲に花道の三五郎小萬、ベツタリと下にゐる。伴右衛門起上がつて、むしやぶりつくを、源五兵衛踏みとばしてグッと突つ込む。木の頭。幸八、大袈裟に體割れる仕掛け。源五兵衛向うをキッと窺ふ。早い三重もやうへ、こん送り、この仕組みよろしく、ひやうし

幕

ト幕の外、三五郎小萬手を取合ひ、慄へ／＼向うへ走り入る。跡シヤギリ。

大詰

四谷鬼横町の場
愛染院門前の場

役名——薩摩源五兵衛實ハ不破數右衛門重種。家主、くり廻しの彌助。笹野屋三五郎。若黨、六七八右衛門。徳右衛門道心了心。高野家中、出石宅兵衛。里親嘷ア、おくろ。男藝者、喜佐吉。夜番人、太郎七。日雇取り、鮫ヶ橋の市。願人、ます／＼坊主。鬼横町の辰。男藝者、喜之助。

日雇取り、鐵。姐妃の小萬實ハ神谷召使ひお六。

本舞臺、向う大津壁、押入れ、戸棚、上の方、障子屋體、下の方、火の番小屋、門口櫺子窓、雷圖面の反故にて貼りつめ、めくりかゝり居り、よき所に揚げ板、門口の横に紙札に「勝手に付化物引越申候、家主」としるし、すべて四谷鬼横町、神谷氏住居、古びたる内の模樣、鳴り物、てんつゝ、角兵衞獅子にて幕明く。

ト爰に八右衞門、勝手道具、炬燵櫓、上流し、六枚屏風、行燈、その外、いろ／＼の道具を、市、鐵、辰、いづれも合ひ長屋の者、やつし形にて、繩にてからげ、片附けてゐる。門口に、ます／＼坊主、つゞれを着て、生酔ひの體にて立つてゐる。

市　モシ／＼、昨日越して來て、まだろく／＼お名も存じませぬが、もうお越しなされまするか。

八右　左樣でござりまする。昨日引移りましたが、俄かに今日轉宅いたしまする。

鐵　それは急な事でござります。私しは昨日下された、引越し蕎麥のお禮さへ、また申しませぬて。

辰　お前も氣の短かい。昨日越して、直ぐに今日また越すとは、それでは樽代の損になりますぞえ。

八右　イエ／＼、樽代の損ぐらゐは不請します。モウ／＼／＼、この店には居られませぬ。化け物が出

ますワ。

三人　イヤア。

市　道理で大屋さんが、門口へ、化物勝手につき引越したといふ札を貼らしつた。

ます　ナニ、化け物が出るえ。爰のお内へかえ。こいつは、ます／＼、めでたい／＼。化け物が出るとは、恐れ久松。ます／＼めでたい／＼。

三人　やかましいワ。また酔つたな／＼。通れ／＼。

ます　イヤア、通れとは、ます／＼めでたい。ドリヤ、通つて御馳走にならうか。イヤア、ます／＼。

トよろしく内へ入る。

八右　ヤイ、酔どれ坊主め、なんで内へ通り居るのぢや。

ます　それでも、あの衆が、通れ／＼と仰しやるから、ます／＼通つて

トよろ／＼する。三人立ちかゝつて

三人　エヽ、通れとは、あつちの方へ通れと云ふのだ、勝手な方へ、通れ／＼。

ト外へ連れ出す。ます／＼坊主、よろ／＼と倒れ、思ひ入れあつて

ます　コレ、この手合ひは、なぜ投げ出した。イヤ、ます／＼料簡がならぬ／＼。

三人　エヽ、ます／＼打ッ挫け／＼。

ト立ちかゝる。八右衞門、捨ぜりふにてこれをとめる。矢張りてんつゝ、角兵衞獅子にて、向うより彌助、家主の拵へにて、お觸れ書の貼り板を提げて出て來り、門口の樣子を見て、この中へ入り、ます／＼坊主を引退け

彌助　これはしたり、長屋の手合ひ、何を騷がつしやるのだ。

市　モシ／＼、大屋さん、この坊主が又醉つて來て

三人　ふざけますわな／＼。

ます　ふざける／＼、ふざけの蟲や赤蛙、ます／＼／＼

彌助　やかましいワ。洒落やアがるな。また醉つたな。掃き溜へでも入つて寢やアがれ。

ます　イヤア、掃き溜へ入つて犬と一座は、恐れ久松、ます／＼

ト番屋の門口へ倒れて寢る。彌助内へ入つて

彌助　これは御亭主、昨日は引越し蕎麥を忝うござる。時に、片附きましたかな。

八右　モシ／＼、片附いたどころではござりませぬ。大屋樣、わしはモウ、引ッ越しします／＼。

辰　昨日越して今日越すゆゑ、長屋の者も附合ひでござるから、今とめてゐる

三人　最中でござりまする。

彌助　コレ〳〵、咋日越した八右衞門どのとやら、お前マア、何で俄に引ッ越すのだえ。

八右　サア、わしも有りやうは、樽代の二朱づゝとは高いもの、併し家賃が三百、こいつが廉いによつて、大概な事なら辛抱する氣ぢやが、もう〳〵、住はれませぬ〳〵。その譯といふは、モシ、大家樣、咋夜爰へ一人寢たら、八つ時分の頃、寺町の鐘がゴンと鳴ると、その時あの糠味噌桶の際から、白い幽靈がヌッと出ました。

三人　ヤア。

八右　サア、其やうな幽靈の出る店には、片時も居られませぬワ。門口には、「勝手につき化け物引越し申し候ふ」といふ札を貼つて置きながら、化け物と幽靈は違ふかは知らぬが、わしは何方も氣がござらぬ。そこでお長屋の衆に話して、越しまするのぢや〳〵。

ト諸道具を揚げながら、こなし。

彌助　そりやアモウ、錢は貴樣の物、家は大屋の物、勝手にするがよいが、一晩寢ても家賃は同じ事、三百取ります。その代り、樽代の二朱は取りきりでござるぞ。なんと、解つた家主でござらうが。

八右　イヤハヤ、怪しからぬ店へ引ッ越しました。誠に好い長屋でござります。

彌助　併し、その筈の事でござるて。近頃まで、神谷仁右衛門樣が、この家を借りて居られました。その時分もお内儀の、お岩どのゝ幽靈が出ました。一體仁右衛門樣は、わしが爲には古主の衆、その縁によつて、暫く住はれました。その跡へ又、師直樣へお出入りの大工もゐましたが、その時も幽靈が出たといふが、一體お岩の死靈と見えまする。

鐵　左やう／＼、その高野へお出入りの大工どのは、わしも心安くしたが、矢ツ張り、直ぐに越して行きました。

辰　さうして見ると、死靈の祟りかな。

彌助　そりやアモウ、どなたが越して、半日住はうとも、店賃は殘らず取りますといふのが、わしが長屋のきまりでござる。貴樣も越すなら、一月分拂つて行かつしやい。

八右　そりや法外でござらう。コレ、樽代は返して下さりませ。

彌助　イエ／＼、返しませぬ。わしが店へ疵を附けては、地主の手前、大屋が立ちませぬ。たつて樽代を返せなら返しもせうが、その代り一年分拂つて立たつしやい。さもないと、貴樣の諸道具をとめるから、さう思はつしやい。

八右　イヤ、云へば云ふ程、手前勝手になる大屋樣ぢや、一日住つて一年分出せとは、滅相な人ぢや。

彌助　なに家主が横を云ふものか。女幽靈の出る店に、一晩でも泊つたら、大方幽靈を抱き寢をしたであらう。して見れば、店賃は表向きで、正は幽靈の手切れでござるぞ。さうして見りやァ廉いものだ。

八右　なんぢや、幽靈の手切れぢや。コレ、わしがやうな者でも、幽靈を抱き寢がならうかいの。なう、お長屋の方。

二人　さうサノ〳〵、幽靈を買ふには、湯灌場を借りねばなりますまい。

彌助　否でも應でも手切れを取る。寄越さぬと、諸道具をとめるワ。

八右　イヤ〳〵、とめるならとめて見さつしやい。

彌助　オヽ、大屋がとめて見せるわえ。

ト双方せり合ふ。長屋の者は捨ぜりふにてとめる。矢張り角兵衞獅子の鳴り物にて、向うより太郎七番太の形にて駈け來り、彌助を見て

太郎　モシ〳〵、彌助さん〳〵、爰にござりましたか。

彌助　オヽ、太郎七か、何ぞ用か〳〵。

太郎　モシ、好い口がかゝりました。いま寺門前で、夫婦者の若い人が、疊や諸道具を擔いで、爰らで

好い店があらば借りたいと、探して歩くから、幸ひと幽靈の出るこの店を、化け物の出る面で、好い店があるから、わしが借りてやりませうと云つたら、嬉しがつて今來ます。昨日越した人は今日又越すといふ話し。早う追ッ立て、後の相談して、樽代を取るがようござりますわな。

彌助　イヤア、そいつは好いお客が取れたな。さう聞いては……コレ〳〵、貴樣は早く、越して下さい越して下さい。

八右　イヤ〳〵、後の借り手があると聞いて追ッ立てるのか。さうはさせぬッ。わしも又、幽靈の出る家の、越し料取つて越す。それ取らぬ内は、滅多にこの家を、越す事ぢやない〳〵。

トじや〳〵座る。

三人　イヤ、この人は氣が強うなつたわえ。

八右　なに越す事ぢやござらぬ。たつてと云ふと、後から來る人に、この内は化け物が出るから、その含みで相談さつしやれと、わしが又告げ口するが、それでもよいか。

彌助　アヽ、コレ〳〵、それを云はれては物がない。そんなら斯うせう。この間取つた樽代の二朱を、半分返さう。それも越して人が來て、樽代を取つた上の話しだ。よしか。その積りで、越して下さい。越して下さい。

八右　アヽコレ、半分では濟まされぬが、家主どのゝ折角の頼みぢや。店子のわしも、半分の樽代を取つて越しませう。

彌助　イヤ、それでは相談が極まりました。

皆々　めでたい〳〵。〆ませう〳〵。

ト八右衞門皆々手を打つ。ます〳〵、坊主、目を覺まし

ます　ます〳〵めでたい〳〵。

太郎　エヽ、やかましいわえ……時に大屋さん、引ッ越し手合ひを呼んで來ませうか。

彌助　さうしてくれろ。

八右　わしもこの諸道具を、そこらまで持出して置かうか。

太郎　さうしなさい。幸ひわしらが番屋へ、やつて置きなさい。

八右　さうしませうか。

三人　手傳つてやりませう。

ます　爰にゐては邪魔だな、ます〳〵。

ト番屋の脇へ入る。八右衞門、件の三人、道具を番屋へ運び込み

彌助　そんなら八右衞門、明日までも、番屋へごろ附いてゐさつしやい。
太郎　ごろ附くなれば幸ひと、お岩稻荷樣の太鼓がある。枕にしてごろ附きなさい。
八右　心得ました。當分番屋のごろ附きになりませう。
三人　わし等はこれから錢湯へ
太郎　引ツ越し手合ひを呼んで來ようか。
八右　併し、この又番屋へ、化け物が出ねばよいが
ト角兵衞獅子の鳴り物になり、八右衞門、番屋へ入る。太郎七、先に長屋の三人、捨ぜりふにて向うへ急ぎ入る。彌助殘つて
彌助　ほんに、人殺しのお觸れが廻つたに、引ツ越し騷ぎでサツパリ忘れた。併し、賣り物には花だ。ドリヤ、古家をこそくつて置かうか。
ト腰より鐵鎚を出し、家のまはりよき所を、無暗に叩きちらしてゐる。てんつゝにより、向うより太郎七、木綿夜具大風呂敷のまゝ擔ぎ、片手に笹野屋といふ火繩箱を提げ、三五郎、廣袖、やつし船宿の拵へにて、下駄を穿き、四斗樽へ、傘三味線棕梠箒、臺所道具を入れ、笹野屋と記せし船宿の看板行燈、その外入用の道具を、疊一疊の上へのせ、細引にてからげ、船の艪を棒にして、おくろ、年增女

の里親にて、赤子を肌に背負ひ、先棒に擔ぎ、跡棒は三五郎荷うて出る。跡より小萬、手拭をかむり一升德利と黒塗りの鰻屋の岡持を提げ、鏡臺と鏡を繩からげにして、これを引摺り、草履下駄にて出て來り、花道にて

小萬　コレ、三五郎さん、なんだか素的に馬の通る所だの。そして、越して行く內はどこだえ。

太郎　アイ、向うの內でござります。

くろ　モシ、三五郎さんえ。わたしはお前の所へ、里扶持を取りに參つて、それは取らずに、斯う又使はれては、一分四百では合はねえものだね。

三五　コレ、里親のかみさん、婆アを云はねえものだ。こなさんを使つた代りには、里扶持の前借りをするが、いゝかえ、解つたものであらう。

くろ　そいつは有り難いね……そしてお前、鬼横町へ越して、何をしなさるえ。

三五　何をするものか、船宿を

くろ　オヤ、四谷で船宿かえ。

小萬　さう云つても、剛氣な馬だの。馬に附ける荷を、船に積んでいゝぢやアないかえ。

太郎　それだといつて、川はござりやせんよ。

小萬　氷川といふ川があるぢやァねえかえ。

三五　鮫ヶ橋といふ素的な橋もあらう。それでも川は無いか。

太郎　川はござりやせぬ。

三五　洗垢離はどこでとる。

太郎　井戸端でサ。

三五　そいつは少と不自由だわえ。

　　　トこんな事云ひながら、皆々内へ入る。

太郎　モシ〳〵、幸ひ大屋さんも居られます。早く樽代をあげなさい。

三五　アヽ、樽代は先へやるのか。そいつは大變だなァ。

　　　トもぢ〳〵する。

小萬　爰に小粒があるわな。

　　　ト撥袋より一分出して渡す。

三五　よし〳〵、二朱釣りを取らう。

　　　ト紙に捻り、思ひ入れ。

彌助　アヽ、引ッ越しの衆はお前か。
三五　左様でござります。お前さんが大屋様かえ。こりやアお初にお目にかゝりました。私しは笹野屋三五郎と申しまする、船宿でござりまする。不思議な御縁でお長屋へ來て、お世話になりまするお賴み申しまする。
彌助　ハイ〳〵、わしは家主の彌助でござります。話しに來なさい。聞きなすつたであらうが、店賃は三百、樽代は二朱でござりまするが、承知かね。
三五　承りやした。よろしうござります……ハイ、爰に一分ござりやすから、これを樽代の中へ
ト出すを、彌助手早く取つてこなし。
彌助　アヽ、一分下さるか。これは御叮嚀な
ト懐へ入れる。
三五　アヽ、モシ〳〵、みんなはあげませぬ。二朱分釣りを下さりませ。
彌助　さうか。そんなら釣りは、晩に持たせて寄越しませう。
三五　モシ〳〵、早いがようござります。小遣ひがござりやせぬ。なんなら錢で遣はされませ。
彌助　アイ〳〵。して、御夫婦ばかりかえ。

三五 左様でござります。餓鬼が一人ござりますが、こりやアこのかみさんの所へ、里にやつて置きやす。
彌助 さうかえ。
三五 爰に居りやすが、わしが嚊アでござりやす。コレ、てまへ、爰へ出て、大屋さんにお近附きにならつし、
小萬 アイ。こりやアお初にお目にかゝりやした。私しは三五郎が女房でござりやす。この上お頼み申しやす。
彌助 アイ、お前がおかみさんかえ。わしが内へも心易く話しに來なさい。どうしても下町と違つて、井戸が深くつて、女中方には大儀だて。汲み憎くば、わしが内の野郎を呼んで使ひなさるがよい
イヤ又、車井戸は、釣りつけぬ衆には御苦勞サ。
ト話しのうち兩人顏を見合せて
小萬 ヤ、お前は
彌助 わりやア妹のお六だな。
小萬 兄さんかいなア。

トつかくと逃げようとする。彌助、追ひ廻す。皆々立騒ぐ、三五郎、中へ入り

三五　アヽ、そんなら大屋のお前は

くろ　此かみさんの

彌助　オヽ、わしが妹のお六だ。おらアこいつが兄樣だよ。

三五　お前の妹のお六なら、大屋のお前はその以前

彌助　土手平といつて、神谷どのにも奉公した、中間あがりだ。コレ、うぬは兄にも沙汰なしに、男を拵へ、よく逃げたな。そんなら相手のその男は

三五　アイ、憚りながら笹野屋の三五郎、わしでござります。定めしお前には沙汰なしに、逃げ隠れしたこの女、兄の威光でこの末は、緣切り奉公に宿場へでも、賣りなさるのが當り前。さうしたればとて後の祭り、金にはならうが、見つともない話しだ。けちな野郎のわしゆゑに、不請ではござりやせうが、いはゞお前の妹聟、モシ、大屋さん、轉び合つたが仕方がないと思し召し、わしにくれてしまひなさい。あの女は貰ひましたよ。

トすつけり云ふ。彌助思ひ入れあつて

彌助　ハテサテ、この男は、よく手短かに貰つたと云つた。おつな氣前だ。いゝ男だ……成る程、貴樣

……が云ふ通り、どうで女は人に遣るのが當り前、轉び合つた事なれば、どうするものだ、貴樣に遣らうが、只は遣られぬよ、手切れを貰はう。

ト三五郎思ひ入れあつて

三五　何でござりやすな、他人がましい。妹を貰へば、お前はわしが兄貴だわな。兄弟なれば、お前の物はわしが物、わしが物はおれが物、野暮を云はずと、この女を、くれてしまひなさいな。

彌助　ハテ、よくしやべる男だ。コレ、お六、あの男はあゝ云ふに、てまへ、あの三五郎に、一生世話になる氣か。

小萬　アイ、そりやモウ、互ひに山でぬしと逃げたわたし、參りたくない者が、兄さんを捨てゝ、逃げ隱れも致しますまいわな。

彌助　そんなら行きたいな。

小萬　アイ。

トもじ／＼する。

彌助　どうするものだ、三五郎どん、今から妹のお六は、貴樣に遣らう、貰つて下さい。

三五　そりや忝うござりやす。そんならいよ／＼、女はわしが女房だ。コレ、兄貴、餓鬼もござり

やすよ。

彌助 アヽ、もう産ませたか。

くろ アイ、しかも男のお子。モシ／＼、よく似てゐなさるよ。

ト赤子を見せる。

太郎 イヤ、子持ちのやうには見えやせぬ。

三五 兄貴も得心で貰つたてまへ、極りの附くやう、一つ〆めよう。

ト皆々手を打つ事。

くろ エヽ、おめでたうござります。

彌助 コレ、聟の三五郎どの、何を隠さう、この内は化け物が出るよ。

皆々 エヽ。

彌助 元この内は、おれが奉公した神谷仁右衛門様も、ちつとの間わしが縁で、貸して進ぜたが、彼のお岩の幽霊が、出るといふ評判で、引ッ越しても／＼直ぐに立つが、マア／＼、辛抱して住つて見るがよい。

小萬 アノモシ、其やうな化け物の出る内へ、引移つてもようござんすかえ。

三五　よくなくつて。そこは又「鎌わ奴」を始めたおれだワ。幽霊、化物、面白い。コレ、深川に居ると、借錢手合ひが降る程來て苦しめるが、それよりも化け物の方が、餘ッほど氣がきいてゐるの。その化け物を退治たら、店賃は消して、遣らないよ。ハヽヽヽヽ。併し、爰は大分穢ない、埃だらけな内だの。

彌助　それだから化け物が出ますよ。

くろ　この子を寐かすやうな所があるかえ。

太郎　斯うしなさい。奥に四疊敷がある。あそこには疊が敷いてあるの。

くろ　そんなら、そこへ寐させやせう。

彌助　ほんに、長屋を廻るのだが、コレ、太郎七、てまへ、この觸れ書を廻してくれろ。

ト件の札を投げ出す。太郎七、取つて、こなし。

太郎　心得ました。長屋へ廻しやせう。

三五　コレ兄貴、なんのお觸れだえ。

彌助　ありやアこの間深川で、浪人が多くの人を切つたといふ、切つた奴の詮議の觸れ書サ。

小萬　そんなら此ほど深川で

三五 男女の差別なく

小萬 切つた人に御浪人

三五 慥かに薩摩

彌助 その源五兵衛よ。

三五 アヽ、それもおいらが

彌助 ヤ。

三五 アヽ、怖い話しだ。

ト小萬と顏見合せ、思ひ入れ。

彌助 氣を附けやれ

ト唄、時の鐘になり、おくろは上の屋體へ赤子をいぶりつけながら入り、太郎七は番屋へ、彌助は向うへ別れて入る。あと兩人殘る。向うより了心同心、麻衣にて、お岩稻荷建立と書いたる幟を持ち、木魚を打ち、念仏申して出て來り、門口に立つて修行する。

三五 アヽ、日は短かくなつたな。もう暮れるに間もあるまいに、日の暮れ方に修行者の、コレ、通らつしやい〳〵。

ト門口へ行き、戸を締めんとして、了心を見て、こなし。

三五 イヤ、親仁樣ぢやァござりませぬか。

了心 さう云ふ其方は、悴の千太郎ではないか。

三五 これはマア……チャ、此方へお通りなされませ。

ト思ひ入れ。了心内へ入り、よろしくあつて

了心 イヤモウ、わしも髪をおろして、此やうに道心したも、今度頼まれて、お岩稲荷のお宮の建立。それゆゑ毎日々々修行に歩くも、さて／＼氣散じでよいわえ……コリヤ／＼、悴、早速云はうが、この間より、われに頼んだ金の事。然るに主人數右衛門樣は、俄にお身持ち惰弱の取沙汰。それにも定めて樣子あらんと存じたなれど、わしは兼ね／＼願ひゆゑ、髪をおろしてこのあたりへ引ッ越し、托鉢するも、何卒義士の人々へも、お目にかゝり、旦那の用金つぐなうて、數右衛門樣を、一味の數に入れたいゆゑ

三五 モシ／＼、親仁樣、先達てお頼みの用金百兩、出來ました／＼。それゆゑあなたの方へ參るところ、ちと此方にも俄の用事が出來まして、それゆゑ存じがけない此あたりへ、今日引ッ越して參りました。

了心　オヽ〳〵、尤もの事ぢや……イヤ、見れば若い女中のお居やるが、もじや忰の

三五　ハイ、よんどころなう、親の許さぬ結び合ひ、即ち私し千太郎めが、ハイ、宿の妻でござります。

了心　アヽ、左様か、めでたい〳〵。

小萬　これはマア、おなたが親仁様でござりまするか。いはゞわたしは御子息の、三五郎様……イヤ、その幼名は千太郎様、ぬしのわたしは女房でござりまする。この上ともに、ハイ〳〵、可愛がつて下さりませ。

了心　この上ともに、孝行にしてもらひませう……ハヽヽヽ……。して、忰には、その金が調うたと申すのか。

三五　左様でござりまする。夫婦の者が様々と、艱難苦勞のその百兩、やう〳〵拵へ

（ト懐の胴巻きより百兩包みを出して）

工面いたして置きました。

了心　それは重疊、出かしやつたなア。その働きでは今日只今、其方が勘當、赦したぞ。

三五　エヽ、有り難うござりまする。コレ〳〵、小萬、今のを聞いたか。親仁様がお喜びのあまり、勘

富がゆけたぞ。

小萬　そりやアお前、さぞ嬉しうござんせう。親仁様、ハイ〳〵、有り難うござりまする。

了心　オヽ、その筈〳〵。忰が今度の働き、旦那數右衛門様へ申し上げ、殊にはわしも勘當赦しましたと、あなたへもお目見得いたさねばならぬて。

三五　私しも左様思ひまするが、これまでお目にかゝらぬ、お旦那數右衛門様、爰ではどうぞ、お目見得をさせて下さりませ。

了心　それは承知ぢやが、何をいうても旦那様にも、御用金の失ひ、今日までも大星様へ御面談ならず此あたりにも鹽冶浪人、義士の面々、町家に入りこみ徘徊なされど、殿より御勘氣の數右衛門様、それゆゑ遠慮。わしも二三日以前より、愛染院横町にて、庵主の跡へ引ッ越し、數右衛門様も夜前尋ねておいでなされ、直ぐに行くへも

三五　エヽ、お泊りなされてござりましたか。

小萬　そんなら直ぐにお前と連れ立ち

了心　イヤ〳〵、今朝早くあなたは、淀橋か中野あたりに、尋ねる者があると仰しやつて、まだお歸りなされぬわいの。併し、この金は直ぐに持つて行つて、お渡し申さうわいの。

三五　左樣なされませ。旦那がお歸りなされたら、何分お目見得を願みます。

了心　承知ぢやわいの。われればかりではない、嫁女も一緒に、引合さねばならぬわいの。

小萬　左樣なら、どうぞ私しもよいやうに、お引合せなされて下さりませ。

了心　オヽ／＼、呑み込んでゐます。この金をお渡し申したら、さぞやお喜びなされて、二人ながら目見得の時は、お褒めのお詞があらうわい。マア／＼、少つとも早くお渡し申して、よい時分には千太郎、其方を迎ひに來るぞや。

三五　宜しくお賴み申します。

小萬　お靜かにお出でなされませ。

了心　さて／＼、やうマア金を揃へた事ぢやの。ハヽヽヽヽ。

トごん、合ひ方にて、了心道心、件の百兩を懷中して、いそ／＼と向うへ入る。兩人殘りて跡を見送り

三五　ヤレ／＼、嬉しや／＼。十年この方おれが勘當、今日といふ今日、親仁どのゝお氣に叶うて、勘當お赦しあつたので、こんな嬉しい事はねえワ。

小萬　そりやマア、常からお前が苦勞にしてゐなさんした、その勘當のゆりたのも、あの深川で浪人の

源五兵衛さんを騙しこんで、ぬしの前から取つた金。それと知れたで恐ろしい、十三軒でのあの樣子。

　　トうかく云ふ。

三五　これサ、滅多な事を云はねえものだ。此方も懸り合ひになるワ。

小萬　さう云つても、お前、わたし等がこの山の手へ來てゐる事を、あの源五兵衛さんが聞き附けて、ひよつと來なさつたら、お前はどうするえ。

三五　どうするものだ、その時は、ほんの事だが此方も自棄たワ。殊によると源五兵衛を、ふん縛つて突き出すワ。ハテ、お觸れの廻つた、あの浪人は人殺しだわえ。

小萬　さうしても、よいのかえ。

三五　よくなつて、あの源五兵衛は人を殺したワ……イヤ、殺したといへば、この內は、お岩が幽靈の出る、神谷とやらいふ人が、住つた內だといふが、なに化け物は怖くはない。てめえも、おれもコレ、勝手で來た內。ソレ、今買つて來たこの酒をかツくらつて、夜ツぴて起きてゐて、化け物が出たら、それこそふん縛つて、見世物へ出すの。なに怖いものか。

小萬　さうサ、わたしも化け物は怖くないが、源五兵衛さんが來やうかと、それが怖いねえ。

三五　エヽ、けおな事を云ふ女だなてまへ、あの侍ひが怖いか。

小萬　怖いのサ。さうして、お前は

三五　おれも怖い。

小萬　それ見なさい。

三五　マア、何しろ、わざつと焚きつけよう。薪があるか。

小萬　なに買ひもせぬもの。

三五　そんなら、そこらの羽目板でもめくらう。

小萬　大屋さんへ斷わつてから

三五　馬鹿を云へ、家主はてまへの兄だワ。そこが兄弟他人の始まりだ。

小萬　今まで大工さんが居たれば、木片でもありませう。焚附け位ゐはあらう。尋ねて焚きつけ、茶でも煮ようわな。

三五　ア、暮れかゝつたが、行燈はあるか。

小萬　慥かに忘れて來たよ。あの見世の看板行燈はあるよ。

三五　ほんに、あいうで灯さう。

ト桔梗屋といふ掛け行燈へ、煙草盆より火を移して灯す事あつて、柱のよき所へ掛ける。木魚入り、凄き合ひ方・暮れ六つの鐘鳴る。小萬、竈へ茶釜を掛ける。三五郎、上の方の板羽目を外し、へし折つて焚きつける。小萬、茶を入れし袱紗より茶を出し、ほうじにかゝる。この鳴り物、凄き誂らへあり、向うより喜佐吉、喜之助、男藝者にて、ぱつち、半合羽、堀の内詣りの拵へ、襟に長房の珠數を掛け、枝柿・水飴・麥こがし類の土産物を割がけにして、兩人とも跡ずさりになり、傺へ〳〵出てくる。源五兵衛、羽織着流し、大小にて柄袋を提げ、片手に刀の柄へ手をかけゐる體。二人ながら、ヤナ〳〵して花道へとまり

喜佐　モシ〳〵、源五兵衛様、私しどもはお客に附きまして、堀の内の歸り。今晩新宿泊りと存じたところ。

喜之　あの三五郎夫婦の者は、一向に存じませぬ。ハイ〳〵、どうぞ御免なされて下さりませ。

源五　イヤ〳〵、何も身を恐るゝ事はない。三五郎小萬が、此あたりへ轉宅いたしたと聞いたゆゑ、尋ね參つた出合ひ頭、深川で逢うたわいら、折よく參つたによつて、二人の者が住家を存じ居らうと思ふからぢやが、いよ〳〵存ぜぬか。

二人　決して存じませぬ〳〵。

源五　今、此あたりぢやと聞いたが

ト向うの掛け行燈を見て

「船宿笹野屋……アヽ、あそこぢや。コリヤ、わいらは……コレ

ト喜佐吉に囁き、柄樽を渡す。兩人、慄へ〳〵呑みこみ

喜佐　畏まりました〳〵。

喜之　私しも參りませう。

ト慄へ〳〵足早に門口へ行く。此うち舞臺は二人して、夜食膳へ茶碗を一つ置き、土瓶引寄せ、取り膳の體。

三五　こりやァ茶碗は、てめえばかりか。

小蔦　お前のは道で落して割れたよ。

三五　さうか。そんなら茶をかけて食ひ廻しにしよう。茶漬茶碗は廻しを取つたな。

小蔦　エヽ、無駄を云ひなさんな。

ト二人して夜食を食ひ廻してゐる。門口には源五兵衞、兩人に入れと仕方する。兩人、ピク〳〵するゆゑ、刀へ手を掛け嚇す。兩人「アッ」と云うて内へ駈けこみ、柄樽をドンと置いて

兩人　おめでたうござります。

ト兩人なよく〳〵見て

三五　誰れだ、悔りさせた。

小萬　オヤ、喜佐さんに喜之助さんか。どうして知つて來なさつた。

喜佐　アイ〳〵。わざつと祝つて

トわな〳〵する。

三五　なんだ、この手合ひは、素的に慄ふの。瘧でも病むのか。これサ、おいらが爰へ引ツ越した事を誰れに聞いて來たのだ。

兩人　サア、アノ〳〵

ト云ひ兼れて思ひ入れ。門口より

源五　イヤ、身共が指圖ぢや。源五兵衞が申しつけた。許しやれ。

トずつと入る。兩人悔りして

三五　ヤ、お前樣は

小萬　源五兵衞さん

源五　夫婦の者、堅固の樣子。アヽ、めでたい〳〵。

ト双方思ひ入れ。合ひ方變つて、兩人氣味わろきこなし。

三五 ハイ〳〵、ようお出でなされました。

源五 いつぞや深川で逢うたまゝ、轉宅いたして此あたりへと承つて、わざ〳〵これへ尋ね參つた。殊更道にて、この者どもに行きあひ、同道して連れ參つた。この酒は、心ばかりの身が持參、受けてくりやれ。ハテ、知れぬ筈。よい所へ轉宅いたしたな。

ト祠の中より兩人思ひ入れあつて

三五 こりやハヤ何かと先達ては、樣々な間違ひで、あなた樣にも

小萬 さぞマアお腹も立ちませうが、思ひもよらず引ツ越した、先々までお尋ね下され、ハイ、有り難うございまする。

源五 その酒を、開いてくりやれ。

三五 殊に御持參なされたる、御酒を開けて下さつたも、咽喉を通るは熱湯同然、あのマア、この間十二軒での

ト云はうとして口を押へ

サ、何事も、ハイ、御免なされませ。

源五　これはしたり、身は武士ぢやワ。いつまで其やうに、小萬が事を悔んでゐやうぞ。コレ、源五兵衛は侍ひぢやわえ。

ト和らかに挨拶する。此うち、よき時分より以前の、ます〳〵坊主、酔ひの醒めたる體にて出かゝり門口に錢をつるべて居たりしが、源五兵衛と聞き、よく〳〵窺ひ見て、訴人せんと一散に向うへ入る

小萬　そんならアノ今までの事は、水に流してこの上ともに

源五　三五郎とは兄弟も同然に、この上とも折々は參らう程に、心易ういたしてくりやれ。

三五　それは有り難いお詞。この上ともに、ヘイ〳〵〳〵、お立寄りなされて下さりませ。

源五　コリヤ〳〵、深川の者ども、身が持參の酒を爰へ出して、開きやれ〳〵。

兩人　ハイ〳〵、畏りました。

ト怖々柄樽を出す。

三五　イエ〳〵、今晩は私しが方から、御酒は差上げませう。只今買うて置きました。コレ〳〵、この酒を

ト怖々に徳利と岡持ちを出し

左様なら、お一つ召しあがりませ。

喜佐　私しどもが、お酌仕りませう。

小萬　お肴もなうて、マア／＼、これなと召しあがりまして

源五　これは却つて夫婦の者の、世話になり申す。思ひ出せば、いつぞや深川で初會の晩も、此やうに……ほんに、わいらもその節參つたな。

兩人　左樣でござります。

源五　然らば斯樣いたさう。あの晩の事を思ひ出して、コリヤ／＼、其方ども、何ぞ面白い藝當が、見たいわい／＼。

喜佐　ハイ／＼、左樣ならお久しぶりで、旦那のお座敷で

喜之　時に三味線は有るまいね。

小萬　この樽の中にあつたよ。

ト四斗樽の中より三味線を出す。喜之助取つて

喜之　喜佐公、聲色にさつせえ。

ト慄へ／＼云ふ。

喜佐　おれが遣ふわ。貴公は後を賴む。

喜之　オット、よしこの〳〵。

ト源五兵衛が顏を見ながら、ピク〳〵して

雨の降る夜は

ト慄へ聲にて彈く。喜佐吉、扇をかざし、幸四郎の長兵衛の聲色を遣ふ事よろしくあつて

源五　コリヤ〳〵、その役者は、誰れぢや〳〵。

喜佐　ハイ、高麗屋でござります。

源五　ハテ、二人ながら、何が怖うて慄へて居るな。ハヽヽヽヽ。

トあざ笑ふ。兩人、ゾツ〳〵と身拵へして

兩人　ハイ、お暇申しまする。

ト草履も土産物も捨ておき、一散に向うへ走り入る。源五兵衛見送り

源五　ハテサテ、うろたへた者どもぢや。

ト笑ひゐる。時の鐘になり、向うより、ます〳〵坊主案內して、宅兵衛、絆纏股引き、大小にて、捕り手四人を隨へ

宅兵　コリヤ〳〵修行者、いよ〳〵源五兵衛は、向うの內にか。

ます　左様でござります。

宅兵　しかと左様か。

ト内を覗き、悄りして引ツ返す。捕り手見つけて

捕手　モジ〳〵、旦那様、お歸りなされまするか〳〵。

宅兵　たわけ面め、なに歸るものか。併し手だれの源五兵衞、迂濶には召捕られぬ。其方ども、先へ入れ。先へ入れ。

捕手　でも、私しどもばかりでは

宅兵　卑怯な奴の。主の詞を背くか。イヤ、腑甲斐ない奴等ぢや。

ます　ハイ〳〵、旦那様、源五兵衞に逢ひなくば、御褒美を、ます〳〵お願ひ申します。

宅兵　やかましい、醉どれ坊主め。誰れが頼んで訴人しをつた。いらざる事を訴へたばかりに、身が役目となつたワ。たわけ面め。

ます　左様ではござりませうが、お上から、ます〳〵御詮議でござりますから、ます〳〵訴への御褒たニハを、ます〳〵坊主に

宅兵　まだ〳〵吐かすか。褒美くれう。これへ參れ。手を出せ。

ます　ヘイ〳〵。

宅兵　ソリヤ、落すな〳〵。

ト内懐を尋ね、そつと渡す。ます〳〵坊主見て

ます　エヽ、御褒美が一兩ならぬ、こりや一朱。イヤ恐れ久松、ます〳〵

宅兵　默り居らぬか。

ト叱りつける。ます坊主、口小言いひ〳〵、番屋の脇へ入る。宅兵衛内を見て、思ひ入れあつて

コリヤ〳〵、三五郎、三五郎。

ト呼ぶゆゑ、三五郎、門口へ出て

三五　ヘイ〳〵、私しでござりますか。

宅兵　コレ、われが内へ來てゐる浪人はナ、ありやア人殺しの源五兵衛ぢやが、身共らが手をおろさず其方、あの者へソツと繩かけて、身共に渡すと、コリヤ、魚心あれば水心、ソレ、身が戀の敵のあの小萬の事も、コレ、料簡いたして遣はすが、どうぢや〳〵、この相談は。

三五　それは有り難うござります。併し、あなたはお役人樣ゆゑ、マア〳〵あなたお先へ、上意と仰しやつて、お入りなされませ。

宅兵　これはしたり、それが申される位るなら、其方は頼まぬが、何分其方、先へ召捕りに、參れ〳〵。
三五　どう致しまして、お前のお役だ。先へお出でなされませ。
宅兵　イヤ〳〵、其方から
　　ト兩人爭ふを、源五兵衞聞いて
源五　コリヤ〳〵、三五郎、何を門口にて物騷がしい、何事ぢや。
三五　イエ〳〵、何でもござりませぬ。
源五　でも、只今の樣子では
宅兵　いや〳〵、少と內談がござつて、それにござる源五兵衞どのに
源五　御用の筋かな。然らば參つて承らうか。
　　ト合ひ方になり、下の方の宅兵衞が側へ來て
　お侍ひ、御用の筋は
宅兵　イヤ、別儀でもござらぬが、この間深川にての人殺し、その節の相手は、慥かに其許樣が
　　ト云はんとするを
源五　アイヤ、お役人、身は浪人仕つても武士でござる。女童の儀につきまして、何しに人を殺めま

せう。そりや人違ひでござらう。

宅兵 イヤ〳〵、爭ひめされても、眼前その節

源五 すりや、その時の樣子をとく〳〵と

宅兵 サヽ、おてまへ樣をきつと見ました、證人はアノ

ト三五郎へ思ひ入れ。

三五 アヽ、モシ〳〵、そんな噂はわしどもは、知らぬ〳〵。

源五 アヽ、そんならあの夜のあらましを

トさては三五郎が訴人せしといふ思ひ入れ。

三五 どうして〳〵、わしどもは、誰れがどうやら

源五 さうであらう〳〵。そでなき事を身共に云ひかけ、コレ、お侍ひ、その人殺しは、なんぞ慥かな

ト云はれて宅兵衞、きつとなり

宅兵 證據がござる。きつと致したその證據、お目にかけませう。

トこの時、番屋の内より八右衞門出かゝり、窺ひゐる。宅兵衞、懷より割り笄を出し

この笄に覺えがござるか。

トこれにて源五兵衛、悃り思ひ入れあつて

源五　すりや、その品が

宅兵　こりや其許の御所持なること、人も存じた割り笄、人殺しのその場所に、落ちてあつたる貴殿の災難。口悧巧にはおいやつても、證據の笄出るからは、遁れはあるまい。速かに繩にかゝつて、引かれさつしやい。

源五　すりや、笄を證據として

宅兵　遁れはあるまい……ソレ、召捕れ。

捕手　ハツ……捕つた。

ト捕り手かゝるを、源五兵衛ちよつと立廻つて投げかけ、キツとなる。

宅兵　こりや源五兵衛、手向ひか。

トこの時、門口にて

八右　イヤ、人殺しが違ひました。

源宅　ヤヽ、なんと。

ト合ひ方にて、八右衛門、内へ入り、兩手を突き、こなしある。

源五　ヤ、其方は八右衞門。これへはどうして

八右　只今あれなる御役人様、御持參の笄が、證據と相成りまするなら、その人殺しは違ひました。こりや別にござりまする。源五兵衞様ではござりませぬぞ。

源五　身共をかばふ八右衞門

宅兵　して、人殺しは何者だ。

八右　私しでござりまする。

源五　ヤ。

ト三五郎、小萬も思ひ入れ。

八右　大切の旦那を騙しこみ、阿房に仕立てた藝者の妲妃、それに附きそふ男もあつて、現在武士を惰弱者、放埓者にするのが口惜しさ。それに組みした惡者を、憎さのあまり切りましたが、只口惜しいは肝心の、そのマア夫婦を

ト兩人へ目をつけ、こなし。

家來が切つた人殺し、旦那へその科かゝつては、八右衞門めが云ひ譯ござりませぬ。お役人様、下郎めに繩かけて、お引きなされて下さりませ。

源五 すりや、其方がその科を

八右 證據は卽ちこの品が、一對揃ふ割り笄。これが慥かな證據ではござりませぬか。

ト以前貰ひし割り笄を出す。

源五 流石は家來八右衞門、一合取つても武士の魂ひ、愛い奴ぢや、出かしをつた……それに引替へ、女な卿に

ト三五郎と小萬の方を見て、涙を隱し思ひ入れ。宅兵衞、笄を取つて

宅兵 斯樣な證據が出るからは、卽ち彼れに

ト八右衞門に繩かけんと立ちかゝる。八右衞門思ひ入れあつて

八右 どうでこの身は繩目の恥、お掛けになるならその繩は、モシ、旦那樣、せめてはあなたが

源五 我れに掛けよと其方が、望みは叶へ得させせんが、縛しめ渡す源五兵衞、心の中の

八右 そのお心がござるなら、下郎が命を捨てまして、死んだ跡ではお念佛、手向けの水を貰うても、そりや私しは受けませぬ。何卒義士の列に交つて

源五 ヤ。

ト思ひ入れ。

八右　サ、義に依つて死す小者の魂ひ。ましてや高祿なりしあなたは、忠義に身を捨て、殿の[illegible]。恨みは高野

源五　コリヤ。

八右　サ、香花よりも誰れ〳〵と、その戒名に末の世まで、お加はり下さるものなれば、それで下郎が極樂往生。旦那の迷うた悪性女め、ふッつり忘れて下さりませ。

ト兩人の方を恨み、源五兵衞へ思ひ入れ。

小萬　今となつてはこの身の辛さ、それも明せばお主のお爲。

三五　顏合はされぬこの體裁。これも矢ッ張り主親の、思へば恥と諦めて

ト兩人思ひ入れ。宅兵衞さし寄つて

宅兵　科人きはまる上からは、お侍ひ、キリ〳〵繩を掛けさつしやい。

八右　サ、旦那樣、未練でござる。とく〳〵わしを

ト手を廻す。

源五　然らばこれにて……捕つた。

ト八右衞門に繩かける。

やがて身共もこの如く

八右　アヽモシ……鶴龜松竹、萬々歳の御壽命榮へて

源五　めでたう本望。

八右　それを願うて

ト思ひ入れ。愁ひの仕組み。

宅兵　ソレ、引ッ立てい。

捕手　立ちませい。

八右　ハイ。おさらばでござりまする。

ト時の鐘、三重になり、門口へ出る。捕り手、八右衞門に手拭をかむせて、宅兵衞附き、向うへ入る。

源五兵衞跡を見送り、件の柄樽を二人が前へ差置く。

二五　こりや、源五兵衞樣には御持参なされし、この酒を又改めて

小萬　わたしら二人へ

源五　身が志し、受けてくりやれよ。

小萬　エ。

源五　下部が人を殺めしと、我れに替りし魂ひも、元の起りは其方達二人、恨みもあれど何事も、胸にこたゆる下部が意見、彼れが菩提に小萬が事、只今改め思ひ切る。殊には科なき者どもを、人違ひにて討つたる譯なりや、身がある内は、さぞや二人も心遣ひ、それを察して源五兵衛、この上女が兄親とも、力に思やれ、身もその心。色がましき事は、ふッつり思ひ切る程に、其方達二人は兄妹とも、思うてこの後力にせよ。必ず疑ひ晴らしてくれい。

三五　改まつたるそのお詞、あの節二人がお前樣より、申し受けたる百兩も、いはゞ私し一人のため。

小萬　切り苛なんでも飽きたらぬ、憎い奴とも思さんに、お情あつきそのお詞。それもあなたに代りたる、御家來衆の忠義ゆゑ。この上ともに私しらを

三五　お腹も立たうが町人風情、誠に犬とも四つ足とも、人ではないと思し召し、蟲同然な遊里の二人

源五　イカサマ、申せばその如く、二人が二人犬猫同然、誠に人では

ト門口へ出る。三五郎、履物を直しながら

三五　エ。

ト思ひ入れにて、源五兵衛、門口へ出る。

源五　イヤ、あるかも知れぬ。

ト唄、時の鉦。源五兵衛、兩人へ心を殘し、件の德利へ目を附け、向うへ入る。奥より以前のおくろ赤子をいぶりつけながら出かゝりゐる。三五郎、向うをよく／＼見て、鹽笊を取つて門口へ出て、鹽花を蒔いて

三五　七里けつぱい／＼……南無、金毘羅大權現々々々々々。

トそこらを拜み廻り、ホツとしたる體。小萬、胸先を押へゐる。

アヽ、恐ろしや／＼。

小萬　そんならお前も有りやうは

三五　あの侍ひが、今は拔かうか／＼と、それぱかりを案じたが、何事もなく歸つて、アヽ、めでたいめでたい。

小萬　わたしも重荷を下ろした思ひがするよ。

トこの時おくろ前へ出て

くろ　モシ／＼、わたしは何だか存ぜぬが、不氣味なお侍ひだと思つてね、爰へ出てお茶の一杯も飲みたいものを、辛抱して居りやした。このお子もよく寢なさつたれど、わたしは

ト立つて、側にある土瓶の茶を、つぎかけ／＼グツと呑む思ひ入れ。

三五　さうであらう。此方も生きた氣は無かつた。マア〳〵、爰へ床を敷いし

ト風呂敷より木綿の夜具搔卷を出して敷き、屛風を立てる。

くろ　モシ〳〵、わたしやア今夜は泊つて參りやせう。

小萬　さうしなさんせ。その子もそこらへ寢かしなさいな。

くろ　アイ〳〵。この搔卷をお借り申して、ドリヤ、添へ乳して臥りませうか。

ト時の鐘、合ひ方になり、おくろ、屛風を立て、その中へ入り、子を抱いて寢る。二人は蒲團の上へあがり、件の酒を引寄せ

三五　イヤモウ、これでこそ實の夫婦だ。あの侍ひも有りやうは、ごてつきに來たのだが、何事なしに歸つたも、誠にめでたいぢやァねえか。祝ひに一杯飮まつし。

ト柄樽の酒を出す。

小萬　これいなア、そりやア冷だわな。そのちろりのが燗酒だ。まだ覺めはしまい。それにしな〳〵。

三五　さうしよう〳〵。

ト柄樽を片寄せ、ちろりを引寄せ、茶碗につぎ、ぐつと引受け

サ、てめえへ獻さう。

小萬　ついでくんな。

……ト三五郎酌をして、兩人酒を飮む。此うち捨て鐘、向うより太郎七、割り竹を持ち歸り來り、內を覗き、思ひ入れあつて、番屋の戶を明け、內の太鼓を出し、思ひ入れあつて又戶を締める。此うち二人は酒を飮む事あつて

三五　ほんに、莨の火をいけて置かうか。炭があつたかの。

小萬　慥かあの揚げ板の下にあつた。

三五　あるかの。越した奴が置いてもゆくまいが

……ト上げ板を明け、中を探して

そりやこそな。炭はねえワ。

小萬　さうか。そんなら爰へ來て寢なさいな。

三五　さうもしようが……イヤ、又こんなめでてえ事はねえの。

小萬　誠に夢のやうだの。あのお侍ひさんに逢つたら、定めしとんだ事が出來やうと思つた源五兵衞さ……んは、思つたよりも產むが易し、お前の願ひが叶つて、勘當もゆりて、天下晴れてわたしも三五郎が女房。越した先の大屋さんは、わたしが兄さん、店賃の云ひ譯する氣兼ねもなし、こんな……

ア気樂な事はねえの。

三五　イヤ、實にいゝ長屋へ越して來たて。これから又當分、朝も晩も寢てばかりゐるから、てめえ
そのつもりにさつし。

小萬　オヤ、寢て暮らすのか。樂しみでいゝの。

三五　サア、此方へ來さつし。

小萬　今夜は何だか寒いの。

三五　その筈よ。爰の内はお化けが出るよ。

小萬　オヽ怖。

三五　と申しまするが今晩の茶番サ。

卜屛風を引廻す。寺鐘聞え、蟲の音、一つ鉦、凄き合ひ方になる。この時、門口の番屋にて太郎七、口笛を吹き、どろ〳〵を打つ。この時番屋の蔭より、ます〳〵坊主、寢ぼけたる體にて出て來り、腰のまはりを探れ

ます　南無三、煙管を落した。そりやアいゝが、あの太鼓は何だ。イヤやかましい。併し煙管を落しては、ます〳〵不自由だ。

トそこらを尋ねる。この時内にて、件の揚げ板を刎れ返し、彌助、やつしの上へ經帷子を引つかけ胡麻鹽を當て、額へは塵紙を目鼻を明けて貼り、ひよいと立ち、そろ〳〵出てくる。門口のます〳〵坊主、煙管を尋ね、爰の内へ落しはせぬかと、ソツと内を明け、恟りして

ヤア、幽靈だ〳〵。ます〳〵幽靈々々。

ト向うへ逃げて入る。彌助、幽靈の眞似をして

彌助　アラ恨めしや〳〵。アヽ、浮かまぬ〳〵。アヽ、恨めしい〳〵。

ト兩人が寢てゐる枕許へ行つて無性に嚇す。兩人寢てゐるゆゑ、側へ寄つて二人を搖り起す。これにて額を上げ、恟りせしが、三五郎キツとなつて

三五　此奴は何だ。寢てゐる所へ來やアがつて、なぜ起した。うぬア何だ。

彌助　幽靈だ。

三五　ナニ、幽靈だ。コレ、嬶ア、あれ見や、幽靈が出た。起きて見さつし。

ト起す。小萬起きて、思ひ入れあつて

小萬　オヤ、あれが幽靈かえ。コレ、幽靈さん、もう少つと明るい方へ出て、よく形をお見せな。オヤ、變痴氣な物だの。

彌助 エヽ、恨めしい。

三五 ナニ恨めしい。おきやアがれ。氣が違つたさうだ。コレ、てめえ、なにか、お岩の幽靈か。コレその伊右衛門といふ人が、この内に住んでゐたか知らぬが、とうに越して行つてな、おいらは代人だワ。それに何の借りがあつて來た。イヤサ、どういふ理屈で化けて來たのだよ。

彌助 恨めしい。

小萬 オヤ、恨めしいと云ふよ。

三五 ナニ恨めしい。これサ、てまへ、そりやァ筋違ひだ。おいらは何も恨まれる覺えはないから、歸らつし。それとも否なら、いつまでもおらが内に居さつし。歸らうと云つても、歸さねえの。夜が明けやうが、天道樣が出やうが、幽靈の晝夜仕舞ひ、居續けに置くよ。歸りがけに地獄へ附き馬を頼む。コレ、爰は四谷だから、駄賃馬の歸りは、いくらでもあるワ。サア、幽靈、挨拶をしろえ、挨拶をしろえ。

ト立たとんする。彌助、氣味惡く跡へ下がつて

彌助 恨めしい。

ト小萬聞いて

小萬　オヤ、先刻から、恨めしい／＼とばかり云つて、跡の云ふ事を知らねえ幽靈だの。コレ、恨めしくば、當分わつちが内にお出でな。どうでモウ世間中に借りがあるから、もう今に借錢乞ひの市が立つよ。その時のぼく除けには、幽靈がいゝの。ハテ、お前、幽靈のごたつきは、飯は食はず、腰から下がねえから、履物の世話はなし、幽靈ほど徳用な居候ふは無い。ちよこ／＼來てくんな。まだ用は無かつたが……オヽ、ある／＼。ちよつと莨を買つて來ておくれ。

ト此うち彌助矢張り

彌助　恨めしい／＼。

ト云つてゐる。外の太郎七、太鼓を叩きながら、口笛あつて、内を覗いて思ひ入れ。

コレ／＼、其やうに大風をきめるな。早く越して行け。店賃を拂つて越して行かぬと、取り殺すぞ。

三五　ナニ、取り殺す。うぬ、おれを殺すと、幽靈も殺しては置かねえぞ。うぬ、化け物め、叩き生かしてやるべい。

ト立ちかゝつて彌助を引附ける。彌助、三五郎をくらはす。

うぬ、幽靈め、打ちやアがつたな／＼。濟まねえぞ／＼。

彌助　幽靈に打たれたぞ。しめるなら、しめろ〳〵。

小萬　これいなア、危ねえわな。幽靈さんも、不請しなんせ〳〵。

ト三五郎、幽靈と掴み合ふ。小萬、あちこちと留める。太郎七、門口にてこの體を覗き見て、うろたへ廻り、向うへ行かんとして、人音するゆゑ、番屋へ入り戸を締める。向うより、ます〳〵坊主の知らせにて、市、ぶら提灯を提げ、鐵、辰、若い者二三人。弓張り、六尺棒、割り木なぞを持ち、ワヤワヤと走り出て來り

皆々　幽靈は、どこにゐる〳〵。

ます　爰の內だ〳〵。

皆々　幽靈を出さつしやい。幽靈を出せ〳〵〳〵。

ト立騷ぐ。

三五　幽靈は爰にゐるワ。入用なら、連れて行つて下され〳〵。

ト彌助を外へ突き出さうとする。彌助、三五郎に縋つて

彌助　アヽ、コレ〳〵、外へ出ると打ち生かされる。幽靈一人、助けてくれ〳〵。

三五　否だ〳〵。うぬ、行かねえと、幽靈を縛つて、突き出すぞ〳〵。

彌助　これサ〱、三五郎、おれだ〱。

ト顏の塵紙を取つて、こなしある。

小萬　ヤア、お前は兄さんかえ。

三五　彌助さんか。そんなら幽靈は、大屋さんだの。

彌助　コレ〱、譯は斯うだ。

ト三五郎に囁き、經帷子と胡麻鹽を取り、家主の形になり、門口へ出て、何くはぬ顏にて

コレ〱、長屋の衆、何を騷がつしやる。

鐵　モシ〱、大屋さんえ、お前のお店へ幽靈が出たを、ます〱が知らせやしたから

三人　幽靈を、しめに來やした〱。

ト此うち三五郎、經帷子を上へ引ッ張り、門口へ來り

三五　モシ〱、御近所のお方、そりやァ間違ひでありやせう。わしが今夜お富士樣へ、焚上げをするから、見なさい、此やうに白い衣を着た。それを幽靈と間違へたのサ。

皆々　エヽ、さうか。こいつは擔がれた。

ト此うち辰、門口の軒へ、ブラ提灯を引つかけ

辰　そんなら、この食ひ倒れに騙されたのか。エヽ、間抜け坊主め。

ト くらはす。

ます　なんだ、この人は。化け物が出たから出たと云つたに、擲る事があるものか。ます／＼合點がゆかぬわえ。

皆々　何をこの食ひ倒れめが。

ト ます／＼坊主を突き倒し、足蹴になし、皆々向うへ入る。ます／＼坊主起上がり、ます／＼と云ひながら跡を追うて入る。この騷ぎに軒の提灯を忘れて入る。三人殘つて

三五　アヽ、危ねえ事だ。コレ、兄貴、お前も又とんだ思ひ附きをして、なんでわしらを嚇しに來たのだ。

小萬　お前もいゝ加減に、馬鹿を盡しなさんせ。

彌助　イヤ、有りやうは、妹聟でも親類でも、樽代を取つて、一晩限りに越させて、又あとの樽代を取るが、家主の株だから、今のやうな眞似をしたに、夫婦ながら强情を云つて、化け物が怖くないとは、イヤ、三五郎とやら、てめえも餘ッほどな强惡だぜ。

三五　誰れが仕込んだ。

彌助　又へこんだ。

　　ト思ひ入れ。この時、軒に吊せし提灯のあかりにて、櫺子に貼つたる師直の館の繪圖面を見附けて

三五　あの櫺子に、おつりきな物が貼つてあるね。

小萬　どうやら普請の、ありや繪圖面を

彌助　昨日今日まで高野へ出入りの、大工が住んだこの古家。

三五　もしや屋敷の

　　ト思ひ入れ。彌助ズツと立つて、件の繪圖面をめくり取つて

彌助　イカサマ、こいつは座敷の

三五　工夫を附けた繪圖面は……コレ、この床の間が即ち拔け道。緣側傳ひに行く時は

小萬　廊下の板敷、緣側は、皆揚げ板にて、下家へ通路の

彌助　疊を取れば床づくり。

三五　天井板も物置きの、二階へ拔ける建て方は

小萬　迂濶に歩めば、コレ〳〵、爰にしつらふ落し穴。危ない工夫を

三五　よくも魂膽。ハテいゝ物が

ト取らんとするを、彌助手早く懷中する。

彌助 大屋の手には

三五 エ。

彌助 入つたわえ。

ト變つた合ひ方。思ひ入れ。三五郎、こなしあつて

三五 長屋の櫺子に貼つた反故、皆家主の物なれど、そればつかりは大屋さん、妹聟のわしに下さい

彌助 何にする。

三五 その要り道は、わしが親仁の勤めた旦那は、鹽冶の浪人、そのお方へ進ぜたら、萬一役に立たう
かと、それゆゑわしが

彌助 して、その浪人の名は何と云ふ。

三五 顏は知らねど、わしが主筋。家名は不破の數右衛門。

彌助 アヽ、あの人か。殊にてまへ、顏も知らぬといふが、なぜ又いままで

三五 身持ちの悪いわしゆゑに、昨日今日まで親仁の勘當、それゆゑ旦那のお面も

彌助 知らずばよしやれ。あの侍ひは大間拔け、鹽冶の家のお金番、うぬが大事のその金を、失なうた

三五　お咎めにて、浪人したたわけ者、意氣地なしの數右衞門が、なんで敵と大名を
イヽヤ、討つの。
彌助　そりや誰れが
三五　コレ、話しはこれぎり、あの大星といふ人が、音頭を取つて
彌助　アヽ、あの大星か……コレ、いゝ加減に聞くがよい。大星はその氣か知らぬが、この頃は稻星が
出るはめでたいの。コレ、酒があるなら、一杯飮ましやれ。
三五　オイ、慥かちろりに
彌助　そいつは有り難い。これか。
 トちろりを取つて思ひ入れ。
コレ〳〵、爰には無えぞえ。
三五　さうかえ。そんなら此方の柄樽の中に
ト件の柄樽を出して
爰にあるよ。
彌助　アヽ、冷か。何でもいゝ。幽靈で剛氣に草臥れた。

ト茶碗へつぎ、グッと飲んで

ア、いゝ氣味だ。一つ飲みやれ。

ト茶碗を出す。

三五　お前マア重ねて飲むがいゝ。

彌助　押へるなら飲むの。ほんの事だが、いで飲むといふ段になつては、そいつアもう、酒呑童子でも呑み潰す。

ト又引つかけるとて肌を脱ぐ。左の腕に三ツ星に一を彫つてゐる事。三五郎目を附け

三五　こりやア兄貴の腕には、酒呑童子も及ばざる、その彫り物は渡邊の、ア、綱もねえ三ツ星に、一の文字は、古風な下繪サ。

彌助　若い時から腕の三ツ星

小萬　すりや兄さんの好物に

彌助　企みは大星、辰巳へは、稲星の出る當り年、ちつと流行りに遲れたが、おれが彫つたは三ツ星に

三五　一の文字はお旦那の、越度となつたお金の紛失。殿の用金盜みしその夜、二人連れ立ち盜人が、逃げる所を引ツ捕へ、袖引ちぎりし仕着の看板、しるしは神谷の紋なれど、武家の事ゆゑ詮議も

等閑。その時見附けし腕の彫り物、三ツ星なりと親仁様、お話しありしが違はぬ割り符、神谷の小者のこなたなら、主従寄つての夜盗の働き。

弥助　さう其方から指されては、隠したとても天の網。成る程神谷に勤めた砌り、主従二人が云ひ合せ、塩冶の役所へ忍び込み、金を盗んで駈け出す時、引ツ切られたる片袖から、見かぢつたる彫り物は、成る程おれだ、この弥助だ。併し妹が縁につれ、今では小舅、おぬしは聟、それでもおれが名を出すか。

三五　どうして貴様を。その代りには懐の、櫺子の反故の絵図面を

弥助　イヽヤ遣られぬこの絵図は、高野の屋敷へ

三五　わしに下さい。

ト両人争ふ。この時弥助、ヨロ〳〵して、思はず血を吐き、俄に苦しき思ひ入れにて

弥助　ヤヽ、思ひがけなき此しだら、悪血吐きしその上に、惣身しびれてこの苦痛。アヽ、苦しや〳〵

トのたうち廻る。小万駈けより

小万　こりや兄さんの俄の悩み、顔色変つて苦しましやんすは

三五　慥かに毒気にあたりし様子。もしや飲んだる

彌助　わいらが馳走のこの酒が

ト徳利を取つて打割る。中には白布の毒を仕込みし藥袋に、靑蜥蜴入れてある。三人悔りする。彌助、キッとこなし。

イヤア、さてこそ酒にはアノ毒を。そんならうぬらは

ト二人にむしりつき、引ッ捕へてこづき廻し

兄を毒害しをつたな。

ト捻ぢつけて兩人を苦しめる。

小萬　イエ〳〵わたしや存じませぬ。なんでお前を、妹のわたしが

ト云ひ譯する。三五郎思ひ入れあつて

三五　これで解つたコレ小萬。そんなら今來た源五兵衞、おいらが事を忘れ兼ね、毒を入れたるこの酒にて、殺す心で何氣なう、立歸つたるその酒を、二人は飮まいで間違つて、兄貴の難儀となつたのぢやな。

小萬　エヽ、そんなら毒を入れたのは、源五兵衞さんの

ト思ひ入れ。

彌助　誰れがしようと飲ませたうぬら、數右衞門が身寄りにて、高野の殿を恨むといふ、この譯屋敷へ
申し上げ、うぬら一々

トよろぼひ〳〵外へ行きにかゝる。三五郎堪へかね

三五　それ云はれては旦那樣、越度の上塗り……小萬、堪忍しろ、赦してくれ。兄貴は爰で

ト有りあふ出刃を取つて彌助を切り下げる。

彌助　うぬ、人殺し。兄殺し〳〵。

トむしやぶりつく。三五郎切り下げる。小萬さゝへる。三人ゴッチャの立廻りよろしく、彌助を仕留
め、死骸へ蒲團を掛け、件の繪圖面を取つて

三五　コレ〳〵小萬、兄を殺した三五郎、われが爲にはおらア敵だ。必ずうろたへるな〳〵。コレ〳〵
この繪圖面をナ、おれが親仁に渡してナ、この譯を話してくれろ。小萬、さらばだ。賴むぞよ。

ト出刃を取つて死なうとする。小萬縋つて

小萬　尤もでござんす。お前ばかりを殺しはせぬ。わたしも殺して下さんせ〳〵。

三五　馬鹿を云へ〳〵。コレ〳〵、これを親仁に渡してくれろよ。おれは死ぬわえ〳〵。

ト兩人爭ひゐる。時の鐘、バタ〳〵になり、向うより了心、スタ〳〵と出で來り、ズッと入り、こ

の體を見て

了心　ヤヽ、こりや何をする。夫婦喧嘩に刃物三昧。放さぬか〳〵。

三五　イエ〳〵、これには段々

小萬　モシ、親仁様、留めて下さりませ〳〵。

ト了心、刃物をもぎ取り

了心　コレ悴、喜べ〳〵、お旦那数右衛門様が、今方お出でなされたゆゑ、われが金を拵へた事もお話し申し、直ぐにてまへを連れに來たのぢや。コレ〳〵、嫁女、こなたは跡に留守してくりやれ悴、おれと一緒に〳〵

ト何心なう連れんとする。

三五　サヽ、參ります〳〵。參りまするがモシ、親仁様、よんどころなう私しは、モシ

ト蒲團をソツと明け、彌助が死骸を見せる。

了心　ヤア、こりや、切り殺したのか〳〵。

ト大きに驚く。

三五　モシ〳〵、靜かに云はつしやりませ。屏風の中に、里親が聞いて居ります。モシ〳〵、これは

ト件の繪圖面を出し

これこゝ高野の館の繪圖面。何卒これを數右衛門樣へ

了心　出かした〳〵。そんならこれが、敵の館の

三五　それを取らうばつかりに、よんどころなう女房の兄を

了心　ヤヽ、嫁女が兄を

三五　シイ〳〵〳〵……モシ、譯と申すは

ト門口の方へ思ひ入れあつて、指先にて書いて見せる。了心呑みこみ、思ひ入れあつて、繪圖を懷中して

了心　尤もぢや〳〵。が何を云うても町人の身の人殺し。爰に居ては惡い。わしが内へ〳〵

三五　左樣なら御一緒に

ト行かうとする。

小萬　アヽモシ、ひよつと途中でどのやうな、お前に難儀が

三五　成る程、迂闊に歩かば、そこもあるわえ。

ト思ひ入れ。

了心　大事ない〳〵。併しわが身を、何ぞへ隱して

ト思ひ入れあつて四斗樽を見附け、これ幸ひと、三五郎に囁き、こなし。

三五　左樣なら、この中へ

了心　ちつとの間ぢや。併し人殺しの身を以て、道の程も心許ない。

トあたりを見て、以前の出刃庖丁を取つて、また囁き

まさかの時の用心に……この中へ忍んで

ト三五郎を件の四斗樽の中に入れ、右の出刃も入れて、上へ、着てゐる衣をかけて、天秤棒を通して

サ、嫁女、一肩やりやれ〳〵。

ト小萬擔がうとして、いろ〳〵思ひ入れ。

小萬　どうしてマア、持てぬわいなア。

了心　エヽ埒の明かぬ

ト氣を揉みゐる。この時、外の番屋より太郎七、目をこすりながら出て

太郎　アヽ、もう四つでもあらうか。

ト云ふに心づき、小萬、門口へ出て

小萬　コレ、番太さん、ちよつとこの樽を、あなたの內まで
太郎　ナニ樽を……アヽ、佛かえ。
小萬　イエ〳〵、淺漬ぢやわいなア。
太郎　さうかえ。片棒行きやせう。
了心　お賴み申します〳〵。
ト門口へ荷ひ出して
そんなら嫁女
小萬　御苦勞ながら
了心　よう留守しやれ。
ト唄。時の鐘になり、太郎七先に、了心、後肩を入れて、よろめきながら向うへ荷ひ入る。あと合ひ方、捨て鐘。小萬、門口にかき金をかけ
小萬　マア〳〵あれでは、ぬしの身の上に、別條もあるまいが、心がゝりは兄さん
ト死骸の方へ思ひ入れ。この時屛風の中にて、赤子泣くゆゑ、こなしあつて
アヽ、子は三界の……南無阿彌陀佛々々々々々〳〵。

ト門口の締りをして、死骸の側へ俎板を直し、茶碗へ水を汲んで來て、この上へ置き、庭に生えたる草の葉を取つて、手向けのこなし。この時、蟲の音、凄き合ひ方、時の鐘。向うより源五兵衞、思案の體にて立歸り來り、内を窺ひ

源五　小者の悴千太郎、いまだ對面遂げざれど、主人と存じて某が、越度の金子も拵らへしと、いま了心の物語り。その深切な若者に、逢うて一禮云はんとは、思うてゐれど最前も、逢うた二人の憎くき奴等。

ト門口へ目を附け

殊に最前殘したる、毒の入つたるあの酒を、二人が飲んだか。もし其まゝにあるならば、行がけの駄賃、百人切つても同じこと。うぬ三五郎、夫婦の奴等、今こそ思ひ知らせてくれん。

トきつとなり、門口へ來る。小萬は兄の回向をしてゐる。この時源五兵衞、門口をしやくる。かき金とけたる體。小萬振りかへり

小萬　誰れさんぢや〳〵。

源五　イヤ、身共ぢや、源五兵衞ぢや。

ト時の鐘。ズッと入る。小萬恟りして

小萬　エヽ。

ト慄うてゐる。源五兵衛さしより、あたりを見て

源五　三五郎は、この屏風の中にか。

小萬　イエ、ぬしは近所へ參りました。

源五　アヽ、他行か。して、屏風の中は

小萬　アイ。ありや里親どのが、あの子へ添へ乳を

源五　して、最前の酒は飲んだか。

小萬　アイ……イエ、たべましたのは、わたしの兄さん

源五　その兄は、如何いたした。

小萬　爰に臥つて

ト慄うて、こなし。

源五　ナニ、臥つてゐる。爰に

ト蒲團を捲り、よく〳〵見て

息は絶えたな。して、二人は飲まぬか。

小萬　アイ。

源五　ハテ、食はいで殘念な。屏風の中は、いよ／＼小兒か。

小萬　アイ／＼。

源五　どのやうな忰ぢや。見て參らう。

ト屏風の中へ入る。小萬、身づくろひして、帶を引上げる思ひ入れ。この時、屏風の中にてバツタリ物音する。小萬、恟りする。程なく源五兵衞、赤兒を抱き、出て來り、赤兒の小袖にて片手を拭くこと。思ひ入れあつて

誠に胤は爭はれぬ。三五郎に好う似て居るわえ。此やうな子のある身を以て、コレ小萬

ト小萬の手を取り、ヂツとなつて

この源五兵衞と、二世かけしとの五大力。あれも大方

小萬　アイ、あの彫り物は

源五　矢張り腕に

ト無理に腕を引出し、きつと見て

ヤヽヽ。三五大切。すりや五大力に書き添へて、一生拔けぬ女の腕、人目いとはず彫り物の、

刃物を以て二五大切。斯くまで身共を僞つたか。

トきつとなる。小萬思ひ入れあつて

小萬　三五郎さんに身を任せ、死ね死なうとの約束に、なんの命は塵あくた。ぬしへ進ぜた藝者の氣前。わたしや一生鈍物に、これ程までに

ト此せりふのうち、源五兵衞、小萬が顔をヂツと見詰めてゐる事。小萬、氣味惡き思ひ入れにて

あのまアかみさんは、よう寐てゐさんすの。

ト源五兵衞が手を振り切り、ツカ〳〵と屛風を明ける。中におくろ、咽喉を一刀に突かれし體にて、糊紅になり、壁に死骸立てかけある。悧りして

ヤ、こりや何者。

ト此方へ來る。源五兵衞、門口をシヤンとさして思ひ入れ。凄き合ひ方。

源五　命を捨てゝ八右衞門、我れへの意見、實に不便とは思へども、煩惱の晴れても晴れぬ武士の意地女わらべに騙されて、斯樣々々と世の人口、生涯武士が惡名拔けぬワ。憎くき奴は三五郎、彼奴め諸共殺した上、どうで命は捨て物ぢや。ヤイ、小萬、われが命は身が貰ふぞ。よくもこれまで侍ひを、女の口の舌三寸、たわけ阿房に

ト小萬を引附け

ひろいだな。

トきつとこなし。

小萬　御尤もでござります。これには段々樣子のある事。わたしが連れ添ふ三五郎どの、あの人こそ

源五　三五郎が行くへを吐かせ。

小萬　イエ〳〵、行くへは毫頭存じませぬ。もう斯うなつては私しも覺悟。憎いと思はゞ、サア、切り なさんせ。僞り云うたは皆誤まり。わたしを切つて三五郎どのを、どうぞ助けて

源五　助けてやらう。女わらべの、おのれを助けて

ト突き放す。

小萬　エヽ、アノ、わたしを助けて

ト立ちあがるを、すかさず拔いて切り下げろ。小萬苦しみ、しがみついて、いろ〳〵にこなし。

そんなら、どうでも

源五　息ある内に、三五郎めが行くへを云へ、

小萬　知らぬ〳〵。よし知つたとて、なんのこなたに

トあたりの物を取つて源五兵衞に打ちつけるを、切り拂ふ。小萬のたうつて

コレ、三五郎さん、わたしや今死ぬわいなア。どうぞちよつと顏見せて

トあちこちするを、源五兵衞なぶり切りにする。小萬、所々へ取りつく。手の跡、壁へ血にて附く。

源五兵衞、小萬を引寄せ

源五　三五郎めが在所を吐かせ。しぶとい女め。身を僞はりし三五大切、その入れ黑子はこの腕か。

ト腕を貫く。小萬苦しみ

小萬　男ゆゑなら死ぬるは覺悟。せめては二人がその水子、そればつかりは、どうぞ助けて

源五　可愛いか、不便なか。不便に思はば、おのれが手にかけ

ト小萬が手に刀を持ち添へて

斯樣に致せ。

ト抱子を貫く。抱子落入る。

小萬　エヽ、こなたはなう。何にも知らぬその子まで。いかに憎しと思へばとて、現在水子をその如く

こなたは鬼ぢや、鬼ぢやぞいやい。

源五　いかにも鬼ぢや。身共を鬼には、おのれら二人が致したぞよ。人外めが。

ト切り下げ／＼する。小萬落入る。源五兵衛、首を打落し、小萬が帶の端を切つて、それに首を包む
この時、雨車、雨の音烈しく聞えるゆゑ、思ひ入れあつて、あたりの傘を取つて、有りあふ下駄を穿き、門口へ出て思ひ入れあり

實に定めなき、浮世ぢやなア。

ト時の鐘、凄き合ひ方、一つ鉦、蟲の音。これより謠をうたひながら、花道へかゝり、傘をさし、向うのあゆみを通り、この仕組みよろしく、此うち舞臺、靜かにぶん廻す。

本舞臺、庵室の體。正面二重の上に件の桶を置き、前に机を据ゑ、香華を手向け、新佛と見せたる體。左右竹藪、生垣、道心者の獨り住み、荒れ果てし體。源五兵衛あゆみを通り、門口へ來り、簀戸を明けて内へ入り、桶を見て、怪しむ思ひ入れ。

源五　身共が他行のその跡へ、いづれよりかは新佛と見えるが、道心めは忰の千太郎とやら、夫婦の者を引合せんと、呼びに參つたのであらう。

ト件の机の上へ首の包みを置き、あたりより膳、茶碗、飯櫃、その外の物を持ち來り、行燈を搔き立て、飯を食ふ事。此うち好みの合ひ方、捨て鐘。件の包みを開く、中には小萬の首、出るを見て

ヤイ、小萬、此やうにわれと二人、食事をせんと思うたに、心柄こそ

ト飲みさしの茶を首へぶつかけ、楊枝使うてゐる。禪のツトメになり、向うより了心、小提灯を提げ源五兵衛を尋ねる心にて、スタ／＼と出て來り、内へ入る。源五兵衛ちやつと首を包む。

了心 ヤア、數右衛門樣。お前樣のお行くへを、お尋ね申して居りました。私しの悴めが、心盡せし百兩の、その御用金調達の、金子はお渡し申せども、まだその外に、無くて叶はぬこの品ゆゑ、可哀や悴は人殺し

ト櫃の方へ思ひ入れあつて

マア／＼、折角手に入るこの品を

ト渡す。源五兵衛開き見て

源五 ヤヽ、こりやコレ敵師直が、居間の建て方記せし繪圖面。どうしてこれが

了心 勘當いたした悴めが、命を的に手に入るその品、あなたのお手より大星樣へ、差上げたなら、徒黨の人數へ

源五 加はる願ひもこの身の不埓、所詮お供は叶ふまい。最前渡せし百兩と、この繪圖面は大星どのへ其方屆けて

ト金と繪圖面を了心に渡す。了心思ひ入れあつて

了心　先日までも金子のお頼み、調へ参ればこの如く、二品ともに私しへ、お返しあるは何とも以て

源五　それもこの身の思はぬ誤まり。跡の回向を頼むは其方。只今これにて

ト腹切らうとする。了心うろたへ、縋りついて

了心　こりや旦那様、なんであなたは

源五　殿より不興の数右衛門、浪人のうち假名して、源五兵衛とは名乗れども、小萬といへる女めと、今一人は三五郎、彼奴等二人が手立にかゝり、思はず多くの人殺し、義士の列には思ひもよらず憎くき女は仕留めしが、連れ添ふ男を討ち洩らしたが、思へば殘念。

トこれにて了心思ひ入れあつて

了心　ヤヽ、今のお詞、割符を合す事もあり。して仕留めしと仰しやつた、小萬と申す女はいづれで

源五　今宵女は身が手にかけ、首ぶち落して、即ちこれに。

了心　ヤヽ、こりや嫁のお六ぢや／＼……そんならあなたを僞はりし、三五郎と申すのは、慥かに忰の千太郎。嫁のお六も藝者となつて、今のその名は小萬とやら。鬼横町の神谷の空家、しかも今日引ツ越し参つて

トこれにて源五兵衛、思ひ入れあつて

源五　ヤヽ、其方が申すに違はぬ割符、二人が隱れ家。もしやその金、富森どのより來りし金か。

ト件の金を取り、包みを解いて、よく〳〵改めて

ヤヽ、こりやコレ殘らずちきりの極印。富森どのより參つた百兩。小萬が難儀のその砌り、夫婦の者に騙られし、矢ッ張りその金手に入りしは、身を騙かりし三五郎、其方が勘當なしたる悴か。

了心　その幼名は千太郎。

源五　小萬といひしも其方が嫁

了心　お六と申した女が首

源五　さすれば身共が僞はりし

了心　夫婦の者は、親仁が實の

源五　悴と嫁がなせる業。

了心　思ひ廻せば旦那樣

源五　現在家來が

ト了心を引附け

よく〳〵恥辱を與へたな。

ト きつとなる。了心思ひ入れあつて

了心 御尤もでござりまする。幼ない内に勘當うけ、あなたのお顔を存ぜぬ悴め、不破数右衛門様とあるならば、聞き覺えある御家名ながら、源五兵衛といふ假名。存ぜぬゆゑに斯様の間違ひ。旦那様、お赦しなされて下さりませ。

源五 皆間違ひといひながら、早まらずんばこの小萬、斯く淺ましき

ト 切り首を抱きかゝへ、思ひ入れあつて

堪へてくれよ、誤まつた。其方ばかりか水子まで、其方が見る前あのしだら。殊に連れ添ふ三五郎、身共へ忠義を却つて恨み、今更思へば恥かしい。いかなる過去の悪縁にて、實義の夫婦、幼な子まで、あの有様は何事ぞ。これ皆武士のあるまじき、女に迷ひし白痴ゆゑ。その云ひ譯には、腹切るぞ。

ト 死なうとする。了心縋つて

了心 イヤ〳〵、あなたは殺さぬ〳〵。旦那に代つて、この道心が

ト 源五兵衛が差添へを取つて死なんとする。源五兵衛押へて

源五　イヽヤ身共が腹切つて

丁心　イヤ[illegible]しが

ト兩方争ひ合うて、互ひに留める思ひ入れ。この時、桶の中にて

三五　お待ち遊ばせ旦那様、親仁様、云ひ譯あり、必ずともに

ト苦痛の思ひ入れ

源五　ヤヽ、これなる桶にて何者か

丁心　小舅殺せし倅を隠して

源五　して、その倅は

三五　即ち爰に

トばら／＼と、桶の箍刎ねて、桶倒れる。中より三五郎、用意の出刃にて腹切りし體にて、よろめき出る。了心駈けよつて

丁心　ヤヽ、倅は腹をあばきし様子。

源五　倅といふは、身を騙かりし三五郎。

三五　親仁がお主の旦那様、知らぬ事とてあのしだら、申し譯には

ト出刃を引廻して思ひ入れ。源五兵衞もこなしあつて

源五　こりや斯うなうては叶ふまい。

トこれより篠入りの合ひ方。三五郎こなしあつて

三五　親の勘當詫びの種、女房を稼ぎに道ならぬ、客を騙して集める金、もう百兩で親仁の御主人、數右衞門樣の御爲と、お主のお爲にお主を僞はり、浪人暮らしの源五兵衞樣、小萬に執心、幸ひと夫婦が寄つて拵へ事、それが間違ひ、あなた樣に、多くの人を殺させた、元の起りも私しゆゑ、その云ひ譯に切つたる腹、くたばりまするをまだしもの、お命代りと思し召し、あなたの伯父御のその百兩、御用に立てゝ敵討ち、お供に立つて實名も、鹽冶浪人多きうち、不破數右衞門重種と、義士に加はり亡君の、存念晴らさせ、あなたにも、忠義の武士と末代まで、その名をあげて下さりませ。

源五　その志しあるなれば、死ぬに及ばぬものなるを、あつたら若者見殺しに

三五　イヤ〳〵、死なねばならぬ仕儀。あなたの持參のあの毒酒、女房が兄のあの彌助が、毒とも知らず飮んだ上、繪圖面持つて訴へと、云ふゆゑ是非なく殺したからは、磔刑道具の三五郎、我が手で死ぬるはまだしも仕合せ。あなたの多くの人殺し、それもこの身に引受けて、旦那は長らへ敵

討ち。

了心　親子女房殺させし、元は旦那に敵討ち、出立なさる手がゝりと、悴が及ばぬ心勞を、少しは不便と思し召し

源五　我れも騙かる夫婦の者、憎しと思ふ念も晴れ、用金揃へて、この身の詫び言。

トこの時左右より五人づゝ、前場の鐵、辰、市、外に七人、いづれも忍び頭巾、夜討の義士の拵へにて、各自弓張りを持ち、窺ひ寄つて

鐵　古主の鬱憤散ぜん爲、大工左官と樣を替へ

市　或ひは商人、日雇取り、皆この邊に徘徊なすも

辰　これ皆義士の棟梁たる、大星どのゝ指圖に依り、數右衛門どのゝ迎ひの爲

鐵　鹽田、倉橋、前原はじめ、義士の輩參りし上は、大望即ち今日今宵。

市　門出を祝して

皆々　御用意あれ。

源五　然らばこれより同道いたして

了心　本望遂するめでたき門出。

三五　我れは此まゝ、あの世の門出。

源五　臨終稱念。

ト三五郎引廻す。この時、太郎七窺ひ出て

太郎　此よし注進

ト駈け出すを、三五郎引戻して、持つたる白刃にて切り倒す。太郎七見事にかへる。直ぐに三五郎落入る。

源五　コレ

ト愁ひの思ひ入れ。

了心　お立ち。

ト義士の皆々提灯を差立て、きつとこなし。

源五　まづ今日はこれぎり。

めでたく打出し

大正十四年九月二十日印刷
大正十四年九月廿三日發行

「大南北全集第十二卷」

非賣品

校訂　坪内逍遙

編纂者　渥美清太郎

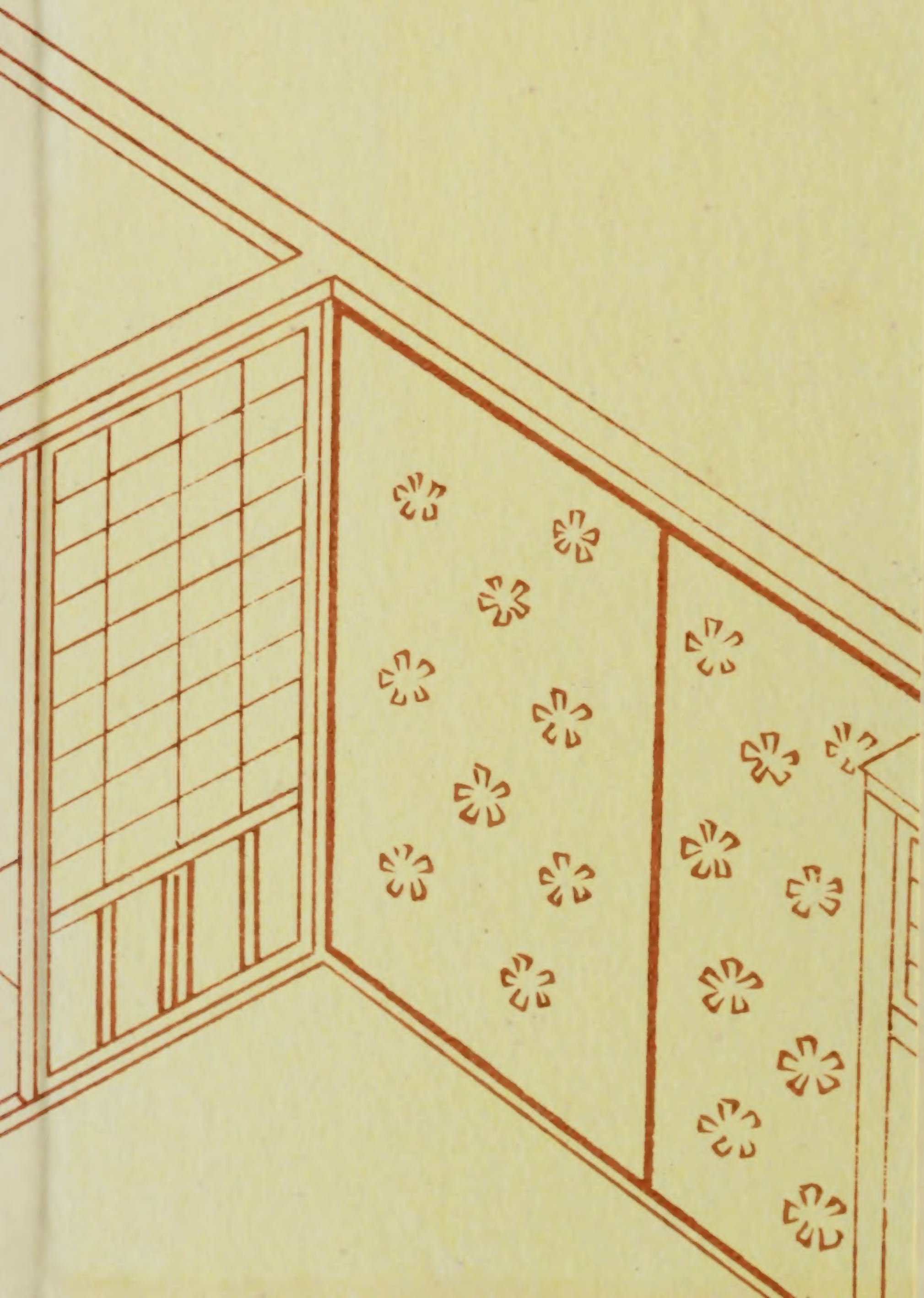
東京市日本橋區通四丁目五番地
發行者　和田利彦

東京市小石川區久堅町百八番地
印刷者　上村新輔

東京市小石川區久堅町百八番地
印刷所　博文館印刷所

東京市日本橋區通四丁目五番地
發行所　春陽堂





ト切り下げ〳〵する。小萬落入る。源五兵衞、首を打落し、小萬が帶の端を切つて、それに首を包む
この時、雨車、雨の音烈しく聞えるゆゑ、思ひ入れあつて、あたりの傘を取つて、有りあふ下駄を穿き、門口へ出て思ひ入れあり

實に定めなき、浮世ぢやなア。

ト時の鐘、凄き合ひ方、一つ鉦、蟲の音。これより謠をうたひながら、花道へかゝり、傘をさし、向うのあゆみを通り、この仕組みよろしく、此うち舞臺、靜かにぶん廻す。

本舞臺、庵室の體。正面二重の上に件の桶を置き、前に机を据ゑ、香華を手向け、新佛と見せたる體。左右竹藪、生垣、道心者の獨り住み、荒れ果てし體。源五兵衞あゆみを通り、門口へ來り、簀戸を明けて内へ入り、桶を見て、怪しむ思ひ入れ。

源五　身共が他行のその跡へ、いづれよりかは新佛と見えるが、道心めは悴の千太郎とやら、夫婦の者を引合せんと、呼びに參つたのであらう。

ト件の机の上へ首の包みを置き、あたりより膳、茶碗、飯櫃、その外の物を持ち來り、行燈を掻き立て、飯を食ふ事。此うち好みの合ひ方、捨て鐘。件の包みを開く、中には小萬の首、出るを見て

ヤイ、小萬、此やうにわれと二人、食事をせんと思うたに、心柄こそ

ト飲みさしの茶を首へぶつかけ、楊枝使うてゐる。禪のツトメになり、向うより了心、小提灯を提げ源五兵衞を尋ねる心にて、スタ〳〵と出て來り、内へ入る。源五兵衞ちやつと首を包む。

了心 ヤア、數右衞門樣。お前樣のお行くへを、お尋ね申して居りました。私しの悴めが、心盡せし百兩の、その御用金調達の、金子はお渡し申せども、まだその外に、無くて叶はぬこの品ゆゑ、可哀や悴は人殺し

ト桶の方へ思ひ入れあつて

マア〳〵、折角手に入るこの品を

ト渡す。源五兵衞開き見て

源五 ヤヽ、こりやコレ敵師直が、居間の建て方記せし繪圖面。どうしてこれが

了心 勘當いたした悴めが、命を的に手に入るその品、あなたのお手より大星樣へ、差上げたなら、徒黨の人數へ

源五 加はる願ひもこの身の不埒、所詮お供は叶ふまい。最前渡せし百兩と、この繪圖面は大星どのへ其方屆けて

ト金と繪圖面を了心に渡す。了心思ひ入れあつて

